針葉樹

～創部 90 周年記念号～

第 15 号



2012

一橋大学一橋山岳部

夜叉神峠の魅力は、三千米を超える白峰三山の眺めだ。トンネル東口から高谷山を経て峠を周回する一橋ルートが整備され、針葉樹文庫が読める芦安山岳館を訪ねる楽しさが増す。九十年の一橋登山文化の基地である。

（上原　利夫（昭和 33 年卒））

〈表紙写真〉
「夜叉神峠からの白峰三山」
撮影＝金子　晴彦（昭和 46 年卒）
撮影日＝2011 年 12 月 23 日

針葉樹

～創部90周年記念号

第十五号

針葉樹第15号　発刊によせて

針葉樹会（一橋山岳会）会長
竹中　彰（昭和39年卒）

〝針葉樹15号〟が〝14号〟発行（１９８５年６月）以来26年間の長き眠りから覚め発刊されることになった。このこと自体は大いに慶賀すべきことではある。

従来〝針葉樹〟の巻頭言の次のページを飾るのは、時の山岳部長であった。

残念ながら、現在の一橋大学の山岳部は何れも途中入部の現役部員６名が在籍しているが、部の活動自体、長く休眠状態にあったことから上級生と山行を共にする機会もなく、活動実態は不明確であり、山行や部会などを通じての一橋山岳部の伝統は受け継がれて来てはいない。また山岳部長も不在である。（この間の経緯は本誌中の石弘光先輩・元山岳部長の寄稿（73ページ）を参照されたい。）

本来〝針葉樹〟の役割は現役部員が自分たちの活動記録を纏めて内外に公表することにあり、その過去の記録の中には戦前の小谷部全助先輩たちの北岳バットレスや鹿島槍荒沢奥壁などの積雪期登攀の輝かしい記録が燦然と輝いている。また、ＯＢと連携してのアンデス・プカヒルカ北峰、カラコルム・ミールサミール、ヒンズークシュ・サラグラールなどの海外遠征記録も彩を添えてきた。

今回の15号については、26年間の記録の集大成を企図しているが、戦前戦後の混乱期を除けば、

前号発刊から12号（１９６０年7月）で5年、13号（１９６４年11月）で4年、14号（１９８５年6月）では20年、その間隔が異常に延びて来たことが分かる。このことは山岳部の置かれた状況、それに伴って部員の山岳部に対する意識が過去とは大きく変化し、否応なく時代に流されてきた結果でもある。

山岳部の在り方について、青春の一時期をそこで過ごした我々ＯＢがノスタルジックにかくあるべしとそれを押し付けても始まらない。過去を押しつける相手自体が多様化した意識の中で、組織的な纏まりが生じているとは言えない状況である。現在の現役部員諸君には、少しずつこの部の歴史を勉強していただき、今様の部の在り方をお互いに議論し、部の運営や進むべき方向性を確立して行って欲しい。

過去の〝針葉樹〟には**『山岳部だといふ事は、山が好きだといふ事の證據だ。だから山へ行くのはあたりまえで不思議はない。山へ行かない奴の方が変だ。だが山へ行くといふ事の中には御嶽や高尾山辺りをぶらぶらする事を含めるべきだ。要するに山へ行くといふ事は山への愛着を感じてゐるといふ事なのだ。（第7号・山小舎）』**との記述や部報の形式に関連して**『乍併私はその社会的価値の存否に関はらず吾々の〝針葉樹〟は部の存する限り発刊せらる可き意義を存するものと信じてゐる。（第9号・部誌）』**といった意見が掲載されているが、私自身も同様の立場を取りたい。

今回の〝針葉樹15号〟は昭和40年代初めに山岳部を卒業した、シニアのＯＢが中心になって編集作業に努め、国立の部室に辛うじて残っていた未整理のままの現役部員の活動記録（年報など）

を電子化し、曲がりなりにも形に整えて来たものである。

然し、卒業年度によってはこれらの手掛かりもなく、当時のリーダーなどに連絡を取っても協力の得られない部分があったことは残念であった。当事者にその気が無いものを編集担当者や周辺のものがムリヤリ記録の復元を迫ることも如何か、一橋山岳部の古き良き伝統である自由な空気、自由に山に向う、に反する様な形でことを進めるのも憚られることであった。

我々の先輩、特に吉澤一郎さん、望月達夫さんなどは「よく読み、よく登り、よく書く」といったことを山に登る人間の大事な要素であると後輩に語っていたと言う。我々自身がどれほどこの言葉に即して行動できているかは忸怩たるものがあるが、一橋の伝統として何とか伝えて行きたいものである。

長らく〝針葉樹〟が刊行されなかった、この間には石先輩の寄稿に見るように山岳部の合宿中の死亡事故多発を含めて、大学当局として山岳部の存在自体が問題とされ、教育的な見地からの存在意義を認められなくなってしまったことも多分に影響していよう。やはり山の事故は起こしてはならないもの、あってはならないものであることを改めて深く胸に刻む必要があることは言を俟たないところである。

他方、この間に１９３１（昭和６）年5月の落成以来、戦前戦後を通じて長らく親しまれてきた部室（赤松バットレスの隣にあった）も老朽化が進み、学校当局からキャンパス内官舎、寄宿舎再開発事業の一環として退去を求められたのを機に、１９９９年3月にＯＢ募金の寄付と当時一橋大

学学長であった石先輩の理解の下に、現在の南西角に再建された。部の歴史の一部が改められたことになる。

今回の〝針葉樹15号〟発刊は、来るべき創部百周年に向けての橋渡し的な役割を担うと共に本年の90周年をひっそりと祝う存在である。果たして百周年を迎えられるか、部の現状からは大変心許ないが、最近復活しつつある現役部員の諸君には何とかここで奮起して頂き、現役の力で〝針葉樹〟の刊行、前提としてのコンテンツである部活動を地道に継続、発展させて歴史を繋げて頂きたい。

なお、この号では中村保先輩が20年以上に亘って息長く続けてこられた、ヒマラヤの東、四川・雲南奥地の踏査行のエッセンスを特別寄稿して頂いている、一橋関係者のみならず、世界の多くの山仲間に裨益するところも多いと考える。多忙な中で一橋山岳部90周年の節目に特別にご寄稿頂いたことに感謝申し上げ、今後の中村先輩の新たなフロンティアに向っての活躍をお祈りすると共に現役山岳部員諸君も熟読され、大いに刺激を受けて各自の新たなフロンティアに向けて精進頂くことを願って止まない。

最後に、多くの困難を乗り越え何とかこの様な形で針葉樹復刊に漕ぎ付けた編集担当者の労を多とすると共に、ささやかな90周年事業の一環として、協賛金拠出などで御支援頂いた針葉樹会会員諸兄姉の、我らの古巣である一橋山岳部を愛するお気持ちに感謝申し上げたい。

（２０１２年６月22日記）

目　次

発刊によせて……竹中　彰　2

一橋山岳部活動記録（１９８５年～２０１２年６月）……9

図　版……224

海外での登山活動……241

Yosemite Dairy 1988……鮎沢　政文　242

ネパール・ヒマラヤ　クスム・カングル峰（６３６７m）北稜……井上　裕之　250

秘峰カカボラジ偵察隊　半世紀の思いを繋げて……引地　真　258

ブータン・ヒマラヤ５７２７m峰……宗像　充　267

一橋山岳部創部90周年記念……281
中村保チベット写真館「深い浸食の国」……編集・金子　晴彦　282
チベットの神秘の河―深い浸食の国　陸の孤島「幻の山塊」……中村　保　306
一橋山岳部＆針葉樹会年表……編集・中村　雅明　322
一橋山岳部＆針葉樹会年表　文献集……編集・中村　雅明　362
一橋山岳部在籍者名簿（２０１２年６月30日まで）……編集・中村　雅明　380
編集後記……395

■一橋山岳部活動記録（1985 年～2012 年 6 月）

1985 年度…… 10
1986 年度…… 19
1987 年度…… 36
1988 年度…… 48
1989 年度…… 67
1990 年度…… 78
1991 年度…… 86
1992 年度…… 93
1993 年度…… 103
1994 年度…… 113
1995 年度…… 124
1996 年度…… 136
1997～1999 年度…… 145
1997 年度 …… 148
1998 年度 …… 159
1999 年度 …… 175
2000 年度 …… 190
2001 年度 …… 195
2002 年度 …… 201
2003 年度 …… 206
2004 年度 …… 207
2005 年度 …… 216
2006 年度 …… 216
2007 年度 …… 216
2008～2010 年度 ····· 216
2011 年度 …… 217
2012 年度 …… 221

記録・山行表の収録に際して

一橋大学一橋山岳部（以下、一橋山岳部）部報『針葉樹』は伝統的に学生（一橋山岳部々員）が編集し、発行してきた。

前号の針葉樹 14 号は 1985 年に発行されているが、発行者こそ一橋山岳部となっているが、実体は OB によって編集されている。

針葉樹 15 号では 1985 年 4 月～2012 年 6 月までの一橋山岳部の活動記録をまとめ報告するが、今号も OB が編集作業を行った。

活動記録は、活動概況、主要山行記録および山行表という構成にした。

1985 年から 1999 年までは、詳細な部活動報告が残っており、有志 OB によってデジタル化され一橋山岳会ホームページ（http://www.huhac.com/）に収納されている。今回活動記録の出所である。

活動概況は、各年度のリーダー（層）に新たに寄稿を依頼した。一部の年度では、活動概況が抜けてしまったことは残念ではあるが、かなりの年月が経過してしまっているためしかたがない。

主要山行記録は、原則的には春・夏・冬合宿をホームページから転載した。リーダー層が代替わりとなり、新リーダー層がリーダーシップをとる春合宿からスタートし、翌年の春合宿前までを当該年代の年度と考えて活動記録をまとめている。

山行表は部活動報告を表にした。

（編集子）

1985

	石　　弘光	教授
部長		
部員		
4年	白石　章治	
3年	谷口　隼人	(CL)
	鮎沢　政文	(SL)
	川名　真理	
2年	齋藤　　誠	
	外池　武司	
	河野　　正	
1年	小野　　一	
	大野　理恵	
針葉樹会学生担当幹事	宮下　克彦	
	石丸　義男	

概況

１９８３年夏合宿における落石・滑落事故を遠因として（4年の白石は怪我で復帰不能であった）、実質的に活動できる部員が3年生以下のみという、経験不足を否めない出発であったが、それが逆に多くの新しい試みに向かう動因にもなった。ＯＢの厚い支援もあり、何でもやってみよう、という雰囲気の中で部全体の力をつけていった一年であった。個性豊かな面々だったが、週3日の部会の集まりはよく、何事もおおいに議論し、一体感があった。

活動の背景

谷口、川名は1年生から山岳部に所属し、ホワイトセールの事故処理の当事者であった（当時4年生の）石川、稲毛、山本から「絶対に山で死んではいけない」「一年の活動は冬合宿をターゲットに積み重ねる」という命題を受け継いでいた。

鮎沢は、その才能と努力により既に単独岩壁登攀もできるほどの部内一の登攀技術を身につけていたが、この命題をよく守り、全員の力を上げる牽引力となっていた。文部省登山研修会や救急医療研修会への参加、高層天気図作成などの研修も行いつつ、アイスクライミング、ロングルートの岩壁登攀、冬季岩壁登攀、カモシカ山行など（翌期には山スキーも行われている）活動のバリエーションを伸び盛りの1、2年生と共に増やしていった。

週3回の部会におけるトレーニングもハードになり、入部時にはやや肥満気味で体力不足も懸念された外池も見違えるほど精悍な体躯となり、木枯らし吹く冬の小平をビーチサンダル履きでうろつく姿を見かけるようになった（一説には、このスタイルは3年先輩の五ヶ山氏から受け継いだものともいわれる）。

一年の総括としての冬合宿は、冬山経験者が谷口1名であったことから、エスケープルートが短く、かつ、岩稜の少ない飯豊山脈の縦走が選ばれた（が、実際に入山した後、飯豊の豪雪にしごかれることとなる）。

この合宿において、3年間の活動で体力・技術とも充実していた女子部員

の川名の「冬山に行きたい」という気迫は谷口・鮎沢をして抵抗を許すものではなく、自身のみならず1年女子の大野も含めて冬合宿に参加させることとなった。

この一年を通じOB支援は厚く、合宿の計画についての相談、海外の登山学校との折衝などの他、「新人歓迎会」や「月見の宴」などにも参加していただいた。心配しどうしの一年だったのではないかと、今になると思われる。

（谷口　隼人）

夏合宿（剱岳から槍ヶ岳縦走）

【参加メンバー】鮎沢（CL）、齋藤（SL）、川名、外池、河野、小野、大野、青木、樋渡

【期間】１９８５年８月７日～17日

８月７日
室堂（8:35）―別山乗越（11:20）―剱沢ＢＣ（12:05）―武蔵谷出合付近で雪上訓練（13:50～15:00）―ＢＣ（16:00）

８月８日
ＢＣ（5:20）―平蔵谷出合（5:45　雪上訓練実施）―平蔵のコル（10:30）―本峰（11:45）―前剱（13:40）―一服剱（14:35）―ＢＣ（16:05）

８月９日
剱沢（4:45）―真砂岳（6:55）―一ノ越（9:30）―ザラ峠（13:30）―五色ヶ原（14:10）―テントサイト（ＴＳ　14:40）

８月10日
ＴＳ（5:35）―越中沢岳（8:30）―スゴ乗越ＴＳ（14:00）
青木、日射病で倒れる。

８月11日
ＴＳ（5:25）―薬師岳（9:45）―薬師峠ＴＳ（11:30）
川名、足捻挫。

８月12日
ＴＳ（5:40）―太郎山（6:10）―中ノ俣乗越（10:10）―黒部五郎岳（11:30）―黒部五郎小屋ＴＳ（13:00）
一日中雨の中を行動する。齋藤、足を捻挫。

８月13日
停滞。２人の捻挫した足の状態が思わしくないので休養日とする。

８月14日
ＴＳ（6:10）―三俣蓮華岳（8:25）―双六小屋ＴＳ（11:00）

８月15日
ＴＳ（5:25）―千丈沢乗越（8:55）―槍ヶ岳山荘（10:30～12:40）―横尾（17:00）

８月16日
後発隊（谷口、白石）待ちのため停

滞。鮎沢のみ宮下、山本両ＯＢとの岩登りのため、涸沢入り。

8月17日

【メンバー】宮下ＯＢ、山本ＯＢ、鮎沢

涸沢ＢＣ(4:45)―５・６のコル(5:45)―前穂東壁右岩稜古川ルート取付きで順番待ち―終了(12:45)

【メンバー】その他

後発隊と横尾で合流後、涸沢入り。雪上訓練実施。根本ＯＢ、浅田ＯＢも来られる。

縦走出発の段階で、荷は25～45㎏。負傷者が続出するし、途中で下りたいとダダをこねる1年生もあらわれ、なかなか難儀した。

夏合宿（涸沢定着）

【参加メンバー】谷口(CL)、鮎沢(SL)、川名、齋藤、外池、河野、小野、大野、青木、樋渡、白石

【期間】１９８５年8月18日～23日

8月18日

【メンバー】鮎沢、河野、小野、樋渡

ＢＣ―５・６のコル―北尾根―前穂高岳―奥穂高岳―ＢＣ

【メンバー】谷口、外池、大野、青木

ＢＣ―北穂高岳東稜―北穂高岳

【メンバー】根本ＯＢ、浅田ＯＢ、宮下ＯＢ、山本ＯＢ

南稜経由北穂高岳

白石はデポをとりに横尾往復。川名、齋藤は休養

8月19日

【メンバー】鮎沢、外池、青木、樋渡

ＢＣ―５・６のコル―奥又白池―明神岳東稜―明神岳主峰―前穂高岳―岳沢ヒュッテ―コブ沢下流ビバークポイント（ＢＰ）

【メンバー】齋藤、河野、小野

ジャンダルム飛騨尾根―ジャンダルムＴ１フランケ

【メンバー】谷口、川名、大野

北尾根

正午過ぎから猛烈な雷雨となり、岳沢が氾濫して大岩がゴロゴロと流されていた。鮎沢隊はヒュッテでのうのうと雨宿りしていたが、齋藤隊はＴ１フランケの大テラスでぬれねずみになって、落雷の恐怖におびえていたという。齋藤（Ｌ）の天候判断に問題があった。

8月20日

【メンバー】鮎沢、外池、青木、樋渡

コブ沢下流ＢＰ―コブ尾根―奥穂高岳―ＢＣ

【メンバー】谷口、小野、大野
北尾根３峰フェース登高会ルート

【メンバー】齋藤、川名、白石、河野
北穂高岳東稜

コブ尾根の途中で青木はピッケルを忘れた。３峰フェースは１年生２人が初めての本番ということで、苦戦を強いられた。齋藤、川名の足はだいぶ回復。

８月21日
休養日。昨夏の剱岳での事故以来岩登りから遠ざかっていた白石の希望により、白石と鮎沢は３峰フェースへ。登高会ルートの所要時間は１時間10分。

８月22日
【メンバー】鮎沢、外池、青木、樋渡（T１フランケは鮎沢、外池のみ）
ジャンダルム飛騨尾根―ジャンダルムＴ１フランケ左ルート

【メンバー】谷口、川名、大野
ＢＣ―パノラマコース―わさび沢―２２６３ｍ峰コルＢＰ

【メンバー】齋藤、河野、小野、白石
ＢＣ―５・６のコル―奥又白池―明神岳東稜―明神岳主峰―前穂高岳―岳沢ヒュッテ―コブ沢下流ＢＰ
〝恐怖のＴ１フランケ〟伝説はあっさり破られた。谷口隊はルート・ファインディングにかなり苦労した模様。齋藤隊では、小野が東稜に出る前で数ｍ転落し、かなりショックを受けたようだ。

８月23日
【メンバー】鮎沢、外池、青木、樋渡
３峰フェース登高会ルート
【メンバー】谷口、川名、大野
ＢＰ―明神主稜線―前穂高岳―奥穂高岳―ＢＣ

【メンバー】齋藤、河野、小野、白石
ＢＰ―コブ尾根―奥穂高岳―ＢＣ
定着最終日。無事日程を終え夜は打上げ宴会をやるが、上級生は翌日からの残留岩登りのため酒をセーブしなければならず、もう下山するだけとなった下級生が異様な盛り上がりを見せた。お疲れ様でした。

滝谷、屏風岩（夏合宿上級生残留岩登り）
【参加メンバー】谷口（CL）、鮎沢（SL）、齋藤、外池、河野
【日程】１９８５年８月24日～28日
８月24日（快晴）
涸沢発(5:00)―南稜テント場(5:55)―滝谷ドーム中央稜取付き(7:10)―登攀開始(7:30)―登攀終了(9:35)―涸沢ＢＣ(11:00)

8月25日（晴）
屏風岩東稜
【メンバー】鮎沢、齋藤
涸沢発(4:05)―横尾岩小屋(5:05)―T4(7:00)―東稜登攀開始(7:30)―登攀終了(9:35)―屏風の頭(11:55～12:25)―涸沢(13:15)

屏風岩1ルンゼ
【メンバー】谷口、外池、河野
涸沢発(4:05)―横尾岩小屋(5:05)―1ルンゼ取付き(6:30)―登攀終了(12:30)―涸沢(14:45)

8月26日
休養日

8月27日（快晴）
屏風岩1ルンゼ―前穂高岳東壁北条・新村ルート―右岩稜古川ルート―前穂高岳―奥穂高岳―ドーム西壁雲表ルート―涸沢BC
【メンバー】鮎沢、齋藤
涸沢発(2:55)―横尾岩小屋(3:55)―1ルンゼ取付き(4:30)―登攀開始(5:05)―登攀終了(8:10)―5・6のコル(9:50)―T1(11:05)―北条・新村ルート登攀開始(11:20)―登攀終了(13:35)―3・4のコルでビバーク(14:20)

8月28日
BP発(5:00)―右岩稜古川ルート取付き(5:25)―ハング終了(6:35)―北壁、Aフェースを通り前穂高岳頂上(8:15)―奥穂高山荘(9:30)―ドーム西壁雲表ルート取付き(10:55)―登攀開始(11:10)―登攀終了(12:50)―涸沢BC(14:10)

〈感想〉

本番の岩登りも前穂東壁、南ア（北岳バットレス、赤石沢奥壁）に次いで3度目となり、いくらか慣れてきていた。しかし、今回の登攀は、屏風、滝谷と日本の登攀史上名高い岩場でとくに合宿後半は継続登攀を行ったため非常にまいった。継続登攀は岩場そのものの難しさよりも壁から壁へのアプローチによる疲労が大きい。とりあえず成功した後の充実感は、これまでで最高のものとなった。

（齋藤）

冬合宿（飯豊連峰　水晶尾根～大日岳～飯豊本山～松の木尾根）

【参加メンバー】谷口（CL）、鮎沢（SL）、川名、外池、河野、齋藤、小野、大野

【日程】1985年12月14日～27日

12月15日（快晴のち俄雪）
日出谷駅(8:10)―小荒部落(9:10)―小荒ダム(10:10)―水晶尾根取付(11:30)―尾根上(12:10)―570m付近で幕営(14:10)

12月16日（俄雪のち晴）
出発(5:30)―７００ｍ前(7:15)―１１０８ｍ前のコルへの下りで幕営(13:00)

12月17日（曇のち晴のち俄雪）
出発(6:00)―大根おろし基部(6:40)―大根おろし登攀終了(10:55)―水晶峰(11:50)―１０６７ｍ前で幕営(13:30)

12月18日（雪）
強風のため沈

12月19日（雪）
出発(5:55)―笠掛山(9:05)―１６８０ｍ下のコル(12:05)―櫛が峰のコル(13:15　幕営)

12月20日（雪）
強風のため沈

12月21日（雪）
強風のため沈

12月22日（晴のち曇）
出発(6:45)―大日岳(10:20)―御西小屋(12:00)―頂上小屋(14:00)

12月23日
強風のため沈

12月24日
強風のため沈

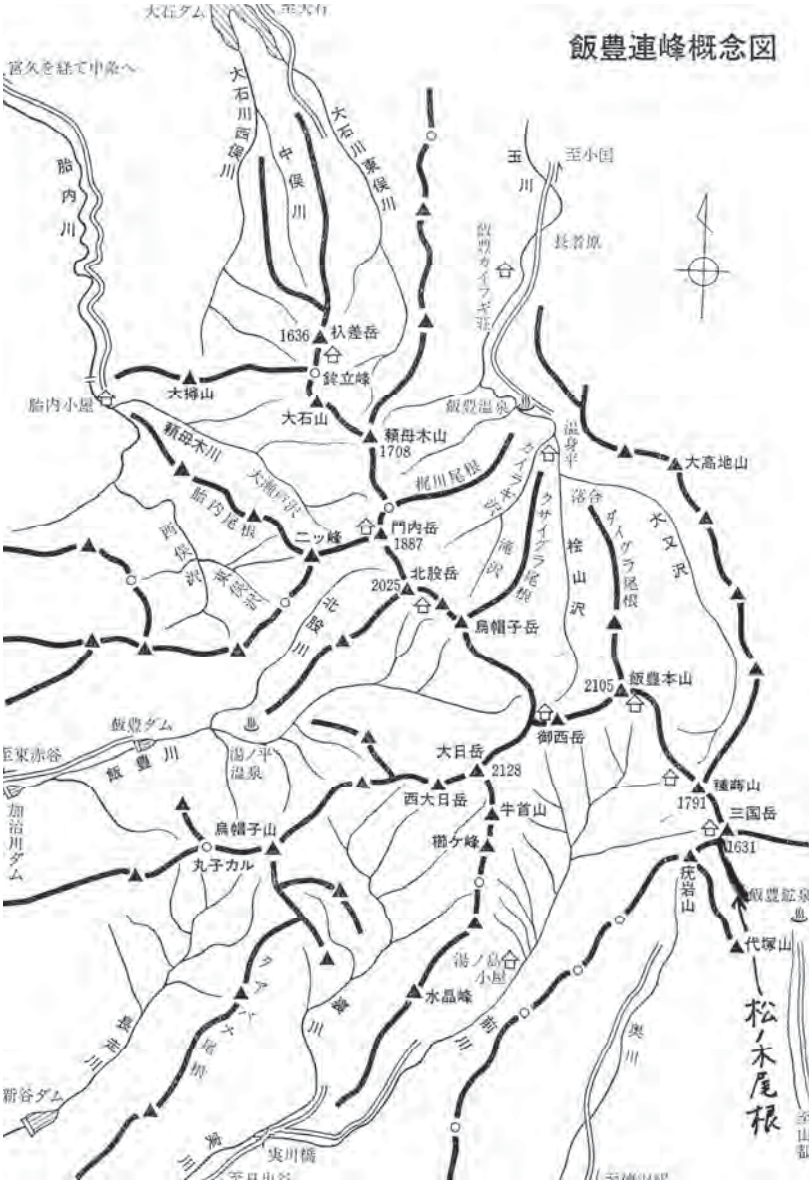
12月25日（強風快晴のち雪）
出発(6:40)―切合小屋(8:40)―種蒔山付近でホワイトアウトのため道を失う(9:40)―行動断念(11:00)―幕営終了(11:00)

12月26日（雪のち晴）
谷口、鮎沢がルートファインディングに向かう(6:30)―谷口、鮎沢戻る(8:00)―出発(9:10)―三国小屋(11:20)―松の木尾根下降終了(13:50　河原で幕営)

12月27日（雪）
出発(7:00)―御沢小屋(7:45)―一の不(10:45)

冬の飯豊は天気が悪い。この一言につきる山行だった。女性2名を含む全員での合宿としてかなりハードなものだったと言える。25日には、ホワイトアウトのため、先頭を歩いていた谷口が雪庇を踏みぬきヒヤリとさせられたが、幸い緩傾斜であったため自力で脱出できた。悪天の場合は動かない、という冬山の鉄則を身をもって知らされ、今後はこの鉄則が遵守されることになろう。冬山の恐ろしさを十分に経験し、今後の活動にとって非常に有意義な山行であった。

（齋藤　誠）


飯豊連峰概念図
大石ダム
至大行
富久を経て中条へ
大石川西俣川
大石川東俣川
中俣川
胎内川
玉川
至小国
長者原
飯豊カイラギ荘
1636
扒差岳
鋸立峰
大博山
胎内小屋
大石山
積母木山
1708
積母木川
飯豊温泉
温身平
大高地山
梶川尾根
カイラギ沢
大瀬戸沢
胎内尾根
ニッ峰
門内岳
1887
クサイグラ尾根
滝沢
落合
ガイグラ尾根
大又沢
桂山沢
駒泉沢
幸坂
北股岳
2025
北股川
烏帽子岳
2105
飯豊本山
飯豊ダム
至東赤谷
飯豊川
湯ノ平温泉
御西岳
大日岳
2128
種蒔山
1791
西大日岳
牛首山
三国岳
1631
烏帽子山
梶ケ峰
丸子カル
加治川ダム
庄岩山
飯豊鉱泉
代塚山
湯ノ島小屋
水晶峰
松ノ木尾根
奥川
新川
荒川
実川橋
新谷ダム

白水社　『日本登山体系　1』

1985年度　山　行　表

期間		コース	メンバー
1985	4.18～ 4.21	老平～布引山～笊ヶ岳～転付峠～奈良田越～奈良田	鮎沢
	4.26～ 4.27	三ッ峠(新入生歓迎山行)	谷口(CL)、鮎沢(SL)、川名、齋藤、外池、河野、小野、大野、青木、樋渡、大津、白石、戸川(OB)、金子(OB)
	5. 1～ 5. 4	北鎌尾根～横尾尾根	谷口(CL)、鮎沢(SL)、川名、齋藤、外池、白石
	5.11～ 5.17	剱岳(文部省春山登山研修会)	鮎沢
	5.18	明星山アイツ沢	鮎沢
	5.24～ 5.31	内蔵助平(雪上訓練)その後、針の木峠～北葛岳～船窪へ縦走	谷口(CL)、鮎沢(SL)、川名、齋藤、河野、外池、小野、大野、青木、樋渡
	6.14～ 6.17	白根三山～仙丈岳～甲斐駒ケ岳～黒戸尾根	齋藤(CL)、外池(SL)
	6.16～ 6.17	己ノ戸谷～越沢バットレス	鮎沢(CL)、河野(SL)、大野
	6.19～ 6.25	三ッ峠	谷口(CL)、鮎沢(SL)、川名、齋藤、外池、河野、小野、大野、青木、樋渡
	7. 6～ 7. 7	鴨沢～雲取山～七ッ石	川名(CL)、大野
	7. 7	水根沢谷	鮎沢(CL)、外池(SL)、小野
	7.10～ 7.17	涸沢定着岩登り	谷口(CL)、鮎沢(SL)、齋藤、外池、河野
	7.23～ 7.27	甲斐駒黄蓮谷右俣～赤石沢奥壁中央稜～北岳西面藪沢～北岳バットレス第四尾根	鮎沢(CL)、齋藤(SL)、外池、河野
	8. 7～ 8.17	剱岳～槍ヶ岳	鮎沢(CL)、齋藤(SL)、川名、外池、河野、小野、大野、青木、樋渡
	8.18～ 8.23	涸沢定着	谷口(CL)、鮎沢(SL)、川名、齋藤、外池、河野、小野、大野、青木、樋渡、白石
	8.24～ 8.25	涸沢定着延長戦　1	谷口(CL)、鮎沢(SL)、齋藤、外池、河野
	8.27～ 8.28	涸沢定着延長戦　2	鮎沢(CL)、齋藤(SL)
	9. 2	小川谷、犬麦谷	谷口(CL)、大野
	9.14～ 9.15	北秋川月夜見沢	鮎沢
	10. 5	川苔谷逆川	鮎沢(CL)、大野
	10. 9～10.12	飯豊連峰　水晶尾根～大日岳～飯豊本山～松の木尾根	鮎沢(CL)、齋藤(SL)、川名、外池、河野、小野、大野
	10.20	笛吹川東沢、ヌク沢	外池(CL)、河野(SL)、小野、大野
	10.20～10.21	谷川岳　幽ノ沢中央壁左フェースルート～肩の小屋～天神平	戸川、引地(以上OB)、鮎沢
	10.23～10.26	唐沢岳幕岩登攀	鮎沢(CL)、齋藤(SL)
	10.27	後山川　三条沢	大野
	11. 4～11. 6	増富～金峰山～甲武信岳～雲取山～鴨沢	外池
	11. 5	二子山～志賀坂峠	大野
	11.17	乾徳山	小野、大野

期間		コース	メンバー
1985	11.18～11.24	白馬岳主稜～栂池(春合宿偵察)	谷口(CL)、鮎沢、川名
	11.23～11.24	御座石鉱泉～鳳凰三山～夜叉神峠	齋藤(CL)、大野(SL)
	11.28～12. 2	富士山	谷口(CL)、鮎沢(SL)、川名、外池、河野、齋藤、小野、大野
	12. 7～12. 8	八ヶ岳　ジョウゴ沢、裏同心ルンゼ～小同心クラック	鮎沢(L)、外池
	12.14～12.27	飯豊連峰　水晶尾根～大日岳～飯豊本山～松の木尾根	谷口(CL)、鮎沢(SL)、川名、外池、河野、齋藤、小野、大野
1986	1. 5～ 1. 6	八ヶ岳　広河原沢第3ルンゼ	鮎沢(L)、外池
	1.18～ 1.20	奥駒津沢、駒津沢、舞姫ノ滝	鮎沢(L)、齋藤
	1.19	棒ノ折山～高水三山	大野
	1.19～ 1.21	宝剣岳　東壁、西壁	谷口、外池
	1.24～ 1.25	笛吹川東沢	谷口(CL)、鮎沢(SL)、川名、外池、河野、小野、大野
	1.25～ 1.26	甲斐駒ケ岳前衛日向山ヤチキ沢	近藤、引地、山本(以上OB)、鮎沢
	2. 9～ 2.11	唐沢岳幕岩	谷口、鮎沢、岩崎(L)、多和、大野(以上ｱｽﾍﾟﾝｸﾗﾌﾞ)
	2.21～ 2.24	日向沢～日向山～刃渡沢～黒戸尾根～甲斐駒～北沢峠～仙丈岳～北沢峠～戸台	鮎沢
	3. 4～ 3. 9	八ヶ岳	鮎沢(CL)、齋藤(SL)、外池、河野、川名、小野、大野



『針葉樹』第5～8号より

1986

部長　石　　弘光教授
部員
４年　鮎沢　政文(CL)
　　川名　真理
３年　外池　武司(SL)
　　齋藤　　誠
　　河野　　正
２年　小野　　一
　　大野　理恵
１年　井上　裕之
　　山内　　太
　　細野　伸二
針葉樹会学生担当幹事
　　近藤　　泰
　　中西　　茂
　　山本礼二郎

概況

前年度から連続性をもって成長してきたメンバーが力を合わせ、冬合宿で一つの結実をみた年度だったと思う。同時に、山の登り方、楽しみ方は必ずしも一つである必要はなく、それぞれに「自分の山」への志向が芽生えた一年だったとも言える。芽を育てる支援が十分にできたのか、忸怩たる思いがある。

活動の背景

前年度の谷口リーダーの路線を継承、発展させ、山行の充実度アップを目指した。結果、登攀要素の多い山行や、行ったことのない山域での登山が増えた。夏合宿のロングランも、過去の例にとらわれずに考えることができた。

その分、体力づくりや文献調査は今まで以上に求められ、一人一人に努力の跡が見られた。その上で、「行ってみなければ分からない」（行けば何とかなる）と割り切る（開き直る）大らかさがあったように思う。

当時、冬合宿の総括で、「好天時の機動力という点に関して現在の部の状態はある程度のレベルに達していることが今回の合宿で証明されたと言ってよいと思う」と書いた。決して甘い自己評価ではないと思う。女子部員二人が冬山への憧れを持ち続け、実現したことも特筆に値する。

一方、「これからの課題は、この機動力をどう山行に生かしてゆくかにあると思う」とも書いている。この「課題」をどこまで共有できたのか。

以後、鮎沢は冬壁への志向を強め、谷口前リーダーの仲介で知り合った社会人山岳会の人と登るようになった。1年生の登攀志向も強まったようだ。その後の遭難事故を思うと、自責の念を禁じ得ない。

（鮎沢　政文）



1986年5月　北岳頂上にて
左から 山内、鮎沢、外池(標識の上)、井上、細野

１９８６年春合宿（白馬岳主稜～白馬三山往復～栂池）

【メンバー】鮎沢(CL)、齋藤(SL)、外池、河野、小野、大野

【期間】１９８６年3月17日～22日

3月17日（曇のち雪）

前夜白馬駅泊、白馬駅(5:20　タクシー)―二股発電所(5:50)―猿倉荘(7:50~8:00)―猿倉台地テントサイト(TS　8:40)

踏み跡もあり順調に進むが、猿倉荘を発ってから雪と風が強まり幕営。

3月18日（曇のち雪　みぞれ）

起床(4:30)、TS発(6:10)―白馬尻(6:50~7:05)―8峰上(9:05)―6峰(10:35)―3・4のコルTS(12:12)

日中は天気も穏やかで、3・4のコルに着いた時もまだ天気はもちそうだったが重荷のため疲労がはげしく、翌日の沈滞を覚悟して幕営する。

3月19日（みぞれ）

沈滞

3月20日（雪またはみぞれ）

沈滞

3月21日（快晴）

起床(5:00)、TS発(8:00)―2峰手前(10:50)―2峰前峰上(12:45)―白馬岳頂上(14:50)―村営宿舎TS(15:12)

前日までの雪で腰までの厳しいラッセルを強いられる。2峰の前峰の雪壁と頂上直下の雪壁を齋藤、鮎沢がそれぞれリードし、他はユマールで登り頂上へ。

3月22日（快晴のち曇）

起床(4:30)、TS発(5:50)―白馬鑓(7:17)―TS(8:20~9:05)―三国境(9:55~10:05)―乗鞍岳(11:45)―栂池山荘(12:45)―リフト終点(13:20~14:00)―栂池高原駅(15:00)―白馬駅

明日以降天気が崩れそうなので、今日中に下山すべく計画では天狗の頭まで行くところを白馬三山往復に変更する。朝から風が強く、下界には雲海が広がっているが、稜上は快晴である。快ペースで一気に白馬鑓を往復し下山

する。最後、栂池山荘を出たところから小野がはぐれ、一同気をもむが無事下山してきた。メデタシ。

（文責　河野）

夏合宿（剱岳　前半の定着部分の報告）

【メンバー】鮎沢（CL）、外池（SL）、川名、齋藤、河野、小野、大野、井上、細野、山内

【日程】１９８６年7月23日～8月12日

前半は剱岳真砂沢に定着して、以下のようにパーティー編成する。

A隊：鮎沢（L）、大野、細野
B隊：河野（L）、小野
C隊：齋藤（L）、川名、山内
D隊：外池（L）、井上

後半は、以下の3パーティーに分散
上ノ廊下（主に沢登り）：齋藤（L）、外池、大野
槍・穂へ縦走：河野（L）、小野、細野、山内
後立山：鮎沢（L）、井上

7月23日
19:00 上野駅集合、21:01 発急行「能登」で離京

7月24日（快晴）
富山駅(4:48)―(電車、ケーブルカー、バスを乗り継ぎ)室堂(8:20～8:50)―雷鳥沢(9:25)―剱沢御前小屋(11:50)―真砂沢ロッジ　BC(15:27)
40～50 kgの重荷、照りつける陽光のためハードな入山となる。

7月25日（晴）
BC(6:06)―平蔵谷雪上訓練(8:00～12:15)―搬送訓練(12:15～13:00)―平蔵出合(13:00　自由解散)―BC(15:00)
平蔵谷にてピッケルストップ、確保練習を実施。

7月26日（曇）
BC(6:03)―平蔵谷から平蔵のコル(8:32)―剱岳頂上(9:12)―長次郎のコル(10:15～11:30　トラバース訓練実施)―長次郎谷を下りながら雪訓―BC(13:40)
天候悪化の恐れがあるため、剱岳アタックの後雪訓（ピッケルストップ）実施。

7月27日（曇）
〈A隊、B隊〉源治郎尾根～本峰北壁
BC(4:30)―取付き(5:15)―尾根上(7:20)―1峰上(8:15)―アプザイレンのコル(9:20)―北壁
A隊　L1～　本峰頂上(13:20)―BC(15:00)
B隊　L2～　B隊L2取付き(10:30)―登攀開始(11:00)―本峰頂

上(12:40)―ＢＣ(15:00)

今合宿最初の岩登りということで一番乗りを目指して取付きへと向かったが、理科大がすでに取付いていた。われわれは、ルンゼどうしに行くことにしたが最初のザイルピッチはさすがに緊張した。落石に神経をつかいながらルンゼをつめ、尾根上に出てしまえばあとは体力の登り。アプザイレンのコルからは少しでも楽をしようとトラバース気味に北壁へ。

取付き付近ではどれがＬ２かをめぐって見解がわかれたが、Ｂ隊がそれと確信して挑んだ稜はやはりＬ２で、筆者はＬ１稜を見て思わずニンマリとしてしまった。Ｌ２は決して難しくはなかったが印象深い岩登りだった。

〈Ｃ隊〉八ッ峰６峰Ｃフェース

取付き(12:45)―終了(15:30)

簡単なルートだったので、あまりルートを気にせず好きなところを選んで登ったが、途中、垂直に近いクラックで行き詰まりそうになりＡ０で脱出する。

〈Ｄ隊〉八ッ峰～同６峰Ｃフェース

ＢＣ(4:30)―長次郎谷２・３のコルへの分岐―八ッ峰１峰(7:58)―同４峰(10:00)―５・６のコル(12:00)―６峰Ｃフェース取付き(14:30)―Ｃ隊はＲＣＣルート、Ｄ隊は剱稜会ルートを経て

全員登攀終了(16:07)―５・６のコル(16:50)―ＢＣ(17:40)

１・２のコルへ出るつもりが２・３のコルに出てしまった。剱稜会ルートでは、登攀待ちのため時間がかかり、Ｃ隊より30分遅れる。翌日お世話になるともしらず、ここでＤ隊は前を登っているパーティーに小声で毒づく。

7月28日（晴のち曇）

〈Ａ隊、Ｂ隊〉６峰Ｃフェース、八ッ峰上半

ＢＣ(4:40)―Ｃフェース取付き(6:40)―Ｃの頭(9:30)―八ッ峰の頭(11:15)―ＢＣ

Ｃフェースの取付きへ急いだものの、すでに４人のパーティーがとりついていた。ここからＡ隊はＲＣＣルート、Ｂ隊は剱稜会ルートを行く。直接岩にとりつくには急なので、Ｂ・Ｃ間ルンゼの雪渓より岩の緩斜面に降りる。Ｃフェースは岩質もしっかりしており、登りやすい。剱稜会ルートはリッジ沿いに快適な登攀を楽しめるが、先行パーティーがすぐ前につまっているので興味をそがれた。

Ａ、Ｂ隊とも同時に登攀を終えて八ッ峰上半へ向かうがこちらはルートもわかりやすく快適。

〈Ｃ隊、Ｄ隊〉北方稜線―剱岳―剱岳南

壁（ロングラン　小縦走）
ＢＣ(4:52)―二俣(5:28)―池ノ平小谷(7:28)―大窓(10:04～10:30)―大窓の頭(11:35)―小窓ビバークポイント(ＢＰ　15:00)

北股で山内、足を滑らし池に落ちる。大事なし。大窓からはヤブコギ。14:00頃雲が多くなる。道を探したりなどして小窓の手前で時間がかかる。

7月29日（晴）
〈Ａ隊、Ｂ隊〉八ッ峰マイナーピーク東面スラブ―八ッ峰下半
ＢＣ(4:35)―三ノ沢右折点上(5:55)―マイナーピーク上(10:45)―1峰上(12:30)―4峰上(15:00)―5・6コル(16:20)―ＢＣ(17:05)
東面スラブの取付きでは雪渓を降りるのが早すぎたために、正規よりも大分左から登ることになりもろい草つきのいやな登攀を強いられた。全長６２０ｍという数字からもスピードが要求されているだけに、途中ランニングをとることもゆるさず。フリクションの良く効くスラブをひたすら登った。全般に平易な登攀だ。

上部核心部はプロテクションがないだけになかなか怖かった。マイナーピークから1峰、ヤブコギ・急登があり、ロックを終えた体にはきつかった。かてて加えて炎天と水不足が我々の気力をもさいなんだがＩ氏の叱咤と残雪とに励まされ、下半縦走完遂にむけて頑張ることができた。

下半は上半にくらべルートが不明瞭で巻き道につまってアプザイレンするなどてこずらされ、5・6コルに降り立ったときにはすでに4時をまわっていた。コルからの下りでは、下級生の雪渓技術のまずさにＩ氏が目をくもらす一幕もあったが、どうにか5時すぎにはベースに着き、Ｃ、Ｄ隊の「暖かい」もてなしをうけた。

〈Ｃ隊〉
取付き(10:30)―剱岳頂上(12:50)
主にリッジ登攀の単調なルート。先行パーティーもあり、あまり面白くなかった。

〈Ｄ隊〉剱岳～剱岳南壁（ロングラン２日目）
小窓ＢＰ(5:14)―剱岳頂上(9:15)―平蔵のコル(9:53)―本峰南壁登攀開始(11:00　Ｃ隊Ａ２稜Ｄ隊Ａ１稜)―全員登攀終了(13:25)―平蔵のコル(14:00)―ＢＣ(15:40)

7月30日（快晴のち晴）
〈Ａ隊、Ｂ隊〉ロングラン第１日
ＢＣ(4:55)―右俣出合(5:55)―三ノ窓(8:40)―二股(9:45)―白萩川(11:35)―馬場島(13:45～15:25)―毛勝谷出合付近ＢＰ(18:50)
剱から見た馬場島の遠さを思い、ひそかに？おそれていたロングランの日

がきた。三ノ窓雪渓ではO女が大きく遅れ前途が思いやられたが、池ノ谷左俣は思ったより傾斜が緩く無難に下れた。続く小窓尾根の乗越では、悪路と草いきれ、長時間行動が重なり白萩川にたどりついたときはグロッキーだった。しかし、天は我々を見捨てなかった。どうにかこうにかたどりついた馬場島でひょんなことからバーベキューの席に招かれておもいがけずご馳走になってしまった。

ビール、焼いか、ソーセージ、トウモロコシ・・・のおかげで精力を回復した我々は、タライに残る冷麦に未練を残しつつ、一路東大谷目指してつき進み、渡渉を重ねビバーク適地にたどりついたのはもう暮れかかるころであった。

〈C隊〉剱岳北壁L1

取付き(11:30)―剱岳頂上(13:30)

グレードは低いが、高度感があり、これまでで一番爽快な登攀となった。

〈D隊〉源治郎尾根―剱岳北壁L2

BC(4:53)―源治郎尾根―源治郎尾根稜線2峰(9:20)―登攀開始(12:40

C隊L1、D隊L2)―剱岳頂上(13:43)―長次郎谷―BC

源治郎尾根に取付き始めたとき、大きな落石を落とされる。もう少しで大事故。途中から雲が多くなった。

7月31日

〈A隊、B隊〉ロングラン第2日

BP(5:00)―東大谷出合(6:15)―富高ルンゼ出合(9:40)―中尾根上(13:00)―剱岳(14:50)―BC(16:30)

東大谷にはいると堅い雪渓がつづく。中俣の雪渓の大滝を右から高巻いたがここが落石の巣で非常に苦労し痛い思いもする。中尾根に出てすぐのチョングラピークは取付きを間違えたか不安定な草つきの岩で、Kはずり落ちるしO女は大落石をするわで危うい登攀であった。

ピークに立った時、ポツリポツリ来たので、一瞬いやな予感がしたがどうにか天気はもってくれた。剱岳の頂上に立ったときは何とか今日中に帰れると皆ホッとした。文字通り長いロングランだった。

小縦走とは言い難い。(K)

〈C隊〉八ッ峰6峰Aフェース魚津高ルート

取付き(7:00)―終了(9:40)

1ピッチ目のⅢ+の凹角がなかなか面白く、フォローに手間取った。

〈D隊〉八ッ峰6峰Aフェース中大ルート

BC(5:05)―長次郎谷―登攀開始(6:35 八ッ峰6峰AフェースのC

隊：魚津高ルート、D隊：中大ルート）―全員登攀終了(9:35)―八ッ峰の頭(11:55)―長次郎谷―BC(13:00)

今回の定着合宿はA、BとC、Dとの別れ過ぎてしまったという反省が出た。剱岳の岩はもろいところが多く、難儀したという声もあった

（井上）

8月1日（晴）

源治郎尾根1峰平蔵谷側

【メンバー】鮎沢、小野

下部中谷ルート　取付き(5:45)―終了(9:20)

上部成城大ルート　取付き(10:45)―終了(13:17)

定着最終日、中谷ルートは浮石に苦しめられる。前日までの疲れのせいもあってか小野はパニック。そのため、パートナー間の不和に陥る。何よりも実力不足を痛感（小野）

中谷ルートの核心部のトラバースとチムニーはフリーでリードできた。成城の核心部の左上トラバースは高度感に負けて数ポイントのA0、残念!!両ルートとも粗い白い花崗岩にラバーソールが吸いつくようで楽しいルートであった。

6峰Dフェース富山大ルート―チンネ左稜線

【メンバー】齋藤、外池、河野

出発(4:00)―取付き(6:25)―Dフェースの頭(9:00)―左稜線取付き(11:10)―T5(13:20～14:50　順番待ち)―登攀終了(16:50)―BC(18:00)

富山大ルートは、ⅣA0の1ピッチ目がおもしろい。Dフェースの頭からチンネへ向かう途中クレオパトラニードルから谷を降りてしまい手間取る。左稜線はT5までの下部は全くの岩稜でおもしろいのはT5から1ピッチ目のⅣA1のピッチだけである。T5に先行パーティーが詰まっていて1時間半強風の中を待つ。核心部はA1とあるが、私は残念ながらピトンに足をかけてしまったが、十分フリーで登れそうだ。この1ピッチのために他の十数ピッチを登ったようなもので、いまひとつのルートだ。

（齋藤）

冬合宿（笠ヶ岳南西尾根～槍ヶ岳～中崎尾根）

【メンバー】鮎沢(CL)、河野、外池、川名、齋藤、小野、細野

【日程】1986年12月15日～24日

12月15日

笠谷橋(8:30　小雨)―ヒアケ谷出合(11:00　雪)―1231mの次のコル(11:50　小雪)―1550m付近TS(15:25　雪)

多勢のＯＢの見送りを受け、〝まあ何とかなるさ〟と開き直って東京を発ったものの、ビデオ・デッキと囲炉裏の組合せがとっても斬新な神岡鉄道の車窓の外の雨に煙る奥飛騨の冬景色に心は重い。なぜかあの五ヶ山先輩の唄う「奥飛騨慕情」そのままの入山となってしまった。そんな登山者の感傷に関係なく、奥飛騨の小中学生やオバチャンはやたら元気であった。

笠谷橋でバスを降り、雨具を着用して笠谷林道へ今合宿の第一歩を踏み出す。偵察時は地図の不備により取付きが同定できずに敗退しているので、地図とにらめっこしながら進む。小雨がミゾレとかわるころ南西尾根（正しくは支稜）取付きへ。

ヒアケ谷を少し遡ってからとりつく予定だったが、偵察の結果、靴を脱いでの渡渉が避けられそうもないので、もう少し林道をたどったあと適当な斜面を選んで登りだす。かなり急なうえに笹に積もった新雪が滑ってイヤらしかったが根本をつかんで強引にゼーハー登りをくりかえすことしばしで尾根上に出る。積雪はほぼ０㎝でブッシュにうっすらと新雪が乗っている程度である。

所々露岩のまじった明瞭な尾根状の急登をくりかえし何とか水を作れそうな積雪となってきたあたりで適当な平地を見つけて幕営。一年生にとっては冬山初体験が雨とヤブ漕ぎに終始しなんとも気の毒な一日だった。

12月16日

ＴＳ(7:00　曇)―１９８２ｍ(10:45雪)―２１５０ｍ付近ＴＳ(15:55快晴)

細野メガネ紛失、鮎沢キスリング破損によりやや遅い出発。今日も雪ののったブッシュのヤブ漕ぎから始まる。しの竹をもった一年生は難儀しているが、彼らのためを思ってあえて代わってはあげない。１６２１ｍ周辺は平原状となり、他パーティーの赤布たよりに歩きやすそうなところをぬって高度を稼いでいく。再び尾根状を呈してくると同時にようやく雪も深くなってきたが、まだまだブッシュは濃くワカンはつけられない。本日の幕営予定地１９８２ｍに着くころには湿った雪が本降りとなる。この先は南西尾根で唯一ザイルが必要と思われる岩峰帯の通過だ。

ここに幕営した後ルート工作にでてｆｉｘするかこのまま次にテントがはれそうな２１５０ｍまで行ってしまうか。鳩首思案の末、一応２１５０ｍを目指し、時間の足りない場合、適当なところからｆｉｘしながら１９８２ｍまで戻ってくることにして出発。次々に現れる小岩峰はいずれも左右からひどいブッシュ漕ぎに苦しみながらまくが、ブッシュがあったからこそザイルなしでまけたというのも又、事実であ

る。積雪が多くてブッシュが埋まってしまえば左右とも谷へ一直線に落ちて行く雪壁になると思う。

第3のやや大きな岩峰は、左側の雪のバンドをトラバースした後小さなコルへ約5mの懸垂下降。このあたり、残置されたフィックスロープも多い。小コルから急な木登りで岩のリッジに上がりギャップをまたいだりしてリッジをしばらく辿ると最大の第4岩峰にぶつかる。この間、岩のリッジに5mのフィックスを2か所、たいした場所でもないので手がかり用に8の字結びで輪を作っておいてあげたのに、小野は一人きまじめにプルージックでビレイをとりつつ登ってきて、途中で立ち往生するという笑えぬ一幕があった。

第4岩峰にぶつかったところで、左側の小沢の源頭にあたる急雪壁に出、その上部を左へトラバースし岩峰の左端に食い込んだ緩いルンゼを直上すると（この間40mフィックス）2150m付近の広い雪尾根に飛び出した。

第4岩峰のフィックス工作中からみるみるうちにガスが晴れ始め、ついにはド快晴となる。下界は一面の雲海、そして眼前には穂高連峰の雄姿!! 先に2150mまであがっていた連中は少し先までラッセルしてきて〝笠がみえた!〟とはしゃいでいる。明日はなんとか笠のピークを踏みたいものだ。井上に天気図をとらせてテントを張る。荘厳な夕日の後は満天の星空となった。

12月17日

TS（6:45　晴）—2417・4m（10:45　快晴）—笠ヶ岳山荘TS（15:30　快晴）

ええ天気や！ 今日中に笠ヶ岳山荘に入ろうと勇んで出発。ブッシュもそううるさくなくなったのでワカン着用。おおむね膝上下のラッセル。でもハイマツ帯に入るとはまってしまって脱出に一苦労。右前方に笠ヶ岳がその端麗な姿をみせているが、絶望的に遠い。おまけに荷も重い。天気が良いのが唯一の慰め。ダブルボッカしながらひたすらラッセルしやっと2147・4m竹造ピークへ。ここからの笠ヶ岳はすばらしい。マナスルなんて見たこともないのに〝日本のマナスルだ〟と変な納得をする。

このあたりから森林限界で雪はだいぶ締まってきたがところどころブレイカブルで、いったんはまると体力の消耗が著しい。2338mをすぎてしばらくしてからワカンをとってアイゼン着用。でも少しタイミングが早すぎてだいぶはまってしまった。錫杖岳からの稜線が合するところまでは、ガレが所々顔をのぞかせた急な雪面をゼーハー登る。川名嬢が片方のアイゼンがはずれたのに気づかずそのまま残して行ってしまうというこれまた笑えぬ一幕があった。

あいかわらず天気は良く穂高連峰、南アルプス、八ヶ岳から富士山まで見えるが連日の長時間行動と重荷のためみんな疲労こんぱいうつろな目をしておぼつかない足取りで山頂への岩まじりの稜線を進んで行く。岩がだいぶ出ており、一回落石があったが何とか無事に笠ヶ岳のピークに立つ。記念撮影をして３６０度のパノラマを楽しんでから笠ヶ岳山荘にかけ下る。冬季小屋をさがすがなかなか見つからない。齋藤が少し離れたところにある小屋の方に行ってみるが、何の根拠もないくせに〝あれはちがう〟などとぬかすので、あきらめて山荘脇にテントを張る。

昨日に続いて満天の星空。西穂ロープウェイのものらしい灯かりがポツンと見えて郷愁を誘う。一日分かせいだので、豪華な夕食をとって疲れた体をシュラフに横たえた。

12月18日

4:30 に起床した時はまだ星が見えていたのに、朝食を済ませてパッキングを始めるころにはＳＷ風が吹き荒れて雲が飛来し、視界10ｍほど。鮎沢、河野で偵察に出るが山荘下の広い斜面でルートがわからず引き返し、沈を決定。悪天が予想されたので冬期小屋捜索を開始。昨日、齋藤が自信をもって〝ちがう〟と言った小屋が冬期小屋であった。彼は時折根拠もないのに自信をもってうそをつく癖があるので困る。

小屋内を整備しテントを張り終えたころ(8:30)より雲がはれ展望が開け出した。再び鮎沢、河野、外池の３人でしの竹をうちながら偵察に出る。抜戸岩のあたりで完全な晴れ間が広がり、あわてて引き返す。雲海も低く南寄りの風も弱まったので疑似好天とはわかっていたが鮎沢は秩父平まで進むことを主張。しかし、やはりそれには賭けの要素が強いし疑似好天のあとは冬型が定着して沈が長引きそうなこと、同じ沈なら小屋で快適にすごしたいこと、連日行動の疲れをとりたいこと、等の理由により沈に決定。

お昼ころより視界が悪くなり結果的に沈にしてよかったがそれは日程・食糧・燃料に十分な余裕のある我々だから言えるのであり、そうでない社会人パーティーならば、疑似好天を積極的に利用してもっと早いうちから行動を起こしたと思う。

我々の母親兼シェフ河野特製の沈殿スペシャルお汁粉はとっても美味!!日本海にある低気圧が抜けた後の冬型は強まりそうである。

12月19日

あまりの息苦しさに 5:30 頃目がさめる。気温が高いせいかテントの本体・内張りともにグショ濡れ。おまけに夜半から強まった南風のために小屋

の入口より吹き込んだ雪がかなり積もっており、通気もなにもあったものではない。入口近くの1年生に聞いてみると、やはり息苦しくて目覚めみんなが苦しそうにハーハー言って寝ているのでおかしいとは思ったそうだが、小屋内にテントを張るとこんなもんだと思って黙っていたそうだ。なんて奴だ。

外へでてみるとホワイトアウトだが、雪はほとんど降っておらず風も弱い。冬型になって風雪強まると思っていたのでやや拍子抜け。16時の気象通報で、これは日本海に弱い低気圧が発生したためとわかる。おかげで気温も高くすごしやすい沈だった。

沈殿2日目、ついに手作りトランプ登場（天気図用紙をガムテープで裏打ちして切ったものに絵を描いて作る）。「ドボン」なるゲームが大ヒットし、レーションのアメやチョコを賭けて一日中このゲームにうち興じた。

今日の沈スペはすいとん、まさにおふくろの味、ごちそうさまでした。

12月20日

沈殿3日目。5:00起床、外はホワイト・アウトしておりNW風が強い。冬型になったようだ。サラサラした粉雪がふりつもり午前中に除雪3回。昨日に比べるとずっと冷え込んでいる。またもドボンにうち興じてしまう。ひまつぶしにイヤイヤながらというのでなく、みんな夢中になって他人をハメようとしているところがコワイ。

正午ころより風がいちだんと強まり、ガスはれて青空がのぞく。山々も時折姿を現す。16:00時の気象通報をとってみると、高気圧がはりだして等高線が東に突き出して冬型が弱まっている。夕方には快晴（下界は雲海）となり夕焼けに映える穂高連峰のながめがすばらしい。象足のまま小屋の屋根の上へ駆けあがってしまうくらいもう気分はサイコー!!〃明日は双六だ〃と心に誓って眠りにつく。

12月21日

笠ヶ岳山荘(6:40　晴)―秩父平(8:35　曇)―弓折岳(10:25　晴)―双六小屋(12:30　晴)

高層天気図から、昨日の午後から晴天をもたらした高気圧が東に去って次の気圧の谷が足早に接近していることが分かったが、秩父平までは進めるはず思って出発。東の空は不気味な朝焼けである。ところが、抜戸岳にさしかかるあたりから西空より黒い雲堤が押し寄せてくるではないか！ヤバイ、早く早くと足を動かすが、ブレイカブル・クラストの斜面は大変歩きづらく焦ってしまう。しかし、シェフからラッセルマシーンへと変身した河野のドトーのラッセルによりまだ晴れ間ののぞくうちに秩父平に達した（ここまでアイゼンのみ）。

さきほどの黒い雲堤は四散し再び青空が広がり始めたし、ここから先はどこでも幕営できるので、行けるところまで進むことにしてアイゼンとワカンを併用する。どういうわけか素晴らしい快晴となり、暑いくらいの陽気だ。右手に槍ヶ岳が刻々と近づいてくるが、同時にラッセルも深くなる。弓折岳への登りでは腰までのラッセル。弓折岳から双六小屋までがすぐそこのように見えてなかなか遠くキツかった。鮎沢が弓折岳南尾根からのエスケープルートのしの竹を打ちながら一人遅れて行くが、残りのしの竹を持った連中がそのままドンドン先行してしの竹の補給ができず、退路が確保されないという大チョンボがあった。反省。

双六小屋に入るころより西よりの風が強まり視界もきかなくなる。10月下旬のデポも無事回収したものの、あまり減っていなくてただでさえ重い荷物にこのデポが加わるかと思うと心まで重くなる。かといって、後々のことを考えるとバカ食いする勇気もなく結局夕食に1メニュー増やしただけでそのまま分担して持ち帰ることになった。

12月22日

双六小屋(10:30　小雪)―硫黄乗越(11:45　曇)―千丈沢乗越TS(14:35　快晴)

5:00起床。外はややホワイト・アウト気味だが樅沢岳への斜面はなんとか見える。高層天気図(21日21:00)がラジオ不調のためとれず、判断材料がないため9:10の気象通報まで待つことにする。冬型ではあるが、高気圧は弱く移動性となって張りだしそうな気配なので、出発を決意。トイレまで小屋内にある超快適な双六の冬期小屋で豊富な食料に囲まれて数日を過ごしたいと思った者もいたと思うが、天気予報はクリスマス寒波の襲来を今年も予想していたので何としてもクリスマスまでに下山したいという願いが勝った。

風が強く、少し雪もまっているがかろうじて視界は効く。樅沢岳のあたりは雪稜のコンタクト・ラインがわかりずらかったが、時折明るくなって視界が効くのを待って慎重に通過。初めての風雪(大げさか?)の登高だったが一年生もビビらずについてきて一安心。小野が強風下でケツをムキ出しにしてみんなの前で排便したのにはあきれた。

西鎌尾根の岩稜帯に入るころより青空が広がり始め、槍がすぐ目の前にその勇姿をを現した。いくつかの岩峰は雪の状態が良かったのですべて蒲田川側または千丈沢側から巻くが、所々腰までのラッセルや不安定な雪板もあらわれ緊張した。結局ザイルなしで千丈沢乗越に着く。完全な快晴となり移動性高気圧もしばらく居座りそうなので、予定を変更してこのままここに幕営。早速ブロックを切り出す。横尾尾

根ＪＰ基部から槍の穂先までの高度差はそれほどに絶望的に感じられた。夜は質量ともにゴーカな飯を食べ、酒もいっぱい飲んで登頂の前祝いをした。風もなく快適な一夜だった。

12月23日

ＴＳ(7:00　快晴)―槍の肩(7:45快晴)―頂上(8:15　快晴)―ＴＳ(9:45快晴)―槍平(14:50　晴)

登頂日にふさわしくド快晴の朝だ。谷岡ヤスジなら槍の穂先にニワトリを立たせて「アサ～」と叫ばすにちがいない。全員ハーネスをつけ、２つのアタックザックにテルモス、ザイル等をつめて出発。肩までの飛騨沢源頭の大雪面はところどころ雪が不安定で肝を冷やしたがおおむねアイゼンがよく効く。穂先への登りも雪はそう着いておらず夏のハシゴ、クサリが見えていたのでノー・ザイルで行く。そしてついにそしていささかあっけなく３１８０ｍの絶頂に立つ。見渡せば、日本中の山岳がすべて見える、それくらいよい天気だ。ラッキーすぎる自分たちがコワイ気さえする。いろんな山をバックに写真を撮り合う。

下りはザイルを２ピッチフィックスして懸垂下降。ラストの鮎沢だけビレイしてもらってクライムダウン。肩からの雪面も危なげなく下って無事ＴＳに戻る。この下りの途中で中崎尾根より上がってきた早稲田の山岳部に会った。彼らには悪いが、先に登頂して頂上を独占出来てよかった。

こころウキウキ撤収し、バッチリトレールのついた中崎尾根を下り始める。早稲田のフィックスが張ってあり、ありがたく使わせてもらったが、降雪直後などあのあたりのナイフエッジは足元から崩れそうで大変コワイと思った。

それにしても、無事登頂をすませ、あとは下山だけ。天気は良いしトレールもバッチリルンルンというわけで気持もゆるんだのもわからなくはないが、２つの支点間に張られた１本のフィックス・ロープにみんなでゾロゾロしがみついていたのはマズイ！反省。

ＪＰからの急雪壁は慎重に40ｍ１Ｐの懸垂下降。ここでも気が緩んだのか、鮎沢は回収時に末端をほどくのを忘れてしまい、少し登り返したのだった。反省。

あとは、奥丸山の前まで延々と登り下りを繰り返す。雪がくさってきたので、とちゅうからワカンにはきかえる。尾根上には他パーティーのテントがチラホラと目についた。急な支尾根を灌木をたよりに駆け下りて槍平へ。天気も良いし合宿最後の夜なのでうす暗い小屋の中はやめて林の中にテントを張る。下級生は余った食料を喜々として食べ、上級生は残りの酒をこっそり飲みまくり合宿最後の夜は楽しく更けて

ゆくのであった。ＯＢのどなたかの差入の「手水」は水っぽいという一年生もいたが、飲めば飲むほどに味の出るすばらしい酒だった。

12月24日

槍平（8:40　晴）―新穂高温泉（11:25　曇）

今日も良い天気が続きそうなのでのんびりパッキングしてのんびり出発。吉沢さんから注意をいただいた滝谷出合、チビ谷出合、ブドウ谷出合もこの積雪では何の心配もない（しかし、正月にチビ谷出合でナダレ遭難があったと効いた時はさすがにゾーッとした）。錫杖岳の稜線のながめを楽しみながら左俣林道を下って新穂高温泉に到着。10日間にわたった合宿の全行程を終了した。

〈総括〉

一口に言って寡雪と好天に恵まれた合宿であった。双六小屋に5日分の食糧・燃料をデポし、入山時にも12日分の食料・燃料を持って万全を尽くしただけに、いささかあっけないという印象はぬぐい難い。しかし、それも好天時にそれだけの重荷を持って目標地点まで進むことができる機動力があってはじめて可能になることであるから、好天時の機動力という点に関して現在の部の状態はある程度のレベルに達していることが今回の合宿で証明されたと言ってよいと思う。

これからの課題は、この機動力をどう山行に生かしてゆくかにあると思う。現在のような形で過剰と言ってよいほどのスペアを持って行う縦走オンリーの合宿をこれからも続けていくのなら別として、岩壁とまでいかぬにしても岩稜・雪稜・雪壁など登攀要素の多いルートを合宿の対象として選ぶ場合、過剰な装備は機動力の桎梏でしかない。もちろん、登山が安全を第一義とするものである以上、機動力のための軽量化と安全保障のための非軽量化という二律背反はことに積雪期の山行の場合避けられないものである。しかしそれは、登る側の人間の努力によって克服できるものでもある。各人が多少の荒天ではビクともしない全天候型の登山者として自分を鍛えていってほしい。

またここ数年の冬山はクリスマスころに寒波が襲来して年末年始に荒れる傾向にある。この傾向を生かし、比較的やまが穏やかなうちに合宿が終了するように日程を工夫すれば難ルートの速攻も可能であると思う。そのような点を考えると、今回の冬合宿はＨＵＨＡＣの合宿のあり方が従来の伝統的なものから脱皮して新しい方向へ向かうべき時を示すものだと言えるのではないだろうか。

（CL鮎沢）

1986年度　山　行　表

期　　間		コ　ー　ス	メ　ン　バ　ー
1986	3.17～ 3.22	白馬岳主稜～白馬三山往復～栂池	鮎沢(CL)、齋藤(SL)、外池、河野、小野、大野
	4. 3～ 4. 9	黒部丸山東壁緑ルート	岩崎(L)、丸野(以上アスペン・クラブ)、鮎沢
	4. 8	越沢バットレス	齋藤、白石
	4. 8	笹子川、滝子沢左俣	大野
	4.28～ 4.29	南大菩薩（新入生歓迎山行）	鮎沢、外池、川名、齋藤、河野、小野、大野、細野、山内、深井、白石OB
	4.28～ 5. 1	戸隠連峰P1尾根～高妻山	鮎沢、河野、齋藤、外池
	5. 2～ 5. 3	鳳凰三山	川名(CL)、小野、大野
	5. 3～ 5. 4	不帰Ⅲ峰B尾根	鮎沢
	5. 7～ 5. 9	剱岳池の谷右俣奥壁ドーム稜	岩崎(L)、丸野(以上アスペン・クラブ)、鮎沢
	5.10～ 5.11	滝川豆焼沢	外池(L)、河野、大野、井上
	5.10～ 5.16	剱沢（文部省春山登山研修会）	小野
	5.10	日和田	齋藤、山内
	5.16	日和田	齋藤、外池、細野、山内、井上、中村(W.V.)
	5.23～ 5.26	北岳大樺沢二俣定着（雪上訓練合宿）	鮎沢(CL)、外池(SL)、河野、齋藤、川名、小野、大野、細野
	5.27～ 5.29	北岳～塩見岳～三伏峠	鮎沢(CL)、外池(SL)、河野、齋藤、川名、小野、大野、細野
	6. 1	鷹巣谷遡行	小野
	6. 7～ 6. 8	笛吹川東沢鶏冠谷右俣	鮎沢(L)、小野、山内
	6. 8～ 6. 9	富士山	鮎沢
	6.10	笹子川トロクボ沢	大野
	6.13～ 6.15	奥秩父全山縦走	小野
	6.13～ 6.15	越後三山縦走	外池
	6.14	越沢バットレス	鮎沢、河野、引地(OB)
	6.16～ 6.17	甲斐駒ケ岳	大野
	6.16	広沢寺	鮎沢、井上
	6.19～ 6.23	三つ峠（岩登り合宿）	鮎沢(CL)、外池(SL)、河野、齋藤、川名、小野、大野、井上、細野、山内
	6.29	越沢バットレス	鮎沢、井上
	7. 9	日和田(確保および救助技術訓練)	鮎沢(CL)、外池(SL)、河野、齋藤、川名、小野、大野、井上、細野、山内
	7.17	丹波川本流（３級下）	齋藤、外池、小野、大野、山内
	7.20	日原川本流（２級上）	齋藤、外池、大野、井上
	7.23～ 8. 1	剱岳真砂沢に定着（夏合宿）	鮎沢(CL)、外池(SL)、川名、齋藤、河野、小野、大野、井上、細野、山内
	8. 2～ 8. 9	真砂沢BC～西穂高岳～上高地縦走	河野(CL)、小野(SL)、細野、山内
	8. 2～ 8.12	真砂沢BC～黒部湖～東沢乗越～烏帽子岳～鹿島槍ヶ岳～五龍岳～唐松岳～白馬岳～朝日岳～栂海山荘～白鳥山～親不知	鮎沢(L)、井上

期間		コース	メンバー
1986	8. 2～ 8.10	真砂沢BC～黒部上廊下～黒部川源流～黒四ダム～	齋藤(L)、外池(SL)、大野
	8.18～ 8.19	尾白川本谷	鮎沢
	8.23～ 8.29	剱岳（文部省夏山登山研修会）	小野
	9.13～ 9.17	北岳バットレス、甲斐駒ケ岳赤石沢	鮎沢(L)、齋藤、引地(OB)
	9.13～ 9.16	北岳バットレス	引地(OB)、鮎沢、齋藤
	9.16～ 9.17	甲斐駒ケ岳赤石沢Aフランケ	鮎沢、齋藤
	9.22～ 9.24	唐沢岳幕岩	鮎沢
	9.24～ 9.25	与田切渓谷～空木岳～木曽駒ケ岳	小野
	9.27～ 9.28	笛吹沢東沢、釜ノ沢	外池、川名、河野、細野
	9.28	谷川岳一の倉沢南稜フランケダイレクトルート	鮎沢、多和(アスペン・クラブ)
	10. 2～10. 5	塩山～乾徳山～甲武信岳～梓山	井上
	10. 4～10. 5	武尊山、川場谷	外池、河野、小野、細野
	10. 4～10. 5	小川山（ハードフリー入門）	鮎沢、引地OB
	10. 9～10.12	甲斐駒ケ岳	井上、持田、坂口、藤本(高校時代の級友)
	10. 9～10.11	早池峰山	石丸、白石、齋藤
	10.10～10.11	甲斐駒ケ岳赤石沢前衛壁Aフランケ右フェース同志会ルート	鮎沢、河野
	10.11～10.13	巻機山～清水峠～土合	外池、谷口
	10.17～10.19	双六岳（冬山偵察、デポ）	鮎沢、河野
	10.18～10.19	八木沢ダム～家の串山～八木沢ダム（春合宿偵察）	外池、小野、細野、山内、井上
	10.23～10.25	明星山ダイレクトルート、左岩稜ルート	鮎沢、齋藤
	10.25～10.26	天神平～谷川岳～万太郎山～土樽	外池、川名、河野
	10.31	甲斐駒ケ岳黒戸尾根(五合目まで)	鮎沢、外池
	10.31～11. 1	明星山P6南壁柴田ルート	鮎沢、外池
	11. 6	広沢寺	鮎沢
	11.10	越沢バットレス	鮎沢
	11.16	越沢バットレス	鮎沢、井上
	11.20	日和田	鮎沢
	11.23～11.24	滑川宝剣F沢	鮎沢、丸野(アスペンクラブ)
	11.27	広沢寺	鮎沢
	11.27～11.30	富士山	鮎沢、外池、河野、井上、小野、大野、細野、山内
	12. 6～12. 8	甲斐駒ケ岳黄蓮谷右俣	鮎沢
	12.12	広沢寺	鮎沢
	12.13	日和田	鮎沢、川名、外池、齋藤、井上、山内
	12.15～12.24	笠ヶ岳南西尾根～槍ヶ岳～中崎尾根（冬合宿）	鮎沢(CL)、川名、齋藤、外池、河野、小野、細野、山内
	12.29	越沢バットレス	鮎沢

期　　間		コ　ー　ス	メ　ン　バ　ー
1987	1. 1	八ヶ岳広河原沢3ルンゼ	鮎沢
	1. 4～ 1.10	甲斐駒ケ岳黄蓮谷左俣～赤石沢奥壁中央稜～仙丈岳	鮎沢、丸野(アスペンクラブ)
	1.16～ 1.18	甲斐駒ケ岳尾白川北坊主ノ沢	鮎沢
	1.24～ 1.25	笛吹川東沢(アイスクライミング)	外池、齋藤、河野、小野、井上、山内
	2. 1	日和田	鮎沢、谷口、川名
	2. 7	越沢バットレス	鮎沢、外池
	2.11～ 2.12	唐沢岳幕岩	鮎沢、丸野(アスペンクラブ)
	2.14	越沢バットレス	鮎沢、川名、谷口
	2.16～ 2.17	甲斐駒ケ岳尾白川西坊主ノ沢、北坊主ノ沢	鮎沢
	2.20	広沢寺	鮎沢、川名、井上
	2.24～ 2.25	金峰山	小野、細野



渡辺九郎（昭和３年卒）
『針葉樹会報』第80～86号より

1987

部長　石　　弘光教授
部員
４年　齋藤　　誠(CL)
　　外池　武司(SL)
　　河野　　正
３年　小野　　一
　　高橋　弘行
　　(入部１年)
２年　井上　裕之
　　細野　伸二
　　山内　　太
１年　内藤　久裕
オブザーバー(５年)
　　鮎沢　政文
　　川名　真理
針葉樹会学生担当幹事
　　近藤　　泰
　　中西　　茂
　　山本礼二郎

活動概況

山岳部が隆盛を極めた年代の諸先輩から見ると、何をいうかという話だろうが、部員ゼロの現在から振り返ってみると当時の山岳部はとても賑やかで楽しい時代だった。

４年生が３人、３年が２人、２年が３人、１年が１人、更に指導者というか小姑というのか、５年生が２人いて、ワイワイガヤガヤとやっていた。ついでに津田塾や慶応の女子学生が出入りするなど、グランドの奥に位置した山岳部の山小屋（部室）は住人（５年生）の存在とともに、活気ある場所だった。

前年まで部を引っ張ってきた５年生が、更に先鋭的な登山を志向するからと、部の活動とは一線を画し、運営は４年生３人の手にゆだねられた。

５月の文登研に２年生２名が参加したり、山スキーを２名が始めるなど、それぞれが多彩なジャンルで自分の山を求めていた。

「合宿を通してオールラウンドな登山の技術・知識の基礎を習得し、それを個人山行で深めながら自己の山登りの確立を目指す」ということを部の活動方針とした。

現在の部員の状況と通ずる点であるが、この年、６月まで新入部員を迎えることができなかった。５月末の雪訓合宿後の第２次新勧活動で２種のビラを作成するとともに、２度の説明会を開催し、ようやく２名の新人、１年生内藤と３年生高橋を獲得することができほっとしたところである。部員不足の要因・解決の糸口として当時分析していたことは、以下のような点である。

・山岳部、ワンゲル、山友会とレベルの違う各団体が他団体の悪い面を攻撃しあう。
・山岳部については危険性、重労働性が強調される。
・個人山行等を通して他団体との交流をすすめ、お互いの認識をより正確なものとする。
・結果、オールラウンドな山登りを志向する学生は山岳部に目を向けてくれる。

６月に年間計画を立て、集大成というべき冬合宿の目的地を前穂高岳北尾

根とした。何といっても著名なこのクラシカルな雪稜を踏破したいと思ったからである。部にとってはレベルの高い登攀技術が求められるため、つづら岩ユマーリング講習会はじめ、例年の富士山プレ冬合宿に加えて、八ヶ岳において第2次のプレ冬合宿を設定し、本番に備えたところであった。その山行については、主要山行記録に記載する。

和気あいあいとバランスのとれた幸せな1年であったと認識している。

（齋藤　誠）

春合宿（上越国境、谷川岳）

【参加メンバー】外池、河野、小野、大野、井上、細野、山内

【日程】1987年3月18日～23日

3月18日（雪）

八木沢ダム(6:45)―家串山(10:21)―刃物ヶ崎頂上TS(12:33)

八木沢ダムまでのアプローチは長い歩きを覚悟していたが、タクシーの運転手の厚意によりダムまで乗り入れてくれたので一気にアプローチを短縮できた。早速取付く。いやな湿雪に悩まされながらも偵察の時よりもよほど早く進み、10:30前には家の串に着く。ラッセルはたいしたこともない。さらに1ピッチ進むと核心部の岸壁の下に出る。外池、河野、小野で偵察。Climbing Journalで中級にランクされるだけあってハンパでない。結局、キスリングを背負って登るところではないとの結論に達し、南東側斜面をトラバースして巻く。雪崩の危険があるので、間隔をおいて歩く。僅か1ピッチで頂上へ出る。ここで幕営。アッと言う間に2日分の日程を消化してしまった。しかし、ザイルが泣いている。

3月19日（曇のち晴のち地吹雪）

TS(6:15)―桧倉山(9:23)―JP(11:58)―清水峠(13:30)

清水峠を目指し今日は早発。途中、岩峰にはばまれて大きく下を巻いたり雪庇を気遣ったりしながらも2ピッチあまりで国境稜線へとび出す。ここからはやや単調な稜線歩き。しかし、桧倉、大烏帽子と越えて行くにつれ疲労蓄積しJPを登りきったところでは息絶え絶え。先頭と最後尾の間の差がかなり目立つようになる。

なお、大烏帽子のあたりでスキーの単独行氏に遭う。JPの下りでは風強まり視界も悪くなる。先頭と最後尾の見通しが不可能になることもしばしば。さらに、湿雪のため、2～3歩歩けばアイゼンはダンゴ。清水峠避難小屋に着いた時は救われたような思い。

3月20日（雨のち曇）

視界悪くさらには雨。せめて蓬峠まで動くことも考えたが、正午過ぎても天候回復のきざしなし。すぐそこの送

電線監視小屋さえ見えない。結局沈滞。

3月21日（曇のち晴）
TS(6:26)―武能山(10:00)―茂倉岳(13:16)―谷川岳(14:56)

昨日のガス、うそのように晴れ上がり、遠く天神平の電灯まで確認できる。一気に谷川岳目指して出発。蓬峠あたりからまた視界悪くなるが武能山までは順調に進む。

武能山の下りでガスに巻かれてルートを失う。外池・小野の偵察により左側に派生する側稜を下ったことを確認。主稜線までもと来た道を引き返すことにする。11:30頃主稜線へ戻る。およそ1時間30分のロス。なんと、主稜線に戻ったとたんガスがきれいに晴れあがるではないか。背後には、いかにもガスのときはルートを誤りそうな地形が、そして前方には偵察隊の残したトレールがはっきり見えるではないか。何という山だ。

茂倉岳への長い登りにさしかかる。茂倉岳からは一投足で一の倉岳。しかし、一の倉岳からコルへ下り、そこから谷川岳への登りがまたきつい。谷川岳山頂に立ったのは15:00前。これで縦走の半分を越したわけだがここで新たな重荷がわがパーティーにのしかかる。デポである。予定より早く来すぎたためデポなど使わずとも十分。かえって重荷になるだけ。食糧消化のため翌日は沈滞を期待したが、天気図を見るとどう考えても明日は絶好の行動日和である。

3月22日（晴のち曇）
TS(6:34)―万太郎山(10:03)―仙の倉山TS(16:00)

雪はくさっており、ツボ足で行動。また晴天に恵まれ、というよりたたられ、暑い。みんなヤッケを脱いで行動。何と言うことなく登り下りを繰り返していく。が、エビス大黒の頭下にクレバスがあり、細野転落。幸いけががなかったが一瞬肝を冷やす。また、大野、風邪気味のためかなり遅れる。さらにはこの強い日射しのなかただ一人サングラスをかけなかった山内雪盲。しかし、自業自得なので、同情する者誰もなし。

3月23日（曇）
TS(7:00)―平標山―三国山(10:53)―17号線三国トンネル(12:36)

最終日も霧で視界悪し。平標山を軽く越え、国境稜線を南下する。平標山の家から先トレールなく輪かんをつけラッセル。湿雪は不快だ。とにかくいやな湿雪に苦しめられた山行だった。

11:00頃、最後のピーク三国山に着く。あとは下りのみ。三国峠を経て12:36、17号線三国トンネルの新潟県側出口に到着。長い縦走は終わった。そこで解散。

外池、河野、山内は苗場でskiing。他はヒッチハイクしたトラックで三国

トンネルを抜け群馬県側へ。ちなみにそのトラックは子豚輸送用のトラックでした。

夏合宿前半定着（涸沢）

【参加メンバー】
齋藤（CL）、外池（SL）、河野、高橋、井上、細野、山内、内藤

【期間】１９８７年８月４日～14日

８月４日
バスターミナル（7:06　曇）―涸沢（14:30　雨）
新入部員・内藤、高橋をむかえての初めての本格的な合宿だ。重荷をかつぐのが初めてだけあって涸沢へつくころは２人ともバテバテだったようだ。

８月５日
ポール１本折れる（3:06　快晴）―雪上訓練（10:45～14:25　雨）―涸沢（14:55　雨）
明け方近くに強風のため片方のテントのポールが折れ、フライまでが破けてしまう。初日から天候が悪く新入部員にはかわいそうであったが雪上訓練をやる。この日は雪上での歩行訓練に多くの時間をついやす。そして最後近くに確保の実地訓練を行なう。

８月６日
４尾根隊
【メンバー】外池、河野、山内
出発（5:10　晴）―松波岩（9:20　曇）―スノーコル（9:40　晴）―４尾根登攀開始（10:00　晴）―Ｂカンテ前（12:00　晴）―Ｃカンテ（14:20　晴）―Ｄカンテ前（15:35　曇）―登攀終了（17:45　晴）―涸沢
この日は好天に恵まれたので、予定どうり雪訓隊と４尾根隊に分かれる。松波岩をすぎてからＣ沢を下って４尾根に取り付き行くわけだが、予想どうりＣ沢は大変ガレガレしており、スノーコルまで約１時間半ついやす。３人が交互にリードをしながら登攀する。落石多発地帯が多く快適な登りとは言えない。Ｄカンテのとき、セカンド（山内）が落ち、リード（外池）との相互の意思疎通が出来てなかったために、外池が指にけがをする。（４尾根事故は別の報告書にくわしく述べます）

雪訓隊
【メンバー】齋藤、井上、細野、高橋、内藤

小縦走Ｂ隊
【メンバー】河野・細野・山内・内藤

８月７日
出発（5:25　晴）―ロリ橋（6:12　晴）―二俣（7:22　晴）―東尾根（10:00　曇）―槍沢（11:07　曇）―水俣乗越（13:20　晴）―北鎌沢・天井沢出合（16:00　曇）

外池の前日のケガにため予定を変更し、彼には休養をもうけてB隊の小縦走を前にもってくる。

内藤は前日の後遺症とおもわれる脛の痛みにも耐え、この日はがんばる。痛みが始まったのは横尾本谷。晴天に恵まれ、アップダウンにもめげずに予定をこなす。

8月8日

出発(4:50　曇)―北鎌尾根(7:04晴)―天狗の腰かけ(8:07　晴)―天候が悪化(9:22　雨)―槍ヶ岳(15:00雨)―殺生ヶ原(16:45　雨)

天気図により天候が悪化することが明らかに予想されたので早めに行くということで出発。だが結局1年生のペースで終始一貫する。当然。北鎌、天狗の腰かけ付近から天気が悪くなり、ガスにつつまれ視界が悪くなる。途中、遭難パーティーから肩の小屋への伝言をたのまれる。槍ヶ岳がかなり近くになっていたころ稜線通しに進まなかったため、180度進行方向をかえてもとの場所にもどるということをしてしまった。肩の小屋近くはものすごい風。

8月9日

出発(6:20　曇)―横尾(10:07　曇)―涸沢(12:50)

天候が回復傾向にあることはわかっていたが、朝いまだ雨だったので横尾まわりで帰ることにする。槍沢ヒュッテあたりで雨はあがる。

8月10日

飛騨尾根隊

【メンバー】B隊(外池、河野、細野、山内、内藤)

出発(4:30　晴)―奥穂高山荘(6:10快晴)―奥穂高岳(6:50　快晴)―取り付き点(9:20)―ジャンダルム(12:15快晴)―涸沢(15:24　快晴)

この日はすばらしい晴天だった。ザイルを使用したのは下降時に1度懸垂をした時と、飛騨尾根の最後の1ピッチの2回だけ。1年の内藤も快適に登攀出来、まずまず。尾根最後のピッチは2年生の細野、山内がリード。快適な1日でした。

8月11日

松高ルート

【メンバー】B隊(外池、河野、細野、山内)

出発(4:45　晴)―5・6ノコル(5:35快晴)―取り付き点(7:10　晴)―登攀開始(7:30　晴)―河野、山内終了(10:17　曇)、外池・細野終了(11:00曇)―3峰(12:12　晴)―前穂高岳(12:24)―奥穂高岳(13:30　快晴)―涸沢(14:06)

この日、内藤は連日の疲れがたまったせいか動けないというので、休養させる。松高ルートでは取りつき点を間

違えそうになったが、幸いにも後続のパーティーの方が正しい取り付き点を教えてくれたので正規のルートを登攀出来た。組み合わせは河野・山内と外池・細野とする。

途中1ケ所エーゼルをして登るところがあるが素直にエーゼルをして通過。私の印象では、その上の方が難しかった。順調に松高ルートをこなし、北尾根、前穂、奥穂へと進む。奥穂ではちょうど小縦走途中のA隊と合流。

8月12日
屏風岩
【メンバー】東稜隊（外池・井上・山内）
横尾谷河原出発(4:35　快晴)―東稜取り付き(8:11　快晴)―T2―登攀開始(9:00　快晴)―登攀終了(15:36　曇)―涸沢(18:00　曇)

前夜のうちに横尾谷岩小屋付近まで下り、ビバークする。とにかく取り付きまで行くのに時間がかかった。尾根状の所を行かずにルンゼからまわったためだ。人より余計に3ピッチ。東稜では全6ピッチを3で割り、井上・外池・山内という順で2つずつ割り当てた。高度感あふれる非常にスリルのある思い出残る登攀でした。かなり時間がかかりましたが。

8月13日
滝谷ドーム中央
【メンバー】外池、井上、山内、高橋、内藤
出発(5:00　晴)―登攀開始(8:30　曇)―登攀終了(12:30　曇)―涸沢(14:15　晴)

取り付きについて、いざ登ろうとしたところ、名クライマー長谷川氏がやってきた。せき止めるのもあまりにも悪いので先に行ってもらう。登り方を眺めてうっとりとする。我々の組み合わせは外池・高橋と井上・山内・内藤。内藤・高橋は多少時間がかかったが、当然、まずは難なくクリアー。最終登攀日は無事に終了。

8月14日
下山。

夏合宿A隊
【メンバー】齋藤・井上・高橋
8月7日（晴のち曇）
北条新村ルート　4級下　Ⅳ・A1
5:20 涸沢発(5:20)―5・6のコル(6:30)―C沢上テラス(8:25)―取付(9:20)―ハイマツテラス(11:10)―登攀終了(15:00)―4峰(15:40)―BC(17:40)

松高ルートへ行く予定だったが、取付を間違え、北条・新村ルートへ行ってしまった。1P目で気付いたが、松高ルートは人が詰まっていたこと、北条・新村ルートもかつて齋藤がトレースしたことがあることから最悪の場合の撤退も考えた上でそのまま北条・新



1987年8月　奥穂高岳頂上にて
前列左から 高橋、井上　中列左から 細野、外池、河野、山内　後列 齋藤

村ルートを行くことにする。1年生高橋には荷の重い、実力以上の登攀であったことをリーダーとして反省したい。

ⅣA1の核心部は高橋をミッテルとして、ラストの齋藤がアブミの回収や腰の持ち上げのサポートを施し、3時間余りの格闘の末、突破した。おりしも黒雲が広がり始め、ひや汗の登攀だった。

帰路、3・4のコルから雪渓を下ったが、雪に不慣れな高橋にとって、恐怖心が高まったようで時間をとってしまった。

8月8日（曇のち強風小雨）
北尾根
涸沢発(5:20)—5・6のコル(6:15)—5峰(7:00)—3・4のコル(7:40)—前穂高岳(9:05〜9:40)—奥穂高岳(11:20〜11:40)—BC(13:30)

北尾根の後、T1フランケを登る予定を立てたが、強風と北尾根で手間取り、T1フランケはカットした。BCから5・6のコルまでは、昨日より15分短縮でき、ひと安心。3峰の登りは、冬に来ることを考えるとなかなか手ごわそうだった。

8月9日（雨）
梅雨前線通過（ラジオは確かにそう告げていた）悪天のため沈。

8月10日（晴）
小縦走初日　明神岳東稜
BC発(4:20)—5・6のコル(5:10〜30)—奥又白池(6:35〜45)—下又白谷(7:25〜35)—東稜上(9:30〜40)—ラクダのコブ基部(10:45〜50)—明神岳主峰(12:50〜13:00)—前穂高岳(14:15〜30)—岳沢(16:00)—帰幕終了(コブ沢上部)17:20

下又白谷から東稜に出るまでブッシュを手がかりとした急登に苦しめられた。

8月11日（快晴）
小縦走2日目　畳岩中央ルンゼ
出発(5:30)—畳岩中央ルンゼ取付(7:25〜35)—ピナクル下(9:00〜15)—ピナクル上(10:55〜11:10)—畳岩尾根上(12:00〜20)—コブの頭(13:25〜14:05)—奥穂(15:15)—BC

「足の裏の皮が一方に寄ってしまう」という表現がいかにもピッタリの畳岩であった。好天に恵まれ爽快なスラブ登りとなった。ピナクル裏手のルンゼは岩がもろくヒヤヒヤさせられた。我々はルートを右上スラブに取って登攀を終えたが、そのまま奥壁へとつなげれば、より充実した登攀となろう。奥穂高岳頂上で松高ルートへ行っていた外池らと出合い握手を交わす。

8月12日（快晴）
北穂高岳東稜～ジャンダルムT1フランケ
出発(5:05)―北穂のコル(5:55～6:05)―北穂高岳(7:25～40)―穂高岳山荘(9:05～15)―T1フランケ取付(10:30～11:00)―登攀終了(14:40)―BC(17:15)
日程も押し迫ってきて変則的なルートとなった。北穂高岳東稜は何度来ても快適な岩遊びを満喫させてくれる。北穂からT1フランケまでのアプローチが予想以上に長く、一昨年、このルートで雷に出会った経験からヒヤヒヤさせられたが、なんとか天気がもってくれた。

（齋藤　誠）

夏合宿後半縦走（北海道・十勝岳～大雪山）

【参加メンバー】小野、井上、細野、池田

【期間】1987年8月18日～25日

8月18日（晴）
タクシーで原始ヶ原登山口　TS

8月19日（晴）
TS―富良野岳―上ホロカメトウック山―上ホロ小屋

8月20日（曇）
上ホロ小屋―十勝岳―美瑛岳―オプタテシケ山―双子池　TS

8月21日（雨）
TS―コスマヌプリ―トムラウシ山―ヒサゴ沼避難小屋

8月22日（雨）
ヒサゴ沼避難小屋―小化雲岳―天人峡温泉TS

8月23日（曇）
TS―(クワウンナイ川遡行)―源頭付近TS

8月24日（雨）
TS―化雲岳―忠別岳―白雲避難小屋TS

8月25日（快晴）
TS―間宮岳―旭岳往復―黒岳―層雲峡下山

お花畑と日本離れした光景が続く北海道の山々は新鮮であった。しかし、今年は例年になく天候が不順で霧の中ばかり歩いていたのは残念。今回の山行で特筆すべきはクワウンナイ川遡行であろう。前日来、気圧の谷に入り、行くべきか否かの判断に苦しむが結局出発。増水のためか、二俣までのコースタイムが大きくふくれあがるが、心配された滝ノ瀬十三丁の増水はたいしたことなく幸運であった。他は技術的に困難なところなし。今回特別参加してくれた池田さんもがんばって全行程を走破、ごくろうさま。

なお、クマ対策には、笛を吹きながら歩くのが効果的。爆竹も必携だが、クマの面前で使用して威嚇する結果になるとかえって危険なので、使用にあたっては慎重にすること。

１９８７年冬合宿　前穂高岳北尾根

【参加メンバー】

齋藤誠（CL）、外池武司（SL）、河野正、小野一、高橋弘行、井上裕之、細野伸二、内藤久裕

【期間】

１９８７年12月16日～22日

【記録】

12月16日（雪）

上高地―徳沢―１７９８ｍ地点

5:55 沢渡発。例年にない暖冬で上高地まで積雪はほとんどなし。快調に進み9:00には帝国ホテル前に達する。上高地街道をたどるが、夜行の疲れが出て、眠い。明神池付近から雪が深くなり、スパッツを着ける。11:30徳沢着。吊橋を渡り、河原をしばらく歩き、12:35 慶応尾根末端に着く。やはり雪はほとんどない。稜線への急登は重荷を背負っているので非常にこたえる。13:20 やっとのことで１７９８ｍ地点に到着。この先２１５４ｍ地点まで進むか幕営するかで迷うが、結局幕営。

12月17日（雪）

１７９８ｍ地点―慶応尾根―８峰頂上

天気図は冬型の気圧配置を示し雪。しかし８峰目指し6:35出発する。一晩でかなりの積雪があったらしい。２１５４ｍ地点手前あたりから雪深くなり、ダブルボッカでなければ進めないところも。わかんを持ってきて助かった。

猛ラッセルのため、予想以上に時間を食う。昨日１７９８ｍ地点で幕営したのは正解であった。

14:00 頃、北尾根上に出る。風は冷たく、震え上がる。眼下には涸沢が、対岸には奥穂高岳の雄姿が、そして目指す白出のコルが、一望に見渡せる。

15:50 ８峰着、ここで幕営。８峰頂上は船窪地形をなしたなかなかよい幕

営地である。雪のため行動時間は9時間に膨れ上がった。日入り果てて空は満天の星。遠く街の灯りが揺れる。眼前には北尾根の岩峰がピラミッドの感を呈して立ちはだかる。明日からの登攀を前に胸は躍る。

12月18日（快晴）

8峰頂上―5・6のコル（工作隊は5峰まで）

移動性高気圧にすっぽり覆われて快晴。6:40出発。北尾根上でもラッセルはかなりしんどい。7峰の緩い雪壁でまずザイルを出す。6峰の登攀は4ピッチ。特に下部はかなりの急登で高度感もあり、なかなか手強い。

14:00第一陣が5・6のコルに達する。全員が揃うのは1時間程度後。ここで幕営。14:45工作隊出発。5峰まで行き、雪壁に2ピッチフィックスし、16:45帰還。

12月19日

5・6のコル―3・4のコル（工作隊、3峰にフィックス）

弱い冬型の気圧配置となり、雪、後、強く降る。6:35発。工作済みのルートでは順調に進み、特に問題なく全員4・5のコルに着く。ここから4峰へはやせた雪稜が続き、少し緊張する。

4峰の登攀は涸沢側から登り、2ピッチ。特に下部岸壁では危ないトラバースがあり、難儀する。

10:45第一陣が3・4のコル着。天候は悪化し始め、ついに吹雪になる。この悪天の中、フォロー隊の到着が大幅に遅れ、全員が揃うのは12:45。この後13:15に工作隊出発。3峰の頭まで1ピッチを残して17:00頃帰幕。

テントでは事件発生。こぼれたガソリンに引火し、あわやテント消失、という事態に。さらにミスが続く。調理用のコッヘルを吹き飛ばされ、翌朝大騒ぎ。中間地点まで来た安堵感から来る気の緩みか。

工作隊の話によれば、3峰の登攀は予想以上に難しそうだ。1ピッチ目には小ハングがあり、ユマールを2つ使わなければ登れそうにない。協議の末、全員ユマールを2つずつ使い、5人登った後、1人がユマールを持って下降するといった方法を取ることにする。

12月20日（雪）

3・4のコル―前穂高岳頂上

冬合宿のクライマックスを迎える。今日は核心部の3峰を越える。雪。6:40工作隊出発。後発の者はツェルトをかぶって待つ。思った通り1ピッチ目の小ハングで苦労する。2、3ピッチ目にも急な登攀が続く。厳しい冬のバリエーションルートを前に隊のスピードは上がらず、後発の者は長時間待たされる。この間にも降りしきる雪は一向に止む気配を見せない。4ピッチ目に

もハングがあり、アブミをセットする。それでも重荷なので苦労する。

最後の1人が頭に立つのは14:00になってから。3峰～前穂高岳頂上まではやせた岩稜が続き2ピッチフィックスする。懸垂下降する個所もある。16:00 前穂頂上着。風強く、ブロックを積み、幕営。一時はどうなることかと気をもんだが、無事核心部を越えた。その夜、テントで遅くまで騒ぐ。

12月21日（雪）

前穂高岳山頂―吊尾根―奥穂高岳―白出のコル（穂高岳山荘）

雪は止まず、視界も良くないが、6:50出発。稜線を外さないように慎重に行動する。積雪直後の雪は締まりがなく、表層雪崩の危険もある。悪天の中ペースは上がらず、焦りの色を隠せない。4時間連続で行動し、12:20になってようやく奥穂高岳頂上到着。安堵する。夏の吊尾根からは想像もできない厳しい道程だった。そのまま白出のコル目指して下りはじめるが頂上直下の下りで高橋が滑り、一瞬ヒヤリとする。後ろ向きになるなど慎重に下っていれば防げたはずのものだった。

コル手前の梯子がなかなか見つからず、4年生が偵察する。13:50 白出のコル到着。雪に埋もれた冬季小屋を掘り出し、小屋どまりとする。便所まで備え付けられた小屋は激しい風雪にさらされてきた我々にとって、まさに天国であった。ただ、長時間かけなければ掘り出すことができない大きな入口は、いかがなものか。

夜、全員が集まってミーティングを行うが、今朝の天候判断、高橋の滑落未遂等について疑問が呈される。

12月22日（快晴）

白出のコル―涸沢岳西尾根―蒲田富士―新穂高温泉

待望の最終日。快晴。我々が越えてきた北尾根の稜線が、前穂高岳が、そして眼前に立ちはだかる奥穂高岳が、雲一つない夜明けの空にくっきりと浮かび上がる。6:40 出発。一気に涸沢岳に達し、西尾根の岩稜を下る。F沢のコルへの下りは懸垂下降を行う。F沢のコルには9:00。蒲田富士の雪稜を雪庇に注意しながら進む。途中涸沢岳を目指すパーティーとすれ違う。蒲田富士の下りもやや難しい岩稜があり、2ヵ所懸垂下降を行う。そこを抜けると樹林帯に入る。ここまでくれば安心。天候も昨日の吹雪がうそのように穏やかである。13:00 ひょっこりと林道に飛び出す。そこからは一気に歩き、14:40 ついに終点、奥穂高温泉に到着する。入山以来1週間、まさかとは思ったが1日の沈殿もなしに完走である。

今回の冬合宿は4年生3人という近年にない恵まれた布陣で冬の著名なクラシックルート、前穂高岳北尾根を縦走することができた。

しかし、集団での冬期登攀は想像以上に困難であった。成功の要因はつづら岩、富士山、八ヶ岳といった一連のトレーニング山行、更には、秋の北尾根偵察山行、部室での机上シミュレーションといった、確りとした準備があったことにある。

（齋藤　誠）

1987年度　山　行　表

期　間		コ　ー　ス	メ　ン　バ　ー
1987	3. 3～ 3.10	八ヶ岳真教寺尾根～赤岳～赤岳鉱泉（定着合宿）	齋藤、外池、河野、小野、大野、井上、細野、山内
	3.18～ 3.23	八木沢ダム～家の串山～清水峠～武能山～谷川岳～万太郎山～平標山～三国山	齋藤、外池、河野、小野、大野、井上、細野、山内
	5.29	広沢寺	引地(OB)、鮎沢、井上、他1名
	6.22	広沢寺	鮎沢
	7.21	越沢バットレス	鮎沢、小野、井上、
	7.31	久須美の岩場	鮎沢、小野、井上、他1名
	8.21	鷹取山	鮎沢、三浦
	8.27	城ヶ崎	鮎沢、三浦
	10.10～10.11	小雲取谷遡行	小野、高橋
	10.10	雲取山	内藤
	10.16～10.19	春合宿偵察（白山前半部）	小野、細野、山内
		春合宿偵察（白山後半部）	井上、山内、高橋
	10.18～10.22	冬山偵察山行（前穂高岳北尾根～奥穂高岳～涸沢岳西尾根）	齋藤、河野、内藤
	11. 8	つづら岩ユマーリング特別訓練集会	齋藤、外池、河野、小野、井上、山内、内藤、高橋、特別講師：鮎沢
	11.22～11.25	プレ冬合宿（富士山）	齋藤、外池、河野、小野、高橋、井上、細野、山内、内藤、
	12. 3～12. 7	プレ冬合宿Part2（八ヶ岳）	齋藤(CL)、外池、河野、井上、山内、内藤、高橋、引地(OB)、鮎沢(前CL、5年生)
	12.16～12.22	冬合宿報告（前穂高岳北尾根）	齋藤、外池、河野、小野、井上、細野、高橋、内藤
	12.28～ 1. 1	唐沢岳幕岩	鮎沢
	12.30～ 1. 2	正月山行　南ア、鋸岳～甲斐駒ケ岳	細野、引地(OB)
1988	1. 5～ 1.10	赤石沢　奥壁継続登攀	鮎沢、井上
	2.12～ 2.13	北アルプス唐沢岳幕岩	鮎沢、井上
	2.23～ 2.28	プレ春合宿　（尾瀬～上州武尊山）	小野、井上、細野、山内、内藤
	3. 9	南ア千丈岳（単独）	鮎沢

1988

部長　石　　弘光教授
部員
４年　小野　　一(CL)
　　高橋　弘行
３年　井上　裕之(SL)
　　細野　伸二
　　(1988年8月遭難死)
２年　内藤　久裕
１年　岩原　一弘
　　坪井　　充
６年　鮎沢　政文
針葉樹会学生担当幹事
　　佐藤　活朗
　　中西　　茂
　　山本礼二郎

活動概況

88年度は、夏に細野君が亡くなる遭難事故が起き、事故の再発防止と部のあり方を、部員それぞれが自らに問いかけた1年となった。

この年度も、少人数化とどう向き合っていくかという課題からスタートした。上級生3人が卒業し山内が留学したため、新年度は実質的には4年生1人(小野)、3年生2人(井上、細野)、2年生1人(内藤)の、計4人(のちに1年生2人が加わる)で迎えた。活動方針の記録には、「部員の志向の多様化が非常に著しくなってきている。岩登り、縦走、沢登り、フリークライミング、冬山、山スキーなど、部員の興味は多岐にわたっている。また山岳部の外により積極的な活動の場を見いだしていこうとしている部員もおり、全生活の中における山岳部の比重が、「従来に比べ低下」し「合宿制＝全部員の強制参加を不可侵の原則として確認することはできない」と記されている。つまり、「志向の多様化」を前提にした「合宿制の見直し(限られた人数の中での個人山行の重視と、訓練の場としての合宿という位置づけ)」が年度当初の方針となっていた。これは前年度末の積雪期の山行をみれば、▼小野…白山山スキー縦走を立案し春合宿で実現▼井上…当時5年生の鮎沢とともに南ア甲斐駒ケ岳赤石沢継続登攀▼細野…引地OBと南ア鋸岳から甲斐駒ケ岳にザイルを使いながらの縦走と、3者3様であることからもわかる。少人数の中で互いの違いを認め合う体制へのシフトを模索し始めていた。

しかし、各人が視野狭窄になって志向を先鋭化させていたわけではない。実際にはむしろ幅広い活動をしていたといえる。4月～7月の山行を眺めれば、▼奥多摩で新歓▼OBと上級生による残雪の北鎌尾根▼大樺沢で雪訓合宿▼3年生2人が参加した安達太良山でのOB懇親山行▼学生部主催の小川山岩登りコンペ集会▼上級生と1年生の丹沢沢登り▼三ツ峠で岩登り合宿▼日和田山で岩登り救助訓練、などとある。部内外のメンバーと交流して視野を広げながら、地力を養っていた様子がうかがえる。

新人2人(岩原、坪井)を迎えて臨

んだ夏合宿は、隔年で入山している北アルプス剱岳で実施。計画では前半は恒例の真砂沢定着、後半は真砂沢―槍・穂高。2年生の内藤が不参加だったが、全体的にはオーソドックスな計画に落ち着いていたと言えよう。ここで遭難事故が起きた。

前半最終日の8月12日5:00ごろ、源次郎尾根1峰平蔵谷側で、中央ルンゼルートの取り付きに向かう上級生3人のパーティーのうち、細野伸二君が雪渓からラントクルフトに滑落。帰らぬ人となった。事故の経緯は報告書に詳しいが、ラントクルフトの危険性を認識していなかった3人の実力不足が原因と言えるだろう。細野家のご家族はもちろんのこと、部外の諸団体、大学、OBにも多大なる迷惑をかけ、かつお世話になった。

事故が部に与えた影響は大きかった。各方面への連絡やお礼、事故報告書の作成などの作業も膨大であったし、部員の山や部へのモチベーションの問題もないわけではなかった。しかし何より、安全に山を続けられるのか、そして山岳部は今後いかにあればいいのかが、根底から話し合われることになった。これは、事故の原因を考える中で、今回の事故が合宿中に起きたという重たい事実や、細野が「上級生になって急に熱を入れ始めた」「登攀」へ向かっていた時に起きた事故であったことをどうとらえればいいのかという問題、さらに、煩瑣な作業の多い部の運営のやり方に遠因はなかったのかといった問いかけが、大きくのしかかっていたからである。

結果から先に言えばその年も冬合宿には行くのだが、事故報告書に記された「今後の部の活動方針」によれば、まずその前提として▼山行の難易度を落とす▼過去の遭難事例の収集・資料化、および学習▼合宿のルートをベースにしたイメージトレーニングの実施、などの安全対策を新たに自らに課したのである。

ただし、そこに至るまでの道のりは長く、安全対策だけでなく、部のあり方をめぐって様々な議論が交わされた。例えば部のあり方については、各人が意見を文書にまとめて部会に持ち寄った。1988年10月21日の部誌には「部の存続について」との題で交わされた議論が記されている。

「部の構造的な問題については克服されるのか」

「個人山行を主としたクラブにしたらどうか」

「合宿を減らすことで、果たして負担が減るだろうか」

「(部活動が生活全般の)ワン・ノブ・ゼムでは絶対無理。それなりの覚悟がないとやっていけない」

「WV(ワンゲル)と合同することはいいが、一旦、解散して、WVに入ることになる」

「今までの方針を取り続け、新・山岳部として出発するなら、負担が増え、それなりの覚悟が必要なわけだから、全部員に新たに進退を決めてもらう」

「ワン・ノブ・ゼム→ワン・ノブ・テン→ワン・ノブ・スリーと、だんだんなっていくような魅力ある部にしていきたい。負担は全然減らないし、むしろ増えるかもしれないけど、覚悟のできているやつらが集まっている部として続けていっていいのだろう」

「実際に果たしてワン・ノブ・スリーぐらいにできるのか。ゼミや就職などもある」

「事務的な煩瑣なことを分業化によってかなり解決できるのではないか」

などの意見が記されている。少人数の中での部のあり方は長年のテーマでもあっただろうが、改めて1人1人が部会で意見を述べるという過程を経たことは大きい。

ＯＢからは、少人数化の中で、得手不得手にかかわらずオールラウンドな山登りをこなすのではなく、もっと個人の自由な山登りを追求するほうが事故は減るのでは、という意見をもらっていた。

議論によって、絶対安全な登山の法則が導き出されたわけではもちろんない。ただ、煩瑣な作業については、業務の責任体制を明確化することで減らそうと努力した。また合宿については、「行きたくない合宿には『行きたくない』と表明でき、またそれを認めるのがより行い易い部になった」（「今後の部の活動方針」より）とあり、雰囲気に変化は生まれたようだ。これは結果的に、年度当初に示された「志向の多様化による合宿制の見直し」に沿った内容であったと言える。

さてこうみると、その後の部員は各自の志向に応じてバラバラに行動していくかのように思われるが、実際にはその逆の方向に進んだようにも映る。遭難事故以降、部のあり方についてのビジョンを一から話し合ってきた結果、上級生には部活動継続への責任感や、自己実現のひとつのかたちが見いだされた。また下級生は、（おそらく強い迷いを抱きつつも）1度は雪の山を見てみたかったのか、それともいっしょに時を過ごすことで部に愛着が生まれたからなのか、結果として冬合宿に行きたいという意思を示していた。こうした環境下で、できる限りの努力をして、慎重に活動を再開させていこうという共通認識が生まれ、冬合宿や春合宿へとつながっていったと考える。

冬合宿は、例年通り偵察山行も行った上で、無事故を祈るように臨んだ。計画書に残る小野の巻頭言が当時の雰囲気を伝えているので以下に記す。

「今年夏の事故後、初の本格的な山行を行うことになった。絶対に事故を起

こさぬことを誓いつつ再出発する。今回は基礎にたちかえり、八ヶ岳で冬山の基本技術の習得を目的とする合宿を行う。この合宿を通じ、各自が『自分の山登り』を見つけ、新たな山行へのステップとなるようにしたい」。

この合宿では赤岳鉱泉で雪訓をしたあと北八ヶ岳を蓼科山まで縦走。決して難しいコースではないが、全員が参加して雪の山に登り、大過なくやり遂げたことについて、慎重に積み重ねてきた努力が実ったという充実感があった。筆者の脳裏にも、トップを代わってたくましくラッセルで進む2年生、クリスマスの下山を前に、テントの中でローソクをつけて楽しそうに過ごす1年生たちの姿が焼き付いている。

さらに春合宿の遠見尾根も、秋の内に偵察を行って臨んだ。本番では連日の大雪で「沈」続きとなったが、こちらも通常ならば卒業間近で同行しない4年生が参加しての、慎重な態度で臨んだ合宿であったと言える。

こうした部の活動とは別に、部とは一線を引いて後見人のような形でいた6年生の鮎沢、そして3年生の井上は、積雪期に他大学とパーティーを組むなどして精力的な個人山行を行っていた。このうち鮎沢は、東大スキー山岳部のOBと、穂高岳屏風岩東壁「トリプル・ジョーカー」の冬季初登や、鹿島槍ヶ岳北壁「氷のリボン」第2登に成功するほか、甲斐駒ケ岳尾白川西坊主ノ沢単独第3登(フリーソロ第2登)を成し遂げている。また井上は年度当初から計画のあった日本山岳会学生部の海外遠征に参加し、6大学6人でネパール・ヒマラヤのクスム・カングル峰北陵ルートを目指した。またこれに向けて冬場、八ヶ岳やゲレンデへ冬期登攀の訓練に通った。

こうした活動は、同じ志向の者は部外に求めなければ見つからないという状況を物語る一方で、部外で培った知見を部内に還元して役立てるという流れが定着してきたことも示している。部員減少の傾向にあって、こうしたスタイルはその後も続くことになった。

(井上　裕之)

春合宿(白山、三方岩岳〜大日岳)

【参加メンバー】小野、井上、細野、山内

【期間】1988年3月16日〜24日

3月16日

馬狩料金所

この日はアプローチで一日つぶれる。東海道線、高山線と乗り継ぎ美濃太田へ、ここから第三セクター長良川鉄道で美濃白鳥へと向かう。白鳥からはバスに乗り継ぎ鳩ケ谷へ。鳩ケ谷からは馬狩料金所(白山スーパー林道)まではおよそ1時間の歩き。料金所手前を除けば道路にほとんど雪はない。今日は料金所前にテントを張る。なお

アプローチには、北陸線を経由し城端から入る方法もある。

3月17日（晴のち雪）

馬狩料金所―三方岩岳

いよいよ今日から白山の長大なスキー縦走が始まる。取り付きは、馬狩に落ちて来ている尾根の末端から取り付くか、スーパー林道を途中まで歩くかが問題になるが、早朝のため雪崩の危険も小さいであろうことから、スーパー林道をたどることにする。出発5:45。林道をシールを付けて歩き、8:00ごろ尾根の末端（夏の登山道の入り口）に着く。ところどころ急登のある尾根をラッセルしながら進む。上部では雪が堅くアイゼンを使用する。10:00 過ぎ頃から雪が降り出し視界が悪くなる。三方岩岳頂上直下に来ているはずなのだが、はっきりしない。それに右側が切れ落ちているため、雪庇踏み抜きの危険もある。そのため偵察隊を出し、頂上直下の雪壁がすぐそこにあることを確認。三方岩岳西側の雪壁は降雪直後には雪崩の危険が大きいため、この日のうちに越えてしまうことにする。ピッケルを用い、キックステップで雪壁をトラバースする。三方岩岳頂上に全員が揃うのは 12:10。この先進むかどうかで迷うが、雪が降り続いているため、無理をせず幕営することにする。白山の雪は水分を多量に含んでいて、まるで雨にあったように濡れる。

3月18日（雪）

三方岩岳―野谷荘司山―モウセン平

朝、雪のため出発を見合わせる。9:00ようやく出発。小さなアップダウンの繰り返しがつづく稜線をたどる。特に危険個所はない。11:00 頃１７０４ピークを通過。その後、野谷荘司山手前で、視界が悪いため主稜線を外してしまう。間違いに気づき軌道修正するが、所要時間は大きくふくれあがる。何とか主稜線に戻り、14:10 モウセン平に着く。ここで幕営。

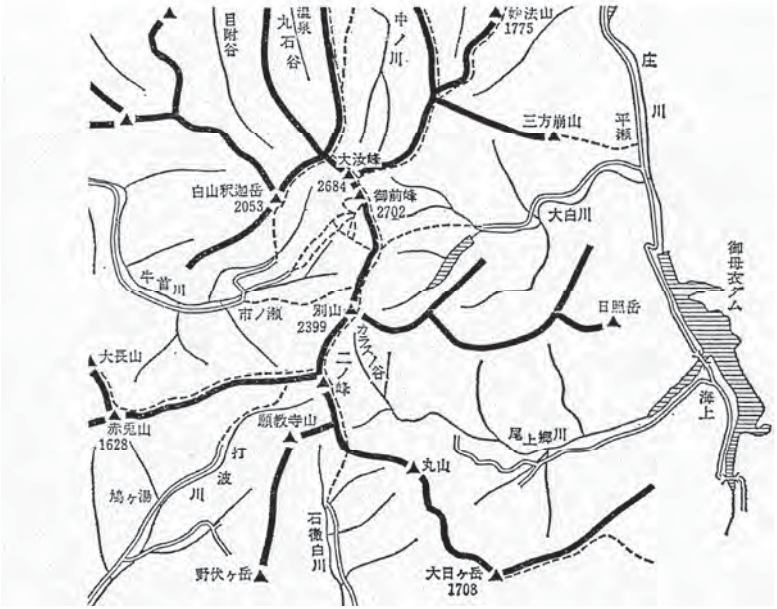
3月19日（晴）

モウセン平―妙法山―間名古の頭手前

5:50 出発。引き続き主稜線をたどる。今日は妙法山を越えるが、妙法山の登りは傾斜がきつく、スキーを外して登る。妙法山頂通過は 7:30 頃。下りはおおむねスキーで滑降出来る。ただ、妙法山直下にクレバスがあり、約１名それにはまってしまった。その後、ゴマ平方面分岐点までは特に問題はない。分岐点からは夏道は主稜線を外れゴマ平経由で行くが、我々は主稜線づたいに行く。間名古の頭に近付くにつれ傾斜が増し、ついにはスキーでは登れなくなる。特に最後の急な登りは氷化した上に雪が積もっており非常に苦労した。間名古の頭手前の平坦地に 13:20 到着。ここから先進むかどうか



↑（北部）　**白山概念図**　南部↓



新潮出版　『日本百名山』他

協議するが、明朝雪の堅いうちに一気にアイゼンで越えてしまうほうが有利と判断し、今日は早々と幕営。

3月20日（晴）
間名古の頭―大汝山―室堂―南龍避難小屋

6:05 南龍目指して出発。昨日は間名古の頭越えはかなり長丁場であると思っていたが、実際にはそれほどでもなく1ピッチで通過。ここから北弥陀ヶ原の長い登りが始まる。傾斜は比較的緩くシール登高向きの斜面と言えるだろう。ルートは稜線よりも左側を取るのがよいようだ。しばらく進むといよいよ目指す大汝山が現れる。このころからだんだん傾斜がきつくなってくる。大汝山への登りは、夏道は谷筋を通っているが、積雪期には雪崩の危険があり使えない。我々は、大汝山に直接突き上げる県境の尾根を取る。かなり傾斜がある細い尾根で、もはやスキーの領域ではなくアイゼンを付ける。重荷にあえぎながら、それでも滑落と雪崩の誘発に注意しながら慎重に登る。12:00、ついに尾根を登りきり、大汝山頂上に立つ。苦しい登りの末に白山の主峰に立ち、我々は今合宿最大の充実感を味わう。

大汝山頂上で大休止を取った後、いよいよシールを外して滑降である。が、これまでシールに慣れてきた我々はシールを外した瞬間、おもわず転倒してしまった。しかし、スキーの本領はシールを外したときにこそ発揮される（はずである）。ひさびさの快適な？滑降。ルートは、最初はトラバース気味に行き、右手前方に室堂の小屋を確認してから室堂目指して一気に滑り下りるのがよい。室堂通過は13:30。進路を南にとり、デポの待つ南龍避難小屋を目指す。室堂から南龍への斜面は絶好のスキーフィールドだ。（ただし南龍付近は深くもぐり、てこずったが）写真撮影会などして楽しむ。ところが、4日間夢にまでみたパラダイス南龍避難小屋についてみると、予想だにしなかった事態に直面した。小屋の入口が開けっぱなしになっており、小屋の中まで雪が吹き込み、入口が完全に埋まってしまっていたのだ。一時は、小屋が使えないばかりかデポも回収できないのでは、と思われたが、2メートルほど掘れば、その先は埋まってはいず、小屋に入ることができた。最悪の事態は免れたが、特に冬山に登る人なら小屋の管理ぐらいしっかりしてほしいものだ。

3月21日夜半～22日（雨）
低気圧通過、雨が降ったため、2日間小屋で沈滞。

3月23日（晴）
南龍避難小屋―別山―三の峰―銚子ヶ峰―丸山手前

2日間の休養で鋭気を養った我々は、これから今合宿の後半戦に入る。6:20 出発。シールを付けて出るが、クラストしているためシールがきかない。そのため早々とアイゼンに切り替える。我々の場合、スキーよりもアイゼンの方が速いようだ。2ピッチで別山を越えてしまう。別山を越えてひと安心といったところで、「事故」が発生。別山からの下りで井上が滑落、ピッケルを持っていなかったためなかなか停止できず、ブッシュに引っ掛かりやっと止まる。あわや大事故につながるところであった。引きずっていたスキーの上に乗ってしまったことが原因らしい。また、強風の中、下りを急いだことも誘因となったようだ。これに関し、幾つか反省すべき点がある。スキーを引きずるのは、特に下りの場合このような危険がある事を知っておくべきである。さらに、最も重要なことは、スキーを外して歩くときには、必ずピッケルも手に持つという原則を確認しなければならない。

依然として雪は堅く、引き続きアイゼンで行く。10:00 には早くも三の峰小屋を通過するというハイペース。二の峰を越えたあたりからようやくスキーを使う。しかしこのころからガスが湧いてきて視界が悪くなる。ただ先行パーティー(逆コース?)のシュプールがあったため迷うことはなかった。そのまま銚子ヶ峰を越える。銚子ヶ峰の下りもなかなかいいコースである。下り切った頃から視界も回復してきた。銚子小屋付近 12:45。ここで協議し、もう少し頑張ることにする。緩やかな傾斜の稜線をたどり、丸山手前へ。ここで幕営。13:45。

3月24日（晴）

丸山―芦倉山―大日岳―大日岳スキー場

今日中に下山しようと申し合わせて、5:40 出発。昨日同様クラストした雪にアイゼンが快適に効き、ハイスピードで進み、2ピッチ目には芦倉山を越してしまう。この辺りからスキーを付ける。ここは無雪期には絶望的なヤブ尾根らしいが、一旦雪に覆われればなんと快適な「スキー場」になることか。緩い傾斜のアップダウンが続く。一部傾斜のきつい登りもあるが、エッジを効かせて階段登高をすれば問題はない。10:15、我々の見込みよりもはるかに早く大日岳頂上に到着。ここまでくればあと一歩。大休止をとる。さあいよいよ大日岳スキー場まで最後の滑降。ということで出発した矢先、スキー場の人が頂上のお地蔵さんにお参りに登ってきた。そこで出発がわずかに遅れた小野、井上が、お弁当をご馳走になり、さらにはお酒までいただいてしまった。それを知らない山内、細野は一目散にスキー場を目指す。結局小野、井上は1時間程遅れて頂上を出発。約

30分でスキー場のいちばん上に出る。ここでシールを外してゲレンデに突入するが、重荷のため苦労する。全員がスキー場のいちばん下に集まるのは13:00頃。予想通り、居残り組は非難を浴びる。ローツェ（大日岳頂上で会った人の経営するレストラン）で祝杯をあげ、長かった白山スキー合宿を締めくくる。

夏合宿（北アルプス剱岳　真砂沢定着）

【参加メンバー】小野（CL）、井上（SL）、細野、岩原、坪井

【期間】１９８８年８月２日～13日

なお記録係だった細野君の残した記録の断片には、天候に関しての記述がないので、ここでは省略した。

８月２日

室堂（9:00）―別山乗越（13:00）―剱沢（14:15）―真砂沢（ＢＣ　18:00）

昨夜の夜行「能登」では、多くの知り合いと一緒になった上、見知らぬお姉さんと意気投合し、high になった我々は大騒ぎをして他の乗客に大ひんしゅくを買う。（思い出すと冷汗が出る）そのためおおいに酩酊して、出発が大幅に遅れる。重荷、靴擦れのため一年生の歩調が遅れ、真砂沢ＢＣに着くのは日暮れ前になる。

８月３日

ＴＳ（6:00）―平蔵谷にて雪訓（歩行、滑落停止、ザイルワーク少々）―帰幕（17:20）

雪訓第１日目。一年生はピッケルストップがうまくできず、それにかなりの時間を食い、帰幕も意外に遅くなってしまった。できればザイルワークまでしたかったのだが…。

８月４日

ＴＳ（5:15）―平蔵のコル（8:52）―剱岳山頂（9:53）―長次郎左俣コル（11:00）―ＢＣ（14:15）

一年生両名とも、靴擦れのなどのためか歩くのがのろい。長次郎雪渓下降は、はじめてのところは急傾斜で恐いので、一年生はスタカットで下ろす。帰路、熊ノ岩付近でピッケルストップの補習。



1988年８月　剱岳源治郎尾根
左から 小野、坪井、岩原、細野、井上

8月5日
ＴＳ(4:30)―平蔵のコル(7:50)―早月尾根分岐点(8:20)―２８００ｍ地点(10:47)―早月小屋ＴＳ(13:00)

8月6日
早月小屋(5:10)―剱岳頂上(9:30)―長次郎谷―ＴＳ(14:00)
この両日は小縦走で、早月尾根下降―馬場島―滝ノ谷―剱尾根を予定していた。長い行程を想定して早立ちしたが、一年生の調子が思わしくなく、特に岩原が格段に遅れ、予定の小窓乗越越えはおろか馬場島までも行けそうにないので、小縦走を断念し、早月小屋にツェルトを張る。一年生の力量を考慮せず予定をたてたのが悪かったのか？？？翌日は帰るだけで、二度目も本峰登頂の後長次郎谷を下降。この時も雪渓上部ではスタカットをする。時間に余裕があったので、雪渓下部で搬送訓練を行う。真砂沢に帰ると鮎沢が到着していた。彼は5日に真砂沢に入り、6日はどんぐり第一ルートを単独登攀している。

8月7日
・小野、井上、細野　チンネ左稜線登攀
ＴＳ(4:30)―長次郎谷登高―池ノ谷乗越(6:32)―三ノ窓(7:09)―チンネ左稜線取付(8:00)―終了(13:00)―7・8のコル(14:00)―5・6のコル(15:00)―ＴＳ(16:00)
・鮎沢、坪井　八ツ峰６峰Ｃフェース剱稜会ルート
・岩原　休養
上級生はチンネの登攀を主なう。左稜線は取り付きを探すのに時間がかかり、雷がいつ起こるかとおびえながら登っていたので、快適さを満喫できずじまいの慌ただしい登攀となった。(実際は雷など起こらなかったが)帰路、三ノ窓側を歩き長次郎谷へ出ようとしたが下りる所がなく、八ツ峰上半を逆縦走して5・6のコルまで行った。精神的に異常に疲れた。
坪井は元気だったので、鮎沢と一緒に初の本チャンに挑戦、剱稜会ルートの迫力を味わう。岩原は足の回復を待つため休養。
その日、ラジオが壊れ、学習院大に天気図を見せてもらう。おまけに翌日から縦走に行くということで、「余ったから」とお米までもらってしまった。そのお礼代わりに、真砂の舞台で芸を披露。坪井、岩原、井上、鮎沢のハリキリの甲斐あってか、学習院大からズブロッカを頂く。ウレＰ!!

8月8日
全員休養。鮎沢、奥鐘山へ出発

8月9日
ＴＳ(4:15)―1・2峰間ルンゼ出合(5:15)―1・2のコル―八ツ峰1峰(7:13)―4・5のコル(8:30)―5・

6のコル(10:15)

この日は八ツ峰上半下半を縦走する予定であった。ところが5・6のコルで雷の不安があったため行こかもどろか判断に迷っていたところ、突然一年の岩原が足を抱えて「イテテテテ」、「足が痛ェよー」とぬかす。あまりにグッド・タイミングであったため。その行為は誰言うとなく「岩原のサル芝居」により我々は日和って上半をカットし、陽なたぼっこをしながらゆるゆるとTSに帰ることになった。

8月10日

TS(4:10)—源治郎尾根取り付き(5:10)—1P fix—稜線(7:52)—1峰(8:50)—アプザイレンのコル(9:45)(この先2隊に別れる)

・本峰北壁L2隊(井上、坪井)

・本峰南壁A1隊(小野、細野、岩原)

長次郎谷下降—TS

源治郎尾根ではルンゼ沿いにルートをとり、1P fixする。アプザイレンのコルにおいて天候は曇、霧でときどき雨もあり、風もあってかなり寒い。岩登りを中止して帰幕すべきか考える。昨日日和ったことを思うにまたも投げ出すのも後ろめたく、両パーティーとも岩登りを敢行することにした。北壁隊はシュルンドの処理にてこずりさらに視界もあまり良くなく、岩は濡れ風も強いので、かなりしんどい登攀になったが、充実感もひとしおであった。南壁隊は、脆い岩に悩まされ長くかかったが、無事登攀する。

8月11日

TS(5:30)—6フェース取り付き(7:00)

・魚津高隊(小野、井上、坪井)

・RCC隊(細野、岩原)

6峰の頭(11:30)—7・8アプザイレン(12:30)—池ノ谷乗越(13:10)—長次郎谷下降—TS(14:30)

朝の出発が毎日のように遅れ、この日も、遅れないようにと何度も一年生に注意していたにもかかわらず、また彼らはのろのろして出発時刻が大幅に遅れる。そのため井上が怒って猛スピードで歩き、ついてこれない一年生を怒鳴る。上記の2隊に分かれ、岩登りの後6峰の頭で待ち合わせる。魚津高隊が遅れること1時間で2隊は合流。八ツ峰上半の縦走に向かう。快適な稜線歩き。

8月12日

細野君遭難事故発生。詳細は別途発行の「仮報告書」を参照。

(文責　井上)

夏合宿の反省(8／29の反省会記録をもとに編集)

今回の遭難事故の反省において、各合宿の反省がその場限りで終わってしまい、次の山行に活かされていないの

では、という指摘があった、そのことを克服するために、今後、各合宿の反省会事項を整理し、「報告書」に記載することにした。

入山

「もっと根性を出すべきだった」「バテました」という一年生の反省にもあるとおり、今年は入山に異常なほど長時間を要している。一年生ははじめての大きな合宿でたいへんであったろうが、もっと頑張ってほしかった。

雪訓

2日とった雪訓も、両日ともかなり遅くまでやったが、昨年に比べると、本峰アタックがあったのでやや不足気味。今年もタイトロープをやれなかったが、できればやっておきたいものだ。「初期制動」を重視した練習を行なったのはよかった。なお、一年生諸君は、次の反省事項を次の機会に活かしてほしい。「ピッケルストップは、雪が冷たい、手が痛い、等といったことに構わず思い切り突き刺さないと停まらない。「下降」（歩行）ができていないので練習せねば…」（坪井）　「歩行、ピッケルストップ（特に左）はまだ完全でなかった。ザイルワークは、自己脱出法（プルージック etc.）ができなかった。」

（岩原）

小縦走

大失敗！　主な原因は、岩原の足の皮がむけてしまったことにある。今後は、極力靴ずれを作らないようにする、初期のうちにテーピングして悪化を防ぐなど、注意してほしい。また、上級生が、一年生の実力を十分に把握していなかったとの反省もなされている。

岩稜

今合宿では、源治郎尾根と八ツ峰という極めてオーソドックスなルートを選ぶ。

八ツ峰は、当初の予定では下半・上半を通して縦走する予定であったが、結局は分けることになった。1・2峰間ルンゼは1峰など、かなり恐いところもある。5・6のコルへ下りる時、巻き道があるにもかかわらず、小野の判断ミスから、岩原に危険なクライミングダウンをさせてしまったことなど。重大な反省事項である。ルートファインディングは慎重に行う。また、「サブリーダーなどは、もっと慎重に危険を察知して適確な判断を下すべきだ」（井上）といった反省も出ている。上半は特に問題はなく、快適な岩稜歩きが楽しめた。

源治郎尾根は、2年前より荒れていたように思う。特に取り付きのルンゼがひどかった。取り付きのルンゼ上部のガレ場は、早めに左側の尾根に上がったほうがよい。チョックストンを

持つ棚の通過にはザイルを出したが、この処理は評価されるべきであろう。

岩登り

本峰北壁および南壁の岩登りでは、天候判断がただしかったかどうかが、大きな反省点である。霧、小雨のなかの岩登りとなった。たとえリードする上級生に自信があるにせよ、合宿では下級生もいることだから、安全第一にやるべきだ。個人山行とはある程度区別して考えるべきだ、という反省がなされる。（といっても個人山行ではムリをしてもよいという意味ではない）

また、特に南壁隊から、取り付きのラントクルフトのトラバースに関して危険性の指摘があった。取り付きのラントクラフトで滑落すれば非常に危険なので、**岩登りに行くときは、取り付きの雪渓を軽視せず、スノーフルーク等の雪上確保用装備をもって行くことを原則とする**ことを確認する。また、装備や実力との関連で、危ないと思ったら潔く敗退することの重要性も、指摘しておきたい。（なおこれは、今回の遭難事故についてもあてはまる重要な反省事項である）

6峰フェースは特に問題はないが、魚津高ルート隊が、意図に反してバリエーションルートに入ってしまったことは、反省を要する。

上級生岩登りのチンネ左稜線では、取り付きを探すのに約1時間を要した、取り付きを探す時間は短いに越したことはないが、**取り付きを確実にすることは重要なことであり、時間の許すかぎり慎重にすべきであろう**。また、**プランニングの際には、取り付きを探すための時間を計算に入れておくべきであろう**。この日は、朝から雷の兆候がみられたが、結局は大丈夫だった。途中から一緒になった社会人パーティーの人の話によると、まだ大丈夫ということだったが、雷の判断はなお研究を要すると思った。

雪渓

今合宿では、全般的に雪渓の処理を甘く見ているという反省がなされている。具体的には、一点目は、ラントクルフトの処理である。本峰南隊の行動（前述）は、下級生を連れていたにしても決して安全とは言い切れないものであり、また、最終日の中央ルンゼルートの取り付きのラントクルフトでは、取り返しの付かない遭難事故を起こしている。**ラントクルフトを通過するときは、危険が予想されるときは無理をせずザイルを出す**。そのためにはスノーフルーク等雪上確保用の装備を必ず携行していなければならない。

二点目は、急な雪渓の下降のときである。今回、長次郎雪渓上部等の傾斜の急なとこでは、一年生の下降に際してザイルをフィックスしたが、支点はピッケルを差しただけであり、プルー

ジックを利用して下りた。プルージックを下降時に使うことには問題がある。**アプザイレンを行うか、また一人一人確保して確実に下ろすべきであろう。もちろん、そのためには支点が確実であることが条件である。**やはりスノーフルーク等の装備を持っていくべきであろう。ピッケルを差しただけの支点では、支持力に限界があることをよく認識していなければならない。いずれにせよ、中途半端な支点はよくない。

また、今回、急な雪渓を下りる場合に、一年生の下に上級生が付く事があったが、これは多くの場合、気休め以上の意味を持たない。これがもとで大事故につながったケースもあるので注意すること。

生活技術・その他

合宿の重要な目的のひとつは、生活技術の体得である。今回、朝の準備において、一年生の遅れが目立った。山では時に一刻を争うことがあるため、個々の動作をテキパキとやることは大切である。慣れないうちはたいへんだが、趣旨を理解して遅れのないように努力してほしい。

（文責　小野）

冬合宿（八ヶ岳　赤岳鉱泉定着、北八ヶ岳から南八ヶ岳縦走）

【参加メンバー】小野、井上、高橋、内藤、岩原、坪井

【期間】１９８８年12月19日～24日

12月19日

美濃戸（13:10）―美濃戸山荘（14:00～14:50　曇）―赤岳鉱泉（17:15　雪）

初日は、内藤先輩のドチョンボで幕をあける。高尾駅に5:30集合なのに、7:00過ぎても来ない。一橋寮にやっとＴＥＬがつながると、まだ寝ていたとのこと。一同怒りを通り過ぎて苦笑する、8:00過ぎにやっと登場。さすがにうなだれている内藤先輩。この合宿中、内藤先輩の口ぐせ「絶対だな！」「必ずしろ！」が流行語となる。のんびりとapproach。途中で降雪。日没ヘッテンをつけて歩行。夕食は水たき鍋。たらふく食べて大満足。

12月20日

中山乗越付近で雪訓。

1日中、ピッケルストップ、スタンディング・アックスビレイ、アイゼン歩行の練習。

12月21日（晴）

阿弥陀岳アタック

ＢＣ（6:50）―行者小屋（7:35～7:50）―阿弥陀岳頂上（9:10）―中山乗越（10:35）―雪訓―ＢＣ（15:30）

雪崩の恐い中岳コル手前の沢をすばやく朝早いうちにこえ、阿弥陀岳もアイゼンをきかせて容易な登り。天気も

良く快適

12月22日

赤岳鉱泉(6:50)―硫黄岳手前(8:00～8:10　快晴)―硫黄岳(9:00～9:10　快晴)―根石岳(10:10～10:20　快晴　ただし強風)―天狗岳(11:30　快晴)―中山手前(12:40～12:45　快晴)―高見石(13:35～14:00　快晴)―白駒池(14:40　快晴)

偵察時に苦労した道の悪さも、冬は雪で覆われて快適なアイゼン歩行。好調にピッチをかせいだ。硫黄、天狗頂上付近では、強風にあおられる。耐風姿勢で耐えている。目出帽をしていなかった小野先輩はここらあたりで軽い凍傷をおう。気をつけるべし！　中山から樹林帯に入り、風弱し。

12月23日

白駒池(7:00)―中小場山(8:05～8:15　快晴)―縞枯山(9:10～9:20　快晴)―三ツ岳(10:40～10:50　快晴)―横岳(11:40～12:50　快晴)―亀甲池(14:05　快晴)

縞枯山あたりから膝レッセル。井上先輩が黙々と先頭を進む。ずっと三ツ岳あたりまで先頭を交代せず。筆者大いに助かる。ガレガレの岩場をなんなく越え、三ツ岳、横岳の悪路をものともせず、とはいかず、息を切らせてがんばった。そのため早い時間に横岳山頂につく。

亀甲池まではあと下るのみ。ところが、これがトレール無し。おまけに時々股までもぐるラッセルで一同がっくり。しかし、今度は「絶対だな」の先輩が黙々と先頭を受け持ち、筆者大いに助かる。井上先輩はトレールを踏みはずし、あおむけにひっくりかえって雪にはまってしまった。助けを一年生岩原に求めるも無視されて行かれてしまい、怒り心頭に達す。亀甲池上テントの中、メシをほうばりながら何度も怒る。恐ろし、恐ろし。井上先輩のサンタクロースのろうそくに火をつけ、下界をしのびつつ、ささやかにクリスマスを楽しんだ。

12月24日

亀甲池(7:00)―天祥寺原(8:00～8:15　晴)―蓼科山山頂(11:30～11:45　晴)―女神茶屋(14:10　晴)

信玄街道を1時間程歩いて滝ノ湯へ。タクシーを呼んで茅野駅。全員無事下山。

天祥寺原からラッセルまたラッセル。稜線上にある蓼科山荘までも遠かったが、そこから山頂までも遠かった。蓼科山頂は広い。天気良好のため南八ヶ岳方面をはっきりと眺められる。最終日が一番長くつらい登りであった。

（坪井　記）

１９８８年８月
「夏合宿・剱岳での遭難」

１９８８年８月、北アルプス剱岳でおこなった夏合宿で、細野伸二君が遭難した。その合宿について記す。さらに詳細は、報告書「追悼　細野伸二君―剱岳遭難報告・追悼」を参照のこと。

【参加メンバー】
小野（CL）、井上（SL）、細野、岩原、坪井

【期間】１９８８年８月２日～13日

当初の予定では、前半は真砂沢定着、後半は槍、穂高へと縦走する予定であった。８月１日出発の夜行・急行能登で２日に富山入りした我々は、室堂から別山乗越を経て真砂沢に入り、夏合宿前半の定着合宿をスタートさせた。事故前日までの行程は次の通り。

３日：平蔵谷にて雪上訓練。
４日：雪上訓練を兼ね、平蔵谷を詰めて剱岳に登頂。
５日～６日：小縦走。平蔵のコルから早月小屋へ行き、翌日剱岳登頂、長次郎谷を下山。
７日：上級生がチンネ左稜線。坪井は鮎沢と八ツ峰６峰Ｃフェース剱稜会ルートを登攀。
８日：休養。
９日：八ツ峰を下半分のみ縦走。
10日：源治郎尾根を登ったあと２隊に分かれ、本峰北壁Ｌ２ルートと南壁Ａ１ルートを登攀。
11日：２隊に分かれ、６峰のＡフェース魚津高ルートとＣフェースＲＣＣルートを登攀。八ツ峰上半分を縦走。

ここまでは、靴擦れを起こした１年生を休ませるため、上級生岩登りの日程を繰り上げるなどしたが、おおよそ予定に近い形で山行計画を消化していた。

12日：夏合宿前半の「定着」の最終日となった12日。上級生３人は「源治郎１峰下部中央ルンゼ―上部成城大ルート」の登攀を予定していた（下級生２人は仙人温泉を往復する日帰りの小縦走を予定）。3:00 に起床。夜中には雨が降ったが、星空になっていた。夜も明けきらぬ 4:00 に上級生３人は真砂沢のベースキャンプを出発。剱沢、そして平蔵谷の雪渓を登って、5:00 ごろに平蔵谷雪渓右側の、中央ルンゼ取り付き近くに到着した。すでに辺りは明るくなっていた。

雪渓から岩場へ移る場所を探すため、我々はルンゼに突き出た雪渓に足を踏み入れていた。突き出た雪渓の右下方に取り付けそうな岩のテラスらしきものが見え、そこに向かってトラバースしていた時に事故が発生した。クライムダウンし始めた細野が、「アッ」と一声叫んだ後に雪渓上をそのままの態勢で滑落。３メー

トルほど滑った後、岩と雪渓の間の隙間・ラントクルフトに姿を消した。残された小野と井上は滑落地点の方に向かって細野の名前を呼ぶが返事はない。危険地帯にいると認識した2人は速やかにその場を離れ、改めて何度もコールするが、やはり彼の声は聞こえない。ラントクルフトに降りられる場所を探すもなかなか見つからないため、ピッケルを雪渓に突き刺し、それを支点に小野が懸垂下降。井上は、支点を保持しながら、雪渓を下から登ってくる他パーティーに大声で助けを求める。

先に降りた小野が、25メートルほど下のガレ場で細野を発見した。細野は左わき腹を上にして倒れていた。頭部に出血を確認。意識、脈、呼吸はいずれも確認できない。雪渓上にいた井上は、駆けつけてくれた東北大学のパーティーに支点の保持を任せ、懸垂下降して小野と合流。応急処置のため細野を仰向けにし、小野が心臓マッサージ、井上が人工呼吸にあたる。人工呼吸は、口から空気を吹き込もうとすると、ざっくりと切れたあごからその空気が漏れる。口の中には骨の破片や奥歯が詰まっていて、処置を一層困難なものにさせた。現場には東北大のメンバーも1人降りてきてくれていた。途中いったん脈が回復し希望を持ったが、一時的なものにすぎなかった。雪渓の下のラントクルフト内は寒く、保温のために細野にセーターをかぶせてやったが、人工呼吸の途中で彼の体に触ると驚くほど冷え切っていた。しかし救命処置は、医師や救助隊が到着するまで2時間半ほど続けた。

事故の発生時刻は5:30ごろ。現場の状況から、細野は雪渓を滑落した後、20メートルほど下の岩に一度ぶつかり、さらに5メートルほど下のガレ場に落ちたものとみられた。アイゼンやヘルメットは装着しておらず、頭や顔、特に左あごに大けがを負っていた。夏合宿ではアイゼンを履かないのが慣例となっていたが、事故直前に細野は、まだ早朝で固く凍りついている雪渓に「アイゼン無しでは怖いところだ」とつぶやいていた。

事故の報せは、他の3つのパーティーによる口伝えのリレーで警察に伝えられた。現場にいた東北大学のパーティーはトランシーバーで警察に救助要請の通報をしようとするも、不通。このため平蔵谷の出会いまで下り、そこで連絡を受けた千葉山の会ランタンのメンバーが空身で剱沢を登り、先行していた小田原クライマーズクラブのパーティーに連絡。そして小田原クライマーズクラブのメンバーが剱沢の山岳警備隊に伝えてくれた。

7:30ごろ、救急隊や医師が現場に到着し、7:50ごろスノーボードで細野を引き上げる。8:00ごろ死亡確認。遺体は平蔵谷の出合いまでそのまま搬送され、9:21に富山県警のヘリコプターに収容されて、上市方面へ向かった。

その後、小野と井上は真砂沢のベースキャンプに戻り、小野は直ちに下山。劔沢の山岳警備隊に立ち寄って警備隊員とともに室堂へ。そこで警察のマイクロバスで上市警察署へ行き、石教授と合流。その後、真敬寺でOBとも合流し、夜8時半に到着した細野家のご遺族が遺体と対面する場に立ち会った。

井上は1年生2人を待って下山を開始。1年生は小縦走先の小屋の人から遭難の報せを聞き、息を切らせて真砂沢まで戻ってきた。ベースキャンプを引き払い、その日は劔沢まで登り返して幕営。翌日室堂に下り、信濃大町経由で帰京し、細野家に向かった。

事故の主な原因は、ラントクルフトの危険性への認識不足であった。規模が大きく危険なラントクルフトがあることを認識せず、雪渓登りの延長とだけとらえていたのである。数日前に同ルートをトレースしていた他大学の山岳部は、ザイルを出し、ステップカットをしながら、実に40分をかけて岩場に取り付いていた。そういう発想を事前に持たなかった我々は、岩登りの装備は持っていても、アイゼンやスノーフルークなどの雪上支点の道具は携行していなかった。日差しが当たりづらく、大きなラントクルフトができること、夜中の降雨でさらに雪渓が凍りついているということ。こうした危険性にまったく気づいていない、未熟な登山者であった。

（井上　裕之）

1988年度　山　行　表

期　間		コ　ー　ス	メ　ン　バ　ー
1988	3.16～ 3.24	春合宿（白山、三方岩岳～大日岳）	小野、井上、細野、山内
	3.22～ 3.25	唐沢岳幕岩	鮎沢他1名
	4. 2	丹沢・大山	井上、花田、五嶋
	4. 3～ 4. 5	黒部丸山（単独）	鮎沢
	4. 9～ 4.11	尾瀬・南会津山スキー ・戸倉～鳩待峠～山ノ鼻～尾瀬ヶ原～燧ヶ岳～御池～会津駒ヶ岳～檜枝岐	小野
	4.29～ 4.30	新入生歓迎公開山行 ・奥多摩（御前山）	小野、井上、細野、内藤、・新人：柴田、坪井、岩原、信太
	5. 1	奥多摩（つづら岩）	小野、井上、細野、内藤、坪井
	5. 3～ 5. 6	槍ヶ岳北鎌尾根	小野、井上、引地（OB）
	5. 3～ 5. 5	鹿島槍ヶ岳北壁主稜	鮎沢、浅沼（東大ｽｷｰ山岳部）

期　　間		コ　ー　ス	メ　ン　バ　ー
1988	5.14～ 5.15	針葉樹会懇親山行・安達太良山	井上、細野の2名が参加
	5.25～ 5.28	甲斐駒ヶ岳赤石沢前衛Aフランケ	鮎沢、浅沼(東大スキー山岳部)
	5.31～ 6. 5	雪上訓練合宿　南アルプス　大樺沢	小野、井上、細野、内藤、岩原
	6. 4～ 6. 5	富士山吉田口	鮎沢
	6.17～ 6.18	学生部小川山集会	井上、内藤
	6.18	丹沢・水無川源次郎沢遡行	小野、坪井
	6.18～ 6.19	奥秩父縦走（甲武信岳～小川山） 小川山フリークライミング	鮎沢
	7. 1～ 7. 3	岩登り合宿（三ツ峠）	小野、井上、細野、岩原、坪井
	7. 1～ 7. 3	東北周遊 ・黒伏山南壁（敗退） ・蔵王山刈田岳 ・丸森の岩場	鮎沢、仙台山岳会の皆様
	7.20	岩登り救助訓練（日和田山）	小野、井上、細野、内藤、坪井
	8. 2～ 8. 8	黒部三部作 ・黒部別山大タテガビン南東壁スラブ状ルンゼ ・黒部丸山東壁（2ルンゼ下部、左岩稜フランケAppendix ・剱岳八ツ峰北面滝ノ谷左壁どんぐり第一ルート	鮎沢
	8. 2～ 8.13	夏合宿（剱岳・真砂沢定着）	小野(CL)、井上(SL)、細野、岩原、坪井
	9. 6～10.30	ヨセミテ・クライミング	鮎沢
	10.26～10.28	冬合宿偵察（八ヶ岳）	井上、高橋、坪井
	10.31～11. 1	春山偵察（北ア遠見尾根）	小野、内藤
	10月から11月の土、日、月	三ツ峠岩登り山行	外池、井上、高橋
	11.27	八ヶ岳広河原沢第３ルンゼ	鮎沢
	12. 3～12. 4	甲斐駒ヶ岳黄蓮谷右俣	鮎沢
	12.10～12.11	八ヶ岳（ジョーゴ沢、大同心）	井上、学生部8名
	12.11～12.12	甲斐駒ヶ岳摩利支天Ｓ状ルンゼ	鮎沢
	12.14～12.15	八ヶ岳大同心雲稜ルート（敗退）	井上、内藤
	12.19～12.24	冬合宿（赤岳鉱泉定着、北八ヶ岳～南八ヶ岳縦走）	小野(CL)、井上(SL)、高橋、内藤、岩原、坪井
	12.21～12.23	仙丈岳岳沢	鮎沢
	12.30～ 1. 2	穂高岳屏風岩東壁「トリプル・ジョーカー」	鮎沢、浅沼(東大スキー山岳部)
1989	1. 5～ 1. 6	八ヶ岳広河原沢（敗退）	井上、学生部3名
	1.15～ 1.16	唐沢岳幕岩（敗退）	鮎沢、内藤
	1.21～ 1.22	八ヶ岳大同心雲稜ルート雪辱戦(敗退)	井上、恩田(日獣)
	1.28～ 1.29	八ヶ岳広河原沢三ルンゼ～ジョーゴ沢継続	井上、学生部2名
	2. 7～ 2. 9	甲斐駒ヶ岳尾白川西坊主ノ沢	鮎沢
	2.12～ 3.27	ネパール・ヒマラヤ　クスム・カングル峰北稜	井上、学生部5名
	3. 9～ 3.11	プレ春合宿（八ヶ岳赤岳鉱泉）	内藤、坪井、鈴木
	3.12～ 3.13	谷川岳一ノ倉沢右壁左方ルンゼ・二ノ沢　右壁	鮎沢、浅沼(東大スキー山岳部)
	3.18～ 3.21	鹿島槍ヶ岳北壁蝶型氷のリボン	鮎沢、神沢(東大スキー山岳部)

1989

部長　石　　弘光教授
（年度中に退任）
部員
４年　井上　裕之(CL)
３年　山内　　太
　　内藤　久裕(SL)
２年　坪井　　充
１年　天羽　康之
　　古田　　茂
針葉樹会学生担当幹事
　　加藤　博行
　　岡部　晃和
　　齋藤　　誠

活動概況

昨年度に引き続き、部員の転落事故が起き、夏から半年間、部の登山活動が停止した年度となった。

去年の死亡事故以降、レベルを下げ基本に立ち戻って活動を続けていたことから、１９８９年度は事故以前のレベルに戻していこうという状況にあった。部員構成は、鮎沢と小野らが正式に部を退いたが、留学のため１年間休部していた山内が戻った。５～７月には、まだ正式に入部していない新人２人を、上級生やＯＢがゲレンデや沢登りに連れて行き、正式な入部を受けて７月後半にようやく北岳大樺沢で雪訓合宿を実施した。この時は雪渓上の小さなクレバスに落ちて足首を骨折した女性登山者の救助にもあたり、雪上搬送を実体験する貴重な場ともなった。

この合宿後半、内藤と坪井の２人が居残ってバットレス４尾根を登攀、その足で小川山に行くが、ここで事故が起きる。７月27日、内藤が坪井の確保のもと、妹岩のクラックルート「カサブランカ」をフリーでクライミング中に核心部周辺で落ち、途中にセットした支点（フレンズ）が３つ抜けて、約15メートル下の地面まで墜落したのである（詳細は事故報告書参照）。内藤は背骨や腰骨など５か所を骨折する全治２か月の大けがで、幸いにも心配された後遺症は残らず退院に至ったが、ご家族はもちろん、他団体や大学、ＯＢに多大なるご迷惑をかけた。２人は岩登りに熱を入れており雪上訓練前もゲレンデに通いつめていた。９月には北米ヨセミテの登攀を計画中で、事故はその練習中に起きた。部は１年足らずで再び重大な事故を起こしてしまい、８月に予定されていた北海道での夏合宿（十勝・大雪の沢登り・縦走）は中止となる。

前年度の死亡事故を受けて、山岳部は「個人の志向を尊重し、合宿への参加を強制しない」という方針を進めてきた。当時はＯＢ（学生担当幹事ではない。このあと出てくる「ＯＢ」も、必ずしも学生担当幹事ではない）からも「個人の自由な山登りを追求するほうが事故は減るのでは」という示唆をもらっていた。しかしそれを推し進めた結果、登攀に傾倒して事故に至った

と解釈され、この方針はここでとん挫する。このあと半年間、部は登山活動を停止する。

当時の部の状況は、ＯＢ側からの視点では、針葉樹会報第74号に詳しい。「現在（筆者注・89年末）の山岳部は10月に出された石部長の方針に従い、『ある一定の期間が過ぎるまでは部としての山岳活動を禁止』している状態」とある。同号で石部長は「この何年も考えて来た事であるが、今の実態は目に余る」と部を評し、「技術・装備の革新による山岳部の存在意義の低下」「学生気質の変化（個人中心の時代、山以外の楽しみが増えた）」「部員の少数化」「実力の低下、将来事故の再発は確実」「他大学で発生している遭難者遺族による大学提訴」などの問題点を挙げている。またＯＢからは「昨年の事故以来、安全な山登りについて現役の間で相当議論があったようだが、その結果が垂直の岩登りにつながったのは驚いた」という意見も出され、反省の方向性にミスがあった可能性を指摘していた。

では現役部員側からの視点ではどうだったか。手元には、井上の筆による当時の部内の議論をまとめた「報告文」とみられる資料が二つ残っている。

一つ目の「今後の山岳部部活動について」という資料では、今後行うこととして、「今回の遭難に対する反省」「遭難に関する勉強会」「遭難文庫の一層の充実」などを挙げる。また「責任体制の問題　親に一筆入れてもらう必要があればそのような体制にしてゆきたいし、その必要もあると考えている」「コーチを雇うという提案　理由：技術を一定レベルに保つ／一緒に山に入ってもらうことによって、1．安全確保、2．部の実力把握（ＯＢの代わりのチェック機能として）などという提案も書かれている。そして、まだこの時点では活動が続けられると思っていたのか、秋から冬にかけての希望山行スケジュールが記されているほか、来年度の新入生の勧誘については「井上、山内などは、あまり乗り気ではない。今の部の体制では新入生は入れない方がいいと思っている」とある。

一方、二つ目の「部活動　現在までの経過説明」という資料では、昨夏の事故以来活動レベルを下げ、安全に気を配っていたにもかかわらず再び事故が起きたことを受け、「個の意向を尊重してゆこうとする活動方針に疑問が持たれ、いわゆる合宿制（全員参加を原則とする）の復活などがとりあげられ、それに限っては部員内では全員が納得した」とある。しかし、「安全面」については、今後部が存続すれば、構造的には次のような問題が残ると指摘している。

・指導者の不在　少数化や「4年間」という制限から、常に未熟な上級生が指導者となる。また若手ＯＢも忙

しく指導者としての役を果たせず（たとえ一緒に行っても現役のリーダー以上の実力を維持しきれていない）、危険である。他の大学をみると、ＯＢにかなりしっかりした指導者がついているケースが多い。なんといってもこの問題が一番重要視される。やたらに部を存続させることは、また事故者を生産することになりかねない。

・救助体制　今までも自転車操業であった。全員で山に入っていたら、救助に行く者はいないことになる。

・山行レベル　一時的に下げても、いずれ上げたくなるものだ。

資料ではさらに、次のようにある。「現在、（中略）、形式的には全員退部している。部に所属したままで山に行くことはいろいろな点で部に迷惑がかかるし、逆に自由な登山が束縛されるという欠点もあったからと考えられる。『反省もしないで…』とＯＢから批判されるかもしれないが、直接的な『フレンズのセット』の問題以外、一体何を反省すればいいのか、また、部の再開の見通しも全く立たない現在、それほど『部の存続』に未来をかけられない、等の思いがあったと思われる」。この意見は、社会人から見れば独善的で無責任と映るであろう。しかし当事者からすれば、丸一年可能な限りの「反省」や「遭難の勉強」をしてきた末に、「部に居残って登山を断念するか、山に行くために退部するか」という問いを突き付けられた状況である。レーゾン・デートル（＝存在証明）の賭かった追い詰められた状況下で苦肉の策を見いだそうとする部員たちの姿がここに見える。

部誌に至っては、さらに苦しい議論が続く。退部した形で個人山行に行く者への批判、部を辞めることにＯＢから強く反対されている現実、ＯＢの反対から自分たち自身で部に幕引きができないことへの苛立ち、登山行為を管理するという考えへの不満、責任を取りたくても取れない学生というふがいなさ、などの意見が交錯している。非難、自己批判、開き直り、不安などを表すことばが渦巻き、前年から続く部のあり方をめぐる議論は飽和点に達していた。11月17日には「本日における部についてのコンセンサス」として、「解散する。理由・危険のチェック機能・遭難時における救助体制の２点で、立て直しが難しい」とあり、「解散」という一定の結論を出した。

11月23日、ＯＢ側からの提案で、部室で食事をしながらＯＢらとともに部のあり方について話し合う場が設けられた。この場で現役部員側は、これまでの議論の経過や各種提案を述べたうえで、最終的に部を解散したいという旨を伝えた。しかしその意向はＯＢ側には歯牙にもかけられず、かといっ

て特段の解決策は示されないまま、改めて活動停止を言い渡された。山内の残した論考（１９９４年ごろに部誌に載せられた「一橋山岳部の可能性と限界」という文章）によれば「針葉樹会の命令もあって部は強制的に来春までの休部期間に入る」と伝えている。

資料にところどころ表れているが、現役側はＯＢ側の対応に違和感を覚えていた。もちろん、平時の登山や事故の際にも面倒を見てくれた大勢のＯＢに、個人的にはみなが感謝していた。しかし（他大学のように）山行指導で合宿に同行するわけでなく、コーチ導入などの提案も実現しない。構造的な危険が続くので部を存続させたくない、という生真面目な意見もあいまいにされる。当時、特に違和感が強かったのは、部の存続のために新入部員を早く入れるよう強く要請される点であった（これには上記会報の「石井会長と石部長との対談メモ」でも一部重なる指摘がある）。前年に死亡事故を起こし、不備な体制と自覚していながら無理な勧誘をして、後に事故に遭わせてしまったら、部員の自責の念は一生消えまい。「いったい誰のために部はあるのか」との疑問が消えなかった。こうした違和感は、ＯＢ側にも伝わったのであろう。部員の個人宛てに「君たちには針葉樹会に入ってほしくない」というＦＡＸを送ってくるＯＢもいた。根本的な問題を解決しないままの状態が、関係を悪化させていた時期であった。

登山活動停止の状態の間も、部会だけは開いていた。どうしても登山を続けたい者は、社会人山岳会に所属し、その肩書で続けた。触れておきたいのが、日本山岳会学生部が主催した「遭難討論会」である。10月25、26日の２日間、都内の７つの大学山岳部の学生たちが集い、自分たちの遭難体験を報告し合い、意見を交わした。各大学が高い関心を示したこの討論会は、一橋の発案で行われたのである。

半年間の活動停止を経て、部の登山活動が再開するのは翌１９９０年２月である。３年生の山内をリーダーとして、坪井、天羽、古田らが八海山登山を皮切りに活動をスタート。このころには細野君の追悼集も完成した。しかし３年生１人が年度いっぱいで部を退く。井上は卒業前に、上智大学山岳部の学生とメキシコの２つの５０００ｍ峰に登るが、山岳部ではなく社会人山岳会の肩書で行った。

また、山内の残した論考によれば、この年度中に石部長が部長職を退き、それと同時に大学体育会から脱退し任意団体となったようであるが、日にち等は不明である。

（井上　裕之）

春合宿（遠見尾根―五龍岳―唐松岳―八方尾根）

【参加メンバー】小野、内藤、坪井

【期間】１９８９年３月16日～21日

３月16日（晴のち曇のち雪）

五竜遠見スキー場発(8:00)―大遠見ＴＳ(15:00)

スキーヤーで賑わうスキー場を坪足で横断する。地蔵の頭からは昨日まで降り続いた雪のためしんどいラッセルとなる。小遠見をすぎたあたりから天気が崩れ出し、中遠見辺りで完全にガスる。大遠見のピークとおもわれるところで幕営する。

３月17日（晴）

結果的には、この日行動すべきであった。我々は、前日かなりの雪が降ったため、この日行動を見合わせた。そしてＢＣを西遠見手前まで持っていくだけにした。

３月18日（大雪）

昨日とはうってかわった雪で、２時間ごとにテントの雪掻きをしなければならない。１日中沈。

３月19日（大雪）

沈。

３月20日（雪）

沈。午後になると雪もおさまってきた。明日の行動を話し合っていると、ラジオから遠見尾根で雪崩があり１名が死亡したというニュースがはいってきた。それを聞いて我々は完全にビビリ、下山を決める。

３月21日（晴）

下山。13:00 五竜遠見スキー場着。



1989年度　山　行　表

この年度は７月の事故で部活動が停止し、報告書が作られなかった。このため特に前半は記録が散逸している。今回、部誌や個人の記憶などから拾い集めたが特に個人の記憶はあいまいであることは否めない。また、夏の事故から翌年１月までは、部としての登山活動はしておらず、仮に個々人が山に登っていても部としての活動ではないため記さない　　（井上　裕之）

期　　間		コ　ー　ス	メ　ン　バ　ー
1989	3.16～ 3.21	春合宿（遠見尾根）	小野、内藤、坪井
	5.上	ゲレンデ岩登り訓練、沢登り（小川山）	内藤、坪井
	5.	奥多摩・海沢	山内、古田、OB(川名)
	5.	奥多摩・鷹巣谷	山内、天羽
	6.	越沢バットレス	坪井他
	6.	野呂川シレイ沢	坪井、古田、OB(前神、近藤、鮎沢)
	7. 1～ 7. 2	小川山クライミング	内藤、OB(近藤、齋藤)
	7. 5	岩登り初級講習会（日和田）	井上、内藤、山内、坪井、天羽
	7.	巻機山（米子沢）	山内、古田
	7.19	日和田	井上、内藤、坪井
	7.22～ 7.25	大樺沢雪訓、バットレス第4尾根	井上、内藤、山内、坪井、天羽、古田
	7.26～ 7.27	小川山クライミング	内藤、坪井
1990	2.15～ 2.18	八海山	山内、古田
	2.27～ 2.28	奥志賀高原山スキー山行	山内(CL)、坪井(SL)、天羽
	3.10～ 3.11	奥多摩（雲取山）	坪井、天羽
	3.30～ 4. 2	越後駒ヶ岳、中の岳、往復	古田
	3.	メキシコ　ポポカテペトル、ピコ・デ・オリサバ	井上、恩田(上智大)



山岳部の遭難事故と大学の姿勢

石　弘光（昭和36年卒）

大学山岳部の最盛期は、おそらく1950年代後半から10年間ぐらいであったろう。夏山シーズンになると全国から大学山岳部が北アルプスに押し寄せ、穂高の涸沢や剱の剱沢に一大テント村が出現した。また槍―剱、後立山などの主要な縦走路には、超特大のキスリングを背負った30～40名程度の部員からなる山岳部の一行が、一般の登山客の注目を浴びつつ通過したものだ。有力な大学山岳部の中には、登攀技術が卓越した部も多く、未踏ルートの初登攀も、先鋭的な街の山岳会と競っていた時代でもある。

わが一橋山岳部も、戦後の黄金時代を迎えていたように思う。私は1957年に入部したが（ヤロー会の一員）、そのころ山岳部にまだ甘利仁朗さんや中村保さんなど在籍しておられ、初登攀なども視野にいれ、部全体が大いに盛り上がっていた。入部を希望する新人も多く、私の最初に参加した1957年夏合宿には、新人が20名近くいたはずである。合宿には全体で、40名以上の参加者がいたと思う。当時山岳部しか存在してなかったこともあり、今日のワンダーフォーゲル部や山友会に所属し登山を鍛錬の場より純粋に楽しみたいという学生も、山岳部に大勢加わっていた。

当時、一橋山岳部は遭難事故のない大学山岳部として世間から評価されていたと思う。事実、私自身、山岳部へ入部するといったら両親から山での遭難事故を心配され反対されたが、一橋山岳部は殆ど事故を起こしておらず全然心配ないよと、説得し了解を取ったことを思い出す。1948年に谷川岳マチガ沢で山中健雄氏が遭難死されたが、その頃それが唯一つの例外的な事件とされていた。

往々にして事故は、活動がピークをすぎ下り坂に入った頃から始まるものだ。一橋山岳部もこの例外ではなかった。大人数で実力をもっていた部員を輩出していたヤロー会の卒業後、山岳部員の数も減り活動の範囲も次第に縮小せざるを得なくなってきた。そのような時期に1962年夏合宿で名和泰三君が滝谷第4尾根登攀中に滑落、瀕死の重傷をおうという事故が発生した。死亡事故にはいたらなかったが、名和君の後遺症は重くその後も重度の身障者として人生を送っておられるのを見ると当時の関係者として胸が痛んでくる。

その後山岳部の部員数は増えず、長期的には減少の方向をたどっていった。最も参加人数が多い夏合宿でさえ、次第に参加者は減り1970年あたりから20名以下となり、1980年代に入ると10名前後あるいはそれ以下というのが常態化してきた。時代は急速

に変化していた。大学に入り山岳部で青春をかけ、厳しい山登りに耐えようとする学生の数も激減していった。一橋においてもワンゲル部が山好きな男女の学生を多く集め、山岳部よりはるかに人気を博していくようになった。危険視された岩登りと冬山をしないというのが遭難とは無縁で、楽しくピークハンティングをするイメージであった。

更には山をもっと楽しく登ろうという山友会も誕生、もっと多くの学生が入部し活発な活動を行うようになってきた。われわれヤロー会がいた頃、山岳部はワンゲル部や山友会などで山を楽しく登ろうとしていた学生を多く吸収していた。事実、3、4年部員になっても合宿中に岩登りをしない、かつ4年間雪山はいかないという部員も存在していた。

社会的に登山を取り巻く環境が、次第に便利にかつ安易になってきた。登山装備、山頂までのアクセス、簡便的な食料・燃料の発達など、どれをとっても「厳しく鍛錬」より「楽しく登山」をする条件が整ってきた。そして若者にとって、登山以外にも学生時代に数々の楽しい生活ができるようになっていた。どこの大学の山岳部でも、この社会的環境に抗すべくもなく、部員の数は減少を続けていた。大学山岳部の名門である早大、明大、日大ですら、数人の部員しかいないと聞くほどになっていた。一橋山岳部も、この例外ではなかったといえよう。

このような状況の中で、悲惨な遭難事故が、一橋山岳部を見舞うことになる。名和君の遭難事故以来、何件かの事故は起こったがいずれも転落、骨折程度ですみ、それほど大事にはいたらなかった。しかし1968年の鹿島槍天狗尾根での滑落遭難死は、山中氏以来20年ぶりの死亡事故であった。その頃、一橋大学で専任講師として教壇に立っていた私は、真っ先に遭難現場の拠点信濃大町に駆けつけ、遺族が来られてから対面、大学側を代表してお詫びするという役割を担うことになった。その時は、ヤロー会で私の同期の中島寛君がリーダーとなって、迅速に現場に駆けつけ遺体を収容するという大変困難な仕事にあたってくれた。その他、多くの若手OBが仕事を休んで、収容作業に当たってくれた。

新潟から駆けつけてきた中村君のご両親、ご姉弟もわれわれのこのような献身的な貢献をみて、山岳部で過ごした亡き息子は本当に幸せであったと悲しみを耐え、打ちひしがれていたわれわれをかえって慰めてくれたほどである。しかしながら足の悪い老齢の母上が遭難現場により近くに行きたいというので、大谷原にお連れした時に、天狗尾根の方角をみて、「慎ちゃん、慎ちゃん」と泣きながら叫んだ声が、今でも耳に残っている。

この遭難事件には、後日談がある。中村さんのご両親から姉の昭子さんを是非、山岳部の方と結婚させたいとと強い希望が出され、山田亮三さんのご尽力もありわが友人の中島寛と結婚することになった。中島亡きあともいまなおわれわれヤロー会のメンバーは、中島昭子さんとのお付き合いを続けている。

その後も一橋山岳部は、遭難事故死と向き合わねばならなかった。１９７０年夏に当時２年部員であった橋本明君が、甲斐駒黄蓮谷中央壁で墜落死という痛ましい事故が発生した。その時も橋本君のお父上を、あの厳しい黒戸尾根から現場までお連れしたが本当に気丈に耐えておられたと思う。８合目の小屋の近くで、薪を積んで荼毘に付すという仕事もやったが悲しい思い出であった。

その後、小さな事故があったが、遭難死に繋がるものは10年ほどなかったが、１９８１年夏にインドヒマラヤのホワイトセール峰に遠征していた中村宣幸、土方浩、萬濃英士の三君が雪崩にのまれ行方不明という事故が起こった。遺体はいまなお、見つかっていない悲惨な遭難事故であった。個人的に土方君のお父上を存じ上げていただけに、その悲しみに打ちひしがれる姿を見るに忍びなかった。

これで終わりにして欲しいと思っていたが、１９８８年の夏合宿で剱岳の源次郎尾根平蔵谷中央ルンゼルート取り付き付近の雪渓で、細野伸二君が滑落遭難死という痛ましい事故が発生した。すぐさま現場の近く上市に直行したが、そこのお寺では安置された遺体と悲しい対面をした。お盆の最盛期で混乱のピークの中を埼玉から車で駆けつけた細野君のお母さんは、シュルンドの中で冷たくなった細野君をさすり「さぞ寒かったろう、温かいお家に帰ろう」と悲痛な声を上げられていた。

この件で、ご迷惑をお掛けした上市警察に大学を代表してご挨拶に行ったときに、担当の警部から「一橋まで入ってこれからというのに、何たることだ。社会的に大きな損失だ」と直接に大学を非難されなかったが、学生の指導という点で強い叱責調の挨拶をいただいた。従来なかった世間からの視点からの非難を、私は甘受せざるをえなかった。

その頃より私は山岳部ＯＢという立場より、一橋大学の教育を預かる教師として部活動における学生の安全を守るのが大学の社会的使命であり、保護者に対する責任であると考えるようになった。折しも一橋大学の端艇部、空手部などで、合宿中に事故が発生し部員が死亡するという事件が起こった。大学が正規に認めている運動部の活動で生じた死亡事故ということで、当然大学の責任も社会的に問われる事態になっていた。

いまこのような事件が生じれば、現在の社会的風潮から、訴訟になることは避けられない。実際、一橋でもある事件の時に訴訟の動きもあったようだが、当時の学長が大学を代表し遺族に対し誠心誠意お詫びするという態度をとったこともあり、なんとか大きな事件にはならないで済んだという経緯もあった。

私は、死亡事故が他の運動部より発生する確率が圧倒的に高い山岳部において、大学の社会的責任といった角度から真剣に悩むことになった。われわれの時代のように部員が40人近くもおり上級生から下級生へ、先輩から後輩へ技術の伝承が確実に伝えられる状況なら、まだ山岳部の活動を擁護できたと思う。しかながら実際に活動する部員が数人程度にまでなってしまった現状を見るにつけ、部活動は危険だと判断せざるをえなくなった。

それなのに現役部員は、山の良さを説き楽しい部生活を宣伝しては、部員を増やそうと新入部員の勧誘に一生懸命であった。山登りの経験も浅く技術的の未熟な上級部員が数人いるだけの山岳部では、当時山岳部長として、人命のことを考えると到底部活動を容認するわけにはいかなかった。私の耳には、かつて山で逝った中村慎一郎君、橋本明君、細野伸二君の母上の悲痛な叫びがいつも残っていた。

一橋大学の運動部のなかで山岳部は端艇部とならんで、元部員つまり一橋の教授陣から「自前」の部長を育てた数少ない部であった。私の前に山岳部長になっていただいたのは、関恒義、勝田有恒、南亮進の三教授であった。何れの時期にも、大なり小なり遭難事故が起こりＯＢとしまた大学を代表し、献身的に事故の収拾に当たってくれていた。われわれ山岳部ＯＢの部長４人がいたからこそ、いくつかの遭難事故死の場合も大学と遺族の間に入って、何とか事態を処理できたと思っている。

１９８９年の細野君の遭難死後、また内藤君の転落事故が起こり、それを契機に事故の再発を心配された当時の学生部長から、山岳部の活動について責任が持てるか相談を受けたことがある。私自身、学生の身の安全を第一義と考えねばならない大学として、山岳部はもはや正規の運動部に位置づけるのは無理と判断せざるを得なかった。

と同時に、その頃より合宿中に飲酒が公然と行われていることを知り、愕然とした。三度の飯を山で食べるということから、日常生活を持ち込みアルコールに手が伸びることもあり得ようが、いやしくも心身の鍛錬に行く合宿の最中に飲酒はあり得ない。われわれの世代が現役で合宿をしていた時に、考えられない事態であった。他の運動部でも、合宿中は禁酒が当然のルールであった。この点、学生を呼んで厳し

く悪習を止めるように指導したが、どうも完全に治っているようではなかった。

このようなこともあり、１９８９年10月に学生部長とも相談し、山岳部を当分の間休部とした。その時の大学側の考えでは大切な子弟を預かる大学として、その教育の一環として山岳部を、正式な機関である運動部と認めるのは困難だとの判断があった。かくして具体的には、体育会運動部からその籍を離脱することになった。その後は山好きの学生が個人の資格で集まり山岳部として山行を続けている。大学として正式に認知し、その活動に責任をもつ山岳部の正規な活動ではなくなり、今日にいたっている。この意味では一橋山岳部自体、制度的には消滅したと見做すべきであろう。

（２０１２年５月29日記）



『針葉樹』第13～14号より

1990

部長
部員
４年　山内　太(CL)
３年　坪井　充
２年　天羽　康之
　　古田　茂
　　田形　祐樹
　　（再入部）
　　又賀建太郎
　　(入部しその後退部)
針葉樹会学生担当幹事
　　西牟田伸一
　　齋藤　誠
　　五ヶ山　淳

活動概況

前々年、前年と2年続けて事故が発生したこと、これに伴う公式山行の休止や部員数の減少により技術継承に空白が生じたことなどの事情から、１９９０年度の活動は、今後の山岳部のあり方や大学との関係について検討を迫られる中での活動となった。

そうした中、目標を高めに設定し、それに向けて自ら技術を獲得していこうとする試行錯誤的な活動が多くなったが、振り返ってみれば、何かに追い立てられるように少しずつ無理を重ねていたところもあったように思われる。

この年は、新入部員ゼロでスタートしたが、６月ころ、昨年いったん退部した田形が再入部し、７月ころには又賀が入部し、同級生が４人となったことから部内に活気が生まれた。

上半期は、北アルプス双六谷から始まる夏合宿に備え、沢登りに行くことが多くなった。ボルトを打った経験も渡渉の経験もなかったため、鳩ノ巣渓谷で河原の岩にボルトを打ってみたり、釣り人の顰蹙を顧みずに渡渉を繰り返した。また、大源太沢から湯桧曽本谷への継続遡行も沢に慣れるための試行錯誤の一つであった。

夏合宿にはテントを持参せず、ツエルトのみを携行した。大渓谷である双六谷から黒部川源流に継続し、最後に屈指の美渓赤木沢を遡行し、剱岳に向かって縦走した。初めての大渓谷で流れに飛び込み、豪快な焚き火を囲み、河原に寝っ転がる愉しさを知ったが、後半、台風が直撃し、我らがツエルトはあっさり水没したのであった。剱岳にて、一昨年に平蔵谷で亡くなった細野伸二さんのご遺族と追悼山行を行った。

下半期は、冬合宿の目標を燕岳から蝶ヶ岳へ、春合宿の目標を親不知から白馬岳への縦走に置き、偵察山行、雪上訓練などの準備を重ねた。

冬合宿の偵察には山内、田形が、春合宿の偵察には、天羽、古田（山内も合流予定）が参加した。また、冬合宿では、ツエルトビバークの訓練も行った。いずれも、これまで行われてきたことであるが、上級生が１人しかいない上、前年の活動自粛のため下級生部

員にとっては初めての経験であり、これまた試行錯誤の連続であった。そうした中、春合宿の偵察山行で遭難騒ぎを起こしてしまった。親不知からの先発隊と白馬岳からの後発隊が白馬岳で合流する計画で入山したところ、後発隊の入山遅れと悪天候のために合流できず、先発隊が先に下山してしまったのであった。計画自体に無理があったことに加え、不測の事態への対処という点で未熟であったことが原因であり、目標に経験・技術がついていかないことによるひずみが生じ始めていた。

冬合宿（燕岳から蝶ヶ岳へ）は、露天風呂から追い出した猿に装備を盗まれるという愉快な体験からスタートした。この山行は、天候にも恵まれ、表銀座の絶景を前に冬山の魅力を存分に味わうことができた。

しかし、一方で、今考えて見れば実力以上の目標であった春合宿の準備に向けて背伸びをする山行が続いており、そのひずみは2月の八ヶ岳天狗尾根でのプレ春合宿で、ついにごまかしきれないものとなった。あいにくの悪天候の中、技術的なばらつきもさることながら、心理的に余裕のない中で挑んだ雪稜を前に、技術より大切な部員間の一体感、信頼感が損なわれ始めていることが分かり、春合宿は中止となった。

この1年間は、各部員にとって、未経験の分野を前にした試行錯誤の積み重ねであり、その経験は、いかなる状況でも動揺しない強さを与えてくれたと思う。しかし、他方で、そうした試行錯誤は、特に新入部員にとっては高すぎる要求水準となっていたようである。自分たちの実力を冷静に見極め、あせらずに経験を積み重ねることが必要だったと思う。そして、そうした反省は、翌年度から生かされていったように思う。

（古田　茂）

八海山

【参加メンバー】山内、古田

【期間】１９９０年2月15日～18日

2月15日

大宮(20:54)―水上

低気圧の接近により出発を予定より半日遅らす。

2月16日（雨のち雪）

水上―八色―里宮(8:32 発)―霊泉小屋(11:38)―ロープウェイ山頂駅付近幕営(14:40)

天気は当初雨だったが山に登るにつれて湿雪に変わっていった。1週間前の大雨で雪はもう締まって来ているが中途半端で重い。尾根に取り付くまではかなりの急登、木が多い所は登りにくい。ワカンが威力を発揮する。10:05岳峡山荘、二万五千図には載っていない小屋なので霊泉かと思ったが甘い考えであった。10人ぐらいは泊まれる。

この辺から尾根になる。霊泉小屋から2時間弱で1120m付近、スキー場の音楽が聞こえてくる。ラッセルラッセルでここまで来た我々にとっては嬉しいような腹立たしいような気持ちになる。この辺の尾根は北斜面は中々スパッといっているので南斜面づたいに行く。ロープウェイ山頂駅付近に六角堂の作りかけのような物体が立っているのでこの陰にツェルトを張る。なぜかツェルトはかまぼこ形になった。ちょうどあの五月のコイノボリのようになったのである。寒い。

2月17日（一日中ガスと雪）

起床(5:00)、出発(7:40)―池の峰直下(9:20)―女人堂手前(10:30)―女人堂付近(12:06)頃薬師岳直下幕営(14:30)

朝起きると外は一面のガス。しばらく様子をみる。7:40状況は全く変わらないがとりあえず出発。広い尾根だが幸いトレースや赤布がたまにある。池の峰あたりは広過ぎて全然分らない。上へ上へと行くうちに巻くべき山頂（その先は何もない）に来てしまい少々戻ってコースを正す。女人堂手前はなかなかの急登、雪の状態によっては酷そう。そして直下（女人堂の）は岩っぽい地形に雪庇状の雪壁。ガスであたりの状況が分らず足下も余り良くない気がしたのでこの辺はザイルを出した。山内さんが雪庇状の雪壁を切り崩しながら登って行く。この辺からどこぞの会の連中がスキーを持っていながらひたすら我々のトレースの後をついてくる。女人堂を過ぎ途中斜面が広くなり急登。その後突然樹林がなくなり視界もガスのためゼロ。ここは薬師岳直下、浅草岳というものはないものと思って行動してよい。斜面に苦闘二時間なかなかの雪洞を掘る。ツェルトよりははるかに快適。（女人堂付近帰りのザイルは必要なかった）

2月18日（ガスのち晴）

幕営地発(6:40 ガス)―薬師岳山頂(7:15 晴)―八ツ峰直前までピストン―薬師岳山頂(9:00)―下山（スキー場上12:00頃、スキー場下12:30頃）

朝はガス、天気図によれば晴れる筈と出発。薬師上部はアイゼンを使った。山頂でドンピシャリ一気に晴れる。八ツ峰、巻機山方面魚沼平野何でも見えた。ここから先はザイルが必要。薬師岳の先へは雪庇を飛び降りるようにして降りる。2段になった雪庇で上2m下10mぐらい。降りると千本檜小屋は目と鼻の先、雪はクラストしていてアイゼン要。化け物の様な岩に触れて感激。しかしここを先に行くとなると一体どこをどう行くのか全然判らない。帰りは晴れているので快適。スキーがあればもっと快適であろう。

試験明けの身体にはややつらい山行

となったが、久々の越後の雪山とあって心は晴れた。とは言っても、例年に比べて（昔と比べ）雪は少なく、おまけに初日は雨まで降るという異常の中で、新スキー場上までは問題なくこなす。２日目、天候は雪・ガスであったが。我々の武器・篠竹をフルに活用し前進していく。ガスのため距離感はかなりにぶる。御堂の直前で、２ピッチほどザイルを出した他、問題はなく薬師岳手前まで行き、雪洞を掘り、夜を過ごす。（この時点では場所を完全に理解していなかった。）３日目、薬師岳山頂にて天候は回復し、快晴の中千本檜小屋への飛び降りも快適に楽しみ、アイゼンの練習をかねて岩峰帯まで行き、引き返す。前日のルートファインディングの完璧さには感激してしまった。内容的には、初歩的雪山での道具ほぼ全てを使用出来たことが、少雪という条件を上回る満足を与えてくれた。

６月～８月の部活動について

近年の部員不足の中、伝統的な技術の伝承が非常に困難になってきた。これを構造的な問題と受け止め、活動内容にも自ずと制約がつく。

この様な認識の下で、学校側と話し合った結果、今夏までを一つの実験期間とし、その間部員を募集し、やる気のある人間がどれほど存在するのかを確認することとなった。仮に、技術伝承が行えないような構成メンバーになれば、改めてその現実に適合した新たな登山様式に移行しなければならない。しかし、様式が変わろうと、登山である限り基本的姿勢は変わるものであってはいけない。あくまで安全な登山を行うための新様式でなければならない。

夏合宿前半（金木戸川～黒部乗越～黒部源流～薬師峠～立山～剱沢）

【参加メンバー】山内、古田、天羽、田形

【期間】１９９０年８月２日～10日

８月２日（晴）

駅出発(5:00　タクシー)―車止め(5:55)―小倉谷出合橋(8:40)―打込谷手前(15:15)

最高の天気の中、出発する。最初の林道から田形が遅れる。なぜかこの日が沢の中で一番大変であった。

８月３日（晴）

起床(4:30)、出発(5:30)―打込谷出合(5:35)―下抜戸広河原(10:15)―蓮華谷出合(13:50)

本日が双六谷のメインと思っていたがキンチヂミはチヂムどころかたるんでしまうような所だった。何と言っても、この日のニュースはビバーク地に着いてから、田形が消えたことである。

8月4日（晴）
起床(4:00)、出発(5:00)―九郎右衛門谷出合(5:50)―滝上(8:00)―五郎平(10:25)―黒部源流(13:00)
イワナがたくさんいたのだが全く相手にしてもらえなかった。



1990年8月　薬師岳にて
前列左から 天羽、山内　後列左から 古田、田形

8月5日（晴）
起床(4:00)、出発(4:55)―雲の平(7:50)―高天原(10:45)―温泉マーク(11:30)―岩苔小谷―黒部川(14:00)―立石奇岩(16:00)
谷間から、雲の平に出て視界が広がり、気分が良い。温泉も最高だった。ただし、温泉に入ったせいか、その後疲れがどっと出てしまった。

8月6日（曇一時にわか雨）
起床(4:00)、出発(5:15)―薬師沢出合(8:15)―赤木沢出合(9:30)―大滝(11:40)―太郎平小屋(15:15)―薬師峠(16:00)
最後の沢となった赤木沢を抜け、みんなで靴をはき換えている途中で雨が降り出した。雷が鳴っていたので、少し上でしばらく待機。ここまでは大変天候に恵まれた。

8月7日（晴）
起床(3:30)、出発(4:45)―薬師岳(6:37)―スゴ小屋(9:40)―五色山荘(15:25)

8月8日（晴）
起床(3:30)、出発(4:40)―五色山荘(5:00)―一ノ越(8:20)―立山雄山(9:20)―剱沢(12:00)
やっと着いた。

8月9日（曇のち雨）
本日、休息日。
（山内）近場の散歩　（古田）大日岳（天羽）奥大日岳（田形）テントにしがみついて離れなかった。

8月10日（暴風雨）
台風がやって来たので、すごい雨だった。人間は雨でぐしょぐしょに濡れて体中がふやけても眠れることが分る。

夏合宿後半（剱岳・細野　伸二君追悼山行）

8月11日（霧）
剱沢―室堂―剱沢
夏合宿前半を無事に終え、細野家と室堂にて落ち合う。その他、石元部長、西牟田、齋藤、井上OB、坪井、又賀も参加し、剱沢キャンプ場にて談笑する。

8月12日（晴）
①剱沢―平蔵谷現場手前―剱沢―室堂
②剱沢―本峰―剱沢
③剱沢―室堂
①細野克宏、亜紀子、西牟田、齋藤、井上、山内
②坪井、古田、天羽、田形、又賀
③山内他部員と細野家両氏
1988年夏遭難した細野伸二君の追悼で平蔵谷に向かうが、寡雪ということもあり途中クレバスが形成されて、結局現場までは全員行けなくなる。改めて夏の雪渓処理の難しさを知り、2度とこの様な事故は起こしてはならぬと心に決める。また、夏であれ必要な時はアイゼンを使用し安全度を高めることが求められる。本当の意味で、各自が人生、登山生活の意味を考えねばならない。

冬合宿（燕岳～大天井岳～常念岳～蝶ケ岳～鍋冠山）

【参加メンバー】山内（CL）、古田（SL）、天羽

【期間】1990年12月15日～20日

12月15日（雪）
中房温泉へ入山。露天温泉にてくつろぐ。

12月16日（晴のち雪）
出発（7:00）―合戦小屋（11:00）―燕山荘付近（14:30）
前日の猿を追いだしての露天温泉のせいで、天羽のピッケルが盗まれる。しかし、大事にはいたらず、登山開始。三人でのラッセルということもあって、思うより先に進まない。ただ、地域的条件を活かし、雪にもめげずほぼ予定通り燕山荘に着く。

12月17日（快晴）
燕岳往復（7:00～8:30）、幕営地出発（8:30）―大天井岳（14:00）―大天荘付近（14:30）
難なく燕岳を往復した後は南下する。蛙岩では予想以上に苦労する。他隊の報告によると、中の空洞を通過できるとのことだったが（偵察でも同様に認識）古田以外は荷がつかえ通過不能、ゆえに夏道の雪を一からどけて強引に乗りきる。為右衛門吊岩は、寡雪のおかげで効率的に通過。やや天羽のペースがのろい。切通岩後のトラバースはクラストが程良く形成されていて、ザイルは出さずに通過。また、大

天井岳直前は強風であったが、ルートは予定通り直進ルートにとり、50 mほどの岩尾根を越え頂上に立つ。幕営適地の関係でこの日はやや時間的に早いが大天荘付近に泊る。槍・穂高のダイナミックな姿。

12月18日（晴）

出発(8:30)―常念小屋(11:00)―常念岳頂上(13:00)―コル(14:05)―幕営地(14:40)

強風とガスのため、朝のスタートを遅らせる。スタートしたものの風が強く、横通岳付近まで非常に苦労する。とくに、東大井岳と横通岳のコルまでは視界がきかずほとんど偵察の暗記を基に行動していく。常念小屋付近にて、天羽の体調がやや悪化したが、本人の意思および全体のムードで常念岳を一気に乗越し問題なく幕営地まで達する。この日のポイントはやはり東大天井岳直後の処理で、へたをすると雪崩が発生しても不思議ではない地域であった。

12月19日（快晴）

出発(6:30)―蝶ヶ岳(9:30)―大滝山(14:00)―八丁ダルミ手前(15:00)

この日は快適なラッセルをこなしつつ前進。ただただ歩き続ける。穂高連峰が美しい。技術的に問題となることはまったくなし。

12月20日（晴）

出発(7:00)―鍋冠山(8:30)―林道(10:00)―三郷村―松本

穂高連峰が見えない。これ以外はすべて前日と同じ。平和な下山であった。

〈総括〉

田形が行けなくなり、三人の冬合宿となったが、条件に恵まれＮＯスペアーで完了。現時点でも実力を考慮すれば、今後につなげる意味でもかなり点数は高い。偵察山行の情報を効果的に活用できたことも評価できよう。

ただし、基本的な冬山生活技術（特に朝）を機能的に活かす必要があり、Total な面としての精神力の不足が部分的にであれ体力、体調のコントロールをゆるめたことも事実ではあるまいか。また、技術的にはやはりアイゼンの歩行にまだ改善の余地がある。特に岩尾根を登るときなどツメのかけかたにまだ不慣れが見られる。いずれにしても、十分な Introduction として位置づけたい。

（山内）

1990年度　山　行　表

期　　間		コ　ー　ス	メ　ン　バ　ー
1990	4.21	谷川連峰縦走	坪井、天羽
	4.28～ 4.30	ゴールデンウィーク山行・越後荒沢岳～中ノ岳～八海山	山内(CL)、坪井(SL)、天羽、古田
	6. 3	水根沢	古田、天羽
	6. 9	氷川屏風・水根沢	天羽、田形、古田
	6.10	海沢	山内、天羽、古田、田形
	6.15～ 6.17	丹波川本流～一之瀬川～大常木谷	山内、天羽、古田
	6.23～ 6.24	雪上訓練合宿（北岳大樺沢）	山内、天羽、古田、田形
	7. 4	水根沢遡行	山内、田形、又賀
	7. 8	鳩ノ巣渓谷徒渉トレーニング	天羽、又賀、古田
	7.17～ 7.18	一之瀬川大常木谷出合まで）および小室川谷	古田
	7.20～ 7.23	大源太川北沢本谷、湯檜曽川本谷	古田、天羽、又賀
	7.28～ 7.29	万太郎本谷・谷川岳	山内、田形
	8. 2～ 8.10	夏合宿前半（金木戸川遡上九郎右衛門谷～黒部乗越～黒部川源流～薬師沢～薬師峠～五色が原～剱沢）	山内、古田、天羽、田形
	8.11～ 8.12	夏合宿後半・剱岳・細野伸二君追悼山行	西牟田、齋藤、井上、山内、坪井、古田、天羽、田形、又賀、細野克宏・亜紀子
	10.21～10.22	巻機山～朝日岳	古田、天羽
	10.26～10.28	中房温泉～燕岳～大天井岳～常念岳	山内、田形
	10.30～11. 4	JR親不知駅～栂海新道経由～白鳥山～朝日岳～雪倉岳～白馬岳～白馬大雪渓～猿倉	天羽、古田
	11. 3～11. 6	栂池～小蓮華岳手前	山内
	11.23～11.25	富士山（雪上訓練合宿）	山内、古田、天羽、田形
	12. 8～12. 9	長沢背稜～雲取山～石尾根	古田、田形
	12.15～12.20	中房温泉～燕岳～大天井岳～常念岳～蝶ヶ岳～鍋冠山～三郷村	山内(CL)、古田(SL)、天羽
1991	2.25～ 2.27	清里～天狗尾根～赤岳～硫黄岳～赤岳鉱泉	古田、天羽、田形、(山内)
	3.14～ 3.15	御前山、三頭山	古田、田形

1991

部長　
部員
３年　天羽　康之(CL)
　　田形　祐樹(SL)
２年　寺島　　修
１年　古瀬　泰介
　　和田　壮史
針葉樹会学生担当幹事　西牟田伸一
　　五ヶ山　淳
　　山内　　太

活動概況

１９９０年度最後のプレ春合宿が失敗に終わり、春合宿も行われなかったことから、そもそも１９９１年度の活動を行うべきか、休部もありうるのではないかという根本的な問題が、年度当初から生じていた。

しかし、年度も代わり、新入部員も入ってきて、新たなスタートも考えられるということで、新入部員の勧誘活動を行った。その結果、６人が興味をもってくれて、山行に参加してくれるようになった（うち、年度末まで部員として残ったのは寺島、古瀬及び和田の３人）。

そこで、部としては、新たな人員を得、合宿が行える態勢はとれるようにはなった。もっとも、１９９０年度の部員・古田、天羽及び田形のうち、古田は、１９９１年度では、合宿以外でのオブザーバー的な参加となった。それまで、技術的に部を引っ張ってきた古田が抜けたことで、部としては必然的に、激しい沢登りや岩登りはせず、初歩的な、安全第一の登山を目指すことに主眼が置かれた。

年度当初から６月中旬までは、新人歓迎及び夏合宿を見越しての、基本的な縦走や沢登りが行われた。

毎年恒例となっている６月末の北岳における雪上訓練も、山内ＯＢも含め９人参加となり、賑やかな訓練となった。

７月末から８月初旬の夏合宿は、６人が参加して、北海道で行った。大雪山系からクワウンナイ川遡行、そしてトムラウシ山へ、それから知床に移動して、羅臼岳登頂というものであった。それまでの沢登りの成果を生かすクワウンナイ川遡行、そして、荷を背負っての、まとまった縦走をそれなりに完遂したことで、部全体として、そして各新入部員としても自信がついた山行になった。それとともに、各部員は、北海道の大自然に触れ、山に登ることの純粋な喜びを味わったのではなかろうか。

以上、部として、基本的な訓練山行、夏合宿を終わらせることができたことで、次は、冬及び春合宿が目標となり、10月は、谷川岳周辺及び八ヶ岳で偵察山行が行われた。もっとも、八ヶ岳で

の偵察山行では、上級生である田形の体力不足もしくは体調管理不足が露呈するなどしたため、一部コースの変更等も行われることになった。他の、一部偵察は、新入部員のみでも行わせ、縦走を果たしてきたことから、成長の跡がみられ、頼もしく思われた。

11月終わりには、雪山に備えた富士山訓練を行った。先発した田形と、後から入山した天羽のコミュニケーション不足のため、ビバーク訓練ができなかったことは、反省点であった。

12月終わりには、南アルプスの鳳凰三山と北八ヶ岳を継続した冬合宿を行った。北八ヶ岳だけでは、あまりに物足りないということで、偵察していないが、特に難しくないであろう鳳凰三山を加えることになった。いずれの山域も雪が少なかったが、雪山登山の初歩として、アイゼンでの歩行、ピッケルの使用、雪山でのテント生活に慣れることができたのはよかったのではないかと思われる。

年が変わっての3月初旬に、プレ春合宿を、上州武尊山で行った（オリジナルの報告書では「プレプレ春合宿」と標記されているが、理由の詳細は不明。春合宿本番前に、もうひとつプレ合宿の予定だったのかもしれない）。

冬合宿では雪が少なかったので、谷川岳周辺の春合宿に備え、多くの雪に慣れること及び山スキーを試してみることが目的であった。目的は一応達せられたが、この合宿以降も、参加者の中から山スキーを積極的に行う者は出てこなかった。

3月中旬から、1年の総決算の意味も込め、谷川岳周辺での春合宿。天気に必ずしも恵まれず、途中では2日間、沈殿することにもなった。また、かなりのラッセルをすることにもなった。これまで、このような苦しい山行もなかったことから、これを経験でき、乗り切ったことは、部としては非常にいい経験となり、各部員のささやかな自信ともなった。

この1年間は、基本的な山行に終始したが、山岳部として、ひととおりの訓練並びに夏、秋及び冬の合宿を行うことができた。定着する部員も確保できた。牛歩の歩みかもしれないが、山岳部の再生を感じさせる1年となった。

（田形　祐樹）

夏合宿（北海道　旭岳温泉～旭岳～忠別岳～化雲岳～天人峡～トムラウシ山～トムラウシ温泉～新得～斜里）

【参加メンバー】天羽（CL）、田形（SL）、寺島、秋元、和田、古瀬

【期間】１９９１年7月31日～8月7日

7月31日

夜行列車で上野発

8月1日
旭川駅でステーションビバーク

8月2日（ガス）
旭川―バス―旭岳温泉―旭岳―旭岳キャンプ場
旭川市内から曇りで旭岳温泉では既にガスの中。気が重いが差し入れのスイカを片付けて出発する。初めの樹林帯はぐしょぐしょの最悪の道。姿見の池までに寺島さん遅れる。池が全く見えない程の濃霧で視界は20～30mだろうか。その中を硫黄臭のする砂の急斜面を直登。展望が全くなく、凍えるような山頂をさっさと離れ、直下の幕営地まで雪渓を越えてひと下り。

8月3日（ガスのち曇）
出発―北海岳―忠別岳―忠別小屋キャンプ地
濃霧に加え風も強く、ひどく寒い。白雲分岐まで視界は相変わらずだが、迷うような分岐もなく、道もはっきりしており、登山者も多い。白雲分岐から白雲岳へはもちろん登らないことにする。リスがいる白雲石室からガスは薄らぎ、風もなくなる。コマクサの咲く平坦な道をゆく。大雪温泉への分岐は、はっきりした道標あり。忠別山頂で時間的に早いが疲労度を考えて忠別小屋止まりということにする。小屋への道は背丈程のハイマツの中を10分歩き、最後に雪渓をわたる。キャンプ場は小川を囲んだハイマツの中にあり見過ごしやすい。ただ人がかなり多い。

8月4日（晴のち曇）
出発―化雲岳―天人峡
五色岳のゆるやかな登りから始まる。人はいたが、早朝、しかもハイマツ帯なので熊よけの笛を吹きながら行く。化雲岳まではお花畑のだらだら歩き。小化雲岳からの道は、段差の大きな泥道で、全く閉口。ただ途中にワタスゲの湿原があり、霧の中に幻想的な絵を見せてくれた。樹林帯に入り、羽衣の滝を右に見てつづら折りの急坂を下って天人峡温泉に着く。敷島荘の裏に一夜の宿をとる。各自ホテルの温泉につかり、リラックス！（以降ほとんど温泉めぐりの様相を呈する）

8月5日（晴のち小雨）
出発―ボンクワウンナイ川出合―カウン沢出合―魚止めの滝
バス道から林道に入るがその際立入禁止の立て札を無視して行く。出合で装備をつけ、林道から川原におりる。前方に数名先行パーティーがいる。天気もまずまずで、広々した河原をちゃぷちゃぷ水に浸かって歩く。水量はさほどなかったが太腿まで浸かったこともある。3時間で川幅狭まり大きな高巻きを2、3度した。ザイルを2度使った。カウン沢付近は石が大きく歩きづらく、いらいらする。カウン沢のキャ



1991年8月　クワウンナイ川(トムラウシ山付近)のナメ
左から 寺島、天羽、和田、古瀬、秋元

ンプ地に人が多く、時間的にも可能なので魚止め滝まで頑張る。天気が悪化したが何とか滝に着き、滝を目の前にした左岸のキャンプ地に幕営する。テント2張り分くらいで、右岸にも2張り分程の場所はあった。たき火で体を温め、滝の音を聞きながら就寝。

8月6日（曇のち晴）
出発―天沼（縦走路―トムラウシ山―直下の幕営地）

朝、木の葉の間から星が見え、ほっとする。キャンプ地の背後のガケが巻き道になっており、これを越えるとそこはナメの始まりだった。さらに一つ大きな滝を巻いてそこから滝の瀬十三丁に入る。水草を踏む渓流足袋を信じて縦横無尽に歩きまわる。（寺島さんがナメですべって濡れたという話を後に聞いた。結構危なかったそうだ。）ナメが終わり河原の歩きに戻る。最後の大滝の高巻きの岩場には古いザイルがついており（この岩場に苦労した）これを越えると源頭部に入り、やぶの中では笛を吹き、明るい草原に出る。水流無くなる辺りの道は分りにくい。溶岩帯はナキウサギのすみかで、道は明瞭、天気良好。最後雪渓を渡って縦走路に合流する。北沼まで進んで休憩。すばらしい開放感にひたる。北沼からトムラウシ山頂へは、コースが入り組んでおりガスが出ると迷いそう。（右の沼の方へ行くと頂上を巻いてしまうようだ。）山頂付近の岩場を乗り切って、山頂で1時間の大休止。旭岳から石狩、十勝方面までカンペキな眺望。山頂の住人らしいシマリスも現れて「至福のひととき」。山頂直下のキャンプ地は広く、人も多い。雪渓が小さく、水が少ないのが玉にキズ。すばらしい夕陽を眺めて、明日は下山か。

8月7日（晴）
出発(5:15)―トムラウシ温泉(9:30着)―新得―釧路

キャンプ地から沢の源頭に達するまでUp―Downを繰り返す。沢に入れば下るだけ。最後隊列がばらばらになったが、無事トムラウシ温泉に到着する。途中から抜きつ抜かれつだった学芸大

WVの三人の女の子と一緒（？）に早速温泉に入る。充分くつろぎ、昼頃バスで新得に出、釧路に向かい、夜到着。「OK牧場」で知床に向け大いに鋭気を養う。

補足

計画で想定通り、技術的な問題はほとんどなく、体力、時間との勝負となった。二度にわたって火器がテント内で火を吹いたことや、パッキングに手間どったこと等、生活技術上の問題は大いに残った。が行程は計画通り。天候もまずまずで、恐れていたヒグマなど影もカタチも声もニオイもせず、また一年の僕にはある程度の自信になったという点でも良い山行だったように思う。

夏合宿後半（知床）

【参加メンバー】天羽、田形、寺島、秋元、和田

【期間】1991年8月9日～11日

8月9日（雨のち晴）

起床(4:00)、出発(5:30)―羅臼平(12:00)

予定ではこの日のうちに二つ池まで行くはずだったが天気その他の条件により羅臼平に泊。羅臼平付近はガスがかかると目標物もなく迷いやすい。また手前の雪渓はクラストしていたので念のためザイルを張った。とにかくこの日はめちゃめちゃ寒く夏とは思えないほどだったがテン場から見た夕焼けが素晴らしくきれいであった。

8月10日（霧のち晴）

起床(3:10)、出発(9:25)―羅臼岳(10:05)―幕営地(11:15～11:50)―二つ池(14:30)

今日中に下山しようと早起きしたものの、外は霧で何も見えない。エスケープルートを使って岩尾別温泉に降りてしまうという考えも出たが、やはり最後まで計画通りやりぬこうということになる。9時過ぎに晴れて来たので荷物を置いて羅臼岳に往復した後、二ツ池まで行く。二ツ池付近は水場も良いのがないし熊も出そうで恐い。

8月11日（曇のち晴）

起床(4:00)、出発(5:20)―硫黄岳(8:05)―登山口(11:00)

外輪コース途中のキレットを無事通過し硫黄岳に至る。頂上からは雲間から国後島の山（らしきもの）が見え、ちょっと感動した。そこから登山口まで約2時間半。晴れた空の下、澄みきった海を見ながら、長い夏合宿のフィナーレを飾るにふさわしい爽快な下山であった。

冬合宿（鳳凰三山・北八ヶ岳）

【参加メンバー】天羽(CL)、田形(SL)、寺島、和田、古瀬

【期間】１９９１年12月20日～12月24日

12月19日
立川―穴山―御座石鉱泉

12月20日（快晴）
起床(5:00)、出発(6:30)―燕頭山(9:30)―鳳凰小屋(12:30～13:30)―地蔵岳(14:15～14:50)―鳳凰小屋(15:15、天羽・古瀬は16:30)

12月21日（快晴）
起床(5:00)、出発(7:00)―稜線上(9:30)―夜叉神峠(13:20)―夜叉神峠登山口(14:15)―甲府＝茅野＝美濃戸口
地蔵岳頂上近くから稜線（地蔵～観音間）に出る。天気もよく、無事に下山する。

12月22日（晴）
出発(6:15)―赤岳鉱泉(9:20)―硫黄岳(11:20)―東天狗岳(13:35)―黒百合平(14:50)
北八ヶ岳なので、特に危険な箇所もなく縦走。

12月23日（晴のち曇）
起床(5:00)、出発(6:30)―高見石(7:45)―麦草峠(8:40)―縞枯山(10:15)―三ツ岳(11:35)―北横岳(12:30)―双子池(14:20)

12月24日（曇のち快晴）
起床(5:00)、出発(7:00)―大河原峠(7:45)―蓼科山(9:50～10:50)―城の平入り口(12:50)＝茅野＝立川
ほとんど雪のない蓼科山山頂から、これまでの縦走路を振り返る。基本的なアイゼン歩行、ピッケル操作には役立った冬合宿であった。



1991年度　山　行　表

期　　間		コ　ー　ス	メ　ン　バ　ー
1991	5. 4～ 5. 5	新人歓迎山行（鴨沢～雲取山～石尾根～奥多摩駅）	天羽、田形、砂永、(1年)、青野(1年)
	5.18	市の沢（奥秩父）	田形、古田、砂永
	6. 2	水根沢遡行	天羽、寺島、山内(OB)
	6. 9	小川谷	古田、又賀、古瀬、砂永、和田
	6.22～ 6.23	唐松谷遡行	古田、田形、秋元、砂永、和田、古瀬
	6.29～ 6.30	雪山訓練合宿（白根御池）	天羽、田形、寺島、秋元、砂永、古瀬、和田、山内(OB)、古田
	7.31～ 8.10	夏合宿前半・大雪山系	天羽(CL)、田形(SL)、寺島、秋元、和田、古瀬
	8. 9～ 8.11	夏合宿後半・知床	天羽(CL)、田形(SL)、寺島、秋元、和田、古瀬
	8.12～ 8.13	利尻	和田
	10. 5～10. 7	谷川岳偵察山行（白毛門～朝日岳～清水峠～谷川岳～万太郎山～仙倉山～平標山～元橋）	天羽、和田
	10. 5～10. 6	春山偵察山行（甲斐大泉～権現岳～赤岳～硫黄岳～赤岳鉱泉）	田形、寺島、秋元
	10.18～10.20	北八ヶ岳　冬山偵察	秋元、和田
	10.26～10.27	冬山偵察山行（北八ツ・蓼科山）	寺島、古瀬
	11. 2～11. 4	中央アルプス	天羽、寺島
	11.19～12. 1	雪上訓練合宿（富士山）	天羽、田形、寺島、古瀬、和田(以上部員)、山内(OB)、楊、古田
	12.20～12.24	冬合宿（南アルプス・八ヶ岳）	天羽、田形、寺島、古瀬、和田
1992	3.12～ 3.13	八ヶ岳	天羽、田形、寺島、古瀬



『針葉樹』第9号より

1992

部長
部員
４年　天羽　康之(CL)
３年　田形　祐樹
　　寺島　　修
２年　古瀬　泰介
１年　渕澤　貴子
　　三谷、笠巻、和田
針葉樹会学生担当幹事
　　西牟田伸一
　　山内　　太

春合宿（谷川岳）

【参加メンバー】天羽、田形、寺島、古瀬

【期間】１９９２年３月19日～23日

3月19日
起床(4:30　雪)、土合駅出発(6:00)―白毛門(10:25)―笠が岳(11:35)―朝日岳(12:50)―ＪＰ(13:20　晴)

小雪の中、土合駅を出発。夏道と少々違い、三菱山荘のすぐ横から尾根に取り付く。激しいラッセルの予定だったが、雪が少なく、輪カンを外して進む。迷うような所はない。白毛門手前の直登もクラストしていて雪崩の心配はなさそうだ。そこで上級生二人はアイゼンを着けながら、一足先に着けていた寺島、古瀬が登って来るのを見ていた。二人が坂の途中で止まっているので待っていてくれるのかと思い、追い付くと、アイゼン歩行に慣れない二人は、進むに進めなくなったらしい。なるほどと思いながら、牽き連れて登る。晴れれば、谷川岳が眼前に広がるはずなのに、ガスの中では全然感動しない。続く、笠が岳の登りは、ガスの中、登れど登れど同じようなだらかな坂が延々と続き、非常に気が滅入ってしまった。山頂の先にある小さな避難小屋は、雪から出ていたが、扉が中から石で押さえつけられてあり、何のための避難小屋か、良く判らない。それでもなんとか風よけにして休み、朝日岳へ向かう。途中、何本か篠竹をさすが、過去三回も通った道なので迷わず朝日岳に着く。ここも真っ白な世界で余り嬉しくない。予定ではここで泊まりだったのだが、時間があったので、先に進む。朝日岳の広い尾根を、先程は登りで窮していた古瀬がコンパス片手にどんどん行き、すぐにＪＰに着いた。ＪＰから清水峠はやせ尾根で、しかも視界が全く効かなかったので、ピッケルで、尾根の限界との距離をとりながら進む。すると崖とすれすれの所に、アイゼンが外れたと言って田形が腰を下ろしてしまい、肝を冷やした。人の後をついてきた田形は、どんな所を歩いているのか全く知らなかったようで平然としていた。その後、偵察の不備から進んでいる道に自信がもてなくな



1992年3月　谷川岳山頂
左から 古瀬、田形、天羽、寺島

り、時間的な問題と、pre・pre春、pre春ともに道を間違えたleaderへの不信から引き返すことになった。引き返す頃には、だんだんガスが晴れだし、JPに着いてテントを張った時にはもう、完全に晴れ渡っていた。何だかもったいないことをしたが、余裕をもって谷川岳や越後の山々を眺められたのは良かった。その夜、今後の日程について話し合ったところ、天気が崩れたら、来た道を戻るのかと聞かれたので、もちろんと答えたところ、寺島に「拒否します」と強く言われてしまった。余程、白毛門の急坂を下りるのが恐いのだろうと思ったが、来た道を戻るのが一番楽なので、私は内心、絶対あそこから降りようと思っていた。

3月20日

起床(5:00　雪)、出発(9:20　晴)―清水峠(10:20～11:00　快晴)―七ツ小屋山(12:00)―蓬峠(13:15)

朝、雪が降っていたので、少々待ったが、好天となり、気持ちが良い。昨日途中まで行った道は正しかったようだ。翌日は天気が崩れるとラジオで言っているので清水峠の小屋泊まりにしようかと思ったが、そこから一日で谷川岳まで行くのは少々hardなので、蓬峠まで行った。気になる所は、七ツ小屋手前の窪地と山頂を越えた下りぐらいで、あとは天気も良いし、非常に楽である。谷川山頂付近だけ、少々傘がかかっているのは不気味であったが。苦もなく蓬峠に着き、小屋の跡にテントを張る。

3月21日（雪）

沈

予想通り、吹雪。午前中は小屋が風よけになっていたが、その後、風向きが変わり、もろにテントに雪が溜まる。どうも、雪かきして出来た壁と小屋の間にテントを張ったのが悪かったらしく、どんどん雪がたまっていく。日中は交替で雪かきをしていたが、夜はだれも出たくなかったので、素知らぬふりをしていたが、顔と足にテントがせまって来る。そのうち、足の上に雪の重みがかかり、動きがとれなくなって来たが、外に出たくなかったので、じっと我慢していたが、「もう限界です」と端で寝ていた古瀬が言ったのを皮切り

に外へ出る。すごい吹雪だ。雪かきが間に合いそうもないので、小屋の反対側にテントを移した。外へ出たのが21:00、テントを移して中でほっとしたのは、既に23:00であった。おかげで、今、テントのポールは曲がってしまっている。

3月22日（雪）
沈

昨日ほどではないが、一日中雪が降り続く。全員、帰りたいという気持ちが伝わってくるが、自分までそういうことを言ってはおしまいなので、ひたすら眠る。

3月23日
起床(5:00)、出発(7:00　晴)―武能岳(8:00)―茂倉岳(11:00　曇)―谷川岳(13:15)―天神平(14:30　曇)

やっと晴れた。雪の中からアイゼンなどを掘り出して出発。気になっていた武能岳の下りは膝まで埋もれるので歩きやすいが、急降下で下が見えず、どこまでが道か良く判らないので、ザイルを出す。50ｍぐらい行くと、笹平が見え、ザイルをしまった。天気が良いと出発時は思ったのだが、どんよりしていて、やはり谷川岳の方面は傘がかかっている。茂倉岳まで登れば後は楽だと思い、なんとか辿り着く。山頂に着いた途端、反対側の斜面から吹き上げるものすごい上昇気流で目も開けていられない状態になった。ここから一ノ倉にかけては、雪庇が発達していてうかつに尾根を歩くことが出来ない。膝ぐらいのラッセルをしながらトラバース気味に進む。先頭を代わって欲しかったのだが、強い風にあおられ、疲れた顔でついてくるので、仕方なく先頭を歩く。谷川岳と一ノ倉岳の中間のコルあたりに着くと雪の量も減り、尾根にはトレースも残っていて、ゴールは間近であると感じられる。谷川岳に着く頃にはみんなヘトヘトで、しかも視界が悪かったのだが、なんとかここまで予定通りに来たという満足感で、なぜか笑みがこぼれていた。天神平からの下りは予定外だったがロープウェーを使った。やはり、文明の力はすごい。

夏からほぼこのメンバーで山行を行い、春合宿は奥秩父にしようという案も出たが、谷川に来て本当に良かった。途中、二日の沈もはさんだことにより一層充実感が湧き、一年の総括にふさわしい山行であったと思う。

（文責　天羽）

夏合宿
北アルプス縦走（涸沢～北穂高岳～槍ヶ岳～針ノ木岳～唐松岳）
【メンバー】天羽（CL）、寺島、古瀬、和田
【日程】１９９２年８月２日～13日

8月2日　立川発

8月3日
松本―新島々―上高地(9:15)―横尾(12:00)―涸沢(15:00)
荷物が重く、横尾から涸沢までがつらい。ヨレヨレになって到着。

8月4日
起床(4:00)、出発(5:30)―北穂高岳東稜(7:00)―上部のコル(8:15)―北穂高岳頂上(9:00)―涸沢(10:30)
途中まで南稜と同じ道を行き、雪渓をトラバースして東稜に入る。合流点付近は崩壊に注意。その後は懸垂下降が一ヶ所あるくらいで問題なく頂上へ出る。頂上から槍ヶ岳、鹿島槍ヶ岳さらには白馬岳まで見わたせた。南稜より涸沢に下山。

8月5日
起床(4:00)、出発(5:15)―前穂高岳北尾根5・6のコル(6:05)―4・5のコル(8:30)―4峰(8:30)―3峰(11:00)―前穂高岳(11:50)―奥穂高岳―ザイテングラート
雪渓を登り、5・6のコルに出る。4峰上部は崩壊が激しいが、和田が一人で行ってしまい落石を起こす。幸い怪我が出なくて済んだが、死人が出てもおかしくなかったほどだった。そこからザイルを張って4峰頂上に達するが、次第に天気が悪くなってくる。3峰の登りでは、チムニー状の部分と、その上部の2ピッチにザイルを出し無事通過。そこからしばらくして頂上に着いたが先程の事故を思い出し、生きてここにつけたと思ってホット息をつく。ゆっくりしたあと奥穂高岳を経て涸沢へ下山。

8月6日（天羽、古瀬、和田は縦走へ。寺島は下山）
起床(4:00)、出発(5:25)―北穂高岳(7:50)―南岳(10:50)―中岳(12:10)―槍山荘(14:00)―殺生ヒュッテ(18:00)
ピッケルを4本差した寺島と別れ縦走に出発。2日前と打って変わり、北穂高岳の頂上は霧の中でとても寒かった。いよいよ大キレットに進むが、濃い霧の中でこの先がどうなっているのか良く分からない。しばらくは、下りが続いた。それにしても鎖場が多い。時々、和田が谷に飛び込みそうになる。先が見えないというのは辛い。南岳までがやけに長く感じた。槍の肩のテン場は一杯だったが、隅に一張り分の空きがあったので、昼寝をしてくつろいでいたが、夕方になって下の殺生ヒュッテに追いやられてしまった。

8月7日
起床(4:00)、出発(5:10)―槍山荘(5:30)―槍ヶ岳山頂出発(7:25)―双六小屋(10:20)―三俣山荘(13:00)

今日もひどいガス。昨日、余分に下った登りがやけに辛い。槍ヶ岳のピストンに軽装で出かけてしまい大後悔。渋滞でなかなか進めないので、体温がどんどん奪われて行く。天羽はたまらず引き返し、和田と古瀬だけが登頂した。周りが見えなくて退屈な下りが続いたが、双六小屋に着く頃には時折晴れ間がのぞくようになった。寒さと貧弱な昼食のせいか、小屋のおでんがやたらに気になる。においはただなので、他人が食べるのを食い入るように眺めながらにおいだけをひたすら吸い込んだ。次に来るときは必ず食べようと三人で誓う。ハイマツの中を進み三俣小屋に着く。

8月8日

起床(3:30)、出発(5:10)—鷲羽岳(6:05)—水晶小屋(7:10)—野口五郎岳(9:30)—烏帽子岳(12:00)

朝から台風が気になるのでラジオを聴きながら歩く。台風が雲を集めているのか、雲が無い。野口五郎岳で台風のため下山するというおば様方に食料をいただく。涙が出るほどうれしい。だんだん天気が怪しくなってゆき、烏帽子岳の手前で雨がポツリ、ポツリと落ちてきだした。ちょうど烏帽子岳のテン場は窪地で風雨を避けるのにもってこいだったのでそこで泊まることとする。

8月9日　沈殿

台風の直撃は避けられたが本日はお休み。水を買う金が無かったので鍋に水をためて飲んだ。「青い」という表現がぴったりの水だった。

8月10日

起床(4:00)、出発(5:00)—烏帽子岳(6:00)—不動岳(7:25)—船窪岳(9:30)—分岐(11:00)—針の木沢(11:45)—針の木小屋(14:40)

予定では船窪小屋までだったが、沢に降りると針の木まで行けそうだったので、二日分進む。

烏帽子岳はかっこいい岩山だった。船窪岳までは良いペースだったが、沢へ降りる分岐がどうも地図と違うようでなかなか見つからなかった。これは船窪岳の表示が違うようで、分岐は思ったより小屋に近いほうにあった。また、船窪岳の周辺はガレていてあまり気持ちよくない。針の木沢への下りはきちんとした道だったが最後の所だけアルバイトだった。そこが和田の気に召さなかったようで機嫌が悪かった。逆に天羽は先に沢に降りてウサギを見つけ上機嫌だった。最後の小屋までの登りは三人とも疲れ果ててしまった。小屋でスケッチしている人達と、ため息をつきながらうずくまっている我々三人は笑えるほど好対照だった。

8月11日
起床(4:00)、出発(5:30)―針の木岳(6:10)―赤沢岳(7:50)―鳴沢岳(8:15)―新越乗越(8:45)―種池山荘(10:30)―爺ヶ岳(11:25)―冷池小屋(13:00)
あまりアップダウンがきつくないので楽に進む。遠くから見るとメルヘンチックな種池山荘が心を和ませる。

8月12日
起床(4:00)、出発(4:55)―鹿島槍ヶ岳(6:05)―キレット小屋・五竜小屋(10:50)―テン場(12:30)
いよいよ鹿島槍ヶ岳だ。北と南の分岐というだけあって、南峰を過ぎると途端に岩っぽくなる。岩が出てくると和田が怖そうに進むのを見るほうも怖い。八峰キレットは大キレットに比べると格段に簡単だ。それよりも五竜岳の登りのほうが、姿が見えないだけに気が滅入った。霧の中、五竜岳に到着する。小屋へ着く頃には雨が降り出した。早ければ唐松岳まで行こうと思っていたがここでストップ。この小屋は水が安いのでうれしい。

8月13日
出発(9:00)―唐松岳(11:30)―白馬駅(14:30)
朝から大雨。風も強く、フライをめくり上げ、テントの中に水がどんどんたまって行く。小屋に天気予報を聞きに行くと2～3日は雨が続くとのこと。話し合いの結果、このテントでは耐えられない、金もぎりぎり、技術的に見て白馬岳まで安全に行ける保証が無い、と言った点から下山を決定した。唐松岳まで行って八方尾根を下る。

冬合宿（鹿島槍ヶ岳）

【メンバー】天羽(CL)、寺島、古瀬、渕澤

【日程】1992年12月16日～22日

12月15日
立川―信濃大町―鹿島
大町に夜着く。バスから見た爺ヶ岳スキー場の不気味に赤いライティングが妙に気にかかる。

12月16日（晴ときどき雪）
出発(6:10)―東尾根主稜線―176m(14:45)
妙な天気の中出発。いきなり、入るべき沢を見失い迷うがすぐ赤布を見つけことなきを得る。しかし雪が予想より多く、鹿島山荘で20㎝、登り始めの1時間は急登で少なかったが、そのあとはずっとワカンをつけることになった。急登では雪の付き方が悪く、遅れがちな渕澤にザイルを出す。主稜線に出て、試しに渕澤にラッセルをやらせることになったが5分経っても目の前にいるので3人で「しょーがねーな」

とけなしながら出発。時折雪がパラパラ舞うが風もなくしんとしている。天国から流れてくるようなサンアルピナスキー場のＢＧＭと自分の息づかいしか聞こえない。雪が降って来て時間も無くなったところでテントを張った。結局１７６７ｍのピークまで来たことになり、まずまず満足する。

12月17日（曇）
出発(7:30)―２０００ｍ付近(13:00)
前日付けたトレースはうっすら残っていた。昨日と同程度のラッセルだがきつくなったので渕澤にやってもらう。だが体重40 kgの渕澤のラッセルは体重70 kgの我々にはほとんど意味が無かった。かえってラッセル跡があることが疲労を増幅させるように感じる。誰に腹を立てるわけにもゆかないので黙っている。稜線は緩急を繰り返し、１９７８ｍと２１５０ｍの中間付近で泊まる。

12月18日（雪）
出発(7:20)―トンガリピーク下―２０５０ｍ付近(12:30)
今日は核心部を通過するつもりで出発するが天候が微妙。トンガリピークの下の急登に取りつく。１段目を膝上ラッセルで越すと２段目は深く不安定な雪がついており、天羽がザイルを付けて必死のラッセル。雪は強くなり風も出てきた。ここはなんとか越してピッチを切れるところまで来たが雪の状態がひどい。目の前がピークであることは分かったが雪崩が怖いし、その先に幕営適地が無いので引き返すことに決定。

12月19日（快晴）
出発(9:20)―トンガリピーク(12:30)―２０５０ｍ付近(16:00)
夜中ずっと吹いていた風は明け方には止んだが、テントの外が薄暗く感じられたので何となく停滞ムードが漂う。ところが 8:00 頃になって明るくなっていることに気付いて慌てて飛び出すと、強烈な日差しと照り返しがすごい。とにかく急いで出発する。昨日のトレースは消えていたが、不安定だった雪は風で飛ばされてしっかりしており、埋もれていた木が顔を出している。２段目とその上ではザイルを出すが、快調にトンガリピークに達する。ここからアイゼンにはきかえる。不安だった痩せ尾根も雪が少なく（雪庇も無い）、思ったほど切れ落ちておらずあっけなかった。最後のギャップから先でザイルを使い、上の急登を一段上がった所で時間切れ。終日晴天、無風に恵まれ、右に鹿島槍ヶ岳、後ろに妙高山、浅間山を見ながらの行動は爽快だった。

12月20日（曇）
出発(7:30)―ＪＰ(9:20)―２５００ｍ（ガス）(11:00)

ＪＰまで２時間で上がり、爺ヶ岳を越え冷池小屋まで行けるかと思ったがそう甘くはなかった。ＪＰまでの急登は腰までのラッセルで、遅々として進まない。ＪＰにようやく着いたが、この先はハイマツに足をとられさらに歩きにくい。足取り重く歩きつづけると強い風にガスと地吹雪が加わりさらにペースが落ちて行く。いよいよ本峰への登りにさしかかると言うところまで来たがこの調子では進むのは危険と判断、とりあえず風が弱まるまでツェルトで休む。しかし、風は弱まりそうもなくテントを出す。疲れていたが時間が有ったので、立派な壁やトイレを作って遊ぶ。

12月21日（快晴）

出発(7:10)―爺ヶ岳主峰(8:25～8:35)―冷乗越(10:00)―鹿島槍ヶ岳頂上(13:00～13:30)―冷池小屋(14:30)

アタックは最高の天気だった。雲海の上に朝日が出て蓮華岳がモルゲンロートに輝き、その横には槍ヶ岳まで見えている。上がるにつれ蓮華岳が低くなっていくのが手に取るように分かる。その内爺ヶ岳本峰と南峰の間に立山が見えてくるようになるとピークはもう間近で、アイゼンを効かせて登りつめると剱岳が最後に姿を見せる。

主稜線には小さな雪庇ができていたので、黒部側にうっすら見える夏道の上を行く。明日以降天気が悪くなると言う予想なので、注意して見ていると黒部の谷を埋め尽くしていた雲が少しづつ減っている。天気は今日いっぱい持ちそうだし、主稜線で閉じ込められたくないので、計画とは違うが思い切って今日中に赤岩尾根から降りてしまおうと言う案が出た。話し合った結果、冷乗越に余計な荷物を置いて頂上を往復し、時間が余れば下ることにする。おかげで最後の登りは荷物が軽くなり、ゴールが間近で気分も軽いが、体の方は疲労がこたえて一歩一歩が重い。雪がほとんど無く夏道通しに行かなければならないのもうざったい。それでも最後は駆けるように登って頂上に立った。もう雲海はすっかり消え、北に目をやると五竜岳、白馬岳の向こうに水平線がくっきりと見えた。

帰路はさすがに緊張がゆるんでしまったが、何事もなく山荘に着く。結局、今日はここで泊まることにする。明日が下山、また古瀬の20歳の誕生日と言うことで豪華な夕飯のほかにお汁粉まで出てきた。明日の天気は気になるがそれはそれとして、リラックスと充実感の中、眠りに入る。（なお、この日、布引岳付近で米軍か自衛隊の戦闘機が頭上わずか10ｍを通過して行くと言う一幕があった）

12月22日（曇のち時々晴）

出発(7:20)―爺ヶ岳南峰(9:30)―南尾根ＪＰ―扇沢（柏原新道登山口）

（13:20）―信濃大町―立川

昨日とはうって変わって黒い雲が垂れこめている。剱岳方面はまるで見えない。南峰ではガスに包まれて休む気にもならず、風に追い立てられるように南尾根を下る。この尾根は広いがＪＰまで見渡せるので安心である。途中で隣の東尾根を登っているパーティーを見つけた。どうも早稲田の山岳部らしい。手を振ってみたが通じたのだろうか。これから天気が荒れるようだが頑張ってほしい。我々はほぼ安全圏内なので申し訳ないがもはや傍観者気分である。さてＪＰ付近でラッセルが有ったが最後のアルバイトと思って頑張りＪＰに着くと、眼下に最終目的地扇沢のターミナルが見えた。さすがに感慨深い。ここからは深雪の中を各自転げ落ちるように下って行く。爽快なこの下りも飽きた頃登山道に合流。途中雪崩の危険個所が何度も出てくるが、次第に雪が少なくなり最後に雪の無い車道に出てすべて終了。天羽さんにとっては部員としての活動の終了と言うことでお疲れ様でした。途中で車に乗せてもらって大町に着く。

予定よりペースは遅くなり、疑問に残る判断もあった。それでも去年の初めから部にいた者としては、去年の冬を振り返って、自分たちなりのやり方で何とかここまで来ることができた、着実な発展を確認したと言うのが実感である。我々の様なレベルにはほどよい充実感を与えてくれた山行だった。

（文責　古瀬）



『針葉樹』第８号より

1992年度　山　行　表

期　　間		コ　ー　ス	メ　ン　バ　ー
1992	3.19～ 3.23	春合宿（谷川山系：白毛門、～朝日岳～清水峠～谷川岳）	天羽、田形、寺島、古瀬
	4.25～ 4.26	雲取山	田形、寺島、三谷
	5. 2～ 5. 5	飯豊連峰	寺島、引地OB夫妻
	5. 3～ 5. 4	那須岳	田形、古瀬、和田、笠巻、渕澤、秋元（部員外）
	5.16～ 5.22	文登研春山研修会・剣岳周辺	寺島
	5.30～ 5.31	蝶ヶ岳	古瀬、和田
	6. 6～ 6. 7	雪上訓練・北岳大樺沢	天羽、田形、寺島、古瀬、渕澤、笠巻、三谷
	6.13～ 6.14	奥秩父・滝川水晶谷	寺島、古田（部員外）
	7. 3～ 7. 4	丹波川・小室川谷	寺島、古瀬、渕澤、山内（OB）
	7.25～ 7.26	プレ夏合宿・南八ヶ岳	寺島、古瀬、渕澤、和田、三谷
	8. 3～ 8.13	夏合宿・涸沢～唐松岳	天羽、寺島、古瀬、和田
	8.24～ 8.28	那須高原沢登り	天羽、寺島、古瀬、和田
	9. 3～ 9.12	黒戸尾根～光岳	天羽、寺島、渕澤
	9.26～ 9.27	甲斐駒・黄蓮谷右俣	古田、古瀬
	10.10～10.11	冬山偵察・爺ヶ岳東尾根～赤岩尾根	寺島、古瀬
	11. 1～11. 3	春山偵察・白峰三山	寺島、古瀬、渕澤
	11.21～11.23	春山偵察・白峰南稜	寺島、古瀬、渕澤
	11.27～11.29	雪上訓練・富士山	天羽、寺島、古瀬、渕澤
	12.16～12.22	冬山合宿・爺ヶ岳東尾根より鹿島槍ヶ岳	天羽、寺島、古瀬、渕澤



『針葉樹』第5～11号より

1993

部長
部員
４年　寺島　　修(CL)
　　田形　祐樹
　　古田　　茂
３年　古瀬　泰介
２年　渕澤　貴子
１年　安田、楊、吉武
針葉樹会学生担当幹事
　　西牟田伸一
　　天羽　康之

春合宿（白峰三山）

【参加メンバー】寺島、渕澤、古瀬
【期間】１９９３年3月16日～23日

3月16日
立川―甲府

3月17日
甲府―夜叉神峠(7:42)―鷲ノ住山登山口(8:10)―吊り橋(10:50)―池山尾根取り付き(11:45)―池山御池(16:00)

夜叉神峠に向かうタクシーの中で渕澤が篠竹を甲府駅に忘れて来たことに気付く。下山後に駅員に問い合わせたところ「無いね、ゴミと間違われたんじゃないの。」とのこと。

夜叉神峠からところどころ氷の張った道路を歩く。ザックの重圧に陰鬱になりがちな気分を、純白の衣を絹のように輝かせている山々が慰めてくれる。

鷲の住山の登りは岩の上にうっすらと雪がついていて滑りやすく何度も転びそうになりすぐにアイゼンをつけた。知らない内に山頂を過ぎ、急な斜面を下る。柔らかい新雪なのでアイゼンを付けていてもあまり役にたたない。何度も尻もちをつきながらやっと野呂川に降りる。長～いトンネルを抜けていよいよ池山尾根へ。

いきなりジグザグの急登。雪はそれほど深くなく、膝下程度。１５００ｍあたりから雪の付き方が不安定で急な登りが続く。すぐにアイゼンをつける。途中から雪が硬くなり、急な角度で足を置かねばならず、辛い。１９００ｍあたりから、前日レポートを仕上げるために甲府駅で徹夜した渕澤がバテ始める。渕澤がフラフラになって小屋に着いた頃、古瀬は雪の降る中天気図をつけていた。この日は小屋の中にテントを張る。

3月18日（晴）
起床(5:20)、出発(7:20)―八本歯手前(13:30)

しばらくだらだらの緩斜面が続くが次第に傾斜がきつくなり、ひどいラッセルが始まる。三人しかいないのであっという間に順番が回ってくる。それでも、緩やかな尾根ではそれほど沈

まないのでワカンを踏む感触が心地よい。

樹林帯を抜け、やっとワカンから解放された。一気に視界が開け爽快である。尾根筋がはっきりしていて迷うようなことはなく、危険も無いので、体力以外の問題は無かった。

八本歯のすぐ手前まで行く予定だったが、疲れていた上時間も無く、前のパーティーがテントを張った跡がきれいに残っていたので、八本歯まで一時間ほどの２８２２ｍあたりのなだらかな尾根上にテントを張った。雪を解かしている間に寺島が八本歯を偵察。時間が無かったため核心部は見られなかった。

3月19日（快晴のち雪）

起床(4:00)、出発(6:10)―八本歯(6:50)―八本歯のコル(10:30)―北岳への分岐手前(12:00)―八本歯のコル(12:30)―八本歯(14:00)―テン場(14:30)

八本歯の偵察もかねて北岳アタックを目指す。寺島リードでザイルを張る。切れ落ちた尾根の右側を慎重に雪を踏み固めながらゆく。途中ランニングをとれるような木が見つからず怖い思いをした。最後に1ピッチ懸垂下降が必要なところがあったが、どうしても良い支点が見つからず、また岩にハーケンが打てないのでやむを得ず古くて信頼できない残置ピンを利用した。体重をかけすぎないよう慎重に降りてコルに到着。合計3ピッチ＋1懸垂下降。翌日のことを考えてしっかりした支点探しと雪を固めてのルート作りに力を入れたので予想以上に時間がかかった。コルからしばらくは痩せ尾根のわりにたっぷり雪がついていて足の付け根までのラッセル。不安定だがザイルを使うほどではない。

時間切れで北岳アタックは断念。頂上は次第に上昇してきた雲におおわれ、コルに引き返して来た頃から雪が降り始める。せっかくつけたトレースが：と苦々しい気分になる。

3月20日（晴）

起床(4:00)、出発(6:10)―八本歯(7:00)―コル(8:30)―北岳への分岐(9:40)―北岳山頂(10:20)―分岐(10:55)―北岳山荘(13:00)

大雲海を真紅に染めて昇る朝日を背に出発。北岳の偉容がくっきりと空に浮かび上がる。前日の雪でトレースはほぼ埋まってしまっていた。八本歯の直前で古瀬、渕澤がルートを間違え尾根の右をトラバース。ひどく不安定についた雪は崩れやすく、渕澤が足下で小雪崩を起こした。すぐに止まったが「死ぬほど怖かった」（こわばる渕澤）、「下に灌木があったし、岩も出てないから大丈夫だと思った」（余裕の古瀬）、「・・・」（無関心の寺島）と反応は三者三様。

偵察のおかげで八本歯は何事も無く通過。日が高くなるにつれガスが上昇し山頂を覆ってしまう。分岐に荷物を置き北岳山頂へ。岩の間をクラストした雪が埋め、ザイル無しでは下りは危険ではないかと進退を迷うが安全なルートを発見して解決。無事山頂に着くがあいにく視界はゼロ。

分岐から山荘までは途中良いルートが見つからずかなり手間取った。ガスで視界がきかないこともあり、岩の出た急な下りのある方向へ行くか、あるいは下のなだらかだがいやらしい雪面を巻くか、何度も往復して検討した。結局前者のルートを行くことしたが、ガスが切れて夏道の杭を発見、間違いの無いことを確認した。ザイルは使わなかった。

尾根筋が2つに分かれているところでルートを見失う。偵察の時と同じ過ちを繰り返してしまった。しかし、しばらく待てば必ずガスが切れるという教訓だけは実を結び、ガスの切れ目に山荘を発見、ようやく目的地に着いた。冬季小屋は広くて快適。中にテントを張った。

3月21日（晴）

起床(4:30)、出発(6:40)—中白根(7:10)—間ノ岳(8:30)—農鳥小屋(10:20)—偵察発(12:00)—西農鳥への稜線手前(14:00)—テン場(14:50)

間ノ岳まではひどい強風で顔が凍りそう。最後の登りはだだっ広い尾根がガチガチに凍っていてアイゼンのツアッケがうまく刺さらないほどだった。

下りは嘘のように風が無い。視界も完璧なので軽快に下れそうだが、岩が出ている上に雪がついている斜面はもろくて雪崩そう。なかなかルートが決まらず、もどかしい。結局一度だけザイルを使って雪面を降りた。使わなくても大丈夫そうではあった。

農鳥小屋は完全に雪に埋まっていてなかなか場所が分らない。かなり尾根の左側に下って行ったところでようやく夏道とテントを張った跡を発見した。

農鳥小屋まで来て、西農鳥の登りのことも考え、ここで行動を打ち切ることにした。テントを張った後、寺島、古瀬が偵察に出発。西農鳥の登りにザイルを2ピッチ張った。

3月22日（晴）

起床(4:30)、出発(6:30)—岩稜取付(7:00)—西農鳥岳(7:55)—農鳥岳(8:45)—大門沢下降点(9:40)—白河内岳(12:25)—黒河内岳(14:25)

やはり風が強い。岩稜は残置を利用して1ピッチで通過。岩稜のすぐ上の雪面はやや急だが問題無し。稜線に出ると途端に風の強さが増す。息ができないのでとても辛い。やっと西農鳥岳に着いた時には顔がしびれていた。

農鳥岳まではルートどりに少し立ち止まることもあったが順調だった。ところどころいやな雪塊の乗っこしや、足場の悪いガレなどもあったが、特に危険なところは無い。

大門沢下降点まで来たとき、ここから下ってしまおうかと古瀬が言いだす。主な山には登ってしまったのでもう十分と言う気分になったようだ。しかし、時間は十分にあるし、何より雪崩の危険がある、せっかくだから最後まで行こうと言うことになった。

偵察のときのようなひどいヤブこぎはなく、快適に歩けたが、その代わり黒河内岳の登りではラッセルに苦しめられた。油断すると腰まで雪に埋まり、瀕死の虫の様にもがくことになる。黒河内岳はなだらかできれいに開けた最高のテン場を提供してくれた。風も無く、アルプスの主稜線が目の前に長大な体を横たえ見事なパノラマを展開している。

長かった合宿も何とか無事に終わりそうだと思うと達成感が胸にこみあげてくる。明日の温泉を楽しみにしつつ安らかな眠りにつく。

3月23日（晴）

起床(4:00)、出発(6:05)―2256m(9:10)―発電所(13:05)

これからしばらくはこうして山の上から日の出を眺めることも無いのだろう、と名残惜しく太陽を眺めながら出発の準備をする。

樹林帯に入るとすぐにうんざりするようなラッセルが始まった。ワカンをはけば枝にひっかかって足をとられ、つぼ足では一歩ごとに体が沈む。それでも、葉が落ちて見晴らしが良くなり、偵察でルートを把握していたこともあって快調なペースで進んだ。赤布は雪に埋まっていたのかほとんど見当たらなかったが、読図がだいたい順調に行えたので道を外れることはなかった。熊の足跡らしきものを発見し、冗談半分に「何か歌え」などと言ったりする。幾重にも交錯する獣の足跡をたどるようにして、ほどなく見覚えのある笹藪に着いた。ここまで来るとすっかり春の陽気である。

滑りやすい道と最後の急斜面のため、渕澤のペースが落ちて来た頃発電所にでた。気を引き締めて狭い階段を慎重に下る。今度は直接発電所の敷地内に下ることにした。人目を気にしながら、鍵のかかった門を乗り越え、無事脱出。警備体制のいい加減さに感謝しつつ奈良田温泉に向かった。

見事に日焼けした顔を互いに笑い合う。日程的には決して長くはなかったが充実した合宿であった。何より天気に恵まれたのが幸いだった。技術、判断力、体力など、それぞれに課題は残ったが確かな成功の手ごたえをもって1年間の締めくくりとなる山行きを終えることができた。

（文責　渕澤）

夏合宿（剱沢定着～赤木沢～穂高岳）

【参加メンバー】寺島（CL）、古瀬、田形、渕澤

【期間】１９９３年８月６日～19日

８月５日

上野発

ＯＢ４人に見送られて「能登」で出発。

８月６日

富山―立山―室堂(9:35　晴)―剱御前小屋(12:15　ガス)―剱沢(12:35)

室堂ＢＹで４人荷物を計ったところ、寺島のザックが田形、古瀬のより６kgも重い。不満げな寺島ではあったが、他の３人はお構いなしに観光客の間を縫うように雷鳥沢へ向かう。剱御前まで一汗かいて、ガスの中剱沢へ下る。今回のテントはおニューのダンロップ６人天。10分で設営し、その途端雨が降り出す。全然雨がもらないのは結構驚きだ。新しいテントのにおいが嬉しい。

８月７日

出発(5:00　晴)―平蔵谷(5:40)、雪訓終了(10:20)―ＢＣ(11:35)

今日は雪訓デイ。平蔵谷出合のすぐ上の剱沢で雪訓を開始する。真下から見上げる源次郎尾根は思ったより迫力がある。雪が堅すぎてキックステップしづらい。ピッケルストップ、スタンディングアックスビレイ、自己脱出、搬送までやるが、新入生がいないのでどうも盛り上がらない。渕澤が文登研で習った自己脱出の新技術を披露するが、実は多少うろ覚えで混乱する。終了後平蔵谷をつめて頂上へ行く予定だったが古瀬の靴先が割れたためにあきらめ、昼の日を浴びながらサクッとＢＣへ戻る。靴先は管理所で借りたアロンアルファで応急処置。

８月８日

出発(4:45　曇)―一服剱(5:25　ガス)―剱岳(7:05～7:50　霧雨)―ＢＣ(10:05)

計画では源次郎の日だが、プレ夏の失敗を考慮して直前に別山尾根に変更した。こんな天気なので渋滞はほとんど無い。が、それが災いしたのか、途中トップの古瀬が道を失ってしまう。恥ずかしい。頂上では何も見えず、無感動の登頂となる。40分ほど粘ったがガスは晴れず、その間セーターを忘れた渕澤はずっとしゃがんで凍っていた。下山は花を見ながらひたすら歩いた。途中平蔵谷上部で滑落事故があったらしい。昼から雨でひたすらテントにこもる。

８月９日（ガス）

出発(5:20)―真砂岳(7:00)―雄山(8:20～8:45)―獅子山(11:25　雨)―五色ヶ原(12:35)

居心地の良かった剱沢のテン場を発って縦走に入る。この日は一日中ガスられ、おかげで大汝山、鬼岳、獅子岳で雷鳥に会えた。雄山では田形以外は入山料４００円を払ってピークを踏んだ。休憩所ではユーミンが流れ、一乗越までは観光客で渋滞するが、その先はほとんど人がいない。静かな山である。ザラ峠でいきなり豪雨となりずぶ濡れで五色ヶ原に着くが夕方には晴れて虹が見えた。なおこの日で野菜、肉が無くなる。この後の夕食はちらし寿司、まぜご飯の繰り返し。それでも暴動が起きない不思議なパーティーではある。

8月10日

出発(5:15　晴)―越中沢山(8:00　曇)―スゴ(10:00)

朝焼けの薬師を見ながら木道をぽくぽく歩く。五色ヶ原の地塘がきらきら輝き気分が良い。しかし、木道が終わると泥沼の道になり、田形が遅れがちになる。この晴天も一日もたず、台風の接近により越中沢山では三俣から烏帽子にかけ雨雲がかかって来た。スゴのテン場は狭い上に泥の海でまともな場所は4張ぶんくらいしか無い。古瀬が走って確保する。午後東の風が強まり、夜半台風通過。

8月11日（雨）

出発(7:30)―薬師岳(11:20　暴風雨)―薬師峠(12:40　ガス)

計画では赤木沢出合までの予定だったので3:30に起床。雨は小降りだが風が強く出発を見合わせる。7:00頃風が弱まって来たので、とりあえず薬師峠まで行くことにして出発する。しかし、その直後、最高のタイミングで豪雨となる。皆引き返したい気分だが予備日を使いたくないのでそのまま前進。高度が上がるにつれ風が強まる。北薬師岳でツェルトを張っているパーティーがあったがとても立ち止まる気にならず、薬師岳の頂上も2分で通過。薬師岳小屋で雨は弱まり、ようやく落ち着く。テン場直前で道が沢状態になっており標識も見つからないので、ひょっとして薬師沢に入ってしまったのでは、という話が出る。でもコンパスを見ると合っているし、何より下から人が現れたので一件落着。このテン場は土質が良く、広い〈50張り以上〉。テントの中で飲む紅茶がほんとにうまい。

8月12日（快晴）

出発(5:30)―薬師沢小屋(7:45)―赤木沢出合(9:40)―中俣乗越(12:45～13:25)―黒部五郎岳(15:20～16:00)―黒部五郎小屋(17:00)

予想通りの快晴。ルンルン気分で薬師沢小屋へ向かうが、結構道が悪くまいってしまう。薬師沢に降りたところではトップの古瀬のチョンボで迷って

しまう。さらには黒部の本流でも、へつれるところを後ろの3人が高巻いてしまい30分ほどロスしてしまう。水が多く、ゴルジュはゴーゴーとすごい勢いである。左岸の巻き道を辿って出合いに出た時は予定より1時間以上オーバー。でも、焦ってもつまらないだけ。天気もいいし。

この沢について言うべきことは何も無いだろう。最後、渕澤が感動のあまり（？）泣いたことだけは記しておこう。黒部五郎への暑い急登をつめると、眼前に初めて槍・穂高連峰が現れる。ガスの時は迷いそうなカールを下り、皆へロヘロになった小屋に到着。既にテン場は一杯である。夜は天の川と流れ星を飽きるまで眺める。酒が欲しかった。

8月13日

出発(6:20)―三俣蓮華小屋(8:40)

この日に槍ヶ岳まで行くのはつらいし(弱い！)、それぞれの希望もあって、三俣蓮華小屋にテントを張ってから自由行動とする。

寺島：百名山ハンティングで鷲羽、水晶へ。

古瀬：雲の平祖父公園で昼寝。

田形：黒部川水源の碑を見に。

渕澤：黒部源流を詰めて岩苔乗越、鷲羽へ。

てんでんばらばらである。昼頃、黒部五郎岳に雲がかかったと思ったら途端にぽつぽつ降りだしたので皆慌てて帰る。

8月14日（雨）

沈殿

低気圧が日本海を通過し朝から雨。14時頃晴れるがすぐガスる。

8月15日

出発(4:50　ガス)―双六山荘(6:50)

―槍ヶ岳山荘(10:00　晴)

槍ヶ岳山荘のテン場が狭いので飛ばして行く。休養の効果で皆調子良い。昨年の想い出（古瀬だけの）、双六のおでんは朝早くは売ってなかったので匂いすらかげなかった。ショックでかい（古瀬だけ）。千丈沢乗越ではほぼ晴れて気持良い登り。例によって古瀬が先に行ってテン場を確保。渕澤は借りたザックがフィットせずバテ気味だが5分後に到着。頂上往復には1時間以上かかった。水1リットル200円！

8月16日（暴風雨）

殺生ヒュッテ(7:40)

夜半から風が強まり、4時に起きてみるとシュラフはぐっしょり。ポールは曲がり、フライは留めゴムが千切れている。ニューテントは見るも無残な状態で、とにかく稜線から降りようと殺生へ向かう。昨日走って登った努力は何だったのか？殺生では風は全く無かったが稜線でも風が弱まっていたの

かどうかは分からない。

8月17日（強雨）

横尾(10:20)―涸沢(13:30)

今日も一日雨。いいかげん腹が立ってくる。奥穂高岳と北穂高岳東稜（源次郎の代案）に行くことを最優先に考えると、ここでスペアを使うより涸沢まで行っておく方が確立が高いので動くことにする。どちらにせよ明日天気が回復するとも思えず、空しさを抱いて沢状態の涸沢登山道を登る。

8月18日（晴）

出発(6:35)―北穂高岳東稜―北穂高岳(10:20～10:45)―涸沢岳(12:10)―奥穂高岳(12:50～13:15)―涸沢

5:00 時にはガスだったのでどうするか迷ったが、待っている内に奇跡的に晴れて来たので東稜に向かう。昨年も来たところだが、昨年より下から雪渓とガレ場をトラバースし、岩棚伝いにルンゼに入る。コルへの懸垂の前に、3mの登りでザイルを出す。昨年はサクッと通過したはずだったのに記憶に無いところだった。結局問題なく頂上に着く。渕澤も「もっと厳しいかと思ってた」とのたまい、快適な稜線歩きを楽しんだ。

北穂高岳から涸沢岳の間はこのところの雨のせいか、ほとんど誰もいない。鎖のオンパレードで、逆コース、重荷での通過は結構厳しそう。快晴の奥穂高岳で景色を存分に楽しみ、奇妙にガランとした穂高山荘からは自由に降りる。そのせいで（？）4人中3人がテントを前に迷ってしまい、涸沢でのヤブこぎという得がたい経験をした者もいた。

8月19日

出発(7:15　雨)―横尾(9:15　曇)―上高地(11:50)

今合宿のフィナーレにふさわしく雨の中での下山。松本では一転して目もくらむような日ざしが照り付けていた。今年初めて聞くセミの声が新鮮に聞こえる。最後はシェイキーの食べ放題でしめる。

（文責　古瀬）

冬合宿（遠見尾根～五龍岳～唐松岳～八方尾根）

【参加メンバー】寺島(CL)、古瀬、田形、渕澤

【期間】1993年12月16日～20日

12月16日（木）

神城―アルプス平(8:53)―一の瀬(10:45)―小遠見(11:35～12:00)―中遠見(13:30)―大遠見(13:50)―テント場(15:00)

リフト降り場からすぐにラッセル。心配していたトレースも無く腰まですっぽりと埋るラッセルを楽しむ。天気は登り始めは良く、展望がきいてい

たが、昼過ぎからガスが出始め、今一つ進み具合が分らないまま15:00で行動をやめる。

12月17日（金）
吹雪のため沈殿

12月18日（土）
出発(7:30)―西遠見(8:30)―白岳(13:15)―五竜山荘(13:30)
ガスっていると言う以外問題は無いので出発。ひたすらラッセル。登るにつれますます視界が無くなってゆく。白岳の登りは、しの竹を連打して雪庇を慎重によけながらこれもラッセル。吹雪の主稜線に出る。少し手間取ったが五竜山荘への下り道を見つけて駆け下り、小屋脇に設営。夜中、麓のスキー場の明かりが奇麗に見えた。

12月19日（日）
出発(7:20)―五竜岳(10:35～11:05)―五竜山荘(13:20)
快晴。前日に打ったしの竹が遠見尾根上にきれいに並んでいる。写真を撮ったり、なんやかんやしてアタック出発が遅れる。G2の岩峰は夏道通しにトラバース。しかし、予想以上に雪がついて凍っていて、またザイルの支点も得られなかったので、夏道途中からルンゼを詰めて稜線に出る。この時、ザイルを2ピッチ半使う。稜線上は雪がうまい具合についていて見た目ほどは岩々しておらずノーザイルでそのまま頂上まで。眺望を楽しむ。この日に唐松岳まで行くには帰路は急ぐ必要があるので夏道通しに下ることにする。が、この判断は悪く、結局、適当な支点が得られず、稜線に戻ることになった。往路で直上した地点までゆき、ここを下らずに、稜線上をザイル2ピッチ張る。この部分、日光が直射するため、岩は凍っておらず脆い。結局中途半端な時刻に五竜山荘に帰り着く。

12月20日（月）
出発(6:50)―大黒岳手前(8:30)―唐松岳(13:50)―丸山ケルン(14:30)―八方池山荘(16:00)
二日続きの快晴。唐松岳へと向かう。大黒岳の登りはラッセルがしんどい。牛首の肩からは岩場が続き、不慣れな我々はザイルをべたべた張ることになり、加えて、誰かしらのアイゼンが壊れたり、外れたりしたので予想以上に時間がかかった。唐松山荘に着いた時には既に13:30。頂上往復後、下れるところまで下ることにする。ところが八方尾根は下り始め以外は全てクラストしていてくるぶしまでも潜らない。下山と言うことで皆頑張ったこともあいまって、日暮れ前に八方池に着くことができた。ロマンスリフトは休業のため、リフトの下を最後の力を振り絞り終了時刻間際のアルペンリフト乗降口まで下った。

（文責　寺島）



1993年8月　甲斐駒ケ岳山頂にて
左から 渕澤、田形、古瀬（後ろ）寺島

1993年度　山　行　表

期　　間		コ　ー　ス	メ　ン　バ　ー
1993	5. 1～ 5. 4	越後駒ヶ岳	寺島、古瀬、渕澤
	5. 8～ 5. 9	笛吹川久渡沢	寺島、古瀬、渕澤、安田
	5.23～ 5.27	文登研登山研修会・剱岳周辺	渕澤
	6.19	丹沢・キュウハ沢	楊、田形、古瀬、渕澤、和田
	7. 4	丹沢・悪沢	古瀬、田形、渕澤
	7.23	小常木谷	古瀬、古田
	7.31～ 8. 2	プレ夏合宿・甲斐駒ヶ岳	寺島、古瀬、田形、渕澤
	8. 5～ 8.19	夏合宿・剱岳～北穂高岳	寺島、古瀬、田形、渕澤
	9. 4	利尻山	古瀬
	9.11	谷川・笹穴沢	古瀬、田形、古田(部員外)
	9.28	南会津、檜枝岐川、下の沢	古瀬、田形
	10. 9～10.10	巻機山・米子沢	寺島、古瀬、田形、渕澤
	10.16～10.18	冬山偵察・燕～槍ヶ岳	寺島、古瀬
	10.23～10.24	春山偵察・尾瀬	古瀬
	10.31～11. 2	春山偵察・火打、妙高	古瀬、渕澤
	10.31～11. 1	冬山偵察・五竜岳	寺島、田形
	11.27～11.28	丹沢主脈	古瀬、渕澤、吉武
	12. 4～12. 5	雪上訓練・富士山	寺島、古瀬、田形、渕澤
	12.16～12.20	冬合宿・遠見尾根～八方尾根	寺島、古瀬、田形、渕澤
1994	1. 4～ 1. 7	八ヶ岳中部	古瀬、渕澤、吉武
	2.22～ 2.28	プレ春合宿・吾妻天元台～雄国沼	田形、古瀬、渕澤、吉武
	3. 8～ 3.15	八ヶ岳南部	寺島、古瀬、渕澤、吉武、山内(OB)

1994

部長
部員
4年　古瀬　泰介(CL)
3年　渕澤　貴子(SL)
2年　吉武みゆき
1年　大谷　公重
　　西井　薫
　　安部、福元、長尾、中居
針葉樹会学生担当幹事
　　西牟田伸一
　　天羽　康之

春合宿（至仏山）

【参加メンバー】古瀬、渕澤
【期間】１９９４年3月25日～31日

3月25日（雪）
ゲート出発(9:55)―津奈木橋(11:55)―鳩待峠(15:15～15:25)―山の鼻(17:25)
だらだらした林道をひたすらスキーで登る。津奈木橋から3本目の橋から左岸の斜面を北に進み、鳩待峠手前のジグザグの斜面を突っ切って直登する。鳩待峠からの下りは最初は一気に滑り降りるが、川におりてからはひたすらラッセルである。雪は浅いが、ほとんど傾斜が無いので疲れる。途中で天気図をつけ、時間オーバーで山の鼻に着く。

3月26日（快晴）
起床(4:00)、出発(6:40)―尾根取付(8:35)―１７７０ｍ(14:05)
猫又川は雪に埋まっていて問題無く渡れた。二股の間の尾根に取り付くとすぐに深いラッセルの急登。こまめに先頭を交代しながら進む。１７７０ｍからは腰まで埋まる斜面を掘り進むようにして登った。雪が降り始め、視界も悪くなってきたので、2～3人テンがやっと収まる程度のスペースを見つけて幕営。

3月27日（吹雪）
沈殿

3月28日（快晴）
起床(4:00)、出発(5:30)―大白沢北の稜線(7:00)―平ガ岳(11:20)―デポ地点(13:15～13:35)―１９００ｍ付近(15:30)
途中ちょっと雪崩そうな雪面をトラバースしながら稜線に出る。東大のワンゲルの赤布があり役に立った。１９２０ｍからの下りは雪庇が張り出しているので西側を巻くが、ひどいヤブこぎや吹きだまりの壁があり苦労する。稜線に出ても雪の小山が連続していて滑る時にスピードを出せず思うように進まない。途中で余分な荷物をデポして白沢山に差し掛かると、左右に壮大な景観が展開し広々とした尾根歩きが心地よい。平ガ岳は広すぎてどこに山



中日新聞東京本社　『岳人　496 号』

頂があるのかよくわからず、適当な雪の上に「平ガ岳」の文字を書いて遊ぶ。目の前に真っ白に雪化粧した越後三山が横たわり、気軽に飛んで行けそうである。平ガ岳の下りはシュカブラがあり、思ったより滑りにくい。何度か転ぶがダイナミックな滑りを楽しむ。日が高くなるにつれ、腐った雪がスキーやシールにべったりと貼り付き、一歩一歩が重い。後半は転ぶ回数が目に見えて増えた渕澤の荷物を少し減らし、うだるような暑さの中、疲れきってテントを張る。

3月29日（曇）

起床(4:15)、出発(6:30)―ススガ峰(7:30)―1818m(8:45)―日崎山(9:40)―1668m(11:55)

ススガ峰の登りでは横着してトラバース気味に行こうとしたが、迷いそうだし雪崩が怖かったので稜線に戻る。広い尾根を快適に辿って行くが、ガスっていていま一爽快さに欠ける。途中、すぐ目の前をカモシカが走って行き、目撃した渕澤は大いに感動する。尾根が別れていてわかりづらいところもあったが、古瀬が大きな溝に気付かずにスキーで直進し、渕澤の視界から消えるまで何事も無く進む。尻もちをついた古瀬が行動打ち切り宣言し、風の弱いところを選んでテントをはる。

3月30日（快晴）

起床(4:00)、出発(6:00)―至仏山取付(7:20)―至仏山々頂(11:05～11:40)―山ノ鼻(13:40)

至仏山の取付まではうんざりするような大きな吹きだまりを乗り越え、ヤブをこぎ、シールの利きもほとんど限界のクラストした斜面をトラバースしなければならなかった。やっとのことで至仏山の直下まで来ると、登るのが嫌になりそうな、とてつもなく大きな山容が姿を現す。斜面はクラストしており、直登を避けて少し東寄りに登り過ぎてしまう。安定したところでスキーを外し、アイゼンを着ける。表面が固いので、体重を完全に乗せるとズボッと沈み、足に非常な負担がかかる。はっきりした稜線に出ると強烈な西風が吹き付け、スキーを付けたザックが風にあおられるので辛い。渕澤が古瀬の足跡をふらふらと辿り、時間がかかる。ムジナ沢の源頭部をトラバースして、山の鼻からの登山道に出ることにする。風は無いが、雪が深くてラッセルが苦しい。途中でスキーをつけると嘘のように楽になりほどなく山頂に着く。丘のように大きな山の斜面が突然平坦になり、目の前に覆いかぶさる白い壁が消えて青い空が広がり、一瞬めまいのようなものを感じる。眼下に広がる光景は、ほとんど「地球」と言う次元で目に映る。広大な空間に、意識が吸い込まれそうになる。

至仏の下りでは初めて山スキーの豪

快さを満喫できた。カッコよくターンを決めることはできなかったが、広大な、木一本無い斜面を、気の向くままに滑ることができる。樹林帯に入ると、べたべたの重い雪に変わり、渕澤がバテ気味になるが、何とか休まず、一気に山ノ鼻まで下る。中途半端な時間で、燧ヶ岳に行くがどうか迷ったが、結局カットすることにし、この日は山ノ鼻にテントを張った。

3月31日（快晴）

起床(4:00)、出発(5:40)―鳩待峠(7:05～7:20)―ゲート(9:45)

予想通りの快晴。あと一日予備日が多かったらと悔やまれる。初日とは打って変わってばっちりトレースがついていて快調に進む。キツツキのドラミングを聞きながら鳩待峠に到着。シールを外して、しばらく沢沿いを行くが、がりがりに凍っていてこわい。すぐに林道に戻り、がりがりと耳触りな音を上げながらスピードを上げる。想像以上にスピードが出て、抑えるのに足に力が入るので膝が疲れた。ツボ足で頑張っているパーティーが残して行く足跡に苦労する。最後の登り坂を越えながら、一年が終わったと言う実感をかみしめた。

（文責　渕澤）

夏合宿

【参加メンバー】古瀬（CL）、渕澤、大谷、西井

【期間】1994年8月5日～14日

8月5日（晴）

上高地(7:50)―明神(8:40)―徳沢園(9:40)―横尾(11:10)―一の又小屋(12:31)―槍沢ロッジ(13:35)―水俣分岐(14:55)―殺生(19:00)

前日までに急行「アルプス85号」で松本まで出ておく。上高地につきザックをあけると水用タンクが入っていなかった。（アホツ!!）これほどの大荷物を背負って歩くのは私にとって初めてのことであり、早く進むことができない。荷物無きがごとく歩く他の3人と、軽い荷物を背負って歩くオバサン達がとてもうらやましい。槍沢ロッジで帰途に就く一橋大学山友会の先発隊に出会う。本隊は今日殺生で泊るとのこと。僕の遅足がたたり、殺生には19:00頃どうにか着くことができた。

8月6日（晴）

出発(7:30)―槍ヶ岳肩の分岐(8:05)―槍の穂往復(9:30)―双六小屋(14:15)―三俣蓮華小屋(17:05)

前日の遅着につき、みなで遅寝する。テントを出ると、2，3他のテントがあるだけだった。槍の穂往復がとても混雑していたため、無駄な時間を過ごしてしまう。双六小屋で大谷の小学校の恩師と出会う。

8月7日（晴）
出発(9:35)―一ノ谷(11:30)
東沢を少しさかのぼり、テントをはる。皆は寝るが古瀬は釣りに行く。ボーズだったようだ。

8月8日（晴）
出発(5:35)―東沢(12:00)
ひたすら河原をさかのぼる。私はテントをはるとすぐ寝る。古瀬は今日も釣りに行く。
なぜか分からないが、イワナが釣れてしまう。ヤッター！と思っていたら一匹しか釣れなかったので逃がしたとのこと。この後私は合宿最終日までこのことについて「惜しいことをした」というようになる。

8月9日（晴）
出発(5:05)―東沢乗越(7:20～7:50)―水晶小屋(8:30)―岩苔乗越(9:20)―高天原山荘(11:25)―温泉(11:55～13:05)―湯の沢(14:55)―20mの滝
やっと谷から出ることができる。東沢乗越で差し入れのパインカンをあける。久しぶりにラジオ天気予報をきくと、沖縄当たりに台風が来ているらしい。高天原の温泉に入った後、廃道となった高天原―奥黒部ヒュッテ間の道を黒部川に出るために行くが、他の沢に出てしまう。そのまま下ってしまおうとしたが、滝がありザイルが下に届かないために断念。沢にテントを張る。

8月10日（晴）
出発(5:27)―廃道(6:05)―高天原山荘(7:40)―7薬師沢岩苔乗越分岐(7:50)―高天原峠(9:00)―B沢出合(10:52)―薬師沢小屋(11:30)―兎平(14:52)
予定通り廃道に出ることができるか、とても心配だったが、アッと言う間に出ることができ意外に思う。高天原の手前で一度道に迷う。なぜ、あそこで迷ったのかいまだに不思議である。兎平でたき火をする。

8月11日（晴）
出発(5:06)―五郎沢出合(6:39)―黒部五郎小屋(8:52)―黒部五郎岳(10:55～11:20)―黒部五郎小屋(12:20～12:40)―三俣山荘(14:50)
赤木沢出合でなぜか渕澤ひとり、冷たい水につかり、黒部川を上る。他の3人は冷たそうなので出合は巻く。黒部五郎岳は足を痛めた渕澤以外の3人で空身でのぼる。体の軽くなった私がいい気になって走っていくが途中でばてしまい「そろそろ休みませんか?」を連発するが認められず、ひいひい言いながらついていく。本来は黒部五郎小屋泊りなのだが、明日の計画がめんどくさそうなので三俣山荘まで行く。

8月12日（晴）
出発(5:25)―三俣蓮華岳(6:10)―双

六小屋(7:40)―鏡平・笠ケ岳分岐(9:00)―笠新道・笠ケ岳分岐(12:00)―笠ケ岳山荘(13:00)

台風が近いせいか風が強い、と私は思う。三俣蓮華岳では他のオバサングループのシャッターの嵐に出合い、早々とひきあげる。今日中に笠ケ岳に行くつもりであったが、ガスが出て来たので取りやめる。笠ケ岳山荘で1リットル１００円の水を4リットル買う。

8月13日（晴）

出発(4:22)―笠ケ岳(5:30～6:11)―笠新道分岐(6:51)―杓子平(7:26)―鏡平・新穂高分岐(9:34)

笠に登り、ご来光を仰ぐ。大谷は感動し、動くことができない。私も少し感動した。

下山はさすがに速く、予定の時間より早く着くが、鏡平・笠ケ岳分岐手前で渕澤がこけて顔を打つ。アスファルトにでたところで、今度は私がこける。気が緩んでしまったのだろうか、全行程を通して晴れていたことに感謝。

（文責　西井）

夏合宿（北海道　旭岳～黒岳～白雲岳～忠別岳～化雲岳～トムラウシ山～美瑛岳）

【参加メンバー】渕澤、吉武

【期間】１９９４年9月5日～9月10日

9月5日

旭岳ロープウエイ発(11:00)―姿見駅(13:10～13:30)―旭岳(16:40～16:55)―旭岳裏の幕営地(17:20)

少し薄曇りだが、気温は高い。平凡なだらだらした登山道を行く。旭岳の赤茶けた山肌が見えてくる頃から、ブランクの長かった吉武がバテ出す。姿見駅と池の分岐で監視員の人からトマトをごちそうになる。深いコバルトブルーに沈んだ池に名残を残しつつ、先を急ぐ。旭岳の上りで亀になった吉武の代わりに渕澤が天気図を取り、かなり時間オーバーで山頂に着く（結局、吉武が天気図をとれたのは8日と9日だけである）。３６０度の視界が広がり、傾きかけた太陽の赤い日差しが、周囲の山々の赤土の色を際立たせている。旭岳の下りは夏の間雪渓が利用されるため、それが消えてしまったあとは急で滑りやすく、仕方なく雪解け水の流れた後のような溝伝いに下った。夜は広い空を縦断する天の川を飽きず眺めた。

9月6日

出発(4:55)―間宮岳(5:30)―北海岳(6:30～6:35)―石室(7:22～8:20 黒岳往復)―北海岳(9:25～9:32)―白雲岳下分岐(10:45～12:30 白雲岳往復)―高根が原(13:50)―忠別沼(16:15)―忠別岳(17:20～17:25)―テン場(18:15)

快晴。稜線から上る朝日がまぶしい。

お鉢回りは南風が強く、体がふられる。忠別小屋まで進みたかったので、北回りではなく南回りにし、北海にデポして空身で黒岳往復とする。黒岳までは広々とした高原のような景色で、心がなごむ。高山植物が咲き終わってしまっているのが残念である。北海から白雲までは平野のような広々とした稜線を行くが、石の転がった道に吉武がバテ気味となる。白雲からは旭岳やお鉢回りの山が見渡せ、気持が良い。白雲岳分岐にデポしておいたザックの雨ぶたに入っていた渕澤のレーションが荒らされていたので、一瞬まさかと思ったが、すぐにカラスの仕業と判明。

白雲小屋までは短いが急な下りで、一挙に吉武のペースが落ちる。白雲止まりにしようかと考えたが、吉武の気力も十分だったので、進むことにする。高根が原は池塘を見下ろしながらの気持ちよい稜線歩きだが、人が少なくなり、熊の危険地帯に入るので、笛を吹きながら行く。途中少しヤブっぽいところがあるが、道はしっかりしている。忠別沼でまたも渕澤が天気図をとり、忠別岳に着くころには吉武は青い顔で気力・体力ともに限界の様子。下りが遅々として進まず、荷物を減らしても足の痛みは変わらないと見えて、ペースは上がらない。ひと雨きそうな天気で、忠別小屋に着く前に暗くなりそうだったので、仕方なく途中の広い登山道にテントを張る。夜半から雨。

9月7日

起床(5:30)、出発(7:15)―忠別小屋分岐(7:40)―五色岳(8:40)―化雲岳(10:13～10:27)―ヒサゴのコル(11:20～11:40)―天沼(12:20)―トムラウシ南沼(16:23)―トムラウシ山(15:35～15:52)

朝からガスで、時々雨がぱらつく。しばらく様子を見るが、視界は30メートル以上あり、天気図では天気は回復傾向にあったので、出発する。五色の手前あたりから時々晴れ間も見え始め、ヒサゴのコルにつくころには日も差し始めた。天沼にはサンショウウオもいたが、水を汲んでいく。途中に高山植物と庭石のような奇岩が、自然にできたとは思えないほど巧妙に配されたところがあり、トムラウシを借景にした日本庭園のようである。ナキウサギの姿に目を細めながら、急なロックガーデンを上り、トムラウシ山に着く。初めて頂上で我々以外の人に出会い、写真を撮ってもらう。

9月8日

起床(3:30)、出発(4:50)―二ツ沼(6:40～6:50)―コスマヌプリ(10:30)―双子池(12:10)

昨日までの吉武のバテ方を考え、早めに出ることにする。ガスっているが出発。ツリガネ山の前と後に一つづつ熊の巨大なフンの塊を発見。ところど

ころに足跡もあり、休憩の間もレーションを食べながら、とにかく笛を吹きまくる。途中1パーティーとだけすれちがったが、後は人の影1つ見えない静かな山行となる。広い稜線を継ぎ切るように伸びる一本道を笹をかき分けながら行くのは楽しいものである。久しぶりに、否はじめて日が高いうちにテン場につき、のんびりする。

9月9日

起床(4:05)、出発(5:17)―オプタテシケ山(8:15～11:35)―双子池(13:45)

昨夜雷雨だったので、低気圧は通過しただろうと思い、濃いガスの中出発。富士山のような大きさに登る気力も萎えそうだが、〃この山さえ越えれば…〃と自分を励ます。十勝側には時折晴れ間も見えるのだが、ガスは薄れる気配がない。雪渓がもうないので終始登山道を行く。1つ手前のピークからは狭い稜線となるが、雨交じりの突風でつらい。ようやく山頂についても、風が強く少し戻って休憩をとる。上空は晴れているようなので、しばらく様子を見ることにし、完全防寒体勢に入る。フライをかぶって天気予報を聞くが、強風注意報が出ており、雨も降って来たので、頂上からの景色はあきらめ、先に進もうとする。しかし、そこから先はせまい稜線が続き、風が強くなってきているので危険と判断、引き返すことにする。吉武が途中テントを張れそうなところを見つけるが、そこも風が強く双子池まで戻ることにする。テン場に着いた途端に豪雨になり、ドブネズミのようなみじめな気分でテントにもぐりこむ。

9月10日

起床(3:30)、出発(5:25)―オプタテシケ山(8:00～8:25)―ペベツ岳(9:30～9:50)―美瑛岳(12:43～13:02)―望岳台(16:25)

天候は良いはずなのだが、やはりガス。しかし、風は収まっているので出発する。オプタテの登りの途中で本格的にガスが晴れ始め、山頂からの展望に期待する。案の定手前のピークからは頂上の導標が見え、感激。富良野盆地が一望に見渡せ、十勝側から上がっては消える真っ白い雲の塊が生き物のように稜線をはっていく。ほとんど無風の気持ちの良い稜線漫歩である。ナキウサギが気軽に姿を見せ、心も軽やかになる。ペベツ付近から人が増え始め、ゴールが近いことを感じさせる。行動時間が予定で12時間近くあるので美瑛富士止まりを考えていたが、「美瑛に降りれる。美瑛に降りれる。」とうわごとのように繰り返す吉武の頑張りが功を奏してか、予定通りに美瑛につき、その日のうちに下山することにする。美瑛岳の登りは単調なガレの連続でうんざりしてくるが、トムラウシ山のロックガーデンで自称「高所恐

怖症」の吉武が這うように進んでいたのを思い出し、気を引き締める。山頂からは噴煙を上げる十勝岳と、その前に広がる大崩壊の迫力ある光景に満足し、いよいよ急な西尾根のくだりである。吉武がおっかなびっくりくだるので時間通りに行くか心配したが、下山パワーでなんとか日が暮れる前に望岳台に着く。親切なオジサンに温泉まで送ってもらい、汗を流した。入浴後のジュースが滅法うまい。

（文責　渕澤）

冬合宿（黒部五郎岳）

【参加メンバー】古瀬（CL）、渕澤、吉武、大谷、西井

【期間】１９９４年12月14日～23日

12月14日

神岡の駅でビバークする。雪が少しちらついており、明日が心配である。

12月15日

早朝タクシーで打保まで。雪のためにタクシーが偵察で行った時より手前までしか入らない。そこからひざ丈のラッセルがはじまる。山道に入るとワカンをつけた。１２５０から先は雪崩の心配はなさそうなので夏道通しに行く。途中で支沢（地図上では１３５７地点の上部に書かれている。）に入りそうになるが、すぐ引き返して夏道に戻る。傾斜が急になる頃から腰丈のラッセルが続き、古瀬、渕澤、大谷の３人でラッセルする。水の平におりる時は赤布のついていた尾根通しには行かないで、途中から尾根の右側面に下りていく。傾斜がきつく雪がゆるいので、足元が少々不安であったが、何とかすすめた。今日のテン場は１８４２ｍの下の方。夕食はスキヤキ。明日からは乾物のみ。

12月16日

今日も前記の３人による腰までの、ラッセルが続く。１８４２、１９１８の上部の平なところは方向が分かりにくいが、赤布もあり、磁石を使いながら進む。寺地山直下で行動を打ちきる。実は寺地山まではそんなに時間はかからなかったので、登ってしまえば良かったという反省が後で出た。夜は月が冷たく輝いて雪面に反射していた。西の方の山の斜面にはスキー場の明かりが見えた。

12月17日

小屋まで深いラッセル。残りの二人も初めてラッセルを経験する。小屋も簡単に見つかり、午後からは明日のためにラッセルをつけておく。小屋からは水が出ていた。

12月18日

沈。昨日のラッセルがむなしい。雪

が降りやまず、風もあり、小屋の中に張ったテントの中でおしるこを食べる。

12月19日
　沈。

12月20日
　晴れて稜線付近が見え隠れしているが、出発する。ラッセルを交代しながらすすむ。前にラッセルの後を着けた時は、大きな沢の右岸をいったので、今度は左岸に行く。吉武は空身でラッセルをして荷物を取りに行ったあと、疲れて遅れてしまう。２３５０辺りで曇って風雪が強まったので２１５０あたりにおりてツエルトで待機する。このあたりは少し風が弱まっている。時々晴れ間が見えるだけで風が収まらない。涙をこらえて？小屋まで下る。すると谷から雲が全部上がって来た。予想していた移動高が来たらしく、再び出発。先程の強風がうそのようで、きょうは２４５０の上部あたりにテントを張る。このあたりはクラストしており、下級生のアイゼン歩行の練習をする。夕方は山が赤からピンク、紫に染まっていき、最後に富山湾がくっきり浮かび上がった。風が強くなりそうなのでブロックを積む。

12月21日
　ここは上部がもろいクラストで下層は親切。歩きにくい。稜線は爽快。後立や黒部の源頭がよく見える。

12月22日
　アイゼンをつけて稜線漫歩。黒部五郎岳の下で荷物をデポし、上級生２人は空荷で登る。傾斜はきつい。登頂。下部では足がもぐるが、上部ではアイゼンがよく効く。気を引き締めて黒部五郎岳をくだる。神岡新道の下りは少し急で吉武遅れる。ワカンの紐がはずれた。

12月23日
　下りのラッセルは早めに進む。１カ所先頭が南の尾根に迷ったが、リーダーの指示で方向転換。赤布をみつけて夏道伝いに一気に下山する。帰りは村営バスに乗せてもらう。

（文責　吉武）



1994年２月　吾妻・磐梯
左から　吉武、田形、渕澤

1994年度　山　行　表

期　　間		コ　ー　ス	メ　ン　バ　ー
1994	3.25～ 3.31	春合宿・尾瀬	古瀬、渕澤
	4.23～ 4.24	奥多摩駅～雲取山（石尾根往復）	古瀬(CL)、渕澤(SL)、吉武、安部、大谷、西井、福元
	4.28～ 5. 3	海谷頸城（鉢山～昼闇山～金山～雨飾山	古瀬(CL)、渕澤(SL)、吉武
	5.14	丹沢（小川谷廊下）	古瀬(CL)、渕澤(SL)、吉武、長尾、大谷、西井、福元
	6. 5	川苔山（逆川）	古瀬(CL)、渕澤(SL)、大谷
	6.16～ 6.19	雪上訓練（南アルプス大樺沢）	古瀬(CL)、渕澤(SL)、吉武、長尾、大谷、西井、福元、中居、引地OB、田形OB
	6.26	小坂志川　湯ノ沢	渕澤(L)、吉武、大谷
	7. 5～ 7. 7	東北　船形山　大倉川　笹木沢	古瀬、山内OB
	7.16～ 7.17	八海山	渕澤(L)、大谷、西井
	7.30	丹波川本流	古瀬(CL)、渕澤(SL)、大谷、中居、西井
	7.31～ 7.31	水根沢	古瀬(L)、大谷、中居、西井
	8. 5～ 8.14	上高地～槍沢～三俣蓮華～高天原～薬師沢～笠ケ岳	古瀬(CL)、渕澤(SL)、大谷、西井
	9. 5～ 9.10	大雪山	渕澤(L)、吉武
	9.12～ 9.17	会越（未丈ケ岳大鳥沢支流滝ノ沢、コウノキ沢～御神楽沢）	古瀬、吉田OB、鮎沢OB
	9.23～ 9.25	ＯＢ山行　徳沢周辺	古瀬(涸沢～5,6のコル一奥又白)、大谷(北尾根～前穂)、吉武(パノラマ)
	9.25～ 9.26	北穂高岳～奥穂高岳	大谷
	10. 8～10. 9	巻機山	渕澤(L)、西井
	10.16	奥秩父（豆焼沢）	古瀬(CL)、渕澤(SL)、大谷
	11. 3～11. 4	寺地山	渕澤(L)、吉武、大谷
	11. 7～11. 8	上州武尊	吉武
	11.12～11.13	会津駒	渕澤(L)、吉武
	11.27～11.27	御前山、大岳山（ボッカ訓練）	古瀬(CL)、渕澤(SL)、吉武、大谷、西井
	12. 3～12. 5	富士山（雪上訓練）	古瀬(CL)、渕澤(SL)、吉武、大谷、西井、田形OB
	12.14～12.23	黒部五郎岳	古瀬(CL)、渕澤(SL)、吉武、大谷、西井
1995	2.14～ 2.15	黒姫山スキー練習	渕澤(L)、大谷、西井
	2.15～ 2.20	文登研山スキー講習会(立山周辺)	吉武
	2.21～ 2.26	八ヶ岳	渕澤(L)、吉武、西井、田形OB
	3. 3～ 3. 8	蔵王	渕澤(L)、吉武、大谷
	3.18～ 3.24	上州武尊周辺	渕澤(L)、吉武、大谷
	3.27～ 3.27	安達太良山	吉武他2名(他大学W.V.)

1995

部長
部員
５年　古瀬　泰介
４年　渕澤　貴子(CL)
３年　吉武みゆき
　　大谷　公重(SL)
２年　西井　　薫
１年　宗像　　充
　　平岡　宏一
　　藍　　健樹
(年度末時点で、吉武、
大谷、平岡、藍は退部)
針葉樹会学生担当幹事
　　西牟田伸一
　　天羽　康之

活動概況

１年生が３人も入った喜びも束の間、冬学期から２人がやめ、吉武も資格勉強のため途中で抜けたうえに、大谷も退部。どんどん寂しさが増した。１人また１人と部員がやめていき、残った部員には「自分はやめられない」「最後に残った者負け」というプレッシャーがのしかかった。１年の宗像が春からいきなりリーダーになる、という悲惨な状態で、モチベーションを保つのは大変だった。今考えれば、ＯＢと交流を密にし難しい山に連れて行ってもらう、社会人山岳会に参加したり他大学と合同合宿したりするなど、「山岳部」としての活動を続けるための方法を模索するべきだったかもしれない。

技術面では渕澤は明らかに力不足、トップを張ってバリエーションルートをこなせる上級生がおらず経験不足の部員が多い構成で、どんなやりがいのある登山ができるのか模索した。そのなかで、これまではわりと手付かずで、いわば未知の領域である「秘境」を目指し、夏合宿では日高山脈縦走を計画した。沢も難しくなく、技術的な困難さはないが、これまでないタイプの「冒険」ができると踏んだ。

だが、ここで無理が生じ、後半の山行は「安全第一」に走った。このため、レベルアップを図る、活動の場を広げる、といった面ではこれといった成果を上げられなかった。前年に挑戦した山スキーの継続を目指し、春は渕澤と宗像で日光白根山に挑戦したものの、やはりゲレンデレベルでスキーの基礎ができていない状態では山スキーは難しい、と再認識させられた。

そんななか、いちおう引退した古瀬はＯＢと沢に岩稜にとバリエーションルートを登りまくり、大谷も岩好き、宗像は故郷九州の山を歩き、渕澤は山スキーに走りと、それぞれの趣向に合わせて個人山行を楽しんだ。まったく統一感のないメンバーであった。以下、合宿山行にしぼって報告する。

（渕澤　貴子）

春合宿（上州国境～上州武尊）

【参加メンバー】渕澤、大谷、吉武
【期間】１９９５年３月18日～23日

3月18日（雪）

六日町(6:50)＝バス清水(8:25)―井戸の壁上部(12:35)―１３５０ｍ(14:00)―ニセ巻機(16:00)―避難小屋(16:40)

林道を少しいってすぐにスキーを着ける。吉武がひっくり返っている間に後続に抜かれる。それでもスキーは速い。しかし右に行き過ぎて米子沢のすぐ隣を流れるべつの沢沿いに行ってしまい、その沢と米子沢を渡ってようやく尾根に取り付く。抜いたはずの後続隊はすでに陰もみえない。しかし、お陰でトレースはバッチリで、時々ガスの切れ間に現れる天狗岩を眺めつつ、いよいよ最後の急登である。このころになると吉武はもうフラフラで、強風にあおられながら死んだように付いてくる。吉武がニセ巻機の山頂で天気図をとり、凍った下りでは数え切れない程転びながらようやく小屋に到着。回りは既にテント村である。

3月19日（ガスのち晴）

起床(4:30)、出発(7:12)―巻機山(8:15)―米子頭山(10:55)―柄沢山

朝、ガスなのでしばらく待っていると突然ガスが晴れだし―快晴。思わず歓声が上がる。巻機の登りはガリガリで、急になるとスキーでは危険だったので、後一歩というところでスキーを外す。柄沢への稜線がくっきりと空に映える。稜線上はこの後もすべて硬くしまっていて、はっきり言って歩いた方がずっと速かった。稜線からは越後の山や谷川の険阻な容姿が望め、尾瀬の山々が寄り添うように並ぶ。空の青と雪の純白のコントラストが眼にいたい。しかし、柄沢までもう少しのところで突然ホワイトアウト。雪庇と空の境目がかろうじて見分けられる程度である。１８９０ｍからの下りで左の稜線に入りそうになったがすぐに気づいてトラバースで稜線に戻る。本当はそこが幕営適地だったのだが、渕澤の勘違いで柄沢の向うまで行こうとする。柄沢からは急な下りで、ガスっていては降り口がわからず、結局山頂に立派なブロックを作って泊まる。

3月20日（晴）

起床(4:30)、出発(6:15)―檜倉乗越(7:55)―檜倉山(10:45)―大烏帽子(13:30)―宝川源頭のコル(14:30)

朝は快晴で。大烏帽子までの稜線もはっきりわかる。やはり前日下手に無理して下らないで正解であった。下りはかなり急で大きな吹きだまりがある。エスケープルートの西尾根を確認しながら大きく回り込んで降りた。バシバシ篠竹を打ちながら下る。途中柔らかい雪の上にふわふわの雪がついたいやらしい急斜面があったので、ザイルを出す。その後もスキーをかついでかなり重くなった荷物と吉武の体力、吉武がトラバースを怖がっていることも考え、斜面が急で沢までさえぎるも

のが何もないということ以外はさして危険でもなく、アイゼンが良く効くところで何ピッチかザイルを出した。
トレースが付いていたのでルート取りはスムースにいったが、雪庇かズボズボ嵌るブッシュ帯とかいうところも何か所かあり、なかなか怖い。檜倉山からの下りは気温の上昇のため不安定になった雪がいやな感じであった。やっと大烏帽子に到着。ＪＰへののっぺりとした雪壁は登る気も失せる膨大さだ。宝川はいかにも滑りやすそうである。十分景色を堪能したのち、渕澤と大谷はスキーで、吉武は壺足で下る。雪庇からの雪崩が怖いのでできるだけ稜線上を滑る。渕澤、吉武、だいぶ遅れて大谷の順でコルに到着。テントを張る。この日ザイルを使って、渕澤が歩き始めた時、ふたをし忘れて銀マットを沢に落としてしまった。

3月21日（晴）
出発(6:05)―布引山―宝川の橋(13:50)―久保(16:30～17:10)―山口
この日も見事に快晴。この山域としてはあまりに天気に恵まれすぎで却って気持ちが悪い。朝のガリガリの斜面に苦労しながらも順調に進む。１６２６ｍのトラバースで〝まっすぐ〟という言葉がうまく通じず、吉武が滑って立木にぶつかって止まる。スキーを外して歩かせる。途中まで降りると、すぐに快適な斜面。直線プラスキックターンなどではなく、初めて軽やかに弧を描いて滑る事が出来る喜びにこれまでのすべての苦労が報われた気分になる。初めてシールを外して滑った後１３５０ｍの南に向かうはずだったが、大谷・吉武とも把握しておらず、先に滑った渕澤を見失った2人が瀬之沢方面に下ろうとし、戻るのに手間取った。下の方に行くにしたがい針葉樹林となり、うざったい。途中でスキーを外してワカンを着ける。しばらくラッセルしていた渕澤がハマったのを機にやけになってスキーを着けたが、大失敗。こけつまろびつの2人についてようやく林道に出た。林道はところどころ崩れたり、トンネルがあったりして何度もスキーを外し、面倒くさい。温泉に着いたころカラスの群れがギャーギャーうるさいので死体でもあるのかとドキドキしたが、なんと巨大なゴミの山であった。下山の喜びも台無しである。買い出しを済ませ、バス通りをてくてく歩き、ようやく食堂を見つけ、天気予報を見た後、スキー場の駐車場にテントを張った。

3月22日（曇ときどき晴）
リフト上(9:25)―１５１８ｍ(10:30)―１１９２ｍ手前(11:55)―１７００ｍ(14:30)
吉武がリフトに乗るのに少し手間

取ったが、順調に登る。途中何度か急登があり、スキーを外すが、前半と違って柔らかい雪の上を大体スキーで行く。避難小屋からは稜線上ではなく、いったん沢に下りてしばらくその沢を詰める予定だったが（沢と稜線は合流するが、稜線の上が歩きにくいし、雪崩の危険もあるため）、沢に下りようとした渕澤が滑落、10ｍほど下の沢底まで落ちたので大谷に稜線上を行くように指示、渕澤はそのまま沢を詰める。しかし、渕澤がしばらく行くと、後方で吉武のコールが沢の方から聞こえるので、何事かと大谷にコールをかけ、事情を聴くと、渕澤の後を勝手に付いてきて同じように滑落し、吉武も沢を詰めることにしたらしい。てっきり大谷と一緒に稜線を上がっていたと思っていた渕澤は爆発。大谷は渕澤が気づいていたと思っていた。吉武は渕澤が滑落したのではなく、豪快に滑り降りたのだと思い、危険だとは思わなかった。また、その後大谷に指示した言葉を後をついて来るようにという全く逆の方に勘違いしたということが原因であった。以後こういう意思疎通の欠如がないよう、十分に話し合い、しばらく行ってからテントを張った。

3月23日（曇ときどき雪）

起床(4:30)、テント発(10:35)―１９８４ｍ付近(12:00)―沖武尊(13:35)―１９４０ｍ付近(16:55)

上の方がガスに覆われているので、天気予報を聞きながらしばらく待機。今日中に武尊越えが出来なければどの道引き返してこなければならないので出発をためらうが、それほど降水確率も高くなく、武尊はあまり荒れる山ではないので出発する。１９８４ｍ地点に着くと次第に雲が晴れ始める。その先はかなり急でワカンを履いたままでは危険であった。大谷は後続の苦労などお構いなしに嬉々としてラッセルに打ち興じている。ちょっとした雪庇を越えて武尊に到着。あらかた雲の中だったが、中ノ岳から前武尊までは見渡せる。越えるべき最後のピークに立ち感慨もひとしおであった。中ノ岳までは普通、武尊牧場方面に降りる場合、左側をまくのだが、恐そうだったので右側を行く。のっぺりとした雪の斜面がちょっと雪崩そうだったが、無事稜線に出た。そこから中ノ岳まで少し下ってトラバースしようとしたが、大きくえぐれた沢状の斜面や岩にぶち当たり少し引き返して直上して夏道に出る。そこからの下りは雪質は良いがとにかく急で、後ろの2人はこけながら何とかついてくる。２０５０ｍからの核心部でスキーを外し、雪がしまってアイゼンがよく効く、という話とは打って変わったぐずぐずの道にアイゼンもはずし、ザイルを３Ｐ出した。下りきった１９４０ｍ付近で幕営。夜半風が強かった。

（文責　渕澤）

夏合宿（北海道、日高）

結論から言うと実力以上に背伸びした無茶な計画を立ててしまったなと思う。1年生3人のうち、報告書に「夏合宿は地獄のようでした。（中略）北海道に売りに連れていかれたけれど、買い手がつかないので仕方なくまた本州へ連れ帰される奴隷のようでした」と書き残した平岡と、足を傷め「もうやってられません」と途中で下山した藍が冬学期に退部し、宗像だけになってしまった。まったくもって慙愧に耐えない。

夏合宿前に練習のため沢登りを何本かこなした。このうち大常木谷で、吉武が滝の落ち口を渡渉中、足を滑らせ滝つぼに落下、幸い怪我一つなく済んだが、あわや大事故という事態に。吉武は次の弥七沢で足を痛め、結局夏合宿不参加となった。沢登り練習に加え、ルート研究、ヒグマ対策など、事前の勉強にはかなり時間を割いた。それでも、現実は厳しかった。

稜線上には一切水場がなく、1日1回テント場で汲むことができるだけ。それも、最低でも標高差にして100mぐらいは藪をこいで沢に降りないといけない。現地に行って「水場が分からない」では済まされないので、地元山岳会に連絡をとって詳細を聞いた。にもかかわらず、実際行ってみると「稜線の右側に下りる」といわれていたのが、どうみてもそっちは崖で、斜面がゆるい左に下りて水を入手できたこともあった。

前半は猛烈な藪こぎの洗礼を受け、渇きに苦しめられた。何せテントをはれる場所にたどり着くまで、一滴の水も補給できないのだ。藪こぎ初日に平岡が脱水症状を起こしたとみえてまともに歩けなくなり、渕澤と大谷が交代でザックをピストン輸送した（自分のザックを置いて、平岡のザックを運びに戻るというやり方）。その大谷も藪に引っ掛けてザックが破れ（キスリングなぞ持って行くからなのだが）、体力を消耗していた（これは途中下山した藍のザックを借りることで解決）。水汲み中にうっかりポリタンクを落として穴を開けるうっかり者も1人や2人ではなく、水不足は深刻さを増し、朝テントにたまった水滴を集める涙ぐましい努力も強いられた。足をけがした藍が脱落を申し出たため、中間地点で唯一登山道がある夏尾根をいったん下山。もう藪こぎはまっぴらだったので、沢を上り返して稜線上の藪をカットすることにした。幸か不幸か雨で沢が増水し数日待機したため、体力はいくぶん回復した。

後半は沢登りが主体となったため「水がある！」と全員気力も戻り、順調に進んだ。だが、下山日にまた雨が降り、沢の増水を恐れて急遽長大な林道歩きが必要な尾根道のエスケープルートに変更。釣りに来ていた人にヒッチ


日高山脈概念図
千呂露岳
1890
ルベシベ山
1749
ピパイロ岳
1917
北戸蒔別岳
戸蒔別岳
1968
カムイ岳
1730
2052
鏡岳
1890
札内岳
1846
十勝幌尻岳
エサオマントッタベツ岳
1901
1799
ポンワッカ岳
カムイエクウチカウシ山
1979
1747
1823峰
コイカクシュ札内岳
1731
ヤオロマップ岳
1794
1599峰
1838峰
ルベツネ岳
1787
ペテガリ岳
1736
1531
中の岳
神威岳
1601
ソエマツ岳
1613
ピリカヌプリ
1631
トヨニ岳
1520
春別山
野塚岳
十幌岳
1457
幌尻岳
1819
戸蒔別川
ヤオロマップ川
札内川
中の川
ペテガリ川
ピリカヌプリ沢
ソエマツ沢
トヨニ沢
野塚川
十幌川
春別川

白水社　『日本登山体系　1』

ハイクさせてもらえて本当に助かった。予備日も含め日程をめいっぱい使ってのハードな合宿で、リーダーとしても、次から次へ起きるトラブルに終始ぎりぎりの判断を強いられる厳しい山行だった。

ただ、山自体は素晴らしかった。稜線上ではほぼ好天に恵まれ、雄大なカールや吸い込まれるほど美しい水の流れを堪能でき、見渡す限り人工物が一切ない、奥深い山塊の魅力を味わうことができた。くみ上げた水がもれてカメラが溺死し、最初の2日分くらいしか写真が残っていないのが悔やまれる。

なお、この山行に参加でなかった吉武は、寺島OBに北ア縦走に連れていってもらった。当時の報告書をみると、吉武には吐き気と戦いながらの苦しい山行で、台風で沈殿の憂き目にあい、槍岳も笠ガ岳も展望がきかなかったものの、「(鏡平小屋が)紅葉まっ盛りの中で2つの青く光った池に挟まれて立っている様はおとぎ話のよう」で、槍ヶ岳ではブロッキング現象も見られたという。

【参加メンバー】渕澤、大谷、西井、宗像、藍、平岡

【期間】1995年8月1日～15日

8月1日、2日

大洗港―(フェリー)―苫小牧港

8月3日(曇)

渕澤さんと苫小牧港で合流(先に北海道に帰省していたため)。日高本線に乗り、静内駅へ向かい、次にタクシーに乗り換えペテガリ山荘へ向かう。途中、営林署で届を出し、「熊」情報を聞くが、最近は報告がないとのことで一同安心。ペテガリ山荘は素晴らしい。というのは2階建てで毛布や布団までもあるからだ。明日の行程を思いつつ早めに寝る。

8月4日(晴のち曇)

4:00起床、5:10出発。最初は沢沿いを歩くが、次第にトドマツの造林やクマザサの茂みが現れる。6:35尾根道に出てアップダウンがはじまる。7:10 1050m峰に到着するが、途中、ヒグマの糞を発見し、ホイッスルを吹きつつ行く。10:50コルに到着するがその後の500m連続急登はつらい。平岡バテバテになりながらも13:05ペテガリ山頂に到着。写真を撮り、小休止するとハイマツの軽い藪こぎをしながら尾根歩き。15:15Cカール分岐15:40Cカール着。

8月5日(曇のち晴)

3:30起床、5:00出発。6:00ルベツネ南峰に到着。この後、アップダウンのない藪こぎが続く。7:40ルベツネ山頂、8:55 1688m峰を過ぎると藪こぎが少しきつくなる。10:40 1469m峰を過ぎると猛烈なやぶになる。

13:00 １６００ｍ峰に到着。ヤオロマップでの露営から１６００ｍ峰のそれに変更。

8月6日（晴ときどき曇）

3:55 起床、4:50 出発。寝過ごす。雲海が素晴らしい。藪は相変わらず激しく、ついに大谷さんのキスリングが裂ける。8:30 １５６９ｍ峰 11:55 ヤオロマップ頂上に到着。稜線は徐々に快適になるが、気温が高すぎる。13:30 １７５２ｍ峰で平岡がダウン。渕澤さんが平岡を銀マットであおぐ。結局平岡の荷をボッカすることに。16:35 コイカクシュサツナイ頂上に到着。渕澤さん、西井水汲みに 16:50 出発、18:30 戻る。

8月7日（曇のち雨）

4:30 起床。7:10 出発。下山か続行かでもめ、藍を下山させることに決定。というのは昨日足を痛めたためだ。夏尾根（エスケープルート）を下り、沢の出合いに 10:50 到着。11:50 出発。無線が使えず、ヒュッテにタクシーを呼ぶことが出来ない。途中会ったおじさんに自動車に乗せてもらうことに決定。14:10 林道に出て藍と別れる。14:50 札内ヒュッテに到着。

8月8日（雨）

札内ヒュッテで沈殿。札内川増水

8月9日（雨）

出発(10:05)―七ノ沢出合(12:05)
増水のため半沈。

8月10日（曇）

沈殿。16:00 東海大四高校の山岳部が下山してくる。八ノ沢と七ノ沢の間の中ノ沢に閉じ込められていたらしい。彼らに詳細な巻き道を教わる。

8月11日（曇のち雨）

3:30 起床、4:40 出発。七ノ沢と八ノ沢の間の昨日教わった巻き道を通る。これが終わると河原歩き。8:05 八ノ沢出合に到着。川原歩きを続けていると大雪渓が現れる。中の俣の方面に行き路を間違え、大滝（１００ｍ近い）に沿ってひたすら登っていく。すると急に平地すなわちカールに着く。15:30 八ノ沢カールに着く。白い花が満ち溢れる幽玄なカールだった。

8月12日（晴）

3:30 起床、4:45 出発。6:45 カムイエクウチカウシに到着。

白、黄、赤、ピンクの花々に囲まれた美しい山。路も藪こぎがなく、すなわち整備され歩きやすい。10:00 １９１７ｍ峰、11:50 春別岳に到着。札内分岐、エサスマントツタベツの間は再び藪こぎが現れつらい。17:29 エサスマントツタベツに、18:05 北カールに

到着。平岡がバテる。

8月13日（曇）

5:00起床、6:05出発。カールの中で新しいヒグマの糞を発見、皆緊張。滝が一つ難しい所があったが、それ以外はハコがあるくらい。大常木谷で鍛えた我々に「恐怖」という文字はない。10:15上二股、12:27新冠二股に到着。たき火をして、服を乾かす。

8月14日（曇のち晴）

3:30起床、4:45出発。新冠二股を出て七ツ沼カールを目指す。大きな転石帯が現れた。歩きづらい。ナメ滝から「核心部」に突入。赤いテープの誘導があったが、巻き道を進み、後に続く滝を越えていく。そして小滝を登るといった急登が続く。10:45七ツ沼カールに到着。高山植物は少し遅すぎたようだ。12:25カールを出発し、稜線上に出て、空身にしてトッタベツ岳へ。13:15頂上に到着。15:45幌尻岳のコルのテン場に到着

8月15日（雨のち曇）

3:30起床、4:45出発。雨が我々をたきつけ、「下山パワー」を発揮して下降するが、その後の林道歩きを思うとスピードが落ちる。8:30奥新冠ダムに到着。その後焼く16㎞林道歩き。14:55発電所近くにある糸納峰山荘に到着。新冠方面に行く車にタクシーを呼んでもらうことにして待つが、18:00になっても来ない。どうやらタクシー会社が呼び逃げを恐れたようだ。18:05第一陣として渕澤さん、平岡、宗像がヒッチハイクで新冠に向かい、20:40到着。渕澤さんは折り返しタクシーで山荘に第二陣を迎えに出発。24:00過ぎ、渕澤さんを含む第二陣も新冠に到着。新冠駅で寝る。

（文責　平岡）

冬合宿

当初、荒川三山を計画したが、偵察の結果、夏合宿後は気弱になっていたこともあり、自分たちの実力では荷が重いと判断。鳳凰三山～甲斐駒・仙丈岳へと一挙にレベルダウンした。ちなみに荒川三山の偵察山行では、遅れ気味の宗像がげーげー吐きながら歩いていたと聞き、やつの体力に一目置いていた渕澤はびっくりした。そんな時もあったのだなあ。

冬の南アは雪が少なく、ラッセルも楽勝。「これを冬山と言っていいのか」と疑問がわく。やはり南アは春まで待つべきだ。ほぼ唯一のラッセルか所では、宗像がぶっちぎりで先頭を歩き続け、今の活躍の片鱗を見せる。

甲斐駒で期待していた岩稜歩きは雪がほとんどないので全く怖くなく、アイゼン・ザイルの重装備が若干滑稽に見える。あまりにもったいないので「こ

こなら良いんじゃない?」と1ヶ所だけ短いザイルを使ってみた。小屋があるのに意味もなくテントをはり、何とか冬山らしい体験をしてもらおうと空しい努力も。西井が、仙丈岳の何ということもない浅い雪のトラバースで一人怖がっていたのはほほえましい。

全体として非常に物足りなく感じたが、天候に恵まれ景色も上々、西井や宗像にとっては良い山行になったようだ。こんな中途半端な冬合宿でごめん、と思っていた渕澤だが、宗像が「冬合宿は良かった」としみじみ言うのを聞いて、色んな意味で感慨深かった。

冬合宿（鳳凰三山、甲斐駒ヶ岳、仙丈岳）

【参加メンバー】渕澤、西井、宗像

【期間】１９９５年12月14日～19日

12月14日（晴）

夜叉神峠入口(6:55)―夜叉神峠(8:00)―杖立峠(9:10)―苺平(12:15)―南御室小屋(13:00)

タクシーで夜叉神峠の入口まで行く。鳳凰三山にはまだ雪がなく、早く進めるのが嬉しい半面、物足りなさを感じる。結局雪のないまま南御室小屋まで行く。薬師小屋は有人で、テン場はないという看板があったので、ここの冬季小屋にテントを張り泊まる事にする。

12月15日（雪のち晴風強し）

南御室小屋(14:00)―２６００m地点(15:15)

朝、昨日とは打って変わり、外は吹雪いており、小屋の中にも隙間から雪が吹き込む。12:00頃、外に出るとかぜは依然強いものの雪はやんでおり青空も時々見える。とりあえず明日のために小屋の直後の急登だけでも越えておこうか、ということになり、ちょっとだけ登り、テントを張る。

12月16日（晴、風強し）

２６００m地点(7:00)―薬師岳(8:00)―地蔵岳分岐(9:10)―地蔵岳往復(9:40～10:05)―高峰(12:05)―白鳳峠(13:30)―広河原峠(14:30)―早川尾根小屋(15:30)

寝坊する。薬師小屋には人はおらず、どうも裏には冬季小屋があるみたいだったが、たしかめずに先を行く。山には申し訳程度に雪が着いているだけで、夏道を行くのとほとんど変わらない。しかし、風は強く、コーヒーを飲もうとしたら口の直前で風が吹き、コーヒーは皆吹き飛んで合羽に着いてしまった。薬師岳の頂上でこの山行で初めて人に会う。高峰の下りからようやく雪が着き始める。早川尾根小屋は無人であったが、無意味に外にテントを張る。

12月17日（晴、風弱し）

早川尾根小屋(6:45)―２５５３m

(8:00)―アサヨ峰(12:05)―栗沢山(13:30)―仙水峠(14:45)―２３５０ｍ(15:15)

昨日は雪がついたとはいうものの先行者がいたのでラッセルはなかった。今日が初ラッセルである。２５５３ｍとアサヨ峰のコルの一枚岩は、落ちると痛そうだがワカンを脱いで行けば危なげなく行ける（と思う・・）。ワカンを着けたままでいったのでちょっと怖かった。アサヨ峰の登りは急登で雪もまだ固まっておらず登りにくい。一カ所小さく雪崩れた跡があった。仙水峠で泊る予定であったが風がビュンビュンなので少し登って泊まる事にする。

12月18日（晴、風弱し）

２３５０ｍ(6:55)―駒津峰(7:50)―甲斐駒岳(9:45)―駒津峰(11:10)―２３５０ｍ(12:05)―仙水峠(12:20)―長衛小屋(13:30)―２１５９ｍ(14:55)

甲斐駒の登りは風もなく暑いくらいである。遠目には雪がたくさん付いているように見えたが、岩の色だということが近づいてわかった。駒津峰の上まで行くと少し風が出てくる。偵察のときはこの直登を上るのは怖いと思っていたのだが、思ったより大したことはなかった。北沢峠から仙丈に向けて９合目辺りにテントを貼る。

12月19日（晴、風弱し）

２１５９ｍ(6:00)―大滝頭(7:00)―小仙丈岳(8:10)―仙丈岳(9:30)―北沢峠(11:50)―丹渓山荘下(14:30)―戸台(16:40)

小仙丈の登りは特に森林限界直前の登りがきつく、ラッセルを代わり損ねた宗像が一人で苦しがっており、１年生がしの竹を持つのは良くないとひたすら呟く。小仙丈以降、雪はごくわずかだが、トラバース道に積もった雪が鬱陶しく、私一人で怖がっていた。仙丈岳の頂上は風もなく、空は晴れ、絶景であった。戸台の途中から営林署のおっちゃんの車に乗せていただき、最終の１便前のバスで伊那大島まで帰る事ができた。

春合宿

渕澤は参加していないので、宗像による当時の報告書から。

完全装備のはずがスノーバーを忘れ、不安の中でスタート。赤岳鉱泉で、お鉢周りのみ山スキーで、という古瀬と合流。宵っ張りの韓国人パーティーのせいで寝不足に。一橋ワンゲルに遭遇し、山岳部の存在意義のゆらぎに思い悩む場面も。「来年は絶対バリエーションルートをバンバン登ってやる、と誓って」いたという。古瀬はこけつまろびつ下山。

北横岳を過ぎたところで、尾根からはずれて谷に入り込み、雪の中をもがいて何とかルートを見つけた。やはり

どんな山もなめてかかってはいかん、と痛感したとのこと。にもかかわらず、双子池の下りでまた道を間違え、消耗。宗像は「もっとレベルの高い山行をしてもよかったのではないかと思う一方、(中略)問題点も数多く噴出し、自分らの実力はまだまだであると思い知らせてくれた点で、それなりの成果があったと言えなくもない合宿だった気がする」と結んでいる。この経験が、その後の飛躍につながっているのであろうか。

1995年度　山　行　表

期　間		コ　ー　ス	メ　ン　バ　ー
1995	4.15～ 4.16	西穂高岳	古瀬、大谷
	4.22～ 4.23	乾徳山（奥秩父）	渕澤、吉武、大谷、西井、藍、小倉、平岡
	5. 2～ 5. 4	火打山、妙高山（頚城）	渕澤、大谷、吉武、西井
	5.26～ 5.28	北岳大樺沢（雪上訓練）	渕澤、大谷、吉武、藍、平岡、宗像
	6.17	葛葉川本谷（丹沢）	渕澤、大谷、吉武、藍、宗像、古瀬
	7. 1～ 7. 2	奥多摩（ボッカ訓練）	渕澤、大谷、吉武、藍、宗像、平岡
	7. 7～ 7.10	奥多摩（一之瀬川　竜喰谷、大常木谷）　プレ夏合宿　Ⅰ	渕澤、大谷、吉武、藍、西井、宗像、平岡
	7.22～ 7.23	丹沢（葛葉川本谷）　プレ夏合宿Ⅱ	渕澤、大谷、吉武、藍、西井、宗像、平岡
	8. 1～ 8.15	日高（北海道）　夏合宿	渕澤、大谷、藍、西井、宗像、平岡
	8. 7～ 8. 9	北又谷	古瀬、古田
	9. 1～ 9. 5	涸沢（個人山行　北ア）	古瀬、大谷、宗像
	9. 9～ 9.10	白口岳、中岳（久住）	宗像
	9.23	ジダクラ沢（奥多摩）	大谷、上山(部外者)
	9.23～ 9.26	上高地～槍ヶ岳～双六岳～笠ヶ岳	吉武、寺島OB
	9.25～ 9.26	大崩山（宮崎県）	宗像
	10. 7～10. 8	清津川釜川右俣	古瀬、田形OB
	10.21～10.23	荒川三山	渕澤、宗像
	10.29～10.30	甲斐駒ケ岳～小仙丈岳	渕澤、西井、宗像
	11. 6	二ノ塔～三ノ塔～塔ケ岳（丹沢）	宗像、藍
	11.11	北八ヶ岳	西井、宗像
	12. 2～12. 3	富士山（雪上訓練）	渕澤、西井、宗像、田形OB
	12.14～12.19	鳳凰三山、甲斐駒ケ岳、仙丈岳	渕澤、西井、宗像
	12.27～ 1. 1	明神岳Ⅴ峰南西尾根～前穂高岳～奥穂高岳～涸沢岳西尾根	古瀬、古田
1996	2.10～ 2.12	八ヶ岳赤岳主稜赤岳南峰リッジ中央稜	古瀬、田形OB
	2.21～ 2.25	赤岳鉱泉～天狗岳～蓼科	西井、宗像、(古瀬)
	3. 9	無意根山（札幌）	渕澤
	3.12～ 3.13	天神尾根（谷川岳）	西井、宗像
	3.23～ 3.26	切込湖周辺・白根山（日光）	渕澤、宗像

1996

部長　針葉樹会学生担当幹事
部員
２年　西井　薫
　　宗像　充
１年　岩浪　靖
　　立木　啓太
　　古瀬　泰介
　　渕澤　貴子

春合宿（八ヶ岳縦走）

【参加メンバー】西井、宗像、（古瀬）
【期間】１９９６年2月21日～25日

2月21日（曇）
美濃戸口バス停発(13:25)―赤岳鉱泉(17:25)
完全装備で重い荷物を担いできたと思ったのに、バスの中でスノーバーがないことが判明。取りに帰るわけにもいかず、不安を感じつつもとにかく歩き始める。ほとんど運動をしていなかっただけに、かなり苦しく、ゆっくりとしか進めず、着いた時にはもう暗くなっていた。夕飯の準備をする間もないままに、お鉢回りに参加する古瀬さんがスキーで到着し、我々の遅さを実感。夜中に韓国語と思しき言葉を話すパーティーが騒々しく帰ってきてなかなか寝付けない。

2月22日（快晴）
起床(5:00)、出発(6:55)―赤岳(9:20～9:50)―鉾岳(10:50～11:10)―横岳(11:30)―硫黄岳(12:20～12:40)―赤岳鉱泉(13:25)
結局ほとんど寝ることができなかった気がする。かなりの寒さだが天気は抜群だ。行者小屋への登りで今年の雪崩事故現場を通過したが、こんなところで、というのが正直なところで、雪崩の恐ろしさを考えさせられた。赤岳以降に一カ所なだれそうな斜面があったが、結局ノーザイルで通過する。途中、韓国人パーティーに会い、八ヶ岳はインターナショナルだなーと感心してしまった。赤岳鉱泉への下りでトレースを不用意にたどっていたら崖に出てしまい、ちゃんと地図を見てなかったのを反省させられた。赤岳鉱泉では一橋のワンゲルのテントらしきものがあり、帰りの電車の中で偶然彼らに会い、やっぱりそうだったのかということがわかった。ワンゲルに冬山やられちゃ何かうちの部の存在意義がないよなー、と情けないことを実感してしまった。この日古瀬さんは迷った末に結局下山してしまった。もっと早く決めとけばバスの心配なんかする必要もないのになー、と思いつつ、スキーで早速転んで出発する古瀬さんを見送る。後で聞くところによるとその後も



1996年2月　硫黄岳（八ヶ岳）山頂にて
左から　宗像、西井、古瀬

転び続けたらしい。

2月23日（曇ときどき晴）
起床(5:00)、出発(6:40)―硫黄岳(9:25)―夏草峠(9:55～10:10)―根石小屋(11:10～11:20)―東天狗(12:10 西天狗往復)―東天狗(12:50～12:55)―中山峠(13:30)―高見石小屋手前TS(15:00)

来年は絶対バリエーションルートをバンバン登ってやる、と誓って縦走に出発。硫黄からの下りで少しガスるが、問題ない。天狗の登りも問題なく、中々順調に中山峠に着いたので、TSに予定していた黒百合ヒュッテをやりすごして足を延ばしたら、ばてて高見石小屋の手前で力尽きてしまい、白駒池までは届かなかった。

2月24日（晴ときどき曇）
起床(5:30)、出発(6:45)―丸山山頂(7:45～7:55)―麦草峠(8:30)―大石峠手前(8:50～9:20)―茶臼山(10:00～10:15)―縞枯山（10:55)―雨池峠(11:05～11:20)―北横岳(13:15)―2370m付近TS(15:00)

ひたすらトレースのついた雪道を歩くだけであり、雨池峠までくると、スキーをしている人が大勢いて、そんなところをザックにメットをつけて歩いているのは場違いな気がした。時間は少し下がっていたが、ここまで順調に来たので双子池までは着くだろうと思って北横岳すぎるとトレースはなくなった。この辺には赤布を打ってなかったので、うかつにも尾根から外れて谷に入り込んでしまい、しばらく雪の中をもがいていたが、遅くなったので適当な所をTSと決め、さらにルートを探すとやっと見つけることができた。北八ヶ岳と思って舐めてかかっていたのかもしれない。読図力のなさに幻滅してしまった。

2月25日（曇ときどき晴）
起床(5:30)、出発(7:00)―大岳分岐下(8:05～8:15)―双子池小屋(9:25～9:40)―双子山(10:40～10:50)―将軍平(12:10～12:20)―蓼科山頂(13:00)―スズラン峠バス停(15:25)

初めての二人での合宿なので緊張感

がなかなか身に付かず、朝出発するのがどうしても遅れてしまう。双子池まではやっぱりラッセルで、そのうえ双子池への下りでは入口の所で又々間違えてしまい、こう度々間違えると、精神的にも肉体的にもこたえるのはまだまだ弱い証拠だ。蓼科山荘のところで時間的には下がっていたが、強引に越えてしまった。よく考えてみると、この山行では頂上で感動すると言ったようなことがあまりなかったような気がする。バス停では例のごとくバスがなく、次のバス停までラッセルするのがいやなので車道を歩く。途中何度かヒッチハイクを試みるが、スキー帰りのＲＶ車など見向きもしてくれなかった。結局近くの店まであるいてタクシーに乗り山行は終わった。二人とも経験が浅いため、経験を積むために蓼科縦走を春合宿としたが、もっとレベルの高い山行をしても良かったのではないかと思う一方で、ルートファインディング、読図、体力の不足、時間のルーズさと問題点も多く噴出し、自分らの実力はまだまだであると思い知らせてくれた点でそれなりの成果があったと言えなくもない合宿だった気がする。

（文責　宗像）

夏合宿（室堂～上高地）

【参加メンバー】西井、宗像、岩浪、立木

【期間】１９９６年8月2日～10日

8月2日（晴）

室堂(9:00)―乗越(10:00)―剱御前小屋(12:00)―剱沢小屋(13:00)

室堂に着くなり西井が磁石がないと言って騒ぎ出す。結局、西井は磁石のないまま30分後に出発する（磁石は次の日で見つかりませんでした）。初っ端からえらく反省する。最初は雷鳥沢を登っていこうと思っていたが、人が多いので、ちょっと遠回りをして、大日岳の稜線まで上って剱沢小屋に向かう。夕食のすき焼きに糸こんにゃくがないのがちょっと寂しい。

8月3日（晴）

剱沢小屋(4:50)―剣山荘(5:10)―一服剱(6:00)―前剱(7:15)―剱岳(9:00～10:00)―一服剱(11:50)―剱沢小屋(13:00)

まだ雪がついているということで、どんなものかと少し気にかけていたが、全く問題なく拍子抜けする。剣山荘を過ぎて少し登った辺りで、岩浪が腹が痛いというので剣山荘までトイレに走らせ、他の者は道の途中で20分ほど待ち、再び出発する。一服剱を過ぎた辺りで、今度は立木が腹痛を訴える。今さら小屋に戻るわけにもいかず、治まるのを待って出発することにしたが、治まらないので岩陰で済ませる。宗像の話では立木の姿は一服剱から丸

見えだったらしい。これ以後は順調に進み頂上で1時間休み下る。

8月4日（雨・霧・風強）

剱沢小屋(5:20)―別山分岐(6:10)―富士の折立(7:45)―雄山(8:15)―一ノ越山荘(8:55)―獅子岳(11:20)―ザラ峠(12:25)―五色ヶ原(13:25)

朝のうちは曇ってはいるが霧も薄く、まあそのうち晴れるかなと期待しながら出発する。別山分岐まで登ると風・霧も強いので合羽を着るために休憩を早めにとる。雄山の頂上へは金がかかるとのこと、もったいないのでやめにする。一ノ越山荘までの下りはひっきりなしの上りの登山客の行列がとても鬱陶しい。龍王岳の下りでは黒部ダムの湖面が見える。まだ霧の濃い五色ヶ原にテントを張る。張り終わった頃には青空が広がっていた。

8月5日（霧のち晴のち霧）

五色ヶ原(6:00)―鳶山(7:05)―越中沢岳(10:40)―スゴ乗越小屋(12:40)

朝から霧が濃いのと、加えて昨夜隣のテントが遅くまで騒いでいたのとで皆機嫌が悪い。越中沢岳のゆるい上りを登る頃には晴れ間が広がる。夕方、面前の赤牛岳が夕焼けに染まってとても美しい。

8月6日（晴）

スゴ乗越小屋(5:15)―間山(6:40)―北薬師岳(8:10)―薬師岳(9:10)―薬師峠(10:20)

久しぶりに日の出を見る。剱岳以後、1年生は出発前に長便をするので、出発が遅れ、上級生は不機嫌である。北薬師岳からは左手にカールが連続しており、また稜線の道も狭いため、なかなか休憩を取ることができない。薬師岳からは人も増え、薬師峠には10:30に着いてしまう。今までもあまりきつい山行をしてないので赤木沢出合まで行ってもいいかとも思ったが、明日、黒部五郎小屋まで10時間ぐらい行動するのもいいかなと思い、この日は皆でゴロゴロする。

8月7日（晴ときどき霧）

薬師峠(5:00)―薬師沢小屋(7:10～7:40)―赤木沢出合(9:20)―中俣乗越(13:10～13:35)―黒部五郎岳(15:05)―黒部五郎小屋(16:50'後発17:20)

時間がかかりそうなので薬師沢小屋までは早めに進む。沢を登っている間はずっと天気がよく、赤木沢の大滝まで和気あいあいと進む。滝を登った所で先頭の西井が全く何でもないところで迷い、10分ほどガサガサやる。岩浪はその途中で滑り、手を擦りむき、また霧も出てきて、和気あいあいムードは吹き飛んでしまい稜線までむっつりと登る。黒部五郎岳までは霧も濃く、

面白くなさそうな顔を4つ並べて、やはりむっつり登る。黒部五郎岳からは、途中で天気図をつける組と、先に小屋へ行って飯を作る組に分かれて下る。

8月8日（晴のち霧）

黒部五郎小屋(5:10)―三俣蓮華岳(7:30)―双六小屋(8:55～9:20)―硫黄乗越(10:10)―ナマ沢乗越(12:30)―槍の肩(13:40)

双六小屋から槍の肩まで6時間かかるということなので、あんまり遅いようなら双六で泊まるかな、と怠け心を起こしていたのだが、別段遅いこともないので、多めに休んでそのまま槍ヶ岳まで行くことにする。結構バテバテになりながら、槍の肩まで辿り着くと、肩にはまだテン場があるとのこと、殺生まで下りなくてすんだ、とホッとする。

8月9日（晴のち霧）

槍の肩(5:10)―南岳小屋(7:15～7:35)―A沢のコル(10:30)―北穂高岳(11:40)―白出乗越(13:35)

槍の肩から日の出を見た後出発。南岳小屋からは大切戸、プレ夏合宿で奥穂高岳～西穂高岳を経験しているせいか1年生も危なげなく慣れた調子でひょいひょいと進む。A沢のコルからの飛騨泣きは我々のすぐ前を行く団体が時々石を落としているようなので多めに休憩をとり、前との間を開ける。自分たちも石を落とすかもしれないので、後から来た2人のおじさんが先に出るのを待ったが、動きそうにないので先に動き始めると、おじさんたちもすぐ動き始めた。同じ事を考えていたらしい。北穂高山荘に涸沢岳に行く道が少し欠けているという張り紙が貼ってあったので山荘の人に聞いてみたが、実際行けるものなのかどうか、イマイチよく分からないので日和っていると、下ってきた人が全然問題ないというので安心して白出乗越に向かう。途中から雨も降り始め、霧もあり、どれが涸沢槍で、どれがドームなのかさっぱり分からなかった。乗越に着き、飯を食った後あたりから晴れはじめ、ジャンダルムから常念まで一望でき景色は最高である。小屋泊まりのおじさんのビールを見て、生唾を飲み込む。

8月10日（晴）

白出乗越(5:10)―奥穂高岳(6:00)―前穂高岳(7:50)―岳沢ヒュッテ(10:00)―上高地(11:50)

穂高岳ヒュッテを出るとき、どこかのテレビ局がきていた。奥穂高岳はプレ夏のときも登ったのだが、その時はガスっていたので標識しか見えなかった。今回は天気もよくガスもないので、奥穂高岳山頂がよく見える。しかし人が多い。奥穂高岳の頂上の標識の所にカメラだけが並んでいるのにはさすが

に閉口した。紀美子平に荷物を置き、前穂高岳に登る。紀美子平はザックで一杯、前穂高岳の頂上は人で一杯、なんとなく興ざめである。岳沢まで無理やり一本で下り、その後上高地までは各自が各自のペースで下りることにする。

（文責　西井）

『新葉樹』創刊のことば

僕がこの部に入ったとき、そのとき5年生だった古瀬さんが「これが最新号なんだ」といって渡してくれたのが『針葉樹14号』である。この10年以上前の最新号を今でもときどき開いてみては、OB総会のときただ飲んで騒いでいるだけの（ごめんなさい）OBたちが、実はすごいところに登ってらしたんだなあと思ったりする。また記録としても貴重だと思う。なぜか古本屋で一冊1400円で売られていたりするのだ（定価は10000円らしい）。そろそろ15号を作るころかなー、と言いつつ大体みんな卒業していくのである。

さて『新葉樹』とはただの僕の思いつきである。この人数では『針葉樹』を作るのは物理的に不可能である。とはいえ、慶応や学習院も最近、報告書を充実させているようだし、うちも表紙ばかりでなくて内容も充実させたいものだ（と思ったのは僕だけなのだが）。ということから、まったく関心を見せない西井さんと、ちょっと協力する気のある立木と、やる気ばかりが空回りする僕とで文章を持ち寄った（または持ち寄らない）のが『新葉樹』である。このかなり部が危機的な状況で『新葉樹』という言葉を持ち出すのは、春になり、それまでの枝だけの樹に青々と葉が茂る、そんなふうにこの部も元気に、息づいていきたい。そんな願いを込めたつもりである。そして、いつかは立派な「針葉樹」に育って行きたいものである（落葉樹の針葉樹って何だっけ）。さて内容は思いつきである。とりあえず、フリートークを書こうと言ってみた。文章の量は関心の程度を示しているだろう。僕の機関誌になっていなければ幸い。いつまで続くのかって？　創刊号が出てそれでおしまいというのはよくある話だが、まあ、僕が卒業するまでは続いていることでしょう。楽しんでいただければ幸いです。早く1年生こーい……。

（宗像　充）

冬合宿（燕岳、大天井岳）

【参加メンバー】西井、宗像、立木

【期間】1996年12月14日～19日

12月13日　急行アルプスにて離京。

12月14日（晴）

宮城ゲート(5:30)—中房温泉(9:50)—第1ベンチ(11:35)—第2ベンチ

(12:50)―第3ベンチ(14:50)
タクシーにて宮城まで入る。ここからはひたすら16㎞の林道歩きである。中房温泉で水を汲み合戦尾根の急登に入る。取り付き付近はほとんど雪がないが徐々に増え膝あたりのラッセルになる。予定は富士見ベンチまでだったが無理せず第3ベンチにテントを張る。

12月15日（晴のち曇）
TS発(7:15)―富士見ベンチ(9:45)―合戦小屋(11:15)―燕山荘(14:30)―燕岳(15:05)
悪夢は夜中に訪れる。起きてみると、なんとピッケル・アイゼン・メットのバンドがずたずたに切られていた。どうやら犯人はキツネのようである。西井さんのアイゼンは持ち去られるところだったようで2、3メートル離れた所に放置されていた。一同途方に暮れるがシュリンゲで代用するなどしてなんとか使える状態にした。合戦小屋をすぎ少し登ると合戦沢ノ頭に出る。視界が開け稜線の向こうに槍の穂先が見える。ここでアイゼンに履き替える。燕山荘直下の雪崩れそうな斜面も問題ない。燕山荘に荷物を置いて燕岳を往復する。岩峰群の中にある頂上からの眺めは最高。剱岳・立山から薬師岳、そしてはるか槍・穂高まで望める。戻って他パーティーのいない、きれいな冬季小屋にテントを張る。

12月16日（雪）
燕山荘TS発(6:10)―蛙岩(7:45)―為衛門吊岩(9:30)(1h)―切通岩(13:00)―大天井岳(15:50)―大天荘(16:10)
燕山荘から蛙岩までは1ピッチ。蛙岩はくぐるが篠竹などが邪魔で苦労する。為衛門吊岩は右側を巻こうとするが雪の状態が悪いのでザイルを張ってやや右側から直登する。切通岩は鎖を掘り出してさらに1ピッチ張る。トラバースルートは使わず直登し、頂上直下は右側から回り込む。天候が悪化してきたので、頂上でもゆっくりできず、すぐ大天荘の冬季小屋に入る。

12月17日
沈。かすかに東大天井岳が見えるが、風雪強い。

12月18日（雪）
TS発(6:15)―切通岩(9:00)―蛙岩(11:35)―燕山荘(13:00)―中房温泉(15:30)
天候は良くないが出発。大天井岳の下りで東側の斜面に少し入り込んでしまう。立木が滑りとっさにピッケルを刺して止まるなどアイゼンワークの稚拙さを痛感。トラバースして夏道の道標にでて、切通岩への下りで1ピッチ、ザイルを出す。為衛門吊岩ではザイルをフィックスしてクライムダウン。蛙

岩も来るときと同じように中を通り、燕山荘に早めに到着する。そのまま下りてしまうことにする。暗くなって中房温泉に着く。温泉に入ってビールを飲みさっぱりする。

12月19日（曇）
朝、のんびり出発。中房川には猿の群。長い長い林道歩きにうんざりした頃、宮城のゲートが見えてきた。

（文責　立木）

1996年度　山　行　表

期　間		コ　ー　ス	メ　ン　バ　ー
1996	4.28	日和田	西井、宗像、古瀬OB
	5. 3～ 5. 5	ゴールデンウィーク山行　槍ヶ岳北鎌尾根	宗像、古田OB、古瀬OB、渕澤OG
	5.25～ 5.26	新人歓迎山行　三峰～雲取山	西井、宗像、立木、松江
	6. 1～ 6. 2	雪上訓練　北岳大樺沢	西井、宗像、岩浪、松江
	6. 6～ 6. 7	つづら岩	宗像、立木
	6.15	日和田	西井、宗像、岩浪、立木
	6.23	三ツ峠	宗像、田形OB、古田OB
	6.29	個人山行　　逆川（奥多摩）	西井、岩浪、立木、古瀬OB
	6.29～ 6.30	日本山岳会谷川岳合宿　谷川岳	宗像
	7.13～ 7.14	プレ夏合宿　奥穂高岳～西穂高岳	西井、宗像、岩浪、立木
	7.21	プレ夏合宿　海沢（奥多摩）	西井、宗像、立木、松江
	8. 2～ 8.10	夏合宿　剱岳～奥穂高岳	西井、宗像、岩浪、立木
	8.24～ 8.30	文登研リーダー研修会　剱沢	宗像
	9. 6	日和田	宗像、立木
	9. 8	越沢バットレス	宗像、田形OB、古瀬OB
	9.12	日和田	宗像
	9.15～ 9.16	個人山行　北岳バットレス四尾根	宗像、田形OB、古瀬OB、古田OB、前神OB
	9.22	個人山行　九州祖母山系川上本谷	宗像
	9.27～ 9.29	個人山行　尾瀬・燧ヶ岳、至仏山	岩浪、立木
	9.31	三ツ峠岩登り	斎藤、外池
	10. 6	広沢寺	宗像、古瀬OB
	10.10～10.11	個人山行　小川山	宗像、西牟田OB、田形OB、古瀬OB
	10.10	ボッカ訓練　丹沢・大倉尾根	西井、宗像、立木
	10.12～10.13	冬山偵察　北アルプス・燕岳～蝶ヶ岳	西井、宗像
	10.16	日和田	宗像、立木、渕澤OG
	10.19～10.20	春山偵察　北アルプス・五竜岳	宗像、立木
	11.17	湯河原幕岩	宗像、立木、田形OB、古瀬OB
	11.23	広沢寺	西井、宗像、立木、田形OB、田中（一橋大WV）
	11.29～12. 1	雪上訓練　富士山・吉田大沢	西井、宗像、立木、田形OB、田中（一橋大WV）

期　　間		コ　ー　ス	メ　ン　バ　ー
1996	12. 8	湯河原幕岩	宗像、田形OB
	12.13～12.19	冬合宿　北アルプス・燕岳～大天井岳	西井、宗像、立木
	12.25	鷹取山	宗像、立木
	12.29～ 1. 1	個人山行　北アルプス・鹿島槍ヶ岳天狗尾根	宗像、田形OB、古瀬OB
1997	1. 3	日和田	宗像、古瀬OB
	1.12	鷹取山	宗像、立木、田形OB
	1.15	城ケ崎	宗像、田形OB
	1.17～ 1.18	山スキー　飯縄山、黒姫山	宗像、立木、田形OB、渕澤OG
	2.11	広沢寺	宗像、立木、田中(一橋大WV)
	2.13～ 2.15	個人山行　南アルプス・仙丈岳	田中(一橋大WV)
	2.17	日和田	西井、宗像、渕澤OG、田中(一橋大WV)
	2.20～ 2.23	八ヶ岳合宿	西井、宗像、立木、田中(一橋大WV)、田形OB
	3. 8～ 3. 9	個人山行　八ヶ岳	宗像、古瀬OB



『針葉樹』第８号より

1997〜1999

1997年度〜1999年度 部活動概況報告

1995年、1年生の夏合宿で日高山脈を縦走した後、同期で入部したほかの2人が部をやめ、一つ上の大谷さんもやめ、4年の渕澤さん、2年の西井さんと行ったはじめての冬山ではバテただけでなく、寂しくもあった。その後、1996年の春山では西井さんと2人で八ヶ岳を縦走した。こんな人数で冬山に行っているのを親に知らせていいものかとためらいもした。翌1996年度、西井さんは「自分はつなぎでいい」と言っていた。ぼくが経験もないのに「あるべき論」を述べて不満をぶつけがちにもかかわらず、よく1年間やっていただいたと思う。

1997年は、2人の一年生が入ったけれど、結局1人だけが春山まで残り、いっしょに五龍岳に登った。その彼も新年度にはやめてしまい、結局夏山前には、西井さんとぼくの共通の友人だった松田と、ぼくが2年のときにやめていた大谷さんにまた入部してもらい、3、4年だけ4人で南アルプスを縦走した。学年の1年生はいなかったけれど、年齢も近かったし、経験もさほど大きな差はなかったので、楽しい登山になったことを覚えている。

西井さんと2人の部員になったとき、登山の経験を積んでみたいと思ってはいても、西井さんはさほどクライミングなどに興味はなかったので、OBの古瀬さんの勧めもあり、一人で日本山岳会学生部に顔を出した。それまでは一橋の山岳部は学生部に久しく出入りをしていなかったのだ。そこで他大学の山岳部の人たちと知り合いになり、上智大学の太田幸介とともに夏に滝谷で定着したり、谷川岳衝立岩に連れて行ってもらったりと、経験がいっぺんに増して刺激になるとともに、仲間も増えていった。他大学の人たちといっしょに行くのが楽しくなって、1997年の冬合宿も、駒沢大学といっしょに合宿を組んだり、春山は千葉大学といっしょに山に行ったりと、そのときどきでいっしょに山に行く人を変えて登った。後進の育成をする余地もない中で、どうやって自分が山登りを続けていけるかを考えた上での選択だったと思う。この傾向はその後も続き、ぼく自身の経験も増していった末に、4年になった1998年には7大学7人のリーダーたちとともに、登ることはできなかったけれど、ブータンの未踏峰にトライすることもできた。

部は、ぼくの登山のベースとしてあったし、OBたちは、ぼくが登るに

任せてときに教えてくれたりいっしょに行ってくれたり、資金の援助をしてくれたりと見守ってくれて、今でもありがたかったと思う。ぼくも毎日のように部室に行って山のことを考えるだけでなく、登山の正否よりも部員がやめたり入ったりに一喜一憂していたと思う。

結局3年間リーダーをすることになったのだけれど、部の中でその後もいっしょに登っていける山仲間を得られたかと言えば、ちょっと寂しく振り返ることもある。自分がどう登るかと考えるばかりで、他のメンバーがどう山を楽しみ仲間になっていけるかという点から部活動をする視点が欠け、人の登山に合わせる場面が少なかったと思う。好きなところはどことか聞いてみて、自分が行きたくなければ行かなければ、相手に対して失礼なことだったろう。それは他大学の連中といっしょに山に行っても少なからず同じことは言える。死亡事故には至らなかったにしても、部員に怪我をさせたことも2度あるし、入山路を間違え気力がなえ、登る前に下山したこともある。ほんとうに申し訳なかったと思う。

これは言い訳になるのだけれど、組織というのは、各々が得意なところが生かせる形になっているときにいっしょのことができれば、それぞれの満足も増すと思う。部員にも、ワガママな人も気遣いができる人も、賑やかな山がいい人も個人で行くのが好きな人もいろんな人がいることができれば、居心地のいいところと言えると思う。一橋の山岳部のカラーとして、一定の枠の中に人間を押し込めるような感じでも必ずしもなかったと思う。しかし、当時の状況では結局はリーダーとしてのぼくのカラーに合うかどうかが、山岳部に合うかどうかということに直結する。じゃあぼく自身のカラーはと言えば、過去の記録や自分が1年のときにやっていたことを少ない人数の中で他の人に押しつけるという結果になっていて、結局は、その人自身を見ていなかったのではないかとは今思える。

1年のときのクラスメイトで、3年になって部に入ってきた松田が、「組織というのがほんとにいやになった」と言って部をやめたときには、ぼく自身が彼ではなくほかの場所を向いていたのだろうと考えるしかなかった。それでも、自分がやめなければ部も続くし、やめた後の自分の居場所もほかになかったので、やめようなどという発想はなかった。なんだかせわしなく登っていて、山を楽しむという視点になかなかならないというのは、ぼくの性格だろう。協調性がない人間が3年もリーダーをした。部室を新しくするきっかけも西井さんといっしょに作ったけれど、部を維持するためだけに登っていたわけでもない。悩ましい3年間だった。

「大学山岳部は歴史的役割を終えた」と言う方もいるけれど、そういうことではなく、いる人間がどの程度自分たちがやっていることに満足を得られるかどうかで、その組織の歴史における意味も出てくるのだと思う。それでも、ときどきのメンバーと山をそれなりに楽しみ、それぞれ思い出があり、部があってぼくはよかったなと思う。それとは別に、では登山としてどの山が一番楽しめたかといえば、千葉大学の2人と3人でいっしょに行った東海谷の縦走だ。

この登山は、記録が少ない場所ということもあり、行った先でどうルートを選ぶのか、トラブルをどう回避するのかという点で、毎日がびっくり箱の連続だった。メンバーが凍傷になりかけたり、「窓」の通過をどうするか行ってから考えたり、雪洞をはじめてほったりテントを飛ばされたり。稚拙な経験をいくつも重ねた。難度を追い求めるだけでない、登山の楽しみの一端を垣間見て、その後の登山に対する見方も少しは豊かになったのではないかと思う。似たような登山では、関西学院大学の1人と3人で行った抜戸岳南尾根は抜群におもしろかった。

せいぜい人間の想像力の範囲なんて限られている。過去の記録を見て自分も登ってみたいと思ったり、似たような経験の連中と比べて競争心を煽られたり、大学山岳部にいればいただけの時代や人数の制約はある。それ以上のことやその範疇からだいぶ外れたことをするためには、その組織のありようとはまったく違う世界を自分は持っていなければならない。その点では、自分の登り方は平凡だったと思うけれど、他大学の連中とわりと自由に登った経験は、山に対する見方をずいぶんと広げてくれたと思う。それは必ずしも部にとって悪いことではなかったのではなかろうか。

結局、おもしろいことをやっているところに人は集まるのだと思う。やっている人間がつまんなさそうにしていれば、人も集まんない。

そのことを学んだ3年間の山岳部経験だった。

（宗像　充）

編集子注

１９９８年から１９９９年にかけて、一橋山岳部は一橋大学体育会運動部に復帰した（１９９９年3月発行の一橋スポーツ第30号の役員名簿に記載）

1997

部長　
部員
４年　西井　　薫
　　大谷　公重
３年　宗像　　充(CL)
　　松田　　智
針葉樹会学生担当幹事
　　井上　裕之
　　古瀬　泰介

春合宿(北アルプス遠見尾根～五龍岳)

【参加メンバー】宗像、立木
【期間】１９９７年3月19日～21日

3月19日（晴）

アルプス平リフト上発(8:45)―１８９２m(9:35～9:45)―中遠見(10:35～10:45)―西遠見手前ＴＳ(12:15)

急行アルプスで４時頃神城につく。バスで五竜遠見スキー場に着く。エスカルプラザは開いていて、テレキャビンが動くまで中でごろごろする。テレキャビン、リフトを乗り継いで歩き始める。古いトレースが一応ついている。週間予報では低気圧が来るというので心配していたが、天気はよい。遠くまでよく見える。トレースもあり、雪もしまっているので快調に歩く。ほとんど頭を使わなくてすむ。小遠見はトラバースして、中遠見を過ぎ、問題なく大遠見につく。大遠見からの稜線上には２パーティーほど張っている。西遠見についた時点で五竜山荘まで行ける時間だったが、無理をせず西遠見手前にテントを張る。五竜岳が目の前によく見える。

3月20日（晴）

起床(4:00)、出発(5:45)―五竜山荘(7:15～7:45)―ＧⅡ手前コル(8:50～9:00)―五竜岳山頂(9:30～9:45)―五竜山荘(11:45～11:55)―西遠見ＴＳ(12:55)

予定では今日は五竜山荘までだったので、撤収して出発、さくさくと決まるアイゼンが心地よい。白岳の登りに篠竹をベタ打ちする。降雪後は雪崩れそうな斜面である。五竜山荘に荷物をデポし、サブ行動の装備で出発する。ＧＯはトラバースしてＧⅡを直登する。一応古いトレースがついているのでノーザイルで慎重に歩く。思ったよりも難しくはない。五竜岳直下の登りは右の雪壁を直登すれば問題ない。だれもいない山頂で鹿島槍ヶ岳、剱岳、白馬岳まで広がる景観を楽しむ。こんなに条件がいいのなら唐松岳まで行けただろう。立木が軽い捻挫になったというが歩けるので下山に向かう。五竜岳の下りは後ろ向きで下り、ＧⅡの下りは練習もかねて、ザイルを２ピッチほど出す。初めて雪山でトップをする

立木のザイルワークはまだちょっとぎこちない。五竜山荘まで戻ると、1パーティーが設営をしていた。まだ昼前なので、とりあえず西遠見まで戻ることにする。白岳の下りは雪がぐさぐさになっていて、一歩ごとにだんごをたたき落とさねばならず、こわい思いをする。時間的には今日中に降りられるのだが、合宿を2日で終わらせてもなー、と西遠見にもう一回テントを張る。それ以前に、立木はバテて下りる気力がなかった。

3月21日（晴）

起床(4:00)、出発(5:55)―二の背髪(6:55～7:15)―アルプス平(7:45)

撤収をしていると、下から数パーティー登ってくる。昨日登頂していてよかった。赤く照らし出された鹿島槍ヶ岳の北壁を背に歩き始める。いつかは登ってみたいものだ。大遠見まで来ると、かなりたくさんのパーティーが上がってきていた。急ぐ理由もないのだが、下りだから早くなる。二の背髪まできてまだテレキャビンは動いてないだろうと思い直し、写真を撮りまくる。しかし、下山してみてまたしてもフィルムがちゃんと入ってないことが判明。冬合宿同様、写真は一枚もありません。五竜遠見スキー場の上にはでっかいテントが張られていた。だれもいないスキー場の中をアイゼンを効かせてアルプス平まで駆け下る。雪の少ないスキー場の下の方はテレキャビンから見ると地面が露出していた。

ちなみに今日は進級発表の日です。駅から西井さんに電話して無事3年生になっていることが判明。松本で祝勝会を開いて帰った。

《感想》

当初、唐松岳まで行く予定だったが、人数の都合上、五竜岳往復に止めることにした。正月同様、好天に恵まれたため予定以上のペースで歩くことができた。経験をつけるという意味では、またもや不十分な合宿となってしまったということは否めない。また、このような条件では唐松岳まで行けたであろうことは予想できたが、はたして実際に二人で唐松岳まで行ったとして、条件が変わったときに適切な対応ができるかどうかは未知数である。その意味で、この部の経験不足はまだ解消されていないということをしっかりと肝に銘じておく必要がある。それでも、好天に恵まれ無事五竜岳の登頂を果たしたことは一つの成功である。3日間ともあれほどの景観を楽しめたということは立木にとってはいい経験になっただろう。一つの雪山を登り終えたということを自信にして、次のステップの足掛かりにはできたのではないかと思う。今年は地味でも自分たちの力が試される山行をやりたいと思っている。

（宗像　充）

夏合宿（甲斐駒ケ岳～光岳）

【参加メンバー】宗像（CL）、西井（SL）、大谷、松田

【期間】１９９７年９月３日～12日

９月３日（晴のち霧）

北沢峠（10:00）―仙水峠（10:40）―駒津峰（12:00）―甲斐駒（13:15）―駒津峰（14:40）―北沢長衛小屋（16:00）

前日は甲府駅で寝る。6:00発のバスに乗り、広河原で乗り換え、北沢峠に到着。テントを張り、軽くなった体で甲斐駒に向かう。スタート時に先頭の西井が猛ダッシュをかけるが、20分で落ちつく。仙水峠から駒津峰までの急登ではさらに落ちつき、甲斐駒直下からの登りでその落ちつき方は最高潮に達した。駒津峰到着直前から霧が出て、甲斐駒頂上でも周りの光景はおがめなかった。頂上で45分の休憩。下り前半は、西井がスーパーマリオのように走っていた。中盤ペースが落ちつくものの、ラスト10分で三たび走る。松田は、ひたすら西井の背後で寡黙に歩いて（あるいは走って）いた。

９月４日（晴のち曇）

起床（4:00）、出発（5:30）―大滝頭（7:50）―仙丈ヶ岳（10:40）―高望池（14:00）―両俣小屋（17:00）

昨日のペースの乱調も今日は持続的に安定。南アの広葉樹と赤土が、われわれの出発をしっとりとつつみこんでくれた。直射日光で大滝頭の急登を快適に登る。ペースが遅れているため、仙丈では10分だけの休憩。荖ノ平という区域には、本当に荖（ふき）が密生していたので笑えた。くたくたになって高望池に着。水はない。高望池と呼称の理解に苦しむ。（水を）高望みする、とでも解釈すべきか。横川岳から両俣小屋までは４５０ｍの下りでへとへとになる。小屋では、南アルプス林道の方からやってきたのであろうご夫妻にいただいたプチトマトが新鮮なあまさでうれしかった。三毛猫がいた。

９月５日（晴）

起床（4:00）、出発（5:25）―北岳頂上（12:05）―北岳山荘（14:15）

両俣小屋から肩まで６００ｍ、さらにそこから８００ｍとひたすら登る。その間、トマト夫妻とデッドヒートをくりひろげた。夏のような日差しと暑さが快い。肩以降、西井がバテて、大谷が先頭を2ピッチ。頂上着。エアリアマップとにらめっこしながら協議した結果、熊ノ平までの予定を変更して北岳山荘で停まることに決定。

山頂での会話

（その１）大谷「初日からずっとドトールのアイスカフェラテのみて～、って思って登ってたわ～」

松田「アイスカフェラテですよね～」

（その２）皆で今日・昨日の行程が厳しかったことを話している。

大谷「今日、広河原におりん〜？」
大谷、同様の内容の発言を数度くりかえす。
宗像「大谷さーん、そういうこと言うのやめてくださいよー」
閑話休題。頂上と山荘では、照りつける太陽が気持ちのよい休憩を演出してくれた。水１リットル１００円。

9月6日（霧ときどき雨）
起床（4:00）、出発（5:10）―間ノ岳（6:45）―熊ノ平（8:15）―北荒川小屋（11:50）―塩見岳（14:40）―塩見小屋（16:00）
熊ノ平にて。⑴「塩見小屋では、テントによる幕営を禁止します。テントで幕営の方は北荒川小屋にて願います」という旨の看板があった。熊ノ平の小屋人によれば、ごみの散らかしがひどいためということらしい。⑵大谷のキスリングの横の留め金が壊れる。小屋の兄ちゃんの修理に救われる。ありがとう、ひげの兄ちゃん。
塩見岳の山頂は、ツアーらしきご年配に制圧されていた。
いよいよ塩見小屋。小屋人は興奮した様子で、テン場周辺（十数張り可能・狭い）の放尿による水場（下り10分程度）の汚染のこと、環境庁がどうのこうの（不覚にも聞き返さなかったので趣旨は分からなかった）、こうした一連の事態に塩見小屋の小屋主が怒っていること、登山人口の絶対的増加という現状において環境に配慮する「キャンパー」の新しいありかた、等々を講談師のように話した。一方的にまくしたててくるので、何がテント幕営禁止の理由なのか判別しかねる。ただ「われわれが今日ここで幕営できるのか」という質問には、「今年から実施した措置なので」ＯＫとのこと。しかし「来年からは全面禁止」だそうだ。いずれにしろ、ホッとしてテントを張りだした。とそのとき、小屋人が登場。「着くとすぐにテントを張り出すキャンパーたちがいるんだけど・・・受付を済ませて、場所を指定されてから張る。これ、礼儀」（慣れた調子。たぶんこの夏何度もこの台詞を放ったにちがいない）とおっしゃる。
てなわけで、宗像君、ご立腹（『岳人』に投稿してやる」といっていた）。

【考察　「礼儀」について】

われわれの他にテント幕営者がいないことを考慮しても、確かに狭いテン場であり、この点についての非は認めなければならない。しかし以上のことを「礼儀」と呼ぶ道理はない。むしろ、塩見山荘独自の「ルール」と呼ぶべきである。今回の山行の幕営では、９月という要因もあろうが、塩見山荘以外で以上のような趣旨において注意を促されたことはなかった。（ただし、荒川小屋にはテン場らしき空き地脇の石に番号が書いてあったので、そこでは指定制なのだろう）。北ア・南ア等、人気

の登山スポットのテン場では、たいていの場合は空いたところに好きなようにテントを張るのが経験的には一般的である。とすると、塩見小屋のケースは特殊であり、やはり一定区域内での「ルール」というのが適合的だ。「礼儀」とは、「相手に対して失礼にならないような態度やふるまい」（三省堂国語辞典第3版）である。塩見小屋の事情を知らなかったため、塩見小屋という特殊な区画では、一般的なふるまいが「礼儀」に適わなかったとはいえよう。しかし、「テントの設営は受付のあとに願います」といった看板も出さず、非「礼儀」的な行為をする「キャンパー」に説法にちかい発言をするのはいかがなものか。わたしには、むしろ彼の方が「キャンパー」に対しての礼儀を欠いているように思える。この些細と思われる一言は、その他の発言でも感じられた。小屋区域内の常識と一般的常識との整理がされていない、小屋人の思考を象徴しているものと把握できるのではなかろうか。

ジャンケンの結果、往復45分の水汲みには松田が選定された。

9月7日（曇ときどき雨）

起床(4:00)、出発(5:15)—烏帽子岳(8:45)—高山裏避難小屋(13:05)

昨日からエアリアマップの時間より早く歩けている。起伏が少なく特にこの日は楽勝だった。ただ雨にたたられ、尾根上では強風にもあおられた。

高山裏避難小屋では、早稲田大学の連中（どういう性質の集団なのかは不明）のテント（ダンロップ5・6天を3張り）がすでに設置ずみだった。女性の数は定かでない（2名以上存在していたことは確かであるが）。しかし、間近で観察できた一人の女性のことをここで報告しないわけにはいかないだろう。

〔トイレにて〕

トイレをすませ、わたしはドアを開けた。とそのとき、一人の視線がわたしの全体をつつんだ。

「すいません」

はっきりした調子で、彼女はそういい放った。

中にはトイレットペーパーがあるとはっきり分かるコンビニの袋を手にした私の耳に言葉が浸透する。

「いいえ」

母音のつらなりが、もっともやわらかい旋律で鼻孔をとらえ、わたしのなかで有機的に反響した。みず色を基調としたナイロン生地に、紺の二本線が腕に描かれてあるジャージの上着。右の胸にはなにかの固有名が二文字で書かれている。上着と揃いの紺のジャージが、彼女の下半身の特徴を被い隠す。肩まで5センチある高校生のような彼女の黒髪。「こんにちは」はっきりとしつつも機械的な、彼女の山でのおきま

りの音声。しかし、もはや手遅れなのだ。わたしは返すことばをなくし、ただそこを立ち去るのみだった。

「なぜ彼女は謝ったのか」

煩悶とありえない郷愁とがひたすらに交錯していた。

宗像が、小屋でじゃがいもを4つ(それも大)を貰ってきた。

9月8日(雨)

沈

9月9日(曇ときどき雨、晴)

起床(4:00)、出発(5:20)—荒川小屋(9:20)—大聖寺平(9:50)—赤石岳避難小屋(11:55)—百間洞(14:15)

不安定な天気ながらも、荒川小屋に着くあたりから日がもれてきた。大聖寺平までの登りは傾斜も緩く、景色もよい。小赤石から赤石までの尾根を歩くころから、雲行きが怪しくなり、赤石の頂上では雨となっていた。雷をともなっていたので、避難小屋で通り過ぎるまで休憩する。再出発後、赤石からの下りで大谷の唄。「今日のごはんはな〜にかな♪」西井「マーボー春雨じゃ」大谷「高野豆腐もいれましょう〜♪」「えー、高野豆腐はやめましょうよー」つっこむ宗像。松田無言。

さて、アルペンガイドでは「快適」と紹介されていた百間洞は、曇っているせいか、取り上げるほどのものではない。景色がよいので、ドアを開け放して、歌をうたいながらトイレで大をしていたら、西井に呆れられた。

9月10日(晴のち曇)

起床(4:00)、出発(5:25)—中盛丸岳(7:15)—兎岳(8:55)—聖岳(11:15)—聖平(13:30)

2ピッチ目に松田が腹痛となるが大事には至らず。中盛丸岳では南アのパノラマを堪能することができた。ただ兎岳の耳がはっきりとせず議論となる。かの山をナキウサギとする暴論まで出て、大谷と宗像が互いの干支(大谷は丑、宗像は卯)をけなしあうという形で話は消散した。

9月11日(晴)

起床(4:00)、出発(5:20)—上河内岳の肩(7:20)—茶臼岳の肩(8:25)—仁田岳分岐(8:50)—易老岳(10:20)—光岳(13:00)

上河内岳の肩での休憩時、大谷が即興でヨーデルを唄うも顰蹙を買う。

茶臼岳の肩の休憩にて。大谷「そこ(茶臼小屋の分岐)でおりん〜」宗像「テカリまで行かないと、南ア縦走したことにならないんですよー」大谷「テカリなんて行かなくてもいいじゃん」「なぜテカリにいく必要があろうか〜(浪曲調で)」宗像(キレテ)「そんなこというなら、おりていいですよ」

伏線はあった。北岳での会話(その2)を受けての悶着である。大谷は冗

談で言ったのだが、その度を越しており、実際にメンバーの感情を害した。また体調が良くなかったとはいえ、宗像が感情的になりすぎたことも指摘できる。結局、大谷が次の休憩時に謝り収まった。大谷の他者への配慮不足。宗像の感情コントロール。問題はハッキリしているのだから、これからの山行に生かせばよい。トレーニングや部会では現れない課題を鮮明にする意味において、本チャンの山行がパーティーの成長を促すことを再認識した。

仁田岳分岐と易老岳との間で、宗像の友人・南山大の藤井君に会う。怒濤のように歩いてきた。ひとりで甲斐駒まで縦走とのこと。靴はスニーカーだった。

光小屋への登りで、大谷のキスリングの左背負いひもの留め金が壊れる。宗像が機転をきかせて上手い具合に修理する。さすがに、このキスリングの辞書に、次という文字はないだろう。事前のチェックの甘さを大谷は当然反省すべきである。

光小屋から光岳を往復する。光岳の山頂は木々に囲まれてはいるものの、長かった山行ゆえに、感慨は大きい。明治大学山岳部の今年八月の記録が瓶詰めになって木に掛けてあった。明治のリーダー曰く、「……道をふみ固めてくれた登山者たちに感謝します」。うーん、同感。

小屋近くのテン場に戻り、ジャンケンをして宗像が水汲みに行くことになる。ジャガイモの入ったマーボー春雨が旨かった。

9月12日（曇のち曇ときどき晴のち雨）

起床(4:00)、出発(5:15)―畑薙大吊橋(7:35)―寸又峡(16:15)

起床から出発までの時間がかかりすぎるのは、全日程を通じての反省点である。光岳からの下り。西井がインターバルで猛ダッシュをかける。最終日＋下り、がその方程式だ。松田も当然インターバル・ダッシュ。吊橋までの4時間コースを、2時間20分で下りきった。しかしここからは40㎞の林道歩き。2～3ピッチをピークにペースは落ちていく。うんざりした残り15㎞付近で軽トラックをヒッチ。残10㎞で降ろされるも、残5㎞でふたたび拾ってもらう。文明への深い感謝の念を抱きつつ、長い行程を終えた。

（文責　大谷）

冬合宿（蝶ケ岳～霞沢岳）

【参加メンバー】宗像（CL）、小林（SL、駒沢大3年）、大谷、昆（駒沢大1年）

【期間】1997年12月18日～24日

12月18日（小雪）

松本発(4:30)―中ノ湯(5:25～6:05)―大正池(7:05～7:20)～上高地バスターミナル(8:00～8:10)―明神手前

(9:05～9:15)―明神(9:40)―徳沢(11:20)、偵察発(12:00)―引き返し点(12:45)―徳沢(13:00)

松本からタクシーで中ノ湯温泉まで行く。雪はほとんどない。拍子抜けしつつ、釜トンネルをたらたら歩いていく。が、トンネルを抜けると、うっすらと白いじゅうたんが敷き詰められていて、河童橋につくころには自然と一列になってラッセルを組むようになっていた。上高地からは、それまでのやおたげな雰囲気から一変して、水を多分に含んだ雪を相手のハードなトラバーユとなる。河川敷沿いを進む二人のスキーヤーを横目に、明神までラッセル。徳沢に着いたときには、みぞれの降る曇天で、明日の天気が雨にならないかが心配された。

12月19日（晴）

起床(5:20)、出発(7:05)―１９６０ｍ(9:00～9:05)―２０６０ｍ(10:00～11:05～11:15)―２２００ｍ(11:05～11:15)―２４１５ｍ(13:15～13:25)―２５６０ｍ(14:00)

この日の予定は、徳沢から妖精の池まで約１１００ｍの行程。さぞしんどくなるかと思いきや、同じ行程の単独行の登山者がいて、かつペースも同じくらいの抜きつ抜かれつの歩みだったものだったから、私たちの先頭での歩行距離は半分ですむことになった。降雪はなく、ルート的にも困難はなかったけれども、予定ほどには進まず、夏時間でヒュッテまで40分くらいの妖精の池手前でテントを張ることになった。

12月20日（晴）

起床(5:00)、出発(7:05)―蝶ヶ岳(8:00～8:15)―２６２５ｍ手前(11:20～11:30)―大滝小屋(12:25～12:35)―２３３０ｍ(14:45)

ハイマツに足を取られながらくたくたになって蝶ヶ岳まで登る。次のピーク（２５４２ｍ）手前の下りは、誤りやすいので注意しなければならないが、先頭の小林は案の定、誤った方角に進む。大滝山荘からは延々と針葉樹の中を30から40センチの雪をラッセル。２３３０ｍの地点までいい調子でいき、昨日の遅れを挽回することができた。

12月21日（曇）

起床(5:00)、出発(6:40)―２２５０ｍ手前(7:30～7:40)―槍見台手前(8:25～8:35)―明神見晴(10:25～10:40)―２２４６ｍ(11:35～11:45)―徳本峠(12:15)―偵察発(12:50)―引き返し点(13:30)―徳本峠(13:55)

昨日同様、曇りの天気のなか、針葉樹の中をラッセルする。問題となる所はなく、楽勝で徳本峠に着く。11月に荷揚げしたデポ缶と荷物を小屋に置いた後、宗像と小林が明日の行程のラッ

セルをつけにいく。下界では伊丹十三が自殺したとのラジオの報。クリスマスが近くなって、ユーミンの〝友達はサンタクロース〟がしばしば聞かれるようになった。

12月22日（晴）

起床(5:00)、出発(6:45)―コル(10:00)

秋には1時間で行った２４２８ｍのピークまでが実に遠い。ここまで一日のロスもなくきたので、休息の意味も込めて正午前に行動を打ち切った。テントの中では、小林の講談の独壇場で、東北本線と宇都宮線という呼称をめぐる栃木県と東北地方の各県との確執（栃木県の反対で黒磯までは宇都宮線になったそうだ）についてなど、ためになる話を楽しく聞かせてくれた。今日に始まった話ではないが、足から発せられる臭いが強烈だ。

12月23日（晴）

起床(5:00)、出発(6:40)―Ｋ１手前(8:40～8:50)―Ｋ１(10:21)―Ｋ２(11:20～11:30)―Ｋ３(12:00～12:15)―Ｋ１直下(13:00～13:20)―コル(14:00)

いよいよ霞沢岳アタックの当日である。正午までに山頂に着けなければ敗退することを事前に決定していたので、僅かながらも緊張感がはしる。Ｋ１前のピークまでは雪の付き方が悪く消耗する。昆はすこしバテた様子でペースが遅れる。Ｋ１からの下りは、アイゼンを履き、ザイルを張る。先頭の小林は固定に時間がかかりすぎる。昆は岩場でのアイゼン訓練を経験していないため、岩にアイゼンをかけて登れない。そんなこんなで時間は急速に経過し、Ｋ２ではすでに11時をまわっていた。が、登頂を強行。Ｋ２以降は順調で、今後一生足を運ぶことはないであろう霞沢岳のピークを踏む。握手で祝福しあう。

下りはハイ・ピッチで歩く。雉打ちのときピッケルを外した大谷はそれを忘れて15分くらい行ってしまうほど(!!)、危険な心証の少ない行程であった。

12月24日（晴）

起床(5:00)、出発(6:30)―ジャンクションピーク(7:20～7:30)―徳本峠(8:05～8:30)―明神(9:35～9:45)―上高地バスターミナル(10:35～10:45)―大正池(11:25～11:40)―中ノ湯(12:00)

徳本峠でデポ缶を回収して明神まで下りる。道でないところをギャーとわめきながら尻セードで滑ったりする。明神付近では、今流行のスノーシューの踏み跡で雪が固められている。雪はかなり溶けていて上高地までの歩きが楽。冬合宿というよりも春山山行だった。

（文責　大谷）

1997年度　山　行　表

期　　間		コ　ー　ス	メ　ン　バ　ー
1997	3.19～ 3.21	春合宿　北アルプス・五竜岳	宗像、立木
	3.31	湯河原幕岩	宗像、立木
	4.13	個人山行　奥多摩・水根沢谷	宗像
	4.20	個人山行　小川谷廊下	宗像、立木、OB(古瀬、渕澤)
	4.20	川又	宗像、古瀬OB
	4.26～ 4.29	GW山行　北ア・奥穂高岳南稜	宗像、OB(古田、古瀬)
	5. 2～ 5. 4	GW山行　谷川岳西黒尾根	宗像、立木
	5.11	個人山行　富士山	宗像、太田(上智大)、榎並(慶応大)、蛭田(早稲田大)
	6. 7	個人山行　三ツ峠	宗像、立木
	6.14～ 6.15	新歓山行　大菩薩峠	宗像、渕澤OG、立木、野崎、(以上、一橋大)小林、田所、森(以上、駒沢大)
	6.21	学生部小川山集会	宗像
	6.29	越沢バットレス	宗像、引地OB
	6.	広沢寺	宗像、大谷、松田
	7.13	奥多摩　逆川	宗像(CL)、立木(SL)、西井、松田、天達
	7.19～ 7.20	プレ夏訓練　三ツ峠	宗像、大谷、松田
	8. 2	日和田	宗像、立木、松田
	8. 4～ 8.14	個人山行　涸沢定着	宗像、松田、立木、引地OB
	8.13～ 8.20	個人山行　笠ヶ岳～黒部縦走	宗像
	8.24～ 8.30	個人山行　谷川岳湯桧曽川大倉沢	宗像、古瀬OB
	8.26	奥多摩　逆川	松田兄弟
	8.26～ 8.30	個人山行　北ア・滝谷	宗像、太田(上智大)
	9. 3～ 9.12	夏合宿　甲斐駒～光岳	宗像(CL)、西井(SL)、大谷、松田
	9.24～ 9.25	個人山行　谷川岳一ノ倉沢・衝立岩雲稜ルート	宗像、太田(上智大)
	9.24	湯河原幕岩	宗像、松田
	10.10～10.13	冬山偵察　北アルプス蝶ヶ岳～霞沢岳	宗像、大谷、松田
	11.12	奥多摩・川又の岩場	宗像、太田(上智大3)
	11.15～11.16	デポ上げ山行　北アルプス徳本峠	大谷
	11.16	湯河原幕岩	宗像、太田(上智大3)、遠藤(上智大2)
	11.24	湯河原幕岩	宗像、井上OB、他11名
	12.12～12.14	雪上訓練　富士山吉田大沢	宗像、大谷、井上OB/小林、田所、昆
	12.18～12.24	冬合宿　北アルプス蝶ヶ岳～霞沢岳	宗像(CL)、小林(駒沢大3年:SL)、大谷、昆(駒沢大1年)
	12.28～12.31	個人山行　北アルプス南岳西尾根～槍ヶ岳	宗像、OB(古瀬、古田)
1998	1.10	湯河原幕岩	宗像、太田(上智大3)
	1.17	城ガ崎海岸	宗像、太田(上智大3)

期　　間		コ　ー　ス	メ　ン　バ　ー
1998	1. 28	広沢寺	宗像、太田(上智大3)
	1. 31～ 2. 2	アイスクライミング研修会　八ヶ岳ジョーゴ沢	宗像他多数
	2. 3～ 2. 4	日本山岳会学生部遠征隊合同山行　八ヶ岳主稜他	宗像、蛭田(早稲田大)、栗谷川(法政大)、太田(上智大)、山梨(東海大)、榎並(慶応大)、小林(駒沢大)、長岡(関西学院大)
	2. 13～ 2. 15	個人山行　南アルプス甲斐駒ヶ岳	宗像、太田(上智大)
	2. 18～ 2. 20	個人山行　北アルプス槍池山スキー	宗像他多数
	2. 22	個人山行　谷川岳一ノ沢・二ノ沢中間稜	宗像、太田(上智大)
	2. 22～ 2. 24	個人山行　岩手山	大谷、渕澤OG
	2. 24	日原白妙橋	宗像、太田(上智大3)
	3. 4	日原白妙橋	宗像、太田(上智大3)



『針葉樹』第 13～14 号より

1998

部長　針葉樹
部員
５年　西井　薫
４年　宗像　充(CL)
１年　久田英一郎
　　蔦谷　高志
　　佐藤　悠史
会学生担当幹事
　　井上　裕之
　　古瀬　泰介

春合宿（東海谷～頸城三山）

【参加メンバー】宗像、奥山（千葉大）、藤田（千葉大）

【期間】１９９８年3月16日～23日

3月16日（晴のち雪）

砂場発(6:50)―最後の民家（7:20）―１０１２ｍピーク(12:10)―烏帽子岳手前のコルＴＳ(15:40)

今回は、同様に人数不足の千葉大学と合同合宿とした。直前に硫黄尾根から海谷へとまったく毛色の違う山域に変更した。一人で部室でできあがって上野に向かった。駒沢の小林が見送りにきた。ありがとうございました。糸魚川に着くと、昨日買った１０００円の時計がもう壊れていた。最悪だ。全く雪のない糸魚川からタクシーで砂場へと。くるぶし辺りまで積もった車道を歩いて最後の民家まで。そこからは、田圃の中を鉄塔を目指してダブルボッカ。太ももあたりまである。しばらく行くと再び田圃の雪原状になり、雪もしまっている。かなり古いが、輪かんの跡がある。眼前に真っ白な烏帽子岳が座っている。尾根の取り付きは左から急登を上り、再びダブルボッカ。膝あたりまでもぐる。１０１２ｍ手前で雪壁状を通過するが、雪庇は発達していないので問題ない。この辺りから雪もしまってくる。烏帽子岳までは主に右側をトラバース。一カ所、稜線が雪庇状になっているので宗像がスコップで突き崩して通過。雪が舞ってきたので予定通り烏帽子岳の手前にテントを張る。千葉大はテントの中に銀マットを敷かないそうで驚いた。ザックもテントの中には入れないそうで大学によっていろいろ違うんだなあと思った。

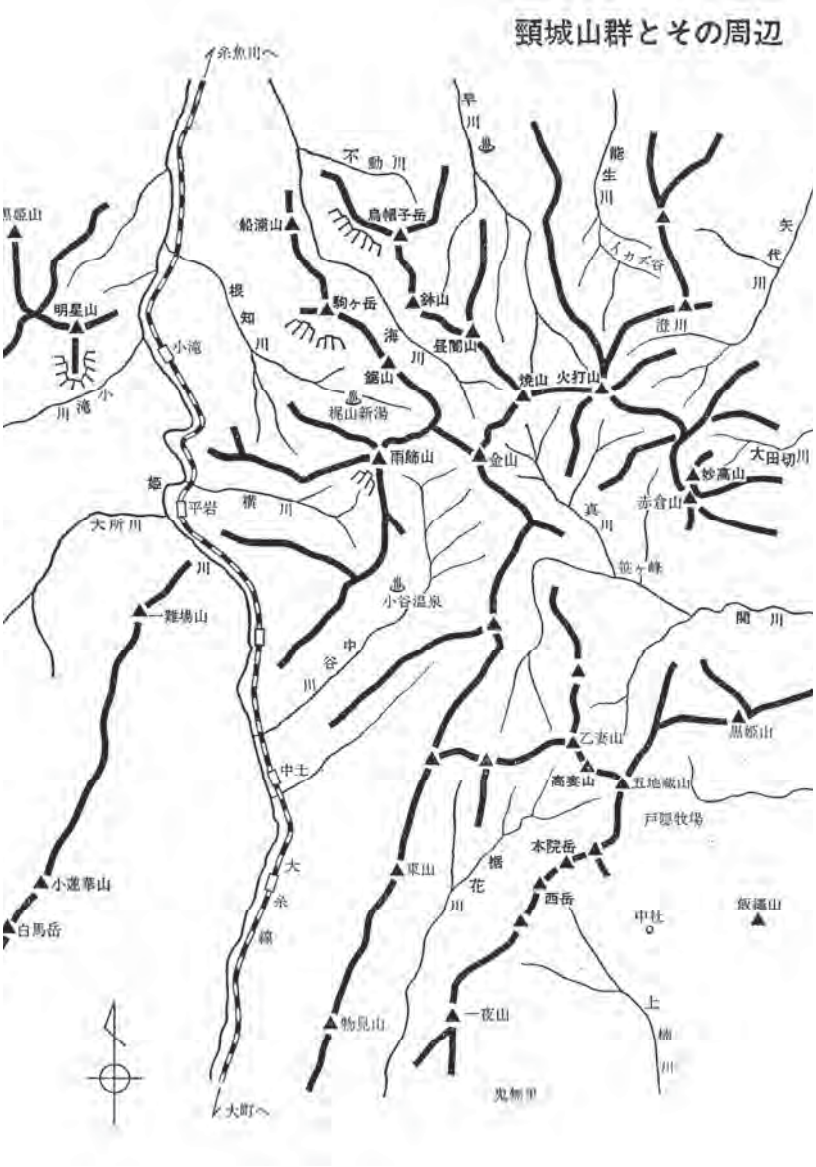
3月17日（雪）

ＴＳ発(6:30)―阿弥陀岳北峰手前の雪壁状(14:30)

ガスで視界が悪いが、風はそれほどでもないので出発。烏帽子岳の上りは降雪直後はナダレそう。視界が悪いのでどこが頂上かよく分からない。中途半端に雪が少ないので、時々藪が出ていて、それを避けるために右下を巻いたりするが、ほぼ稜線上。烏帽子岳からの下りは雪庇になっているように見



白水社　『日本登山体系　6』


頸城山群とその周辺
糸魚川へ
早川
不動川
能生川
矢代川
カヤ谷
黒姫山
船瀬山
鳥帽子岳
明星山
根知川
駒ヶ岳
鉢山
滝川
長闇山
澄川
小滝川
小滝
焼山
火打山
澄川
梶山新潟
雨飾山
金山
大田切川
妙高山
姫
平岩
横川
赤倉山
真川
大所川
笹ヶ峰
小谷温泉
関川
一難場山
中谷川
乙妻山
黒姫山
中土
高妻山
五地蔵山
戸隠牧場
本院岳
東山
据花川
西岳
中社
飯縄山
小蓮華山
白馬岳
大糸線
一夜山
物見山
上楠川
大町へ
丸物里

白水社　『日本登山体系　6』

えたので、右の支尾根に入ったが、これは間違いで上り返し、後ろ向きで左の尾根に降りた。阿弥陀岳への上りは、やっぱり降雪後はナダレそう。尾根が西へと方向を変える手前、尾根が雪壁状なったので右にトラバースしてルンゼに取り付くことにする。が、これが失敗の始まりだった。藤田君のリードで取り付いたが、難しいということなので、宗像に交代。最初は雪壁をラッセルするだけだが、次にアイスとのミックスになり、急傾斜の雪壁に変わり、アックスも決まらず、所々生えていた灌木もなくなると、なかなか足が上がらない。むちゃくちゃ渋い。それでもなんとかじりじりと進み、45ｍいっぱいでようやく稜線直下の灌木でアンカーを取る。次に取り付いたのは奥山さんだが、ビレーポイントまで15ｍ辺りまで来たところで、まったく進まなくなった。何回かトライしているが、進まないので声をかけてみると、アイゼンが片方外れたらしい。下の方に声をかけると、藤田君が落ちたアイゼンを見つけたらしい。いったん、奥山さんが降りることにしたが、今度はユマールがバッチリ食い込んで外れないらしい。天気がどんどん悪くなって、寒さも増すし、だんだん悲壮感が漂ってくるが、ユマールを切り離すナイフがすぐでないという。仕方なく、宗像のナイフをロープ通しに落とすが、途中で木に引っ掛かってどうしようもない。ロープをフィックスして宗像が奥山さんの所まで降りようとするが、ロープが張っていて、懸垂できない。手が尽きたかと思ったが、もう一度ロープを振るとナイフがようやく落ちてくれたので、それで奥山さんが脱出。ここはフィックスしても上り返すのは難しいだろうということで、最後に宗像が2回懸垂をしてロープを回収。やれやれ。時間も遅いので、左のほうに戻って雪洞を掘り始めたが、１ｍ掘ると木の根っこが出てきて、もう一度最初からやり直し、おまけに奥山さんが共同装備のテルモスを落とすし、もう、最悪。やっと雪洞に落ち着いたが、寒い夜でした。

３月18日（曇のち晴）

出発(6:50)―鉢山手前ＴＳ(13:40)

寝過ごす。昨日の雪で15㎝程積雪あり。昨日の教訓を生かして稜線上を忠実に行く。木登りから雪壁へと１Ｐ。藤田君の手が感覚がなくなってきたというので、宗像の手袋を貸す。その間に奥山さんはさっさと先に行き、何のためらいもなく、北峰の肩からコルへと降りてしまっていた。もし、北峰に行っていればロープを数ピッチ出したろう。残念。コルからワカンを出し、南峰への上りは、腰位までラッセル。ここも、雪崩の危険が考えられるが、宗像一人でガンガン上って行ってしまった。肩から南峰まではすぐそこだ

が、馬乗りのナイフリッジから、お立ち台の頂上へとロープを出す必要があり、先を急ぐ。ここからの下りがまたナダレそうで、実際、足を踏み出すと表面が崩れて下のほうでデブリになっていた。一人ずつ通過することにするが、太もも辺りまで潜り、下りでもなかなか進まない。鉢山まで小さなアップダウンが続くが、自分たちのつけたトレースがずっと後ろの方まで続いていて、ちょっとうれしい。鉢山手前まで来て、右は急な藪。左も先が見えず、地図上では雪崩れそう。奥山さんは右の斜面を下の方からトラバースしよう、というが、宗像が非常に渋ったので、少し早いが雪崩の危険を考えてここにテントを張る。その間、宗像と藤田君が正面の藪斜面を偵察。ロープを出して2カ所ほど上ってみるが、右の方は藪が深く、荷物が大きいと苦しいだろう。正面の方は、ルンゼ状だが結構渋い。結局、雪が落ち着いたときに右の斜面をトラバースするのがベターのようだ。

3月19日（晴）

TS出発(5:50)―支尾根上(7:00)―窓(12:10)―鉢山(15:00)―昼闇のコル

撤収中テントの中身を全部出したところで風でテントが下の斜面に飛ばされてしまったが、何とか駆け下りていって奪還。油断大敵。奥山さんのミトンがなくなったので、宗像の予備を貸す。宗像のトイペも落としてしまった。出だしから問題が多い。問題の斜面に取り付く。トラバースにロープを1P出すが、トレースをつけた後は、最後まで届かないのでロープを回収して、トレースをたどる。支尾根に取り付いた後は主に右側を上って行くが、モナカになっていて歩きにくい。痩せ尾根になってきたのでロープを出す。1P行った所から下に降りて岩壁基部をトラバースできそうでもあるが、そのまま稜線上を忠実に行く。2P目は雪壁状の尾根。3P目、両側が切れ落ちたミックス状の痩せ尾根を奥山さんリードで取り付く。アンカーもあまりしっかりしていないし、中間支点も取れないため、見ていてはらはらする。むちゃくちゃ渋い。その後、4P、主に雪稜で窓へ。窓から少し戻った倒れた灌木で懸垂1Pいっぱいで窓に降り立つ。そこからⅢ級程の岩を上り、いったんロープをしまう。しばらく行って再び出し、馬乗りになって通過。もう1P延ばしてようやく頂上へ。この間、中間支点は全く取れず。そこからの下りは雪がグサグサで下りにくい。転がった雪玉がアンモナイトのようになっている。下りきったところで泊まることにする。どうやら天気は下り坂のようだ。

3月20日（雨）
台風並みの強風のため停滞。フライを飛ばされ、テント内浸水。

3月21日（霧）
出発(5:50)―富士見峠より少し焼山方向TS(14:50)
朝から視界はない。地図とコンパスを頼りにじりじり進む。真っ白で平衡感覚がなくなりそうになる。昼闇からの下りで視界20～30m程で偵察を出しつつコンパスだけが頼りになる。そこからは左側が切れているので、それを目印に進むが、なかなか自信がなく、いらいらしてきたところで、ようやく焼山が見えた。焼山の近くで振り返ると雲海が広がっていた。こういう仕掛けか。谷間状のところを詰めて焼山基部へ。こんなすばらしい景色を独占していいんだろうか。

3月22日（霧）
TS出発(5:20)―焼山手前のピーク(5:40)―影火打(10:00)―火打山(10:40)―黒沢ヒュッテ(13:00)
視界は効かないが、とにかく出発。しばらく上るとプラトー状になり、焼山を見つけて再び上り始める。どこを上っても同じようなので左のほうから詰めたが、結構渋く、正解は正面のルンゼ状のところだったらしい。さすがに登山禁止になっているだけに火口のほうではぐつぐつ音がしているので、早く降りようとするが、ここの下りも視界が効かず、コンパス頼りに慎重に下る。この辺かなあ、と思った所で視界が開け、右に方向修正してキレットに降り立つ。そこから先は迷うことはないが、晴れていれば最高の稜線漫歩なのになあ。どうでもいいような火打山を過ぎ、いいかげんうんざりしてきたところでようやく黒沢ヒュッテに着き、小屋の横に雪洞を掘って泊まる。

3月23日（晴のち曇）
出発(6:30)―妙高山頂(10:30)―赤倉スキー場(13:30)
今日も浮かない天気だが出発する。大蔵乗越まではそれほどもぐらなかったが、外輪山上はかなり吹きだまっている。弱層テストをするとあんまりよくない。小尾根をたどって下りることとするが、途中から右の斜面に入るしかなく、上から見るとずっと右の方にトラバース道らしきものが見えたので、それを目指して斜面をトラバースすることにする。しかし、この判断はよくなく、目の前をさらさらと雪が崩れ落ちるのを見て途中から下のほうに下りてしまった。最初から下を目指して下ったほうがよかったようだ。お釜を詰めて、樹林の中をようやく山頂へ。このころになってようやく天気がよくなってきた。昨日通った焼山はもくもくと煙をあげていた。写真を撮りまくって下山にかかる。途中で岩々した

ところが出てきたのでそれを避けるために左の方の雪面を下ろうとして、宗像先頭で下りて行ったが、斜面が急になった所で足を踏み出すと斜面が横にスパーンと割れて足元から雪崩ていった。足は取られなかったが間一髪、オシッコちびりそうになった。新雪の落ちてしまった斜面を下りてようやく尾根に戻った。そこから先は再びガスが出てきて、地図を見ながら進む。休憩をしているとガスが晴れてきたので来た道を振り返ると、さっき起こした雪崩が２００ｍ位下まで崩れ落ちていた。う～ん。最後のピーク手前でバックカントリースキーを楽しんでいる人を見たのが一週間ぶりの人間だった。赤倉スキー場へシュプールをたどって下り、リフトを乗り継いでようやく人里へ戻ってきた。

（感想）　今回の合同合宿は宗像と奥山さんの二人で決めたような所があり、事前の準備や用意の点でいいかげんなところがあったのは否定できない。それは、合宿後にＯＢに指摘された所でもあるし、合宿中においても、僕の判断の悪さは申し開きのしようもないが、そこにコミュニケーションの悪さや危険への考え方の違いがあったということも事実だろう。とはいえ、今回の合宿は雪への判断という点で総合的な力が試される所であり、非常にいい経験になったと思う。

（宗像　充）

文部省登山研修所山岳遭難救助技術研修会（立山雑穀谷）

【参加メンバー】宗像

【期間】１９９８年６月11日～６月15日

６月11日

富山駅で関西学院大学の長岡と一緒になり、立山へ。僕の班は長岡と一昨年の夏山研修会で一緒になった南山大学の藤井と新潟大学の安藤さんだった。学生では一班だったが、参加者はほとんど消防士や山岳警備隊、自衛隊の人だった。社会人山岳会も若干いた。初日は言うまでもなく確保理論を聞いて、雨が降ってきたので体育館で確保技術の確認をする。僕らの班の講師は草島先生だった。職業別に（学生は職業ではないが）班が分かれているので、班によってやることが専門的で違うようだ。夜はフリークライミングをする。安藤さんは岩石の研究をしているらしく、研修所の前にある石は30万円はすると教えてくれた。もちろん研修所の講師は気づいていないだろう。

６月12日

研修所の前にある人工岩場で懸垂下降の仮固定、フィックスロープの通過、タイヤ落とし、ユマーリング、吊り下

げ救助の練習をする。場所が狭いので時間がかかり、吊り下げ救助は十分にできなかった。夜は今日も人工壁。

6月13日

雑穀谷にバスで移動し、背負搬送の練習をした。午後は実際に岩場で宙づりになったという想定のもと、学生と社会人の人だけで救助訓練をした。僕は被救助者になり、ずっと背負われているだけだったが、一番上から下まで降ろされる過程で一連の救助の流れがよく分かったと思う。夜は救助器具の説明を受けたが、言葉が聞き取りにくくて、ほとんど分からなかった。ただ、土嚢袋は確保支点として使えそうだった。そのあとフリークライミング。

6月14日

雑穀谷でワイヤーを使っての救助訓練をした。実地で僕らが使うことは少ないとは思ったが、カラビナ一個でぶら下がるのはなかなかスリルがある。

食堂ではワールドカップのアルゼンチン戦に夢中のようだが、無視してフリー。しばらくしたら山本一夫さんがきて、5・9のルートを登りだした。すべてのヌンチャクに逆クリップし、最後はZクリップをして降りてきた。酔っているらしい。確保理論とフリーはあまり関係ないらしい。

6月15日

最終日、雑穀谷で吊り上げ救助の練習をして、そのあと柴ゾリを作って引っ張った。水陸両用のソリはどんなところでも進めるが、作るのは難しそうだった。

日頃、救助技術を身につける機会がないので、いい勉強になった。事故を起こさないように気をつけたい。

夏合宿（剱沢定着、祖母谷～白馬岳～親不知）

【参加メンバー】宗像（CL）、松田、蔦谷、佐藤、外池（OB）、井上（OB）

【期間】1998年8月2日～12日

8月2日（雨）

室堂出発（7:55）―ロッジ立山連峰（8:40）―剱御前小屋（12:35）―剱沢（13:35）

出だしから天気が悪く、憂鬱になる。寒いし。ただでさえ重たいところに着替用のズボンだのシューズだのを勝手に詰め込んでいたS藤は、腕力の貧弱もたたって降ろしたザックを背負うことができないという無用の困難を抱えることになるが、持ち前のやる気の無さでカバー。一方T谷は思うように足が進まず難儀する。悪天のせいもあってか剱御前までの登りはハードだった記憶が。

8月3日（豪雨）
悪天候のため沈殿。テント浸水。
他では雪上訓練に行ったパーティーもいたらしい。

8月4日（曇、雨）
剱沢出発(5:35)―平蔵谷出合(6:25)
＝平蔵谷・武蔵谷出合で雪上訓練＝
武蔵谷出合(15:30)―剱沢(17:10)
相変わらず天気は悪いが、雪上訓練に出発する。雪渓を降りている最中にドーンという音がしたので、急いで登山道に上ると、今までいたところの30～50m先で丸く雪渓が陥没した。びっくり。雪渓の状態が悪いらしく宗像さん達は場所をどこにするか迷っていたようだったが、平蔵谷・武蔵谷出合で雪上歩行・ザイル・ピッケルストップの練習をすることになった。
帰り道で16:00をまわってしまったので、宗像さんと蔦谷は天気図をとるため別行動となる。

8月5日（曇のち雨ときどき晴）
剱沢出発(7:00)―前剱(10:25)―剱山頂(11:45～12:30)―平蔵谷偵察(14:30 井上OB・宗像)―平蔵谷取り付き(15:00)―平蔵谷出合(18:30)―剱沢(20:45)
この日で外地さんが下山される。剣山荘・一服剱を経て前剱へ。一般縦走路を通っていったので中高年の方も多かったのだが、宗像さんは何だかその手の人が余り好きでないらしくブツブツ言っていたような気がする。
剱岳の山頂からは一旦北方稜線に出て長次郎谷から下ろうと試みるが、状態が悪かったため中断。引き返して平蔵谷の取り付きから平蔵谷を下る。平蔵谷の出合に出たところで18:30を過ぎていたのでヘッドランプを出そうということになったが、佐藤はヘッドランプをサブザックの底の方に詰め込んでいたのを持って来なかったと勘違いし、井上さんに苦し紛れの言い訳を展開して呆れられる。しかし持ち前のやる気の無さでカバー。一方蔦谷は思うように足が進まず難儀する。剱沢に着いた時には21:00に近かった。

8月6日（晴）
宗像、松田　剱沢出発(7:50)―帰幕(13:10)
ようやくの好天。翌日からの縦走のため、井上さん・宗像さん・松田さんは使わない定着用装備を持って（東京に送るため）室堂へ向かう。井上さんはそのまま下山される。その間、蔦谷・佐藤は全員シュラフ・服などを干していた。安息日。

8月7日（雨のち曇のち晴）
剱沢出発(5:30)―真砂沢(7:20)―近藤岩付近(8:50)―仙人山の分岐(12:00)―仙人湯小屋(14:10)―阿曽原小屋(17:40)
縦走に出発。真砂沢を経て仙人山へ

と向かうが、この時にはまた天候が悪く、登っている急斜面を雨水が滝のように流れていた。登り切るあたりにはまた晴れ間が出てきていたのだが、そこの道脇に物件があった。今まで自分たちはこの物件を経由してきた雨水にずっと浸かっていたのか、と思うとやりきれなくなったが、忘れることにする。しかし、今思うとあんな所に（片側が結構切り立った急斜面で、道幅も狭い）でどうやって物件を捻出することができたのだろうか、と不思議である。

仙人池ヒュッテを通って下り道へ。2時間あまり歩いて仙人温泉に着くが、そこで既に体力的にあまり余裕の無かった蔦谷と、そこにあった「阿曽原」の文字を見て目的地は近いと勝手に勘違いした佐藤にとって、さらにそこから3時間あまりの行程はブルーだった。最終的に目的地に着く頃には、蔦谷はキレかかっており、佐藤は投げやりになっていた。松田さんも結構疲れていたように見えた。

8月8日（晴）
阿曽原出発(5:40)—欅平(12:00)—祖母谷温泉(13:00)
阿曽原温泉を出て、欅平まで延々と続く水平歩道を行く。祖母谷温泉へ向かうところではがけ崩れが起きていて通行止めとなっていたが、温泉の方が車で迎えに来てくれたので無事目的地に着くことができた。（この日予定では不帰岳小屋まで行くことになっていたが、カットされた。）

8月9日（晴）
祖母谷出発(6:00)—白馬岳登山口(6:30)—1681m手前(11:15)—1823m手前(12:15)—1888m(13:15)—不帰岳小屋(14:30)
出発直後蔦谷が体の不調を訴えたため、登山口から少し入ったところで30分程度の休憩を取って回復待ちをする。その後は特に問題なく進むが清水尾根は長ったらしくて嫌だった。小屋でお茶を作っていると阿曽原から一緒で先に行っていた中央大学のワンダーフォーゲル部の人たちが引き返してき



1998年8月　白馬岳山頂にて
左から 蔦谷、佐藤（悠）、松田、宗像

た。メンバーの一人が日射病になってしまったということ。

8月10日（晴）

不帰岳小屋出発(4:30)―白馬岳山頂(11:30)―燕平(15:50)

小屋を出てから清水岳までの道は高山植物の原になっていて良い景色。

白馬の頂上でガスがかかっていたらブルーだな、と心配していたのだが割と晴れていたので良かった。雪倉の小屋のところでは、蔦谷は宗像さんが休憩を取るものと当て込んでいたらしく「もう少し行こう」の声に何ともいえない顔をしていた。

8月11日（曇）

燕平出発(5:20)―朝日岳(7:30)―犬ヶ岳栂海山荘(15:20)

天気はあまり良くない。朝日岳を過ぎてからの道はちょっと尾瀬を思わせるような湿地帯を通っていて景色はいいのだが、長い。登ったり下ったりを繰り返しながら進む。栂海山荘の周囲に水場が無いので犬ヶ岳手前の沢（ここが水場とされている。結構下りる）で水とを入れる。その後の急登ではT谷がキレて、「クソッ」「まだかよっ」等の悪態を撒き散らしながら登っていた。

8月12日（雨のち曇のち晴）

出発(5:00)―菊石山(7:10)―白鳥山山頂(9:40)―尻高山(13:00)―親不知(15:00)

明け方はもしかすると停滞？と思わせるほどのものすごい雨だったが、起きる頃には落ち着いていた。菊石山手前のところで水を入れて、かなり長かった記憶のある白鳥山の登りを終える。そこから坂田峠までは急勾配の下りで、残りはぬかるんだ道がだらだらと続いていた。佐藤は最終日で気が緩んでいたのかやる気の無さが災いしたのかよく分からないがぬかるみに何度も足を滑らせて泥塗れになってみたり、蔦谷は思うように足が進まず難儀する。

（佐藤）

冬合宿（北アルプス　針の木岳）

【参加メンバー】宗像（CL）、久田（SL）、蔦谷

【期間】１９９８年12月17日～23日

12月17日

久田、パッキングに苦労する。反省無き、準備怠り癖が今日も火を噴く。西井氏、見送りにあらわる。が、途中で「ストックを持って行ったがいいのでは、いや、でも、戻るのは面倒臭いし」という実の無い議論を続けたあげく、彼が取りに帰ることとなる。

急行アルプスに立川で乗車。四人分のシートを独り占めして眠りの境地へと自分を急き立てる。しばらく車窓か

ら夜の明かりがぐんぐんと後ろに流れていくのと、時折ふと目に入る、ガラスに映り濃い影に包まれている自分の顔とを、ぼんやりと眺めているうちに眠っていた。

12月18日（快晴）

ゲート(6:30)―黒沢出合い(7:00)―徒渉終了(7:50)―稜線上(10:40)―１７００ｍ付近(14:30)

５時ごろ着。待合室では暖かなストーブが赤々と輝いており、その暖かい心遣いに静かに感動する。

夜明けを待ってタクシーを捕まえる。というよりも、商売上手な運ちゃんに捕まる。偵察の時と同じ人らしくて、その熱心さに笑いが出てしまう。着いて名刺を差し出してきた時には、もう、あなたは偉いという賞賛の声さえ響いた。

ここでまた、問題発覚、目出帽、オーバーグローブ、最初に使うからと最後に入れた筈なんだが、忘れてしまった。怒られながら宗像氏から拝借させていただく。自分の馬鹿さ加減に、トホホホッとなってしまう。ゲートはまだ開いておらず、乗り越える。蓮華岳の東尾根の取り付きまで30分ほど歩く。

黒沢出合い。渡渉地点に立つが良い場所が見当たらず、１時間ほど粘って探す。しかし、断念。時間をロスする。心をきめて靴を脱ぎ、足を浸す。さすような冷たさ。冷たいというよりも、痛い。ぬめって安定しない川底に何度も足を取られながら、クソーッと心の中で叫びつつ渡った。

渡渉地点からさらに１００ｍ程上流の疎林帯に取り付く。かなりの急勾配で、雪はない。２時間ほどで稜線上に出る。徐々に雪が出てきて、時々赤布をつけながら歩く。斜面が急になる手前でワカンをつけるが、一年生は手間取った。時々熊の足跡と思われる大きな足跡を見たり、糞を見たので、なんとなーく嫌な雰囲気になる。

尾根が方向を変える１７００ｍ付近でテントを張った。尾根の幅がかなり狭い。天気図を取り始めるが、如何せん練習不足。誰が見ても、うん、コリアへたくそだ、とばればれ級のものに仕上がった。飯を食ってしまうと、もうすることがない。冬山の夜は早い。五時過ぎにはもうシュラフにもぐり込みすぐ寝ついてしまった。

夜中、ハイキックをかまされ目がさめる。何事だ！と思う間もなく宗像氏の押し殺した声がかえって響く。「熊だっ!!」少し覚悟してしまった。縮みあがりながらも大声を出して追っ払ったつもり。効果があるのか定かではないが、他に手立てもなく、みんな真剣そのもの。

翌朝見ると、それらしき形跡が見られないため、大きな勘違いか？と思われる。なんてこった。

12月19日（晴ときどき曇）
起床(5:00)、出発(7:00)―２３９０ｍ？付近(15:00)
飯を食い荷物を整える。うー、もよおしてきた。白銀の世界の中、絶景を眺めつつ世紀の脱糞状態へと昇華していった。ああ、原始人原始人、よよいのよいっと、と訳のわからぬことをのたまって、そそくさと荷物を担ぐ。
いきなり急斜面でのやぶこぎ。１８５０ｍ手前から雪はひざまで達し、ひたすらダブルボッカ。ペースが落ちる。視界が悪く、似たような地形が続くため現在位置を特定しずらかった。２３９０ｍ？かと思われるところでテントを張る。ついでにビーコンの練習もしてみた。

12月20日（曇）
5:00起床(5:00)、出発(7:00)
昨日同様ひたすら樹林帯をダブルボッカ。やっていることはサルのように同じ。樹林そばの雪は、層が薄く何度もはまってしまい、体力を消耗した。ほんと、もう嫌になってしまう。まだまだ続く。どんどん続く。左側に雪庇が出て、これをよけて右側へ行くと樹林帯ではまり続ける、の繰り返しだった。所々樹林帯が切れる。しかし、そこはかなり風が強く、立ち止まってしまうこともしばしばだった。両側は切れ落ちており、やせ細った尾根。斜面には木が生えていなかったり、なぎ倒されているようなところがあり、初めての自分はびびりまくる。
一年二人はかなり疲れて、ラッセルはほとんど宗像氏に任せていた。途中、久田は赤旗とマットを落としてしまうが、指摘されるまでまったく気付かなかった。何度も枝にひっかけるうちであろう。
ジャンクション・ピークと思われる樹林の中でテントを張る。斜面を削って平らにしてブロックを積む。夜には天気が荒れて吹雪となり、ブロックとテントの間が狭いため、その間に雪が溜まりテントが押しつぶされ、なんか狭いなあ、と思って目を覚ました。宗像氏が勇壮にも雪かきに率先していった。一回行う。この日初めて尊敬の念を抱く。

12月21日（快晴）
起床(5:00)、出発(7:00)―蓮華岳(11:45)―針ノ木峠(12:30)
朝の準備は早くなりつつあり、日々の進歩が見られつつあるも、久田のアイゼンが昨日の積雪で埋もれてしまい、見つからない。埋蔵金を探すがごとく辺りを掘り散らして、やっとのことでまさしく発見。位置をはっきりと特定していなかったことを反省。それでも一年生は懲りない。しばらく登った所で蔦谷がバイルを忘れたことに気づく。宗像氏、取りに帰る。ああ、怒っているなぁ。

すぐにアイゼンをつけ、急斜面をしばらく登る。この事から、昨日のテント場はJPの手前ではないかと思われる。久田は〝へたくそ〟であり、何度も注意を受ける。後に、期待通りにスパッツを破くこととなる。樹林はなくなり、クラストした表面はアイゼンがよく利く。穴はまり、ぶかぶかズボッという狂いそうな状態から解放された我々は、あたかも水を得た魚のごとく順調に高度を稼ぐ。天気に問題はないが、扇沢側からの風が強い。

蓮華岳頂上。天気晴朗なれども風強し。絶景なり。穂高連峰、劔岳。針ノ木岳、槍ヶ岳ともによく見える。ちゃきちゃきと写真を撮って針ノ木峠まで下りる。視界が悪いと迷いそうなので、篠竹を立てていく。かなり斜面は急であり、一年二人は恐くてソロリソロリ。

峠では、小屋は半分雪に埋まっていた。迷いながらも雪洞を掘ることにする。土木作業約2時間。火を焚いていると久田が調子こいて掘りすぎた天井の穴が貫通。空気穴だと必死の弁解を試みるが、あえなく失敗。シュラフを乾かしてのんびりと疲れを癒す。

12月22日（曇のち雪）

起床(4:50)、出発(7:00)―針ノ木岳(9:45)―針ノ木峠（11:45）

雪洞の中は、物をなくしやすい。久田のスパッツが見つからない。アイゼンはしっかりと利く。黒部側からの風強し。所々急峻な岩稜があり恐る恐る登る。途中の岩稜線帯基部のトラバースで、ロープを40 m出す。宗像、久田、蔦谷の順で通過。アンカーとしてピトンを一本打つ。そこから雪稜を進むが、雪庇はそれほど出ていない。

針ノ木岳頂上。天気はそれほど良くないが見晴らしはきく。黒部湖はとっても汚かった。天気の悪化が予想されるので、早めに下山。明日には寒気が入ってくる。同じところでロープを出す。雪洞に残してきた荷物をまとめ蓮華岳を登り返すも、すでに風雪強く、一年も足が遅いため、断念。おとなしく雪洞に潜り込む。中では何もすることがなく、この頃のラジオからおかしくなったかと思うほどに流れてくるクリスマスソングに八つ当たりをかましたり、下手な歌を歌う。雪洞の前が吹きだまりになり、入口が何度もふさがるため雪かきに出る。時々酸欠になって、なんか頭が痛くなってしまった。

12月23日（晴）

起床(5:00)、出発(7:20)―蓮華岳(9:00)―黒沢出合い(17:00)

予報では冬型であるが、外はまずまずの天気なので出発することにする。蓮華岳へ至り下る。樹林帯に入ったところでまた穴に何度も何度もはまり出す。蔦谷がバイルとスコップを落とす。いい加減頭に来て雄叫びを上げる始末。途中久田の失くした篠竹と銀マッ

トを見つける。帰りじゃ、意味ねぇ。何とか今日中に下山出来そうだと判明し、一同やる気。珍しく意見の一致をみる。ずっと焼肉焼肉焼肉、温泉温泉温泉、ビールビールビールの3拍子で自分を励ましていた。

途中迷うことなかったが最後で尾根を間違え、宗像は悪い斜面でのトラバースを強いられ、一年は登り返した。それでも尾根はかなりの傾斜で恐る恐る。

最後に渡渉。渡りきった時にはもう暗くて、月がおぼろげに輝いているのが印象的だった。

タクシーの運転手は女性でやさしかった。メーターを途中で止めてくれ、風呂に案内し、駅まで送ってくれた。久しぶりの人との出会いに、心が温まる。体を流し、焼肉に無口にがっついて、久しぶりのテレビはもうなんとやらで浮かれまくっている。お金がないため公園で夜を明かし、寂しくシャンパンで乾杯！

翌朝お金を下ろして、鈍行にコトコト揺られ暖かい車内に意識を任せて、思いを巡らしつつ家路へと向かうのでした。

1998年度　山　行　表

期　　間		コ　ー　ス	メ　ン　バ　ー
1998	3.16～ 3.23	春合宿　東海谷～頸城三山	宗像、奥山(千葉大)、藤田(千葉大)
	3.28	奥多摩・川又の岩場	宗像、井上OB
	3.	湯河原幕岩	大谷、宗像
	3.	湯河原幕岩	宗像、縄田(学習院大3)
	3.	奥多摩石尾根	宗像
	4.19	湯河原幕岩	宗像、幻の1年生2人、古瀬OB、遠藤(上智大3)
	4.29～ 5. 5	硫黄尾根～西穂高岳（ブータン登山隊合同山行）	宗像ほか
	5. 1	徳本峠（新歓山行）	西井、椎谷(新人)、古瀬OB、古田OB、井上OB、前神OB
	5.20	富士山	宗像、遠藤(上智大3)
	5.	日和田	宗像、小田、井上OBほか早稲田大の部員
	5.30～ 6. 1	涸沢（北ア　雪上訓練）	宗像、西井、久田、松田
	6.11～ 6.15	立山　雑穀谷（文登研遭難救助研修会）	宗像
	6.19～ 6.20	小川山（日本山岳会学生部小川山集会）	宗像、その他多数
	6.28	マナイ沢（奥多摩）	宗像、松田、蔦谷、古瀬OB
	6.週末	川乗谷　火打谷（奥多摩　敗退）	宗像、松田、小田
	7. 4	広沢寺	宗像、蔦谷、古瀬OB

期　　間		コ　ー　ス	メ　ン　バ　ー
1998	7.10～ 7.11	三つ峠（岩登り）	宗像、蔦谷
	7.18～ 7.19	谷川岳	宗像、蔦谷、佐藤
	8. 2～ 8.12	剱沢定着（夏合宿） (縦走)剱沢～祖母谷～白馬岳～親不知	宗像、松田、蔦谷、佐藤、OB(外池、井上)
	8.21～ 8.24	室堂～立山～剱岳	宗像(バイト山行)
	9.10	富士山	宗像、長谷川(法政大4)、山梨(東海大4)、長岡(関西学院大4)、榎並(慶応大4)
	9.11	広沢寺	宗像、蛭田(早稲田大4)、長岡(関西学院大4)
	9.17	広沢寺	宗像、蛭田(早稲田大4)、栗田川(法政大4)、山梨(東海大4)、榎並(慶応大4)、長岡(関西学院大4)、小林(駒沢大4)
	9.18	富士山	宗像、蛭田(早稲田大4)、栗田川(法政大4)、山梨(東海大4)、榎並(慶応大4)、長岡(関西学院大4)、小林(駒沢大4)
	9.19	三ツ峠	宗像、蛭田(早稲田大4)、栗田川(法政大4)、榎並(慶応大4)、長岡(関西学院大4)
	9.26	富士山	宗像
	9.週末	東沢釜ノ沢（奥秩父）	西井、松田、大田OB
	10. 7～11. 2	ブータンヒマラヤ5,757m峰(敗退)	宗像、蛭田(早稲田大4)、栗田川(法政大4)、山梨(東海大4)、榎並(慶応大4)、長岡(関西学院大4)、小林(駒沢大4)
	10.10	雲取山（奥秩父　敗退）	久田、蔦谷
	10.17	日和田	西井、蔦谷、久田、古瀬
	10.17～10.18	奥秩父	松田、佐藤
	10.31～11. 2	屋久島	松田
	11. 7	塔ノ岳（丹沢）	久田、佐藤、蔦谷
	11.14～11.15	針ノ木岳（冬山偵察）	宗像、蔦谷
	11.16	笠ヶ岳（春山偵察）	宗像
	11.29	湯河原幕岩	宗像、久田
	12. 4～12. 6	富士山合宿	宗像、久田、佐藤、OB(井上、古瀬)ほか
	12.18～12.23	針ノ木岳（冬合宿）	宗像(CL)、久田(SL)、蔦谷
	12.31～ 1. 2	戸隠P１尾根	宗像、長岡(関西学院大4)
1999	1.17	栂池（日本山岳会学生部ビーコン講習会）	宗像、井上OBほか多数
	1.30	広沢寺	宗像、佐藤
	2.12～ 2.16	八ヶ岳（一橋・千葉大合同プレ春合宿）	宗像(CL)、田中(SL)、藤田(千葉大3)、佐藤(千葉大1)
	2.?	城山（伊豆）	宗像、太田(上智大)
	2.31?	川又	宗像、長岡(関西学院大4)

1999

部長
部員
５年　宗像　　充(CL)
４年　田中　真之
１年　山田　秀明
針葉樹会学生担当幹事
井上　裕之
古瀬　泰介

春合宿（北アルプス笠ヶ岳南西尾根）

【参加メンバー】宗像、久田、佐藤、藤田（千葉大）

【期間】１９９９年3月6日～8日

3月6日（晴）

予定通り、林道を歩きだす。途中から腐った雪でもぐるためワカンをつける。気温高く左手の斜面が時々石を落とす。順調に歩いたつもりだったが、林道の終点まで5時間かかる。地図上では林道終点前に合流点があるはずであったが、右手に見えた谷は笠谷というには小さすぎる気がした。

とはいえ、終点の東側が取り付きのはずであり、流れを2つ渡り、尾根に取り付く。稜上に出たところで、さらに右手にリッジが見え、そのリッジとの間に滝のかかる谷がある。

南西尾根であるならば、このような地形は出てこないはずだが、確かに林道の終点から川を渡り、取り付いたはずである。さらに偵察の結果、右のリッジと自分たちがいる尾根は上部で合流するようであり、ヒアケ谷は左手にあるはずだという合意の下、考得る限りではこれが南西尾根のはずである。おそらく右手が主稜としても、自分たちのいる尾根は地図にも載っていない支稜であろうという判断の下、上り続けることにする。それにしても、右手の谷が地図に載っていないというのは疑問だし、この尾根は南西尾根と違って南西方面へと上がっている。だが、上部で右のリッジと合流するなら、今、ここで方向が違っても、上部では変わってくるのだろうと思う。とにかくしばらく登って、リッジ上の小ピークにテントを張る。ただ、尾根の方向はテン場から見てもさらに南南西方面に向かっているようで、明日、右のリッジと合流して、方向が修正されないようであれば、間違ったと見なし下りることにする。

ここで、宗像が林道終点が実は地図の間違いなど、この時点で確かめようもなく、また、2本流れを渡ったとは言え、ヒアケ谷の支流である可能性もある。また、取り付くときにはちゃんと方向を確かめて取り付いたこともあり、全員納得しがたいものがあった。

3月7日（曇ときどき雪）

さらに登り進む。尾根は北西へ向かわなければおかしいはずだとの考えから、左よりに進むが、結局明瞭な尾根は右よりで戻る。ガスの中から左手に見える尾根が南西尾根ではないかと気になる。とにかく、右のリッジと合流すればわかるだろうと、樹林の中をひたすら登る。しかし、登れば登るほど進行方向は南よりになり、だいぶ登った所で、ついに南になる。これは明らかに稼いだ高度からしてあり得ないと、宗像・藤田で偵察に向かうが、やはり、だいぶ登っても修正されない。南西尾根主稜の山々と、今いる位置を同定しつつ、とにかくこれは南西尾根のヒノキ尾とは完全に違うと判断して下りることにする。この時点で、既に2日を消費したこと、さらに南西尾根がどれなのかやはり分からないことを理由に、予定どおりのルートをトレースしてしまうのは難しいと考え、ほぼ敗退となることを言い渡す。

慎重に来た道をたどり、再び終点に戻ってテントを張る。宗像・藤田は林道を戻って、右に見えたリッジは何なのか、本当の笠谷本流があったかどうかを確かめに行く。右のリッジは下部はかなり急で、資料に書いているように容易に取り付くとは考えにくい。さらに、その右の谷は笠谷というには細かすぎる気がした。何より、一橋の資料のように、そこから歩くのは考えられない。したがって、やはり、林道の終点は地図上のBではなく、Aポイントであり、今いるのもAではないかと考える。他の3人も資料を見つつ考えるが、下りたショックでなかなか考えがまとまらない。もし、ここがAであるなら、南西尾根は正面のはずであり、あす、宗像・藤田でとにかく正面の尾根を登って確認だけはする必要がある、ということになった。

3月8日

早くに偵察に向かう。赤布一つでもあればまず南西尾根だろう。左手に沢を少しだけつめ、急斜面を登る。徐々に右手に移り、これ以上行っても変わらないというところで赤布を発見。昨日からの偵察を総合し、かつこの物証によって、この尾根が南西尾根であることはほぼ間違いあるまい。したがって我々がいたのはAポイントである。

だが、これからの判断は迷う。既に2日使用し、これからうまくアタックしてピストンまたは抜けることは精神的、肉体的に強行軍を強いられるだろう。行って行けないことはない、というのは難しいものである。とにかく最終的に敗退とし、笠谷林道を戻る。

（宗像　充）

夏合宿（北アルプス真砂沢定着）

【参加メンバー】宗像（CL）、山田、井上（OB）、古田（OB）、古瀬（OB）、太

田（上智大学山岳部OB）

【期間】１９９９年７月31日～８月８日

７月31日（晴）

黒部ダム出発(7:30)―内蔵助出合(8:30～8:50)―１ルンゼＴＳ(10:00)

信濃大町で我々２人は太田と合流。バスは行ってしまったので２人連れのオバさんといっしょにタクシーで扇沢に出てトロリーバスに乗る。トンネルを抜けるとそこには何もなかった。あるのは木と山と土と道だけ。そこで朝食をとった後、出発進行！この日の黒部ダムは放流されていた。この放流で弧を描く水が太陽の光と共演して虹を作っていた。この虹を左手に見ながら進む。太陽の灼熱の光が頭上に降り注ぐ。そのため、山田、熱射病であまり動けなくなってしまう。それでも何とか今日の目的地のＴＳにたどり着く。やはり帽子は持ってくるべきだった。その後、山田はテントでお休み。宗像と太田は明日のAppendixの用意をし、長い１日が終わった。（山田）

８月１日（晴）

アペンディックス

起床(4:30)、出発(5:40)―取り付き(6:00)―終了点(12:30～13:00)―取り付き(14:00)―ＴＳ(14:30)

今回、このルートに限り、銀行マンの太田の参加。予想通り寝過ごす。

１Ｐ目、太田リードで取り付く。取り付きは、基部が階段状になる手前。ルートは明瞭と資料にはあったが、太田は少し右のほうに行ってしまい、フリーになったりしてこずっていた。主にナイフブレードとロストアローのネイリングで２時間近くかかった。ビレー中、虫に悩まされる。初めてのクリーニングはまずまず順調。

２Ｐ目、宗像リード。大量のギアが肩にずっしり食い込む。アングル、それにブッシュにタイオフして少し登った後、右上へと伸びるクラックをフレンズのかけかえ。選ぶのに多少時間がかかるが、それほど難しくない。

３Ｐ目、宗像リード。昨日のじゃんけんで核心のこのピッチは僕が担当することになっていたので、俄然緊張した。凹角をブッシュを利用して右上の凹角へと入り込む。ここには残置があって、興ざめ。凹角の上のほうにナッツが残置されているが、ルートはその前に右の壁へと移った方がいいだろう。ナイフブレード１本落とす。さらに右に移り、白いクラックをフレンズをかけかえで直上。その上は切れ切れのクラックのピトンスカーを拾いながら、アングルのタイオフ。ナッツやスカイフックも使う。最後の３メートルくらいで、やはり顕著なクラックはなくなり、残置のマイクロピトンを使った。安心したところでアブミを落としてしまったが、ランニングに引っか

かって止まった。最後のヤブヤブのピッチは太田がリードでようやく左岩稜上に出る。日差しが痛いくらいに暑い。中央壁に昨日から取り付いていたパーティーが下りてきている。左岩稜を4回懸垂で下のブッシュに降り立つ。

太田は河原でそうめんを食って帰っていった。（宗像）

8月2日（晴）

起床(3:00)、出発(4:50)―内蔵助平―ハシゴ谷乗越(10:40)―真砂沢BC(13:00)

今日から宗像と2人だけの生活を送る。といっても今日入れて2日だけなのだが。未だ日が上がらない内にTSを出発。内蔵助平に向かう。出発して1時間後の休憩場所を地図で確認するも現在地がつかめないまま、再出発すると宗像が「悪い、道、間違えた。」などと仰せられる。どうやら道を山側に取りすぎたらしい。正しい道に戻って大幅に時間がかかり、内蔵助平に到着。ここで一息いれていざ真砂沢へ。と元気なことを言っていられたのはここまで。内蔵助平を出ると、頭に容赦なく降り注ぐ陽光と、肩に容赦なくかかってくるザックの重さとで、山田へたばる。宗像、目が怒っている。何とか前に進みたいが足が動かない。宗像に謝りながら、本当にやっとのことで真砂沢につく。2時間ほど休憩して明日のロングランの準備をする。と…。ヘッドランプが無い。どうやら途中で落としたらしい。そこで明日のロングランは内蔵助平までヘッドランプが見つかればロングラン続行。無ければ引き返すこととなった。宗像の首筋に血管が浮き出ている…。（山田）

8月3日（晴）

起床(4:00)、出発(5:20)―内蔵助平(7:30)―引き返し点(8:30～9:00)―ハシゴ谷乗越(10:30)―BC(12:00)

さあ、今日から1泊2日のロングランだ。行き先は竜王岳。ちょっと渋いところ。だけど、私のヘッドランプが無い。真砂沢小屋で借りようとしたが「いいですよ」と言われて出された物は、大きな懐中電灯。これじゃ両手が自由に使えないよ～。というわけで、この懐中電灯をBCに残したまま、昨日の予定通りに内蔵助平に向かう。途中よく下を見て進むも見つからず、とうとう内蔵助平に到着。どうも昨日、道を間違えたときに落としたらしい。それでも宗像、ヘッドランプ無くてもいいっか、と昨日とは違った態度を見せ強行しようとする。しかし、その強行に「待った」をかけたのは私、山田だった。今晩の米を持ってくるのを忘れたことを思い出したのだ。言いづらい雰囲気の中、勇気を出して言ってみると、意外にも宗像笑い出す。怒りをも通り越したということか。とうとう

宗像も強行をあきらめ、昨日歩いた道、すなわち今朝も歩いた道をとぼとぼと二人は真砂沢に向かって引き返すのであった。（山田）

8月4日（晴）
源次郎尾根
起床(3:00)、4:30 出発(4:30)―取り付き(5:30)―本峰(11:00)―BC(13:45)

というわけで、ロングラン中止。私が悪いんだけど・・・。そこで、予定に入っていなかったが源次郎をやることになった。雪渓を歩いて1時間。やっと取付。ここからコースタイム5時間半ほどの道のりを、他大学に何人も抜かれたが丁度5時間半で登り切る。帰りはカニノヨコバイ・平蔵谷を通ってBCに戻る。戻ると井上OBが待っていた。（山田）

8月5日（晴）
源次郎側壁中央ルンゼ～成城大
【メンバー】宗像・井上OB

起床(3:00)、出発(4:30)―平蔵谷出合―取り付き(7:30)―中央ルンゼ終了点(10:00)―成城大取り付き(11:00)―終了点(15:00)―1峰発(16:30)―BC(19:30)

途中中谷ルートも見上げてみるが、ルートそのものは大丈夫のようだが心の準備ができていないということで、結局中央ルンゼへ。雪渓がへこんだところからシュルンドへ楽に下りることができた。井上さんが酒を撒き合掌。一段登ったところからロープを出す。宗像リードで取り付くが5mほどのぼったところで気休め程度のピトンを打ち、右にトラバースしようとしたところで、足を滑らせフォール。予想通りピトンは飛び、ビレーしていた井上さんに受け止めてもらった。漫画のようだ。幸い右足の足の裏をしたたか打ったが、あとは左足をすりむく程度ですんだ。井上さんは「細野が呼んでんじゃないの」とかいっているが、一応けがにならなかったのは細野さんのおかげだと考えて、気を取り直して登りなおす。ルートは右ではなく、左に残置ピンがあった。初歩的なルートミスだ。その上は洞窟のようになっていて、その左側壁に井上さんが取り付く。残置も古いものばかりで、その上細かくて結構いやらしい。ルート図に書いてあるようなチョックストーンはなかった。その上はがらがらの傾斜のないまさに谷を歩く。全体的にそうだが、このルートは谷だから当然浮石が多く、その上両岸が迫っているだけに、非常に精神的に圧迫感がある。ただ、晴れ続きだったからか、濡れてはいなかった。さらに、V字状になった谷を左側を選んで2ピッチほど登り、滝の下につく。真中の滝を登ったあと、あとはやさしそうなので、ここで終了と

した。しばらく登ると正面に1峰側壁が現れる。取り付きはずっと左のほうで、これを見つけるのにしばらく時間がかかった。そこに行くまでも結構いやらしい。

1P目　井上さんリードで取り付く。草つきで結構いやな凹角。

2P目　そのまま宗像リード。右に回り込み、カンテというよりもクラックを登って、ハイマツテラスへ。ちなみにハイマツではなくダケカンバなので注意。

3P目　左のフェースの右端を井上さんリード。出だしが細かくセカンドは難しく感じた。

4P目　左のクラック目指してトラバースする。クラックを2メートルほどフリーで登った後、人工になる。登る前はオールフリーでとか考えていたが、荷物が重いし、高度感もあるので、とても無理と判断。そのまま人工でトラバースするが、残置は古いし、利きも甘いので緊張する。さらにその上のクラックを少しフリーで登り、小さなレッジでピッチを切る。最後のほうはギアも完売で、その上人工からフリーに移るのでむちゃくちゃ怖かった。

5P目　井上さんリード。下から見て左上のスカイラインを登っているときに、フォール。2〜3mダイブ。ロープも伸びていたので、それほどショックはこなかった。フォローするときに、アブミやら残っていて、激戦の後が伺えた。

最後のピッチはハイマツの藪こぎでへろへろになる。大きなバンドに出て、そこでギアを片付け、さらに、右のほうから稜線に向かって登る。もう、時間も遅くなっていて、疲れているのでそのまま源次郎尾根を下る。途中3回ほど懸垂をして、ぎりぎり暗くなる前に真砂に着いた。今日入山の古田さんが来ていた。今日入山のパーティーも多かったらしく、だいぶにぎやかになっていた。

（宗像）

8月6日（晴）

Cフェース劔稜会ルート

【メンバー】宗像、山田、古田（OB）

BC(5:00)—Cフェース劔稜会取付(7:30)—6峰頭(10:30)—BC(12:00)

今日は我々2人と昨日合流した古田OBと3人でCフェース劔稜会ルートに行った。古田OBがトップで登る。あまり難しいと思う部分はないものの、なんとなく風が寒かった。古田OBは体力が有り余っているせいか、ルートとは違うところを難なく登るものだから、私は1回落ちてしまった。3時間ほどして頭へ。これまでの合宿で疲れている宗像・山田は昼前というのにBCに引き返す。体力があまっている古田OBはこれから劔岳の山頂に向かう。帰りは5・6のコルを通ってBCへと戻る。帰ると1時間ほどして古田OBが戻ってくる。やたら早い。

この体力を見習わなければ。15時ごろに古瀬ＯＢと合流。ということは、全員で５人となってしまったということだ。我々のテントに寝られるのは４人。よって、宗像が法政のテントで寝ることとなった。現役部員よりもＯＢのほうが人数が多いとは・・・。　（山田）

８月７日（晴ときどき曇）

チンネ左稜線

【メンバー】宗像、山田、古田（ＯＢ）、古瀬（ＯＢ）

起床(3:00)、出発(4:30)―二の窓(9:15)―取付(9:45)―チンネの頭(15:00～15:30)―ＢＣ(17:30)

現役２人と古田・古瀬ＯＢの４人でチンネを登りに行く。井上ＯＢはこの日でお別れ。

朝、メガネが無い。30分ほど探してやっとあった。テント内の物の管理はきちんと行おう。朝こんなハプニングがあり、ちょっと出発が手間取りながらもチンネに向かう。５・６のコルを通り、八ツ峰をトラバースして池ノ谷に出、三の窓を通って出発して５時間でようやくチンネに取り付く。自分はチンネの一番の難所のところで何回も落ち、鐚を使わざるを得なかったが、他の三人は全く危なげなく登り、「流石」という感じであった。帰りも同じ道を通り、ＢＣにかえった。　（山田）

８月８日（晴）

起床(4:30)、出発(5:50)―室堂(12:30)

今日で下山。別山乗越まではずっと上り坂。今日は最終日と思いながら最後の力を振り絞って乗越に向かうもやはりバテる。何とか乗越まで登って、その後ずっと下るも最後の最後で地獄池のところの上り坂。こんなところに坂など作るな！と一人で不機嫌になりつつ、おばさんに抜かれていった私は体力の無さを実感するのでした。

今回の山行で感じたことは自分の体力の無さ、整理整頓の必要性 etc であった。今後は気をつけていきたい。　（山田）

春合宿（抜戸岳南尾根―笠ヶ岳―広サコ尾根東北支稜（とおぼしきもの））

【メンバー】宗像（CL、一橋大５年）、長岡（SL、関西学院大５年）、山田（一橋大１年）

【期間】２０００年３月17日～21日

笠ヶ岳について

笠ヶ岳は飛騨の目立たない山であるが、形のきれいないい山であると思う。この山に積雪期登るため、宗像、長岡とも３年前からいくつも計画をたて、かつ、実行してみたが、何回も失敗した。困難性というより、それ以外の理由が多いのだが、いいかげん学生の内にやっつけておきたいという２人の強い意向で、合同での合宿を組んだが、直前に関西学院大森が不参加になり、

5年、5年、1年という変則的なパーティー編成となった。

3月17日（雪）

14:00 宗像・山田、新穂高着、16:30 長岡新穂高着

本日、新穂高集合後、取りつきまで行く予定だったが、飛騨高山で今日の晩飯の買い出しをしている長岡がバスに乗り遅れたため、結局、新穂高のトイレで寝ることとなる。外はじゃんじゃん雪が降っているので、食堂のおばちゃんと若乃花の引退記者会見を3回ぐらい見ていると、ようやくバスがやってきた。ついこの間まで、大分の実家でうぐいすの声を聞いていたのに、突然雪の中で、その上、中途半端にあったかいトイレに寝たため、風邪をひいた。

3月18日（晴）

起床(4:30)、新穂高温泉(6:05)―クサコバ取付(7:25)―主稜線から(11:55)―P4(13:00)―穴毛槍手前TS(15:50)

連休のためか、新穂高には結構登山者がいた。取りつきはクサコバという、尾根右側のルンゼを予定していたが、こんなに雪が積もるとは思わなかったので、多少心配するが、とりあえず行ってみる。林道の除雪が切れたころに、ひざくらいのラッセルになる。クサコバを見上げると、上部が急な雪壁でいやな感じだ。弱層テストをしてみると、案の定すっぱり切れる。が、アイゼンに履き替え登り始める。下のほうはクラスト気味だったが、上部はラッセルで、膝くらいになってくる。中間部あたりまで来たとき、上のほうから、雪面が崩れてきた。上部にいた長岡、山田の二人はその通り道にいたため、心配したが、まったくよける気配がない。僕が左の灌木によけて崩壊を見ていると、50 mほど下で、立派なデブリになっている。雪崩です。上の二人は大丈夫だったらしい。落ち着かせるために、左の灌木の下に移動するように指示し、休憩にする。山田選手になんでよけなかったか聞くと、のまれたら泳げばいいと思ってました、とのたまう。長岡は山田が動かないので動揺したらしい。まったく中途半端な知識は恐ろしいと思うが、まったく動じていない山田も恐ろしい。とにかく無事で良かった。前日の積雪、弱層テスト、スノーボール等々、予兆があっただけに、セオリー通りの雪崩発生に、わけもなく感心。ひとまず、空身でのラッセルで、長岡が先行することにした。その後もスノーボールの落下はあったが、ラッセルを繰り返し、ようやく、P3、P4間のコルに抜け出る。上部はかなり傾斜があった。今日は僕の卒業発表のはずなので、携帯で電話するが誰にもつながらずちょっと心配。

P4の登りはルンゼから、上部は急

傾斜になり、先頭の長岡が苦労していた。早速フィックスが張ってあったが、ノーロープ、そこから雪稜になり、きのこで行き詰まる。右手にクライムダウンをはじめると、途中からあるはずの地面がなくなり、ずるずると落ち始め止まるはずが止まらない。気がつくと、5メートルほどの落とし穴状のシュルンドの中にひっかかっていた。頭をぶつけ、ひざをひねったが、奇跡的にそれほどのダメージがない。上の人間を呼ぶが、離れていたためか聞こえない。しゃあないかと、登り始めるが、30キロ以上の荷物を背負ったままのバックアンドニーのチムニー登りに、アックスをかませ、訳がわからず登っているのに、恐らくまったく報われないであろうことは訳がわかる。ようやく這いあがると、長岡に記念撮影され、とにかく、そのまま穴の所からクライムダウン、トラバースをし、コルに下り立つ。頭から血がでていて、サングラスなくす。山田を長岡に確保させて下ろし、長岡は落とし穴の左を回って下りてきた。この事件は「消えた宗像事件」と名づけられた。ここから、ワカンに履き替え、樹林帯のラッセルから、徐々に尾根が広くなり、穴毛槍の手前へ。休憩していると、驚いたことに後続パーティーがいる。まさか、この尾根で他パーティーがいようとは。時間も遅いので、穴毛槍の頂上直下に泊まることにする。設営しているとさっきの二人組が抜いていった。末端から取りついたこのパーティーは、わらじの仲間の仲間であることが後にわかった。夜、とりあえず、長岡、宗像で、山田少年の好きな女性のタイプを質問攻めにする。1年一人だとからかいがいがあるが、この図式は最後まで変わらなかった。しょっぱなからいろいろあった1日だった。

3月19日（曇のち雪）
起床(4:00)、TS(6:10)—穴毛槍(6:30)—C6(8:30)—P7（プラトー、10:10)—C9（南壁のコル、11:00)—底部から(トラバースFix工作)—コル底部TS(12:45)

夜、非常に息苦しい夢を見た気がしたが、朝起きると、上部雪面にひびがはいっていた。穴毛槍を越えたところにわらじがテントを張っていた。そこからやせ尾根、きのこになっているので、長岡リードで30mフィックス。山田を通過させるが、きのこを越えたところでおちたらしい。向こうからは、長岡、山田の、「登れ！」とか「動けません」とか「スリングをナイフで切れ」とか緊迫したやり取りが聞こえてくるが、こちらからは見えないので、わらじの人と「落ちたみたいなんで時間かかりますよー」、「そりゃあ大変だなあ」とか、気の抜けた会話を試みる。その後もう1Pナイフリッジ、それか

3月20日（雪のち晴）
起床(6:25)、TS発(8:25)―ルンゼ底部(10:30)―南壁のコルの頭(15:00)―杓子平（2600m付近のTS、17:00）

夜中、長岡、山田がテントラッセルに出動し、次は自分の番だったのでふて寝をきめこんでいると、大幅に寝過ごし、昨日の自分の夢はもろくも崩れ去ってしまった。積雪は50㎝くらい。トラバースのラッセルで長岡が、がんがん雪崩を起こし、僕も雪崩を起こすが、気づかなかったことにする。ルンゼに下りるところで、山田選手が、懸垂が動かなくなりはまっている。フィックスを張りすぎた自分の落ち度だが、動かないからいらいらする自分はかなりひどい奴だったらしい。2Pのフィックス通過に2時間かかってしまった。そこから、長岡リードで雪壁からルンゼ状30m程。山田が苦労している。核心部で、山田の落氷で唇を切っらやさしい雪稜でC6へ。そこから宗像リードで雪壁を左から越え、リッジに出る。山田が赤旗が引っかかって苦労していたが、登って来るのを見ると、ユマールと体が連結されていない。落ちなくて良かった、と唖然とするが、これは長岡の管理ミス。まったく、今日もいろいろある。わらじの人と休んでいて、山田が篠竹引っかかったのを「1年のうちは苦労したほうがいいんだ」とか、理不尽な説明をしていると、わらじの人に「極道ですね」とか言われてしまった。一橋では篠竹だけは1年が持つときまっているが、今回の合宿でも、結局1本も使わなかった。リッジは未だ細いが、空身でトレースをつけにいって、ノーロープでプラトーまで。右手に当初登ろうと考えていた東南壁が見えるが、今回は対象から外したのでさっさと進む。南壁の手前で2Pフィックス。まだ、昼過ぎだったので、今日中に南壁を越えることを主張するが、長岡が渋る。とりあえず、トラバース2Pでルンゼまでくるが、わらじが先行しているし、天気も下り坂、また、早く来すぎて荷物も重いので、さっきのコルまでフィックスをし直して戻る。山田にフィックスをさせてみる。このコルは狭いし、壁の下なのであんまり気分は良くない。

夜、明日の登攀に備えて、多すぎる荷物を減らすため、ポップコーンを作り、植木鉢の土くらいあるココアを消費し、とにかく軽くする。いらんもの多すぎ。カンテンパパが皇居の周りを走っていないので、パオパオ杏仁を説明するとおおうけしていた。すでにこの時点で、宗像はあすの天候をまったく無視して、明日中に下山できる、という大本営発表をし、みなの戦意昂揚をはかるが、「笠なんてただの山だろう」という発言は、これまでの経験からして問題発言だった。

テントラッセルして寝る。

たところで、ユマールに雪がつまって効かなくなり、踏んだりけったりだが、とにかくクリア。ルンゼの傾斜が強くなっているところから、次のピッチは、左へトラバースする。宗像は「消えた宗像事件」でひざをいためていたので、また長岡に行ってもらう。トラバースを終えると、あとは灌木のあるやさしい草つき登りだった。40mでラッセルになり登攀は終了するが、こちら側からルンゼを見た限りでは、こっちのほうが楽そうだった。しかし、ここの残置はやたらめったらあって、うっとうしい。テルモスを飲むが、脂肪分が分離しているらしく、酸っぱくて人気がない。天気も良くなってきた中をひたすらラッセルを繰り返し、抜戸を目指す。朝からほとんど食べていなかったので、山田、長岡が先行しているすきに、誰も飲まないココアを全部捨て、レーションを食べ、水を飲み、一息つく。最初は、抜戸の手前くらいまで行けるだろうとか、景気のいいこと言っていたが、「あそこの雪面でいいんじゃない」とか、しまいには「この辺でどう」とか、弱気になり、抜戸の200mほど下に泊まる。17:00まで行動。穂高の山々が良く見える。ここまでくると、引き返せないので、卒業が気になるが、何ともならない。

夜、山田少年に、百名山は、穂高だったら、奥穂高岳、北穂高岳、西穂高岳全部、笠ヶ岳だったら、緑の笠も登んないと登ったことにならない、とかいいかげんな事を説明してみる。さすがに信じてはいなかった。予定より1日早いが、明日こそ絶対下りる、と発表。12日分の食糧を用意して、何でそんな急ぐのか、という目で、本日楽勝だったとのたまう山田少年が訴えかけるが、僕は雪山の場合、山に入った瞬間から、早く下りたいので、明日は頑張ろう。

最近手を出した16歳女子高生と、長岡がセクハラを受けたと主張する28歳のOLに長岡が果敢に携帯での連絡を試みるが、ひとまず通じず、穂高連峰と笠ヶ岳は、かろうじて月夜に山の権威を維持していたようだ。

3月21日（晴のち曇）

起床(4:00)、TS発(6:00)―抜戸岳(7:50)―笠が岳(10:20)―クリヤの頭(13:40)新穂高温泉(18:00)

朝、山田がスパッツが見つからないとか騒いでいたが、シュラフの中から出てきた。無視して一人で早速空身ラッセル。結構朝一でこたえる。山田にラッセルを代わるが、50mほどですぐに交代している。あとで山田は10分やりました、とか言っていたが、長岡、宗像に「時間じゃねんだよ」とか「止まってても10分たつわ」と突っ込まれ、こういうときの一人しかいない1年生は目も当てられない。抜戸の雪庇を長岡が切り崩し、稜線上はクラスト

しているので、アイゼンをつける。途中、時々潜りもするが、おおむね快適な稜線漫歩で笠ヶ岳下のコル手前まで。休憩しようとしたら、長岡がいない。山田に聞くと用足しに行っているらしい。5分待ち、10分経ち、25分経っても現れないので、いらいらするとともに、さすがに心配なので、見に行こうとしたら、ようやく現れた。むちゃくちゃ不機嫌になり、シカトを決め込み、後ろを振り向かずに、笠ヶ岳まで、一時間歩きとおした。さすがに大人げないので、とりあえず「おまえ今日一日トイレ禁止」と理不尽なリーダー命令を言い渡し、下山にかかることとする。3年越しの笠の頂上は、あっさりしたものだった。広サコ尾根と南西尾根のジャンクションで、長岡が案の定間違えて、50 mほど登り返す。この斜面もいやな斜面で、雪崩れそう。クリヤの頭の手前は再びラッセルになり、いいかげんいやになってくる。クリヤの頭からのくだりはさらにいやな感じで、弱層テストをすると、スパッときれる。後ろ向きで慎重に下り、山田に、本来だったら、もう少し慎重に、ロープだすなり、時間待つなりしたほうがいいと、言い含めるが、今回、そういう説明が多すぎる。大概が、何が本来なのか、行動が伴わなければ、まったく説得力がない。その後、一箇所、急な個所をクライムダウンし、くだりのラッセルを繰り返す。宗像、長岡には、一の沢がとっても魅力的に見える。とりあえず飛騨沢シンドローム（雪崩の危険があるにもかかわらず、下りやすそうな谷筋を下山路に選ぶこと、またはその衝動。注＝やってはいけない）と呼ぶことにする。一応、予定どおり東北支稜を目指す。今回、大体、この尾根が東北支稜だろう、と地図上で見当をつけていたが、この辺の尾根ならどれでも下れるだろう、と思って、あまり確信は持っていなかった。休憩して見ると、目の前の尾根はきのこで始まっていて、ほんとかいな、という感じで、その手前の一の沢側の尾根のほうが下りやすそうであった。誰かの手袋が落ちていったが、全員自分のではないと言い張るので、見なかったことにする。予定どおりの尾根を下ることにする。が、予想通りきのこが連続し、先頭の長岡はきのこの根元によく落っこちていた。その上、途中、尾根を外し、登り返す。本日、あまり長岡君は精彩がない。長岡が落ちるのを学習して、きのこは滑って、穴にはまる前に足を出すと、何とかうまく着地できる。その後も、急なくだりが続き、山田は途中で案の定、滑落していた。それにしても、さっき見えた隣の尾根は下りやすそうで、あれが東北支稜じゃないのか、と考えてるときに、尾根が広くなり、そのまま、隣の谷へと歩きやすそうなスロープが続いている。こんだけがんばったんだからもういいやろ、

とか、かってな理由を自分につけて、谷へ。そのまま、堰堤につき、ようやく林道に戻ってきた。今までたどってきたところが一望できる。今日はほんとにぐるっと回って良く歩いた。

時間も遅いので、新穂高では再びトイレに泊まった。最後の合宿としては物足りないとか、長岡が言っていたが、事故がなくて良かった。懸案の笠ヶ岳に登れてうれしいが、卒業もできていたので、とりあえず良かった。それから、山田も大雑把な奴で良かった。

夜、長岡は16歳女子高生に連絡が取れたらしく、終始ご機嫌であった。青少年保護育成条例に対する恐怖感はどうやら吹っ切れたらしい。

（感想）小さな達成感が欲しかった。勝率が異様に下がっていた。今回の登山は、失敗や反省点がいろいろあったが、総じて楽しいものだった。総合的な面白さではなく、単純に楽しかった。この山に登るためにはどうするべきかと考えるとき、その時点で自分の中ではメンバーの選択が始まっている。そうではなく、こういう奴と山に登りたい、というときもあって、長岡や山田はその意味では全く気楽な奴らだった。どちらに比重を置くかはいろいろあるが、今回無事に帰ってこれたことで、僕の中では小さな喜びだった。こういう登山も大事にしていきたいと思う。

（文責　宗像　充）



『針葉樹』第11号より

1999年度　山　行　表

期　　間		コ　ー　ス	メ　ン　バ　ー
1999	3. 6～ 3. 8	笠ヶ岳南西尾根（春合宿）	宗像、久田、佐藤、藤田(千葉大)
	3.12～ 3.13	本匠（大分県）	宗像、太田(上智大)
	3.21～ 3.25	鹿島槍ヶ岳北壁主稜（個人山行）	宗像、太田(上智大)、藤井(南山大)、山口(名工大)
	4.17～ 4.18	富士山	田中、他(日本山岳会マッキンレー遠征メンバー)
	4.29～ 5. 6	剱岳北方稜線	宗像、田中、他2名
	5.27～ 5.30	雪上訓練（北アルプス涸沢定着）	宗像(CL)、久田(SL)、田中、山田
	6.19	奥多摩和名倉沢	久田、OB(古田、古瀬)
	6.26～ 6.27	日本山岳会学生部 小川山集会	宗像、飯島、他多数
	7. 4	榛名山黒岩	宗像、山田、井上OB、他1名
	7.31～ 8. 8	夏合宿（北アルプス真砂沢定着）	宗像、山田、(OB(井上、古田、古瀬)、他1名
	9.13～ 9.15	越後三山	山田、他1名
	9.30	丹沢・大山	山田
	10. 3	双子山	宗像、他2名
	10.17～10.19	冬山偵察・抜戸岳取りつき・錫丈岳前衛フェース銀河鉄道（敗退）、左方カンテ	宗像、他1名
	10.24～10.25	北アルプス常念岳・蝶ヶ岳	田中、山田、他2名
	10.？	川又の岩場	宗像、他1名
	11.23	広沢寺	宗像、田中、山田
	11.27～11.28	両神山ボッカ訓練	田中(CL)、山田(SL)
	12. 3～12. 5	富士山合同雪上訓練	宗像(CL)、山田、古田OB、他3名
2000	1.16～ 1.17	上州武尊山	宗像、山田
	1.29～ 2. 3	八ヶ岳赤岳鉱泉定着	宗像、他3名
	2. 7～ 2.12	北岳バットレス四尾根主稜	宗像、他1名
	2.11	川又の岩場	宗像、山田、他1名
	2.11～ 2.12	飯縄山	山田、古瀬OB
	2.17～ 2.23	上越国境・平標～谷川	宗像、山田
	2.25～ 2.26	西伊豆波勝崎海金剛	宗像、他2名
	2.？	湯河原幕岩	宗像、他1名
	3. 4～ 3.11	九州クライミングツアーと帰省	宗像、他2名
	3.17～ 3.21	春合宿　抜戸岳南尾根～笠ヶ岳	宗像、山田、長岡(関西学院大)

新部室へ移転

新部室は旧部室のやや南へ下がった場所に、１９９９年３月に完成し、同年４月３日には新部室前で完成式を兼ね盛大に花見の宴が開催された。

旧部室は１９３１年５月に完成したが、老朽化が進み建て替えが必要となった。大学側（国）との交渉の結果、一橋山岳会が費用を負担し、これを大学側（国）へ寄付、その結果、使用権が確保できることとなった。

部室の新築費用は一部を遭難基金の取り崩しにたよったものの、大半（５５４万円）は針葉樹会員と篤志家13名の寄付によった。

〈参考文献〉

針葉樹会報復刊第60号（１９８１年12月）　特集「部室50周年記念」

「部室50年　―建設経過を中心に―」（増山清太郎）

「国立の緑の中の既得権」（勝田有恒）

針葉樹会報第87号（１９９９年１月）

「古き良き部室を悼む」（石原　脩）

「部室再建計画の経緯と現状」（部室再建担当幹事　西牟田伸一）

針葉樹会報第89号（１９９９年10月）

特集「新部室落成」



新部室



旧部室　1966 年 5 月 13 日

2000

部長
部員
２年　山田　秀明(CL)
Zorig Alimaa
(10月退部)
針葉樹会学生担当幹事
井上　裕之
古瀬　泰介

活動概況

５年生の宗像氏と４年生の田中氏が卒業され、両名ともに大学院に進学されたため、部活動自体からは離れられ、いろいろアドバイスをいただけたものの、新２年生の山田、一名で部活動はスタートした。

春の新歓活動も、当年も厳しい状況が続き、最終的にはＧＷまでに一名獲得し、立山雷鳥平にて新歓合宿を行うことができたもののその後まもなく退部し、最終的には、６月に部の門をたたいた、モンゴル人留学生が残り、山中湖～丹沢の縦走や丹沢広沢寺などで岩登りなどを行った。

しかし、留学生は夏休みに帰国したため、夏休みは単独での部活動はままならず、日本山岳会学生部の会合にて意気投合した上智大学（こちらも当時部員一名）とともに合同夏合宿を剱岳真砂沢定着にて実施。源治郎尾根や４峰フェイスなどを登攀したが、両名ともに２年生であり、計画を立てて現地でも判断した経験はとても有意義だった。その後、室堂で解散した後、山田は単独で上高地まで縦走した。（後述記録参照）

９月には文部省登山研修に参加。この研修は文部省登山研修の春山研修の事故（大日岳雪庇事故）以来初の開催となるもので、緊張感があったのを覚えている。

10月にモンゴル人留学生が帰国したのを受け、日本海から五龍岳まで６日間を掛けて縦走した。海抜ゼロメートルから標高３０００ｍまで登る経験は何事にもかえがたい経験だが、疲れも甚だしく、留学生はこの山行で退部してしまった。

それからは再度部員が一名となり、冬はＯＢの古瀬氏と中ア空木岳往復。春は青山学院大の中尾氏と八ヶ岳権現岳などを登った。

この一年、部員が安定せず、活発な部活動はできなかったものの、山田個人としてはいろいろ自分で計画立案し、現地でも判断せざるをえない環境であり、かつ文部省登山研修や日本山岳会学生部の会合に出席することで、同じような志をもつ人と交流し、かつ実際に山に行くこともできたことは、のちのちの山登りにおいてこの１年の

経験が大きく役にたったと思う。

夏合宿（剱岳真砂沢定着、室堂～上高地縦走）

【参加メンバー】中澤友則（上智大山岳部）、山田秀明（一橋大山岳部）

【期間】２０００年８月４日～13日

８月４日

後半の縦走の食糧・燃料などを室堂の山岳警備隊の詰署にデポさせてもらった後、真砂に向かう。ザックの重量は、出発時に上智ＯＢから差し入れてもらったメロンを山田が持つなど少し調整したが、食糧を担当した中澤が約40 kgで山田は約30 kgとかなりの差が出た。そのため、少し疲れる中澤を横目に山田は全く修羅場を感じずに真砂に入山することが出来た。今年はやはり雪が多かったらしく、去年に比べると、真砂のテン場スペースが小さい。

８月５日（曇のち雨）

源治郎尾根

我々が取付いたときはもう１パーティが取付こうとしているときであったが、そのパーティはルンゼから取付いていったので我々が実質的に尾根から取付く最初のパーティだったようだ。

取付きのほんの最初のところの岩登りがすこし怖かったのでザイルを出し、その後も木登りピッチとそれに続く岩登りでもザイルを出した。２峰の懸垂を難なく降り、本峰に向かう途中で後ろでヘリが飛んでいる。どうやら我々の後続パーティが事故ったらしい。本峰ではずっと人が絶えなかった。平蔵谷は真中の所が切れていたが、途中からあがって難なく通りすぎたが、この頃から雨が降り始めてきたので、急いで下ろうとするが、下部でも切れていそうなところがあったので巻いたが実際は切れていなく時間の無駄であった。

８月６日（晴、夕方から雨）

Ｃフェース剱稜会

剱稜会に取付くが、今年は雪が多いらしく、少し上までノーザイルで行ってから取付く。１Ｐは中澤リードでその後はつるべで登る。全く問題無し。さあ、Ａフェース魚津高も登るぞという意気込みで５・６のコルに降りたが、下でザイルを引っ張ってもザイルが流れず、結局中澤が上まで登ってもう一度懸垂で降りてくるという面倒なことをした関係でかなり時間がロスし、２本目は諦める。今日も夕立が降ってきた。

８月７日（晴、昼から雨）

停滞

前日に魚高に行けなかったので、今日行くつもりで、天気も晴だったが２人とも起きられずあえなく停滞。

8月8日（晴のち曇のち晴）

Aフェース魚津高＋八つ峰上半縦走

今日はぜひとも魚高と中大2本登るという強烈な意気込みで2時起き。結局、魚高には1番乗りで取付く。後ろでは魚高待ちのパーティが2つほどいる中、山田が1P目をリードしその後はつるべで登る。1P目の右に曲がるところが少しいやらしかった。結局1時間20分というタイムで登り終え、中大の取付きへと向かう。先日と同じミスをしないように慎重に5・6のコルに降りた。

取付きに辿り着くと、既に取付こうという6人パーティがいて、抜けるまで待とうとする。しかし、1P目にやたら時間がかかっていたので、今日中に中大を取付くことを断念し、予定を早めて上半縦走を先にしてしまうことにした。

上半縦走では6・7・8峰の下りすべてに懸垂を利用した。八つ峰の頭からの下降は、長次郎右股の雪渓が切れていたので、一旦チンネの頭まで行ってからそこから、八つ峰のチンネからの巻道を通って6峰までいき、6峰から逆縦走して、5・6のコルに降りた。1番長い1日で2人とも18:00には爆睡してしまった。

8月9日（曇のち雨）

Aフェース中大

前日が長かったせいか、やたら疲労がたまっていたようで、3:00起きのはずが2時間寝坊した。幸い、中大には誰も取付いてなく、後続パーティもいなかった。さらに熊の岩に張っているテントも少なくなっている。みんな帰ってしまったようだ。下に登山靴やピッケルをデポした後、登り始める。1P目は中澤がリードでその後つるべで3Pだったが、1P目は渋く、中澤・山田ともにA0を使いまくりながら何とか抜ける。2P目もⅣ＋ということだったがあまり難しくなかったなぁと思いつつ、ピッチを切ろうとするとなんか昨日来た事があるようなところに来てしまっていた。どうやら、左に行きすぎて魚高の方に抜けてしまったらしい。私はピッチを切ったところから直上しただけなのに…。いやぁ残念。そして、2人は雷が鳴り響く中、メロンを楽しみに長次郎を下りていくのでした。

8月10日（曇のち晴、夕方から雨）

3:15起き。朝飯は釜飯だったがメッチャまずくて山田は残してしまった。

天候も涼しい(寒い)くらいでちょっと視界が利かず剱岳が見えなかったのは残念だったが、昨年は修羅場だった別山乗越までの登り返しも難なく終わり。

室堂に着き、デポを回収し、いらなくなったアイゼン・登攀具などを家に送り、中澤とお別れした後に後半の縦

走へと続く。
　1人になったので、登りはゆっくり下りはガンガンという自分のペースで、昨日上高地に向かった農大に追いつこうとしてひたむきに歩くと、ザラ峠の手前であっけなく追いついてしまった。農大は40 kgの重量をキスリングで担いでいた。私の重量はというと一人のせいか25 kg超ということなので楽だったが、あちらは大変そうだ。ルンルン気分で五色ヶ原に登って行くと雨が降りそうになってきたので、慌ててテントを建てて終了。

8月11日（曇のち晴、夕方から雨）
　今日も本当は計画ではスゴ乗越泊まりだったが、1人という寂しさが手伝ってか薬師まで行きたくなって、早起きしてしまった。スゴ乗越小屋までは登りは大したこと無かったので、ガンガンとばしてエアリアの半分の時間で来てしまった。越中沢岳で会った中年のオジサンとなぜか休憩時間をともにしながら薬師岳を目指し、何とか辿り着く。オジサンは小屋泊まりなので、また一人になる。昼から本当にいい天気であったが、テン場につくといきなり暗雲が立ち込め、また再び夕立。隣のテントでは娘を取られるオヤジの気持ちを延々と語っていた。

8月12日（快晴）
　朝食は昨年マラソン大会でもらったα米の赤飯。賞味期限を1月ほど過ぎていたが、全く問題無し。最近朝飯のまずさに悩んでいたが、久しぶりにおいしい朝飯を食べた気がする。昨日からひどくなってきた靴擦れを気にしつつも今日もガンガン歩いて、黒部五郎岳に辿り着いたが、黒部五郎岳から小屋へ稜線通しの道を選んだら、結構険しくて疲れた。黒部五郎小屋に着く頃はバテバテで今日はここに泊まろうかと思ったが、誰も張ってなくて寂しかったし、少し休んだらまた元気が出たのでやはり双六岳に行く事にする。結構あっさりと着いた三俣蓮華岳、双六岳では景色に感動。特に双六岳からの槍ヶ岳への雲上の道は素晴らしかった。双六小屋は大盛況だったが、国体（インターハイ?）用という水道・トイレが使えず水場が遠かった。三俣蓮華小屋で得た明日台風が来るかもしれないという情報を確認したが明日は八丈島付近をうろうろしているそうなので大丈夫そうだ。

8月13日（霧雨のち曇のちにわか雨）
　昨夜は台風はこなかったが風が強かった。しかし朝方にはその風も止み、かなりガスっていたが下山に向け歩き出す。かなり早く進み、3Pで槍ヶ岳山荘に着いてしまった。憧れの槍ヶ岳は結構一般登山道でも少しクライミングが楽しめびっくりした。やはり槍ヶ岳の頂上は人がたくさんいて、しかも

ガスッていて何も見えなかった。今度来るときは天気がいいことを望むばかりだ。横尾まで来ると人がたくさんいて、新しくなった横尾橋の向こうに屏風が見える。

結局、室堂から上高地まで計画では6日間で抜ける予定だったが4日間で抜けてしまった。筋力的に疲労が無かったのがやはり大きいと思うが、私としてはまだまだ余裕があって、槍から東鎌を通って燕岳まで行こうかと思ったりもしたが、靴擦れもひどく肩も痛くなってきたので止めた。

今回の合宿では、八つ峰の下半が行けなかったのは少し心残りだったが、いろいろな状況判断にしろかなりいい経験になったと思う。後半の縦走も辛くない分、楽しかった。

（山田）

2000年度　山　行　表

期　　間		コ　ー　ス	メ　ン　バ　ー
2000	3.25	湯河原幕岩	宗像、他5名
	3.30	川又の岩場	宗像、他5名
	4. 2	川又の岩場	宗像、山田、他2名
	8. 4～ 8.13	剱岳真砂沢定着、室堂～上高地縦走	山田、中澤（上智大山岳部、真砂沢定着のみ）
2001	1. 8	障子岩	山田、他1名
	1.20	湯河原幕岩	山田、他2名
	2. 3	湯河原幕岩	山田、他1名
	2.10	城山	山田、他1名
	2.11	湯河原幕岩	山田、他4名
	3.12～ 3.14	編笠山～権現岳	山田、他1名
	3.29	涅槃岩	山田、他6名

2001

部長
部員
3年　山田　秀明(CL)
　　竹折　美香
2年　鳥本　真司
　　遠藤　貴宏
(2名とも2001年12月まで在籍)
針葉樹会学生担当幹事
　　井上　裕之
　　古瀬　泰介

２０００年度と同様、新3年生となった山田、一名で部活動はスタートした。

春の新歓活動で、遠藤、鳥本という2名が入部希望があり、GWの新歓合宿で小川山に行った。この3日間で簡単な岩登りをしたり、まだ雪の残る金峰山を登ったりして、ロープワークと雪山の両方を体験し、山岳部の魅力の一端を感じさせることができたのではないかと自負している。

その成果もあり、これまでは合宿直後に退部されるパターンが続いていたが、今回はそれもなく6月に北岳大樺沢にて3名にて雪上訓練を行ったり、丹沢で沢登りを行ったりと部活動を行い、夏合宿まで退部されず安定的に部活動をすることができた。

この夏合宿では、北海道まで遠征し、①小樽赤岩登攀 ②芦別岳縦走 ③大雪山～十勝岳縦走 ④クワウンナイ川遡行 ⑤知床縦走、と盛りだくさんの内容で12日間行った。途中、鳥本、遠藤のスケジュールと体力の都合上、入れ代わりがあったものの山田個人は通して行い、気力・体力ともに充実しとても内容の濃い合宿が行えたと思っている。

山田は帰京後、ＯＢの古田氏に誘われ、越後三山の水無川真沢を遡行。雪渓の通過、草付の悪い高巻き、そして鉄砲水…それまで経験したことのない、とてもレベルの高い登攀に緊張しっぱなしだったが、この経験はその後の個人の活動にいい意味で大きく影響があり、古田氏には感謝している。

秋以降、遠藤は徐々に部活動から距離をおくようになったが、冬はこれまた上級生と下級生という部員構成の青山学院大と合同で冬合宿を爺ヶ岳東尾根～鹿島槍ヶ岳にて行うことにした。準備として、毎週のように合同部会や合同トレーニングなどを行い、チームワークと交流を深め、また実際に偵察等も合同で実施。クリスマス寒波の間隙をつき最終的に7日間をかけて鹿島槍ヶ岳に登頂できた(別途･記録参照)。登攀レベルはたいしたことはないものの、準備から実践までを考えると部活動としてもっとも充実したい山行であり、10年経った現在でも青山学院大の皆さんとは交流がある。

しかし、この合宿後、燃え尽きたのか、遠藤ならびに鳥本ともに退部する運びとなり、またしても部員が山田の一名となった。春は山田の就職活動のため活動せず。また、2年続けて卒業生のいない年となった。

この1年、それなりに充実した部活動を行え、かつレベルの高い沢登りも実施できたなど、山田個人としてはかなり実りある一年だったが、最後に部員が1名になってしまったことはとても後悔する一年だった。

（山田　秀明）

冬合宿（北アルプス　爺が岳東尾根～鹿島槍ヶ岳）

【参加メンバー】山田、鳥本（以上、一橋大）中尾、井上、米澤（以上、青学大）

【期間】2001年12月23日～12月30日

12月23日

昼に一橋大の国立部室に集まり、パッキングを行う。その後、新宿に移動して在京部員、OBの方々から各々、クリスマスケーキ、その他差し入れを頂き急行アルプスに乗り込む。このときはクリスマス寒波が来そうだと言うことで少し不安があった。急行アルプスは三連休の中日ということもあってかガラガラであったが、スキーの団体客と車内放送をテープレコーダーに録音する「鉄ちゃん」中学生と同じ車両に乗り込み、それなりに騒がしかった。

12月24日（快晴、晴ときどき雪）

騒がしい連中はみな松本で降りた。隣の車両に乗っていた東海大学の4人は私たちと同じ爺が岳東尾根パーティーと鹿島東尾根パーティーに分かれるらしい。

鹿島山荘では先に到着していた東海大学パーティーがいて、先に準備をすませて出発してしまった。ワカンを履いて出発すると、すでにトレースがついているが、そのトレースは10月の時の偵察とは違って、斜面をいきなり直登していたので、新たにひざ下のラッセルをしながら偵察通りに沢沿いに進む。途中の斜面に雪がうまくついていないらしく1年生は苦労していたが根性で。小稜線にでるとトレースが合流してきて、すこし楽になるはずであったが、あまりペースが上がらない。JP前で他パーティーのテン場跡を通り過ぎ、ようやく3時ごろにP3に到着。隣には東海大学が張っていた。天気はよく、P3からは鹿島槍ヶ岳もしっかり見える。

12月25日（晴）

今日も天気がいい。しかし、どうも出発が遅い。今日もまた隣の東海大学パーティーに先をこされてしまう。

東海大学のトレースを追ってワカン

でＰ２直下で、そこからアイゼンに履き替える。天候もよく風もない。そしてトレースがばっちりという状況下でＰ２のナイフリッジを迎える。この好条件下において、確かに一箇所、木が出ているところがあってそこで長スリングを連結させてお助け紐をだしたが、その他は全くザイルをだす雰囲気もなく、難なく通過。

Ｐ１直下のほかパーティーのテン場をすぎてようやくＰ１で東海大学においつく。ここで、下降地点の角度を確認してさらに上部の幕営場所を探しに赤旗をさしながら登る。２５００ｍ地点でよい場所がみつかり、そこを整地しブロックを積み、夜景を見ながら用を足したいという米澤のためにトイレも作って、明日の悪天に備える。14時頃すべての準備が終わったので、中尾と米澤は爺が岳に向かって偵察に行き、山田と井上は弱層テストと水作り。鳥本は一人ひたすらアイゼンとワカンを履くのがおそいので、早く履けるように訓練させる。この夜のハヤシライスは美味かった。

12月26日（雪）

昨日の予想とおり、天気が悪く、早速停滞モード。

昨日積み上げたブロックは西側に積み上げたが、風は南から東方向で舞っているので、テントラッセルに向かう。昨晩からの積雪はおよそ20㎝。その間、マルタイラーメン１日目を丁寧に作る。視界は50ｍ程であるが風は強くないので、皆で偵察にいくことにする。ひざ上にラッセルでテントから１５０ｍほど進んだ斜面で弱層テストをやってみたが、風雪ともに強くなってきたので引き上げる。

テントに戻ったら早速テントの周りを20㎝ほど掘り下げる。あまり積雪はないが頻繁にテントラッセルとする中、ポップコーンをつくることにする。マーガリンをわすれたので、マルタイラーメンの調理油をつかったが、多少風味はたりなかった・・・。

12月27日（雪のち曇）

今日もマルタイ。もちろん、ポップコーンのために調味料を少し抜く。天気がよくなるであろうという予想で出発することにする。

準備が早すぎて少し待機してから出発。昨日つけたトレースも消えている。ワカンを履いて膝上のラッセルからスタート。爺が岳直下でアイゼンに履き替える。頂上に立ってみるとものすごく風が強い。

爺が岳頂上にテントを張っている東海大学に挨拶をした後、寒いので、アイゼンで視界が50ｍ程しかない状況の中、冷池山荘を目指し、赤岩の頭に赤旗をたてて慎重に下った。冷乗越からの上り返しは腰ほどのラッセルできつかったが、根性で冷池山荘の冬季小

屋へ。その中にテントを立てるとそのスペースは一杯。中尾と米澤は鹿島槍ヶ岳方面に向かって偵察に行く。冬季小屋内はラジオの電波が悪く天気図を書くにも入り口まで行かなければ聞こえない。

12月28日（雪）

今日もマルタイ。風は弱いからとりあえずいけるところまで行くことにする。ワカンで、昨日のトレースをたどり、布引岳ののぼりまで行く。そこから樹林帯を抜けると風が強くなる。アイゼンに履き替えさらに進む。すると、風がさらに強くなり、ホワイトアウトとなる。斜面もスパッと切れていたのでこれ以上進むのは危ないと判断し、敗退することにする。

山荘に戻って小屋内は電波が入らないので、テントを小屋から移そうかと思ったが、小屋内でもＦＭ長野なら電波がはいることが分かり、そのままにする。

12月29日（快晴のち晴）

移動高がきて、天気がものすごく良い。テントを撤収して、アタック装備でアタック。

昨日のトレースが少し残っているが、それでもワカンで膝くらいのラッセルで布引岳ののぼりまで進む。そこから見ると、昨日引き換えした地点は本当にあと10ｍほど登れば布引岳頂上であったというところであったことが分かった。アイゼンに履き替え、信州側に張り出した雪庇に気をつけながら慎重に進む。鹿島槍ヶ岳の頂上へは雪庇が怖いので左から巻くように登る。8:30近くに鹿島槍ヶ岳の頂上に立つ。剱岳から、八方尾根、戸隠山、八ヶ岳、そして遠く富士山まで一望することができる。

ただ、風が強く30分ほどいてそそくさと下山に向かう。快晴であまり役に立たなかった赤旗を回収しながらずっとアイゼンで冷池山荘まで進む。冬季小屋にデポしてあったアタック装備以外の装備をパッキングして今度は爺が岳の登り返し。ひそかに期待していた後続パーティーが来る気配がなく、そのため爺が岳へのトレースもないのでワカンを履いていくことにする。赤岩の頭を超えた樹林帯の膝上のラッセルに苦労するも、そこを抜けるとクラストした斜面。アイゼンに履き替えて爺が岳に向かう。皆、疲れながらもようやく頂上につき一休み入れる。爺が岳付近でようやく2人とすれ違い、そのため爺が岳東尾根にはばっちりトレースが着いている。トレースをアイゼンで辿り、25、6日のテン場跡を通り抜け、Ｐ1に着く。

今日は疲れたし、ここにテントを張ろうかとも思ったが、明日から天気がよくないことが予想されていて、その状況下でのＰ2のナイフリッジ通過よ

りもまだ2時半だし、またこの快晴でトレースがばっちりついた稜線をあるいた方が安全と判断し、P3までがんばることとする。予想通り、トレースのついたナイフリッジはノーザイルで通過。P3にテントを張る。P3には他に2つのテントが張ってあった。



2001年5月　金峰山にて
左から　山田、鳥本、太田（上智大山岳部ＯＢ）
その前遠藤

12月30日（雪）

予想通り、天気が悪い。その上、風も強く視界も悪い。やはり昨日の内にP3まで降りておいてよかった。下山に当たってはずっとトレースがついてあり、そのためＪＰでも間違うはずもなく、途中3パーティーにすれ違いトレースを崩して申し訳ないと思いながら難なく下山した。

（山田　秀明）

2001年度　山　行　表

期　間		コ　ー　ス	メ　ン　バ　ー
2001	4. 3	天神尾根	山田、他多数
	4. 4	岩原	山田、他多数
	4.12	日和田山	山田、他2名
	4.29	市道山	山田、鳥本、遠藤
	4.30	越沢バットレス	山田、他2名
	5. 3	小川山	山田、鳥本、遠藤、他1名
	5. 4	金峰山	山田、鳥本、遠藤、他1名
	5. 5	小川山	山田、鳥本、遠藤、他1名
	5.12	葛葉川本谷	山田、鳥本、遠藤
	5.13	多摩川水根沢	山田、鳥本、他1名
	5.19～ 5.20	笛吹川東沢釜ノ沢西俣	山田、鳥本、他2名
	6. 2	広沢寺	山田、鳥本、遠藤
	6. 3	四十八瀬川勘七ノ沢	山田、鳥本、遠藤

期　　間		コ　ー　ス	メ　ン　バ　ー
2001	6.10	日原川川苔谷逆川	山田、他2名
	6.14～ 6.17	大樺沢～北岳	山田、鳥本、遠藤、他1名
	6.23	北秋川水ノ戸沢	山田、遠藤、他3
	6.24	涅槃岩	山田、鳥本、遠藤、他1名
	6.29～ 6.30	鋸山尾根	山田、鳥本
	7. 8	日原川唐松谷	山田、他1名
	7.14	つづら岩	山田、鳥本
	7.19～ 7.21	大井川信濃俣河内	山田、他4名
	7.30～ 7.31	小樽赤岩	山田、鳥本
	8. 1～ 8. 2	芦別岳	山田、鳥本
	8. 4～ 8. 5	大雪山	山田、鳥本、遠藤
	8. 6～ 8. 7	クワウンナイ川	山田、遠藤
	8. 8～ 8. 9	トムラウシ～十勝岳	山田、遠藤
	8.10～ 8.11	羅臼岳～硫黄山	山田
	8.24～ 8.25	水無川真沢	山田、他1名
	8.30	那珂川井戸沢～那須茶臼岳	山田、他1名
	9. 3～ 9. 6	奥穂高岳	山田、他11名
	9.14～ 9.17	飯豊山～杁差岳	山田、他2名
	9.28～ 9.30	一ノ倉沢烏帽子奥壁「南稜」 一ノ倉沢衝立岩「中央稜」	山田、他1名
	10. 6～10. 8	横尾尾根～槍ヶ岳	山田、他1名
	10.13～10.14	爺ヶ岳東尾根～鹿島槍ヶ岳	山田、鳥本、他2名
	10.27～10.28	広沢寺	山田、鳥本、他4名
	11. 9～11.10	雲取山	山田、竹折
	11.23～11.25	立山雷鳥平定着	山田、鳥本、他4名
	12. 1～12. 2	吉田口	山田、鳥本、竹折、他7名
	12.15	大山	山田、鳥本、竹折、他3名
	12.24～12.30	爺ヶ岳東尾根～鹿島槍ヶ岳	山田、鳥本、他3名
2002	1.18～ 1.19	蓼科山～北横岳	山田、竹折
	2. 2～ 2. 3	ジョーゴ沢	山田、他3名
	3. 4～ 3. 5	梅池	山田、他多数
	3.31	湯河原幕岩	山田、他2名

2002

部長
部員
4年　山田　秀明(CL)
3年　鳥本　真司
(2002年12月以降復部)
針葉樹会学生担当幹事
井上　裕之
古瀬　泰介

活動概況

春の新歓活動は、山田の就職活動により出遅れ、最終的に春から夏にかけ誰も入部せず、一名での活動が多かったため結局、合宿という形の山行はできなかった。

一方で、後輩を育成する必要もなく、また3年間積み上げた実力・技術が蓄積し、さらには日本山岳会学生部での交流で培ってきた人脈、ならびにその頃再生した日本山岳会青年部で知り合った仲間が数多くいたため、個人山行はとても充実した1年となった。たとえば、当時、難ゴルジュの典型だったホラノ貝ゴルジュ、さらには南ア深南部の栗代川や飯豊連峰の胎内川といった大渓谷を日本山岳会青年部の方と遡行したり、さらに韓国インスボンや伊豆海金剛などの登攀など、レベルは低くない山登りを実施することができ、山田としては卒業後の登攀の礎となる一年を過ごすことができた。

その一方で、後輩育成は疎かにした上での充実した一年であった負い目もあり、冬に前年退部した鳥本を呼び戻し、部に復活してもらうよう説得。なんとか復部してもらうことに成功し、その後の季節はずれの新歓で入部した1年生とともに、大菩薩峠での新歓合宿、北ア八方尾根での雪上訓練、そして越後守門岳での春合宿と、それなりに雪山山行をした。

しかし、せっかく入部した一年生も春合宿後、直ぐに退部してしまい、結局、山田の卒業時には鳥本一人が部員として残される形となってしまった。

足尾山塊（庚申川本流）

【参加メンバー】山田、和田岳史（千葉大山岳部）、森啓（日本山岳会青年部）

【期間】2002年6月1日～2日

6月1日（曇、雨、曇、雨）

昨晩から始まったW杯でフランスが負けたころ、東京を出発。途中浦和で和田をピックアップ。東北道経由で銀山平に入って、車の中で仮眠する。入渓は林道のゲート地点から丸石沢出合に向かって踏み跡がついていてそれを下る。入渓すると、いきなり胸までの渡渉。流れが速くないので流される心配はないが、それでもこの季節の水は

冷たい。腰ほどの渡渉をくり返すと、二重の堰堤が出てきた。そんなの溯行図にはないぞ！と思うも、まぁ仕方ない。一つ目の堰堤の下から右岸を巻いたが、これが結構嫌らしい。人が踏んだような跡がちょっと残っているところを、途切れ途切れの見つけ出して、なんとか森さんのルートファインディングに助けられ、ザイルを使わずに二個目の堰堤の落ち口に無事降りたつ。

その後も、腰までの渡渉を繰り返すが、今後泳ぐ箇所もあると考え、各々泳ぎの練習を兼ねて、思い思い泳ぎも交えながら渡渉して行く。右岸から雨降沢を過ぎると、光風ノ滝。あまり見栄えがしないというのが感想。簡単に右岸から巻く。その後も、ちょくちょく出てくる瀞（足はつく）を思い思い越していく。と、森さんの眼鏡落下。和田君の時計落下。どちらも深い瀞の中、見つかるはずもない。あきらめて進む。チョックストーン滝を左岸から越すと、今度は正真正銘、泳がなければならない瀞が出てくる。確かに右岸にトラロープが張っているが、我々は泳ぎにきたのだ！ということで、和田先頭で、気合を入れた声を出して10ｍほど泳ぎ、他も続く。それまでに少し練習していたおかげで、泳ぎに自信を持つも、この中でいちばん泳ぎが上手いのが和田であることが判明する。

順調に、笹ミキ沢・水ノ面沢が左岸から入ってくるのを確認すると、女性一名を含む4人パーティーがやってくるのを確認する。どうやら水ノ面沢出合から下降してきたようだ。このパーティーと当分抜きつ抜かれつをくり返す。途中、そのパーティーが左岸から入ってくる沢との出会いで休んでいるところで、再び我々が先頭を行く。左岸から入ってくる沢は結構水量豊富で、『関東周辺の沢』ではそのようなことは書いてなかったので、これが三才沢だと誤認してしまった。（登山体系では5:1と書かれているところだとあとで判明）その後、ゴルジュっぽくなって、実際に5ｍほど泳いで取付かなければならない3ｍ滝も出てきた直後に10ｍのナメ滝を水線沿いに直登するなど、ここが核心だと納得してしまう。ここを越すと、再び、左岸から沢が入ってくる。我々の感覚では二股ということになるのだが、どう見ても水量が1:1ではない。5:3ぐらいである。我々は少し悩んだうえで右の沢を少し様子を見てみることにするが、すぐに水量が少なくなって、怪しくなる。もう一度出合に戻ると、しっかり右岸に大崩壊があり、実はここが三才沢出合であるという結論に達する。この辺で雨が少し降ってきたが、小雨なので気にせずに進む。水も青くなる。硫酸銅が確か青色していたので、銅が含まれているのかもしれない。

左にルートを取ると、すぐにゴルジュが始まり、その結論は正しかった

とすぐに判明する。またまた、５ｍほど泳いで取りつかなければならない３ｍ滝を越えると、今度は胸まで浸かる瀞20ｍ。水が多いと泳がなければならない。ここを越えると、右に直角に曲がる３ｍ滝。左岸にしっかりとした巻き道があって、眼鏡をなくした森さんはそこを辿ったが、水流右に残置ハーケン＆スリングがあり、Ｖ級Ａ０で落ち口にトラバース。

今度こそ正真正銘の二股を迎える。右を進むと、一気に水量が少なくなる。二つの二股を右に進むと、河原状になる。その上部でツエルトを張る。薪を集めていると、すぐ近くにあのパーティーがテントを張っている。煙の量を競うかのように焚き火をする。19時くらいから雷雨になり、急いで焚き火をやめて寝床につく。

６月２日（晴）

昨晩は、すごい雷雨だった。しかし、心配していた増水は大したことはない。

朝食の後、出発。しばらく歩くと二股になる。溯行図だと、右に行くことになるが、地形図を見ると鋸山の南に行くにはどう考えても左である。少し悩んだ結果、地形図を信じて左に行く。

平凡な渓相のあと、ナメが続き、登山道が横切る。いくつか現れる二股をひたすら右に行くと、ようやく稜線が見えるようになる。いくつかの滝を直登すると、雪が現れる。ハンマーで削って、それをくぐると、あまり水がなくなる。最後の二股を右に行って笹薮になる。この笹薮を５分ほどこぐと、登山道に出る。登山道を２分登るとそこは鋸山。結局、地形図を信じて左に行ったのが良かった。あそこの二股を右に行ってたら、きっと鋸山の岩峰群に嵌って、源頭は苦労したことだろう。

眼鏡をなくしてすっかり意気消沈の森さんはつい１ヶ月前に皇海山に登ったばかりなので、ザックを鋸山にデポして和田と山田だけで皇海山にピストンすることにする。とりあえず百名山だが全く展望の利かない皇海山を往復して、ザックを回収して庚申山を通って、先に下っていた森さんと一ノ鳥居で合流して銀山平に下山。結構蒸し暑い、６月初旬でも快適な泳ぎを堪能することができた。多少水がくさいというのと、水が不自然に青いということで、水は担ぎ上げた方が無難かもしれません。沢水はちょっと苦かった。

（山田　秀明）

2002年度　山　行　表

期　　間		コ　ー　ス	メ　ン　バ　ー
2002	4.20	氷川屏風岩	山田、他1名
	4.21	名栗河又	山田、他1名
	4.27～ 4.29	小川山	山田、他6名
	5. 4～ 5. 5	滝川豆焼沢	山田、他1名
	5.18	焼岳	山田、他1名
	5.19	六百山	山田、他1名
	5.25～ 5.26	大洞川和名倉沢大洞川市ノ沢(下)	山田、他1名
	6. 1～ 6. 2	庚申川本流	山田、他2名
	6. 8～ 6. 9	金峰山～甲武信岳	山田、竹折、他2名
	6.16	早戸川大小屋ノ沢早戸川鳥屋待沢	山田、他3名
	7. 6	笛吹川東沢「ホラノ貝ゴルジュ」	山田、他2名
	7. 7	笛吹川東沢鶏冠谷左俣	山田、他3名
	7.12	涅槃岩	山田、他1名
	7.14	三ツ峠	山田、他2名
	7.21	多摩川水根沢	山田、竹折、他1名
	7.23～ 7.24	栗代川	山田、他1名
	8. 4	笛吹川久渡沢ナメラ沢	山田、他3名
	8. 5	雁坂峠～雲取山～奥多摩駅	山田
	8. 9～ 8.11	金木戸川双六谷本谷	山田、他2名
	8.24～ 8.26	胎内川東俣沢本源沢	山田、他2名
	9. 3～ 9. 5	小川山	山田、他1名
	9. 9～ 9.12	朝日岳～以東岳～天狗角力山	山田、他1名
	10. 6	涅槃岩	山田、他2名
	10. 9～10.12	インスボン	山田、他1名
	10.19	一ノ倉沢烏帽子奥壁「変形チムニー」	山田、他1名
	10.20	虹芝寮	山田、他7名
	11. 3	扇山	山田、他5名
	11. 5	湯河原幕岩	山田、他2名
	11.10	障子岩	山田、他2名
	12. 8	名栗河又	山田、他1名
	12.11	吉田口	山田、他1名
	12.17	名栗河又	山田、他1名
	12.19	名栗河又	山田、他1名
	12.23	広沢寺	山田、他1名
	12.24～12.25	大菩薩峠	山田、鳥本、伊藤
	12.26	名栗河又	山田、他1名
	12.29～12.30	戸隠本院岳「ダイレクト尾根」	山田、他1名
	12.31～ 1. 1	海金剛「VAGABOND」	山田、他1名
2003	1. 2	城山	山田、他1名

期　　間		コ　ー　ス	メ　ン　バ　ー
2003	1. 6	湯河原幕岩	山田、他1名
	1.11～ 1.12	金峰山	山田、他3名
	1.14	名栗河又	山田、他1名
	1.18～ 1.19	湯河原幕岩	山田、他1名
	2. 1	湯河原幕岩	山田、他1名
	2. 6	名栗河又	山田、他1名
	2.18～ 2.20	八方尾根	山田、鳥本、伊藤
	2.21～ 2.22	八方尾根	山田、他10名
	3. 4	城ヶ崎	山田、他1名
	3. 6～ 3. 7	守門岳	山田、鳥本、伊藤
	3.18	入川谷本谷	山田、鳥本



『針葉樹』第14号より

2003

部長
部員
４年　鳥本　真司
針葉樹会学生担当幹事
宗像　　充
山田　秀明

２００３年度は鳥本が部長（CL）として部員１人在籍するも、実質的な活動は殆ど無し。ＯＢとの合同山行が１件。

２００４年２月　八ヶ岳バリエーション・阿弥陀岳南稜（鳥本、山田（ＯＢ））



2004

部長
部員
5年　鳥本　真司
1年　チェルニシェヴスキー・コンスタンチン
針葉樹会学生担当幹事
宗像　充
山田　秀明

２００４年度は引き続き鳥本が部長として在籍。

ＯＢ、ＯＧの協力を得て山岳部のポスター、立て看、ビラ等を作成し、積極的な新歓活動を展開。その結果、ロシアからの留学生、チェルニシェヴスキー・コンスタンチンを新入部員として迎える。久しぶりの新入部員を迎え、部員若干２名ながらＯＢ、ＯＧ諸氏からも活動に多大な力添えを頂きながら部活動も活気づく。新歓山行の三つ峠クライミングを皮切りに、縦走、沢登り、岩登り、冬山とオールラウンドな活動を展開する。

特徴的な活動としては、夏合宿をロシアで実施。コンスタンチンのロシアへの実家帰省に合わせる形で組んだ計画だったが、部員獲得に向けた部活動のアピールの一環として一般学生にも参加を募ることにし、結果として２人の学生の参加を受け入れた（そのうち玉井は一時的だがその後の部活動に関わるようになった）。船でロシアのウラジオストクに入り、鉄道でロシアの東端から遥か西のモスクワに至る旅は、鉄道旅や観光に当てられた日数が多く、海外遠征といった趣ではないが、３日間の山行を通じてバイカル湖畔に聳える名峰、チェルスキーピーク（標高２０９０ｍ）の頂を踏むことができたのは、アプローチの難しさも加味すると２００４年度の活動の記念碑といえた。この他に、秋合宿として蝶が岳から燕岳への縦走、アダージオ懇親山行（蓼科山）への参加、谷川岳での雪上訓練、冬合宿として雲取山縦走（三峰口～雲取山～奥多摩駅）など。

来年以降の部の存続に向けて、ＯＢ、ＯＧ諸氏の力添えによりコンスタンチンに経験を積ませることはある程度できたし、部員という枠にはこだわらずとにかく山に少しでも興味のある人、一緒にいける人がいれば連れて行く方針で１年間の活動としては賑やかで充実したものであった。

一方で部員を更に根づかせるには至らず、現役学生による継続的な部活動体制の構築は課題として積み残された。

夏合宿（ロシア・バイカル湖付近チェルスキーピーク２０９０ｍ）

【参加メンバー】鳥本、コンスタンチン、部外参加者として玉井、竹村、ディマ（コンスタンチン弟）

【期間】２００４年８月10日～９月１日

８月10日～17日

ロシアの旅

８月18日

バイカル湖の側に張っていたテントを撤収するところから一日が始まる。バイカル湖沿いの町、スリュジャンカからチェルスキーピークの麓に位置する工場へ。いかにもソ連時代の遺産という風貌の採石工場を通り抜けて、チェルスキーへの登山道を探すも見つからない。コンスタンチンが工場の人に聞いたところ、どうやら登山道の通る工場は別のところにあると判明。出だしから致命的な躓き。しかし、「この上にある採石場まで上がって、少し下ればチェルスキーの登山道と合流する」というので、判断に迷ったものの、上の採石場まで上がってみることにする。舗装された道路を延々と、しかもしばしば通り過ぎるトラックの撒き散らす砂埃に巻き込まれながら登り続けることはお世辞にも気持ちのいいものではなかった。

トラック道を上り詰め、ようやく辿り着いた採石場。南の方向に沢が流れているのが分かる。地形から判断するに、チェルスキーピークに源流をもつスリュジャンカ沢と見て間違いない。上るべき登山道はその沢沿いだ。沢に向けて下ろうとするが、あまり下りやすそうな道がない。仕方がないので、比較的傾斜の緩いガレ場伝いに下る。少しヤブ漕ぎをして抜けた先には、きれいに整備された登山道が。本来のルートに合流できたことにかなりの安堵を覚える。そもそも、登山初心者が過半数を占める中で、ガレ場下りやヤブ漕ぎをすることになろうとは思っていなかった。

登山道に合流してからは比較的順調に進む。途中にいくつもの小川と出会い、橋を用いて、あるいは、冷たい水の中を渡渉しながら進む。ロシア人登山客もちらほらと目にするが、驚くのは彼らの風貌だ。とにかく肌の露出の多いこと。上半身裸の男性、タンクトップに半パンの女性。日本の山でお目にかかった記憶のないような格好をしている人も少なくないのだ。虫が少ないとはいえ。20:30 を過ぎた頃に適当なスペースにテントを張って、この一日の行動はここまで。20:30 といっても山の中がそんなに暗くないのは、この高い緯度がなせる業だ。日本での時間感覚とは全くの別物で、不思議な体験である。

8月19日

10:00、本日の山行開始。荷物はほとんどをテントに残し、僕のザックに多少入っているくらいで、ほとんど手ぶらの状態。さあ、いざチェルスキーへ。その意気込みも空振り気味。持参したガスが早々に尽きて、薪を集めてたき火をつけることになり、予定より1時間も出発が遅れる。昨日の夜から体調の優れないコンスタンチンの弟、ディマはテントで休むことになり、疲れのとれていない竹村は途中でテントに引き返す。結局、2人をテントに残して、コンスタンチン、玉井、鳥本の3名でチェルスキーを目指す。できれば全員で行きたかったが、無理を強いるつもりはなかったし、山の経験の少ない2人にとっては前日の登山だけでも得るところは少なくなかったろう。何も山頂を踏むことだけが登山の価値であるわけでもない。3人で登り続けるはいいが、途中で水補給のために40分のロスをするなど、つまらない自らの不注意のために下がる一方のテンションを「来た以上はピークを踏んでやる」という意地で支える。

天文台を抜けると、それまでずっと緩やかだった傾斜がややきつくなってくる。迂回路を用いながら登り詰めると、ピークにつながる尾根に合流。尾根に入るとパッと展望が開ける。幸い、空は労をねぎらうかのような晴天。チェルスキー手前の小ピークからは360度のパノラマが美しい。チェルスキーは小ピークからすぐの所にあるが、ルートの真ん中はスパッと切れた岩稜になっていて、多少の緊張感あり。岩稜を抜けると頂上はすぐだ。

15:35、ようやくチェルスキーピークに到着。ここまで登り切ったことに喜びを表するために3人で硬く握手を交わす。頂上は広く、視界も広い。僕ら3人の他に、2人のロシア人登山者が見えた。アブらしき虫が多数飛び回っているのには少々ゲンナリ。

急ぎ足で下山。しかし、下山もなかなかスンナリといかない。特に僕は、靴擦れが原因で足の指の痛みがある上、水・食料の摂取不足でガス切れ。登り以上にきつい。驚いたことに、玉井は山に関してはほとんど経験がないにもかかわらず、長い登りを耐え、下りでは率先して荷物を負ったりと大活躍。下山ではコンスタンチンと玉井にカヴァーしてもらう形になった。リーダーとしては多少面目ない気持ちがあるが、こうしてお互いが協力して動かすのが山岳部の山登りであると考えれば、あまりメンツにこだわる必要もないのかもしれない。とはいえ、ガスの件、水補給の件を含め、もっとしっかりしないと、という思いも募る。

19:00 すぎにテント場に復帰。しばし休息して、テントを撤収、5人で下山開始。徐々に夜の帳が空を覆い始めるが、夜の遅いロシアのこと、ライト

をつけたのは何と22:00以降。今晩中の下山も可能となる見込みがあったが、街に出る詰めのルートが暗くて見つからず、結局草叢にテントを張って眠る。

8月20日

草叢で朝を迎える。湿った場所のため、ナメクジがテントの至る所に張り付いている。人差し指でそれをパチンパチンと撥ねるのが朝一番の仕事に。明るくなって、ルートも見つかり、1時間ほどで町に戻ることができた。これにて下山完了。下山して食べた朝食、ホテルで浴びたシャワーは最高の味わいであった。

（鳥本　真司）

針葉樹会懇親山行（蓼科山）

【参加メンバー】鳥本、コンスタンチン、川名（OG）、カンノウル、ジャーンカルラ

【期間】２００４年11月13日～14日

11月14日

山本健一郎さん宅出発（6:10）―八子ヶ峰（7:00）―蓼科山登山口（女神茶屋 7:55）―蓼科山（10:50）―蓼科山登山口（13:35）―蓼科温泉郷親湯（14:50）＝茅野駅（帰京）

ＯＢ山本健一郎さんの別荘にて朝5:00起床。昨晩遅くまで話し込んでいたこともあり、やはり瞼が重いが「早朝に出ます」と自分で言った手前、また寝てしまっては格好がつかない。よいしょ、と起き上がる。顔を洗いに行くと、何と別荘の主、山本さんが既に起きていて、ヤカンで湯を作ってくださっている。自身が今回の山行に参加されるわけでもないのに、厚かましくも泊めていただいている面々のために朝一番で動かれているのには、山本さんの暖かい気遣いを感じる。

コースチャ、隣部屋の女性陣に声をかけて早い朝食を迎える。メニューは、昨晩にアダージオの松尾さんからいただいたオニギリと山本さんお手製のスープ。山小屋でクラシック音楽を聴きながらの朝食は清々しい。

6:10、山本さんの別荘を退出し、八子ヶ峰へ山行を開始する。今回のメンバーは5名。鳥＆コースチャのいつものこととして、山登り経験豊富な韓国人留学生のカンノウル。ニューヨーク育ち、大学はカナダの米国人留学生のジャーンカルラ。そしてＯＧの川名さん。日本人2名、韓国人1名、米国人1人、ロシア人1人の多国籍チームである。女性が3名もいるせいか、明るい感のある登山グループだ。カンもジャーンカルラも日本語に達者で、よくしゃべる。川名さんは二人からはお姉さんのように慕われていた。

天候は曇り。天候が良くないことはあらかじめ想定されていたので、とりあえず雨が降ってないだけよしとする。今回の山行の主役は言うまでもな

く、信濃富士の名を冠す蓼科山であるが、敢えて少し遠回りしてでも八子ヶ峰を目指すのは、山行の質として蓼科だけでは飽き足りないと判断したからだ。踏むピークが一つだけというのも寂しいし、何よりなだらかに横に伸びる八子ヶ峰の稜線はゴツゴツした独立峰の蓼科山では味わえない稜線歩きの楽しさを与えてくれるのではという期待があったのだ。

山本さんの別荘から八子ヶ峰は距離的にも高度的にも短く、緩い坂道を上がって7:00には難なく山頂に至る。天候は雨がポツリポツリ降ることもあったが、徐々に良くなってきた。稜線を進むと、にわかに雲の合間から顔を出した蓼科山の姿が真正面に現れる。雲の間から山頂だけがぽっかりと浮かび上がるその姿は、かえって強烈な印象を与えてくれる。稜線の風は強くなく、徐々に雲も姿を消してゆく。進むにつれて、蓼科山も八ヶ岳もくっきりと見えるようになり、楽しい稜線歩きである。蓼科山の上部はほの白く、どうやら雪化粧をつけているようだ。前日に蓼科山への13回目（！）の訪問をされた山本さんは何ら雪のことを言及されていなかったから、昨晩にでも降ったものなのか。

ヒュッテアルビレオを過ぎると、まもなく稜線は女神茶屋方面へ緩やかに下り始める。15分ほどの下りで蓼科山登山口に到着。ここからは、今回の主役、蓼科山への登りである。傾斜がやや急で、岩のゴツゴツした道をただひたすら登り続ける、と書くと結構きつそうだが、いつもより数段軽い荷物のせいかスイスイと登りあがる。もっとも、パーティ全体としては初心者がいることもあり、ややゆったりペースで登る。2時間ほど登ると、周りの木々が雪の花をつける「白い世界」である。風は冷たく、強くなってくる。もっとも予想していたほどではない。各メンバー、帽子や防寒具を着込んで対応する。独立峰の上部は雲に閉ざされがちだが、今回は見事に視界が開けている。最後の荒れたガレを登り詰めると山頂である。

10:50、蓼科山山頂に至る。川名さん曰く、「野球のできる山頂」ということであったが、はたしてだだっ広い頂である。もっとも、岩の敷き詰められた頂なので、実際には野球などする気にはなれないだろう。風は強く、11月ということもあり、かなり寒い。向こう側に神社や展望盤が見えるが、距離がありそこまで行くのは億劫なので止めておいた。記念撮影を終えると、頂上近くのヒュッテで一服。もっとも、ヒュッテそのものは既に冬季閉鎖されているので、外に設置されたベンチでの一服だ。2パーティが既に先客として休んでおり、そこに加わるような形になったのだが、その方たちはガス、食料などを提供してくださった。おか

げ様できちんとした形で昼食をとることができた。結果的に1時間近くそこにとどまることになり、雑談に花が咲いた。

ヒュッテを去り、来た道を引き返し始める。コースチャとジャーンカルラが足の痛みを感じているようだったので、ゆっくりと下山する。蓼科山登山口に戻ったのは下山開始から約2時間後の13:35。武田信玄の築いた軍用道の信玄棒道を下ること1時間余り、蓼科温泉郷に至る。これにて下山終了。温泉郷内の「小斉の湯」にて温泉に浸かってから茅野駅までバスで戻る。

今回の山行は大きな支障もなく、心配だった天候も良好で、私としては満足。他のメンバーも「楽しかった」と口を揃えて言うので、計画を組んだ身としてはありがたいことであった。最後に付け加えれば、蓼科山そのものよりも「脇役」八子ヶ峰から望む八ヶ岳、蓼科山の眺望が今回の最大の見所だったと私は思っている。

（鳥本　真司）

雲取山

【参加メンバー】鳥本、コンスタンチン

【期間】2004年12月25日～26日

12月25日

国立駅発(5:55)―三峰口駅(8:10)―霧藻ヶ峰(12:30)―前白岩山(13:50)―白岩山(15:10)―雲取山荘(17:00)

25日早朝、部室に集合し、国立駅から三峰口駅へ向かう。2人とも寝不足で行きの車内はウトウト。秩父鉄道の三峰口駅に向かう途中に、山肌がはげた大きな山がデンと座っている。表秩父の主、武甲山だ。つい先日、山田秀明OB親子と訪れたばかりの山である。石切りのために山頂が削られた悲劇の山として有名だが、山肌が壮大に抉り取られているのが余計に重圧感を増しているように感じる。いうなれば、その様は「秩父のスキンヘッド」である。

三峰口駅から三峰神社へは、タクシーを除いて、①バスで大輪へ、そこからロープウェイを利用して神社へ、②バスで三峰神社へ、という2つの行き方がある。①は頻度が多く、早く山行に移れる代わりにお金が倍くらいかかる、②は頻度が少ないがお金が安いのが特徴だ。駅で目にした登山客を見ても①を選ぶのが一般的のようだが、我々は②を選んだ。三峰口駅から出発したバスは大輪、秩父湖を通過し、狭い道を器用に三峯神社へと登っていく。三峯神社は境内の高く聳える並木と煌びやかな装飾の各殿が印象的な神社で、日本武尊に由来するものらしく、右手を振り上げた日本武尊の像が飾ってある。

さて、三峯神社の見物も終え、山行開始である。天候は快晴、雪は暖冬の影響か、やはり全くついていない。こ

うなると、持って来たプラ靴、アイゼンなどの冬山装備はボッカに決定か。「秋合宿の続きみたいだね」とコースチャ。秋合宿とは10月後半の上高地～蝶～常念～燕岳縦走のことだ。その時でさえ、最終日には雪が僅かながら積もっていたものだが。

三峯神社から雲取山までは10㎞余り、本日は雲取山の直下にある雲取山荘まで行くことが目標だ。神社から霧藻ヶ峰まではほぼ平らな道である。登り始めて早々にコースチャが早々に「膝が痛いよ」と言う。「え、もう!?」下山のときには膝の痛みを訴えることの多い彼だが、さすがに登り始めから痛みを訴えるのは初めてだ。そう大した痛みではないというので、ややペースを落としつつ、霧藻ヶ峰へ至る。秩父宮を名づけの親にもつ霧藻ヶ峰。ギザギザの稜線をもつ両神山、その背後に噴煙を上げる浅間山の展望が美しい。ここを下ってお清平から前白岩、そしてその先の白岩へはやや急な登り。もっとも雪がない以上、秋山の装いであり、特別の困難は感じない。コースチャのペースも回復してきた。

白岩山の頂は林の中、展望は全く無い。野生の鹿がよく餌をねだりに来るらしいが、姿は見えず。白岩山からは芋ノ木ドッケを西側から巻く。「積雪期にはアイゼン必要」という趣旨の標識が掛かっていたが、今は雪が全く無いのでアイゼンは使用せず。ともあれ、三峰ルートの中では一番悪い路と思われる。雲取山荘別館の雲取ヒュッテに着く頃には、夕暮れの時間になっていた。ヒュッテは閉鎖されているらしく、人気も無くひっそりとしている。前白岩、白岩が夕闇に沈んで見える。まもなく目標の雲取山荘に到着。一人３００円のテント使用料を支払い、テントを張る。夕食は、うなぎ丼、クリスマスケーキにココア。二人とも寝不足と山行の疲れのため、夕食後にあえなくシュラフに沈む。



2004年10月　燕岳にて
左から コースチャー、鳥本

12月26日
出発(7:10)—雲取山(8:00)—七ッ石山(9:45)—日陰名栗山(11:00)—鷹ノ巣避難小屋(11:25)—鷹ノ巣山(12:10)—奥多摩駅(16:40)

天候こそ安定していたものの、風が強く寒い夜が過ぎる。6:00に起床、朝食はぜんざい、即席うどん＋昆布。朝食の後、テントを撤収。天候は今日も晴れ。風が運ぶ冷気が冷たい。持ち水が尽きたので、山荘近くの水場（飛竜山寄り）で水を補給。雲取へ登る登山道を登り詰める。水を補給する際に、コースチャが手を冷やしてしまい、雲取までの登りでは寒そうに手袋の中で手を丸めていた。気温が低い上に風もあるので、凍傷もありえない話ではない。とりあえずの処置として手で擦って暖めてみる。山頂に着く頃には幸い回復した様子。

雲取山山頂は大きく視界が開けており、晴天のおかげもあって展望は見事なもの。横に伸びる大菩薩嶺の向こうに頭の先っちょに少しの雲をつけた富士山がはっきりと窺える。お隣の飛竜山の展望もまたよい。山頂で一服して、奥多摩方面への下りを始める。途中、こちらをじっと見つめる3頭の鹿を目にする。近づくと茂みの奥へ颯爽と去っていった。奥多摩では鹿の増加に伴う自然への害が深刻になっているらしく、時々バーンという大きな音が聞こえるのはどうやら鹿の捕獲を実施しているようだ。雲取～小雲取までの稜線は展望がよい。小雲取から下ると木々に阻まれて展望がなくなるが、七ツ石山に上がると今度は先ほどの「雲取親子」の姿がキレイに見える。おそらく、雲取山が最も美しく見えるスポットの一つであろう。ここで、雪がぱらついてきた。七ツ石山から東へ進路をとり、石尾根縦走路を奥多摩駅へとひたすらに下り始める。高丸山を巻き、日蔭名栗山に登る。日蔭名栗に登る前頃から、空は明るいものの、風が強くなり、降る雪の量も増えてくる。一時的にだが、雪の舞う冬山らしい雰囲気が漂う。日蔭名栗山は石尾根の中では地味なピークであり、隣の高丸山同様に、この尾根を縦走する人でも直接登ることは少ないのではないか。山頂は平坦で、南側に展望が得られるが、風に乗った雪のために特に何も見えない。進行方向には、石尾根ルートの中で中心的な存在の鷹ノ巣山が屹立している。雪が舞う中に、その姿はなかなかの絵になっている。鷹ノ巣山避難小屋に着く頃には雪が止み、再び青空が広がってくる。コースチャは膝の調子が相変わらずよくはないようで、鷹ノ巣山に登ることに乗り気でなかったので、一人で鷹ノ巣山まで上がり、山頂を踏んで、再び合流する。鷹ノ巣山もまた、南側の展望に優れる。奥多摩方面から振り返れば、鷹ノ巣山は南方面がごっそりと禿げた山で、反対斜面の樹木帯とのコントラストが面白い。ハゲ鷹の連想で鷹ノ巣山なのか、と勝手に推測してみる。

鷹ノ巣から先にも六ツ石山をはじめ、いくつかのピークが存在するが、

いちいち丁寧に登る意思も余力もなかったので、まき道から通り過ぎる。朝取った水が不足してきて、節水しながらの下山である。三ノ木戸山辺りから植林地帯が多くなり、晴れているにもかかわらず、山が突然暗くなることも。植林地帯は概して、木が等間隔に密集して、高いところで葉が重なり合い、昼でも夕方のような暗さであるのが通例である。登山のための山と言うより、生活のための山である。等間隔に密集する木と言うのは、どうも不自然な印象が否めない。下りの傾斜がきついところもあって、靴擦れしてきた自分にとっても、膝の悪いコースチャにとっても、かなりの疲労を強いられた。

長い、長い石尾根下りも16:00には一段落し、これまた少し長い奥多摩駅への道をゆく。夕飯、入浴を済ませてから奥多摩を去る。

（鳥本　真司）

2004年度　山　行　表

期　間		コ　ー　ス	メ　ン　バ　ー
2004	4.25	三ツ峠	鳥本、コースチャ、他3名
	5.16	日原川本流	鳥本、他2名
	8.11～ 8.25	シベリア	鳥本、コースチャ、玉井、他1名
	10.25～10.26	常念岳	鳥本、コースチャ、玉井、他1名
	11.28	武甲山	鳥本、他2名
	12. 4～12. 5	天神平	鳥本、コースチャ、玉井、他4名



『針葉樹』第5号より

2007

部長
部員
４年　チェルニシェヴスキー・
　　コンスタンチン
針葉樹会学生担当幹事
　　宗像　　充
　　山田　秀明

2006

部長
部員
３年　チェルニシェヴスキー・
　　コンスタンチン
針葉樹会学生担当幹事
　　宗像　　充
　　山田　秀明

2005

部長
部員
２年　チェルニシェヴスキー・
　　コンスタンチン
針葉樹会学生担当幹事
　　宗像　　充
　　山田　秀明



『菰野菊』より

2008 〜 2010

部長
部員
針葉樹会学生担当幹事
　　本間　　浩
　　佐藤　　力
　　川名　真理
　　山田　秀明

2011

部長　針葉樹会学生担当幹事
部員
４年　望月　優(CL)
　　米田　卓也
３年　山根　範子
２年　小宮山尚与志
　　町田　広樹
　　佐藤　力
　　前神　直樹
　　川名　真理
　　山田　秀明

蝶ヶ岳（北アルプス）

【参加メンバー】米田、山根、小宮山、町田、OB（竹中、佐藤(久)、前神）
【期間】２０１１年８月19日～21日

８月19日
国立(7:00)―沢渡(11:30)―上高地(12:00)―河童橋(12:40)―明神―徳沢(14:50)

大学の西門に集合し、前神さんの車に乗せてもらい出発する。山根が山ガールファッションを披露し、皆に賛辞を強要していた。高速道路に乗るが渋滞もなく、順調な行路だった。途中スーパーマーケットに寄り、三日分の食料品を買って昼前には沢渡に到着する。沢渡からはタクシーで上高地に向かったが、途中地滑りの跡が生々しく残っていた。上高地バスターミナルに到着し、そこで軽い昼食をとる。ちなみに私は長野名物おやきを食べた。しばらくして出発し、河童橋には 12:40 頃に着いた。残念ながら天候が思わしくなく、眺めは良くなかったが、梓川の綺麗さには驚いた。嘉門治小屋や明神池に寄りつつ、15:00 前に徳沢に到着した。テントをたて、荷解きをしていると竹中さん、佐藤さんがいらして、夕食の鳥鍋の準備に取り掛かった。夕食時には山のこと、社会の事など様々なことをＯＢの方々から伺い、個人的には非常に有益だった。19:00 過ぎに解散となり、前神さんと学生４人はテントに戻り就寝する。夜半から強い雨が降り始め、雨音でなかなか寝られなかった。

８月20日
徳沢(7:00)―名塀山(10:18～28)―蝶ヶ岳(11:10～41)―横尾下山路の標識(12:02)―横尾山荘(13:52～14:15)―徳沢(15:07)

6:00 少し前に起床し、6:30 くらいから朝食をとる。昨夜の鍋のスープに米を入れて雑炊にした。雲行きは怪しいものの、雨はあがっていたので行ける所までは行こうということになり、7:00 に徳沢を出発。登り始めてすぐに雨が降ってきて、傘を差しながら登る。小宮山、町田両名は少し前まで体育会で活動していただけあって、非常に軽々と登っていた。大学四年間でなま

り切ってしまった私は、着いて行くのに多少骨が折れた。途中展望のよい場所に差し掛かるも、雲がかかって何も見えず残念だった。周囲がハイマツに変わり、植生の変化を興味深く思いながら登っていると、いきなり開けた場所に出て、どうもここが頂上らしい。少し拍子抜けしてしまった。相変わらず眺望は悪く、大パノラマという訳にはいかなかったが、下界と全く違う荒涼とした風景には驚いた。風が強くなり寒くなってきたので、各自防寒具を着込み昼食をとる。昼前には横尾の下山路に向けて出発した。途中視界が悪く少し迷ったが、登って来た登山者に方向を確認して下山を始めた。少し下ると木のお陰で風が遮られたものの雨は止まず、傘を差しながら降下した。急な下りで、木の根や泥に足を取られ、大変だった。登りでは調子の良かった学生も、下りではＯＢの方から遅れだし、年季の差を思い知らされる。途中佐藤さんの靴が壊れ、ビニールテープで補強しておられた。備えをしておくことは重要なのだなと思った。二時間弱で横尾山荘に到着し、そこでしばしの休憩をとる。屏風岩等を眺めつつ、梓川に沿って徳沢園を目指したが、歩きやすい平坦な道で歩くのに苦労は無かった。15:00 過ぎに到着し、雨が降り続いていたため夕食の場所に苦慮するが、徳沢ロッヂの御厚意で、ロッヂの談話室を使わせてもらうこととなった。学生４人は全身ずぶ濡れで、防雨の重要性を痛感。夕飯材料の豚肉が硫黄臭を漂わせていたものの、煮込めば大丈夫だろうということで予定通りキムチ鍋にする。腹痛を起こす事もなく、冷えた身体があたたまり有難かった。20:00 過ぎに解散し、筋肉痛が起きない事を祈りつつ床に就いた。

8月21日

徳沢(8:30)―明神(8:20)―上高地ビジターセンター(9:20)―河童橋―上高地

撤収準備を終わらせ、7:00 にロッヂの談話室に集まり、昨夜の鍋のスープでラーメンを作った。冷やし中華の麺に付いていた黒酢を入れたため、不思議な味だったがなかなか美味しかった。8:30 頃徳沢を出発し、それぞれ１時間弱で明神、上高地ビジターセンターに到着。ビジターセンターですこし勉強し、バスターミナルに向かう。ここで竹中さん、佐藤さんと別れ、前神さんと学生はタクシーで沢渡に向かった。沢渡で銭湯に寄った後、前神さんの運転で東京に帰る。到着は17:00 頃だったと思う。

今回は天気に恵まれず景色は悪かったものの、個人的には得るものが多くありました。素人４人にお付き合い下さり、ご指導下さった竹中さん、佐藤さん、前神さんにはこの場を借りてお

礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

（米田　卓也）

倉岳山（針葉樹会懇親山行）

【参加メンバー】小宮山、町田、ＯＢ多数

【期間】２０１１年11月27日

２０１１年11月27日、一橋大学山岳部ＯＢの方々と現役部員であり共に入部した商学部２年の小宮山と山梨県大月市と上野原市の境にある倉岳山まで日帰りで登山を楽しんだ。標高１００メートルに満たない小柄な山であるが、山梨百名山に登録されており、頂上からの景色は見事であった。中でも、ひときわ存在感を放っていた富士山はすばらしかった。自分の住む埼玉県川越市からも天気が良ければ目にすることのできる日本一高い山であるが、実際に存在する山梨県までくるとその大きさにも実感が湧いた。ＯＢの方の一人に富士山に関して博学な方がいらして、こちら側に向いている尾根一つ一つから詳しく説明していただいたのもこの山頂から双眼鏡で眺めている時であった。山頂付近はそれまでの登山路と比べ、かなり急であったのが印象に強く残っている。丁度昼時に登頂できたので、山頂で食事休憩を取った。トン汁をご馳走になり、隣の高畑山に向かう班と下山する班の二つに分かれ、自分は高畑山へも足を運ぶことを選んだ。朝9:00から倉岳山を登り始め、高畑山に寄り、下山するまで６，７時間であったと記憶している。山道をこれだけの時間歩き、ＯＢの方に比べ若い自分でも息の上がるような山路が途中あったにも関わらず、元気に降りてくるＯＢ一団を目の当たりにしてとても驚いた。そして、そんな先輩の一人がこれは登山というよりハイキングだというような主旨の言葉を漏らしたのを聞き、とても頼もしい団体であり、また、登山という活動を続けることが将来どれほど自分の肉体を強くしてくれるのかという可能性を感じた。今回の山行ではたくさんのＯＢの方と触れ合う機会となったので、山に対する知識なども教えていただけた。山に登る時の服装や時間などをメモする大切さなどを教わったので、次回の登山に役立てたいと思う。

（町田　広樹）

縞枯山

【参加メンバー】小宮山、町田、ＯＢ（前神）

【期間】２０１２年２月25日～26日

２月25日

私と町田にとっては初めての雪山への山行が行われた。アイゼンとピッケルを持ち、幾分か緊張を覚えながら前神さんの車に乗り込み蓼科山へ。渋滞がなかったこともあり、順調な道中で

あった。雪に覆われた蓼科山が見えたときには興奮を覚えるとともに、やはり雪山を初めて体験することへの緊張が高まった。

蓼科山を車で登っていくと徐々に雪が強くなってきたためタイヤにチェーンをつけなくてはならなくなった。一同車を降り、雪の中チェーンをつけることになったが、チェーンが古くなっていたこともあり、チェーンがつけられないというトラブルが発生した。前神さんのこれ以上車で山を登ることは危険だという判断により、この日は登山をあきらめ、テントを張れる場所を探した。幸いテントを張れる場所も見つかり、その夜はテントの中で鍋を囲みながら、前神さんから雪山での経験、体験談を聞いた。雪山が初めての経験であった私たちにとっては想像を超えるような話ばかりで、翌日の雪山山行に対して一層気持ちが引締められた。

2月16日

朝、あまりの寒さに何度か目を覚まされながらも何とか起床。前日の鍋の残りで雑炊を作り、朝食を済ませる。前日のトラブルもあり、蓼科山への山行を変更してバスで縞枯山へ向った。雪に覆われた山にたどり着くとロープウェイで山の中腹までのぼる。ロープウェイに一緒に乗車したスキーやスノーボードの客とは違う道を辿り、縞枯山へ。いつもならばスキーで滑り降りる斜面を登っているのだということに不思議さを感じた。初の雪山山行は前日に雪が降っていたこともあり、誰の足跡もついておらず、素晴らしい眺めであった。OBの方々が語っていた雪山の魅力の一部に触れることができたと思う。慣れない雪山の斜面に苦労しながら縞枯山の山頂を目指す。雪山には独特の歩き方があるのだということを学んだ。道中、ほかの山行客と何度か挨拶を交わしながら縞枯山の山頂へ到着。昼食をとり、一休みした。山頂から見る雪山の景色はあまりすぐれているとは言えない天候の中にあっても壮観であった。30分ほどの休息ののち縞枯山を下山。下りの道中では上りの道中よりも多くの山行客と出会った。年配の方や女性の山行客が多かったことに対して意外さを覚えた。14:00ごろにはロープウェイに到着。バスに乗り込み、ふもとの駅へ。前神さんの車に乗り込み今回の山行を終えた。

今回の山行はアイゼン、ピッケルを用いた初めての雪山山行ということで非常にいい経験ができた。残念ながらアイゼンを使用することはなかったが、雪山というものがどういうものなのかということが多少なりとも理解できたように思える。今後、自分たちで様々な雪山を登っていく上で非常に重要な山行であった。

（小宮山　尚与志）

2012

部長
部員
４年　山根　範子
３年　小宮山尚与志(CL)
　　町田　広樹(SL)
　　峯　弘卓
　　川尻　貴之
２年　細川　明道
針葉樹会学生担当幹事
　　佐藤　力
　　前神　直樹
　　川名　真理
　　山田　秀明

今年、創部90周年を迎える一橋山岳部。一橋大学の体育会の中でも非常に歴史がある部である。しかし、近年の山岳部の活動はあまり芳しいものではない。部員数は少なく、活動自体もあまり行われていないという状態だ。私自身も入部する際には現役の先輩が少ないこと、部の活動があまり行われていないことに不安を覚えた。

今年はそうした近年の山岳部の状況を変えていくきっかけの年としたい。様々な山に登ることはもちろんではあるが、部員の増加や一橋大学内での山岳部の認知度を取り戻していくことなどやるべきことは山積している。現役部員一同、協力しながら現状を打破し、山岳部を活性化していくため、様々なことに挑戦していきたい。

現状は厳しいものであるかもしれないが、創部90周年という節目の年に立ち会えたことに光栄に思う。ＯＢの方々と共に記念の年を盛り上げていくと共に山岳部を活性化していくため、精一杯頑張っていきたい。

（小宮山　尚与志）

丹沢縦走

【参加メンバー】小宮山、町田、峯、ＯＢ（本間）、本間友人（高橋、門脇）

【期間】２０１２年5月12日～13日

5月12日

5月12日、新入部員である峯の初山行が行われた。9:30に待ち合わせ場所である渋沢駅改札で幾分か緊張の面持ちの峯と町田と出会い、集合場所へ。本間さんたちと合流したのち、バスで大倉に向かう。到着すると荷分けを済ませ、一同ですぐに登山を開始した。この日は堀山の家、金冷しを経由し塔ノ岳へ向かった。非常に天候に恵まれ、景色を楽しみながらの山行であった。景色が素晴らしかったことに加え、斜面がそれほど急でなかったこともあり、距離をそれほど感じることなく、15:00ほどには山頂へ到着した。塔ノ岳から見る景色は富士山やふもとの景色が見え、素晴らしいものであった。これまでの山行で天候にあまり恵まれていなかったこともあり、塔ノ岳から見えた素晴らしい景色は非常に印象に残っている。尊仏山荘に到着し、荷物を降ろして一息つくと、水汲みに向

かった。湧水は普段水道やペットボトルで飲む水と比べ、明らかに澄んでいることに驚かされた。水汲みを終えると、すぐに夕食の準備へ。これまでの山行ではテントばかりに泊まっていた私たちにとってみると山荘は素晴らしく快適な場所であった。夜には皆で鍋を囲みながら本間さんや高橋さん、門脇さんから一橋山岳部の歴史や、山について話を伺った。私や町田にとってももちろんではあるが、新入部員である峯には特に有意義な時間となったのではないだろうか。

5月13日

4:30、前日の疲れをあまり感じることなく起床。寝惚けまなこで外に出ると素晴らしい景色が広がっていた。朝の富士山は昨日に見た富士山とはまた違った良さを持ったものであり、山登りの醍醐味の一部を垣間見た気がした。山頂からの景色を堪能した後は、前日の鍋の残りの朝食を取り、2日目の山行が始まった。門脇さんとはここで別れ、尊仏山荘を出発し、蛭ヶ岳へ。蛭ヶ岳までの道のりは、前日に続いて天候に恵まれたこともあり、歩いている途中にふもとの町や富士山がきれいに見えたことが非常に印象的だった。しかし、道中は下り坂が急であり、前日の緩やかな斜面を登っているときとは違い、足元への注意が必要とされた。蛭ヶ岳の山頂に到着すると昼食を取り、檜洞丸へ。この時点で現役部員たちも幾分か疲労を感じていたが、本間さん、高橋さんはまだまだ元気である。毎回OBの方々の体力には驚かされている。檜洞丸への道のりは今回の山行の一番の山場であった。蛭ヶ岳までの道のりと険しさは大きくは変わらなかったが、とにかく長い。いくら歩けども、次にのぼる山が見えてくるばかりで体力的な面だけでなく、精神的にも大きく疲労した。その分、檜洞丸に到着した時には大きな満足感と達成感を感じた。檜洞丸で一休みしたのち、下山した。これまで歩いてきた距離が長かった分、下りはそれほどまでに長くは感じなかった。檜洞丸を下山すると川があり、川のほとりで皆で疲れをいやした。川の水は澄んでいて、川底までできれいに見えた。初山行で疲れの色が見える峯とまだまだ元気な町田の姿の対比が印象に残っている。しばらく休んだのち、終着点であるバス停へ。尊仏山荘を出発してから、バス停へ到着するまでで既に12時間が経過していた。しかし、山の景色を楽しみながらの山行はそんな時間の長ささえも感じさせないほど素晴らしいものであった。

今回は初山行である峯が参加したということもあり、これまでとは違った気持ちで山行に臨めた。やはり、多くの仲間と山を登ることは一人で山に登るのとは違った楽しさがある。今後よ

り部を活性化していくことで多くの仲間とともに山に登る楽しみを味わっていきたい。

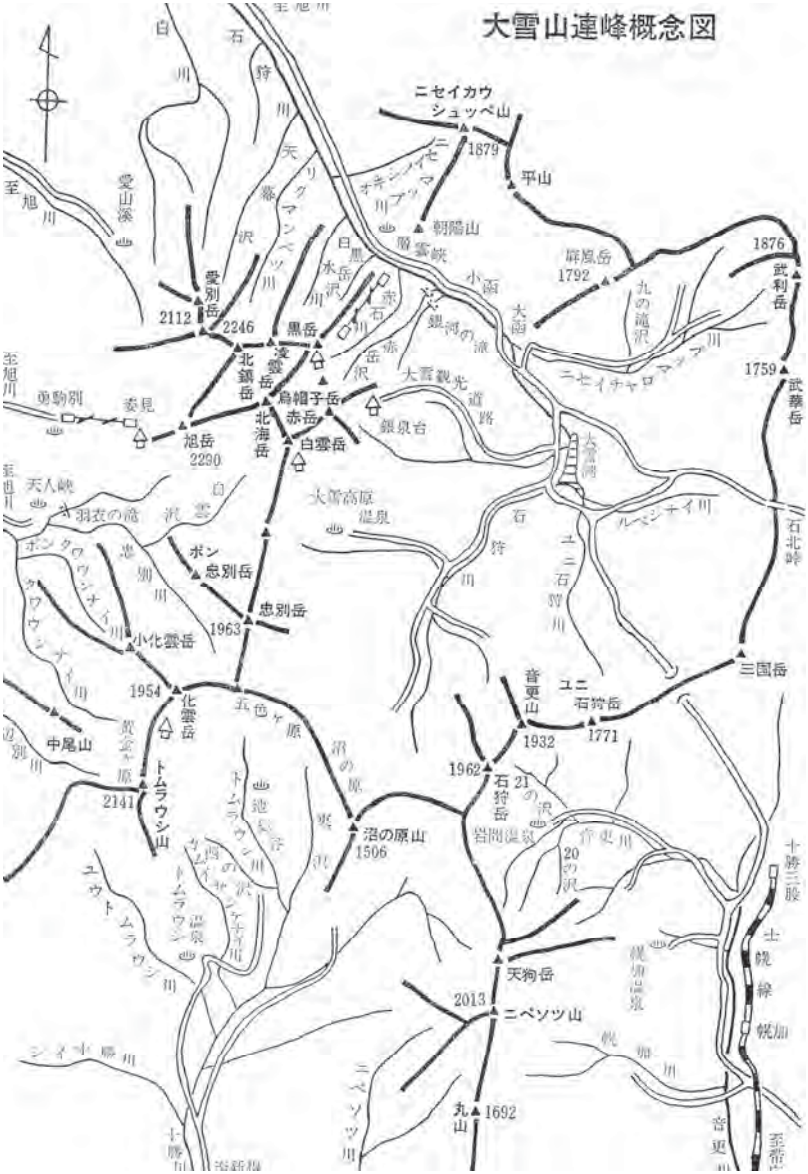
（小宮山　尚与志）



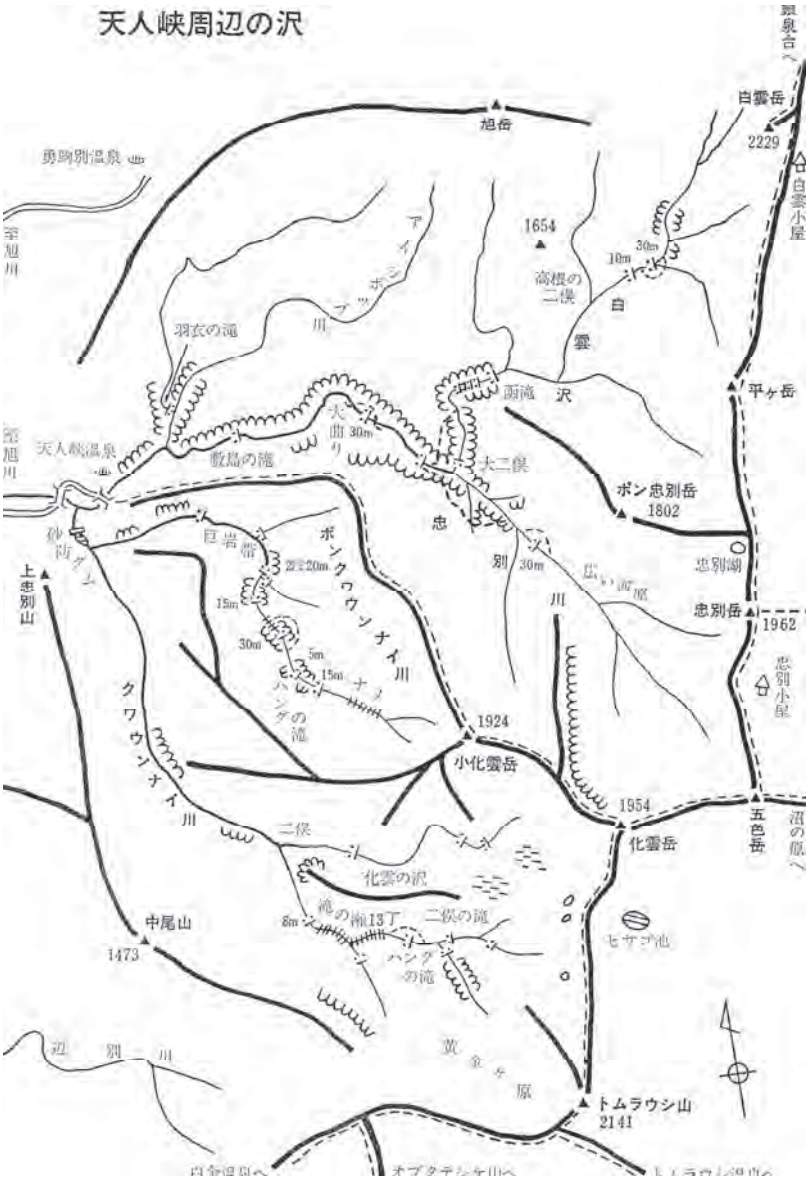
2012年8月　前穂高岳北尾根をバックに
左から 小宮山、町田

2005～2012年度　山　行　表

期　　間		コ　ー　ス	メ　ン　バ　ー
2005	6.11	天城長三郎岳	コースチャ、他3名
2007	6.16	高原川沢上谷	コースチャ、他2名
2008	7.13	高尾山（新人歓迎山行）	原口、糟谷、他4名、OB(高崎(治)、他10名)
2009	6. 4	三ツ峠（新人歓迎山行）	糟谷、伊藤、米田、望月、OB(竹中、他6名)
2011	8.19～ 8.21	蝶ヶ岳	米田、山根、小宮山、町田、OB(竹中、佐藤(久)、前神)
	11.27	倉岳山（中央線沿線）	小宮山、町田、OB多数(針葉樹会懇親山行)
2012	2.25～ 2.26	縞枯山	小宮山、町田、OB(前神)
	5.12～ 5.13	丹沢（大倉尾根～塔が岳～檜洞丸～西丹沢自然教室）	小宮山、町田、峯、OB(本間)、本間友人(高橋、門脇)
	8. 5～ 8. 6	富士山	小宮山、町田、峯、細川、川尻、針葉樹会員とその家族（9人）、一般学生（11名）
	8.23～ 8.26	奥穂高岳、北穂高岳	小宮山、町田、針葉樹会員多数
	8.31～ 9. 6	大学生登山リーダー夏山研究会(剱岳)	小宮山、町田


大雪山連峰概念図
ニセイカウ
シュッペ山
1879
平山
朝陽山
1876
武利岳
1792
1759
武華岳
愛別岳
2112
2246
黒岳
北鎮岳
凌雲岳
烏帽子岳
赤岳
北海岳
白雲岳
旭岳
2290
忠別岳
1963
ポン忠別岳
小化雲岳
1954
化雲岳
五色ヶ原
中尾山
トムラウシ山
2141
沼の原山
1506
天狗岳
2013
ニペソツ山
丸山
1692
音更山
1932
ユニ石狩岳
1771
三国岳
石北峰
1962
石狩岳
21の沢
20の沢
岩間温泉
十勝三股
士幌線
帰加
帰加温泉
大雪高原温泉
大雪観光道路
銀泉台
大雪湖
ニセイチャロマップ川
ルベシナイ川
ユニ石狩川
音更川
ユウトムラウシ川
ヌプントムラウシ温泉
ホロカウンナイ川
ポンタウンナイ川
羽衣の滝
天人峡
白雲沢
忠別川
ニペソツ川
帰加川
十勝川
石狩川
愛山渓
至旭川
美瑛
美馬牛
委見
オキンノイマップ川
ヌッカクシ川
ヒサゴ沼
赤石川
黒岳石
赤岳沢
銀河の滝
小函
大函
扇ノ山
1792
九の滝沢
ニセイチャロマップ川
天リクマンベツ川
白石川
石狩川
至旭川
至旭川
至遠軽
至帯広

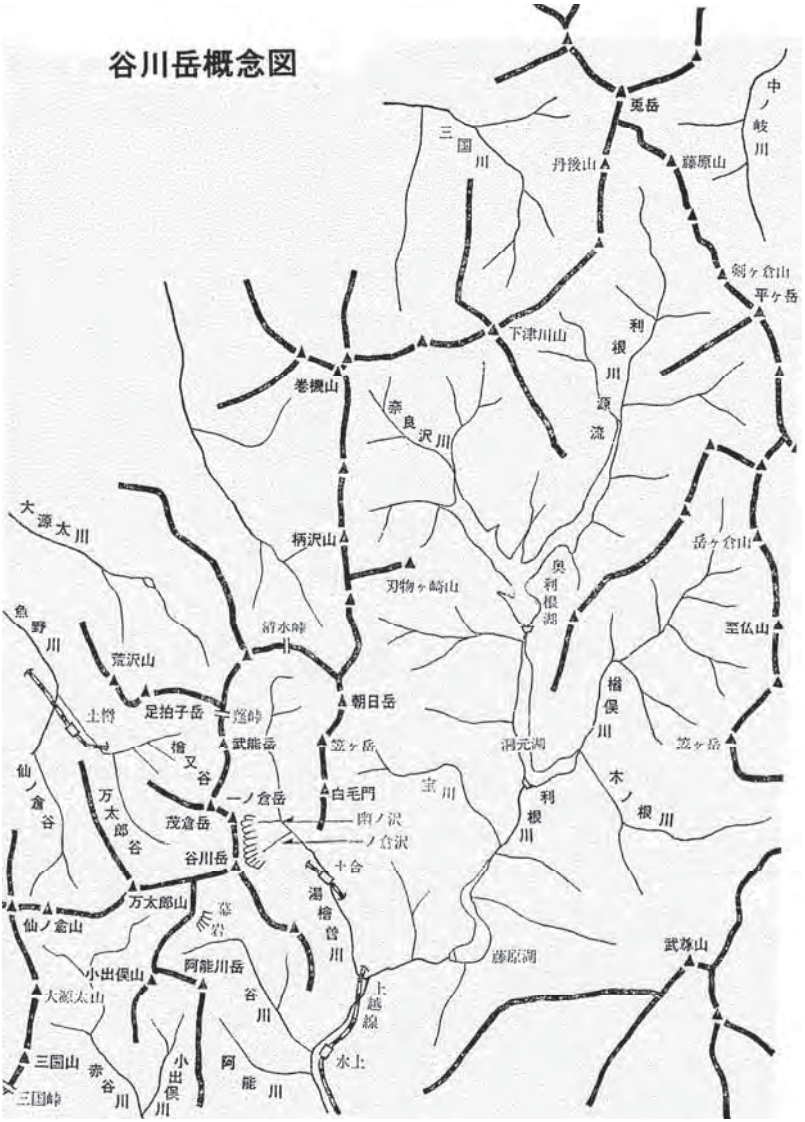
白水社　『日本登山体系　１』


天人峡周辺の沢
旭岳
勇駒別温泉
至旭川
アイボシ
ップ
川
羽衣の滝
1654
高根の二俣
白雲
雲
函滝
沢
白雲岳
2229
白雲小屋
平ヶ岳
天人峡温泉
敷島の滝
大曲り
30m
大二俣
ポン忠別岳
1802
忠別湖
忠別岳
1962
忠別小屋
砂防ダム
巨岩帯
ポンクウンナイ川
20m
15m
30m
5m
ナメ
ハングの滝
上忠別山
クワウンナイ川
1924
小化雲岳
1954
化雲岳
五色岳
沼の原へ
二俣
化雲の沢
滝の沢13丁
8m
二俣の滝
ハングの滝
ヒサゴ池
中尾山
1473
辺別川
黄金ヶ原
トムラウシ山
2141

白水社　『日本登山体系　1』


十勝連峰概念図
望岳橋
東尾根
至トムラウシ山
美瑛川
至美瑛
白金温泉
大雪青年の家
オプタテシケ山
ペペツ岳
石垣山
湧沢川
美瑛富士
美瑛岳
ポンピ沢
オプタテシケ川
望岳台
前十勝岳
十勝岳
OP尾根
吹上温泉
三段山
大砲岩
十勝岳温泉
上ホロカメットク山
D尾根
北尾根
三峰山
境山
カラ川
独立岩
下ホロカメットク山
富良野岳
前富良野岳

白水社　『日本登山体系　1』


谷川岳概念図
兎岳
中ノ岐川
三国川
丹後山
藤原山
笹ヶ倉山
平ヶ岳
下津川山
利根川源流
巻機山
奈良沢川
大源太川
柄沢山
刃物ヶ崎山
奥利根湖
岳ヶ倉山
至仏山
魚野川
清水峠
荒沢山
朝日岳
笠ヶ岳
楢俣川
土樽
足拍子岳
蓬峠
武能岳
楢又谷
仙ノ倉谷
万太郎谷
茂倉岳
一ノ倉岳
白毛門
清水沢
一ノ倉沢
谷川岳
十合
万太郎山
仙ノ倉山
幕岩
湯檜曽川
小出俣山
阿能川岳
大源太山
谷川
上越線
水上
三国山
赤谷川
小出俣川
阿能川
三国峠
宝川
利根川
木ノ根川
藤原湖
武尊山

白水社　『日本登山体系　3』


剣岳・黒部・立山概念図
魚津へ
富山へ
僧ヶ岳
駒ヶ岳
片貝川
東又谷
南又谷
毛勝山
猫又山
早月川
馬場島
赤谷山
白萩川
池ノ平山
立山川
剣岳
東大谷
大日岳
奥大日岳
称名川
美女平
称名滝
室堂
立山
大汝山
立山有料道路
常願寺川
浄土山
湯谷川
ザラ峠
立山・黒部アルペンルート
黒部ダム
駒山谷
越中沢岳
下ノ廊下
上ノ廊下
上ノ黒ビンガ
下ノ黒ビンガ
薬師岳
太郎山
北ノ俣岳
赤牛岳
岩苔小谷
雲ノ平
水晶岳
黒部五郎岳
鷲羽岳
三俣蓮華岳
野口五郎岳
針ノ木岳
蓮華南
北葛岳
南沢岳
赤沢岳
扇沢
鳴沢岳
岩小屋沢岳
爺ヶ岳
赤沢
棒小屋沢
真砂沢
黒部別山
丸山
仙人山
三ノ窓
剣沢
十字峡
牛首山
鹿島槍ヶ岳
五龍岳
東谷
唐松岳
鉾ヶ岳
白馬岳
清水岳
不帰岳
雪倉山
朝日岳
柳又谷
猫又谷
黒部峡谷鉄道
黒部川
祖母谷
祖父谷
柳平
小黒部谷
奥鐙山
鉢鬼山
黒部

白水社　『日本登山体系　5』

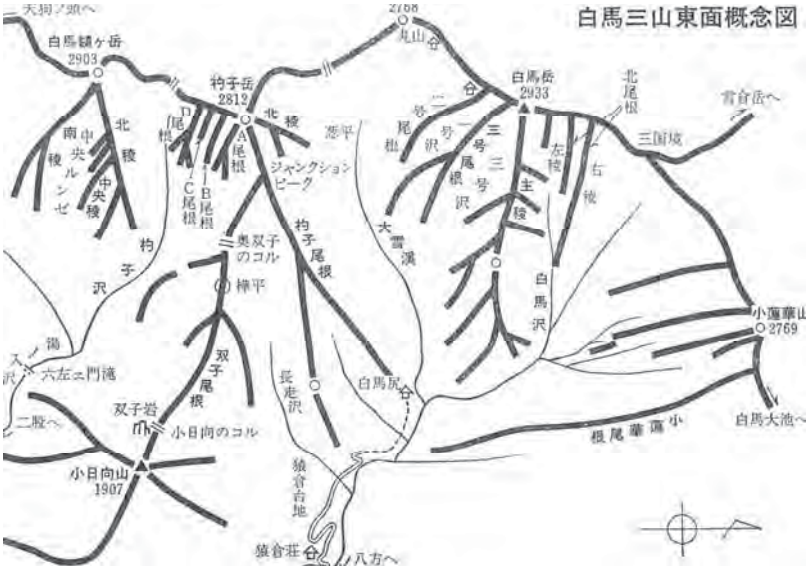

黒部川上流域概念図
鐘中沢岳
木挽山
郭下沢
下ノ黒ピンガ
ゴジ沢
上ノ黒ピンガ
間山
中ノタル沢
黒部
口元ノタル沢
全作谷
薬師岳
2926
薬師平
薬師沢東南尾根
スプレ状の滝の沢
赤牛岳
立石
赤牛沢
岩苔小谷
夢ノ平
温泉沢
太郎山
本谷
右俣
左俣
高天原
野口五郎岳
2924
水晶岳
北ノ俣岳
赤木沢
赤木平
雲ノ平
東沢乗越
祖母沢
祖父沢
祖父岳
鷲羽岳
2924
出水平
五郎沢
小窓谷
黒部五郎岳
2839
黒部乗越
三俣蓮華岳
2841

白水社　『日本登山体系　5』

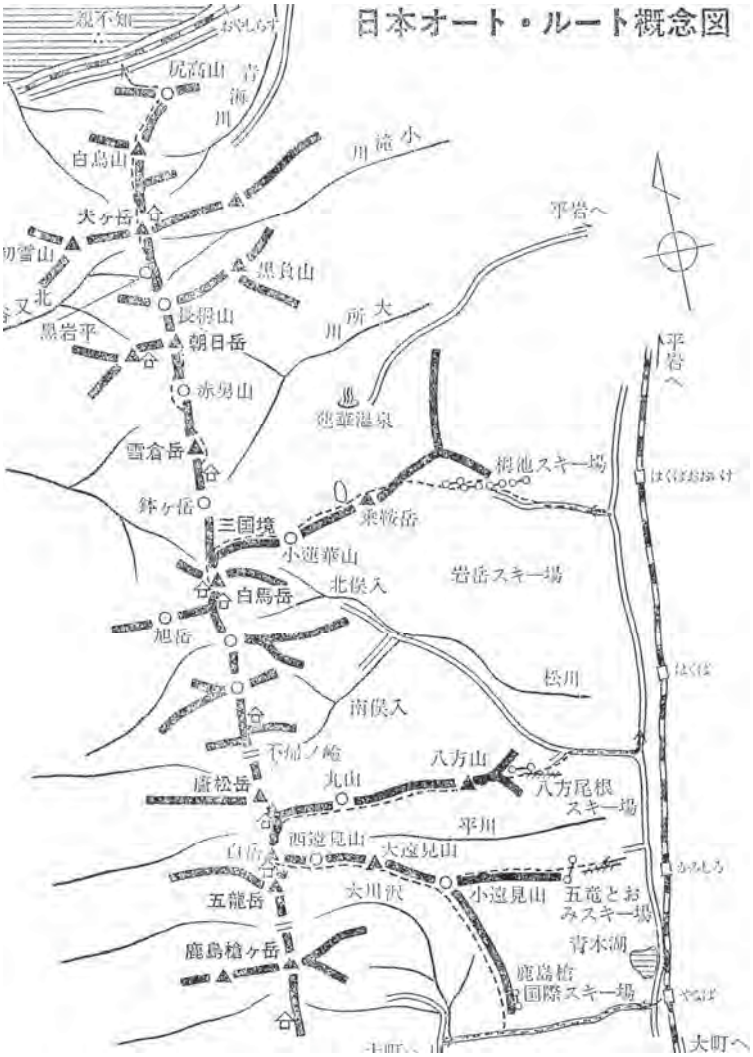
後立山連峰概念図



白水社　『日本登山体系　6』

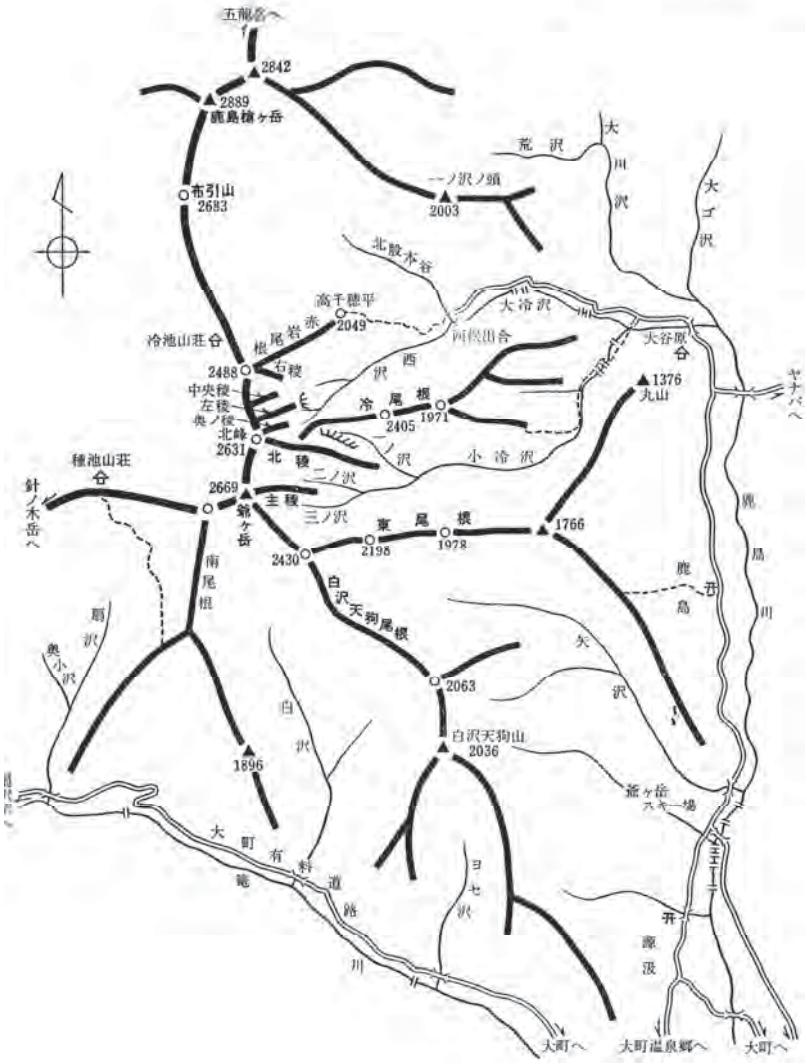

白馬三山東面概念図
天狗ノ頭へ
白馬鑓ヶ岳
2903
杓子岳
2812
2198
見山谷
白馬岳
2933
北尾根
雪倉岳へ
三国境
中央ルンゼ
南稜
北稜
中央稜
D尾根
A尾根
B尾根
C尾根
ジャンクションピーク
鞍平
二号尾根
一号尾根
三号尾根
三号
左稜
主稜
右稜
大雪渓
杓子尾根
奥双子のコル
杓子沢
樺平
白馬沢
小蓮華山
2769
双子尾根
長走沢
白馬尻
六左ェ門滝
双子岩
小日向のコル
二股へ
小日向山
1907
小蓮華尾根
白馬大池へ
猿倉台地
猿倉荘
八方へ

白水社　『日本登山体系　6』

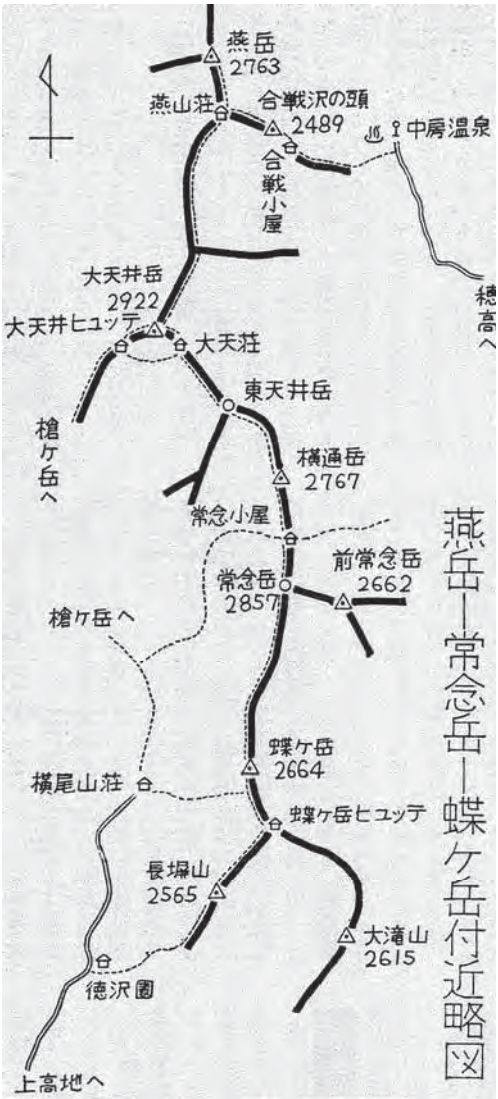

日本オート・ルート概念図
親不知
おやしらず
尻高山
青海川
白島山
小滝川
犬ヶ岳
平岩へ
初雪山
黒負山
北又
長根山
黒岩平
朝日岳
大所川
赤男山
雪倉岳
鉢ヶ岳
三国境
乗鞍岳
小蓮華山
北俣入
白馬岳
旭岳
南俣入
下ノ峰
唐松岳
丸山
八方山
八方尾根スキー場
平川
西遠見山
大遠見山
五龍岳
大川沢
小遠見山
五竜とおみスキー場
青木湖
鹿島槍ヶ岳
鹿島槍国際スキー場
大町へ
栂池スキー場
岩岳スキー場
松川

白水社　『日本登山体系　6』

爺ヶ岳東面概念図



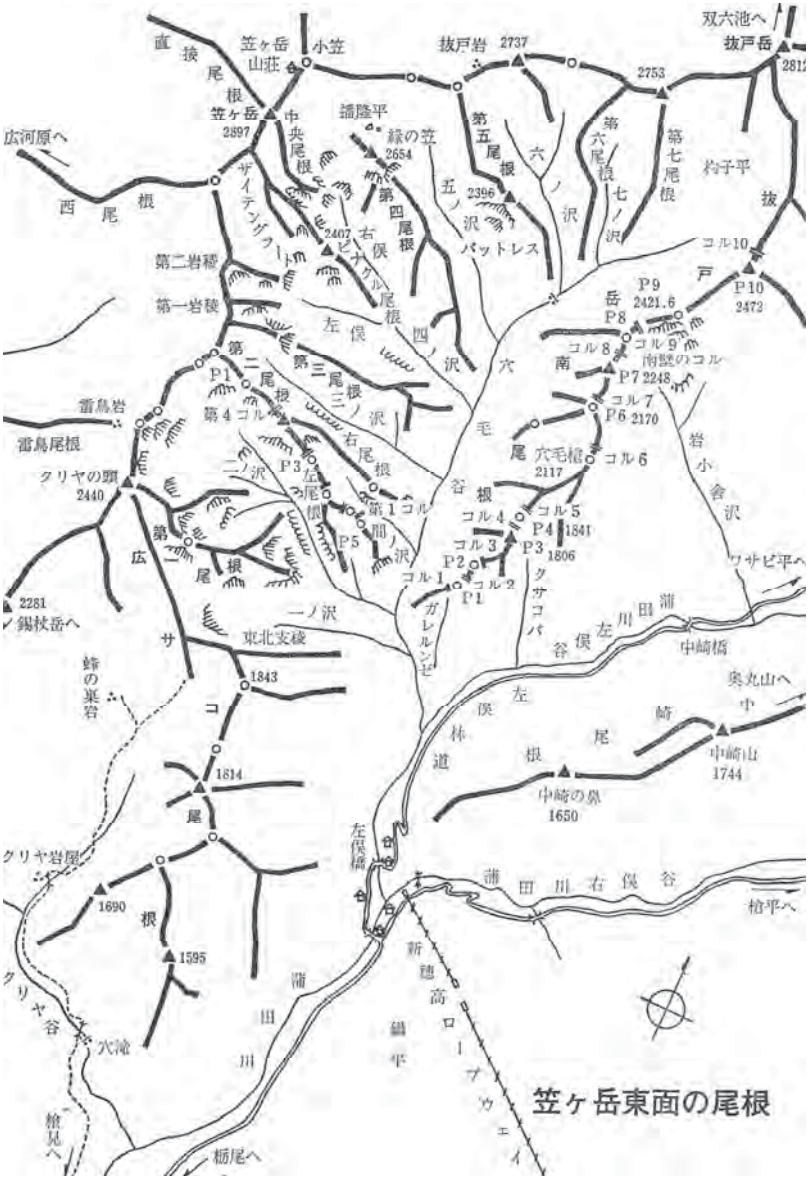
白水社　『日本登山体系　6』



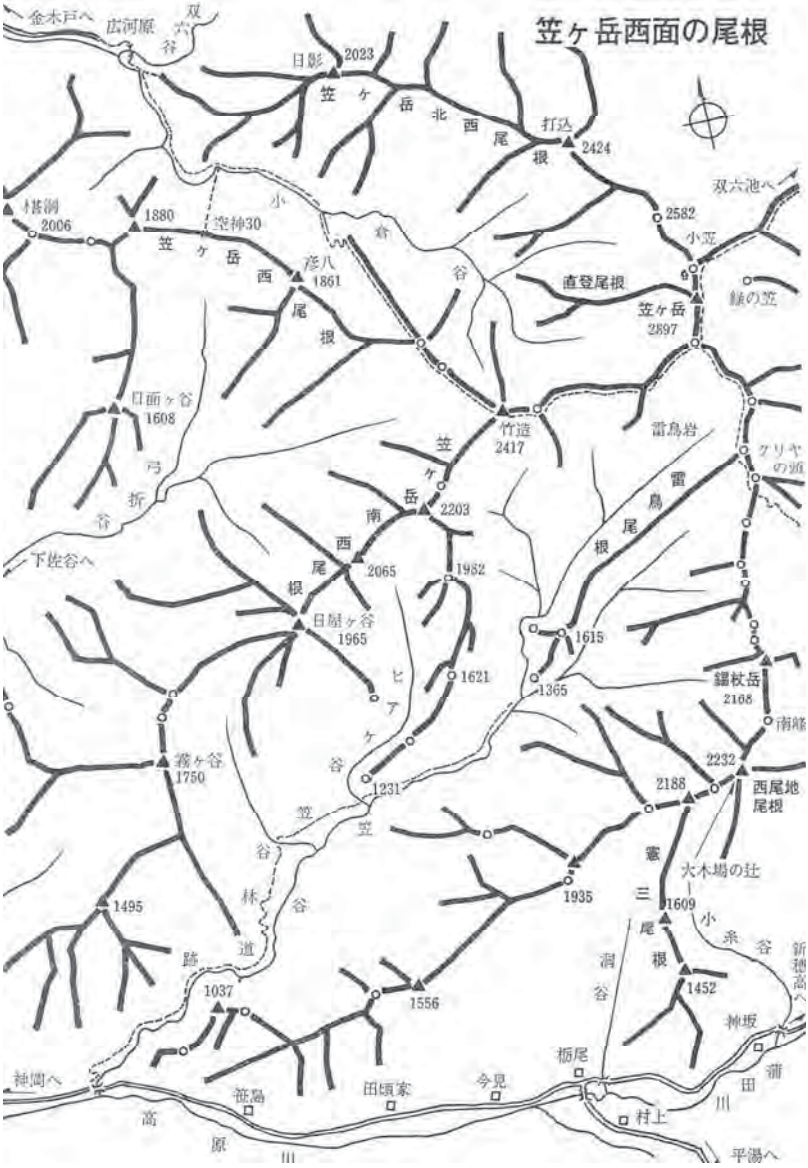
新ハイキング社　『新ハイキング　３８２号』


槍ヶ岳・穂高岳周辺の尾根
北鎌尾根
槍ヶ岳
西鎌尾根
東鎌尾根
双六池へ
大喰岳
中岳
南岳
天狗原
槍沢ロッジ
槍沢
横尾尾根
横尾本谷
横尾
涸沢
南沢
槍平
奥丸山
西尾根
南西尾根
大切戸
東稜
北穂高岳
南稜
涸沢岳
北尾根
奥穂高岳
前穂高岳
吊尾根
ジャンダルム
白出コル
涸沢
北西尾根
蒲田富士
南稜
白出沢
天狗尾根
天狗のコル
天狗の頭
間ノ岳
西穂高岳
岳沢
中崎山
柳谷
西尾根
小鍋谷
千石尾根
千石園地
西穂山荘
新穂高ロープウエイ
新穂高
鍋平
中崎尾根
蒲田川右俣谷
明神岳
明神へ
河童橋
上高地
田代橋
中の湯へ
焼岳へ
栃尾へ

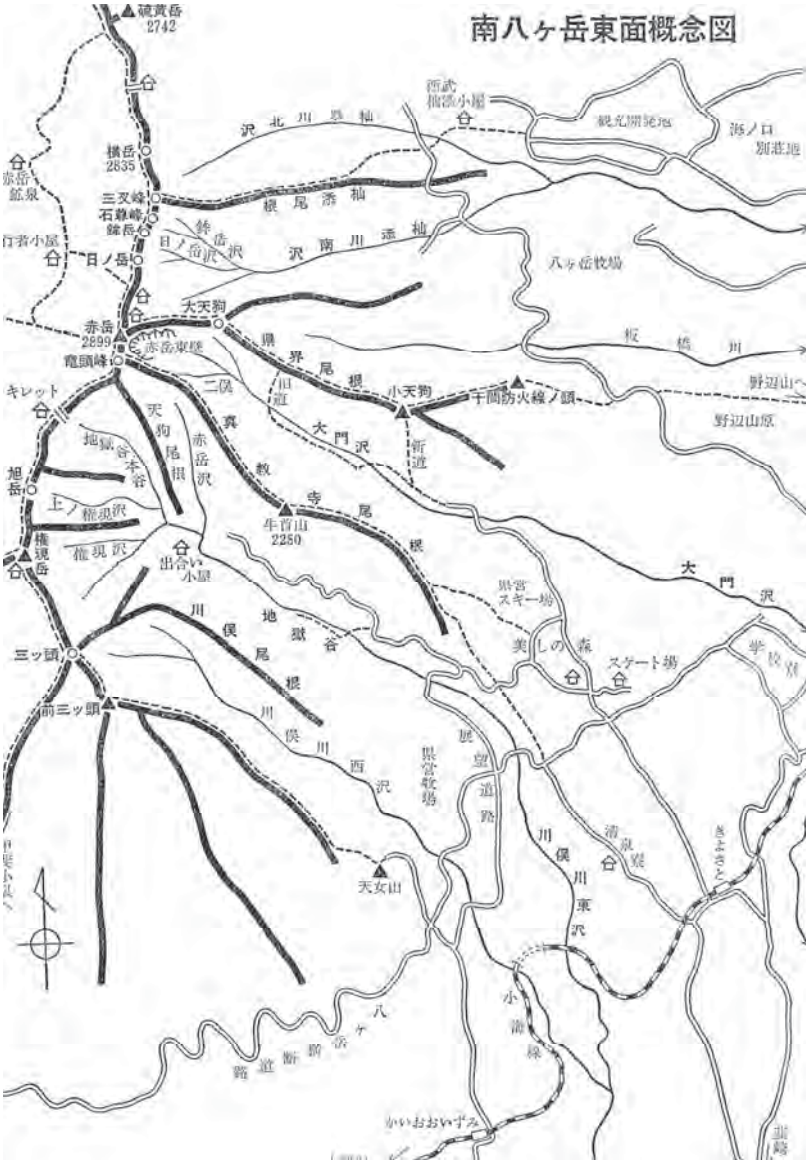
白水社　『日本登山体系　7』


笠ヶ岳東面の尾根
笠ヶ岳
小笠
抜戸岩
2737
抜戸岳
双六池へ
2753
中央尾根
2897
播隆平
緑の笠
2654
第五尾根
2396
六ノ沢
第六尾根
七ノ沢
第七尾根
杓子平
抜
広河原へ
西尾根
ザイテングラート
2407
ピナクル尾根
右俣
第四尾根
バットレス
五ノ沢
コル10
P9
岳
2421.6
P10
2472
P8
コル8
コル9
南壁のコル
南
P7 2248
コル7
P6 2170
穴毛尾根
コル6
2117
第二岩稜
第一岩稜
第二尾根
第三尾根
二ノ沢
左俣
四ノ沢
六
毛
谷
雷鳥岩
雷鳥尾根
第4コル
P1
P3
右尾根
第1コル
P5
コル4
コル5
P4
1841
コル3
P3
1806
P2
コル2
P1
コル1
ガレルンゼ
タサコバ
クリヤの頭
2440
二ノ沢
広尾根
一ノ沢
東北支稜
2281
錫杖岳へ
サコ尾根
1843
1814
蜂の巣岩
クリヤ岩屋
1690
1595
クリヤ谷
穴滝
槍見へ
蒲田川
栃尾へ
岩小舎沢
ワサビ平へ
蒲田川左俣谷
中崎橋
奥丸山へ
中崎尾根
中崎山
1744
中崎の鼻
1650
左俣林道
左俣橋
蒲田川右俣谷
槍平へ
新穂高ロープウェイ
鍋平

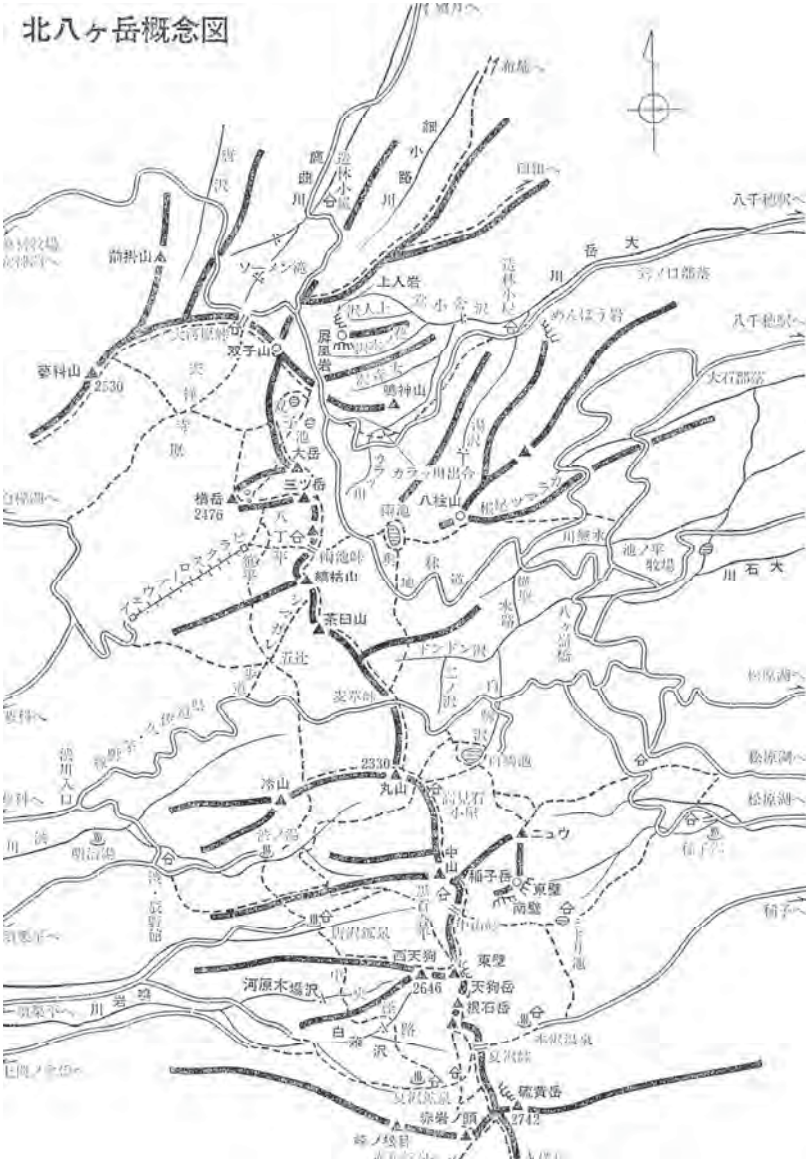
白水社　『日本登山体系　7』


笠ヶ岳西面の尾根
金木戸へ
広河原
双六谷
日影
2023
笠ヶ岳北西尾根
打込
2424
双六池へ
2582
小笠
直登尾根
笠ヶ岳
2897
緑の笠
1880
空神30
笠ヶ岳西尾根
彦八
1861
小倉谷
2006
日面ヶ谷
1608
弓折谷
竹道
2417
雷鳥岩
クリヤの頭
笠ヶ岳南西尾根
2203
2065
1982
雷鳥尾根
下俣谷へ
日屋ヶ谷
1965
1615
1621
1365
鏡杖岳
2168
南俣
霧ヶ谷
1750
1231
2232
2188
西尾地尾根
笠谷
林道跡
1495
1935
三俣
1609
大木場の辻
小糸谷
新穂高へ
1037
1556
洞谷
1452
神坂
神岡へ
笹島
田頃家
今見
栃尾
蒲田川
村上
高原川
平湯へ

白水社　『日本登山体系　7』


南八ヶ岳東面概念図
横岳
2835
三叉峰
石尊峰
錫杖岳
日ノ岳
赤岳
2899
赤岳東壁
竜頭峰
大天狗
小天狗
キレット
旭岳
地獄谷本谷
上ノ権現沢
権現沢
権現岳
出合小屋
二俣
天狗尾根
赤岳沢
真教寺尾根
牛首山
2250
大門沢
新道
旧道
県界尾根
十間防火線ノ頭
三ッ頭
前三ッ頭
川俣尾根
地獄谷
川俣川西沢
天女山
県営スキー場
美しの森
スケート場
県営牧場
皇室道路
川俣川東沢
清泉寮
小淵沢
八ヶ岳縦断歩道
小いおおいずみ
板橋川
野辺山原
八ヶ岳牧場
海ノ口別荘地
観光開発地
西武権現小屋
行者小屋
赤岳鉱泉

白水社　『日本登山体系　8』


北八ヶ岳概念図
双子山
横岳
2476
三ツ岳
大岳
丁合
北横岳
縞枯山
茶臼山
五辻
2330
丸山
冷山
中山
ニュウ
東壁
南壁
西天狗
2646
天狗岳
根石岳
硫黄岳
2742
赤岩ノ頭
夏沢峠
麦草峠
雨池峠
八柱山
上人岩
鳴神山
夏沢鉱泉
白駒池
丸山荘
高見石小屋
ロープウェー
ゴンドラ
ペンション村
八千穂駅へ
大石峠へ
松原湖へ
渋ノ湯へ
川岸へ

白水社　『日本登山体系　8』


南アルプス概念図
諏訪湖
茅野
守屋山
入笠山
伊那
釜無川
甲斐駒ヶ岳
鳳凰山
韮崎
北岳
間ノ岳
農鳥岳
戸安
伊那大島
塩見岳
赤石岳
聖岳
光岳
池口岳
三伏山
大無間山
荒川岳
笹山
青笹山
水窪
北設楽山地
宇連山
白倉山
三河川合
豊川
新城
天竜川
佐久間
大井川
金谷
千頭
安倍川
静岡

白水社　『日本登山体系　9』

■海外での登山活動

Yosemite Dairy 1988 …… 鮎沢　政文　242

ネパール・ヒマラヤ

　クスム・カングル峰（6,367m）北稜 …… 井上　裕之　250

秘峰カカボラジ偵察隊

　半世紀の思いを繋げて …… 引地　　真　258

ブータン・ヒマラヤ 5,727m峰…… 宗像　　充　267



『針葉樹』第5～7号より

Yosemite Dairy 1988

鮎沢　政文

私はこの9月から10月にかけて、アメリカ合衆国はカリフォルニア州のヨセミテ国立公園を訪れ、彼の地のクライミングを体験して参りました。ヨセミテ・クライミングに関する詳しい情報については他のガイド類に任せるとして、今回は簡単な日記形式により、向こうのキャンプ生活やクライミングの雰囲気といったものを伝えるべく努力してみたいと思います。ヨセミテに興味を抱いている大学山岳部の皆様の参考になれば幸いです。

9月6日　快晴（日中猛暑）

ヨセミテ入り。バスの窓から初めてエル・キャップと御対面したときは、自分がこれからアレを登るということがとれも信じられなかった。サニーサイド・キャンプ場で、$2.00／人・日X7日（6月1日～9月15日の間のキャンプ期間、これを越えると$25 の罰金）のテント登録をすませ、同じテントの日本のクライマーに声をかけて「ザ・クッキー・クリフ」というエリアに連れていってもらう。サニーサイドから10㎞も離れているので、車でないと行けないが、垂直のクラックが集中した人気のエリアだそうな。「アナセマ」という5.10b のシン・ハンドのクラックを苦労してフォローする。時差ボケもあって疲れ果てて帰り、サニーサイド近くのヨセミテ・ロッジのストアーでパンと缶詰を買って詰め込み、早々に寝る。初日から慌ただしすぎたようだ。

9月11日　快晴（日中猛暑）

一つには英会話が不自由なせいもあって、何をするにもおっかなびっくりだったキャンプ生活もようやく慣れ、クライミングに専念できるようになってきた。明るくなりかけた7時頃に起き、エル・キャップメドウまでランニングしてストレッチをやってから、パンとコーヒーで朝食。こちらの食パンはやすくて種類も色々あって大変おいしい。親しくなった日本のクライマーと相談し、「ヨセミテに来たらやっぱりクラック」ということで、また「クッキー」に行く。フィンガーの「キャッチー」(5.10d)、ワイドの「ミート・グラインダー」(5.9 ↑はっきり言ってヨセミテのワイド系は恐怖！)、ハンドの「アウター・リミッツ」(5.10b) とたて続けに登ると前腕はパンプして棒のようになり、指の皮はボロボロになる。「クッキー」のクラックは傾斜がきついので、ジャミングにごまかしが効かないし、確実なチョック・ワークが要求されて、とても勉強になる。

夜は同じテント・サイトの者で炭火を囲み、「トルティーヤ」というメキシコのとうもろこしのチップスに、「サルサ」というとれも辛いティップをつけて、ライトビールを飲みながら歓談（ショート・ルートを登る日はいつも大体こんな感じである）。

9月14日　晴

アメリカの大学生の誘いで、センチネル・ロック北壁のV級ルート（通常1ビバーク）「シュイナード・ハーバード」ルートのワン・デイ・アセントに挑戦。センチネルはマーセド河をはさんでちょうどサニー・サイドの対岸にあり、高距５００mほど。ちょっとパタゴニアのフィッツ・ロイに似ていて気になっていた壁だ。まだまっ暗な AM5:00 にキャンプ場発。アプローチのハイキングコースを駆け足し、クラスの岩場をノー・ロープでとばし、AM7:30 に登攀開始。ピッチ・グレードは 5.9A2 で、オール・フリーだと 5.11c。5.10c まではフリーでリードするが、それ以上はエイド。一連のルーフ越えは、やや岩がルーズで、高度感と相俟ってひたすら恐い。暗くなった PM7:30 に頂上着。ヘッド・ライトつけて、滝谷C沢のようなガリーを1回のラッペルを交えて駆け下り、PM10:30 にテント着。心配していたコミュニケーションも、クライマー同士、なんとかなり、充実した一日を終える。

9月22日　快晴

９月19、20日とM氏とエル・キャップの「ザ・ノーズ」にトライしたが、先行パーティーが多く、時間切れのため、17Pから敗退した。M氏の帰国後、同じテント・サイトのW氏と話がまとまり、再トライすることにした。今日は準備にあて、シャトル・バス（無料）で公園内を駆け回る。マウンテン・ショップでギアの買い足し、レンジー・オフィスに計画届け出（これをやっておくと、何かの時に無料で救助活動が受けられる）、最後にビレッジ・ストアーで食糧買い出し。パッキングの後は食いだめということで、好きなだけバドワイザー（一缶$0.68）を飲んで、巨大なサーロイン・チップ・ステーキ（それでも$2.00しない）を焼く。

9月23日　快晴

「ザ・ノーズ」の「シックル・レッジ」まで4本のロープをフィックスし、水（2人X4日分で16リットル）と食糧（パン、ラーメン、くだもの缶）をデポ。

9月24日　快晴

「テキサス・フレーク」（16P）下のテラスでビバーク。

順調に進んだが、荷上げとクリーニングはしんどく、まさに〝垂直の土方〟。疲れ果て、夕食をとると、快適なテラスでコテンと寝てしまう。

9月25日　快晴

「キャンプ5」（25P）でビバーク。複雑な振り子があったのと、ナッツの人工が多かったのとで時間を食い、暗闇の中、フレンズのカムが効いているのがわからぬままに、アブミをかけかえてキャンプ5へ。外傾した小便臭いテラスだが、そんなことにお構いなく急降下で眠りに落ちる。

9月26日　晴

次々に現れる均一サイズのクラックをフレンズのかけかえで登り、ボルト連打のファイナル・オーバーハングを越えると、真っ平な頂上台地の一角に飛び出て、37ピッチに及ぶ垂直の土方作業を終える。イーシト・レッジ経由の下降路（途中で3回のラッペルがあり）は初めてだし、暗くなりそうなので、頂上回りのハイキング・コースを重荷にヘロヘロになって下り、4時間の苦行で懐かしのサニーサイドへ。何はともあれビール、ビール。生きていてよかった！

9月27日

休養日。体の節々が痛く、手の指はむくんで傷だらけでタラコのよう。陽が高くなってから起き出し、ギア分けをした後、ハウスキーピング・ビレッジに行ってシャワー（石鹸、タオル付きで$1.50）を浴び、コインランドリーで洗濯（$1.00）をする。用事を終えて一息つくと、反動食いが始まり、キング・サイズのスニッカー、トルティーヤ、バドワイザー、バカデカステーキ、クッキーと食いまくり飲みまくり、腹パンパンにして寝てしまう。（こういうだらけきった生活が2、3日続き、体が重くなり、当然ショート・ルートには行かなくなり、ビッグ・ウォールにしか喜びが感じられない異常な体になってゆく。これをビッグ・ウォール・シンドロームという）

10月13日

「ザ・ノーズ」の後、W氏とエル・キャップの南東壁を代表するエイド・ルート「ゾディアック」に取り付いたが、8P目で私が2回堕ちてビビリ、あえなく敗退した。W氏はさびしく帰国し、ハネムーンでやってきて必ずルートの終了点でビバークし、「若い二人に下手な詮索は無用だ」と日本のクラーマーを羨ましがらせた東大スキー山岳部OBのK夫妻も、サンタモニカに行くとかで、ニコニコしなが

ら出発してしまった。キャンプ場お掲示板に「Partner wanted for "Zodiac」の掲示を出してから数日たつが、いまだ反応はない。クライマーが少なくなって閑散としたテント・サイトで昼間からビールを飲んでゴロゴロし、夜は夜で、日本に帰ったら絶対食えないというだけの理由でバカデカステーキを焼く。同じテント・サイトのスイス嬢に「always eating or sleeping」と言われて激しく落ち込むが、日本人笑いで辛うじてごまかす。ヨセミテに来た頃の、ショート・ルートに打ち込んでいたストイックな日々が懐かしい…。

10月15日　快晴（日中暑い）

掲示を見てやって来た待望のパートナー、34才のアメリカ人の技師ロジャーと「ゾディアック」に再トライをかける。今日はお互いの力量を把握するということで、2ピッチフィックスして下降。経験豊富そうで、慎重かつ安定した登りをするが、何かあると「Oh, Boy」と言って人の頭をなでるのはやめてほしかった。今年は異常気象なのか、10月に入ってもあまり気温が下がらず、この日も真夏の様な日射しだった。

10月16日　曇

取り付く前に一日おいて気分転換ということで、一人でワン・デイ・ハイクに出かける。4マイル・トレイル～グレイシャー・ポイント～パノラマ・トレイルとよく整備された道を、秋のバレー・フロアーのすばらしい展望を楽しみながら快調に歩く。ヨセミテに来た頃には、日本の大学生のナンパ用語だという先入観があってどうしても言えなかった「ハーイ」という挨拶がやっと出来るようになり、人と会うと自然に口から出るのには我ながら驚いた。

10月17日　快晴（日中暑い）

「ゾディアック」7P目のテラスでビバーク。人気ルートなので残置が増えてグレード・ダウンしているとは言え、ラープやスカイフックを使うA3のピッチはただただ恐い。また、ボルトラダーと言っても、ネジを切った軸が埋め込んであるだけで、ここにハンガーをかけて六角ナットで締めなければならない。土方の次は〝垂直の機械工〟である。苦労して荷上げしただけあって、夕食はジュース、パスタ缶、フルーツ缶、ドライフルーツと豪華である。こちらの缶詰は、パスタ、ビーンズ、野菜、肉、魚と種類も豊富で味もよく、日本の下宿住まいの貧乏学生には大受けしそうである。

10月18日　快晴（日中猛暑）

A3が連続して3ピッチしか進めず、10P目の終了点でポータレッジを吊ってビバークする。残置が多くなっても、それがみなコパーヘッドではちっとも気が休まらない。10P目を登攀中に、右横の「ルナー・エクリプス」というルートの上部の大フレーク（高さ40mほど）が大音響とともに崩壊して落下し、南東壁へのアプローチとなるガリーに激突して岩雪崩となった。一部始終を目撃しブルブル震えながら、「ゾディアックを無事終えられたら岩登りはやめよう」と真剣に思った。ポータレッジの上で寝返りをうつと船が揺れたときのような不快感があり、好きになれない。

10月19日　晴

今日もA3が続いて3P止まり。エキスパンディング・フレークが多く、ピトンを強くたたき込めず、シン・ストッパーやRPを多用する。13P目のテラスは少々小便臭いが、真っ平なので快適に手足を伸ばす。登攀中はいいが、ビバークに入ると、私の不自由な英語のために会話が弾まず空気が重い。日本に帰ったら英会話を勉強しよう…。

10月20日　快晴

さしもの「ゾディアック」も最後の3ピッチはやや易しくなり、お昼すぎに抜けることができた。最終ピッチをユマーリングしてゆくと、ロジャーはナニ丸出しで日光浴をしていた。イースト・レッジを下り、3回のラッペルで安全圏に達した時、これで生きて日本に帰れる、と初めて喜びがこみあげてきた。

10月25日　曇

「ゾディアック」の後、お決まりのバカ食いばか飲みが数日続き、もういい加減日本に帰ろうかとも思ったが、「Climbing」誌に載った「サラテ・ウォール」フリー化の写真を見ると、根が単純なもので直ぐに影響され、まだしつこく居残っていたハード・フリー・クライマーのS氏とT氏と語らって出かける。この日は10ピッチ登ってマンモス・テラスでビバーク。傾斜が緩いので3人X4日分24㌔の水の詰まったホール・バッグを上げるのが一苦労だった。3本目ともなると、荷上げ、クリーニングも手慣れてきた感じである。

10月26日　晴／快晴

「サラテ」20P目終了点のテラスでビバーク。「ホロー・フレーク」、「ザ・イヤー」など、プロテクションのとれぬままにランナウトしてしまう恐ろしいワイド・クラックが

多く、またもや「岩登りはやめよう」の誓いをたてる。ビッグ・ウォールを登るにはワイド系の技術が不可欠だと身にしみて納得。朝明るくならないと起きないので、最終の2ピッチはヘッドライト登攀となり、21:30 ようやくビバークに入る。

10月27日　晴／快晴

「サラテ」20P目の「ザ・ブロック」のテラスに達してから、「ザ・ルーフ」下まで3ピッチフィックスしてビバーク。「サラテ」のクラックは「ザ・ノース」のに比べるとフレアーしておらずきれいで、ナッツ、フレンズが気持ちよく効く。

10月28日　晴

フリー化メンバーの一人、ポール・ピアナが「ここ（ヘッド・ウォール）に居るということはフリーによるのであれ、エイドによるのであれ、クライマーの体験し得る最もすばらしい体験の一つだ」と書いていた通り、ヘッド・ウォールに一直線に走るクラックは本当に美しく、これを見るためにだけでもこのルートに取りついてよかったと思った。日没直前に抜け、イースト・レッジを速やかに下降し、閉店間際のビレッジ・ストアーに駆け込んで、ビールとステーキ用の肉を買うことができた。

10月30日

夕焼けに染まるエル・キャップの南西壁に見送られて、ヨセミテ・バレーに別れを告げた。

そして…

日本に帰ってからもう10日もなるのに、いまだに私はビッグ・ウォール・シンドロームから抜けやらず、毎日部室でゴロゴロしてシュラフから出ようとせず、「日本は寒い、食いものが高くてまずい」と文句ばかりつけて、「サルサ食いてー」とわめいているので、現役部員からは白い目で見られている今日この頃です。

終りに――ヨセミテ・クライミングへの誘い――

今回ヨセミテのクライミングを体験してみて一番感心させられたのは、向こうの連中の、とにかくクライミングを楽しもうとする姿勢でした。下は腹の出たオジサンから上はワシントンコラムのアストロマンをフリーソロしたピーター・クロフトまで、各人がそれぞれのレベルに応じて目一杯クライミングを楽しんでいました。別な言い方をすると、どうせ登るなら楽しまにゃ損々ということでしょうか。

「ゾディアック」を終えてエル・キャップ・メドウの駐車場に降りてきた時、現在エル・キャップで最難のルートと目されている「シー・オブ・ドリームス」（VI5.9A5、「If you fall, you die」というピッチを含むことで有名）にこれから取り付く連中に会いました。「恐くないのか」と聞くと、「恐い、でも俺たちにはこれがある」と、ちっとも恐くなさそうに、ステレオ・カセット・デッキをたたいて見せました。完登後のビールとステーキだけを楽しみにして、登攀中は緊張と恐怖でブルブル震えているようでは、A4とかA5のグレードのついた一週間以上かかるルートはとても登れないな、と思いました。

もう一つには、クライミングにおけるタクティクスというものの重要性を認識させられました。たとえばショート・ルートでは、クラックが主体のヨセミテでは登りながら自分でナッツ類をセットしていかねばならず、ボルトで安全を保証されたフェース系のクライミングと違って、ムーブだけに集中する事ができません。よってムーブの組み立ての他に、ギアの選択とか、どこでどうレスティングしてプロテクションをセットするかというタクティクスがとても重要になります。ビッグ・ウォールでは、さらに壁の中でどう食べどう眠るかの生活技術が加わって、タクティクスの重要性はますます大きなものになります。向こうの連中の大胆なクライミングは、決して日本人流の神風精神から出たのではなく、緻密なタクティクスの裏付けがあってこそ可能になるのだと思いました。

ヨセミテのクライミングは、日本の岩場ではまず学べない合理的な岩登りの知識と技術を教えてくれるし、何よりもそれ自体すばらしい体験だと思います。大学山岳部の皆さんで、ハード・フリーとビッグ・ウォールの接点を模索している方、日本の本チャンでは飽き足らない方、上級生にしごかれ、何とか岩登りが上手くなって見返してやりたいと思っている下級生の方、ぜひヨセミテを訪れてみて下さい。きっと求めているものが見つかると思います。5.10や5.11が登れなければ…、なんて言うのは見当違いもはなはだしい。むしろ初心者ほど、向こうでゼロから始めたら、上達が早く正しい知識を習得できると思います。そういう点では、ヨセミテで岩登り合宿なんていいアイデアだと思います。（現にソウル大学の山岳部はこれをやっており、「サラテ」、「トリプル・ダイレクト」「ノーズ」からエル・キャップを集中登攀していました）。

さて、気になる支出ですが、私の場合今回は、航空運賃は別として1500ドル（1ドル130円として19万5千円）をトラベラーズ・チェックで持ってゆき、向こうで2カ月分の生活費の他にエイド用のギア（約400ドル）購

入に支出しましたが、帰ってみたら充分お釣りが来ました。私はかなりエピキュリアンしてしまったので食費がかさみましたが、ストイックな人ならいくらでも倹約できるでしょう。

では、ヨセミテですばらしいクライミングを！

【鮎沢政文「ヨセミテ登山計画書」1988年8月30日】
―はじめに―　より抜粋

昨年末、コルディエラ・ブランカ（ペルー）～ヨセミテ（U．S．A）～パタゴニア（アルゼンチン）とつなげる「南北アメリカ大陸縦断登山計画」なるものを温めてきましたが、登山シーズンとの兼ね合い、パートナーの都合などの事情により、実行に移すことはきわめて難しくなり、今年は泣く泣く断念するに至りました。

しかし、異国の山々への憧憬は断ちがたく、また幸いにも二人の強力なパートナーが得られたこともあり、今年はとりあえず、アメリカ合州国はヨセミテ渓谷のビック・ウォールに挑戦することにしました。

現代ビック・ウォール・クライミング発祥の地で、知識と技術を習得・錬磨し、今後予定しているインド・ヒマラヤはガンゴドリ氷河周辺の岸壁やパタゴニアの岩塔のクライミングに向けてのステップとし、また異国での山登りの経験を、日本の山登りを見つめ直し、その新しい魅力を発見するための契機にしたいと思います。



「1988年度上半期一橋山岳部活動報告書」より

ネパール・ヒマラヤ
クスム・カングル峰（６３６７ｍ）北稜

井上　裕之

【参加メンバー】

松原　尚之（隊長、法政大学５年、23歳）
遠藤　淳（副隊長、早稲田大学５年、24歳）
恩田真砂美（上智大学４年、21歳）
蛭田　昌宏（日本獣医畜産大学４年、21歳）
井上　裕之（一橋大学３年、23歳）
山本　英昭（明治学院大学３年、21歳）

【期間】１９８９年２月12日～３月27日

この登山は１９８８年度に日本山岳会学生部が実施した海外遠征である。６大学６人（うち女性１人）の有志が参加し、一橋から当時３年生の井上が参加した。

当初は学生部で「どこかに海外遠征に行こう」という話が持ち上がり、それを知った井上が年度の初めごろから市ヶ谷の学生部の会合に顔を出すようになった。夏合宿の遭難事故で一時は参加を諦めたが、他大学との交流登山を石部長は前向きに考えていた。

最終的な目的地は秋ごろに決めた。費用や手続きの手軽さから、ネパールのトレッキング許可で登れる18座に対象を絞り、この中から、６０００ｍを超え、かつ最も技術的に難しいクスム・カングルの北稜に狙いを定めた。計画では、北稜取り付きのキャシャール氷河４２００ｍ地点にＢＣを建設し、北稜にＣ１、Ｃ２、Ｃ３と前進キャンプ３つを作って山頂を目指すことに。Ｃ１からＣ３は岩と氷のミックスの岩稜・岩壁で、Ｃ３から上はやや傾斜の落ちた氷稜となる。我々は、Ｃ１からロープをベタ張りして全員登頂を目指すというオーソドックスな極地法で臨んだ。登山期間は30日間。ＢＣより上ではシェルパや高所ポーターは使わないこととした。出発までに、冬期登攀の訓練をゲレンデや八ヶ岳で積んだ。

２月12日　本隊出発

本隊（松原、恩田、蛭田、山本）が成田を出発。翌日ネパールのカントマンズに到着。18日にルクラへ。

２月19日　後発隊出発

後発隊（遠藤、井上）が成田出発。

２月20日～25日　後発隊カトマンズ滞在

後発隊がカトマンズに到着。早くルクラにいる本隊に追



1988年　クスム・カングル

ていた宿は衛生環境が悪くメンバー全員が一度は体調を崩していた。早々に発ちたいとのことで、松原、蛭田、井上、山本が先発してキャラバン開始。発熱の恩田と付添いの遠藤はルクラ残留。牛やヤクを追い追い平坦な道をのん気に歩く。

2月27日　快晴　キャラバン（～モンジョ）

先発の4人がモンジョ到着。さらに高度順応のため3200m地点まで往復。後発の遠藤と恩田も夕方モンジョに到着。この時点で予定より6日の遅れが出ており、これをどうするのか、この日から毎晩話し合うことに。

2月28日　快晴　キャラバン（～3700m）

急登が始まる。順応を心掛けてゆっくり登り、3700mの大岩基部に幕営。ここまではヤクが登れる。クスム・カングルの眺めが素晴らしい。

3月1日　晴　キャラバン（～4000m）

風邪と発熱の松原、恩田は居残り、残る4人は4000m氷瀑手前まで進む。

いつきたいが、飛行機（ルクラ・フライト）が悪天続きで飛ばない。カトマンズ観光にいそしむ。

2月26日　快晴　キャラバン開始（～パクディン）

漸くルクラ・フライトが飛び、本隊と合流。本隊が泊まっ

3月2日　快晴　BC建設（4200m）

先行する4人が4200mにBCを建設。高所のためテント場作りも息が切れる。蛭田、井上が頭痛。ポーターへの支払いの額をめぐり一悶着。私は微熱もあったためさっさと就寝。恩田は体調回復せず、松原と引き続き大岩基部に居残る。

3月3日　快晴　C1予定地（4700m）へ荷上げ開始

遠藤、蛭田、井上は、順応と荷上げを兼ねてC1予定地を往復。予定地へは北稜右の雪面、ガレ場を登る。私は荷上げ途中で体がだるくなりBCへ引き返す。BCでシェルパとおしゃべり。

3月4日　快晴　C1予定地へ荷上げ

遠藤、蛭田、山本が荷上げ。出発30分後に北稜左のルンゼで大雪崩発生。遠藤、蛭田で偵察し、山本は一時的にBCに戻り待機。どうやらルートに問題はなさそうで、再び3人で荷上げへ。休養日とした井上は、装備係であることからBCで荷物のチェック。松原、恩田は4000m氷瀑手前までキャラバン。

3月5日　快晴　C1予定地へ荷上げ

BCの4人は全員でC1予定地へ荷上げ。体調が今一つだった私も、ゆっくり荷上げしているうちに回復。夕方BCに戻ってゴロゴロしていると松原、恩田も到着し、晴れて全隊員がうちそろう。

3月6日　快晴　C1建設（4700m）

蛭田、山本がC1入りの予定であったが、蛭田が激しい頭痛のため代わりに遠藤が山本とともにC1入り。松原、恩田、井上は荷上げ。モレーンにC1を設営するが、整地の際に松原、恩田、井上は頭痛と立ち眩みに悩まされる。

3月7日　晴　C2へのルート工作開始。

C1の遠藤、山本がC2に向けてルート工作を開始し、4ピッチフィックス。BCにいる他の4人はC1へ荷上げ。私の体調は、バテた隊員の荷物を持つほど絶好調である。

3月8日　晴のち曇一時あられ　荷上げ

C1の遠藤、山本はこの日はステイ。BCのメンバーは、蛭田がC1入りし、松原、井上が荷上げ。恩田はBCステイ。荷上げを終えた私はBCでハーモニカを吹いて時間をつぶす。

3月9日　曇のち晴のち雪　C2へルート工作

C1の遠藤、蛭田、山本の3人はC2へのルート工作。北稜へダイレクトに突き上げるルンゼ上に9ピッチフィックスする。BCでは松原、恩田はC1へ荷上げ。体のだるい私はBCにステイし、ひたすらハーモニカの練習。

3月10日　晴　C2へルート工作

C1の3人はこの日もルート工作。あと1ピッチで北稜へ乗るというところで、ルート上部から大落石。ひと抱えもある岩が落ちてきたという。幸いにもみな無事だったが、早々にC1へ退散。「あー、山は偉大だ」と頂きを仰ぐ遠藤。遠藤はBCステイの松原とシーバー交信し、ルートを若干修正することに。7～8ピッチのフィックスが無駄になるが、また落石を食らうわけにはいかない。恩田、井上はC1へ荷上げ。

3月11日　曇のち雪　C2へルート工作

C1の遠藤、山本でルート工作（蛭田はC1ステイ）。左にトラバースしたあとチムニーを越えて北稜上に取り付くルートをとり、7ピッチをフィックス。BCにいた松原、恩田、井上もC1入り。待ちに待ったC1入りで私も意気込むが、夜には雪が降り積もりだし不安を覚える。灯油コンロの調子が悪く、気化した灯油がテント内に充満して頭痛と涙の嵐。喉もヒリヒリと痛む。

3月12日　晴　C2へルート工作

景色は一変して辺り一面白の世界。遠藤、蛭田がルート工作。黒っぽい岩場を右側から巻き、ルンゼを登る。再び稜線上に出る手前のところまで4ピッチフィックス。昨晩の降雪のため、ルート工作隊はラッセルもあり大変である。松原、恩田、井上はその手前まで荷上げ。この日もコンロが不調で気化した灯油がテントに充満し、松原と恩田がついに寝込む。あすはいよいよルート工作に参加とあって緊張。『手袋、ユマール、ルート図、アブミ、バイル、テーピングテープｅｔｃ忘れないように。そして死なないように』（3月12日の日記より）

3月13日　晴、夜雪　C2建設予定地（5300m）

蛭田、井上でルート工作し、遠藤が登攀具を荷上げしながらそれを補助。ルート工作はきのうの工作終了点まで行くのが最初の作業で、ロープをたどってほとんど休まずに登り返し、非常にしんどい。そこからルンゼ等を2ピッチ登ると、再び稜上に出る。稜上をさらに3ピッチ伸ばすと絵にかいたような立派な岩小屋に到着。阪大パーティーも

テントを張っているここをＣ２建設地と決める。時間があったのでさらに１ピッチ伸ばす。

３月14日　晴のち霧、夜雪　Ｃ２建設（５３００ｍ）
Ｃ２入り

私は蛭田とともにこの日Ｃ２入りを目指すが、Ｃ１に上がって間もないので高度順応が少々不安である。Ｃ２を建設して荷を置き、きのう張った終了点よりさらに１ピッチ伸ばし、吹雪いてきたのでＣ２に戻る。寝るころに咳が出だし、夜半にひどくなる。肺水腫になったのかと不安に襲われ、ろくに眠れず。松原、恩田はＣ２へ荷上げ。

３月15日　晴　Ｃ３に向けルート工作

私は、食欲の減退や頭痛、咳はあったものの倦怠感は無く、行動には十分な体力があると感じられたため、シーバー交信で松原と相談の上、蛭田とともにルート工作。きのうまでの２ピッチを越え、岩峰を右に巻きながらガラガラのルンゼなどかなりの悪場を経てさらに５ピッチをフィックス。このうち３ピッチ目は立派なスノーリッジ。５ピッチ目は私のリードでスラブから稜上へ抜けたが大変難しく、スラブの中の浅いクラックにあまり効いていないハーケンを打ちこみ、アブミ掛け替えのＡ１。自分にとってはギリギリの登攀となり、抜け出たのは16:30ごろ。帰幕途中で日は暮れ、ヘッドランプ行動に。最後尾で懸垂下降中に支点が抜けて２ｍほど滑落。同時に足元の岩が大音響とともに谷間に落ちてゆき、けがはなかったものの気が動転。さらに下降しようとするもザイルが岩角に引っかかってルート上に戻ってこず、先に降りた他のメンバーはすでに闇の中で、焦燥感が募る。落ち着くよう自分に言い聞かせながら一挙手一投足丁寧に降りて、なんとか無事Ｃ２に帰幕。極度の緊張の連続のため食欲はわかず、ただ気持ちが悪かった。この日は恩田もＣ２入りした後、ルート工作隊を追いかけて合流した。

３月16日　晴のち曇　Ｃ３に向けルート工作・登頂断念

私はきのうまで連続６日行動したため、この日はＣ２で休養。蛭田、恩田がルート工作。遠藤もＣ２入り後に合流する。トサカ状岩峰の稜上に４ピッチフィックスする。途中かぶり気味のクラックがありてこずる。松原はＣ１ステイ。山本はＢＣへ逆ボッカ。この日の夜、日程的に登頂の可能性が無くなったことを全員で確認する。今後のことについてＣ２の４人とＣ１の２人でトランシーバーにて話しあう。その結果、登頂はなくなっても、日程の許す限りルートを伸ばすことに決定する。これについては隊員の中で意

見が割れたが、私自身は登頂よりもルートを楽しむ考えが強く、ルートを伸ばすことにまったく違和感がなかった。

3月17日　晴　ルート工作（～5500m最高到達点）事故発生

松原、遠藤、恩田、井上の4人がさらに5ピッチ伸ばす。蛭田と山本はC1ステイ。15:30、5550mまでルート工作を終了。恩田、松原、遠藤、井上の順でフィックスロープを使って懸垂下降に入る。15:45、先頭の恩田が3ピッチ目のトラバース状の下降の途中で横のハーケンが抜け、ロープがたるんだ分、3～4m落下。その際に右足をクラックに挟んで落ちたため、右足首を骨折した模様。すぐに3人が救助に取り掛かる。安全な場所に移動したものの、時間からみてけが人をC2に降ろすのは困難と判断し、松原が付き添ってビバーク。遠藤と井上はC2へ戻ることに。ビバーク隊は1時間ごとにC1（蛭田、山本）とシーバー交信としたが、恩田の体調も安定、無風快晴のため、21時に打ち切る。

3月18日　晴　恩田をC2に収容

全員がビバーク地点を目指す。遠藤は真っ先に、また井上は途中の支点を確認しながらそれぞれビバーク地点へ。アイスバイルやテーピングテープで恩田の足を登山靴の上から固定し、8:00ごろビバーク地点から松原と遠藤が恩田を安全に降ろし始める。2ピッチ降りたところで、井上も合流。けが人は上からザイルで確保だけして、フィックスロープを使って自力で懸垂下降させる方法で降ろす。しかし途中で足の痛みを訴え出したため、メンバーが恩田を背負っての下降に。蛭田、山本も合流し、5人で交代に背負って17:00、C2着。

3月19日　快晴　恩田をC1に収容

この日は井上のザックを背負いシートに改造して恩田を背負って下降。8ピッチ下ったところで、C1から来た蛭田、山本が合流。遠藤、井上は救助を引き継ぎ、C2へ戻る。けが人を運ぶ隊員は、フィックスロープのない場所に新たにロープを張ったり、腐った雪の上でけが人を乗せたマットを引っ張ったりと、苦労する。

3月20日　快晴のち霧　恩田をBCに収容　全員BCに下山。

C2から遠藤、井上がC1に合流し、8:00に全員で下降開始。雪の斜面なので、恩田をあおむけに寝かせてツェルトにくるんで降ろすことにする。毎年雪上訓練で行ってい

た搬送訓練がここで役に立ったと井上。恩田も非常に快適だという。上で確保する2人が5本のロープをつなぎ足してどんどん降ろす。傾斜が緩くなり雪が少なくなってきたところで、こんどは交替で恩田を背負う。ガスった平原を突っ切って無事BCへ。阪大隊のFさんが医者の卵ということで、恩田の足を診てもらう。登山活動はここで終了だが、フィックスロープ回収の問題が残り、夜、全員で話し合う。意見は割れたが、最終的に出発前の方針に反して全ロープを残置することに。

3月21日　晴のち霧　BC休養

全員BCにて救助のヘリコプターを待つが来ず。

3月22日　晴のち霧　ヘリコプター到着、荷物回収

8:00、BCでのんびり朝食をとっていると突然爆音とともに上空からヘリコプターが姿を現しBCに不時着。大慌てで恩田と、付添いの遠藤、蛭田が乗り込み、1時間半でカトマンズに到着。残る松原、井上、山本の3人が、撤収のためC1へ。BCを出ると、辺りを覆っていたガスが晴れ、登山開始時は雪面だったところが、うっすらと緑がかった植物で埋め尽くされていた。「二十日間もいたんだもんなあ」と山本。この日はC1泊。

3月23日　晴　荷物回収

驚くほど風が強い。3人でC2へ登り返してテントなどを回収。燃やせるものは燃やす。下ってさらにC1の荷物も回収。パッキングするとザックが巨大に膨れ上がり、背負って降りるには危険すら感じる大きさに。今まで歩いていた雪渓上のルートは春のせいか水が流れ、ところどころ踏み抜いてしまう。一度ハマるとザックの大きさや重さで、かなり悲惨な状況に陥る。日が暮れたころ、ヘロヘロに疲れ切った身で這うようにBCに到着。登山活動終了という感傷を全く許さないシビアな幕切れだった。

3月24日　晴　BCにて帰る準備

3月25日～26日　BC～ルクラ

松原、井上、山本が帰りのキャラバン。下界の村に戻ると、畑の萌黄色が目にまぶしい。路傍に色づく桃の花や、麦や柳の新緑に迎えられつつ、ルクラにてキャラバン終了。

3月27日　ルクラ～（ルクラ・フライト）～カトマンズ着

（以下、1988年度下半期報告書より）「ルクラにて、山田昇遭難か？の報に接し、カトマンズに着いて馬鹿食い

した後、ビールの酔いも覚めやらぬうちに、法政大（筆者注：リーダーの松原が所属する法政大学山岳部のパーティーが同時期に同じヒマラヤのランタン・リルン峰で雪崩に遭い３人死亡）の遭難の報せを受け、何がなんだかわからなくなってしまう。人の死の報せなんて、酔っている時に受け取るのこそ相応しいのかもしれないなどと思いつつ、シャワーで１か月の汚れと酔いを洗い流す。日本の夏の昼下がりを思わせるカトマンズの空気の中で、ただただこのシャワーは気持ちの良い、清涼感溢れるものだった」

（参考資料）

日本山岳会学生部　「年報８」
一橋大学一橋山岳部　「１９８８年度下半期活動報告書」



渡辺九郎（昭和３年卒）
『針葉樹』第２号より

秘峰カカボラジ偵察隊
半世紀の思いを繋げて

引地　真

『岳人』１９９５年7月号（Ｎｏ．５７７）

時代は移り、夢は目の前に

「ビルマ（現ミャンマー）の最高峰は、ヒマラヤ山脈の東端、ビルマ、中国とインドの3国の国境が交わる付近にあり、未だ誰にも登られていないという。それどころか、その姿を確認した人すら少ない」。そんな話を今から20年近く前、大学の山岳部に入ったばかりの頃、若手のＯＢから聞いたことがあった。

そんな記憶などとうに薄れてしまっていた昨年、「ミャンマー最高峰の登山許可が取れるかもしれない」という話が飛び込んで来た。一橋大学山岳会の大先輩である中村保、中島寛、倉知敬が他のＯＢ達と画策して、何やらミャンマー政府に対して工作をしていたらしい。この3人はいずれもそうそうたる大企業の重役ではあるが、山登りに関しても現役バリバリであり、おもしろいプランを考え出しては、20歳以上も若いわれわれをいつも叱咤してくれるありがたい人たちだ。

そもそも一橋大学山岳会が、この山に目を付けたのは、今から20年前に遡る。当時山岳部の学生であった前神直樹と藤本敏行は、深田久弥の『ヒマラヤの高峰』を読み、このビルマの最高峰に登ってみようと思った。2人は、当時のビルマ軍事政権に登山申請を送りつけ、許可を求める交渉を行おうと、ラングーン（現ヤンゴン）まで出掛けた。当時のビザの許される最長期間の一週間、彼らはラングーンに粘ったが、結果はナシのつぶてだった。当時のビルマ政府には、外国人登山隊を受け入れるなどという考えは、まったくなく、彼らの登山申請を受け付ける窓口すらなかった。それ以来、同じ山岳会の仲間たちは、北部ビルマ地域への神秘の扉を開くことをずっと考えていた。

時代は移り、１９９０年代に入り、アジア各国は目覚ましい経済発展を遂げてきた。中国やベトナムまでも外国人に大きく門戸を開いた。ミャンマーも少しずつ開放政策を取り入れつつあった。一方、山岳会のＯＢたちは企業戦士となって、アジアを駆け回った。昨年、中村保がヤンゴンを出張で訪れた時、ビジネスの話が終わった後、相手に山の話を切り出してみた。その反応は意外にもポジティブだった。それをきっかけにミャンマー政府との交渉は始まった。その時の現地ビジネス・パートナーはそれ以後、われわれの現地代理人となって、登山隊の大きな力となってくれた。

われわれの計画を、一橋大学山岳会の重鎮である吉沢一郎、望月達夫両先輩に話したら、「その山は僕たちも、戦前に狙っていたんだ」とおっしゃった。なんとこの山は、一橋の岳人にとって、60年来の恋人だったのだ。

『ビルマの氷の山』を頼りに

さて、登山許可は何とかなりそうだったが、実際に登山のタクティクスを考えた場合、あまりにも資料が少なかった。手に入れることのできた唯一の資料は、イギリス人植物学者キングドン・ウォードの『ビルマの氷の山』だけだった。この本は、１９３７年の北部ビルマの植物採集行の記録であり、その中で、彼はビルマ最高峰に最接近し、登路を精力的に探っている。キングドン・ウォードは、山の南面のガムラン谷から登路を探したが、「高差１０００ｍの急峻な岩壁、その上部に尖塔、胸壁がそびえている」ため、「南面からは頂上に達することは不可能である」と結論づけている。50年以上も前に、登山家ではない彼が、ピッケルもロープも持たずに出掛けた探査行から得た判断を、われわれは素直に信用できるとは思わない。また、その本には黒い岩壁がそそり立ち、氷河がなぎ落ちている写真があるが、ピークの位置ははっきりしないし、雲がその輪郭を隠している。これが、本当に目指す山の写真かどうか確信は持てない。かといって、それ以上の情報は全く手に入れることはできなかった。何度も集まって、いろいろ考えても、結局は「行ってみないとわからない」ということになるだけだった。とりあえず、第一段階として、まず偵察隊を出そうということになった。

「2月がベスト・シーズンである」というヤンゴン政府の受け入れ窓口からの情報に基づいて、95年2月から3月に偵察隊を出し、本隊は95年12月から翌年2月にかけて出そうという計画を作った。偵察隊のメンバーはＯＢ1人に現役学生2人の合計3人とした。

出掛ける前に、この山の名前も問題になった。ミャンマーで発行されている地図では、〝Hkakabo Razi〟と表記されている。三省堂発行の「コンサイス外国山名辞典」では「カ・カルポラジ」の注釈を入れて「カカボ・ラディ」としている。一方、キングドン・ウォードはこの山を〝Ka Karpo Razi〟と書いている。チベット・中央アジア研究家の金子民雄氏は、正しくはチベット語の「白い雪の峰」を意味するカ・カルポ・リが、現地で混乱したため、ハカカボ・ラジとなったのだとして、キングドン・ウォードの呼称を採用し、「カ・カルポ・ラジ」と記している。今回、われわれが現地にて確認したところ、ミャンマーの人たちは、「カカボラジ」と確かに呼んでいた。ラワン族の人たちによると、「カ

カボラジ」とは、ラワン語であって、喜びの声がする山ないしは、にぎやかな山という意味だそうである。その名称は、2人の猟師兄弟の伝説に由来するものだという。

一番悩まされたのは天候

2月5日、ヤンゴンに到着した。翌日早朝、お経を唱える声に目を覚まし、表に出ると、街のランドマークであるシュェダゴンパゴダが金色に輝いていた。敬けんな仏教徒の国であり、心穏やかで親日的な人々が多いという話をあらためて思い出していた。しかし、現実はそんなセンチメンタリズムとは無縁の厳しいものだった。各方面の政府関係者へ付け届けを贈り、最終協定書の交渉に臨み、山登りの開放感とは正反対の交渉事と手続きを次々とこなした。ミャンマー人も、なかなかの交渉上手で、プライドが高い。その間、並行して食糧や装備の買い出しを行った。モノ不足ではないかという事前の心配とは裏腹に、街の市場にはモノが豊富だった。しかも、値段は安い。


ラワン族の民族舞踊（プータオにて）


ラワン族のポーター（ナンカン付近）

10日、ヤンゴンを飛行機で発ち、カチン州の州都ミッチーナへ。空港で計った隊荷は約800キロになっていた。

12日、さらに飛行機に乗って、カチン州北部プータオに到着。ここはラワン族、リス族などの少数民族地域である。

14日、トラックでマッチャンボウまで。車の通れる道路があるのはここまで。このあたりの住民は、ほとんどがラワン族だ。彼らは敬けんなバプティスト派のクリスチャンだ。ここでポーターを集めて、徒歩によるキャラバンを開始することになった。登山隊の受け入れに慣れている所なら、スムーズにポーターを集めることができるのだが、ここではそうはいかない。まず、村の有力者のところに手土産を携えて行き、ご機嫌を取りながら事情を説明し、ポーター集めの協力をお願いする。村のボスの掛け声のもと、村人にポーターとして集まるよう頼み回らなければならなかった。

15日、朝七時ポーターが集まって来た。女性や少年の姿がほとんど。村の男は、川での砂金掘りの仕事や中国との交易に出掛けているため、いないという。彼らが手にしているのは、ネパールでもよく見る竹かご。ただ、そのサイズはネパールのものより小振りである。したがって、ひとりが担げる量も少なく、すべての隊荷を運ぶためには47人のポーターが必要だった。ポーターひとり当たり平均20キロ以下なのだが、それでも不満が出た。2日目には「ポーターが15人逃げてしまった」という報告があり、あわてて追加募集しなければならなくなった。「逃げた」といっても、荷物を持ったままいなくなるのではなく、その日の目的地まできちんと荷物を運んだ後で逃亡した。そのあたりは、ラワン族の律儀な性格の表れだろう。また、隊の最終目的地まで同じポーターが同行することはなく、たいていは比較的大きな村から村までお役御免となり、次の村で新たに別のポーターを雇わなくてはならない。とにかく、ポーターの確保については、以後ずっと悩まされ続けることとなった。隊員もポーター並みの荷物を担いで歩くことにした。

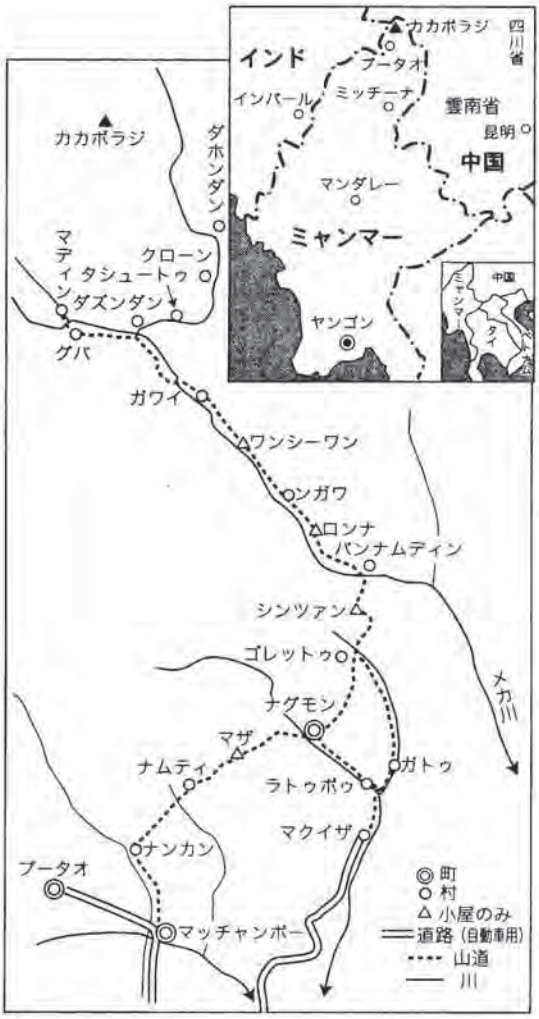
標高380mのマッチャンボウから歩き出し、途中17 50mの峠を越え、18日、ナグモン（標高500m）に到



ラワン族のガイド、
マン・ホン・ミン氏

着した。ここはカカボラジを含む地域を管轄する行政区域の中心地で、隊の最終補給を行うことのできる、比較的大きな町だ。ここでポーターを全て入れ替え、さらにラワン族ハンターをガイドとして雇った。彼はガイド役として申し分のない働きをしてくれただけでなく、地元の有力者でもあり、ポーターの統率の面でも隊に大いに役に立った。

だんだんキャラバンの生活にも、この国のペースにも慣れてきたが、われわれを最も悩ましたのは天気だった。もともと、このあたりの天候が悪いことは覚悟していたが、実際、毎日雨が降った。雨が降っていない時でも、厚い雲がいつも空を覆っていた。太陽を見ることは、めったになかった。深い樹木に囲まれたジャングルの中を、雨に打たれ、ぬかるみに足を取られ、泥だらけになり、まわりの展望がきかない道を何日も重荷を背負ったままひたすら歩き続けた。思えば「2月がベスト・シーズン」といっていたヤンゴンの役人は、一度もこの地域に足を踏み入れたことがないのだ。確かにこの時期、ヤンゴンは乾期で一年で最も過ごしやすいのだが、こちらのラワン族の村人に言わせると「こんな天気の悪い時期に、どうして山登りにやって来たのだ。この時期は毎日雨ばかりだよ」とな





ジャングルの中を進む



籐ツルと竹でできた吊橋

る。さらに、泥道を歩いていると、ヒルが襲いかかり、血を吸う。毎日、目的地に着くと、火を焚いて、漏れた血に染まった衣類を乾かすのが日課になった。日本に戻ってから、衣類を整理していると、煙にいぶされた燻製の臭いがした。

多くの情報を得た偵察行

23日、歩き始めて9日目、イラワジ川の2本の源流、マリカ川とメカ川のふたつの水系を分けるワイビーラジの峠（1700m）を越えた。キングドン・ウォードの本によると、この峠は標高2000mとされており、「晴れていれば、ここからナムタマイ川（メカ川）とタロン川（中国側）の分水嶺の大きな山群が望めるはず」なのだが、雨のなか、まったく展望はなかった。

28日、歩き始めて2週間、アドゥン谷とサンク谷の合流点の村ダズンダンに着いた。標高2150m。キングドン・ウォードの本によると、「ここまでは、馬で来ることもできる」と記述されているが、実際に馬が通れたのは、ナグモンからわずか2日の行程までだった。当時に比べて、道の状況は悪くなっているらしい。ラワン族ガイドによると、イギリス領時代は政府により、定期的に道の修理が行われていたが、今は村人が自分たちで必要な修理を行うだけだという。村人たちの力だけでは、大掛かりな工事はできないから、土砂で道が埋まったり、橋が流されたりしても、応急処置だけしかできない。村人が架けた、籐ツルと竹だけで作った橋は、滑りやすいだけでなく、いつ腐って落ちるかもしれず、渡るのは容易ではない。

われわれの当初の計画では、アドゥン谷を遡り、キング

ドン・ウォードが見ることがなかったカカボラジの北東面に入り、そこから本隊での登路を探ることが目標だった。われわれが日本出発前に聞いていた情報から、往復のキャラバン日数を30日とし、3月末までには帰国する予定でいた。ところが、ミャンマーに着いてから、往復に最低44日は必要だと分かった。そうなると、そんなに長い間勝手に日本を離れていては、職を失うかもしれない隊員がでてきた。そこで、われわれは当初のルートを断念し、アドゥン谷ではなく、サンク谷へ進路を向けた。サンク谷経由カカボラジ南面を経て、中国へ抜ける交易路があり、夏には村人が往来しているという。カカボラジを見ることのできる地点までの最短ルートがそこだという。プータオの軍の施設で見た手書きの地図でも、カカボラジへのアプローチは、サンク谷から北へ尾根を越えて進むものだった。限られた日数の中でカカボラジを一目見て帰ろうと、われわれは本流のアドゥン谷ではなく、サンク谷の道を辿った。

3月2日、サンク谷最奥の村、マディンに到着した。歩き始めて16日目、何とラッキーなことに、この日は初めて空高く澄み渡る晴天となった。谷の正面奥、そして谷の両側には雪をかぶった山がぐるりと見渡せる。見たところ4000mクラスの山のようだ。いままでの苦労を忘れて、太陽の光を浴びながら草の上に寝転んだ。

マディンから先には村はない。中国に通じる道はあるが、冬季は深い積雪のため歩く人はいない。われわれは、それまでよりも細くなった道を辿って、谷の奥へと進んだ。川を何度も渡るが、ちゃんとした橋などはない。標高2170m地点で、ガイドが、これ以上進むと、雪が深く、雪崩の危険が多いという。その日の晴天は半日で終わり、すでに太陽は雲に隠されていた。いつもの悪天候が、もう戻ってきていた。これでは、たとえ危険な雪の斜面を登り、目標の峠まで到達できたところで、カカボラジの姿を見ることは無理だろう。われわれはガイドの忠告に従って、それ以上前進することをやめた。偵察隊として、山の姿を見ることすらできずに引き返すこ



マディンの周囲の雪山のひとつ

とは、このうえなく残念なことだった。

今回の偵察では、山の姿を見ることはできなかったが、周辺の様子はかなり分かった。日本出発前には、人跡未踏のジャングルと深いゴルジュは踏破できるだろうか、さらには反政府ゲリラの襲撃まで心配していたのだが、実際には、そのような困難はなかった。カカボラジ周辺は、動植物が豊富であるため、ラワン族やチベット族のハンターや薬草採りが、かなり山奥まで歩いている。彼らの獲物は、多くが国境を越え中国に運ばれ、生活用品と交換されている。そのため、道は明瞭で、いつ腐って切れるかもしれない竹の橋を渡る恐怖を除けば、技術的困難はなかった。治安も表面的には安定しており、身の危険を感じたりすることはなかった。

問題の天候については、「8月から9月がいい」という地元の村人のアドバイスに従って、初登頂を目指す本隊は、今年8月に日本を出発することにした。

われわれと同時期に、尾崎隆氏とフランス人登山家もカカボラジの偵察に来ており、山中でそれぞれすれちがった。50年も外国人が来なかった場所に、急に続けて3チームも外国人が来たものだから、地元の人たちは、さぞ驚いたことだろう。

（1995年4月記）



チベット族の民族衣装を着た古田隊員（マディンにて）

＊その後のお話し＊

上記にもあるとおり、僕たちは、この年（1995年）の8月に登頂を目指す本隊を出そうとしていた。しかし、隊員の個人的都合でそれは不可能になった。

同時期に偵察に来ていたプロ登山家の尾崎隆氏は、この年8月に挑戦を行ったが失敗。それを見て、僕たちは翌年の登頂を目指してミャンマー政府と交渉したが、条件面で折り合えず、登山隊の派遣を断念した。

一方、尾崎氏は翌年（1996年）2度目の挑戦を行い、9月15日にミャンマー人メンバーとともにカカボラジの初登頂に成功した。

（編集子注）

1．本偵察行の正式報告書『一橋大学山岳会カカボラジ峰登山隊偵察隊報告書』が筆者によって１９９５年４月に纏められ、関係者へ配布された。
　なお、同報告書は一橋山岳会ホームページに掲載されている。

2．中村保『ヒマラヤの東』（山と渓谷社　１９９６年）の「第11章　幻の山、カカボラジ偵察行（１９９５年）」に本偵察隊派遣の背景、経緯、偵察隊の行動記録が記述されている。



『針葉樹』第８号より



渡辺九郎（昭和３年卒）
『針葉樹会報』第62～69号より

ブータン・ヒマラヤ５７２７ｍ峰

宗像　充

【参加メンバー】宗像、蛭田（早稲田大）、栗谷川（法政大）、榎並（慶応大）、長岡（関西学院大）、小林（駒沢大）、山梨（東海大）

【期間】１９９８年10月7日～11月7日

この登山は１９９８年度に日本山岳会学生部が実施した海外遠征である。７大学７人の有志が参加し、一橋から当時４年生の宗像が参加した。

(1)キャラバンまでの行動概要

10月3日　成田―バンコク
10月4日　バンコク―パロ―ティンプー
10月5日　あいさつ回り、準備
10月6日　ティンプー―タシタン

(2)キャラバン

10月7日　晴

タシタン発(9:00)―コナ・チュー(9:30)―１７２０ｍ(9:40～9:50)―１７７０ｍ(9:50～10:20)―１８５０ｍ(10:30～11:15)―チョゾン(11:50～12:35)―２１１０ｍ(12:45～13:20)―タムジー入口(13:55)―タムジー(14:20)

馬を待つために出発が遅れる。近くに住むネパーリの子供達にさよならを言ってキャラバンが始まる。吊り橋を渡りすぐに車道は終わり、黒部の水平歩道のような道を時々牛や馬に出会いながら歩を進める。うっそうとした森の中ではシダ類が多い。道がぬかるんでいるためか時々靴に蛭がくっついているのに気づく。途中に家もなくストゥーパが現れると稲穂が垂れた棚田が拡がり、タムジーの集落が現れる。小学校の前の広場がテントサイトだが馬が来ないので小学校に遊びにいってみた。半分くらいがゴやキラを着ていて、他の子は洋服を着ている。子供達は2～3時間ぐらいかけて通学してくるらしい。小学校の中にも家族計画のポスターが張っているのには驚いた。自給自足のこの国で人口増加は深刻らしい。

10月8日　曇時々雨

タムジー発(8:45)―9:15 ギャザ(9:15)―２５４０ｍ(9:30～10:40)―ガサ手前展望台２４１０ｍ(11:00)―Zamizam Bridge(11:40)―ガサ温泉(２２５０ｍ　12:15～15:00)―ガサ(２８１０ｍ　16:45)

タムジーを出たところにあるストゥーパからもう遠くに

ガサのゾンが見えた。最初の休暇を取った。広場から遠くに雪山が見える。形からしてツェンダカンらしい。時々、馬を連れて街へ出掛けて行く人に出くわす。まんが日本昔話のような世界がここでは展開されている。

橋を渡り、ガサに直接向かわず、温泉につく。露天風呂が幾つかあり、混浴で、女はスカートのようなもの、男はパンツをはいたまま入浴する。昼食後、2時間ほどかけてガサに着く。

道を間違えてたどり着いたガサ・ゾンは他のゾンに比べると小さいがいかにも要塞らしくがっしりしている。ガサの広場の周辺にはバーと雑貨屋が一緒になったような店が6、7軒あり、どれもたいして変わりないが、一軒だけ電話がある。この辺りの行政の中心だけあって、中学校や女学校もある。ただ、ブータンでは紙を燃やしてはいけない習慣があるためか、周囲は結構ごみが散らかっている。タムジーを過ぎた辺りから畑作にかわっていたが、家の作りも2階建ての大きなものから、平屋の簡素なものへと変わっているようだ。

興味津々で子供達が周りをうろちょろしている。

10月9日　曇

ガサ発(8:30)―３０００m(9:30〜9:40)―３４００m(11:05〜11:15)―３６６０m(12:15〜12:25)―３６８０m(昼食　12:30〜13:00)―ペレ・ラ(３７７０m　13:20)―３６１０m(14:15〜14:30)―コイナ(３２４０m　15:35)

ガサは霧の中だった。本日戻っていく吉永さんに葉書やらをたくし、出発。今日はキャラバン中もっともハードな行程だそうだが、さすがに馬も通る道だけに上がり一辺倒なものの、さくさくと上がって行ける。ただし、視界は効かないモノトーン。竹やブータンの国樹糸杉が生えている。峠は手元の高度計では富士山ほどで、その後は単調なみちを快調に飛ばしてコイナに着く。石積みの小屋は汚く、天井も空いているため、雨が降ってきたので小屋の裏手の水捌けのようくない所にテントを張って寝る。夜、蚤に悩まされるもの数名あり。

10月10日　曇時々雨

コイナ発(8:30)―３２２０m(9:40)―川岸の岩小屋(9:50〜10:55)―３２５０m(11:35)―Tongshi Zam(モ・チュー徒渉点　11:20)―Tsathami Zam(ロゾフ・チュー徒渉点，昼食 11:40〜12:25)―３３６０m(12:50〜13:00)―タシマカン(14:10〜14:30)―Chorten Gang次のピーク４０００m(15:40)―タシマカン(17:00)

しとしとと雨の降る中でのキャラバンとなる。黒部の渓谷のようなモ・チューの右岸を上がり下りしながら歩く。モ・チューの川岸に下り着いたところでオーバーハングした岩壁があり休憩とする。キャラバン中、このような岩小屋が要所にあり、旅人の一夜の宿となるらしい。ロドフ・チューを渡るところで昼食とする。昼食にはパンやジャガイモ、チャパティーなどがでてくるが、長旅と湿気でパンにはカビが生えていた。2時間ほどで軍隊の駐屯地があるタシマカンに着く。すぐに、川を渡った所にある裏山に高度順化も兼ねて登りにいってみた。だいたいこの辺りはヤクの放牧地になっているらしく、でっかいヤク数頭とラヤッパの少年が一人いた。ちょうど４０００ｍのピークにたった後、タシマカンに戻る。実際は川の上流にあるオールド・タシマカンのことをタシマカンと言うらしく、ここいらの人はここのことをタクシカと呼ぶらしい。

10月11日　晴のち曇時々雨

タシマカン発(9:10)―Tsachuphogi Chu 徒渉点(9:25)―ストゥーパ３５６０ｍ(10:05～10:15)―ラヤ３７６０ｍ(10:50～13:00)―タシマカン３３８０ｍ(14:30)

腹の調子の悪い小林と榎並を置いて、残りのメンバーで高度順化も兼ねてラヤに観光に行くことにする。徐々に高度を上げ、村の入り口の門のところまで来て振り向くと、ツェンダカンが雲の上に現れた。

ラヤは大きな家から小さい家まで整然と並んでいる。60軒ほどが立ち並んでいるらしい。ここの女性はチベット風の黒っぽい民族衣装に竹で編んだ帽子をかぶり、独特の格好をしている。ただし、靴は革靴で、おそらく日本から来たであろうジャージを上着としてだいたいみんな着ている。男性はゴを着ている。村の中をうろちょろする。取り入れの季節らしく、脱穀作業をしていた。子供も馬を引いたり、忙しくはなさそうだが、みんな何かしら仕事をもっているようだ。一軒の家におじゃまして、スジャ（バター茶）とバンチャという酒をいただいた。酸味が強く、たいていのものを食っても大丈夫だった長岡が撃沈していた。タシマカンに戻り、蛭田たちが兵隊とバレーボールをしていたが、一般にここの兵隊は暇そうだった。

10月12日　曇時々雨

タシマカン発(9:10)―分岐(9:40)―３４８０ｍ(10:10～10:30)―３６７０ｍ(11:15～11:30)―３８００ｍ(昼食12:40～13:30)―４０５０ｍ(14:50～15:00)―ロドフ橋４１１０ｍ(15:30)―ロドフ(15:40)

ここからヤクのはずだったが、結局馬になり、それも到

着せぬまま出発。一昨日来た道を途中まで戻り、分岐から急坂を上がってロドフ・チュー沿いの道に入る。崖沿いの険しい道をしばらく行くと針葉樹帯となり、やがて川が広がり平原となってロドフに着く。あいにく天気が悪く、正面に見えるはずの山が見えず残念。タシマカンとはうってかわって非常に寒く、毛下着を着込む。橋から二番目の小屋の前をテントサイトとする。明日からは偵察なので夜はしっかり打ち合わせをする。多少頭痛がするもの数名あり。

10月13日　曇時々雨（偵察）

蛭田・小林・山梨・カルマ＝ツォミ・ラ方面
宗像・榎並＝ロドフ・チュー右股
栗谷川・長岡・ツェリン（オーガナイザー）＝ロドフ・チュー左股

ロドフ・チュー右股
ロドフ発(6:30)―ＢＣ予定地４２００ｍ(7:20～7:30)―モレーン末端４３２０ｍ(8:00～8:10)―４４００ｍ(9:00～9:10)―４５１０ｍ(10:00)―４７００ｍ(昼食11:00～11:30)―４４００ｍ(13:00～13:10)―ロドフ(14:00)

宗像、栗谷川、長岡、榎並の４人でロドフ・チュー方面の偵察に向かう。ロドフ・チュー方面からの登山活動が可能ならば、ナリタン方面には移動せず、ロドフをＢＣにするつもりだ。モレーン上に上がると霧が晴れ、ツェンダカン東峰の白い姿と５７２７ｍ峰の姿が現れた。ここから見た限りでは北稜が何とかなるのではないかという気はする。

モレーンの上には氷河湖があり、ここで北稜方面に谷を詰める栗谷川、長岡と西稜方面の宗像・榎並とで隊を分ける。栗谷川らと別れ、西稜方面にあるバンドによじ登ろうとしたが、ここがガレガレの急傾斜で登るのに苦労する。

登り着くとバンドの縁だと思っていたところは尾根になっていて、その向こうにこじんまりとした谷間が広がっていた。その尾根づたいに登っていくと西壁の基部になり、北稜方面にはバンドが続き、南面には南稜であろう尾根が延び、小さいが氷河も見える。西壁を南に回りこもうとしたが、時間なのでスケッチをして引き返す。

この辺りにはＢＣを設営できそうな原っぱがある。尾根のこちら側を下りる。所々小さい草原が広がり、せせらぎが非常に美しい。やがて流れはふたたびモレーンからガレた石の間をこぼれ落ち、ロドフへと至る。対岸に戻るのに苦労した後、テントサイトに帰りつく。夜、カルマさんの話だと、馬もヤクもモレーンの下までしか行くことができ

ず、それから先は人が運んで荷上げするしかないらしい。いずれにせよ、もう一回偵察してみて登路を確認し、ＢＣ適地を探さねばならないだろう。ツォミ・ラ方面はあまり成果はなかったらしい。バンド先の北稜基部に望みをつなぐ。

10月14日　晴のち曇

宗像・山梨・カルマ＝ロドフ・チュー右股
蛭田・長岡・ツェリン＝ロドフ・チュー左股（右岸）
小林・栗谷川・榎並＝休養

ロドフ・チュー右股
ロドフ発(6:20)―４７００m引き返し点(11:50～12:15)―ロドフ(15:40)

当初は全員でロドフ・チュー方面に偵察に行く予定だったが、栗谷川・小林・榎並と次々と体調不良で引き返し、結局４人で偵察に向かう。モレーン末端で蛭田・長岡と別れ右股に向うも、なかなか徒渉ができず、かなり上流でやっと尾根によじ登る。バンドの取り付きのところに荷物を置き、カルマさんを昨日ＢＣによいと思った所に案内し、そのまま少し引き返してバンドを見に行く。バンドとはいうもののかなり幅は広く昨日の谷間同様、非常に美しい所である。下り着いたところはＢＣを置けそう。

ここから対岸の蛭田達と交信。今まで頂上と思っていた西稜の頭にあたる墓石ピークは頂上ではないこと、頂上直下にある雪のバンドがルートにできそうなことを告げられる。

しかし、ここからすぐ背後にそびえるピークはとても雪のバンドをルートとして選べそうにない。さらに、バンドを遮る形で５７２７m峰方向から延びる小尾根にはいあがる。その向こうには氷河湖があり、そこに向かった氷河が垂れる。北稜への登路として考えられる、ツェンダカン東峰との間の氷河に突き上げる水流の基部までは楽に歩いて行けるであろう事を確認できたので引き返す。

山梨は高度でかなり弱っている。カルマさんがバンドからロドフ・チュー本流（左股）へと下りるガレ場をすたすたと下りて行ってしまったのでしかたなく付いて行ったのが失敗の始まりで、やがて川岸が迫り、氷河湖の徒渉を余儀なくされる。昨日登って来た道をたどり、ロドフに着く。

夜、明日はモレーン下の奥の小屋までテントサイトを移動し、そこをＢＣとしてさらに翌日バンド上、氷河湖のほとりにＡＢＣを上げることに決定。

10月15日　晴のち曇

8:00起床　9:00朝食

栗谷川・榎並＝右岸の裏山へ偵察

蛭田・宗像・長岡・小林・山梨＝休養日

さすがに連日の行動で全員疲れがたまってきたようだ。バッチリ天気がいいので５７２７ｍ峰が良く見える。昨日休んだ栗谷川・榎並は裏山に南稜の様子が見えないかどうか偵察に行く。栗谷川らの報告によると、やはり５７２７ｍ峰のピークは西稜の頭ではなく、その奥にあたる北稜の頭らしい。

夜、ルートを北稜に絞って登山活動を始めることに決める。南稜の可能性もあるが、余裕があれば偵察を出すことにする。

10月16日　晴のち曇時々雨

ロドフ発(9:30)―モレーン下ＢＣ(10:20～13:50)―バンド取り付きデポ地点(15:40～15:50)―ＢＣ(17:40)

ＡＢＣを氷河湖のわきに上げるために、ロドフの平原の一番奥の石小屋、つまり、モレーンの直下に設営することにする。馬が入れるのはここまで。ここまではすぐ着くので、遅れく起きて歩いていく。振り返ると、ロドフを挟んで５７２７ｍ峰と反対側にチョモラーリが見える。ＢＣに設営を終え、ゆっくりしていたが、結局我々もスタッフと一緒に個人装備の荷上げをすることになる。右股には丸木橋も架けられて整備され、順化もうまくいっているのでバンド取り付きのデポ地点までは快調に歩けた。明日はここからさらにバンド上まで荷上げをする予定だ。キャラバンの最初の方からずっと腹の調子の悪い小林はＢＣに居残りだった。

10月17日　晴のち曇

宗像・長岡＝ＢＣ→ＡＢＣ→氷河舌端まで偵察

蛭田・栗谷川・榎並・山梨＝ＢＣ→ＡＢＣ

小林＝ＢＣ

氷河舌端までの偵察

ＢＣ発(9:05)―デポ地点(10:50～11:30)―ＡＢＣ(12:50～13:15)―氷河取り付き(14:20)４９００ｍ(14:35)―ＡＢＣ(15:15～15:20)―荷上げ―ＡＢＣ(17:00)

本日ＡＢＣ設営。蛭田・宗像・長岡がさらに偵察をするために先行する。昨日のデポ地点までサブザックで行くが、個人装備をそのまま上げるのはかなり苦しいと判断して、宗像・長岡はそのままサブザックでバンドに向かう。蛭田のみメインザックに荷物を満載して出発。

この間のバンド上の尾根からＢＣ適地を探すが、あまりいいところはないようなので、いったん湖岸に下り、もう一度湖岸を上がりかえしてコルに出ると氷河から流れ落ちる水流の基部はちょっとした平地が広がっている。ここをＡＢＣとすることにする。

宗像・長岡はそのまま氷河への上り口を探すために偵察に向かい、蛭田は場所を知らせるために引き返す。水流通しに登ることも考えられたが、ＡＢＣから見て左の岩壁沿いの土のリッジを選ぶ。リッジは途中左側が切れ落ち悪いが、難なく登って行ける。途中から岩壁基部を右にトラバースし、石ころだらけのところを氷河に向かって進む。ガレ場をたどり、右の凹部を進み、簡単に氷河に達する。ロープなしで氷河まで来れることが分かり、目的を達したので引き返す。長岡は少々頭痛がするようだ。

途中、交信でタブルボッカを言いつかり、ＡＢＣから空身でバンドへと引き返す。栗谷川と合流し、小尾根に登り返した所で蛭田、榎並とスタッフに会う。長岡、榎並の個人装備を交替で持って上がる。ＡＢＣの位置を予定よりも奥に設定し、スタッフへの説明も十分ではなかったので、ＡＢＣ入りはくたくたになった上、夜も食料がなかなか上がってこず、暗くなってからスタッフが往復して持ってきてくれた。スタッフはバンドに引き返し、岩舎の下で泊ることになった。

⑶登山活動

10月18日　晴のち曇

宗像・山梨＝ＡＢＣ→５０５０ｍ→ＡＢＣ（ルート工作）
榎並・長岡＝ＡＢＣ→５０００ｍ→ＡＢＣ（サポート）
蛭田・栗谷川＝ＡＢＣ
小林＝ＢＣ

ルート工作およびサポート

昨日消耗した蛭田と装備の整理をする栗谷川を残してルート工作に出発。ただ、他のメンバーも疲れているので出発は遅れる。氷河までは昨日のとおりに上がる。いよいよ、アイゼン、ピッケルをつけての本格的な登山活動になる。タイトロープを組み、氷河上ではアイゼンはさくさく決まるが、疲れと高度で足取りは重い。氷河は下から見るよりも大きく、しばらく平原上の所を直上した後クレバス帯となる。後ろのほうでは榎並・長岡が赤旗をたてながらついてくる。クレバス帯を右手の北稜へ続くであろう斜面を目指して縫っていく。ようやく斜面の取り付きまできて、斜面上のコルを目指して登って行けるかと思ったら目の前にクレバスと雪壁が出てきた。フィックスを張ろうかと

ロープを出すが、荷上げに往復するには不向きと判断して、時間もきたのでギア、フィックスをデポして榎並、長岡と合流して引き返す。下りはあっという間にＡＢＣに着いた。夜、雪が降る。明日の行動が心配だ。

10月19日　曇時々雨

蛭田・栗谷川＝ＡＢＣ→ＨＣ予定→ニードル基部→ＡＢＣ（ルート工作）
宗像・榎並・山梨・長岡＝ＡＢＣ
小林＝ＢＣ

本日休養。蛭田と栗谷川がルートを延ばした。目標の山はかなり厳しいらしい。

10月20日　雪のち曇

蛭田・宗像・栗谷川・榎並・長岡・山梨＝ＡＢＣ
小林＝ＢＣ
ＡＢＣ（停滞）
5:00 起床

朝、起きると雪が降り積もっている。積雪量5～10㎝くらい。なだれを警戒して停滞とする。午前中に雪も雨になりやがて止んでしまった。午後には雪も溶け、天候は安定しないものの明日は行動できそう。ＢＣの小林も明日はＡＢＣに上がって来れるらしい。

10月21日　晴のち曇

蛭田・栗谷川＝ＡＢＣ→ＨＣ
宗像・榎並・長岡・山梨＝ＡＢＣ→ＨＣ→ＡＢＣ
小林＝ＢＣ→ＡＢＣ

ＨＣへの荷上げ
ＡＢＣ発(7:20)―氷河取り付き(8:20～8:40)―５０２０m(9:40～9:50)―５１４０m(10:45～11:00)―ＨＣ(５２７０m　12:15～13:15)―ＡＢＣ(14:45)

小林以外の全員でＨＣの設営に向かう。朝から調子がよくなく、荷物が異常に重く感じられる。晴天の下の氷河を蛭田たちが開いたルートをたどりながらゆっくりと登っていく。ＨＣ予定地についてようやく北稜の全景が望める。頂上直下はかなり立った岩塔であり、おそらくかなりの困難が予想される。そこを登っている自分の姿を想像して久しぶりに緊張する。

明日から工作に当たる蛭田・栗谷川を残して下山にかかる。壷足であっというまにＡＢＣへ。まったく、下りは早い。ＡＢＣにはオーガナイザー以下スタッフが上がってきていて、しばらくして小林もやってきて久しぶりの再開を

喜ぶ。

10月22日　晴時々曇

蛭田・栗谷川＝ＨＣからルート工作
宗像・長岡・山梨＝ＡＢＣ→ＨＣ
榎並・小林＝ＡＢＣ→ＨＣ→ＡＢＣ

ＨＣ入り
ＡＢＣ発(7:15)―氷河取り付き(8:15～8:40)―５０２０ｍ(9:35～9:45)―５１４０ｍ(10:55)―ＨＣ(12:00)
ＨＣに上げる荷物を持って昨日とほとんど同じ行程で登る。氷河上は日が照ると５月の雪山のようで薄着で登って行く。ＨＣに着くと北稜上で蛭田が工作をしているのが見える。もう一張りテントを設営し、水を作っていると蛭田たちが帰ってきた。

10月23日　晴のち曇時々雪

宗像・栗谷川＝ＨＣからルート工作
山梨・長岡＝サポート
小林＝ＡＢＣ→ＨＣ→ＡＢＣ
榎並＝ＡＢＣ→ＨＣ
蛭田＝ＨＣ→ＡＢＣ
ルート工作
ＨＣ発(6:40)―雪稜手前５３００ｍ(8:45～9:00)―岩稜帯手前引き返し点(12:45)―ＨＣ(15:00)
寝過ごし。手早く装備を分け、雪の斜面に飛び出す。昨日蛭田たちが張ったフィックスをたどって、ニードルの右をトラバースし、ガラガラの岩稜を下る。なるほど稜の左側は切れ落ちていてはるかに下に氷河が広がる。下に着いた所でギアがデポしてあり、さらにフィックスをたどって今度は左のバンドをトラバース。フィックスが終わった所で岩峰上に向かって宗像リードで20ｍフィックス。そこからは雪稜になり、サポート隊が来るのを待って、フィックスを受け取り、タイトロープでコルへと下る。足首からももくらいまでもぐる。主に稜の左側を交替で進み、コルからアイゼンも取ってしまい、稜線上に出る。やせ尾根だがもぐるので高度感はあるが緊張感はそれほどでもない。一か所雪壁状になった所があり、ひざラッセルでよじ登る。そこを抜けると再び岩峰になり、栗谷川リードで90ｍフィックス。ぼろぼろで全くうれしくない。頂上へと至る岩稜帯までナイフリッジを長岡、山梨にそれぞれフィックス１００ｍ分工作してもらう。頂上岩壁、その手前の岩稜ともかなり厳しそうで、シビアなクライミングを要求されそうだ。雲も出て時間も来たのでギアをデポして引き返す。

フィックスのアプザイレンや、スタカットも交え、雪稜の登り返しにへとへとになりながら雪の中ＨＣに帰り着く。

10月24日　晴のち曇

宗像・栗谷川・榎並・長岡・山梨＝ＨＣ

蛭田・小林＝ＡＢＣ

休養日。昨日の疲れもあり、ゆっくり起きる。ラジウスの調子は極めてよくない。昼過ぎにテントの前に車座になり、明日のアタックについてのミーティングをＨＣのメンバーでする。頂上直下の困難性を考えて、多人数よりも少数でのアタックを狙うことにする。したがって、宗像、栗谷川でアタック隊とし、山梨、榎並にサポートにあたってもらい、長岡は翌日以降のアタックに備えて温存のためテントキーパーをしてもらうことにする。蛭田から交信で了解を得、明日の出発を4:00とし、早々と寝ることにする。

10月25日　晴のち曇

宗像・栗谷川＝アタック

榎並・山梨＝サポート

長岡＝ＨＣ

蛭田・小林＝ＡＢＣ→ＨＣ

アタック

2:00起床(2:00)、ＨＣ発(4:05)―デポ地点(6:30)―最終到達点(10:30～10:40)―頂上岩壁手前のスノーピーク５４５０ｍ(11:20)―雪稜取り付き(15:05)―雪稜終了点(15:15)―ＨＣ(16:50)

満点の星空、絶好のアッタク日和だ。暗い中栗谷川とコンテを組んで出発する。いつもの通りフィックスをたどり、北稜上をヘッドランプの明かりを頼りに進む。雪稜にでると徐々に夜が白んできて朝日に照らされた山々が雲の上に姿を現し始める。再びコンテを組み、一昨日の古いトレースをたどって順調に歩みを進める。再び岩峰のトラバースになるころにはすっかり明るくなる。フィックスから目前の岩峰群そしてその先の岩壁へとロープを延ばすことにする。ここまでは予想より早く来ることができた。

まず、栗谷川リードで岩稜帯基部までの雪稜を終え、右手の岩と雪面とのコンタクトラインをたどる。コンタクトラインがちょっとしたバンドになっている。ビレーを始めたところで榎並が追い付いて来てロープを受け取る。スタカットでそのまま宗像リードでコンタクトラインを詰める。やがてバンドはの雪面はかなり急になり下の氷河までかなりの高度感を感じる。プロテクションにフレンズを岩に噛ませ、雪面に踏み出す。岩に雪がのっかっただけでだ

ましだまし登る。

稜線上によじ登り一息つく。3ピッチ目、栗谷川リードで稜上の3mほどのギャップを残し、岩峰の右基部を再びトラバース。榎並が来る前に栗谷川を追いかける。追い越してさらに右のトラバースを続けるが、前方は傾斜が急すぎ、悪そうなので稜線の左側を見るために再び稜線に登ってみることにする。キノコ状になった雪をじわじわと切り崩して足を一歩一歩上げる。コルへと上がってみると左側には雪のスロープがスノーピークまで続く。岩の棚を少し登って一段下り、岩角でアンカーを取る。稜線のこちら側は陽も当たり、時間も下がっているので暑いくらいだ。栗谷川はそのままランペを登って行き、スノーピークの頂上まで行って少し下りたところでアンカーを取った。

スノーピークから見た岩壁は取り付きとして考えられる所から100m以上の高さでほぼ垂直にそびえている。予想していたよりもはるかに大きい。二つの岩峰からなり、その間のルンゼ状のフェースから考えられなくもないが、上部はハングしている。稜通しではさらにかぶっていてリスもない。とにかく岩峰の基部までいってみることにする。スノーピークの右側面の雪面をコルに向かって下りる。この部分も悪く、こんなところばっかり順番が自分に来る。コルまで来て裏側を覗きこむが、すでに雪面ではなく、こをトラバースするのはかなり困難かつ危険な上に距離が長い。栗谷川をビレーして岩壁を視認してもらうが裏側も直登も極めて厳しいと判断し、敗退を言い交わす。スノーピークに戻り、HCに連絡を取る。

予想される危険に比べて、この岩壁の頭が頂上であるという保証もないのである。気持ちの整理ができないまま下山にとりかかる。稜上までスタカットで戻り、岩角にスリングをかけアブザイレン。その後榎並が張ったフィックス終了点まで来て再びアブザイレン。フィックスはなるべく回収するつもりだが、このピッチは急なので残すことにする。ただ、後半50mはロープを切って回収することにするが、栗谷川が通過した後、うかつにも宗像が切ったロープを落としてしまい、ノーロープで歩くことになってしまった。そこから先はサポート隊も手伝ってくれて回収する。雪稜までのフィックス90mも残置し、くたくたになりながら雪稜をたどる。残りのフィックスは明日以降の回収となるだろう。暗くなりつつなる中、ようやくテントが見えてきて、蛭田が出迎えてくれた。みんなを見ると、敗退ということを受け入れざるを得ないということを複雑ではあるが受けとめているようだった。

10月26日　曇時々雪

宗像・栗谷川・榎並・山梨＝ＨＣ→ＡＢＣ
蛭田・長岡・小林＝ＨＣ→フィックス回収→ＨＣ→ＡＢＣ

荷下げ

ＡＢＣ発(10:30)―氷河取り付き(11:20)―ＡＢＣ(12:20)

朝遅く起きると天気はあまりよろしくない。蛭田たちが回収に向かった後、ゆっくりと共同装備を整理する。頑張って重荷を背負う。久しぶりに通る氷河は溶けて大分地形が変わっている。疲れて重いし、ゆっくりとしか歩けない。氷河の下部は赤旗も倒れていて、ガスも出てきたので下り口を探すのに若干手間取る。取り付きでロープを持つとさらに重くなり、重荷でふらふらしながらもＡＢＣにたどり着く。

途中、蛭田たちも今日中にＡＢＣに下りることを交信で聞く。ＡＢＣに残る豊富な食料を使って暇をつぶしていたが、5:00の交信で蛭田たちから連絡がない。天気が悪いのでまさかと思って心配していると、10分ほどして上のほうから声があった。まず、ヘルメットに雪をつけた蛭田が現れた。ややあって長岡、小林も下りてきた。みんな疲れてはいたが、久しぶりにＡＢＣに全員がそろう。どうやら無事に下りるというもう一つの目標は達成できそうだ。

10月27日　晴

ＡＢＣ発(14:30)―バンド上のリッジ(14:50～15:00)―ＢＣ(17:00)

ロドフへとさらに荷下げ。昨日降った雪は朝のうち白く残っていたが、日が照るとほとんど消えてしまった。荷物、食糧の整理をしているとスタッフが3人上がってきて、結局今日一日でＡＢＣをすべて撤収することにする。ちなみにＡＢＣから見た敗退した岩峰はここからでは頂上とは思えず、まだ右のほうに高いところがあった。結局、頂上はどれなのか混乱するだけだった。よせばいいのに今日も重荷で、蛭田・栗谷川・山梨がさっさと先に行ってしまうなか、残りのメンバーでゆっくり休みながら下山する。

(4)登山活動後の行動概要

10月28日　ロドフ～ナリタン
10月29日　ナリタン～カラカチュ・ラ～ロドフ
10月30日　ロドフ～チュムチュン
10月31日　チュムチュン～チャムサ

11月1日　チャムサ〜ガサ
11月2日　ガサ〜タシタン
11月3日　タシタンープナカーティンプー
11月4日　ティンプー（観光）
11月6日　ティンプー—パローカルカッタ
11月7日　カルカッター成田



『針葉樹』第8号より



渡辺九郎（昭和3年卒）
『針葉樹会報』第87〜99号より

■一橋山岳部創部 90 周年記念

中村保チベット写真館「深い浸食の国」
…… 編集・金子　晴彦　282

チベットの神秘の河―深い浸食の国
　陸の孤島「幻の山塊」 …… 中村　　保　306

一橋山岳部＆針葉樹会年表…… 編集・中村　雅明　322

一橋山岳部＆針葉樹会年表　文献集…． 編集・中村　雅明　362

一橋山岳部在籍者名簿（2012 年 6 月 30 日まで）
…… 編集・中村　雅明　380



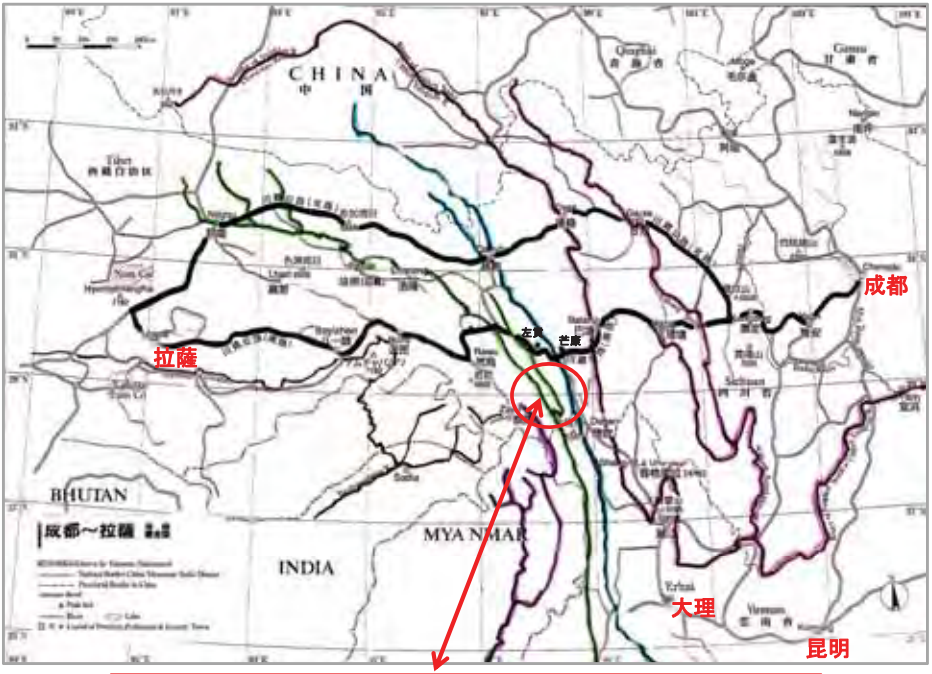
渡辺九郎（昭和 3 年卒）
『針葉樹会報』第 70～79 号より

中村保チベット写真館　「深い浸食の国」
Deep Gorge Country by Tom Nakamura



格布付近の玉曲
Yu Qu near Gebu

「深い浸食の国」地域同定・Where is the Deep Gorge Country?



深い浸食の国核心部・Central area of Deep Gorge Country

：通天河、金沙江、長江、揚子江、Yangtze R.（6380KM）

：瀾滄江、メコン河・Mekong R.（4350KM）

：怒江、サルウィン河・Salween R.（2800KM）

：独龍江、イラワジ河・Irrawaddy R.(2160KM)

：ツアンポ-川、プラマプトラ河・Bramaputra R.(2900KM)

：川蔵公路（Sichuan-Tibet Highway 北 North 2420KM、南 South 2150KM）・

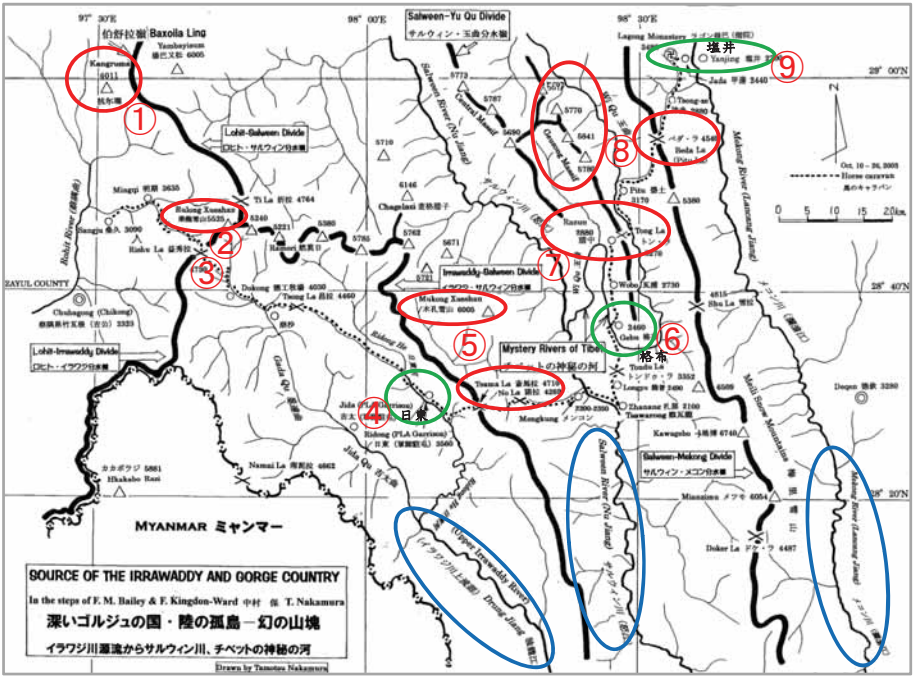
中村保による過去20年、30数回に及ぶ踏査行の繰り返しの中から「深い浸食の国」はようやくその姿を見せ始めた。その核心部は、成都からラサへの直線距離1300KMのほぼ中央。東西わずか150kmほどの幅の地域に5つの大河が6千mの山稜を隔てて南北に走る一帯だ。谷を登り、峠を越え、谷へと下る踏査を通じて初めて確認されたものだ。本稿ではその精髄を中村保(33年卒)の写真を通して紹介する。

西からのアプローチ

川蔵公路(南路)のほぼ中央にある然烏(Rawu)で公路と分かれ、南西の察隅県へ向かう。県境の峠(徳母拉・Dem La 4802m)を越えると谷の景観は無機質なチベット高原の世界から、カール状の渓谷の氷蝕地形になる。カンバ族の集落・古玉の家の作りは木造で、屋根は傾斜のついた柾葺きとなる。深いゴルジュの国の入り口である(チベットのアルプスP186)。

Approach from West:

We left Sichuan-Tibet Highway(south route) at Rawu toward Zayu county. After we crossed Dema La 4802m then we were in a world totally different from dry and barren Tibetan high plateau. The valley shows a landscape eroded by galciers and villagers houses are wooden made with sloped roof. This is the entrance to Deep Gorge Country.





①Kanguruma 抗尔馬 6011m



②Rulong Xueshan
楽龍雪山
5525m

イラワジ河源頭
Headwaters of Irrawaddy River

③Upper part of Dulong Jiang独龍江





④Near Ridong 日東付近

⑤Mukong Xueshan South face 木孔雪山 南面6005m
from No la 諾拉 4269m



⑦Mukong Xueshan East face 木孔雪山 東面
From Tong la 諾拉 3220 mより







⑥Gebu　格布

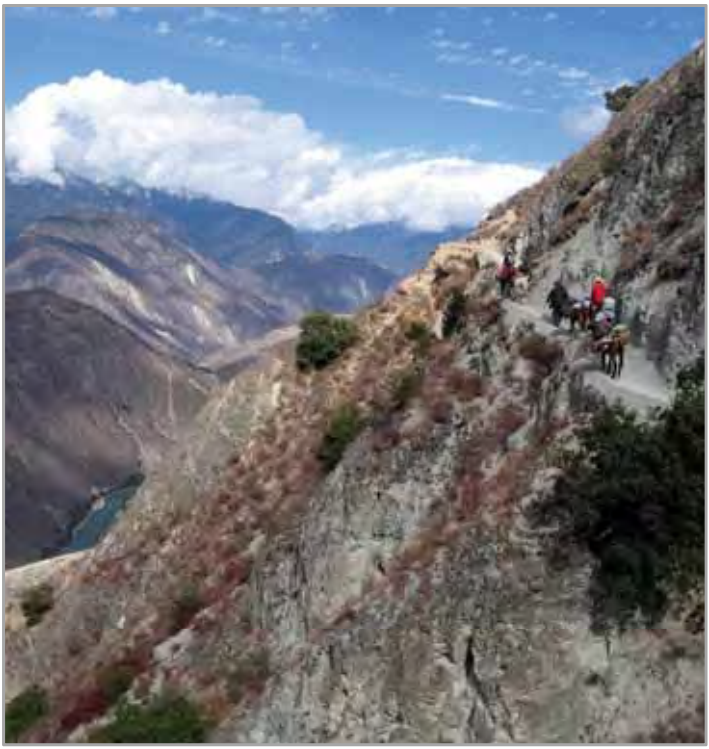
トンドゥ・ラから下ったあたりの玉曲屈曲部のゴルジュは息を呑むほどの壮観である。深い浸食の国で最も印象深い
（最後の辺境P181）。
Breathtaking view of Yu Qu valley just below Tondu La 3352m near Gebu.







⑥格布から300mほど登り、道は直登する巡礼路と別れ、玉曲の右岸の山腹を水平に進む。（最後の辺境181）
The trail ascends about 300m from Gebu, separates from a pilgrimage route and further traces the right bank of Yu Qu horizontally.





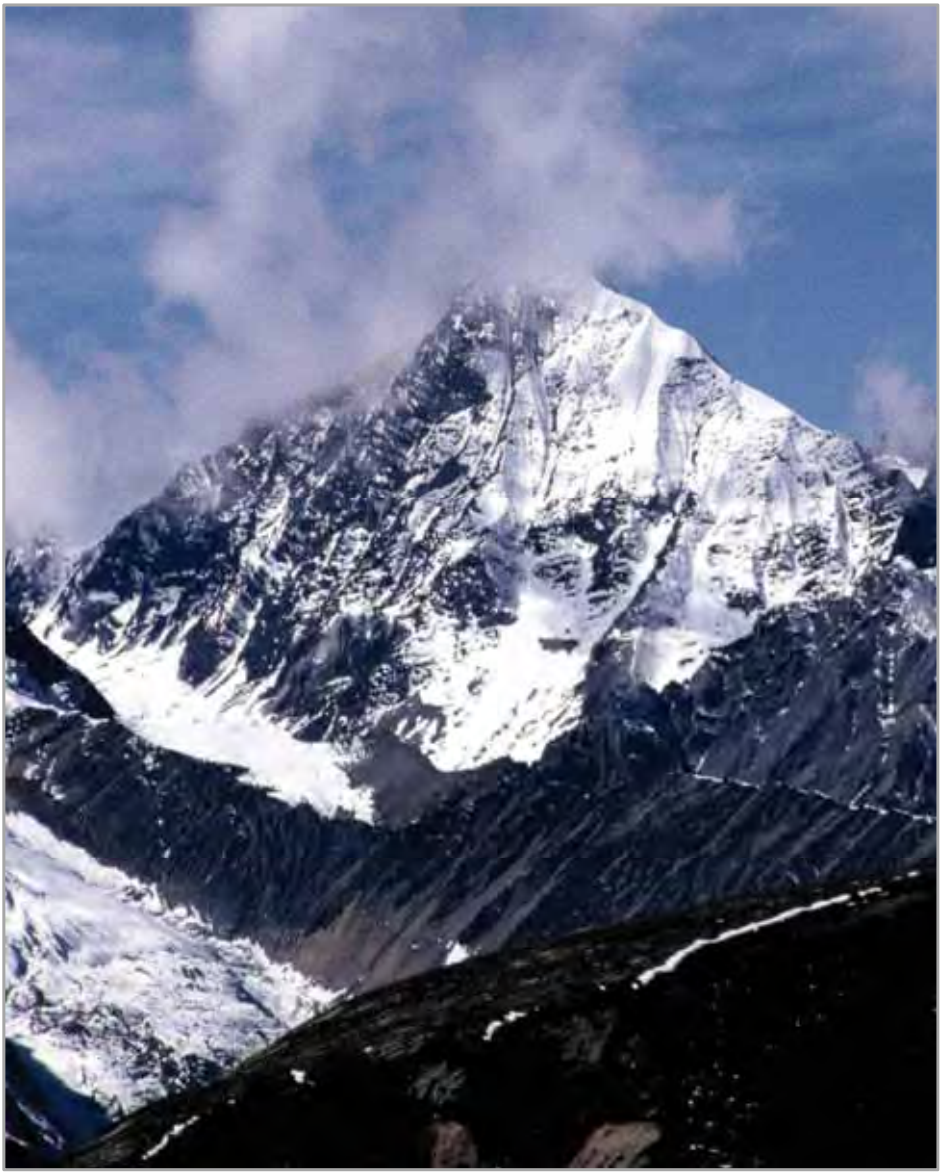
西側では南から北へ
From south to north.

⑦玉曲S字 屈曲俯瞰 トン・ラにて
Observe Yu Qu flow from Tong La.

東側では北から南へ
From north to south.



⑧ゲウゾン山塊　Geuzong　Massif　5841m峰
ディ・ラより　from Di La





⑧North Peaks of Geuzong Massif from Di La 4581m



Main peaks of Geuzong Massif



⑧ベダ･ラ Beda La 4540m 南方 South
針峰群 Spiky Peaks 5300m



Geuzong Massif
spiky peaks



ディ ラより玉曲への下り
Down to Yu Qu from Di La





⑩Yu Qu near Dino
玉曲地農付近



地農の村人
Villagers of Dino





⑪多村の家と主婦
Do village



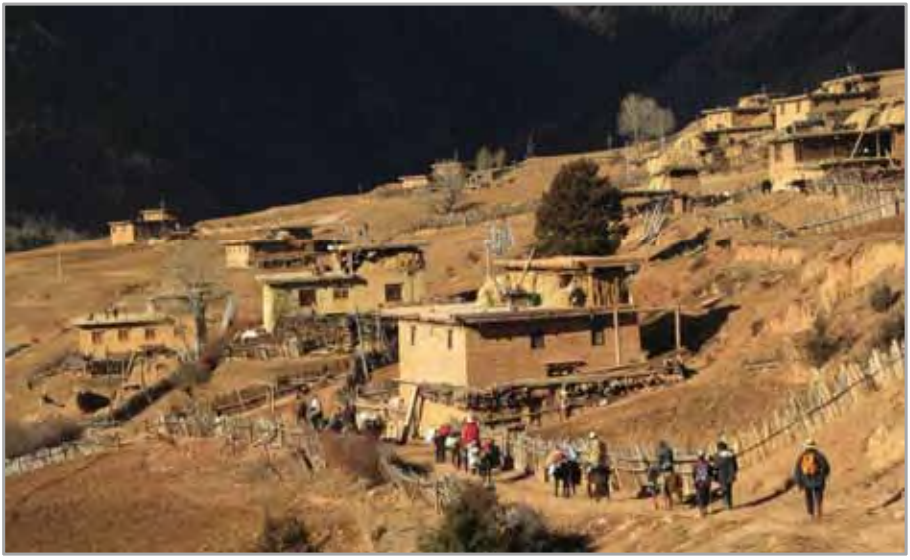


⑫覇給村の陽気な村人
Cheerful Bake village people





⑫覇給村風景と家屋建築
Bake village view and House building





⑭Geuzong Massif 5841m from Hong Qu 紅曲より



⑪Geuzong Massif 5770m
from Do village 多村より

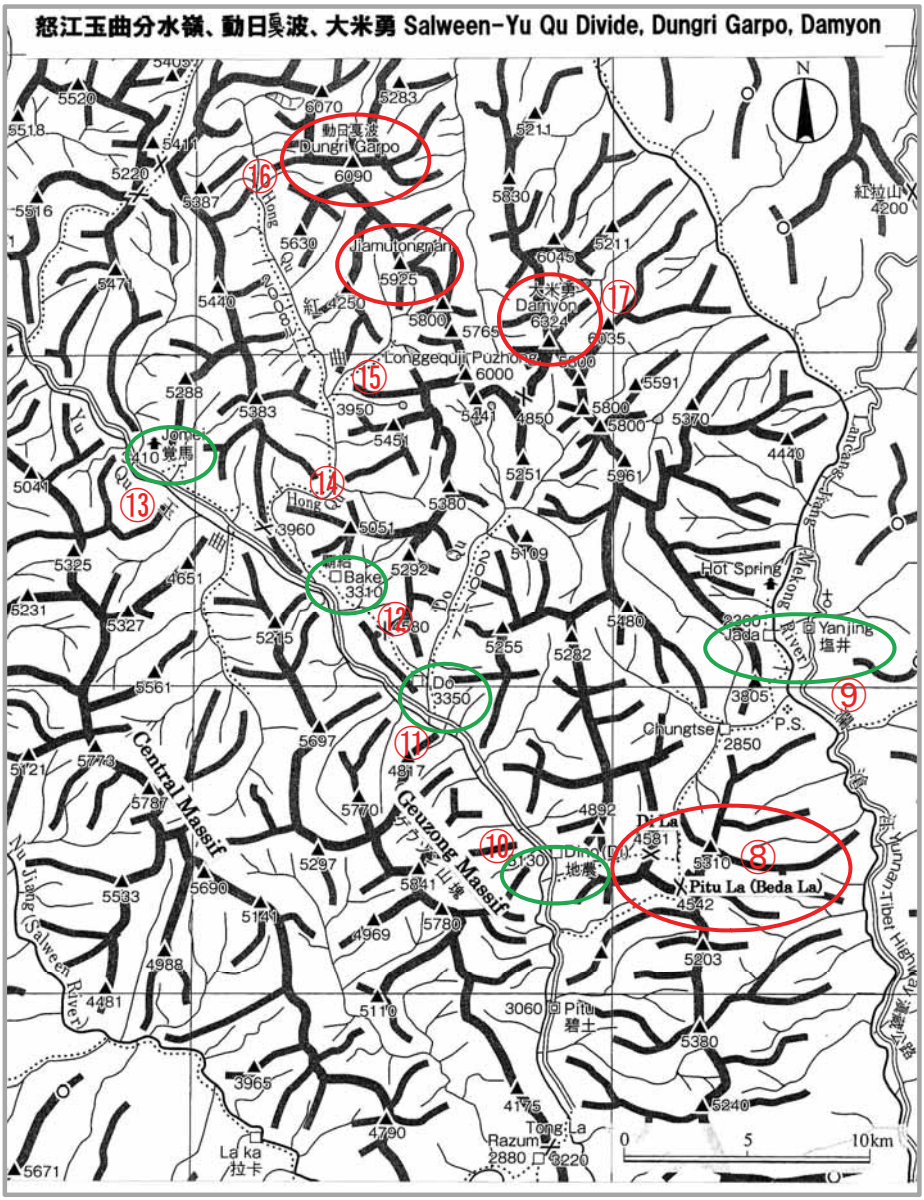






⑬覚馬の小学校と村の床屋
Elementary school and a barber in Jomei




怒江玉曲分水嶺、動日戛波、大米勇 Salween-Yu Qu Divide, Dungri Garpo, Damyon
N
動日戛波
Dungri Garpo
6090
Jiamutongnar
5925
大米勇
Damyon
6324
Longgequji Puzhong
6000
Jone
覚馬
Bake
3310
Do
3350
Dimu(DU)
地震
Pitu La (Beda La)
4542
Hot Spring
Jada
Yanjing
塩井
Chungtse
2850
P.S.
Central Massif
Geuzong Massif
Nu Jiang (Salween River)
Mekong River
Yunnan-Tibet Highway
Pitu
碧土
Tong La
Razum
La ka
拉卡
0
5
10km
16
15
14
13
12
11
10
9
8
17

⑯To Dungri Garpo via Hong Qu 紅曲キャンプよりドンリガルポへ









前進キャンプ

⑯Dungri Garpo west face
動日戛波　西面　6090m
紅曲源頭より
From headwaters of Hong Qu





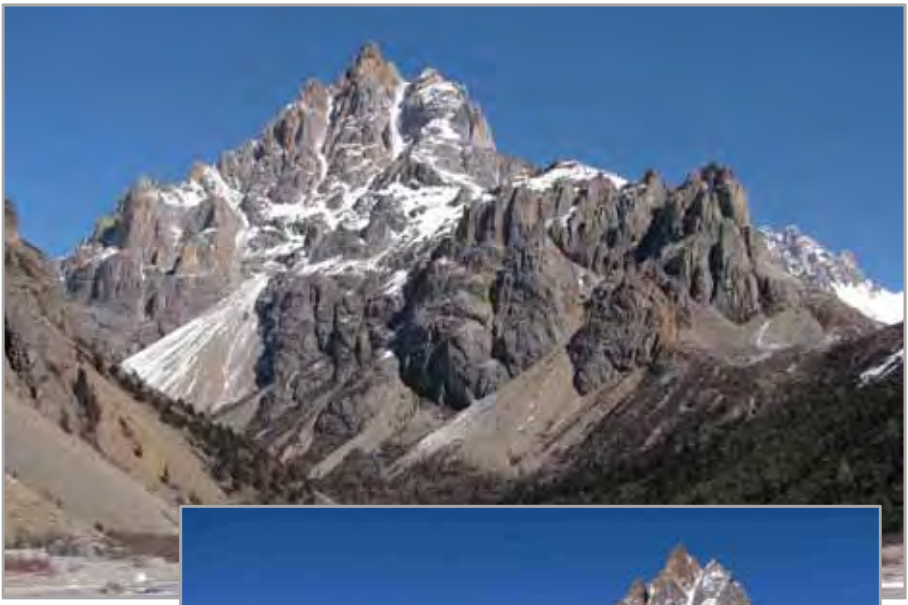
North face of Dungri Garpo・動日戛波　6090m



From Markam 芒康より



Jiamutongnan south face ·加母同南 5925m 南面







From Tso Bong Qu



Damyon East face　大米勇東面　from Yanjing 塩井より



Damyon 6045m
大米勇北峰



Damyon 6324m
大米勇主峰



Damyon 5800m
大米勇南峰

Damyon North face 大米勇北面 from Jo Ba La 脚巴拉







⑨塩井村　Yangjing　village
メコン川の塩井戸、温泉、カトリック教会、ラマ寺
Mekon River salt wells, hot springs, Catholic church & Lamasary











チベットの神秘の河―深い浸食の国　陸の孤島「幻の山塊」

遠ざかる辺境―F・キングドン-ウォードの世界

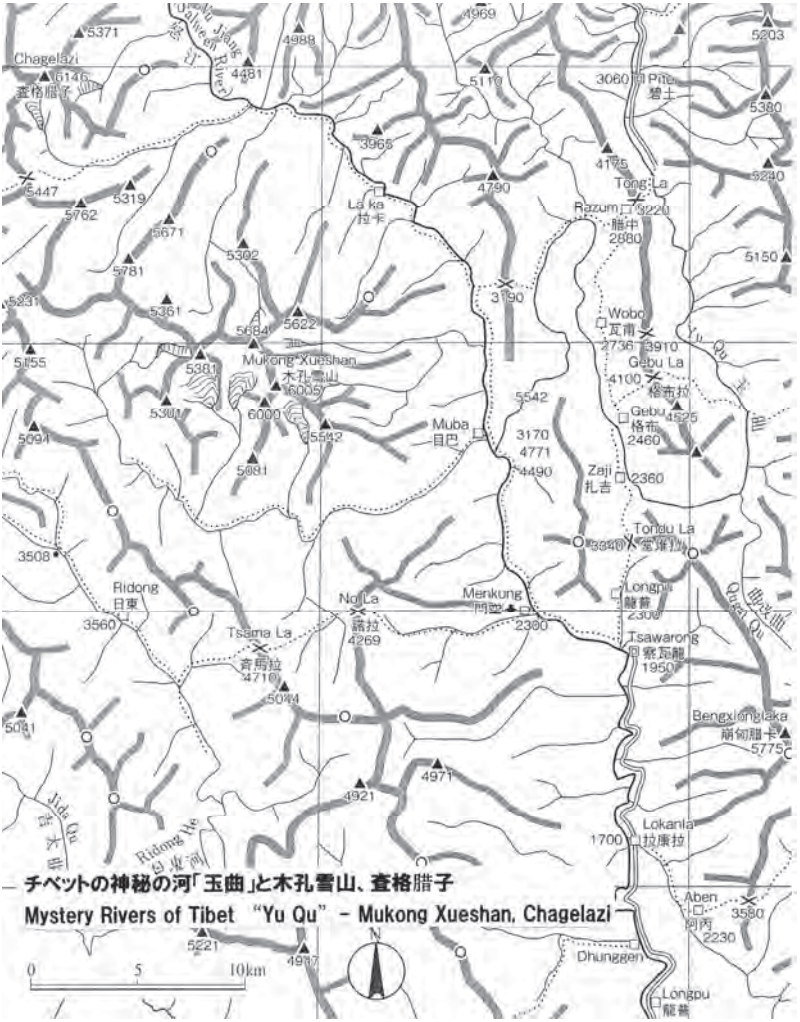
チベットと漢民族との共生の問題の展望は難しい。２００８年の北京オリンピック以後年を追うごとに外国人の東チベット入域の許可取得はハードルが高くなってきた。ダライラマ亡命政権や欧米の人権団体の中国政府のチベット政策に対する批判、それに呼応して僧侶の焼身自殺が頻発し、今年２０１２年は5月になって外国人ツーリストにたいし、同じ国籍の5人以上のグループにのみ入域許可が出されるという新たな厳しい規則が発令された。チベット辺境も西部大開発計画の実施で経済的には豊かになり、奥地の道路、通信、電力、学校、病院などのインフラは整備されつつあり、チベット族の生活の利便性は急速に高まっている。その反面、外国人が川蔵公路から外れて奥地に入ることは難しくなった。未踏の地の踏査を目指す外国の探検家にとっては、逆説的に言えば「**遠ざかる辺境**」である。

ここで紹介するチベットの東南の一角、青いケシで知られるプラント・ハンター、フランク・キングドン-ウォードの世界である「深い浸食の国」も訪れるのが難しくなっている。私は幸いにも１９９６、１９９８、２００３、２００７、２００８、２０１０年に6回も訪れることができた。１９９８年以降の踏査では老年探検隊の無二の相棒、永井剛さんと行動を共にした。その「深い浸食の国」の南部の梅里雪山周辺は世界自然遺産に登録され、雲南側は観光開発が進んでいる。しかし、北側のチベット自治区の山々は外国の登山界には知られざる山域である。

その「幻の山塊」を紹介するのに先立ち、1世紀前のF・キングドン-ウォードの思いを引用する。

「冷たい風のなか、しばし腰を下ろして眺望を楽しんだ。陽光を受けて輝く輻輳して連なる巨大な山塊、足下に深く切れ込む玉曲（ユチュー）の峡谷、サルウィン川（怒江（ヌジャン））への重畳たる山並み、そして、さらに遥かなる山々を見入った。なんのために、そう、私はイラワジ川の真の源流がどこかを目で追っていたに違いない。南西には幾つの山嶺が重なり合っているか判然としないが、タロン川（独龍江（ドーロンジャン））＝イラワジ川の本流）からビルマに通じる深いゴルジュの国があるに違いない。なんと素晴らしいことか。」

（『チベットの神秘の河』Frank Kingdon-Ward *The Mystery Rivers of Tibet* 1923 London）


チベットの神秘の河「玉曲」と木孔雪山、查格腊子
Mystery Rivers of Tibet "Yu Qu" - Mukong Xueshan, Chagelazi
Chagelazi
查格腊子
Mukong Xueshan
木孔雪山
6000
Muba
目巴
Ridong
日東
Tsama La
Nu La
Menkung
Zaji
札吉
Tongdu La
Wobo
瓦南
Gebu La
格布拉
Gebu
格布
Razum
腊中
2880
Tong La
Pite
碧土
Longpu
龍普
Aben
阿内
2230
Lokanla
拉康拉
Bengxionglaka
崩匈腊卡
Tsawarong
察瓦龍
Longpu
龍普
Dhunggen
Ridong He
Jida Qu
Yu Qu
Qiaqu
0
5
10km
N

イラワジ川源頭と未踏の伯舒拉嶺

東南チベットのゴルジュの国を南北に連なる長大な山系、サルウイン川とイラワジ川／ブラマプトラ川の分水嶺をなす伯舒拉嶺にイラワジ川の真の水源があり、その源頭を突き止めたのが偉大な探検家フレデリック・ベイリーである。彼は１９１１年に白人として初めて深いゴルジュの国を東から西へ横断し中国から印度のアッサムに到達した。その踏査行で6月にイラワジ川の真の水源を通過した。しかし天気は悪く、源頭の山を見ることはできなかった。私は1世紀を経て２００３年秋、ベイリーとは察隅から塩井は逆のルートを辿った。その時の17日間の馬のキャラバンでそれまで写真が無かった伯舒拉嶺の未踏の６０００m峰とイラワジ川源頭の山塊を確認することができた。北から記す。

1. 抗尓瑪（カンルマ）(Kangruma) ６０１１m
2. 楊巴又松（ヤンベイスム）(Yangbaisum) ６００５m
3. 楽龍雪山（ルロンシュエシャン）(Rolong Xueshan) ５５２５m
4. 查格腊子（チャグラジ）(Chagelazi) ６１４６m
5. 木孔雪山（ムコンシュエシャン）(Mukong Xueshan) ６００５m

２００３年10月12日、快晴。朝マイナス４℃まで下がる。７時半に出発し10時半に待望の益秀拉（リシュラ）（４７３０m）に立つ。「オイラソー。神様、念願のイラワジ川源頭の峠に立つことができました。」峠には雪は殆どなく、草は枯れ茶色の無機質な世界である。谷の北北西に伯舒拉嶺（バショイラリン）の主峰抗尓瑪６０１１mの無名の山塊が見える。その北東に楊巴又松６００５mを期待したが、手前の尾根に遮られて見えない。

伯舒拉嶺はサルウィンとブラマプトラ上流のロヒトおよびイラワジの分水嶺をなす長大な山脈である。川蔵公路（南路）の邦達から怒江橋に向かう峠から南を望むと、重厚で幅広い雪嶺が南北に連なっている。５０００mを超えるピークは無数にあるが、上述のように顕著な６０００m峰がある山塊は、北から抗尓瑪６０１１m、楊巴又松６００５m、６１４６m峰と木孔雪山６００５mの四つである。５８００mの大きな山塊もある。楊巴又松だけは写真がない。木孔雪山はツァワロンの門空の北に聳える山塊で、氷河が発達し二つの魅力的な鋭峰をもつ。２００７年の踏査行で東面の全容を捉えることができた。伯舒拉嶺は雲南省に入ると高黎貢山と名前を変える。一つを除き標高は４００mと５０００mの間であり、登山家の関心を惹くピークはカワカブ５１２８mだけである。

イラワジ・サルウィン分水嶺・伯舒拉嶺の秘峰木孔雪山６００５ｍはネパール・ヒマラヤのガウリサンカールを小さくしたような険しい山容で、氷河も発達した大きな山塊である。私にとって執念の山である。１９９６年秋の梅里雪山（メイリンユエシャン）巡礼路一周のときは最後まで雲が山頂から離れることはなかった。２００３年秋の察隅からメコンへの横断の時は、イラワジ・サルウン分水嶺の峠で2時間以上もねばったが双耳峰の北東の主峰の一部が雲間に現れただけだった。かなり大きな氷河は見えた。玉曲の腊中（ラスン）では双耳峰の頂上部分が僅かに厚い雲の上に浮かんで見えただけだった。そして２００７年秋、１９１３年にキングドン－ウォードが見た同じ場所、すなわち腊中の村で東面の完全なプロファイルを捉えることができた。キングドン－ウォードはトン・ラから腊中へ下る途中の光景を書いている。

「オルボール（木孔雪山）の双子のクリスタル・ピークの背後に夕陽が沈みつつある。ウイ・チュー（玉曲）からサルウィンにかけて山稜の黒い壁が重なり合って影を落とす。足下には霧が湧き天空に星が輝く。陰影はますます濃くなり、やがて茜色は空から消える。藍色の夕闇が荒々しくも荘厳な景観を包み込む。――――（腊中の村に泊まり、翌朝）オルボールを一瞥するために昨日の夕方越えた峠のほうへ登った。」（前掲）

木孔雪山を見るために私と同じ行動をとっていたことが面白い。キングドン－ウォードの描写は繊細であるが、この時どの程度オルボールの姿を見ることができたかは書いていない。写真もない。

木孔雪山へのアプローチと登るルートはまだ全く分らない。察瓦龍（ツアワロン）からサルウィン沿いに進み木孔雪山を取り巻く幾つかの谷から偵察する必要があろう。木孔雪山の北には楊巴必松（６００５ｍ）と査格腊子（６１４６ｍ）の二つの山塊がある。２００７年初冬の踏査の対象だったが断念したことは既に書いたとおりである。査格腊子も大きな山塊で、１９９６年の梅里雪山巡礼路から遠望しただけである。楊巴必松の情報はまったく無く写真もない。これらの山に登山者が目を向けるのは何時のことであろうか。

イラワジ川源流の確定

イラワジ川はアジアの大河の一つである。中国西部、東南チベットを水源とする恩梅開（ヌマイカ）江（Nmai Kha）とミャンマー最北部を水源とする邁立開（マリカ）江（Mali Kha）がミャンマーのミチーナ北方45 kmのところで合流してイラワジ川となる。全長２１５０km、アンダマン海に注ぐ。世界の50大河中、河の長さ、流域面積、河口での年平均流量を総合的

に評価すれば世界第12位、年平均地表水流量では第10位にランクする大河である。

恩梅開江は中国領内に入ると独龍江と呼名が変わる。独龍江の河長は１７８・６㎞（チベット自治区内：８６・９㎞、雲南省内：９１・７㎞）である。川の東側は４０００～５０００ｍのバショイラ嶺で怒江（サルウィン川）との分水嶺を形成し、西側はミャンマーとの国境。邁立開江との分水嶺をなす３６００～４０００ｍのダンダリカ山である。山高く谷深いゴルジュの国の一部である。

河長からいえば恩梅開江のほうが邁立開江より長い。その意味で、水源を一つに限定するとすれば、イラワジ川の水源は恩梅開江の主流である独龍江の源流にあることになる。ではその源頭はどこなのか。チベット自治区察隅県内の東経 98°05′24″、北緯 28°17′37″、ミャンマーとの国境まで８㎞の地点で独龍江は日東河（東）と吉太曲（西）の二つに分かれる。吉太村から上流部で戛達曲と名称を変える。

『中国国際河流』（科学出版社）では、「イラワジ川の本流である恩梅開江（独龍江）は、中国チベット自治区察隅県の伯舒拉嶺の来亜拉山（海抜５２９８ｍ）東麓に発し日東村、雲南省貢山県を経てミャンマーに入る。日東河と呼ばれている。」とし、独龍江が東西に分かれる東側の流れを主流としている。一方、『中国水系大辞典』では「（独龍江の）源流はチベット地区の吉太曲である。水源は察隅県竹瓦根郷の伯舒拉嶺の山麓である。」と記され見解が異なっている。

西欧の探検家たちの探査はどの程度行われたのだろうか。地理的踏査を目的にして入域したのは、私の知る限りフランス人のジャック・バコー（１９０９年）、英国人のF・M・ベイリー（１９１１年）、キングドン=ウォード（１９３０-３１年）の３人だけである。この時イラワジ川の源流に接近したが位置を確認できる記述も写真もない。ベイリーの文章を引用する。

「フランスの旅行家、バコー氏が２年前に下ったのはこの谷である。彼の意見によると、自分が下ってきた流れ（中村註：現在の日東河）がイラワジ川源流の主流である。

イラワジ川の大きさやその重要性から、川の正しい水源を確かめることは大いに興味深いことである。バコー氏の見解は１９１１年４月15日付の *Geographie* 誌に発表されたが、６月18日にこの地点に到達したときは未だ見ていなかった。私は自分が主流を辿っていることと信じ、そのことに疑問があろうとは夢にも思っていなかったので、バコー氏がより大きい川であると信じた北からの流れについて特別の関心は払わなかった。もしこのことの重要性を認

識していたら、二つの流れの大きさに注意を払い、それぞれの水量を測定していただろう。

キングドン-ウォード大尉とクランブルック卿は南側のビルマから上ってきて、私が通った日東まで3日以内の所まで到達した。彼の著書 *Plant Hunter's Paradise* のなかで、キングドン-ウォードは、彼が見た二つの川の大きさを比較して二つの峠、ツォン・ラ（昌拉）とツァシャ・ラ（現在の益秀拉）の間に源を発する流れのほうがツォン・ラの東に源を発する流れより水量が大きいと結論づけている。これは私の意見でもある。」(Lt. Col. F. M. Bailey, *China-Tibet-Assam, A Journey 1911*, Jonathan Cape, London, 1954)

ベイリーの記述から分かるように、バコーは日東河の源頭をイラワジ川の水源と考えたが、ベイリーとキングドン-ウォードは吉太曲・戛達曲の源頭がイラワジ川の水源と結論づけている。ただし、1930-31年の旅では、キングドン-ウォードはビルマから入り吉太曲には達したが日東河は見ていない。二つの川の流水量を比較できない筈なので、疑問が残る。

では、一つに絞るとすればどちらをイラワジ川の正しい水源とすべきか、中国科学院の公式の調査記録を手に入れないと断定できないが、日東河と吉太曲・戛達曲の源頭は大して離れていない。いずれも5300～5500m前後のバショイラ嶺に源を発している未踏の山域である。ロシアの1:200,000の地形地図によると、二つの川の幾つかの源頭は直線距離で東西18 km以内にある。私の個人的見解としては、吉太曲―戛達曲の源頭の最北部、ロヒト（ブラマプトラ）・イラワジ・サルウィン分水嶺のジャンクションに最も近い山を正しい水源と判断したい。2003年秋の探査行で写真に収めることができた伯舒拉嶺の支脈上にある楽龍雪山5525mと東に連なる5240m峰の南面の谷がそれに該当する。

ベイリー大佐、陸の孤島探検史

探検家として後世に名を残したツァンポー大峡谷の踏査の二年前に、ベイリーは白人として初めて中国からインドのアッサムに横断したときの紀行が上記の *China-Tibet-Assam* である。175ページの薄い本だが名著である。翻訳されていないのが惜しい。成都を発って北京・ラサ街道を行きチベット・中国「境界石」のあるブム・ラで主街道から離れ西に向かい塩井でメコンを渡り、深いゴルジュの国を横断して察隅からアッサムに抜ける。途中巴塘からツァワロンのメコンまで中国内陸教会（China Inland

Mission）のニュージーランド人宣教師、H・エドガーが同行する。ミニヤコンカの未踏の衛星峰 Mt. Edger 6618mは彼の名前に因んで付けられた。ベイリーは珍獣ターキンを探すために、ミニヤコンカの東側の谷に康定・老楡林から入り峠を越えて南に下っている。登山史には出てこないが、ベイリーは1911年にすでにミニヤコンカに足跡を残している。

ベイリーの辿った道は文字通り横断山脈を横断する。成都―（大渡河）―康定―（雅龍江）―理塘―巴塘―（金沙江）―境界石―塩井―（メコン川）―碧土―（玉曲）―扎那―（サルウィン川）―門空―日東―**（イラワジ川源流）**―吉公（察隅）―シュグデン・ゴンパ―察隅―ミシミ高原―（ブラマプトラ川）―サディア（アッサム）のルートである。この間に標高4000m以上の14の峠を越えている。宣教師をのぞいて、19世紀末から20世紀初頭の探検の時代にかけて中国からインド／ビルマへ深い浸食の国の横断を試みた探検家、或いは、この未踏の地域を探査した先駆者のクロニクルを纏めてみよう。

1882年――パンディット、キシュン・シン（A―K、インド）：横断してラサへ

1896年――ドルレアン公（フランス）：雲南から北ビルマ／インドへ横断、

1901年――デービス（英国）：東南チベット（塩井）からインドへ横断を試み失敗

1905年――フォレスト（英国）：サルウィン、メコン流域で植物採集

1906年――ヤング（英国）：ドルレアン公と同じルートで北ビルマ／インドへ

1909年――バコー（フランス）：メコン、サルウィン、イラワジ源流域

1911年――ベイリー（英国）：メコン、サルウィン、イラワジ源流を横断してアッサムへ

1911年――キングドン-ウォード（英国）：揚子江、メコン、サルウィンのゴルジュの国へ

1913年――キングドン-ウォード（英国）：メコン、サルウィン、梅里雪山探査

1922年――ニール（フランス）：メコン、サルウィン、玉曲のゴルジュを通過してラサへ

1922年――ロック（アメリカ）：メコン、サルウィンのゴルジュの国へ

1922年――グレゴリー父子（英国）：メコン、サルウィン流域を踏査

1923年――キングドン-ウォード（英国）：ダムヨン山

群探査、雲南から北ビルマへ横断

１９３１年――キングドン＝ウォード（英国）：北ビルマから東南チベット・イラワジ川源流へ

当時のチベットと中国の境界線は境界石のあるブム・ラ、塩井のメコン川、サルウィン川の門空であった。ラサを目指した旅行者はこの辺りでラサの指示を受けたラマ僧たちによって撃退されている。デービスは塩井から西へビルマへの旅を試みたが、メコン川を眼下約１０００ｍ下に見おろすラゴン僧院のラマ僧の攻撃をうけ、ロープ・ブリッジを渡ることができず断念した。この僧院が見張り台の役目を果たしていた。１９１１年頃は支配の手は中国人兵士に移っており、外国人にたいしては同じように厳しい状況にあったが、ベイリーとエドガーは上手に監視の目をくぐりメコンを渡って旅を続けることができた。

私が浸食の国を訪れたのは１９９６年の梅里雪山巡礼路一周と１９９８年のサルウィンの支流、玉曲峡谷、２００３年の察隅から塩井へ横断、２００７、２００８年の玉曲踏査である。

サルウィン・玉曲「チベットの神秘の川」分水嶺

大きな山系、他念他翁（タネン タウェンシャン）山の支脈といってよいが、南の部分はまさに深い浸食の国の核心部である。キングドン＝ウォードの記述にあるように、氷河を懸ける５７００ｍから５８００ｍの雪峰、岩峰が連なる。豊かなツァワロン地方の貫流する玉曲は、険しいゴルジュをつくり、美しい針葉樹の原生林と調和して、息を呑むほどの景観を創りだしている。タイクマンは１９１８年に、キングドン＝ウォードは１９２２年に、私は１９９８年にメコン・サルウィン分水嶺から遠望したが、その後２００７、２００８年のゴルジュの国踏査で東面をほぼ把握することができた。玉曲右岸にゲウゾン山塊ほか二つのグループに分けられる。山はすべて未踏であることは言うまでもない。

キャラバンは扎吉（ザジ）２３６０ｍのゴンパ（ラマ寺）で泊まり、翌日の11月11日に格布（ゲブ）で吊橋を渡る。格布から３００ｍほど登り、道は直登する巡礼路と別れて玉曲の右岸の山腹を水平に進む。眼下に玉曲のトルコ石色の青い清流が蛇行する。対岸に低い峠がありタルチョが見える。そこに立てば同じ川が逆方向に流れているのが見える筈だ。さらに先のトン・ラ３２２０ｍでも同じ不思議な光景に出会うことになる。キングドン＝ウォードが『チベットの神秘の川』

と書いたのは、玉曲が二つのループをつくって二回屈曲して南北に流をかえるミステリアスさを表現したものである。北から南へ、南から北へ、また北から南へと流れを変えてサルウィンに注ぐ。トン・ラ付近から両側に逆方向に流れている玉曲を見下ろして自然の驚異に感嘆している。

「私は夢を見ているのだろうか。夕闇の中に剣の刃のように鈍く光る一条の筋をゆびさして川の名前を訊ねた。一人のチベット人がウイ・チュー（玉曲）と答えた。我われはサルウィンの谷からウィ・チューを北側に分離する高い山稜の一角に立っている。この切り立った山塊の基部の廻りをウイ・チューは一方では南に向かい、反対側では北に向かって流れている。この特異なループがどうして形成されたかは、大きく傾斜した岩の層を調べることで多分判るだろう。私は、二つか三つの古い川の一部が繋がって構成されたものと思う。地殻の変動、或いは浸食によって切り裂かれたことによる結果徐々にそれぞれの川が繋がったと推定される。

ウイ・チューの谷では石灰岩と片岩が大きな角度で北に向かって傾斜しているのが見られた。これは通常ではない。この地域全体を通じ、とりわけ河床では、一般的にほぼ垂直の地層が西南西か東北東に傾斜している。」（上掲『チベットの神秘の川』）

この現象をヒントにしてキングドン-ウォードは二つの顕著な地殻の移動があり、ヒマラヤと中国西部の山系を分断する大きな巨大な推力が作用し、その狭間にチベットの川が南流したと推論する。プラントハンターは地質についても造詣が深かったようだ。

玉曲は左貢（ツォゴン）から川蔵公路沿いに北西に向かい、東チベット高原の世界で一番高い商業空港である昌都（チャムド）空港４５００ｍの付近を流れ、源頭は北方４８００ｍの峠付近にある。

ゲウゾン山塊、中央山塊、北西部山塊

再びF・キングドン-ウォードの紀行を引用する。

（１９９２年）９月６日にラゴン僧院に戻り、７日にピトゥ・ラ（別名ベダ・ラ）に向かって登っていった。この道はラサと東南チベットの要衝の場所に通ずる主要街道である。この峠を越えてサルウイン川（怒江）支流の玉曲に下る。そこからサルウインには容易に到達できる。私は１９１３年に玉曲を横断してサルウインに行った。

ピトゥ・ラ（ベダ・ラ）は雪尾根を越えるには標高が最も低く容易な峠である。ラゴンからピトゥ（碧土）僧院まで僅か二日で行ける。峠は１５０００フィートに届かないだろう（１９１１年にイリーは１５２０９フィートと計測、

現在の正確な標高は４５４２m)。峠から真近に玉曲の向こう側に雪嶺を展望した。雪のピーク自体は雲に覆われていたが、八つの氷河を数えられた、そのうちの二つは小さかった。四つはこの地域に共通のアメーバーのような形をしていた。これらは急斜面に架かっており上部の雪原が氷河生成のもとになっている。にもかかわらず、四つのうち三つは山腹を下り、四つ目は高所に架かっていた。三つの大きな氷河と一つのアメーバー状の氷河が一つの深い谷に流れ込んでいた。全ての氷河はクレバスが多く、急峻で荒れており、先端は地中に埋まっていた。

塩井から北西に旅をすれば、どちらを向いても高く聳える氷雪の峰々と対面するだろう。そこは遥かイラワジ川源流の彼方まで果てしなく広がる未知の土地であり、植物学者にとって無垢の楽園である。

ピトゥ・ラ（ベダ・ラ）はキャンプするには風が強すぎることが分かった。標高が低く暑いサルウィンのゴルジュから絶えず荒れ狂うような風が吹き上げていた。別の鞍部に行ってみたが、東側には氷河もピークも一つも見えなかった。

峠の近くに尖ったピークの分水嶺から氷河が下がっており、小さな湖と大きなモレーンがのこっていた。西側には二マイルほど先にディ・ラが尾根を横切っている。斜面穏やかで緩く氷の痕跡はないが深い雪がおおっていた。」(『シナからカムティ・ロンへ』Frank Kingdon-Ward *From China to Khamti Long* 1924 London)

私は１９９８年の11月にベダ・ラの北に隣接するディ・ラ４５８１mを越えて塩井から玉曲に入った。ディ・ラに立った時の感慨を私はこう表現した。

「われを忘れてシャッターを押す。氷のように冷たい風が指の感覚を奪う。玉曲をはさんで西側に怒江（サルウィン）との分水嶺の山々が連なる。幾条もの小さな氷河を懸ける雪峰・岩峰（５７００～５８００m）が果てしなく広がる。登山家としてこれらの未踏の山を目にするのはわれわれが初めてだろう。――ひとつ残念だったのは、北東側の山稜が邪魔して大米勇山群が見えなかったことである。」(中村保『深い浸食の国』山と渓谷社 ２０００)

連山のなかで一際目立ったのは、土地のチベット族が一括してゲウゾンと呼ぶ幾つかのピークのうちの重量感のある二つの岩峰であった。ゲウソングも聖山である。

１９９８年にディ・ラからゲウゾン山塊を遠望できたが、玉曲のゴルジュに入ってしまうと岩峰の一部が見えても近すぎて良い写真は撮れない。２００７年の旅では左岸を少し登ったドー村付近と覇給の先の格拉３９６０mからかろ



うじて中央山塊の写真を撮ることができた。北西部山塊も１９９８年に写真に収めた。ロシア（旧ソ連）の1:200,000の地形図に照らし合わせて玉曲・サルウイン分水嶺の山系を南から北へ次のように整理してみた。

(1) Geuzong ゲウゾン山塊（５７００～５８００ｍ）―地農、ドー村の対岸、北部は岩峰

(2) Central 中央山塊（仮称、５３００～５７００ｍ）―覇給から覚馬の対岸、峻峰多し

(3) Northwest 北西部山塊（仮称、５４００～５６００ｍ）―扎玉から北の対岸

この辺りの玉曲の谷は最も美しいと、エリック・タイクマンは書いている。

「ツアワロンのこの部分の景観は

抜きん出て美しい。ド・ラの頂上から玉曲をよく俯瞰できる。玉曲は雪を頂いた二つの山脈の間の松が密生する谷を流れている。巨大な山塊が南南東に望まれる。おそらく雲南の阿敦子（アトゥンツ）（徳欽（デーチン））の北西に横たわる雪山（梅里雪山）であろう。――我々はド・ラから畑が広がるディに下った。」『東チベット紀行』（Eric Teichman *Travels of a Consular Officer in Eastern Tibet* London 1922）

ド・ラは４５８０ｍの旧道の峠、現在は新道・自動車道ができているので使われていない。ディは我われが泊まったドー村である。

地図に示す通り、深いゴルジュの国の核心部である玉曲・メコン川の分水嶺をなす南北に連なる長大な他念他翁山山系の南部に下記の二つ大きな山塊が連なる。

1. **大米勇（ダムヨン）(Damyon 女神の山) 山塊**
2. **動日戛波（ドゥンリガルポ）(Dungri Garpo) 山塊**

なかんずく大米勇山塊は三つの６０００ｍ峰と多くの５８００～５９００ｍの峨々たる岩峰群を擁する巨大な山塊である。この二つの山塊については既に詳しく発表しているので、本稿では写真のみを掲載する。大米勇山塊のメコン川の辺はチベットにおける唯一のキリスト教教会（カトリック）があり、古くから塩を生産してきた歴史的な塩井（チベット名：ヤカロ）である。

「チベットの神秘の川」玉曲は特異な川の流れに特徴があるが、東南チベットで最も美しい針葉樹林を涵養し、トルコ石色の清流が谷に美観を添える。チベットでも温暖な地、心暖かくフレンドリーで規律を重んじ伝統的な生活規範を守っているチベット族の住処、「幻の山塊」を未だに残す私にとっても憧憬のツァワロン地方である。地図と写真でその一端を知って頂ければ幸いである。写真の山々は全て未踏峰で試登すらされていない。

中村保 「ヒマラヤの東ーチベットのアルプス」 踏査クロニクル

1990年から2011年に亘り中国南西辺境「ヒマラヤの東ーチベットのアルプス」雲南、四川、東チベット、青海に32回足を運び地理的空白部の全容をほぼ解明する。

1990・4月　:雲南省　麗江・玉龍雪山と長江第一湾
1990・7月　:四川省　四姑娘山南面を探る・日隆から長坪溝
1991・3-4月　:雲南省　サルウィン川上流・怒江大峡谷（六庫ー貢山）
1991・7-8月　:四川省　大渡川と長征の道（攀枝花ー会理ー瀘定ー康定）
1991・12月　:四川省　峨眉山から金沙江・雷波鎮〔イ族の国〕
1992・5-6月　:四川省　沙魯里山系チョーラ山と新路海踏査
1993・4-5月　:雲南・東南チベット　梅里雪山からメコン上流の塩井
1993・8月　:四川省　岷山山系・雪宝頂ー黄龍ー九寨溝ー大草原
1994・2月　:四川省　厳冬の中甸高原から玉龍雪山と虎跳峡
1994・3-4月　:四川省　ミニヤコンカ西面と大雪山偵察
1995・10月　:東南チベット　崗日嘎布山群東部から禁断の察隅へ
1996・10月　:雲南・東南チベット　梅里雪山巡礼路一周
1997・4-5月　:四川省　大渡河流域の未踏の山塊探査
1997・7-8月　:雲南・四川　能海寛の足跡（中甸ー稲城ー理塘ー巴塘ー芒康ー徳欽）
1998・7-8月　:四川省　チョンライ山系未踏の岩峰探査・ビープン谷から長坪溝
1998・11月　:東南チベット　深い浸食の国・メコンから玉曲(サルウイン支流)峡谷
1999・5-6月　:東南チベット　崗日嘎布東部山群踏査、川蔵公路をラサまで
1999・10月　:四川省西部高地　探検史紀行・理塘から旧道を波密を経て巴塘
2000・5-6月　:四川省西部　巴塘からヤンモーロン山塊探査
2000・6月　:四川省西部　措普牧場とジャージンジャボ山群踏査
2000・10-11月 :四川・青海3,000km（甘孜ー白玉ー玉樹ー黄河源流ー西寧ー蘭州）
2001・5-6月　:東チベット　念青唐古拉山東部探査　嘉黎・易貢蔵布源流
2001・10-11月 :東チベット　念青唐古拉山東部探査　巴松湖の北、プンカから嘉黎
2002・4-5月　:東チベット　念青唐古拉山東部 山脈中央部プユー谷とダムドル谷
2002・10-11月 :東チベット　念青唐古拉山東部探査 ネナン偵察、ラチン・ラ、波堆蔵布
2003・10月　:東南チベット　イラワジ川源流から雲南へ・察隅ーサルウインーメコン
2004・10-11月 :東チベット　念青唐古拉山東部探査・巴松湖の東と娘浦周辺
雲南省　カトリック宣教師の道、四川省　チョンライ山系・丹巴石塔
2005・10-11月 :東チベット　念青唐古拉山東部探査・未踏の易貢蔵布遡行
2006・10-11月 :東チベット　念青唐古拉山東部探査・易貢蔵布と波堆蔵布踏査
東チベット　崗日嘎布東部山群探査・ミドイ谷とミメイ谷踏査
2007・11-12月 :東南チベット　怒江大峡谷から深い浸食の国踏査・木孔雪山とダムヨン
2008・10-11月 :東南チベット　ゴルジュの国・ドゥンリガルポ踏査、
四川省　人中峰山塊、大雪山系の未踏峰探査
2009・10-11月 :東チベット　念青唐古拉山東部・尼屋曲、金嶺、波堆蔵布探査
東チベット　崗日嘎布西部・朗秋蔵布踏査
2010・ 7-8月 :雲南省　怒江流域・キリスト教会探訪
四川省　西部高地・理塘高原沙魯里山ピーク同定
2011・10月　:東チベット　念青唐古拉山東部・易貢蔵布下流部　江普氷河探査

Tamotsu (Tom) Nakamura – A pioneer of Alps of Tibet

1990 – 2012 33 journeys for reconnaissance and explorations in West China.
Visit to Jade Dragon Mountains (Yulong Xueshan) in Lijiang, Yunnan 1990
Trekking to Qonglan Mountains, Mt. Siguniang, Sichuan 1990
Through the canyon of Salween River in the remotest Yunnan 1991
Trekking to Dadu River and eastern side of Minya Konka, Sichuan 1991
Omei Shan to Leibo, country of Yi Minority of Yangtze River 1991-1992
Reconnaissance of Chola Shan and surrounding peaks, Shicuan 1992
From Meili Snow Mountains, Yunnan, to Yanjing of southeast Tibet 1993
Min Shan range and northwest grassland, Sichuna 1993
Trekking to the west and east sides of Minya Konka, Sichuan 1994
Entering forbidden county "Zayul" from Kangri Garpo East, SE Tibet 1995
Circumnavigation of pilgrimage trail round Kang Karpo, Tibet/Yunnan 1996
Retracing "Long March" route and snow peaks, Dadu River, Sichuan 1997
Reconnaissance of unclimbed rock peaks, Qonglai range, Sichuan 1998
Deep Gorge Country and Mekong-Salween Divide, SE Tibet 1998
Exploring Kangri Garpo range and Zayul district in SE Tibet 1999
Searching for unexplored peaks and old trade path west of Litang, Sichuan 1999
Reconnaissance of Yangmolong and exploring Jarjinjabo, Sichuan 2000
3000km journeys from Sichuan to the source of Yellow River, Qinghai 2000
Exploring Nyainqentanglha East: Lhari /Yigong Tsangpo, East Tibet 2001
Exploring Nyainqentanglha East: Mountains north of Lake Basong, East Tibet 2001
Exploring Nyainqentanglha East: Access to the central part, East Tibet 2001
Exploring Nyainqentanglha East: Nenang and Unknown eastern part, East Tibet 2002
Source of Irrawaddy in the steps of F. M. Bailey, SE Tibet to Yunnan 2003
Exploring Nyainqentanglha East: Mountains east of Lake Basong, East Tibet 2004
Retracing missionaries' trails from Mekong to Salween from Yunnan 2004
Exploring Nyainqentanglha East: Forbidden Yi'gong Tsangpo, East Tibet 2005
Exploring (1) Nyainqentanglha East (2) Karngri Garpo East, East Tibet 2006
Exploring Deep Gorge Country along Yu Qu of upper Salween River, SE Tibet 2007
Exploring (1) Deep Gorge Country-Quest for veiled Dungri Garpo, SE Tibet 2008 (2) South of Minya Konka and north Daxue Shan, Sichuan 2008
5000km journeys in East Tibet exploring (1) Nyainaqentanglha East: Yi'ong Tsanpo and Botoi Tsangpo (2) Kangri Garpo East and West, East Tibet 2009
Upper Salween River (Nujiang) and Litang Plateau (Sichuan) to find veiled peaks 2010
Exploring the lower Yi'ong Tsanpo and Jiangpu Glacier, East Tibet 2011
Peaks identification in West Sichuan Highlands and retracing footsteps of the 19th century French Mekong River Expeditions 2012

中村　保（なかむら・たもつ）NAKAMURA Tamotsu

1934年、東京に生まれる
1953年、都立第一商業高校卒業、一橋大学入学、山岳部入部、尖鋭登山をめざす
1957年、北穂高岳滝谷グレポンを初登攀
1958年、一橋大学（商学部）卒業。石川島重工業（株）入社
1961年、一橋大学山岳会のアンデス登山隊に参加し、ペルーのブランカ山群・プカヒルカ
　　北峰（6046m）の初登頂。ボリビアのププヤ山群で二つの初登頂を行う
1962年、この年からIHI石川島播磨重工業（株）の海外プラント輸出業務に携わる
1968年ー1998年　パキスタン・カラチ事務所長、中国室長、メキシコ事務所長、
NZ事業部業務部長、海外プロジェクト部長、IHI香港有限公司社長、
石川島建材工業監査役
1990年ー2011年、中国南西辺境ー「ヒマラヤの東ーチベットのアルプス」踏査
雲南、四川、東チベット、青海、ミャンマーに32回足を運ぶ
1996年、『ヒマラヤの東』（山と渓谷社）出版
1999年ー2007年、日本山岳会監事、理事、評議員
2000年、『深い浸食の国』（山と渓谷社）出版
2001年、日本山岳会の海外向け英文誌Japanese Alpine News発行を始める
2003年、ヒマラヤンクラブ創立75周年行事で「チベットのアルプス」記念講演、
　　名誉会員認証
2003年、日本山岳会・第六回秩父宮記念山岳賞を受賞
2004年、アメリカ山岳会年次総会で「ヒマラヤの東ーチベットのアルプス」講演
2004年、ヒマラヤンクラブ・カルカッタで「チベットのアルプス」講演
2005年、『チベットのアルプス』（山と渓谷社）出版
2005年、5月・12月ー英国アルパインクラブおよびデンマークで「ヒマラヤの東」講演
2007年、3月ーアメリカ山岳会総会で「東ヒマラヤの氷河」講演、名誉会員認証
　　6月ー英国アルパインクラブ創立150周年記念行事にオナードゲストとして出席
　　10月ー国際山岳連盟UIAAより表彰を受ける
　　11月ー第二回アジア黄金のピッケル賞（韓国主催）の審査委員長を務める
2008年、2月ーヒマラヤンクラブ創立80周年記念行事で「東ヒマラヤの氷河」講演
　　5月ードイツDetjen-Verlagより*"Die Alpen Tibets"*（ドイツ語版）出版
　　6月ー王立地理学協会（英国）よりBusk Medal 2008を受賞
2009年、2月ー英国アルパインクラブ、トラベラーズクラブ、ケンブリッジ大学、 アイルランド登山協会
　　「チベットのアルプス」講演
　　9月ー第4回日本スポーツグランプリ受賞
2010年、5月ーイタリア山岳会およびトレント・フィルム・フェスティバルにて「チベットのアルプス」講演
　　11月ーホーランド探検家祭にて「ヒマラヤの東」講演ならびに世界探検家賞を受賞、
　　ポーランド山岳会の名誉会員認証
　　11月ースペイン・カタルニア山岳会にて講演
2011年、5月ーニュージーランド山岳会（クライストチャーチ）にて「チベットのアルプス」講演、名誉会員認証
　　10月ー国際山岳連盟（UIAA）年次総会（ネパール・カトマンズ）にて「最後の辺境へ」講演
　　11月ーブルガリア国際写真祭にて「最後の辺境へ」講演
　　12月ーチェコ・プラハ、国際アルピニズム・フェスティバルにて「最後の辺境」講演
2012年、4月ー「最後の辺境ーチベットのアルプス」（東京新聞社）出版
　　11月ー中華民国健行登山会・台北にて「チベットのアルプス」講演

現在、日本山岳会名誉会員
アメリカン・アルパインクラブ名誉会員、
アルパインクラブ名誉会員(英国)
ヒマラヤンクラブ名誉会員(インド)
ポーランド山岳協会名誉会員
ニュージーランド・アルパインクラブ名誉会員
王立地理学協会フェローン(英国)

Tamotsu (Tom) Nakamura – A pioneer of Alps of Tibet

Born in Tokyo, Japan
Began with climbing in Hitotsubashi University Mountaineering Club
Expedition to Peru and Bolivia Andes. First ascent of Pucahirca Norte 6046m, Cordillera Blanca in Peru and 3 first ascents and several 2nd ascents in Cordillera Apolobamba and Pupuya in Bolivia
1967 – 1971 Lived in Pakistan
1975 – 1982 Lived in Mexico
1984 – 1989 Lived in New Zealand
1989 – 1994 Lived in Hong Kong

1996 – Published "East of the Himalayas" (Yamakei Publishers)
2000 – Published "Deep Gorge Country" (Yamakei Publishers)
2001 – Started publication of the Japanese Alpine News (The Japanese Alpine Club)
2003 –**Award of the Prince Chichibu Memorial Mountaineering Prize 2003 by the Japanese Alpine Club**
Published "East of the Himalayas –To the Alps of Tibet" (English version - JAC)
2005– Published "The Alps of Tibet" (Yamakei Publishers)
2007 – **UIAA Award for Contributions to International Mountaineering by UIAA**
2008 – Published ***"Die Alpen Tibets– Ostrich des Himalaya"*** **(Detjen- Verlag, Hamburg)**
Award of the Busk Medal 2008 of the Royal Geographical Society
2009 – **Award of the 4th Japan Sports Grand Prix by the Japanese Government**
2010 – **International Explorers Award – The 12 th Explorers Festival-Poland**
2012 – Published "The Final Frontier – Alps of Tibet" (Tokyo Shimbun, newspaper company)

As in November 2012 - Honorary Member of:-
1) The Alpine Club: **2007 Walter Bonatti, 2008 Tamotsu (Tom) Nakamura**
2009 Ricardo Cassin
2) The American Alpine Club
3) The Himalayan Club
4) The Japanese Alpine Club
5) The Polish Mountaineering Association
6) The New Zealand Alpine Club
Fellow of the Royal Geographical Society

End

一橋山岳部＆針葉樹会年表

1922年（大正11年）6月～2012年（平成24年）6月

（まえがき）

1）通年　山岳部創部の年を第１年度とする通算年度

2）年　　暦年。山岳部の年度は４月１日～翌年３月31日。針葉樹会の年度は６月１日～翌年５月31日。

3）事項・出来事の選定と記載スタイル

『針葉樹』、『針葉樹会報』から凡例のジャンルのものを選定し、山岳部関係を日付順に記載し、針葉樹会関係は【針葉樹会】の見出しの後段に日付順に記載した。

山行は、各年度の主要山行（原則、春・夏・冬山合宿）、初登攀など特筆すべき山行、海外遠征を主に『針葉樹』から選定した。『針葉樹』第１～10号からの山行の選定、特記事項については倉知敬会員（昭38年卒）のご協力を得た。

『針葉樹』、『年報』の発行は全号を記載し、『針葉樹会報』は創刊号、終刊号、特別号のみ記載した。

4）人名の表記

山行メンバーは初出は姓名、再出は姓のみ（複数姓の場合は（　）内に名の頭１文字）。

その他は姓名表示とした。１字姓、１字名の人名は、姓と名の間に１スペース空けた。

部外者は［　］で囲んだ。

5）文献について

スペースの関係で、年表事項についての説明は特記事項のみとした。それを補う意味で「文献」欄の数字で検索できる別表「文献集」に出典、参考文献を出来る限り収録した。

6）資料について

本年表作成に際して、会員から寄せられた山行記録・覚書等は、表末に【資料１】・・・として収録した。該当する年度にその旨注記した。

7）本表の改訂について

本表の改訂（加除訂正）版は「一橋山岳会ホームページ」の『針葉樹』の「針葉樹第15号」に掲載する。

（中村　雅明）

（凡　例）

☆☆☆　山岳部の創部、針葉樹会の発会
☆☆　山岳部室の落成、補修、改修、新部室の落成
☆　山岳部、針葉樹会の会合、催し、行事
○　国内山行（夏山合宿、冬山合宿、春山合宿、特別な山行）
◎　初登攀、第２登、海外遠征（太字）
●　現役部員・顧問の病死、事故死
▲　遭難死
★　遭難事故
□　『針葉樹』、『年報』、『針葉樹会報』、名簿、会員出版物の発行、規約の発布・改正、部歌の作曲
■　追悼録、遭難報告書の発行

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
1	1922 (大正11)	☆☆☆6.21　一橋山岳会創立（発会式） 於：神田一橋・階段式の化学教室 発起人：中川孫一、金田近二（共に予科3）、奥野綱重（専3） 入会者：松倉栄司（予2）、吉沢一郎（予1）、五十嵐数馬（予1）、村尾金二（予1）、松木謙三（予1） ○7.13～17　燕－槍ケ岳縦走、岳沢より前穂高 ※一橋山岳部最初の山行、 リーダー：金田近二、中川孫一ほか ○冬　第１回スキー合宿　野沢温泉・酒屋 ※酒屋でスキー合宿を学校単位でやったのは一橋が最初	1 2 3
2	1923 (大正12)	○夏　燕－槍ケ岳－上高地－徳本峠 村尾金二、矢作太郎ほか	
3	1924 (大正13)	○3.16～26　蔵王刈田岳、熊野岳、家形岳、一切経など 吉沢一郎、村尾、近藤恒雄ほか１名	1
4	1925 (大正14)	**◎3.24　発哺温泉から岩菅山スキー登山** 吉沢（一）、村尾、[沢柳、小栗、三富] ※積雪期に岩菅山に登頂した登山者の最も初期の記録 ○7.5～11　小西俣の遭難　吉沢（一）、渡辺九郎、矢作 ※三伏峠から赤石岳へ向かう途中 □12月『東京商科大学一橋山岳部年報 Nr.I 1925 (4-10)』発行	1 2

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
		※（『針葉樹』第 1 号）　創刊前の或る時期には「やま」という誌名にする予定だった。　編輯者：吉沢一郎	3
5	1926 （大正15） 12.26～ （昭和1）	□5 月　『一橋山岳部々報』第 1 号　発行 ※『東京商科大学　一橋山岳部々報－1－25’Nov 26’Apr』 （原本表紙の報名） ○7.3～14　東北朝日岳・野川遡行、大朝日岳から以東岳へ縦走　村尾、村瀬和四郎、吉沢（一） ○7.16～27　常念乗越より槍ヶ岳北鎌尾根、槍沢より涸沢－前穂高岳北尾根 吉沢（一）、中島　凞 ※創立 5 年目の夏期登山。上記以外に、燕、烏帽子、針ノ木方面 3 隊、甲斐駒・北岳隊の縦走あり ○7.22～8.1　銀山平から只見川遡行、燧ヶ岳他登頂 松木謙三ほか 1 名、案内者：富永重太郎 □12.16　『針葉樹』第 2 号（1926.5～1926.10）発行 編輯兼発行者：吉沢一郎 編輯委員：松倉栄司、吉沢一郎、五十嵐数馬、松木謙三、渡辺九郎	1 2 3 4
6	1927 （昭和2）	○1.6～14　渋峠より横手越え草津へスキーツアー 矢作、吉沢（一） ○3.21～4.1　針ノ木峠・板屋峠越え御山谷・一の越 村尾、五十嵐数馬、松木、吉沢（一）、顧問・田中薫、人夫 2 名 ※積雪期登山を初めて試みる ○7.10～19　塩見岳～赤石岳夏季縦走 高瀬進三、芋川稔一、案内者：堀田英美 ※この年の夏季縦走隊、他に後立山、薬師、白馬他 6 隊あり ○12.17～31　冬季スキー合宿　（野沢温泉・酒屋） □12.28　『針葉樹』第 3 号（1926.11～1927.10）発行 編輯兼発行者：吉沢一郎	1 2 3 4
7	1928 （昭和3）	○3.12～23　尾瀬スキー登山（至仏山、景鶴山、燧ヶ岳に登頂） 宇佐美敏夫、中島嘉一郎、手塚晴雄、金田一郎、磯野計蔵、他 1 名	1

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
		○6.23～7.4　宝川遡行、朝日岳・柄沢山を経て湯檜曽へ 横倉吟三郎、宇佐見、中島（嘉）、金田（一）、人夫2名 ※上州最奥の沢遡行と上越国境縦走を計画した野心的な企画だったが梅雨で中断、上州側に戻る。	2
		○7.27～8.4　剱岳・八ッ峰 横倉、磯野、宇佐美、人夫1名	3
		○8.6～8.9　槍ヶ岳小槍 横倉（単独） ※夏季縦走隊7隊、上高地キャンプ設営の中心岩峰登攀目的の上記2パーティーあり	4
		◎12.21～12.29　白馬岳 高木英二、赤城鈴太郎、宇佐美、金田（一）、磯野、中島（嘉）、人夫5名 ※厳冬期（12月後半から2月末までを言うとすれば）としては初登頂	5
		【針葉樹会】 ☆4.29　野外懇親会（卒業生の初めての会合） 於：調布の多摩川の河原 ※月1回如水会館で集まることになった。←針葉樹会発祥の日 ☆5.18　第1回例会（一橋山岳部之会）於：如水会館中集会室 ※月1回第3金曜に如水会館で集まることになった。	6 6
8	1929 （昭和4）	□3.1　『針葉樹』第4号（1927.11～1928.10）発行 発行者：中島嘉一郎 編輯責任者：中島嘉一郎、手塚晴雄、金田一郎 ○4.4　上州武尊山（花咲山崎より往復※） 吹原不二雄 ○5.22　上州武尊山（花咲山崎より往復※） 金田（一）、中島（嘉） ※上州武尊山残雪期の山行研究を志向する新機軸登山(その1) ○7.1～9　霞沢岳・明神岳・涸沢行 ［浦松佐美太郎］、吉沢（一）（以上先輩）、金田（一）、横倉、磯野、人夫2名	 1 2 3

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
		※先輩・学生合同山行の代表例	
		【針葉樹会】	
		☆☆☆6.21　復活第１回例会　於：如水会館	4
		※「針葉樹会」の名称決まる。命名者：吉沢一郎	
		◎8.5～8　剱岳東大谷左俣初登	5
		吉沢（一）、城南山岳会３名　案内者：丸田丈次郎	
		※東大谷全体の第２踏破、左俣の初登	
9	1930 (昭和5)	○1.3～14　蒲田川右俣より飛騨乗越経て槍沢へ	1
		金田（一）、磯野、中島（嘉）、手塚、人夫２	
		※厳冬期の槍ヶ岳肩横断	
		○4.20　上州武尊山（花咲から武尊山を藤原へ越した）	2
		吹原ほか１名	
		※上州武尊山残雪期の山行研究を志向する新機軸登山(その２)	
		□7.1　『針葉樹』第５号（1928.11～1930.3）発行	
		編輯兼発行者：芋川稔一	
		編輯委員：中島嘉一郎、芋川稔一、高瀬進三、太田又一	
		□10.18　『一橋山岳部々報』第２号（1930.5～1930.10）発行	
		※『一橋山岳部報　NO.2』　（原本表紙の報名）	
		編輯者：増山清太郎	
		○12.24～1.6　扇沢より爺ヶ岳を経て鹿島槍ヶ岳	3
		磯野、中森長太郎、鈴木英雄、安達泰三、堀岡　清、人夫３名	
		※幸運の遭難未遂（磯野）	
		【針葉樹会】	
		□3月　針葉樹会規約施行	4
		□5月　『針葉樹会報』第１号（第１年第１号）発行	5
		※編集：松木謙三	
10	1931 (昭和6)	□1.23　『一橋山岳部々報』第３号（1930.11.1～1931.1.10）発行	
		※『一橋山岳部報　NO.3』　（原本表紙の報名）	
		編輯者：増山清太郎	
		□5.8　『一橋山岳部々報』第４号（1931.1.25～1931.4.10）発行	
		※『一橋山岳部々報　NO.4』　（原本表紙の報名）	
		編輯者：小川竹夫	
		☆☆5.31　山岳部・部室落成披露	1

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
		□7.5　『一橋山岳部々報』第5号（1931.5.1〜1931.6.14）発行 ※『一橋山岳部々報　NO.5』　（原本表紙の報名） 編輯者：鈴木英夫	
		★7.19　小黒部仙人尾根にて小橋謙三部員（予3）墜落重傷	2
		☆7.23　遭難事件報告会　於：如水会館	
		□11.5　一橋山岳部規約改正	
		□11.25　『一橋山岳部々報』第6号（1931.6.28〜11.8）発行 ※『一橋山岳部々報　NO.6』　（原本表紙の報名） 編輯者：大友亮蔵	
		□12.9　「一橋山岳部々歌(山讃賦)」　石川強作曲	3
		・1930年頃作曲依頼、1931年春頃に完成、12月9日の「針葉樹会」で披露され部歌に認定 （「山讃賦」松崎武雄作詞　・・・『針葉樹』第1号所収） ・「一橋山岳部に寄する」藤島敏作詞　・・・石川強が作曲するも譜面なし	
11	1932 (昭和7)	○1.3〜12　乗鞍岳 鈴木（英）、丸茂平造、清水達夫、田中秀三郎、増山清太郎、堀岡、山案内1名	1
		○3.17〜31　魚沼駒ヶ岳と北の又川入り 高見　要、鈴木（英）、増山、十合健二、人夫2名 ※知られざる雪山に挑む	2
		○7.6〜9　谷川岳南面・谷川本谷遡行 十合ほか1名	3
		○7.12〜8.16　山岳部創立十年目の夏山として、上高地にベースキャンプ（第1次、第2次、途中3日中断）が設けられ、霞沢、白馬、立山、平ー針ノ木、黒部東沢、涸沢岩登り、黒部東沢、涸沢岩登り、槍平から槍穂、乗鞍・御岳などに登る。	4
		□8.1　『針葉樹』第6号　―十周年記念号―（1930.4〜1932.3）発行 編輯兼発行者：増山清太郎 編輯委員：増山清太郎、太田又一、清水達雄 ・芋川稔一「紀文：漂泊に於ける山と人との関連」 ※登攀志向に傾斜する前夜の山旅派の登山論議	

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
		○12.23～30　冬期スキー合宿（野沢温泉） 部員（増山ほか5名）、部員外（数名）	5
12	1933 (昭和8)	○1.1～5　神楽ヶ峰スキー登山 吉沢（一）、松木、村尾、磯野、手塚、宇佐美（以上OB）、増山、堀岡 ※過渡期的厳冬期登山（旧世代） ○7.11～8.2　上高地にベースキャンプが設けられ、槍・穂高縦走、霞沢三本槍、岳川より奥穂、涸沢より奥穂、奥又白から前穂に分散山行。その前に白馬から上高地、燕・槍・穂高－上高地縦走を行う。 ☆9.10　予科　石神井から小平へ移転 ○12.18～1.3　冬期スキー合宿（五色温泉） 部員（十合ほか14名）、部員外17名	1 2 3
13	1934 (昭和9)	○1.3～6　八ヶ岳・赤岳他 小谷部全助、齋藤正治 ※過渡期的厳冬期登山（新世代） ☆6.29　予科山岳部独立（認可）　於：一橋予科会定期総会 ○7.13～20　剱沢生活（定着） これに先立って（針ノ木峠、立山、剱行）、（後立山縦走）、（剱沢行）、（池谷遡行）が行われ、剱沢に集合した。 ●8.28　宮川雄二郎部員（本3）　千葉県御宿海岸にて水死 □10.10　『針葉樹』第7号（1932.4～1934.7）発行 編輯兼発行者：堀岡　清 編輯委員：堀岡　清、林　俊介、望月達夫 □10.20　『針葉樹会報』特別号　「故宮川雄二郎君追悼号」発行 ○11.2～18　鹿島槍ヶ岳天狗尾根 小谷部、森脇芳之、鷹野雄一 ○12.22～30　鹿島槍ヶ岳東尾根 小谷部、鷹野	1 2 3 4
14	1935 (昭和10)	■2.15　『故宮川雄二郎君追悼録　おちば（落葉）』発行 ※編輯兼発行者：堀岡　清 ○4.10～16　檜山沢より飯豊山スキー登山行	1 2

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
		齋藤正治、林俊介、鷹野、人夫１名	
		※残雪の深山幽谷の山の親しさと住む人の純朴さを味わう。	
		○6.6～10　カクネ里より鹿島槍ヶ岳	3
		小谷部（単独）	
		◎6.8　北壁右ルンゼ単独初登	
		○6.19～24　北岳バットレス	4
		小谷部、高野、森川眞三郎	
		◎6.23　第３尾根無雪期初登（小谷部、高野、森川）	
		☆6.28～29　予科山岳部主催山岳写真登山用具展覧会	
		於：小平評議員室	
		○7.9～29　上高地天幕生活（定着）	5
		玄文沢ＢＣから穂高周辺の岩登り、小縦走を精力的に行う。	
		22～26 には涸沢生括（小林重吉他４名）も。	
		部員 23 名、先輩２名、ほか８名、総員 33 名参加。	
		小谷部は錫杖岳・烏帽子岩を斎藤正治と登っている。	6
		○7.17～21　團衛谷を下り天上沢を上る	7
		吉沢（一）、近藤恒雄（以上 OB）、望月達夫ほか１名、案内者：下川隆夫	
		※峻谷の初下降	
		☆10 月上旬　部室備付の部日誌が置かれる（予科部室にも）。	
		○10.26～113　大樺小舎生活・北岳バットレス（第４、５、６、７尾根）	8
		村尾（OB）、小谷部、望月（達）、小林（重）、和田栄達、佐々木誠、岩崎利一、ほか２名、人夫１名	
		◎10.30　第４尾根マッチ箱直登ルート初登	9
		村尾、望月（達）、小林（重）	
		★10.31　鳳凰山地蔵岳オベリスク登攀で森川眞三郎部員（予３）遭難	10
		10.26 発、林ほか 11 名＋人夫１名で大樺小舎秋季合宿に向かう途中に発生	
		□11.25　『針葉樹』第８号（1934.7～1935.8）発行	
		編輯兼発行者：林　俊介	
		編輯委員：林　俊介、柿原謙一、望月達夫、小谷部全助、小林重吉、岩崎利一	

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
		・「雑記：秩父三題　1. 峠（岩崎利一）　2. 沢（森川眞三郎）、3. 原生林（柿原謙一）」	11
		※「針葉樹会」の由縁たる奥秩父の峠、沢、原生林を 3 人が綴る	
		・記録：奥秩父山小舎生活　森川眞三郎　―創部以来親しんだ奥秩山行の一例	12
		☆12.5～7　予科山岳部主催山岳写真展覧会　於：小平会議室	
		○12.7～16　北岳バットレス・第 3、5 尾根	13
		小谷部、高野、小林（重）	
		◎12.13　第 3 尾根積雪期初登	
15	1936	○3.4～11　野呂川遡行・仙丈岳	1
	(昭和11)	小谷部（単独）	
		●3.22　湯田坂　哲部員（予 3）　病没	
		○5.27～6.2　鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁（北稜）	2
		小谷部、森川	
		○7.8～23　穂高涸沢合宿	3
		林ほか 21 名	
		※それまで縦走してから集合し定着合宿としていたのを、先に全員合宿で統制ある行動、解散後自由行動とした。	
		○9.2～10　大樺小舎生活・北岳バットレス（第 1、4、5 尾根）	4
		小谷部、望月（達）、森川、大塚　武、日江井正巳	
		◎9.8　第 1 尾根無雪期初登（小谷部、森川）	
		●10.21　関根　修部員（専 2）　病没	5
		○12.23～1.10　北岳バットレス（第 1、4 尾根）	6
		小谷部、森川、望月（達）、大塚、日江井	
	1937	**◎1.2　第 1 尾根積雪期初登（小谷部、森川）**	
		◎1.5　第 4 尾根積雪期初登（小谷部、森川）	
		【針葉樹会】	
		■11.15　『故中島嘉一郎君追悼録　菰野菊』発行	7
		昭和 10 年 2 月 27 日病没	
		※編輯兼発行者：金田一郎	
		編輯委員：久保田禮治、磯野計蔵、金田一郎、手塚晴雄	
16	1937	☆1.25～26　予科山岳部主催山岳写真展覧会　於：小平集会室	
	(昭和12)	○3.14～4.1　遠見尾根より鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁及び五竜岳	1

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
		小谷部、森川 第1次サポート：小林（重）、鷲崎雄四郎、宮城恭一 第2次サポート：森脇、大塚 **◎3.28～29　荒沢奥壁北稜積雪期初登（小谷部、森川）**	
		○5.24～29　甲斐駒摩利支南稜 大塚、日江井 ※予科部員による先駆的登攀	2
		○7.9～22　剱沢合宿 小谷部ほか15名、OB1名	3
		○7.22～26　夏山縦走：（剱沢より）針の木越え、大滝山越え 鷲崎、榎本直司	4
		○7.22～27　夏山縦走：剱沢より薬師、槍へ　森川ほか9名	5
		○7.22～27　夏山縦走：（剱沢より）南沢より烏帽子、槍へ 原鉄三郎、岩崎	6
		○7.25～8.6　夏山定着：上高地天幕生活　望月（達）ほか16名 ・8.1～5　奥又白生活　小谷部ほか4名	7
		□7.25　『針葉樹』第9号（1935.9～1937.3）発行 編輯兼発行者：望月達夫 編輯委員：小谷部全助、望月達夫、森川眞三郎、佐々木　誠	
		○10.19～26　奥又白生活　小谷部ほか4名	8
		○12.17～31　徳沢小舎生活　小谷部ほか13名 ★12.20　松高ルンゼ登攀中雪崩に遭い日江井正巳部員（予3）負傷	9
		【針葉樹会】 ☆11.13　山岳部創立15周年記念晩餐会　於：如水会館日本間 OB18名、現役18名	10
17	1938 （昭和13）	○1.1～7　奥又白幕営（徳沢合宿に引続き）　小谷部ほか4名	1
		○3.16～20　前穂高岳東壁　小谷部、森川、船本文治 **◎3.17　前穂高岳東壁・北壁ルート積雪期初登（森川、船本）** ※両人、手足凍傷に冒される。	2
		☆6.12　予科山岳部展覧会	
		○7.13～25　涸沢合宿 佐々木ほか10名	3
18	1939	○3.12～30　岳川谷生活	1

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
	(昭和14)	船本ほか4名	
		○9.3～10　北岳バットレス（第1、3、4尾根）	2
		大塚、山田亮三、根本　大、高野秀男	
		◎9月　第1尾根無雪期第2登（山田（亮）、根本）	
		□9.15　『針葉樹』第10号（1937.4～1939.6）発行	
		※編輯兼発行者：大塚　武	
		編輯委員：岩崎利一、船本文治、大塚　武、日江井正巳、山田亮三	
		○12.18～28　北穂高岳滝谷第4尾根	
		大塚、山田（亮）、佐藤政雄、根本	
		◎12.23～24　第4尾根厳冬期初登（大塚、山田（亮））	3
19	1940	○3.10～27　横尾本谷より槍ヶ岳	1
	(昭和15)	山田（亮）、根本、高野（途中下山）	
		※当初、小槍登攀を目指したが、悪天候続き槍本峰登頂に終わる。	
		○5月　鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁南稜積雪期第2登	2
		山田（亮）、佐藤（政）	
		○7.13～21　夏山縦走：針ノ木峠から五色ヶ原	
		（薬師、黒部源流を経て上高地）	
		▲7.18　北アルプス奥木挽山で友田純一部員（予1）遭難死	3
		○8月　穂高・涸沢岩登り	
		山田（亮）、高野、松下順吉、小林茂雄、佐野茂雄、	
		清水一郎、鈴木　肇ほか	
		□11.30　『針葉樹会報』第91号　「友田純一郎遭難顛末」発行	
20	1941	○3.15～25　遠見尾根天幕生活	1
	(昭和16)	根本ほか7名、OB1名	
		※大遠見の手前に設営して五竜岳登頂、五龍東壁を試登	
		○7.9～18　友田純一追悼碑建設作業　於：五色ヶ原	2
		根本ほか7名	
		○7.10～16　剱沢生活	3
		佐野ほか5名	
		■7.18　『友田純一君追悼録』発行	
		※編輯兼発行人：山田亮三	
		☆7.18　友田純一遭難碑除幕式　於：五色ヶ原	

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
		○7.19～24　五色ヶ原より徳沢（友田追悼縦走） 深谷光茂ほか17名	4
		○10.17～20　奥秩父縦走（甲武信岳－国師岳－金峯山）の予定で出発するも ▲10.24　甲武信岳・東沢で前田道夫（専2）、古澤孝平（専2）、長沼廣次（専1）3部員遭難死	5
21	1942 （昭和17）	○5月　鹿島槍ヶ岳・鎌尾根　山田（亮）ほか20名 ○5月　鹿島槍ヶ岳から白馬岳　根本ほか6名 ○5月　爺ヶ岳から針ノ木岳　山田（亮）ほか4名	1
		○7.21～30　穂高・涸沢岩登り合宿　山田（亮）ほか25名 ○12月　乗鞍岳スキー　小林（茂）ほか ※大きな組織的な最後の合宿	2
		【針葉樹会】 □10.30　『針葉樹会報』第99号　発行（第100号も予定されていたが最終号となった）	
22	1943 （昭和18）	○3月　槍ヶ岳・一ノ俣合宿　小林（茂）ほか4名 ○3月　大沢小屋合宿　松下ほか4名 ○4.2～7　八ヶ岳合宿　中村讃治、山崎　擴、石井左右平 ○7月　穂高・涸沢合宿　石井ほか　予科2年生が主力で予科1年生を指導 ■10.18　『前田・古澤・長沼三君追悼録　奥秩父』発行 ※編輯兼発行人：小林茂雄 ○12月　槍沢より槍ヶ岳　中村（讃）、山崎、石井、笠原広信ほか	1
23	1944 （昭和19）	○3月　穂高・奥又白　中村（讃）ほか3名、［山上（松高生）］ ・前穂東壁Aフェース　中村（讃）、［山上］ ○4月　カクネ里より鹿島槍　野尻七郎ほか4名	1
24	1945 （昭和20）	☆☆6月末　山岳部・部室閉鎖（戦争による） ☆☆8月　山岳部・部室再開 ☆☆秋　山岳部・部室改修（床の張り替え、屋根の補修）	1
25	1946 （昭和21）	○6月　谷川岳　石井ほか4名 ・戦後最初の合宿。マチガ沢、一ノ倉沢を登る。 ○7月　穂高・涸沢＆奥又白合宿　石井ほか	

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
		○10 月　三ツ峠　新入部員歓迎山行　樋口　洪ほか	
26	1947 (昭和22)	表末【資料 1】参照 ○11 月　八ヶ岳　小泉三好ほか ・戦後派のみの山行。 ○12 月　乗鞍岳スキー　伊藤恙生ほか	
27	1948 (昭和23)	表末【資料 1】参照 ○5.12～　谷川岳マチガ沢合宿　佐藤　勇ほか 7 名 ▲5.23　マチガ沢にて、雪塊直撃により山中健雄部員（本 1）遭難死 ○夏　＜穂高合宿＞　新人の養成 ☆☆秋　山岳部・部室・中二階の居住性復元（階段や棚の類の補強・修理） ○冬　＜蔵王スキー＞　新人の養成	1 2
28	1949 (昭和24)	表末【資料 1】参照 ○夏　＜白根三山縦走＞　望月敏治、小泉、竹脇　量 ■11.5　『故山中健雄君追悼録　谷川岳』発行 ○冬　＜八方尾根スキー＞　小泉ほか ・明大小屋を根拠地とし、唐松岳追復	
29	1950 (昭和25)	○夏　＜北岳バットレス＞　小泉ほか ○冬　＜乗鞍合宿＞　位ヶ原山荘を根拠地とし雪洞訓練などし翌年の冬山準備	
30	1951 (昭和26)	○夏　＜剱沢生活、針ノ木峠への縦走＞ ○12 月　遠見尾根・五竜岳　小泉ほか ・12.25　五竜岳登頂　小泉、横山晥一	1 2
31	1952 (昭和27)	○7.11～27　穂高・涸沢合宿＆縦走　中村正司ほか 27 名 ★7.14　涸沢・北穂沢下で幕営、早朝睡眠中に落石に見舞われ福田　孟部員（1 年）負傷 ・本体出発より涸沢到着まで太田可夫・山岳部長同行 ○7 月　奥又白生活　渋谷一郎、石原　脩、甘利仁朗、佐薙　恭 ☆☆秋　山岳部・部室補修（屋根、雨樋、外壁）	1 2
		【針葉樹会】 □9.1　『針葉樹会報』復刊第 1 号　発行 ※創立 30 周年記念事業として	3

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
		※編輯者：石井左右平、伊藤恙生	
32	1953 (昭和28)	○2.26～3.13　穂高・岳沢合宿　石原 脩ほか3名 ○7.14～25　夏山合宿（剱沢定着）　石原ほか21名 ○7.26～31　夏山縦走（剱－槍）　石原ほか18名 ○12.17～25　栂池スキー合宿　石原ほか9名	1 2 3
33	1954 (昭和29)	○3.14～.31　春山合宿（岳川よりコブ尾根・畳岩尾根、奥穂・前穂・西穂稜線）　石原ほか8名 ☆☆6.11　小平部室開きコンパ 食堂裏の2階、一時寮であった10畳敷の部屋 ○7.15～23　奥又白合宿　吉田義則ほか6名 ○7.15～26　涸沢合宿　石原ほか25名 ○7.26～8.2　夏山縦走（涸沢－槍－蒲田川右俣－安房峠） 須山修平ほか4名 ○7.26～8.3　夏山縦走（涸沢－船窪）　石原ほか10名 ○12.14～26　冬山合宿（遠見尾根－五竜小屋・五竜岳、唐松岳往復）　石原ほか7名 ※五竜小屋から鹿島槍ヶ岳登頂、唐松岳－白馬岳－栂池縦走の計画であったが、予想以上の荒天で果せなかった。 ○12.16～26　冬期スキー合宿（栂池）　須山ほか20名	1 2 3 4 5 6 7
34	1955 (昭和30)	○3.13～4.1　春山合宿（横尾、涸沢より前穂高岳北尾根） ※吉田ほか12名 ☆7.14　山岳部バッジ出来上がる（復刻製作）。 昔とほぼ同じものが完成 ○7.15～25　夏山合宿（剱沢定着）　吉田ほか32名 ○7.26～31　夏山縦走（剱－槍）　吉田ほか13名 ○7.26～31　夏山縦走（剱－白馬）　甘利ほか9名 ☆11.3～6　一橋祭山岳部写真展（一橋大学創立80周年記念の一環として） ○12.12～25　冬山合宿（鹿島槍ヶ岳天狗尾根と北壁ピーク・リッジ）　吉田ほか6名 □12.31　『針葉樹』第11号（1953.4～1955.3）発行 ※編輯兼発行者：吉田義則 ※編輯委員：吉田義則、佐薙　恭、甘利仁朗、上原利夫、茂木明俊	1 2 2 2 3

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
35	1956 (昭和31)	○3.14～31　春山合宿（明神岳東稜）　山本健一郎ほか12名	1
		○7.12～27　夏山合宿（涸沢定着）　山本（健）ほか33名	
		OB3名、部外1名	2
		○7.28～8.1　夏山縦走（笠ヶ岳、烏帽子岳） 山本（健）ほか17名	2
		○7.28～8.5　夏山合宿（北岳バットレス）　甘利ほか10名	2
		○12.8～24　冬山合宿（北岳バットレス） 山本（健）ほか11名	3
36	1957 (昭和32)	○3.13～4.1　春山合宿（白馬岳猿倉台地を中心としたバリエーション・ルート）　岡垣治雄ほか18名	1
		◎3.30～31　前穂高岳北尾根4峰正面壁松高ルート積雪期初登攀（甘利）	2
		※紫峰山岳会パーティー（甘利仁朗、永光俊一）	
		○7.14～28　夏山合宿（剱沢定着）　岡垣ほか37名	3
		○7.29～8.2　夏山縦走（剱沢－五色ヶ原－烏帽子岳－葛温泉） 岡垣ほか27名	3
		○8.25～30　北穂高岳滝谷　中村幸正、中村　保、篠原敏弘	
		◎8.30　グレポン初登　中村（幸）、中村（保）、[芳野満彦]	4
		○12.7～27　冬山合宿（槍ヶ岳から極地法による奥穂高岳登頂）　岡垣ほか10名	5
37	1958 (昭和33)	**◎1.7～8　北岳バットレス中央稜　積雪期初登攀　甘利**	1
		※RCCⅡパーティー（奥山章、吉尾弘、芳野満彦、小板橋徹、甘利仁朗）	
		○3.12～30　春山合宿（剱岳早月尾根）　澤木一夫ほか12名	2
		◎3.15～16　谷川岳一ノ倉沢烏帽子沢奥壁凹状岩壁　初登、積雪期初登　甘利	3
		※RCCⅡパーティー（奥山章、小板橋徹、甘利仁朗） 先行した雲表倶楽部パーティー（松本龍雄、山田宏、田中敏雄）に合流	
		※RCCⅡ発足時の記念碑的登攀の一つ。積雪期に新規開拓した意欲的な初登攀。	
		○7.14～29　夏山合宿（涸沢定着）　澤木ほか31名	4
		○7.30～8.1　夏山縦走（涸沢－剣）　澤木ほか19名	4
		☆11.4　山岳部々長辞任（太田可夫）	

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
		○12.10～26　冬山合宿（南アルプス北部縦走　三伏峠－北岳） 澤木ほか 11 名	5
38	1959 （昭和34）	○3.8～22　春山合宿（剱岳赤谷尾根から極地法による剱岳本峰、毛勝山登頂）　渡辺嘉佑ほか 14 名	1
		○7.11～25　夏山合宿（剱沢、三の窓定着） 渡辺（嘉）ほか 26 名	2
		○7.25～30　夏山縦走（剱－槍）　渡辺（嘉）ほか 11 名	2
		○7.26～8.1　夏山縦走（剱－白馬）　中川滋夫ほか 10 名	2
		☆9.12～14　山中健太郎遭難碑兼道標建立 於：谷川岳マチガ沢厳剛新道分岐点	3
		☆10.25　山中健太郎遭難碑除幕式　於：谷川岳マチガ沢 （昭和 42 年に谷川岳の遭難碑は全て撤去、土合の遭難者合同慰霊碑に合祀された）	4
		☆11.3　山岳部々長就任（関恒義）	
		○12.6～21　冬山合宿（燕岳から蝶ヶ岳への縦走と大天井岳からの槍ヶ岳登頂）　渡辺（嘉）ほか 12 名	5
39	1960 （昭和35）	○3.8～28　春山合宿（剱岳早月尾根より剱岳及び頂上周辺のバリエーション・ルート）　中川（滋）ほか 13 名	1
		○3.19　剱岳本峰南壁 A1　中島　寛、大賀二郎	
		◎3.22　剱岳チンネ左稜線：積雪期初登　中川、小林進二	
		○3.23　剱岳本峰南壁 A2　三股　宏、倉知　敬、三井　博	
		○4.30～5.8　鹿島槍ヶ岳・天狗尾根および北壁・荒沢奥壁 中島（寛）、大賀、三股、大　建二郎	2
		・5.3　北壁ピーク・リッジ P1B リッジ（中島（寛）、大）・P3 リッジ（大賀、三股）	
		・5.4　北壁主稜（大賀、大）	
		・5.4　蝶型岩壁左稜（中島（寛）、三股）	
		・5.6　荒沢奥壁北壁（中島（寛）、大賀、三股）	
		○7.9～23　夏山合宿（涸沢定着）　中川（滋）ほか 25 名	3
		○7.24～31　夏山縦走（涸沢－笠ヶ岳－針ノ木岳） 中川（滋）ほか 11 名	4
		□7.25　『針葉樹』第 12 号（1955.4～1960.3）発行 ※発行者：中川滋夫 編輯委員：峰高教通、大賀二郎、山本尚禎、倉知　敬	

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
		○7.28～31　夏山縦走（黒部川横断）　中島（寛）ほか2名	5
		○7.24～31　夏山縦走（涸沢－剱岳）　大ほか5名	6
		○8.1～5　夏合宿延長戦（剱岳・チンネと池の谷） 大賀ほか9名	7
		○12.13～25　冬山合宿（冬期鹿島槍ヶ岳集中） 中川（滋）ほか13名 ・12.13-20　天狗尾根　中島（寛）ほか3名 ・12.13-22　東尾根　小林（進）ほか3名 ・12.14-25　赤岩尾根・爺ヶ岳西俣奥壁右稜・左稜 中川（滋）ほか5名 **◎12.24　爺ヶ岳西俣奥壁左稜　積雪期初登** 中島（寛）、小林（進）、倉知、大、三井	8
40	1961 （昭和36）	☆2.3　アンデス遠征隊壮行会　於：国立学生食堂	
		○4.3～13　春山合宿（五竜岳東面・八方尾根）　大ほか11名	1
		○4.29～5.3　爺ヶ岳東面　大ほか4名 ★5.3　爺ヶ岳西俣奥壁中央稜にて大　建二郎部員、 三井　博部員（4年）滑落事故	2
		○7.11～26　夏山合宿（剱岳）　大ほか19名	3
		○7.26～8.1　夏山縦走（剱－槍ヶ岳－大滝山）　大ほか6名	4
		○7.27～8.1　夏山縦走（剱－笠ヶ岳）　宮本英治ほか5名	5
		○12.10～26　冬山合宿（爺ヶ岳東尾根－針ノ木岳） 大ほか10名 ※新越乗越手前の尾根から下山	6
		【針葉樹会】 **◎4.2～11.30　ペルー・ボリビア・アンデス遠征** **（一橋大学創立85周年記念事業の一環）** 隊長：吉沢一郎（昭3卒）　副隊長：甘利仁朗（昭33卒） 隊員：中村　保（昭33卒）、丸山則二（昭33卒）、 中川滋夫(4年)、中島　寛(4年)、倉知　敬(3年) ・6.12　プカヒルカ北峰6,050m初登（中村、中島、中川） ・6.13　プカヒルカ北峰6,050m第2登（甘利、丸山、倉知） ・7月　チャウピ・オルコ峰周辺の登攀（ボリビア・アポロバンバ山群） ・8月　ププヤ山域の踏査・登攀（ボリビア・アポロバンバ	7

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
		山群）	
41	1962 （昭和37）	○3.3～27　春山合宿（栂池より唐松岳）　臼井　弘ほか11名 ○7.13～　夏合宿（涸沢定着）　臼井ほか16名 ★7.19　滝谷第4尾根にて名和泰三部員(3年）滑落事故 7.20　合宿中止 ☆7.23　臨時針葉樹会（事故経過報告並びに費用調達について）　於：如水会館 ○12.13～27　冬山合宿（中央アルプス縦走　木曽駒－南駒ヶ岳）　臼井ほか9名	1 2 3
42	1963 （昭和38）	○2.28～3.25　春山合宿（横尾尾根から奥穂高岳） 蛭川隆夫ほか13名 ○5.13～　5月の穂高周辺偵察行（西穂－槍ヶ岳縦走・明神岳東南稜） ★5.27　奥穂高岳の下りで中橋寿雄部員（4年）滑落事故 ○7.18～31　夏山合宿（剱沢周辺定着）　蛭川ほか16名 ○8.1～4　夏山縦走（内蔵助平－棒小屋沢－爺ヶ岳－針ノ木岳）　竹中　彰ほか3名 ○8.1～7　夏山縦走（黒薙－柳又谷－雪倉岳－白馬岳－唐松岳）　小島和人ほか3名 ○8.1～7　夏山縦走（内蔵助平－平－五色－薬師岳－黒部源流－鷲羽岳－湯俣屋根）　蛭川ほか11名 ○12.14～27　冬山合宿（明神主峰東稜－前穂高岳往復） 蛭川ほか9名	1 2
43	1964 （昭和39）	○3.3～27　春山合宿（湯俣尾根から槍・北穂へ） 小島ほか11名 ○6.11～21　三年合宿（奥又白周辺の岩登り） 高崎俊平ほか5名、OB1名 ○7.16～29　夏山合宿（涸沢周辺定着）　小島ほか18名 ○7.30～8.3　夏山縦走（上の廊下へ向かうも岩菅小谷で引き返す）　佐藤之敏ほか3名 ○7.30～8.7　夏山縦走（横尾本谷－中岳－槍－双六－抜戸－打込谷下降－金木戸川－双六－湯俣）　原　博貞ほか3名 ○7.30～8.8　夏山縦走（剱まで）　小島ほか4名 ○8.3～11　夏山縦走（新冠川－幌尻岳－エサオマントッタベ	1 2

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
		ツ岳－トッタベツ川－帯広）　半場三雄ほか3名	
		○8.12～15　富士山清掃（清富会の第1回）	3
		代表幹事：小島和人	
		※一橋山岳部が発起人（25名）、東京女子大（7名）、	
		東京外語大（2名）、東京学芸大（3名）、	
		東京家政学院（7名）、一橋ワンダーフォーゲル部（17名）	
		□10.31　『針葉樹』第13号（1960.4～1962.3）発行	
		※編集委員：倉知　敬、大　建二郎、三森茂充、高崎俊平	
		○12.7～26　冬山合宿（北鎌尾根）　小島ほか16名	4
		【針葉樹会】	
		☆6.1　針葉樹会会則施行	
44	1965	○3.2～24　春山合宿（岳沢周辺の山々）高崎（俊）ほか12名	
	（昭和40）	○8.16～19　富士山清掃（清富会の第2回）	1
		代表幹事：高崎俊平	
		※一橋山岳部（16名）、一橋ワンダーフォーゲル部（18名）、	
		東京女子大（24名）、東京外語大（3名）、東大（1名）、	
		東工大（1名）、理科大（1名）	
		○8.24～30　夏山縦走（黒四－五色－薬師－槍－横尾、定着に合流）　池知昭洋ほか4名	
		○8.24～9.6　夏山合宿（滝谷、奥又、屏風岩周辺）　高崎（俊）ほか5名	
		○9.27～30　谷川岳一ノ倉沢衝立正面　原、佐藤（久）、池知、石田信隆	2
		※一橋山岳部の最初のトレース	
		○12.14～24　冬山合宿（笠ヶ岳－硫黄尾根）　池知ほか4名	
		○12.15～29　冬山合宿（涸沢岳西稜－北穂－横尾尾根）	3
		高崎（俊）ほか5名	
		【針葉樹会】	
		◎7.20－8.26　カラコルム遠征先遣隊　1965年夏	4
		（一橋山岳会）	
		アフガニスタン・ヒンズークシュ遠征	
		表末【資料2】参照	
		隊長：甘利仁朗（昭33卒）	
		隊員：丸子博之（昭35卒）、佐藤之敏（昭41卒）	

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
		・8.26　ミールサミール 6,060m 登頂（第 2 登）	
		☆10.19　ヒマラヤ先遣隊報告会　於：如水会館	5
45	1966 （昭和41）	○3.6～23　春山合宿（三伏－塩見－北岳－池山吊尾根） 岡田健志ほか 6 名	
		★3.18　八本歯にて加藤正巳部員（2 年）転落足首骨折	
		○8.1～15　夏山定着合宿（剱沢周辺）　岡田（健）ほか 10 名	
		○8.12～15　富士山清掃（清富会の第 3 回） 代表幹事：岡田健志 ※一橋山岳部（12 名）、一橋ワンダーフォーゲル部（11 名）、東京女子大（4 名）、東京外語大（1 名）	1
		○12.10～15　冬山合宿（内蔵助平往復）　岡田（健）ほか 8 名 ※当初の計画では、内蔵助平から真砂岳を経て剱岳登頂	
		【針葉樹会】 □11.15　『針葉樹会報』第 16 号 ―磯野計蔵氏追悼特集― 発行	
46	1967 （昭和42）	○3.4～18　春山合宿（杓子岳双子尾根－唐松岳・白馬三山） 中村雅明ほか 7 名	1
		●7.4　太田可夫顧問（元山岳部長）　逝去	2
		○8.1～7　夏山縦走（黒部源流－薬師沢－薬師岳） 加藤（正）ほか 2 名	
		○8.15～22　夏山縦走（針ノ木岳－槍ヶ岳－涸沢） 中村（雅）ほか 4 名	
		○8.22～9.4　夏山定着（涸沢周辺）　中村（雅）ほか 8 名	
		☆☆10.5　山岳部室補修（土台&床：72,400 円）	
		○12.11～26　冬山合宿（八方尾根－五竜岳－Ａ沢のコルにて敗退　加藤（正）ほか 3 名	3
		○12.12～26　冬山合宿（爺ヶ岳南尾根－鹿島槍ヶ岳往復） 中村（雅）ほか 4 名 ※当初の計画では、八方尾根からの縦走隊と合流し針ノ木岳登頂	4
		【針葉樹会】	
		☆5.24　ヒンズークシュ遠征隊歓送会 於：如水会館南北日本間	5
		◎5.29－8.30　東部ヒンズークシュ・ロシュゴル氷河群遠征（一橋山岳会）	6

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
		隊長：山本健一郎（昭 32 卒） 隊員：倉知　敬（昭 38 卒）、佐藤之敏（昭 41 卒）、 原　博貞（昭 41 卒）、池知昭洋（昭 41 卒）、佐藤久尚（昭 41 卒）、 宮武幸久（3 年）、ドクター：鈴木羊三（慈恵医大山岳部 OB） ・8.4　ノーバイズノン・ゾム 6,600m 初登（倉知、佐藤（之）、原、佐藤（久）） ・8.11　ウドレン・ゾム南峰 7,050m 初登（倉知、佐藤（之）、原、佐藤（久）） ・8.24　サラグラール南峰 7,307m 初登（佐藤（之）、原） □10.31　『針葉樹会報』第 20 号 ―太田可夫先生追悼集― 発行 ☆11.17　ヒンズークシュ遠征隊帰朝歓迎会（総会） 於：如水会館南北日本間	7
47	1968 (昭和43)	○3.5～23　春山合宿（弥陀ヶ原より剱岳）　俵　昭ほか 11 名 ○4.25～5.2　遠見尾根－カクネ里－天狗尾根－鹿島槍ヶ岳往復　俵ほか 5 名 ▲5.1　下山途中、第 1 クーロアール付近で中村慎一郎部員（2 年）滑落遭難死 ○7.25～30　夏山定着（涸沢周辺、北尾根等）　俵ほか 7 名 ○7.31～8.8　夏山縦走（白出のコル－笠ヶ岳－赤牛岳－平－針ノ木－鹿島槍ヶ岳） ○12.13～23　冬山合宿（爺ヶ岳南尾根より鹿島槍ヶ岳、針ノ岳往復）　俵ほか 5 名	1
		【針葉樹会】 ☆10.21　東沢遭難追悼碑除幕式　於：釜の沢出合	2
48	1969 (昭和44)	○3.4～14　春山合宿（大沢尾根より赤石、荒川岳） 宮武幸久ほか 4 名 ○7.25～8.11　夏山合宿（剱沢定着、チンネ左稜線等） 宮武ほか 7 名 ※定着終了後、槍へ向かう豪雨のため五色で断念 ○10.7～12　秋山縦走（茶臼岳－北岳）　西牟田伸一ほか 3 名 ○10.7～12　秋山縦走（仙丈岳－両股－北岳－農鳥岳） 金子晴彦、井草長雄	1
		【針葉樹会】	

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
		☆8.19　日本山岳会第二次エヴェレスト偵察隊へ参加中島寛、佐藤之敏両君歓送会　於：如水会館 ※南西壁の 8,050m まで到達し、登攀ルートを偵察	2
49	1970 (昭和45)	○3.26～4.4　春山合宿（戸台－甲斐駒－仙丈－両股－北岳－農鳥岳）　金子ほか 6 名 ■6.1　『故中村慎一郎君追悼録』 発行 発行兼編集人：西牟田伸一 ○4.21～27　ポスト春山合宿（戸台川本谷－甲斐駒－鋸岳－尾白川本谷、坊主岩）　金子ほか 4 名 ○7.27～8.6　夏山合宿（針ノ木峠－高天原、黒部上ノ廊下、源流－笠ヶ岳－錫杖岳）　金子ほか 5 名 ○8.31～9.5　ポスト夏山合宿（甲斐駒黄蓮谷、赤石沢奥壁）　金子ほか 3 名 ▲9.2　中央壁にて西牟田伸一部員（4 年）墜落、橋本明部員（2 年）も墜落遭難死 ○12.25～1.2　冬山合宿（栂池スキー合宿）　金子ほか 5 名	1 2
		【針葉樹会】 ☆3.5　中島君エベレスト壮行会　於：如水会館 中川孫一会長ほか 25 名 ☆3.9～6.20　日本山岳会第二次エヴェレスト登山隊へ中島寛会員（昭 36 卒）参加 ※南西壁登攀チームに所属、落石により負傷 ▲6.28　平川紀男会員（昭 41 卒）前穂高Ａ沢踏替点近くで遭難死	3 4 5
50	1971 (昭和46)	■6 月　『赤石沢　追悼　橋本明君』　発行　編集：金子晴彦 ○7.26～8.9　夏山縦走（涸沢定着後剣岳まで縦走） 井草ほか 5 名 ※5 月連休の新人歓迎山行、6 月の谷川訓練、夏山縦走以外は合宿なし。他は個人山行のかたちで、1 年が中心となり OB の同行を求めて月 1、2 回山行	
		【針葉樹会】 ☆12.12　丹沢大野山で中川孫一前会長が行方不明 ※12.14～針葉樹会員捜索活動	1

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
51	1972 (昭和47)	○4.28～5.7　内蔵助平定着（現役・OB 合同合宿） 上田　伸ほか 7 名、OB7 名 ○7.24～8.10　夏山縦走（涸沢定着後針ノ木峠－烏帽子岳－槍ヶ岳－上高地）　上田ほか 8 名 ○12.11～14　冬山合宿（御岳）　上田ほか 6 名	1
		【針葉樹会】 ▲3.22　丹沢大野山で中川孫一前会長の遺体発見 ※針葉樹会の遭索隊［望月達夫、甘利仁朗、柴崎　新、井草長雄（学生）］によって □3.20　『針葉会会員名簿（1972 年版）』　発行 ☆4.12　中川孫一氏追悼会　於：如水会館　吉沢一郎ほか 41 名、学生：井草長雄ほか 3 名 □7 月　『針葉樹会報』第 33 号　― 平川紀男氏追悼集 ― 発行 □9 月　『針葉樹会報』第 34 号　― 中川孫一氏追悼集 ― 発行 ☆12.1　部創立 50 周年記念・忘年会 於：如水会館　金田近二ほか 60 名	2 3 4
52	1973 (昭和48)	○3.13～22　春山合宿（栂池－白馬三山往復） 前神直樹ほか 4 名［2 年と 1 年のみ］ ○7.19～30　夏山定着（涸沢周辺、ジャンダルム飛騨尾根、滝谷第 3 尾根等）　前神ほか 9 名 ○7.31～8.4　夏山縦走（槍ヶ岳－裏銀－烏帽子岳） 藤本敏行ほか 3 名 ○7.31～8.8　夏山縦走（槍ヶ岳－東沢－剱岳） 前神ほか 3 名 ○12.16～25　冬山合宿（燕岳－西岳－槍ヶ岳を狙うも敗退） 前神ほか 7 名 ※水俣乗越の先から撤退	
		【針葉樹会】 ☆1 月末　一橋山岳部バッジ復刻製作（アキバ徽章） 2 月中旬に配布完了（約 50 名）	1
53	1974 (昭和49)	○3.8～19　春山合宿（高嵐尾根より黒部源流、雲の平、赤牛岳、黒部五郎岳）　前神ほか 6 名 ○7.19～8.8　夏山合宿着（涸沢定着後縦走）　前神ほか 9 名	1

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
		・裏銀－鹿島槍ヶ岳	
		・野呂側右俣－奥西河内沢－小渋川	
		・日高カムイエクウチカウシ	
		●10月末　増井　誠部員（3年）　事故死	2
		○12.16～25　冬山合宿（笠ヶ岳から槍ヶ岳）　前神ほか7名	3
54	1975 (昭和50)	○3.10～19　春山合宿（光岳－赤石岳－西沢渡） 加藤博行ほか6名	1
		○7.19～28　夏山定着（剱沢周辺、チンネ左稜線等） 加藤（博）ほか12名	
		○7.28～8.2　夏山縦走（薬師岳－黒部五郎岳－赤牛岳－東沢出合－針ノ木峠）　加藤（博）ほか4名	
		○8.4～12　夏山縦走（日高および大雪山系）　兵藤元史ほか3名	2
		☆☆8.7～9　山岳部部室修理（屋根の全面的葺き替え、換気扇の取付け）	3
		◎9.6～30　海外遠征（インドヒマラヤーハヌマンティバ登頂） 前神、藤本［両名5年生］	4
		・9.27　ハヌマンティバ（5,928m）登頂	
		○12.11～21　冬山合宿（遠見尾根－五竜、鹿島槍ヶ岳、爺ヶ岳）　加藤（博）ほか8名	5
		【針葉樹会】 □12月　『針葉樹会報』第45号 ― 村尾金二氏追悼集 ― 発行	
55	1976 (昭和51)	○3.9～20　春山合宿（西穂稜線より奥穂、前穂を目指すもロバの耳で敗退）　松田重明ほか5名	1
		○7.18～30　夏山定着（涸沢定着、滝谷・クラック、第1尾根等）　松田ほか12名	
		○7.31～8.7　夏山縦走（槍ヶ岳－祖父岳－薬師峠－有峰） 松田ほか7名	
		○12.11～17　冬山合宿（白山）　松田ほか6名	2
56	1977 (昭和52)	○3.7～16　春山合宿（栂池－白馬岳）　神野　隆ほか4名	
		○7.20～30　夏山定着（剱岳、真砂沢、チンネ北条、新村等） 近藤　泰ほか6名	
		○7.30～8.5　夏山縦走（五色ヶ原－雲の平－槍ヶ岳） 近藤（泰）ほか2名	

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
		○7.30～8.5　夏山縦走（平－東沢－雲の平－槍ヶ岳） 神野ほか2名 **◎9.6～30　海外遠征（ケニア山レナナ峰登頂）** 松田、佐藤活朗［両名5年生］ ・8.13　トップ小屋からレナナ峰（4,985m）往復 ○12.10～24　冬山合宿（奥大日尾根より剱を目指すも剱御前で敗退）　近藤（泰）ほか6名	1
		【針葉樹会】 ☆4.2　吉沢一郎氏のK2壮途を祝う集い 於：如水会館南北日本間 ※吉沢：日本山岳協会のK2登山隊総指揮、73歳の身で自らも5200mのベースキャンプに20日間滞在 （5.9出発、6.16BC着、7.7下山、8.7帰国） □8月　『針葉樹会報』第50号　発行 ☆9.3　甲斐駒追悼碑除幕式	2 3
57	1978 (昭和53)	○3.11～15　春山合宿（転付峠－千枚岳－悪沢岳） 神野ほか4名 ★3.14　悪沢岳西面の斜面で中西茂部員（2年）が滑落、15日自衛隊のヘリで救出される。 ○7.20～30　夏山定着（涸沢定着、滝谷第3尾根等） 神野ほか12名 ★7.28　前穂四峰東南面で岡部寛史部員（3年）が落石を受け、29日ヘリで救出される。 ○12.15～24　冬山合宿（風吹大池－白馬大池－白馬岳往復） 神野ほか9名	1 2
58	1979 (昭和54)	○3.12～19　春山合宿（燕岳－大天井－常念） 引地　真ほか6名 ○7.21～30　夏山定着（真砂沢定着、八ツ峰6峰Cフェース等） 引地ほか10名 ○12.12～19　冬山合宿（遠見尾根－五竜岳－唐松岳往復） 引地ほか9名	1
59	1980 (昭和55)	○3.11～20　春山合宿（夜叉神峠－池山吊尾根－北岳－塩見岳－三伏峠）　小林　修ほか6名	1

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
		○7.21～30　夏山定着（涸沢周辺、ジャンダルム飛騨尾根等） 小林（修）ほか14名	
		○8.1～12　夏山縦走（東沢－針ノ木岳－スバリ西尾根、中尾根）　土方　浩ほか3名	
		○8.1～13　夏山縦走（槍ヶ岳－烏帽子－針ノ木峠－東沢－水晶岳－雲の平－黒部源流－黒部五郎岳－薬師岳－折立） 小林（修）ほか3名	
		○11.21～25　富士山氷雪訓練　小林（修）ほか13名	
		★11.23　富士吉田口、訓練中に滝浦　剛部員（1年）が約200m滑落骨折事故	2
		○12.26～1.6　冬山合宿（スバリ岳－爺ヶ岳－鹿島槍ヶ岳、キレット越えを目指すも断念）　土方　浩ほか8名	3
60	1981 (昭和56)	○3.9～22　春山合宿（奥大日尾根－剱岳－雄山東尾根－黒部ダム－扇沢）　土方ほか8名	
		○7.23～30　夏山定着（剱沢周辺）　宮下克彦ほか8名	
		○8.1～8　夏山縦走 ①安島孝和ほか2名　穂高　②宮下ほか3名　白馬 ③竹若敬三ほか1名　針ノ木	
		○8.1～9.25（予定）　インドヒマラヤ（ホワイトセール峰）	1
		隊長：中村宣幸　隊員：土方　浩、萬濃英士　［全員4年生］	
		▲9.9～13頃　南東稜上にて遭難	2
		☆12.2　ホワイトセール遭難合同慰霊祭　於：一橋大学	
		【針葉樹会】 ■10.31　『一橋大学山岳部インドヒマラヤ登山隊　1981　遭難報告』　発行（インド遭難対策委員会編） ☆12.15　針葉樹会臨時総会　「ホワイトセール峰遭難及び救助活動報告」 於：東京駅前新丸ビル地下1階レストラン「ポールスター」	
61	1982 (昭和57)	○3.15～26　春山合宿（阿弥陀岳－硫黄岳－横岳－蓼科山） 岡部晃和ほか7名	
		○7.21～31　夏山合宿（真砂沢定着）　岡部ほか10名	1
		○8.1～11　夏山縦走（後立山より日本海へ）　岡部ほか4名	2
		☆9.12　故萬濃英士慰霊碑除幕　於：長野県青木湖畔	3

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
		○12.12～20　冬山合宿（中央アルプス宝剣－空木岳－マセナミ）　岡部ほか9名	
		【針葉樹会】 □6.23　『針葉樹会報』第61号　発行（この号から「復刊」の文字が消える） ☆8.23　「ホワイト・セール隊遭難にかかる金子・小林 OB 訪印についての御家族への説明会」 於：養和クラブ（千代田ビル）　ご家族・OB・学生 13 名出席 **◎8.23～9.2　ホワイトセール峰第2次捜索** 金子晴彦、小林　修、[中村宜興] ・8.28　バタルに慰霊碑建立	4 5
62	1983 (昭和58)	○3.20～28　春山合宿（白山）　石川保典ほか7名 ○7.22～(29)　夏山定着（涸沢定着）　石川ほか8名 ★7.25　東稜にて五ケ山　淳部員（3年）が滑落、合宿中止 ○7.30～8.7　夏山縦走（戸台－仙丈－三峰岳－塩見岳－荒川岳－聖岳－畑薙ダム）　石川ほか5名 ○12.13～25　冬山合宿（北俣岳から槍ヶ岳）　石川ほか6名	 1
		【針葉樹会】 ▲8.30　南日高神威岳で大塚　武会員（昭16卒）が遭難死 ■10.15　『追悼　一橋大学山岳部インドヒマラヤホワイトセール峰登山隊三君に捧ぐ」　発行 ※編集：石川保典 ■11.20　『白きヒマラヤの巨帆－1981 年ホワイト・セール遭難報告書』　発行 ※編集委員：金子晴彦、前神直樹、藤本敏行、松田重明、佐藤活朗、米田篤裕、小林　修	2
63	1984 (昭和59)	○3.20～27　春山合宿（飯豊山往復） 石丸義男、白石章治ほか2名 ○7.22～30　夏山定着（剱沢定着）　石丸ほか8名 ○8.2～11　夏山（広河原定着&縦走）　谷口隼人、鮎沢政文・シレイ沢、鋸岳等往復、両俣経由北岳、農鳥岳へ ○12.14～21　冬山合宿（爺ヶ岳東尾根から鹿島槍ヶ岳－赤岩	 1

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
		尾根）　石丸ほか５名	
64	1985 (昭和60)	○8.7～17　夏山縦走（剱岳から槍ヶ岳）　鮎沢ほか８名	1
		○8.18～23　夏山合宿（涸沢定着）　谷口ほか10名	1
		○8.24～28　夏合宿上級生残留岩登り（滝谷、屏風岩） 谷口ほか４名	1
		○12.14～27　冬山合宿（飯豊連峰：水晶尾根－大日岳－飯豊本山－松の木尾根）　谷口ほか７名	1
		【針葉樹会】 □6.27　『針葉樹』第14号（1963.4～1984.3）発行 ※編集委員：佐藤久尚、金子晴彦、米田篤裕、宮下克彦 □7.25　『針葉樹（復刻版）』第１号～第13号　発行 ※編纂担当責任者：佐藤久尚 ※編集担当：佐藤久尚、米田篤裕、宮下克彦	
65	1986 (昭和61)	○3.17～22　春山合宿（白馬岳主稜－白馬三山往復－栂池） 鮎沢ほか５名	1
		○7.23～8.1　夏山合宿前半定着（剱岳真砂沢）　鮎沢ほか９名	1
		○8.2～8.12　夏山合宿後半縦走＆沢登り ①槍・穂高へ縦走：河野　正ほか３名 ②上ノ廊下（主に沢登り）：齋藤　誠ほか２名 ③後立山（東沢－烏帽子岳－鹿島槍－白馬岳－親不知） ：鮎沢ほか１名	1
		○12.15～24　冬山合宿（笠ヶ岳南西尾根－槍ヶ岳－中崎尾根） 鮎沢ほか５名	1
		【針葉樹会】 □6.25　針葉樹会会計細則改正　（昭和 61 年度針葉樹会総会で決議） ※会計細則第１項	2
66	1987 (昭和62)	○3.18～23　春山合宿（谷川：武能山－谷川岳－万太郎山－平標山）　齋藤（誠）ほか６名	1
		○8.4～14　夏山合宿前半定着（涸沢）　齋藤（誠）ほか７名	1
		○8.18～25　夏山合宿後半縦走（北海道・十勝岳－大雪山） 小野　一ほか２名、他１名	1
		○12.16～22　冬山合宿（前穂高岳北尾根）　齋藤（誠）ほか７名	1

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
67	1988 (昭和63)	○3.16～24　春山合宿（白山、三方岩岳－大日岳） 小野（一）ほか3名	1
		○8.2～13　夏山合宿（剱沢・真砂沢定着） 小野（一）ほか8名　（事故の為13日に中止） ▲8.12　剱岳源次郎尾根Ⅰ峰平蔵谷中央ルンゼルートの取り付き付近の雪渓にて、細野伸二部員（3年）が滑落遭難死 ■8月　『細野伸二君遭難事故仮報告書』 発行	2
		◎9.6～10.30　海外（ヨセミテ・クライミング）　鮎沢	3
		○12.19～24　冬山合宿（赤岳鉱泉定着、北八ヶ岳～南八ヶ岳縦走）　小野（一）ほか5名	1
		◎12.30～1.1　前穂高岳屏風岩東壁「トリプル・ジョーカー」冬期初登、通算第2登 鮎沢、[浅沼　順] ※屏風岩で拓かれたアメリカンエイドルートの冬期初登攀	4
68	1989 (昭和64) 1.8～ (平成01)	**◎2.12～3.27　ネパール・ヒマラヤ　クスム・カングル峰（6367m）北稜　井上弘之** ※日本山岳会学生部が実施した海外遠征隊に参加（6大学6人）	1
		○3.16～21　春山合宿（遠見尾根）　小野（一）ほか2名 ※五竜岳－唐松岳-八方尾根を目指すも西遠見手前で敗退	2
		◎3.18～21　鹿島槍ヶ岳北壁蝶型氷のリボン登攀 **鮎沢ほか1名（部外）** ※鮎沢、[神沢　章] ※1983.3.20　藤原、中村パーティーの初登以来の第2登 ★7.27　内藤久裕部員（3年）が小川山でフリークライムの訓練中転落事故 ※8月に予定されていた夏合宿（十勝・大雪の沢登り・縦走）は中止 ☆10月　来年春まで休部とする（学生部長・山岳部長協議結果に従い）。	3 4
		【針葉樹会】 □7.1　『針葉樹会報』第73号 ― 追悼　山田亮三氏 ― 発行	
69	1990	○2.15～18　八海山（半年間の活動停止を経て、部の登山活動	1

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
	(平成02)	再開)　山内　太、古田　茂	
		○8.2～10　夏山合宿前半（ダイアモンドコースを沢登りを絡めて剱沢まで)　山内ほか3名	1
		○8.11～12　夏山合宿後半（剱岳・細野伸二君追悼山行)　山内ほか、OB、細野家	2
		○12.15～20　冬山合宿（燕岳－大天井岳－常念岳－蝶ヶ岳－鍋冠山)　山内ほか2名	1
		【針葉樹会】	
		☆1.18　針葉樹会臨時評議委員会　於：丸の内養和クラブ	3
		※議題：一橋山岳部の現状と今後について	
		◎1.29～2.1　パタゴニア・フィッツロイ「スーパー・クーロワール」登攀　鮎沢ほか1名（部外）	4
		※アスペン・クラブ（鮎沢、[岩崎　洋]）	
		■2.1　『追悼　細野伸二君　―剣岳遭難報告・追悼」　発行	
		※編集：井上裕之	
		◎4.5～16　中村　保会員（昭33卒）　「玉龍雪山とその周辺」（「ヒマラヤの東」踏査開始）	5
		※1990年から2011年に亘り32回の踏査	
		※第2回以降の足跡は本誌「ヒマラヤの東―チベットの神秘の河　踏査クロニクル」に掲載	
70	1991 (平成03)	☆3月　体育会から離脱し、自主活動組織（サークル）となる。	1
		○7.31～8.7　夏山合宿前半（大雪山縦走・クワウンナイ川遡行)　天羽康之ほか5名	2
		○8.9～11　夏山合宿後半（知床縦走・羅臼岳－硫黄岳)　天羽ほか5名	2
		○12.20～24　冬山合宿（鳳凰三山縦走・八ヶ岳縦走：硫横岳－蓼科山)　天羽ほか4名	2
71	1992 (平成04)	○3.19～23　春山合宿（谷川山系：白毛門－朝日岳－清水峠－谷川岳)　天羽ほか3名	1
		○8.3～13　夏山合宿（涸沢－北穂高岳－槍ヶ岳－針ノ木岳－唐松岳)　天羽ほか3名	1
		○12.16～22　冬山合宿（爺ヶ岳東尾根より鹿島槍ヶ岳)　天羽ほか3名	1

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
72	1993 (平成05)	○3.16～23　春山合宿（池山吊尾根－北岳－間ノ岳－農鳥岳－白河内岳－黒河内岳）　寺島　修ほか2名	1
		○8.5～19　夏山合宿（剱岳－薬師岳－赤木沢－槍ヶ岳－涸沢・北穂高岳＆奥穂高岳）　寺島ほか3名	1
		○12.16～20　冬山合宿（遠見尾根－五竜岳－唐松岳－八方尾根）　寺島ほか3名	1
73	1994 (平成06)	○3.8～15　春山合宿（赤岳南峰リッジ左稜、お鉢周り、阿弥陀岳北稜、縦走）　寺島ほか3名、OB1名	1
		○3.25～31　春山合宿（尾瀬：平ヶ岳、至仏山） 古瀬泰介ほか1名	2
		○8.5～14　夏山合宿（上高地－槍沢－三俣蓮華－高天原－笠ヶ岳）　古瀬ほか3名	2
		○9.5～10　秋山山行（北海道　旭岳－黒岳－白雲岳－忠別岳－化雲岳－トムラウシ－美瑛岳）　渕澤貴子、吉武みゆき	2
		○12.14～23　冬山合宿（打保－寺地山－黒部五郎岳） 古瀬ほか4名	2
		【針葉樹会】 □5月　『針葉樹会報』第80号　―近藤恒雄氏追悼集－　発行	
74	1995 (平成07)	○3.18～23　春山合宿（巻機山－上州武尊）　渕澤ほか2名	1
		○8.1～15　夏山合宿（日高山域）　渕澤ほか5名 ※ペテガリ、ルベツネ、オロマップ、コイカクシュサツナイ、カムイエクウチカウシなど	1
		○12.14～19　冬山合宿（鳳凰三山、甲斐駒、仙丈岳） 渕澤ほか2名	1
		【針葉樹会】 ☆2.2　カカボラジ偵察隊壮行会　於：如水会館記念室	2
		◎2.4～4.2　ミャンマー・カカボラジ峰偵察 ※隊長：引地　真（昭55卒）　副隊長：古田　茂（平7卒） 隊員：古瀬泰介(平8卒)	3
		□4月　『一橋大学山岳会カカボラジ峰登山隊偵察隊　報告書』発行	
75	1996 (平成08)	○2.21～25　春山合宿（八ヶ岳縦走）　西井　薫、宗像　充、OB1名	1

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
		○8.2～10　夏山合宿（室堂－剱岳－薬師岳－槍ヶ岳－北穂岳－奥穂高岳－上高地）　西井　薫ほか3名	1
		○12.13～19　冬山合宿（燕岳・大天井岳）　西井ほか2名	1
		【針葉樹会】 □3.15　中村保『ヒマラヤの東』　山と渓谷社　出版 ※副題：―雲南・四川、東南チベット、ミャンマー北部の山と谷 ※第11章　幻の山、カカボラジ偵察行（1995年）	
76	1997 （平成09）	○3.19～21　春山合宿（遠見尾根－五竜岳）　宗像ほか1名	1
		○9.3～12　夏山合宿（甲斐駒ヶ岳－光岳）　宗像ほか3名	1
		○12.18～24　冬山合宿（蝶ヶ岳－霞沢岳）　宗像ほか1名、［駒沢大2名］	1
77	1998 （平成10）	○3.16～23　春山合宿（東海谷－頸城三山） 宗像、［千葉大2名］	1
		○4.29～5.5　ブータン登山隊合同山行（北アルプス硫黄尾根－西穂高岳）　宗像ほか ※日本山岳会学生部・ブータン登山隊の参加メンバー有志による山行	
		○6.11～15　文部省登山研修所山岳遭難救助技術研修会（立山雑穀谷）　宗像	1
		○8.2～12　夏山合宿（剱沢定着・祖母谷－白馬岳－親不知） 宗像ほか3名、OB2名	1
		◎10.7～11.7　日本山岳会学生部ブータンヒマラヤ登山（ブータンヒマラヤ5727m峰：敗退） ※宗像ほか7大学各1名	2
		○12.17～23　冬山合宿（北アルプス針ノ木岳）　宗像ほか2名	1
78	1999 （平成11）	○3.6～8　春山合宿（北アルプス笠ヶ岳南西尾根：敗退） 宗像ほか2名、［千葉大1名］	1
		☆☆3月末　山岳部新部室落成 ※部室再建幹事：西牟田伸一（昭47卒）	2
		☆春　体育会に復帰（山岳部長は不在）	
		☆4.3　花見の宴（新部室披露＆記念植樹） 於：山岳部新部室前	2

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
		○5.27～30　雪上訓練（涸沢定着）　宗像ほか3名	
		★5.30　田中真之部員（4年）が北穂高沢の雪渓を下降中に落石を受け負傷	3
		○7.31～8.8　夏山合宿（北アルプス真砂沢定着） 宗像、山田秀明、OB3名、［上智大1名］	1
		【針葉樹会】 □4.26　『針葉樹会報』第88号　―中島寛氏追悼特集―　発行 □10.25　『針葉樹会報』第89号　―特集　新部室落成―　発行	
79	2000 (平成12)	○3.17～21　春山合宿（抜戸岳南尾根－笠ヶ岳－広サコ尾根東北支稜）　宗像、山田（秀）、関西学院大1名 ［2000年度］12月までは留学生1名（2年）が在籍。基本的には全て山田（秀）（2年）独りで運営	1
		○8.4～13　夏山合宿（剱岳真砂沢定着、室堂－上高地縦走） 山田（秀）、［上智大1名（定着）］	2
		【針葉樹会】 **◎3.5～7　九州・傾山二ツ坊主岩「モダンタイムス」無雪期初登攀　宗像ほか3名（部外）** 宗像、［太田孝介、織原健二、長岡正敏］ ※九州・傾岩の二ツ坊主岩のアメリカンエイドルートによる新ルート開拓	3
		□11.10　中村保『深い侵食の国』　山と渓谷社　出版 ※副題：ヒマラヤの東　地図の空白部を行く	4
80	2001 (平成13)	［2001年度］12月までは新人2年生2名在籍。基本的には全て山田（秀）（3年）独りで運営	
		○7.30～8.11　夏山合宿（北海道：①小樽赤岩登攀②芦別岳縦走③大雪山―十勝岳縦走④クワウンナイ川遡行⑤知床縦走） 山田（秀）ほか2名	
		☆☆秋　山岳部室内クライミングウォール設置	1
		○12.23～30　冬山合宿（爺ヶ岳東尾根－鹿島槍ヶ岳） 山田（秀）、鳥本真司、［青山学院3名］	2
81	2002 (平成14)	○6.1～2　足尾山塊・庚申川本流　山田（秀）ほか2名（部外） ［2002年度］鳥本（3年）が12月に復部。基本的には山田（秀）（4年）独りで運営。	1

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
		【針葉樹会】	
		☆7.9　山岳部創立 80 周年記念事業（日本山岳会への寄付） ※日本山岳会常務理事会にて贈呈　（石原、山本（健）、中村（保））	2
82	2003 （平成15）	［2003 年度］鳥本（4 年）が独り在籍するも実質的活動は殆ど無し。OB との合同山行が 2 件	
		【針葉樹会】	
		☆2 月　吉沢一郎会員の蔵書（和書 1565 冊）がアメリカ山岳会に寄贈された。	1
		□4.30　『針葉樹会報』第 98 号　―望月達夫氏追悼特集―　発行	
		□6.25　針葉樹会会則細則改正　（平成 15 年度針葉樹会総会で決議） ※会費細則第 1 項、付則：経過措置	2
		◎8.30　奥秩父・笛吹川東沢ホラノ貝ゴルジュ　山田（秀）ほか 2 名（部外） ※日本山岳会青年部パーティ（山田（秀）、［和田岳史、斎藤　丁］） ※普通、人工登攀で越える核心部をフリークライムで越えた第 2 登	3
		☆12.6　中村保会員（昭 33 卒）が平成 15 年度（第 6 回）秩父宮記念山岳賞を受賞 ※日本山岳会・年次晩餐会において	4
83	2004 （平成16）	［2004 年度］ロシアからの留学生（コンスタンチン・チェルニシェヴィスキー）が入部、鳥本（5 年）と 2 人で活動。	1
		◎8.18～20　ロシア：バイカル湖付近チェルスキーピーク 2090m　鳥本、コンスタンチンほか 3 名（部外）	2
		○12.25～26　雲取山　鳥本、コンスタンチン	2
		【針葉樹会】	
		□1.21　『針葉樹会報』第 100 号　―100 号記念特集―　発行 ※針葉樹会報 1～100 号総目次所収	
84	2005 （平成17）	［2005 年度］部員はコンスタンチン・チェルニシェヴスキー（2 年）1 人	
		【針葉樹会】	

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
		□2月末　中村保『チベットのアルプス』山と渓谷社　出版 ※「ヒマラヤの東」3部作完結編 **◎4.29～5.5　白神山地（一ツ森－白神岳－田代岳）横断縦走** **山田（秀）ほか2名（部外）** ※山登魂パーティー（山田（秀）、治田敬人、佐藤益弘） ※白神岳から田代岳まで積雪期初完全縦走 □6月　針葉樹会報バックナンバー合本製作 ※戦後復刊1～100号3分冊を如水会館図書室、日本山岳会、国立部室に献本	1 2
85	2006 (平成18)	［2006年度］部員はコンスタンチン・チェルニシェヴスキー（3年）1人 山行なし	
		【針葉樹会】 **◎9.30～10.1　北アルプス・称名川　称名大滝** **山田（秀）ほか1名（部外）** ※日本山岳会青年部パーティ（山田（秀）、［太田孝介］） ※全4段を1回で通し登攀した第2登	1
86	2007 (平成19)	［2007年度］部員はコンスタンチン・チェルニシェヴスキー（4年）1人	
		【針葉樹会】 ☆3.29　中村保会員がアメリカ山岳会の名誉会員に推挙される。 ※評価の対象：東チベット未踏域のパイオニア・ワーク 日本人として槇有恒以来2人目	1
87	2008 (平成20)	☆茶道部の師匠である佐藤　力会員（昭40卒）の勧誘で茶道部員が7名入部 ○7.13　新人歓迎懇親山行　高尾山（学生：原口翔伍ほか5名、OB11名）	1
		【針葉樹会】 □5月　中村保『Die Alpen Tibets』ドイツ Detjen―Verlag （ドイツ語版「チベットのアルプス」）　出版 ☆6.2　中村　保会員（昭33卒）が王立地理学協会からメダル受賞	2 2

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
		※Busk Medal 2008、日本人で初	
		☆8.1　一橋山岳会ホームページ開設	3
		※開設委員：小島和人、岡田健志、中村雅明、金子晴彦、井草長雄	
88	2009（平成21）	○6.20　新人歓迎山行　三ツ峠（学生：糟谷知紀ほか3名、OB：7名）	1
		【針葉樹会】	
		◎1.17　西伊豆・雲見崎烏帽子岩「時人参上（仮称）」　無雪期初登　山田（秀）ほか1名（部外）	2
		※山登魂パーティー（山田（秀）、渡辺剛士）	
		◎2.28　伊豆・千貫門「如月八番地（仮称）　無雪期初登　山田（秀）ほか2名（部外）	3
		※山登魂パーティー（山田（秀）、鈴木仮狩、佐藤益弘）	
		▲3.21　近藤　泰（昭53卒）会員が妙高山で遭難死	4
		☆5.16　針葉樹文庫見学会（開設式）	5
		於：南アルプス芦安山岳館	
		※開設委員：上原利夫、倉知　敬、竹中　彰、蛭川隆夫（主坦）	
		□5.16　『針葉樹文庫解題』　発行（編集：蛭川隆夫）	
		☆6.24　針葉樹会総会にて中村　保会員（昭33卒）を表彰	
		▲7.23　山崎　擴（昭23卒）会員が相模川で遭難死	6
		☆9.26　中村　保会員（昭33卒）が第4回日本スポーツグランプリ受賞	7
		※第64回国民体育大会の開催地・新潟で。山岳部門の受賞は今回が初めて。	
		□11.28　『針葉樹会報』第116号　―近藤泰氏　追悼特集―　発行	
		☆12.6　中村　保会員（昭33卒）が日本山岳会の名誉会員に推挙され、会長特別表彰される。	7
89	2010（平成22）	【針葉樹会】	
		□6.10　金子晴彦（昭46卒）・[森Q三代子]『香港アルプス』アズ・ファクトリー　出版	
		※ジオパーク・メジャートレイル全ガイド/著者は香港山海	

通年	年	事　項　・　出　来　事	文献
		徑倶樂部所属	
		☆10.18　針葉樹会が南アルプス市から功績者表彰を受ける。	1
		※「南アルプス芦安山岳館」に「針葉樹文庫」の形で642冊の山岳図書を寄贈による	
		□10.28　『針葉樹会報』第119号　―　●特集●　一橋山岳部の軌跡　（倉知　敬）　―　発行	
		※小谷部全助全山行記録所収	
		☆11.20　中村　保会員（昭33卒）がポーランドから、国際探検家賞を受賞、ポーランド山岳会の名誉会員の認証を受ける。	2
90	2011 （平成23）	○8.19～21　北アルプス（徳沢から蝶ヶ岳往復） 米田卓也ほか3名、OB3名	1
		【針葉樹会】	
		☆5.20　中村　保会員（昭33卒）がニュージーランド山岳会の名誉会員の認証を受ける。	2
		□6.23　針葉樹会会則改定（平成22年度針葉樹会　総会にて決議）	3
		※会費関係	
91	2012 （平成24）	【針葉樹会】	
		☆3.30　針葉樹会臨時総会　―創部90周年記念事業提案の件―	1
		※創部90周年記念事業承認	
		①針葉樹第15号発行	
		②富士登山	
		③夜叉神峠周辺の登山道整備	
		□4.19　中村保『最後の辺境―チベットのアルプス』東京新聞出版	
		※「ヒマラヤの東」　第4弾総集編	
		☆6.21　平成23年度針葉樹会総会　―大正11年6月21日の一橋山岳会発会の記年日に開催―	
		※規約の改定（評議員会の廃止、相談役の新設等）	

【資料１】　予科生時代の個人山行　澁谷一郎（昭28卒）

（編集子注）　これらの４つの記録は『針葉樹』第11号がカバーする範囲であるが漏れている。
当時の予科生の山行を知る上で貴重である。

(1) 昭和22年５月下旬　新入部員歓迎(甲斐駒)
笠原(リーダー)：中村正司、原田一郎、澁谷一郎

(2) 昭和22年10月中旬　大町→葛温泉→槍の東鎌尾根→槍が岳→槍澤→上高地
小川宣美(リーダー)、澁谷

(3) 昭和23年10月下旬　大町→爺ヶ岳→鹿島槍ヶ岳→キレット→五竜岳→唐松岳→信濃四谷
小泉三好(リーダー)、荒砥通虎、澁谷

(4) 昭和24年６月上旬　土合→西黒尾根→ロバの耳→蓬沢の頭まで縦走しグリセードで下降→土合
荒砥、澁谷

【資料２】　昭和40年カラコルム・ヒンズークシュ遠征覚書　丸子博之（昭35卒）

（編集子注）　筆者は1965年に行われたカラコルム遠征の隊員の一人。同遠征の記録は『針葉樹』第14号に掲載されているが書き残されたことも多い。本稿は正確な記録として残すべく、筆者が当時の遠征背景、針葉樹会としての企図、劇的な顛末を伝えたいと思い纏めたもの。

調査隊三名出発約一ヶ月前から、印パ関係は急速に悪化、一触即発の極度に緊迫した状況となっていた。７月22日カラチ到着、直ちにカラコルム入山許可を取得すべく、日本大使館・三井物産カラチ支店の全面協力を得て、パ政府省庁を駆け回り、交渉したが、既に全土非常事態宣言下にあり、パキスタン政府、国民は対印戦争勃発を覚悟、防戦体制造りに総力を挙げており、外国登山隊の入山許可申請など全く相手にされず絶望的。しかもカラコルム周辺は長年に亘る印パ係争地帯。大使館・物産の情報、アドバイスもあり、甘利隊長はかかる時期にカラチに留まる事は無意味且つ危険と判断、已む無くヒンズークシュ転進を決断した。

マルビティン初め、夢にみたカラコルムの探査は挫折したが、当時中央ヒンズークシュきっての難峰と称された「ミール・サミール」峰

登頂に成功したことはせめてもの救いであった。同峰は勿論調査隊の遠征準備期間、出発時全く関係者の念頭に無く、戦争直前下における甘利隊長の苦渋の選択、決断であったと思う。

我々登頂成功直後、９月６日遂に印パ戦争勃発。印度空軍によるカラチ空爆が開始された。連日の猛爆の報に接した日本政府は在パ日本人全員の即時退去を指示、カラチに集結した邦人はＪＡＬの特別機で帰国。甘利隊長は羽田で報道陣に囲まれ、一橋大学遠征隊隊長談が“この目で見た印パ紛争”等のヘッドライン、髭面の逞しい写真と共に翌日の各紙朝刊一面に大きく報じられたこと記憶に新しい。

ヒンズークシュは当時としては未だ処女地、魅力溢れる秘境であった。「ミール・サミール」峰は6,000m峰（6,120m）第二登にすぎず（新ルート初登）、昭和36年の「アンデス遠征」の輝かしい成果には比ぶべきも無いが一橋山岳部にとり、数少ない海外遠征実績であり、２年後の「東部ヒンズークシュ遠征隊」の目覚ましい登攀記録（三座初登頂）の布石になったと位置付けられるのではないか。日本隊としては、同年名古屋大山岳部がヒンズークシュ遠征隊を派遣した他、さしたる遠征は見られず、欧州山岳界が注目し始めた時代。甘利さんは隊長として、調査隊が所期の目的を達し得なかった事に終生自責と無念の思いを持ち続けた。しかし、手ぶらで帰国してもおかしくない非常事態、6,000m峰ながら中央ヒンズークシ最難と目された岩峰。時間と地域の制約、装備・食糧は貧弱なミニ遠征隊（調査隊）が、頼りになる資料・地図も無い状況下でこの山を選び、登頂出来たのはさすが甘利隊長、同先輩の知見と経験の賜物である。

この結果は世界情勢に遠征隊が翻弄された一例であり、ハインリッヒ・ハラー著「チベットの７年」に描かれた独墺合同ナンガパルバート登山隊ほど波乱万丈ではないが奇しくも類似している。本稿筆者は商社に身を置きながら、印パ情勢に疎かったことの不明を恥じ、その後40年の国内外での現役人生において、正確な情報収集、その分析、展開予測の重要性を常に意識し、行動規範としてきた。印パ戦争勃発後、パキスタン、アフガニスタンは全て国境閉鎖、通信・交通途絶。カブールに止まって政府相手の遠征手仕舞い処理、遠征荷物発送手続きをしていた丸子はカラチはもとより、東京とも全く連絡がとれず、「行方不明」扱い。戦争開始二週間後カブール脱出、９月末にベイルート、カイロを経てロンドンから帰国。佐藤はヒッチハイクで甘利隊長に数日遅れて、カラチに着いたが、強制送還は好まず、流浪の旅へ。

中央アジア諸国を徘徊した後、ケルン大学で言語学を修め、教師の職を得てドイツに定住、日本にはほとんど帰っていない。

一橋山岳部はアフガンと縁が深い。二つの遠征隊がヒンズークシュに向かった。我々が通ったカブール北部の小村フルンジュはアフガンの英雄マスード将軍が率いた「北部同盟」の本拠地。貧しくも誇り高い村人達が、羊を放牧し、川沿いの急斜面に小麦を育て、静かに生きてきた。悠久の大地アフガンが、1979年のソ連侵攻以来戦火に包まれている。平和が戻る事を願うばかりだ。隊員三人はカブール滞在中、月光を背に馬車を引いてプラタナスの街路をとことこ走るロバの足音と鈴の音に聞き惚れ、中央アジアの持つ得体のしれない魔力に引き込れた。その小さな鈴の音がいまだに心の奥底から聞こえてくる。



『針葉樹』第5〜8号より

一橋山岳部＆針葉樹会年表　文献集

1　番号＝通年－文献欄の数字
2　『針葉樹会報』の（　）内の日付は発行日。但し、年のみ、年月のみの文献がある。
3　戦後の『針葉樹会報』は第61号から「復刊」の文字が消えた。戦前の会報（第61～99号）と区別する為に、号の前に（復刊）を付加した。

（中村　雅明）

番号	出　典、作　者、記　事
1－1	『針葉樹』第1号　吉沢一郎「編輯後記」 『針葉樹』第6号　吉沢一郎「山小屋：今から10年前だった」 『針葉樹』第12号　中川孫一「追悼：奥野綱重氏の追憶－山岳部創立の頃の彼－」 『針葉樹会報』（復刊）第76号（1991.2.28）　吉沢一郎「松木の謙ちゃん」 『針葉樹会報』復刊第34号（1972.9） 金田近二「中川孫一と一橋山岳会の創立」 『針葉樹会報』（復刊）第97号（2002.11.25）　堀岡　清「当時の山と人」
1－2	『針葉樹会報』復刊第34号（1972.9）　中川孫一「日本アルプス紀行」
1－3	『針葉樹』（復刊）第76号（1991.2.28）　吉沢一郎「松木の謙ちゃん」
3－1	『針葉樹会報』（復刊）第65号（1985.6.28） 吉沢一郎「身辺雑記－今から58年前－」
4－1	『針葉樹』第1号　吉沢一郎「岩菅山スキー初登攀」 『山と渓谷』第297号（1963年11月号） 吉沢一郎『山へ』
4－2	『針葉樹』第1号（年報　Ｎｒ.1）　矢作太郎「小西俣遭難」 『針葉樹』第12号　渡辺九郎「追悼：山の矢作太郎－小西俣の遭難－」
4－3	『針葉樹』（復刊）第77号（1991.11.30）　増山清太郎「「山讃賦」由来」
5－1	『針葉樹会報』（復刊）第66号（1986.5.19） 山本健一郎「部報と会報あれこれ」
5－2	『針葉樹』第2号　村瀬和四郎、村尾金二、吉沢一郎「東北朝日岳」 『針葉樹』第2号　「年報：東北朝日岳へ」
5－3	『針葉樹』第2号　中島　凞「北鎌尾根の印象」 『針葉樹』第2号　吉沢一郎「前穂高北尾根に就いて」 『針葉樹』第2号　「年報：北鎌尾根ト穂高方面」
5－4	『針葉樹』第2号　松木謙三「只見川を中心として」

番号	出　典、作　者、記　事
	『針葉樹』第2号　「年報：只見川を遡る」
6−1	『針葉樹』第3号　吉沢一郎「本欄：一月の熊野湯附近（熊野湯を中心としてのスキーツアー)」 『針葉樹』第3号　「年報：熊野湯附近及び渋峠より白根越え」
6−2	『針葉樹』第3号　吉沢一郎「本欄：三月の針ノ木谷と立山越え」 『針葉樹』第3号　「年報：三月の針木谷と立山越え」
6−3	『針葉樹』第3号　芋川稔一「本欄：塩見より赤石へ」 『針葉樹』第3号　「年報：赤石山系北部縦走」
6−4	『針葉樹』第4号　年報「冬季スキー合宿日記（於：野沢温泉)」
7−1	『針葉樹』第4号　手塚春雄・金田一郎「三月の尾瀬」 『針葉樹』第4号　年報「三月の尾瀬スキー登山」
7−2	『針葉樹』第4号　中島嘉一郎「宝川遡行」 『針葉樹』第4号　年報「宝川笠ヶ岳より柄沢山まで」
7−3	『針葉樹』第4号　磯野計蔵「八ツ峯行」 『針葉樹』第4号　年報「剣、八ツ峯」
7−4	『針葉樹』第4号　横倉吟三郎「小槍」 『針葉樹』第4号　年報「小槍」
7−5	『針葉樹』第5号　記録第1部「＜北アルプス＞白馬岳」
7−6	『針葉樹会報』第70号（昭和13年2月10日） 増山清太郎「針葉樹会十年史稿（一)」 『針葉樹会報』(復刊）第92号（2000.11.30） 山本健一郎「追悼：増山さんと柿原さん」
8−1	『針葉樹』第5号　吹原不二雄「紀文：武尊山と其の附近」 『針葉樹』第5号　記録第1部「＜上越国境方面＞早春の赤城武尊山行」
8−2	『針葉樹』第5号　吹原不二雄「紀文：武尊山と其の附近」 『針葉樹』第5号　記録第1部「＜上越国境方面＞武尊山」
8−3	『針葉樹』第5号　記録第1部「＜北アルプス＞霞沢岳、明神岳、涸沢行」 『針葉樹』第5号　横倉吟三郎「雑記：明神岳へ」
8−4	『針葉樹会報』第71号（昭和13年3月10日） 増山清太郎「針葉樹会十年史稿（二)」 『針葉樹会報』(復刊）第92号（2000.11.30） 山本健一郎「追悼：増山さんと柿原さん」
8−5	吉沢一郎『登行記』

番号	出　典、作　者、記　事
9－1	『針葉樹』第5号　記録第2部：「北アルプス、1月の槍平と槍ヶ岳」 紀文：「1月の槍平と槍ヶ岳」手塚晴雄
9－2	『針葉樹』第5号　吹原不二雄「紀文：武尊山と其の附近」 『針葉樹』第5号　記録第2部「＜上信越国境方面＞武尊山」
9－3	『針葉樹』第6号　紀文：堀岡清「鹿島槍ヶ岳」 記録：「北アルプス、昭和5年　鹿島槍岳」 『山岳』26年1号　磯野計蔵「爺小屋を根拠とする冬の鹿島槍岳」 『針葉樹会報』復刊第16号（1966.11.15） 堀岡　清「鹿島槍ヶ岳の積雪期登山－磯野さんのこと」
9－4	『針葉樹会報』第72号（昭和13年3月29日） 増山清太郎「針葉樹会十年史稿（三）」
9－5	『針葉樹会報』（復刊）第66号（1986.5.19） 山本健一郎「部報と会報あれこれ」
10－1	『針葉樹会報』（復刊）第60号（1981.12.15） 増山清太郎「部室50年―建設経過を中心に」 『針葉樹会報』（復刊）第60号（1981.12.15） 勝田有恒「国立の緑の中の既得権」 『針葉樹会報』（復刊）第89号（1999.10.25） 増山清太郎「部室50年―建設経過を中心に（再掲載）」 『一橋山岳部々報』第4号　高瀬進三「部室建設事業のその二」 『一橋山岳部々報』第5号　高瀬進三「部室建設事業報告　― その三 ―」
10－2	『一橋山岳部々報』第6号　打橋寿郎「小橋君の遭難を語る」
10－3	『針葉樹』第1号　藤島敏「一橋山岳部に寄する」 『針葉樹』第1号　松崎武雄「山讃賦」 『針葉樹会報』（復刊）第77号（1991.11.30）　増山清太郎「「山讃賦」由来」
11－1	『針葉樹』第6号　雑記：鈴木英雄「乗鞍を越えて飛騨へ」 記録：「北アルプス、昭和7年　乗鞍岳」
11－2	『針葉樹』第6号　紀文：高見　要「北ノ又川入り」 記録：「上越国境・日光方面、昭和7年　北ノ又川」
11－3	『針葉樹』第7号　記録：「上越国境・日光方面、昭和7年　谷川本谷遡行」
11－4	『針葉樹』第7号　記録：「北アルプス、昭和7年　立山～第二次　上高地ベースキャムプ日誌」
11－5	『針葉樹』第7号　記録：「スキー合宿、昭和7年　冬期スキー合宿」

番号	出　典、作　者、記　事
12－1	『針葉樹』第 7 号　記録：「上信越国境方面、昭和 8 年　神楽峯」
12－2	『針葉樹』第 7 号　記録：「北アルプス、昭和 8 年　白馬より上高地～上高地ベースキャムプ日誌」
12－3	『針葉樹』第 7 号　記録：「スキー合宿、昭和 8 年　冬期スキー合宿」
13－1	『針葉樹』第 7 号　記録：「八ヶ岳方面、昭和 9 年　冬の八ヶ岳」
13－2	『針葉樹』第 8 号　記録：「北アルプス、昭和 9 年　剱沢生活」
13－3	『針葉樹』第 8 号　記録：「北アルプス、昭和 9 年　鹿島槍天狗尾根」 『針葉樹』第 8 号　紀文：「鹿島槍ヶ岳東面、＜3、荒沢に就いて　小谷部全助 4、天狗尾根　森脇芳之＞」 『針葉樹』第 8 号　雑記：小谷部全助「N 君の遭難に関係して」
13－4	『針葉樹』第 8 号　記録：「北アルプス、昭和 9 年　鹿島槍ヶ岳東尾根」 『針葉樹』第 8 号　紀文：「鹿島槍ヶ岳東面、＜2、東尾根　鷹野雄一＞」
14－1	『針葉樹会報』特別号（昭和 9 年 10 月 20 日）　故宮川雄二郎君追悼号
14－2	『針葉樹』第 8 号　紀文：「檜山沢入り四月の飯豊山」
14－3	『針葉樹』第 8 号　記録：「北アルプス、昭和 10 年　カクネ里より鹿島槍ヶ岳」 『針葉樹』第 8 号　紀文：「鹿島槍ヶ岳東面、＜5、カクネ里　小谷部全助＞」
14－4	『針葉樹』第 8 号　記録：「南アルプス、昭和 10 年　北岳バットレス」 『針葉樹』第 8 号　雑記：「北岳バットレス行　鷹野雄一」
14－5	『針葉樹』第 8 号　記録：「北アルプス、昭和 10 年　槍、穂高～上高地天幕生活」
14－6	『針葉樹』第 8 号　記録：「北アルプス、昭和 10 年　錫杖烏帽子岩」 『針葉樹』第 8 号　雑記：「錫杖岳　小谷部全助」
14－7	『針葉樹』第 8 号　雑記：「團衛谷　望月達夫」 『針葉樹』第 8 号　記録：「北アルプス、昭和 10 年　團衛谷を下り天上沢を上る」 『針葉樹会報』第 49 号（昭和 10 年 8 月 25 日）　吉沢一郎「團衛谷北鎌紀行」 『山岳』　30 年 2 号（日本山岳会）　吉沢一郎「團衛谷を滑る」
14－8	『針葉樹』第 9 号　記録：「昭和 10 年度、大樺小舎生活（北岳バットレス）」
14－9	『針葉樹会報』（復刊）第 77 号（1991. 11. 30）　望月達夫「小林重吉の思い出」
14－10	『針葉樹』第 9 号　記録：「昭和 10 年度、鳳凰山地蔵岳」
14－11	『針葉樹』第 8 号　雑記：「秩父三題」
14－12	『針葉樹』第 8 号　記録：「秩父方面、昭和 9 年　奥秩父山小舎生活」
14－13	『針葉樹』第 9 号　記録：「昭和 10 年度、北岳バットレス（第 3、第 5 尾根）」

番号	出　典、作　者、記　事
	『針葉樹』第 8 号　「厳冬の北岳バットレス　3、登攀報告　第一次登攀　小谷部全助」
15－1	『針葉樹』第 9 号　記録：「昭和 10 年度、野呂側遡行　仙丈岳　小谷部全助」
15－2	『針葉樹』第 9 号　記録：「昭和 11 年度、鹿島槍荒沢奥壁」
15－3	『針葉樹』第 9 号　記録：「昭和 11 年度、穂高涸沢合宿」 『針葉樹』第 9 号　「夏の涸沢合宿から　柿原謙一」 『針葉樹会報』（復刊）第 64 号（1984. 12. 21） 柿原謙一「東京商大一橋山岳部の昭和 11 年前后」
15－4	『針葉樹』第 9 号　記録：「昭和 11 年度、大樺小舎生活（北岳バットレス第 1、第 4、第 5 尾根）」
15－5	『針葉樹会報』第 61 号（昭和 11 年 12 月 20 日） 「追悼　関根　修君（故人略歴と 12 名の追悼文」
15－6	『針葉樹』第 9 号　「厳冬の北岳バットレス　3、登攀報告　第二次登攀　小谷部全助」 『針葉樹』第 9 号　記録：「昭和 11 年度、北岳バットレス及び北岳間ノ岳」
15－7	『針葉樹会報』第 63 号（昭和 12 年 4 月 20 日） 金田一郎「故中島嘉一郎君追悼録「菰野菊」発行に就いて」 『針葉樹会報』第 67 号（昭和 12 年 9 月 20 日） 吉沢一郎「「菰野菊」の読后感」 『針葉樹会報』第 67 号（昭和 12 年 9 月 20 日） 望月達夫「「菰野菊」を読んで」
16－1	『針葉樹』第 9 号　「三月の鹿島槍荒沢奥壁　小谷部全助」 『針葉樹』第 9 号　記録：「昭和 11 年度、遠見尾根より鹿島槍荒沢奥壁及び五龍岳」 『針葉樹会報』（復刊）第 75 号（1990. 6. 25） 宮城恭一「小谷部全助、森川眞三郎両畏兄の追想」
16－2	『針葉樹』第 10 号　記録：「昭和 12 年度、甲斐駒摩利支天南稜」
16－3	『針葉樹』第 10 号　記録：「昭和 12 年度、剱沢合宿」
16－4	『針葉樹』第 10 号　記録：「昭和 12 年度、針の木越え、大滝山越え」
16－5	『針葉樹』第 10 号　記録：「昭和 12 年度、剱沢より薬師、槍へ」
16－6	『針葉樹』第 10 号　記録：「昭和 12 年度、南沢より烏帽子、槍縦走」
16－7	『針葉樹』第 10 号　記録：「昭和 12 年度、上高地天幕日誌、奥又白生活」
16－8	『針葉樹』第 10 号　記録：「昭和 12 年度、奥又白生活」

番号	出　典、作　者、記　事
16－9	『針葉樹』第 10 号　記録：「昭和 12 年度、徳沢小舎生活」 『針葉樹』第 10 号　「前穂高東面について　2、登攀及び行動　C　積雪期の奥又白」 2、登攀及び行動　C　積雪期の奥又白　(1) 1937 年冬の試み 3、雪崩に就いて
16－10	『針葉樹会報』第 69 号（昭和 12 年 12 月 31 日） 柿原謙一「山岳部創立 15 週年記念晩餐会の記」 『針葉樹会報』第 69 号（昭和 12 年 12 月 31 日） 「山岳部報告　(9、10、11 月)」
17－1	『針葉樹』第 10 号　記録：「昭和 12 年度、奥又白生活（徳沢合宿に引続き)」
17－2	『針葉樹』第 10 号　記録：「昭和 12 年度、前穂高東壁」 『針葉樹』第 10 号　「前穂高東面について　2、登攀及び行動　C　積雪期の奥又白　(2) 1938 年春の登攀」 4、凍傷に就いて
17－3	『針葉樹』第 10 号　記録：「昭和 13 年度、涸沢合宿、涸沢生活」
18－1	『針葉樹』第 10 号　記録：「昭和 13 年度、岳川谷生活」
18－2	『針葉樹』第 11 号　「『10 号』以後の歩み　昭和 14－15 年　山田亮三」 倉知敬編『山田亮三山行譜』　(1990 年 1 月)
18－3	『針葉樹会報』第 87 号（昭和 15 年 1 月 31 日） 山田亮三「瀧谷第四尾根の登攀（12 月)」 『針葉樹会報』第 88 号（昭和 15 年 3 月 15 日） 「山岳部報告　(8)穂高瀧谷行」 『針葉樹会報』(復刊）第 73 号　(1989. 7. 1) 山田亮三「滝谷第四尾根の登攀」(転載)
19－1	『針葉樹会報』第 90 号（昭和 15 年 6 月 10 日）　根本　大「雪洞より槍へ」 『針葉樹会報』第 90 号（昭和 15 年 6 月 10 日） 「山岳部報告　(3)横尾本谷より槍ヶ岳」 『針葉樹』第 11 号　「『10 号』以後の歩み　昭和 14－15 年　山田亮三」
19－2	『針葉樹』第 11 号　「『10 号』以後の歩み　昭和 14－15 年　山田亮三」 倉知敬編『山田亮三山行譜』　(1990 年 1 月)
19－3	『友田純一君追悼録』　(1941 年 7 月 18 日) 『針葉樹会報』第 91 号（昭和 15 年 11 月 30 日） 宮城恭一「友田純一君遭難顛末」

番号	出　典、作　者、記　事
	『針葉樹会報』（復刊）第 77 号（1991.11.30） 宮城恭一「山の遭難と西川先生と」
20－1	『針葉樹』第 11 号　「『10 号』以後の歩み　昭和 16－17 年　小林茂雄」 『針葉樹会報』第 94 号（昭和 16 年 6 月 1 日） 「山岳部報告　記録　○遠見尾根天幕生活」
20－2	『針葉樹会報』第 98 号（昭和 17 年 5 月 30 日） 「一橋山岳部記録　○追悼碑建設作業」 『針葉樹』第 11 号　「『10 号』以後の歩み　昭和 16－17 年　小林茂雄」 『針葉樹会報』（復刊）第 77 号（1991.11.30） 久保孝一郎「半世紀ぶりの慰霊山行」
20－3	『針葉樹会報』第 98 号（昭和 17 年 5 月 30 日） 「一橋山岳部記録　○剱沢生活」
20－4	『針葉樹会報』第 98 号（昭和 17 年 5 月 30 日） 「一橋山岳部記録　○五色ヶ原より徳沢」 『針葉樹』第 11 号　「『10 号』以後の歩み　昭和 16－17 年　小林茂雄」
20－5	『針葉樹会報』第 97 号（昭和 17 年 3 月 10 日） 細野眞令「秩父東沢遡行木賊山遭難報告」 『奥秩父　前田・古澤・長沼三君追悼録』　（1943 年 10 月 18 日）
21－1	『針葉樹』第 11 号　「『10 号』以後の歩み　昭和 16－17 年　小林茂雄」
21－2	『針葉樹会報』第 110 号（2007.10.26）　中村讃治「昭和 17 年度夏合宿」 『針葉樹』第 11 号　「『10 号』以後の歩み　昭和 16－17 年　小林茂雄」
22－1	『針葉樹会報』第 100 号（2004.1.21）　中村讃治「八ヶ岳行」 （石井左右平「針葉樹会報戦後復刊の頃のこと　中村讃治のリポート）
23－1	『針葉樹』第 11 号　「『10 号』以後の歩み　昭和 18－21 年　石井左右平」
24－1	『針葉樹会報』（復刊）第 89 号（1999.10.25） 山崎　擴「戦争で部屋を閉じた頃」 『針葉樹会報』第 111 号（2008.1.29）　山崎　擴「むかし話　終戦までⅡ」
27－1	『故山中健雄君追悼録　谷川岳』　（昭和 24 年 11 月）
27－2	『針葉樹会報』（復刊）第 89 号（1999.10.25）　中村正司「新部室の絵」 『針葉樹会報』第 113 号（2008.12.8）　中村正司「旧制最後の山岳部時代」
30－1	『針葉樹会報』第 114 号（2009.4.10）　石原　脩「『針葉樹 11 号』の前夜」
30－2	『針葉樹会報』第 113 号（2008.12.8）　中村正司「旧制最後の山岳部時代」 『針葉樹会報』第 114 号（2009.4.10）　石原　脩「『針葉樹 11 号』の前夜」

番号	出　典、作　者、記　事
31－1	『針葉樹会報』復刊第 1 号（1952.9.1）　「山岳部報告（7 月）」 『針葉樹会報』第 113 号（2008.12.8）　中村正司「旧制最後の山岳部時代」
31－2	『針葉樹会報』復刊第 20 号（1967.10.31）　中村正司「大田先生の夏合宿」
31－3	『針葉樹会報』第 100 号（2004.1.21） 石井左右平「針葉樹会報戦後復刊の頃のこと」
32－1	『針葉樹会報』第 114 号（2009.4.10）　石原　脩「「針葉樹 11 号」の前夜」
32－2	『針葉樹』第 11 号　「記録　昭和 28 年度（1953.4－1954.3）　剱沢合宿」
32－3	『針葉樹』第 11 号　「記録　昭和 28 年度（1953.4－1954.3） 夏山縦走（剱－槍）」
33－1	『針葉樹』第 11 号　二つの春山合宿　☆岳川よりコブ尾根・畳岩尾根、奥穂・前穂・西穂稜線
33－2	『針葉樹』第 11 号　「記録　昭和 29 年度（1954.4－1953.3）　奥又白合宿」
33－3	『針葉樹』第 11 号　「記録　昭和 29 年度（1954.4－1953.3）　涸沢合宿」
33－4	『針葉樹』第 11 号　「記録　昭和 29 年度（1954.4－1953.3） 夏山縦走（その 2）涸沢－槍－蒲田川右俣－安房峠」
33－5	『針葉樹』第 11 号　「記録　昭和 29 年度（1954.4－1953.3） 夏山縦走（その 1）涸沢－船窪」
33－6	『針葉樹』第 11 号　「記録　昭和 29 年度（1954.4－1953.3）　冬山合宿」
33－7	『針葉樹』第 11 号　「記録　昭和 29 年度（1954.4－1953.3） 冬期スキー合宿」
34－1	『針葉樹』第 11 号　二つの春山合宿　☆横尾、涸沢より前穂高北尾根
34－2	『針葉樹』第 12 号　「記録　昭和 30 年度（4 月－31 年 3 月）　剣沢合宿」
34－3	『針葉樹』第 12 号　「積雪期の合宿　鹿島槍ヶ岳天狗尾根と北壁ピークリッジ ― 昭和 30 年 12 月 ―」
35－1	『針葉樹』第 12 号　「積雪期の合宿　明神岳東稜－昭和 31 年 3 月－」
35－2	『針葉樹』第 12 号　「記録　昭和 31 年度（4 月－32 年 3 月）　夏山合宿」
35－3	『針葉樹』第 12 号　「積雪期の合宿　北岳バットレス－昭和 31 年 12 月－」
36－1	『針葉樹』第 12 号　「積雪期の合宿　白馬岳猿倉台地を中心としたバリエーション・ルート ― 昭和 32 年 3 月 ―」
36－2	『岩と雪』1 号 『針葉樹会報』第 119 号（2010.10.28）　倉知　敬「甘利仁朗　主な登攀記録」 『針葉樹会報』（復刊）第 82 号（1995.11.21）　甘利仁朗「美しい壁」 『針葉樹会報』（復刊）第 82 号（1995.11.21）

番号	出　典、作　者、記　事
	中村　保「甘利さんと四峰正面壁」
36－3	『針葉樹』第 12 号　「記録　昭和 32 年度（4 月－33 年 3 月）　夏山合宿」
36－4	『針葉樹』第 12 号　「記録　昭和 32 年度（4 月－33 年 3 月）　滝谷」 『岩と雪　Ⅱ』　山と渓谷社　（昭和 33 年 11 月 25 日） 芳野満彦「滝谷グレポン」 『針葉樹会報』（復刊）第 68 号（1987. 2. 15） 中村　保「Y 中さんのこと－穂高岳滝谷グレポン初登攀－」
36－5	『針葉樹』第 12 号　「積雪期の合宿　槍ヶ岳から極地法による奥穂高岳登頂 ― 昭和 32 年 12 月 ―」
37－1	『岩と雪』1 号 『針葉樹会報』第 119 号（2010. 10. 28）　倉知　敬「甘利仁朗　主な登攀記録」
37－2	『針葉樹』第 12 号　「積雪期の合宿　剣岳早月尾根 ― 昭和 33 年 3 月 ―」
37－3	『岩と雪』1 号　p222 『針葉樹会報』第 119 号（2010. 10. 28）　倉知　敬「甘利仁朗　主な登攀記録」
37－4	『針葉樹』第 12 号　「記録　昭和 33 年度（4 月－34 年 3 月）　夏山合宿」
37－5	『針葉樹』第 12 号　「積雪期の合宿　南アルプス北部縦走　三伏峠－北岳 ― 昭和 33 年 12 月 ―」
38－1	『針葉樹』第 12 号　「積雪期の合宿　剣岳赤谷尾根から極地法による剣岳本峰、毛勝山登頂－昭和 34 年 3 月－」
38－2	『針葉樹』第 12 号　「記録　昭和 34 年度（4 月－12 月）　夏山合宿」
38－3	『針葉樹会報』（復刊）第 73 号（1989. 7. 1） 望月敏治「谷川岳マチガ沢山行 ― 山中健雄君遭難 40 周年 ―」
38－4	『針葉樹会報』復刊第 21 号（1968. 1. 31） 佐野茂雄「奥秩父遭難三君のこと ― 記念碑除幕式に参加して ―」
38－5	『針葉樹』第 12 号　「積雪期の合宿　燕岳から蝶ヶ岳への縦走と大天井からの槍ヶ岳登頂 ― 昭和 34 年 12 月 ―」
39－1	『針葉樹』第 12 号　「積雪期の合宿　早月尾根より剣岳及び頂上周辺のバリエーション・ルート ― 昭和 35 年 3 月 ―」 『岳人』147 号（1960 年 7 月号）　記録速報
39－2	『針葉樹』第 13 号　「記録　後立山連峰　鹿島槍・天狗尾根および北壁・荒沢奥壁」 『岳人』148 号（1960 年 8 月号）　記録速報
39－3	『針葉樹』第 13 号　「記録　槍・穂高　穂高岳（夏合宿）」

番号	出　典、作　者、記　事
39－4	『針葉樹』第 13 号　「記録　剣・黒部周辺　涸沢－笠ヶ岳－針ノ木岳（夏合宿縦走）」
39－5	『針葉樹』第 13 号　「記録　剣・黒部周辺　黒部川横断（夏合宿縦走）」
39－6	『針葉樹』第 13 号　「記録　剣・黒部周辺　涸沢－剣岳（夏合宿縦走）」
39－7	『針葉樹』第 13 号　「記録　剣・黒部周辺　剣岳・チンネと池の谷」
39－8	『針葉樹』第 13 号　「四年間の合宿をめぐって　鹿島槍の集中登山」 『針葉樹』第 13 号　「記録　後立山連峰　鹿島槍ヶ岳集中（冬合宿）」 『岳人』第 204 号（1965 年 3 月号） 一ッ橋大学山岳部「爺岳東北面　1960-1961 の積雪期」
40－1	『針葉樹』第 13 号　「四年間の合宿をめぐって　爺岳をめぐって A　春季五竜岳当面合宿」 『針葉樹』第 13 号　「記録　後立山連峰　五竜岳東面（春合宿）」
40－2	『針葉樹』第 13 号　「四年間の合宿をめぐって　爺岳をめぐって 2、5 月の爺岳偵察行」 『針葉樹』第 13 号　「記録　後立山連峰　爺岳東面」
40－3	『針葉樹』第 13 号　「記録　剣・黒部周辺　剣岳（夏合宿）」
40－4	『針葉樹』第 13 号　「記録　剣・黒部周辺　剣－槍ヶ岳－大滝山（夏合宿縦走）」
40－5	『針葉樹』第 13 号　「記録　剣・黒部周辺　剣－笠ヶ岳（夏合宿縦走）」
40－6	『針葉樹』第 13 号　「四年間の合宿をめぐって　爺岳をめぐって C　爺岳より針ノ木岳」 『針葉樹』第 13 号　「記録　後立山連峰　爺岳東尾根－針ノ木岳（冬合宿）」
40－7	『針葉樹』第 13 号　「1961 年アンデス遠征記録」 『山岳』　57 年　（日本山岳会、1963 年） 『針葉樹会報』第 119 号（2010. 10. 28） 倉知　敬「5. 海外への発信　1961 年アンデス遠征」
41－1	『針葉樹』第 13 号　「四年間の合宿をめぐって　白馬と中央アルプス A　白馬岳」 『針葉樹』第 13 号　「記録　後立山連峰　拇池より唐松岳（春合宿）」
41－2	『針葉樹会報』（復刊）第 7 号（1963）　「滝谷遭難日記（1962 年）」 『針葉樹』第 13 号　「四年間の合宿をめぐって　白馬と中央アルプス A　白馬岳」
41－3	『針葉樹』第 13 号　「四年間の合宿をめぐって　白馬と中央アルプス B　中央アルプス縦走（冬期合宿）」

番号	出　典、作　者、記　事
	『針葉樹』第 13 号　「記録　南アルプス・中央アルプス　中央アルプス縦走（冬合宿）」
42－1	『針葉樹』第 13 号　「四年間の合宿をめぐって　穂高にかえる A　春の横尾尾根」 『針葉樹』第 13 号　「記録　槍・穂高　横尾々根から奥穂高岳（春合宿）」
42－2	『針葉樹』第 13 号　「四年間の合宿をめぐって　穂高にかえる B　5 月の穂高周辺偵察行」蛭川隆夫
43－1	『針葉樹』第 14 号　「主要山行記録　湯俣尾根から槍・北穂へ（1964 年春山）」
43－2	『針葉樹』第 14 号　「主要山行記録　三年奥又合宿（1964 年 6 月）」
43－3	『護美　―富士山清掃始末記－』清富会　（昭和 39 年 9 月 1 日）
43－4	『針葉樹』第 14 号　「主要山行記録　北鎌尾根（1964 年度冬合宿）」
44－1	『ごみ　―富士山清掃報告－　2』清富会　（昭和 40 年 10 月 4 日）
44－2	『針葉樹』第 14 号　「主要山行記録　一ノ倉沢衝立岩正面（1965 年 9 月 27～30 日）」
44－3	『針葉樹』第 14 号　「主要山行記録　涸沢岳西稜から横尾尾根へ（1965 年度冬山合宿）」
44－4	『針葉樹』第 14 号　「海外遠征記録　カラコルム遠征先遣隊　1965 年夏」 『針葉樹会報』復刊第 11 号（1965. 9. 20） 中島　寛「カラコルム遠征準備経過報告」 『針葉樹会報』復刊第 14 号（1966. 8. 15） 丸子博之「カラコルム遠征先遣隊報告・その 1）」 『針葉樹会報』復刊第 15 号（1966. 9. 30） 佐藤之敏「カラコルム遠征先遣隊報告・その 2）」 『針葉樹会報』復刊第 16 号（1966. 11. 15） 佐藤之敏「カラコルム遠征先遣隊報告・その 3）」 『針葉樹会報』復刊第 17 号（1967. 2. 15） 佐藤之敏「カラコルム遠征先遣隊報告・その 4）」
44－5	『針葉樹会報』復刊第 12 号（1965. 12. 20） 「針葉樹会だより　ヒマラヤ先遣隊報告会」
45－1	『ごみ　―富士山清掃報告―　3』清富会　（昭和 41 年 10 月 25 日）
46－1	『針葉樹』第 14 号　「主要山行記録　双子尾根より唐松、白馬（1967 年春合宿）」
46－2	『針葉樹会報』復刊第 20 号（1967. 10. 31）　太田可夫先生追悼号

番号	出　典、作　者、記　事
46－3	『針葉樹』第 14 号　「主要山行記録　八方尾根よりＡ沢のコルまで（1967 年冬山合宿）」
46－4	『針葉樹』第 14 号　「主要山行記録　爺ヶ岳南尾根より鹿島槍ヶ岳及び岩小屋沢岳（1967 年冬山合宿）」
46－5	『針葉樹会報』復刊第 19 号（1967.8.1）　中島寛「会務報告」
46－6	『針葉樹』第 14 号　「海外遠征記録　ヒンズークシュ遠征　1967 年度」 山本健一郎編『ロシュ・ゴル氷河の山旅 ―　一橋大　東部ヒンズー・クシュ紀行 ―』(1968.7.10)、あかね書房 『山岳』　63 年　（日本山岳会、1969 年） The Mountain World　1968／69 『針葉樹会報』復刊第 19 号（1967.8.1）　倉知　敬「ヒンズークシュ通信(1)」 『針葉樹会報』復刊第 21 号（1968.1.31）　倉知　敬「ヒンズークシュ通信(2)」 『針葉樹会報』復刊第 22 号（1968.6.30）　倉知　敬「ヒンズークシュ通信(3)」 『針葉樹会報』復刊第 23 号（1968.9） 望月達夫「『ロシュ・ゴル氷河の山旅』を読んで」 『針葉樹会報』第 119 号（2010.10.28） 倉知　敬「5. 海外への発信　1967 年ヒンズークシュ遠征」
46－7	『針葉樹会報』復刊第 20 号（1967.10.3）　「会務報告」
47－1	『針葉樹』第 14 号　「主要山行記録　鹿島槍ヶ岳での遭難（1968 年 5 月）」 『針葉樹会報』復刊第 22 号（1968.6.30） 俵　昭「追悼・中村慎一郎君遭難報告・5 月の鹿島槍」 『故中村慎一郎君追悼録』(1970.6.1)
47－2	『針葉樹会報』復刊第 21 号（1968.1.31） 中島　寛「会務報告　1、東沢遭難碑除幕式の件」 ※裏表紙に遭難碑、当日の参加者の写真掲載
48－1	『針葉樹』第 14 号　「主要山行記録　伊奈谷側から赤石・荒川へ（1969 年春合宿）」
48－2	『針葉樹会報』復刊第 26 号（1969.12.10） 大賀二郎「会務報告　◎中島寛、佐藤之敏君歓送会」 『針葉樹会報』復刊第 27 号（1970.7.15） 中島　寛「エベレスト便り ― 第二次偵察隊 ―」 『針葉樹会報』(復刊）第 88 号（1999.4.26） 佐藤之敏「69 年エベレストと中島さん」

番号	出　典、作　者、記　事
49－1	『針葉樹会報』(復刊) 第 93 号 (2001.3.31) 西牟田伸一「中村慎一郎君レリーフ訪問」
49－2	『針葉樹』第 14 号　「主要山行記録　甲斐駒ヶ岳、赤石沢奥壁の遭難 (1970 年 9 月)」 『赤石沢　追悼　橋本明君』　発行　　編集：金子晴彦
49－3	『針葉樹会報』復刊第 27 号 (1970.7.15)　大賀二郎「会務報告」
49－4	『1970 年エベレスト登山隊報告書　第Ⅰ部　登山報告』　日本山岳会　(昭和 47 年 3 月 1 日)
49－5	『針葉樹会報』復刊第 33 号 (1972.7)　平川紀男氏追悼集 『針葉樹会報』(復刊) 第 72 号 (1988.10.10)　斎藤正「平川氏追悼山行」 『針葉樹会報』(復刊) 第 95 号 (2001.12.26)　平川　茂「平川氏追悼登山」 『針葉樹会報』(復刊) 第 95 号 (2001.12.26) 佐藤久尚「平川紀男君レリーフ再訪」
50－1	『針葉樹会報』復刊第 32 号 (1972.3) 大賀二郎「中川孫一の遭難とその捜索活動」
51－1	『針葉樹』第 14 号　「主要山行記録　黒部内蔵助平での現役・OB 合同合宿 (1972 年 5 月)」
51－2	『針葉樹会報』復刊第 33 号 (1972.7) 大賀二郎「故中川前会長遺体発見の経過」
51－3	『針葉樹会報』復刊第 34 号 (1972.9)　中川孫一氏追悼集
51－4	『針葉樹会報』復刊第 36 号 (1973.3) 「会務報告　一橋山岳部創立 50 周年記念祝賀会 (三森茂充)」
52－1	『針葉樹会報』復刊第 36 号 (1973.3) 「会務報告　一橋山岳部バッジ製作 (三森茂充)」
53－1	『針葉樹』第 14 号　「主要山行記録　高嵐尾根より黒部源流 (1974 年春合宿)」
53－2	『針葉樹会報』復刊第 41 号 (1974.12)　「会務報告」
53－3	『針葉樹』第 14 号　「主要山行記録　笠ガ岳から槍ガ岳 (1974 年冬合宿)」
54－1	『針葉樹』第 14 号　「主要山行記録　光岳から赤石岳へ (1975 年春合宿)」
54－2	『針葉樹』第 14 号　「主要山行記録　北海道日高および大雪山系 (1975 年夏)」 『針葉樹』第 14 号　「主要山行記録　中央高地、クワウンナイ (1975 年夏)」
54－3	『針葉樹会報』復刊第 44 号 (1975.9) 「会務報告　山岳部部室の修理報告 (加藤博行)」
54－4	『針葉樹』第 14 号　「海外遠征記録　インドヒマラヤ　1975 年夏」

番号	出　典、作　者、記　事
54－5	『針葉樹』第 14 号　「主要山行記録　五竜岳より爺ケ岳へ（1975 年冬合宿）」
55－1	『針葉樹』第 14 号　「主要山行記録　西穂高西尾根よりロバの耳手前まで（1976 年春合宿）」
55－2	『針葉樹』第 14 号　「主要山行記録　白山（1976 年冬合宿）」
56－1	『針葉樹』第 14 号　「海外遠征記録　アフリカ・ケニア山　1977 年夏」
56－2	『針葉樹会報』復刊第 50 号（1977. 8）　吉沢一郎「K2 を目指して」 『針葉樹会報』復刊第 51 号（1977. 12） 吉沢一郎「K2 行を含めた以後の身辺雑記（一）」
56－3	『針葉樹会報』復刊第 51 号（1977. 12）　西牟田伸一「甲斐駒追悼碑建立報告」
57－1	『針葉樹』第 14 号　「主要山行記録　悪沢岳西面での事故（1978 年春合宿）」 『針葉樹会報』復刊第 52 号（1978. 6）　「山岳部事故連絡（藤本記）」
57－2	『針葉樹』第 14 号　「主要山行記録　前穂四峰での事故（1978 年夏合宿）」
58－1	『針葉樹』第 14 号　「主要山行記録　燕、大天井、常念（1979 年春合宿）」
59－1	『針葉樹』第 14 号　「主要山行記録　北岳より塩見岳（1980 年春合宿）」
59－2	『針葉樹』第 14 号　「主要山行記録　富士山雪上訓練中の事故（1980 年 11 月）」
59－3	『針葉樹』第 14 号　「主要山行記録　スバリ岳から鹿島槍へ（1980 年冬合宿）」
60－1	『針葉樹会報』復刊第 59 号（1981. 6. 23） 「インドヒマラヤ登山計画　ホワイト・セールを目ざして」
60－2	『針葉樹』第 14 号　「海外遠征記録　インドヒマラヤ　1981 年夏」 『一橋大学山岳部インドヒマラヤ登山隊　1981　遭難報告』　（1981. 10. 31） 『追悼　一橋大学山岳部インドヒマラヤホワイトセール峰登山隊三君に捧ぐ』（昭和 58 年 10 月 15 日） 『白きヒマラヤの巨帆－1981 年ホワイト・セール遭難報告書』　（昭和 58 年 11 月 20 日） 『針葉樹会報』（復刊）第 79 号（1993. 8. 31） 引地　真「ホワイト・セールへの旅」
61－1	『針葉樹』第 14 号　「主要山行記録　真砂沢定着（1982 年夏合宿）」
61－2	『針葉樹』第 14 号　「主要山行記録　後立山より日本海へ（1982 年夏合宿）」
61－3	『針葉樹会報』（復刊）第 63 号（1982. 4. 7） 岡部寛史「萬濃君慰霊碑除幕のこと」
61－4	『針葉樹会報』（復刊）第 63 号（1982. 4. 7）　「会務報告」
61－5	『白きヒマラヤの巨帆－1981 年ホワイト・セール遭難報告書』　（昭和 58 年 11 月 20 日）

番号	出　典、作　者、記　事
62－1	『針葉樹』第 14 号　「主要山行記録　北俣岳から槍ヶ岳（1983 年冬合宿)」
62－2	『針葉樹会報』(復刊）第 64 号（1984.12.21） 「中島氏・大塚氏への追悼の辞」
63－1	『針葉樹』第 14 号　「主要山行記録　爺ガ東尾根から鹿島槍ヶ岳（1984 年冬合宿)」
64－1	『針葉樹』第 15 号　「一橋山岳部活動記録　1985 年度」
65－1	『針葉樹』第 15 号　「一橋山岳部活動記録　1986 年度」
65－2	『針葉樹会報』(復刊）第 67 号（1986.10.30）　「会務報告」
66－1	『針葉樹』第 15 号　「一橋山岳部活動記録　1987 年度」
67－1	『針葉樹』第 15 号　「一橋山岳部活動記録　1988 年度」
67－2	『針葉樹』第 15 号　「一橋山岳部活動記録　1988 年度」 『針葉樹会報』(復刊）第 72 号（1988.10.10 刊） 「会務報告　細野伸二君遭難事故について（会長　石井左右平)」
67－3	『針葉樹』第 15 号　「海外での登山活動　ヨセミテ日記」
67－4	『岩と雪』 133 号 「CHRONICLE」　p.45 『山岳年鑑』 1989 『日本の岩場』　白山書房
68－1	日本山岳会学生部『年報 8』 『針葉樹』第 15 号　「海外での登山活動　ネパール・ヒマラヤ　クスムカンガル峰」
68－2	『針葉樹』第 15 号　「一橋山岳部活動記録　1989 年度」
68－3	一橋大学一橋山岳部『1988 年度下半期活動報告書』　19. 鹿島槍ヶ岳北壁蝶型氷のリボン
68－4	『針葉樹会報』(復刊）第 74 号（1990.1.16） 西牟田伸一「一橋山岳部の現状について」 『針葉樹会報』(復刊）第 75 号（1990.6.25） 柿原謙一「どうにも分かりませんが」 『針葉樹会報』(復刊）第 77 号（1991.11.30）　石井左右平「「六年間」」
69－1	『針葉樹』第 15 号　「一橋山岳部活動記録　1990 年度」
69－2	『針葉樹』第 15 号　「一橋山岳部活動記録　1990 年度」 『針葉樹会報』(復刊）第 76 号（1991.2.28）　井上裕之「細野伸二君追悼山行」
69－3	『針葉樹会報』(復刊）第 75 号（1990.6.25） 西牟田伸一「一橋山岳部の存続問題についての報告及びお願い」

番号	出　典、作　者、記　事
69－4	『岩と雪』第 140 号（1990 年 6 月号）　p. 48
69－5	『針葉樹会報』（復刊）第 75 号（1990. 6. 25）　中村　保「玉龍雪山とその周辺」
70－1	『針葉樹会報』（復刊）第 76 号（1991. 2. 28） 西牟田伸一「一橋山岳部のその後」
70－2	『針葉樹』第 15 号　「一橋山岳部活動記録　1991 年度」
71－1	『針葉樹』第 15 号　「一橋山岳部活動記録　1992 年度」
72－1	『針葉樹』第 15 号　「一橋山岳部活動記録　1993 年度」
73－1	一橋大学一橋山岳部『1994 年度上半期活動報告書』　11. 夏合宿
73－2	『針葉樹』第 15 号　「一橋山岳部活動記録　1994 年度」
74－1	『針葉樹』第 15 号　「一橋山岳部活動記録　1995 年度」
74－2	『針葉樹会報』（復刊）第 81 号（1995. 2. 28） 「会務報告　カカルポラジ偵察隊壮行会」
74－3	『針葉樹』第 15 号　「海外での登山活動　カカボラジ峰（ミャンマー最高峰）偵察山行」 （『岳人』1995 年 7 月号　（No. 577）　引地　真「秘峰カカボラジ　半世紀の思いを繋げて」より転載） 『一橋大学山岳会カカボラジ峰登山隊偵察隊報告書」　（1995 年 4 月）
75－1	『針葉樹』第 15 号　「一橋山岳部活動記録　1996 年度」
76－1	『針葉樹』第 15 号　「一橋山岳部活動記録　1997 年度」
77－1	『針葉樹』第 15 号　「一橋山岳部活動記録　1998 年度」
77－2	『針葉樹』第 15 号　「海外での登山活動　ブータン・ヒマラヤ 5, 727m 峰」
78－1	『針葉樹』第 15 号　「一橋山岳部活動記録　1999 年度」
78－2	『針葉樹会報』（復刊）第 87 号（1999. 1. 22） 西牟田伸一「部室再建計画の経緯と現状」 『針葉樹会報』（復刊）第 87 号（1999. 1. 22）　石原　脩「古き良き部室を悼む」 『針葉樹会報』（復刊）第 89 号（1999. 10. 25）　【特集】新部室落成
78－3	『針葉樹会報』（復刊）第 89 号（1999. 10. 25） 「会務報告　針葉樹総会　▽北穂高沢事故報告
79－1	『針葉樹』第 15 号　「一橋山岳部活動記録　1999 年度」
79－2	『針葉樹』第 15 号　「一橋山岳部活動記録　2000 年度」
79－3	『山と渓谷』　2001 年 4 月号　「スペシャル・クロニクル」　p. 215
79－4	『針葉樹会報』（復刊）第 93 号（2001. 3. 31） 山本健一郎「本をめぐって　『深い侵食の谷』」

番号	出　典、作　者、記　事
80－1	『針葉樹会報』（復刊）第 94 号（201. 7. 26）　「平成 13 年度針葉樹会総会報告」 針葉樹会学生幹事・一橋山岳部『クライミングウォール整備提案書』 （平成 13 年 5 月 13 日）
80－2	『針葉樹』第 15 号　「一橋山岳部活動記録　2001 年度」
81－1	『針葉樹』第 15 号　「一橋山岳部活動記録　2002 年度」
81－2	『針葉樹会報』（復刊）第 97 号（2009. 11. 25） 石原　脩「山岳部創立 80 周年記念事業（日本山岳会への寄付）の件
82－1	『針葉樹会報』（復刊）第 99 号（2003. 9. 10） 中村　保「「吉沢一郎さんの蔵書 ― アメリカ山岳会へ ―」
82－2	『針葉樹会報』（復刊）第 99 号（2003. 9. 10） 「平成 15 年度針葉樹会総会報告」
82－3	『きりぎりす』　12 号　（日本山岳会青年部）
82－4	『針葉樹会報』第 100 号（2004. 1. 21） 中村　保「第六回秩父宮記念山岳賞を受賞して」
83－1	『針葉樹会報』第 101 号（2004. 6. 25） 川名真理「新人勧誘作戦　ロシアのコーちゃん入部」
83－2	『針葉樹』第 15 号　「一橋山岳部活動記録　2004 年度」
84－1	『針葉樹会報』第 104 号（2005. 6. 6）　中村　保「「ヒマラヤの東」三部作完結に思う―ジムとローズ・マリーのこと―」
84－2	『山と渓谷』2005 年 9 月号　「スペシャル・クロニクル」p. 217～220
85－1	『岳人』　715 号（2007 年 1 月号）　「登山クロニクル」　p. 140
86－1	『針葉樹会報』第 109 号（2007. 6. 26）　中村　保「アメリカ山岳会報告」
87－1	『針葉樹会報』第 113 号（2008. 12. 8） 高崎治郎「高尾山（新入部員歓迎懇親山行）」
87－2	『針葉樹会報』第 112 号（2008. 6. 30） 編集部「中村保さんが王立地理学協会からメダル受賞」
87－3	『針葉樹会報』第 113 号（2008. 12. 8）　中村雅明「ＨＰ幹事より」
88－1	『針葉樹会報』第 116 号（2009. 11. 28）　山田秀明「新人歓迎山行」
88－2	『岳人』743 号（2009 年 5 月号）　「登山クロニクル」　p. 131
88－3	『岳人』743 号（2009 年 5 月号）　「登山クロニクル」　p. 132
88－4	『針葉樹会報』第 115 号（2009. 6. 24） 「近藤泰氏（昭 53 卒）　妙高山遭難事故速報」 『針葉樹会報』第 116 号（2009. 11. 28）　「近藤泰氏　追悼特集」

番号	出　典、作　者、記　事
88－5	『針葉樹会報』第 114 号（2009.4.10）　竹中　彰「針葉樹文庫開設のご案内」 『針葉樹会報』第 115 号（2009.6.24）　蛭川隆夫「針葉樹文庫見学会報告」 『針葉樹文庫解題』（2009.5.16 刊）　一橋山岳会編 『針葉樹会報』第 116 号（2009.11.28）　竹中　彰「山崎拡氏の遭難報告」
88－6	『針葉樹会報』第 117 号（2010.3.31）　山崎　貫「父の遭難」
88－7	『針葉樹会報』第 114 号（2009.4.10） 竹中　彰「中村保氏、日本山岳会名誉会員に」 『針葉樹会報』第 117 号（2010.3.31） 「トピック：中村保氏、スポーツグランプリ受賞」
89－1	『針葉樹会報』第 117 号（2010.3.31） 「トピック：針葉樹会が南アルプス市から功績者表彰を受ける」
89－2	『針葉樹会報』第 121 号（2011.6.23）　中村　保「ポーランドから二つの栄誉」
90－1	『針葉樹』第 15 号　「一橋山岳部活動記録　2011 年度」 『針葉樹会報』第 122 号（2011.10.25） 竹中　彰「新入部員歓迎山行（蝶ケ岳）」
90－2	『針葉樹会報』第 123 号（2012.3.10） 中村　保「ニュージーランド山岳会の名誉会員になる」
90－3	『針葉樹会報』第 122 号（2012.3.10）　「平成 22 年度　針葉樹会　総会　③規約改定について」、「針葉樹会会則」
91－1	『針葉樹会報』第 124 号（2012.6.21）　「会務報告　針葉樹会臨時総会議事録」

一橋山岳部在籍者名簿（2012年6月30日まで）

（まえがき）

1）入学年　　西暦　（　）内は和暦　T：大正　S：昭和　H：平成
［　］付は見做し入学年（途中年度からの入学）

2）卒業年　　和暦　T：大正　S：昭和　H：平成

3）氏名（掲載方法）

平成24年6月末の『針葉樹会会員名簿』の氏名をベースにして『針葉樹会物故会員名簿』の氏名を加え、入学年順、姓昇順に並べた。

さらに『針葉樹』、『年報』所収の「部員名簿」、「針葉樹会会員名簿」の氏名も追加した。

※使用した「部員名簿」：大正14年10月現在、大正15年4月末日調、大正15年10月末日調、昭和27年9月１日現在、1997年5月末日現在

また、『針葉樹』の「記録」、「年報」、「部誌」、「部報」、「活動概況報告」から途中入退部者を抽出追加した。

１字姓、１字名の人名は、姓と名の間に１スペース空けた。

4）在籍状況

一橋山岳部の年度の範囲は表示年の4月１日～翌年3月31日
入学年度を１年度とする山岳部の在籍年度別の状況を凡例の記号で示す。

5）物故　　●：病死、事故死、戦死　▲：遭難死
＊：途中退部、針葉樹会員外につき不明

6）備考　　旧姓、旧名、専門部、途中入退部年月、逝去日、
その他特記

7）針葉樹会員

○：平成24年6月30日現在の会員

8）本表の改訂について

本表の改訂（加除訂正）版は【一橋山岳会ホームページ】の『針葉樹』の「針葉樹第15号」に掲載する。

9）卒業年の凡例

＃　　中退（在学中の逝去、病気）
＊　　不明（途中退部者など）

S16※　　S16.9仮卒業、S17.3卒業

10）在籍状況の凡例

☆　　山岳部創立時に在籍

◎　　代表（チーフ・リーダー）として在籍
※1930（昭和５）年度から

○　　略１年間在籍

□　　戦時中（昭和18～20年度）の在籍
（勤労動員、学徒出陣で活動ままならず）

△　　年度途中入退部

休　　休部

・　　１～２山行参加　ｏｒ　名簿のみ（山行記録不在）

－　　入部以前の年度

／　　転入以前の年度、卒業/退学以降の年度

●　　病死、事故死、戦死

▲　　遭難死

＊　　不明（資料が無く状況判定不能）

（中村　雅明）

			予1	予2	予3	本1	本2	本3	←専門部は予1～予3と同じ列		
入学年	卒業年	氏　名	1	2	3	4	5	6	物故	備　考	針葉樹会員
1920（T09）	T12	奥野綱重	－	－	☆	／	／	／	●	専門部	
1920（T09）	T15	金田近二	－	－	☆	○	○	○	●		
1920（T09）	T15	中川孫一	－	－	☆	○	○	○	▲		
1921（T10）	S2	松倉栄司	－	☆	○	○	○	○	＊		
1921（T10）	S2	松本重男	－	－	＊	＊	○		＊		
1922（T11）	S3	浅原重継	－	＊	＊	○	○		＊		
1922（T11）	S3	五十嵐数馬	☆	○	○	○	○	○	●		
1922（T11）	S3	板島文雄	＊	＊	＊	○	○		＊		
1922（T11）	S3	小栗吉雄	＊	＊	＊	○	○	○	●		
1922（T11）	S3	川口又男	＊	＊	＊	○			＊		
1922（T11）	S3	曽田荘太郎	＊	＊	＊	○	○	○	＊		
1922（T11）	S3	友田　勇	＊	＊	＊	○	○		＊		
1922（T11）	S3	中島　凞	＊	＊	＊	○	○	○	＊		
1922（T11）	S3	松木謙三	☆	○	○	○	○	○	●		
1922（T11）	S3	三富福之助	＊	＊	＊	○	○	○	＊		
1922（T11）	S3	村尾金二	☆	○	○	○	○	○	●		
1922（T11）	S3	村瀬和四郎	＊	＊	＊	○	○	○	＊		
1922（T11）	S3	森山秀治	＊	＊	＊	○	○		＊		

			予1	予2	予3	本1	本2	本3	←専門部は予1～予3と同じ列		
入学年	卒業年	氏　　名	1	2	3	4	5	6	物故	備　考	針葉樹会員
1922（T11）	S3	渡辺九郎	＊	○	○	○	○	○	●		
1922（T11）	S3	矢作太郎	＊	○	○	○	○	○	●		
1922（T11）	S3	湯浅　武	＊	＊	＊	○			＊		
1922（T11）	S3	吉沢一郎	☆	○	○	○	○	○	●		
1922（T11）	S3	米田義男	＊	＊	＊	○	○		＊		
1923（T12）	S4	赤城鈴太郎	＊	＊	－	○	○	○	●		
1923（T12）	S4	冠木伊右衛門	＊	＊	○	○	○	○	●	旧名：啓蔵	
1923（T12）	S4	近藤恒雄	＊	＊	○	○	○	○	●		
1923（T12）	S4	高木英二	＊	＊	○	○	○	○	●		
1923（T12）	＊	三井春雄	＊	＊	○	○	○		●		
1923（T12）	S4	森竹春雄	＊	＊	○	○	○	○	＊		
1924（T13）	S2	赤掘太郎	＊	○	○				＊	専門部	
1924（T13）	S2	杉村友三郎	＊	○	○				＊	専門部	
1924（T13）	S5	高橋要二	＊	－	○	○	○	○	●		
1925（T14）	＊	石津和一	－	○					＊		
1925（T14）	S6	磯野計蔵	－	△	○	○	○	◎	●	1926.12入部	
1925（T14）	S6	宇佐美敏夫	－	○	○	○	○	○	●		
1925（T14）	S6	河相　薫	－	－	○	○	○	○	●		
1925（T14）	S6	金田吉兵衛	○	○	○	○	○	○	●	旧名：一郎	
1925（T14）	S6	久保田禮治	○	○	○	○	○	○	●		
1925（T14）	＊	佐久間幸夫	－	○					＊		
1925（T14）	S6	手塚晴雄	－	○	○	○	○	○	●		
1925（T14）	S6	中島嘉一郎	○	○	○	○	○	○	●		
1925（T14）	S6	横倉吟三郎	○	○	○	○	○	○	●		
1926（T15）	S7	小川竹夫	－	－	○	○	○	○	●		
1926（T15）	＊	加賀行三	○						＊		
1926（T15）	＊	白井次郎	○						＊		
1926（T15）	S7	園山徳三郎	○	○	○	○	○	○	●		
1926（T15）	S7	関　守三郎	－	○	○	○	○	○	＊		
1926（T15）	S7	高瀬進三	○	○	○	○	○	◎	●		
1926（T15）	S7	中森長太郎	○	○	○	○	○	○	＊		
1926（T15）	＊	野村治信	○	○	○				＊		
1926（T15）	＊	橋倉實美	○						＊		
1926（T15）	S7	吹原不二雄	－	－	○	○	○	○	＊		
1926（T15）	S7	山口稔一	○	○	○	○	○	○	●	旧姓：芋川	
1927（S2）	S8	太田又一	○	○	○	○	○	◎	●		
1927（S2）	S8	勝田一郎	－	○	○	○	○	○	＊	1928.5入部	
1927（S2）	S8	清水達夫	○	○	○	○	○	○	●		

			予1	予2	予3	本1	本2	本3	←専門部は予1～予3と同じ列		
入学年	卒業年	氏　　名	1	2	3	4	5	6	物故	備　考	針葉樹会員
1927（S2）	S8	鈴木英夫	－	－	○	○	○	○	●	1929.4入部	
1927（S2）	S8	高見　要	－	－	－	－	○	○	●	1931.6入部	
1927（S2）	S8	田中秀三郎	－	－	・	○	○	○	＊		
1927（S2）	S8	増山清太郎	○	○	○	○	○	○	●		
1927（S2）	S8	丸茂平造	－	○	○	○	○	○	●	1928.5入部	
1928（S3）	S9	大友亮蔵	－	○	○	○	○	○	●		
1928（S3）	＊	間瀬　正	－	○	○	○			●		
1928（S3）	S9	森　健二	－	○	○	○	○	◎	●	旧姓：十合	
1929（S4）	S10	打橋寿郎	－	○	○	○	○	○	●		
1929（S4）	S10	伊藤文平	－	○	○	○	○	○	＊		
1929（S4）	S10	岡田謙三	○	○	○	○	○	○	●	旧姓：小橋	
1929（S4）	S10	覚張泰三	○	○	○	○	○	○	●	旧姓：安達	
1929（S4）	S10	堀岡　清	－	○	○	○	○	◎	●	1930夏合宿から	
1929（S4）	S10	中島　孚	－	－	○	○	○	○	●	1931.4入部	
1929（S4）	＃	宮川雄二郎	－	○	○	○	○	●	●	1930.4入部	
1929（S4）	S7	吉沢松次郎	－	－	○				●	専門部　1931.6入部	
1930（S5）	＊	賀井善智	○	○	○				＊	S5夏入部	
1930（S5）	S8	加藤安吉	－	△	○				＊	専門部　1931.10入部	
1930（S5）	S11	黒田正治	－	－	－	○	○	○	●	旧姓：齋藤	
1930（S5）	S11	小柳二郎	－	－	－	－	－	○	●	1935.4入部	
1930（S5）	＊	澤井五郎	○	○					＊		
1930（S5）	＊	中島正彦	○						＊	1930夏入部	
1931（S6）	S12	柿原謙一	－	－	－	△	○	○	●	1934.10入部	
1931（S6）	S12	林　俊介	○	○	○	○	◎	○	●		
1932（S7）	S13	小谷部全助	○	○	○	○	◎	○	●		
1932（S7）	＊	遠藤竹雄	○	○	○				＊		
1932（S7）	S13	小林重吉	－	○	○	○	○	○	●		
1932（S7）	＊	杉浦　亮	－	○					＊		
1932（S7）	＊	塚本　駿	－	○	○	○			＊		
1932（S7）	S10	豊田忠巍	○	○	○				●	専門部	
1932（S7）	S13	望月達夫	○	○	○	○	○	◎	●		
1932（S7）	S13	森脇芳之	－	○	○	○	○	○	●		
1932（S7）	S13	和田栄達	－	－	－	○	○	○	●		
1933（S8）	＊	岩井欣五	○						＊		
1933（S8）	S14	榎本直司	○	○	○	○	○	○	●		
1933（S8）	＊	大野恵司	○	○	○				＊	専門部	
1933（S8）	S11	鷹野雄一	○	○	○				●	専門部	
1933（S8）	S14	佐々木誠	○	○	○	○	○	◎	●		

			予1	予2	予3	本1	本2	本3	←専門部は予1～予3と同じ列		
入学年	卒業年	氏　　名	1	2	3	4	5	6	物故	備　考	針葉樹会員
1933（S8）	＊	西野　博	○	○	○				＊		
1933（S8）	S14	森川眞三郎	○	○	○	○	○	○	●		
1933（S8）	＃	湯田坂哲	○	○	●	／	／	／	●	1933.5入部	
1933（S8）	S14	鷲崎雄四郎	○	○	○	○	○	○	●		
1934（S9）	S15	岩崎利一	○	○	○	○	○	◎	●		
1934（S9）	＊	大島秀雄	－	○					＊	専門部　1935.5入部	
1934（S9）	＊	木村重隆	・						＊	専門部　1934.5入部	
1934（S9）	＊	小山　英	・						＊	専門部　1934.5入部	
1934（S9）	＊	清水慶一	・	・					＊		
1934（S9）	S12	新羅二郎	○	○	○	／	／	／	●	専門部	
1934（S9）	＊	高原龍雄	○	○					＊		
1934（S9）	S15	原鉄三郎	○	○	○	○	○	○	●		
1934（S9）	S15	船本文治	－	－	－	○	○	○	●	1936.5入部	
1934（S9）	S12	松浦静雄	－	○	○	／	／	／	●	専門部　1935.5入部	
1935（S10）	＊	内田素彦	○						＊		
1935（S10）	S16	大塚　武	○	○	○	○	○	◎	▲		
1935（S10）	＊	奥山忠教	・						＊		
1935（S10）	＊	毛塚由太郎	○	・					＊		
1935（S10）	＊	斎藤明智	○	○	○				＊		
1935（S10）	＊	鈴木惣兵衛	・						＊		
1935（S10）	＃	関根　修	△	●	／	／	／	／	●	専門部	
1935（S10）	＊	谷ヶ崎龍二	・						＊		
1935（S10）	＊	秦　良平	○						＊		
1935（S10）	S16	日江井正巳	○	○	○	○	○	○	●		
1935（S10）	＊	水永毅六	・						＊	専門部	
1935（S10）	＊	湯村信一	・						＊	専門部	
1936（S11）	＊	木島利夫	－	○	○				＊	1937.5入部	
1936（S11）	＊	里見治男	○	○	○				＊		
1936（S11）	＊	高橋廣三郎	○	○	○	○	○		＊		
1936（S11）	S16※	深谷光茂	－	－	○	○	○	○		1938.5入部	○
1936（S11）	＊	水田　洋	○	○					＊	1936.5入部	
1936（S11）	S16※	宮城恭一	○	○	○	○	○	○	●		
1937（S12）	S17	樫渕　明	－	○	○	○	○	△	●	1938.5入部	
1937（S12）	S17	川村喜作	－	－	－	＊	○	△	＊		
1937（S12）	S17	久保孝一郎	○	○	○	○	○	△	●		
1937（S12）	＊	小柳英二郎	－	－	○	○			＊	1939.5入部	
1937（S12）	S17	斎藤三郎	○	○	○	○	○	△	●	旧姓：小泉	
1937（S12）	＊	佐藤眞一	－	－	○				＊	1939.4入部	

			予1	予2	予3	本1	本2	本3	←専門部は予1～予3と同じ列		
入学年	卒業年	氏　　名	1	2	3	4	5	6	物故	備　考	針葉樹会員
1937（S12）	S17	佐藤政雄	－	△	○	○	○	△	●	1938.12入部	
1937（S12）	S17	林　正敏	－	－	○	○	○	△		1939.4入部	○
1937（S12）	S17	根本　大	－	△	○	○	○	△	●	S17年度代表	
1937（S12）	S17	森　一則	－	－	－	－	○	△	●	1941.4入部	
1937（S12）	S17	山田亮三	○	○	○	○	○	△	●		
1939（S14）	＊	大野健司	－	○	○	○	＊	＊	●	専門部	
1939（S14）	S19	小林茂雄	－	○	○	○	○	△		1944.9仮卒業	○
1939（S14）	S19	鈴木　肇	○	○	○	○	□	△	●	専門部	
1939（S14）	S16※	清水一郎	○	○	○				●	専門部	
1939（S14）	S16※	佐野茂雄	○	○	○				●	専門部	
1939（S14）	S19	高野秀男	○	○	○	○	□	△	●	1944.9仮卒業	
1939（S14）	＊	関岡賢治	○						＊	1939.4入部	
1939（S14）	S19	濱口浩海	－	＊	○	○	□	△	●	1944.9仮卒業	
1939（S14）	S19	林戸茂男	－	○	○	○	□	△	＊	1944.9仮卒業	
1939（S14）	S19	原田　豊	－	○	○	○	□	△		1944.9仮卒業	○
1939（S14）	S19	松下順吉	－	○	○	○	□	△	●	1944.9仮卒業	
1940（S15）	S17	入沢　肇	－	○	○				＊	専門部	
1940（S15）	＃	友田純一	▲						▲	1940.7.18没	
1940（S15）	S21	中林栄三	○	○	○	□	□	□	＊		
1940（S15）	S17	細野真令	＊	○	○				●	専門部	
1940（S15）	＃	前田道夫	○	▲					▲	専門部　1941.10.24没	
1940（S15）	S21	間々田良雄	○	○	○	□	□	□	●		
1940（S15）	＃	古沢幸平	○	▲					▲	専門部　1941.10.24没	
1941（S16）	S19	大崎幸太郎	○	○	○				＊	専門部	
1941（S16）	＃	長沼広治	▲						▲	専門部　1941.10.24没	
1941（S16）	S22	野尻七郎	－	○	□	□	□	○		1942.5入部	○
1941（S16）	S22	樋口　洪	○	○	□	□	□	◎	●		
1941（S16）	S22	伯耆豊次	○	○	□	□	□	○	＊		
1941（S16）	S22	真木淳一郎	－	○	□	□	□	○		1942.5入部	○
1941（S16）	S22	宮内良雄	＊	＊	＊	＊	＊	○	＊		
1942（S17）	S23	石井左右平	○	○	□	□	○	◎	●		
1942（S17）	S23	伊藤恙生	－	－	－	－	○	○			○
1942（S17）	S23	岩谷英生	－	○	□	□	＊	＊	＊		
1942（S17）	＃	大河原幸治	○	○	□	●			●	1945.4没	
1942（S17）	S23	大島理則	－	○	□	□	○	○			○
1942（S17）	S23	倉田隆文	○	○	□	□	＊	＊	●		
1942（S17）	S23	島影礼一	－	－	－	－	○	○	●		
1942（S17）	S23	関　恒義	○	○	□	□	○	○			○

			予1	予2	予3	本1	本2	本3	←専門部は予1～予3と同じ列		
入学年	卒業年	氏　　名	1	2	3	4	5	6	物故	備　考	針葉樹会員
1942（S17）	S23	田中一雄	－	○	□	□	○	○	●		
1942（S17）	S23	中村讃治	○	○	○	□	○	○	●		
1942（S17）	S23	山崎　擴	○	○	○	□	○	○	▲		
1943（S18）	S24	秋元邦夫	－	－	－	○	○	○			○
1943（S18）	S24	笠原広信	○	□	□	○	○	◎	●		
1943（S18）	S24	森　安久	－	－	－	○	○	○	＊		
1944（S19）	S25	佐藤　勇	－	－	○	○	○	○	●		
1944（S19）	S25	望月敏治	－	－	○	○	○	◎	●		
［1945（S20）］	S26	上田駿策				○	○	○	●	1948本1入学	
1945（S20）	＃	山中健雄	○	○	○	▲			▲		
［1945（S20）］	S27	横山暁一				○	○	◎	●	1948本1入学	
1946（S21）	S29	荒砥通虎	△	○	○	○	○	○	●	1946.9専門部入学	
1946（S21）	S24	小川宣美	△	○	○				●	1946.9専門部入学	
1946（S21）	＊	君塚克美	△	＊	＊				●	1946.9専門部入学	
1946（S21）	S27	小泉三好	△	○	○	○	○	◎	●	1946.9入学	
1946（S21）	S27	小林　宏	△	○	○	○	○	○	●	1946.9入学	
1947（S22）	S28	阿部治雄	○					○	＊		
1947（S22）	S28	海老澤齊	－	－	－	○	○	○			○
1947（S22）	S30	鹿俣謙一	○	○	○	○	○	○	●		
1947（S22）	S28	河野治雄	－	－	－	○	○	○	＊		
1947（S22）	S28	笹原正義	－	○	○	○	○	○	＊		
1947（S22）	S28	澁谷一郎	○	○	○	○	○	○			○
1947（S22）	S28	中村正司	○	○	○	○	○	◎			○
1947（S22）	S28	原田一郎	○	○					＊	冬合宿後退部	
1947（S22）	S28	南　昌宏	－	○	○	○	○	○			○
1948（S23）	＊	五十嵐弘	○	○	○	○	○	＊	＊		
1948（S23）	S28	伊藤助成	○	○	○	○	○		●		
1948（S23）	＊	駒見健二	○					＊	＊		
1948（S23）	S29	髙橋尚好	○	○	○	○	○				○
1948（S23）	＊	竹脇　量	○	○	○	○	○	＊	＊		
1948（S23）	S28	西村　勝	○	○	○	○	○				○
1948（S23）	S28	宮川立三	○	○	○	○	○		●		
1948（S23）	＃	宮下　裕	○	○	●				●		
1948（S23）	S28	渡辺幸信	○	○	○	○	○				○
1951（S26）	S30	石原　脩	○	○	◎	◎					○
1951（S26）	S31	奥野巌根	○	○	○	○	○		●		
1951（S26）	S32	勝田有恒	－	○	○	○	○	△	●		
1951（S26）	S30	白川隆夫	○	○	○	○					○

			予1	予2	予3	本1	本2	本3	←専門部は予1～予3と同じ列		
入学年	卒業年	氏　　名	1	2	3	4	5	6	物故	備　考	針葉樹会員
1951（S26）	S30	須山修平	○	○	○	○					○
1951（S26）	＊	面木　忠	－	○			＊	＊	＊		
1952（S27）	S33	甘利仁朗	○	○	○	○	○	○	●		
1952（S27）	S31	石和田四郎	－	○	○	○					○
1952（S27）	S31	尾身幸次	－	○							○
1952（S27）	S32	春日井実	○	○	○	○	○		●		
1952（S27）	＊	粟屋三郎	○	○			＊	＊	＊		
1952（S27）	＊	棚沢　泰	○	○			＊	＊	＊		
1952（S27）	＊	佐藤　博	○	○					●	3年から別の大学へ	
1952（S27）	S31	佐薙　恭	○	○	○	○					○
1952（S27）	S31	鈴木克夫	○	○	○	○					○
1952（S27）	S31	瀬田　宏	－	○	○	○					○
1952（S27）	S31	髙崎治郎	○	○	○	○				旧姓：南竹	○
1952（S27）	S33	福田　孟	○								○
1952（S27）	＊	中村健一	－	○	○		＊	＊	＊		
1952（S27）	S33	中村幸正	○	○	休	休	○	○	●		
1952（S27）	S31	松尾寛二	○	○	○	○					○
1952（S27）	S31	宮川次夫	－	○	○	○					○
1952（S27）	S31	吉沢貞一郎	○	○	○	○			●		
1952（S27）	S31	吉田義則	○	○	○	◎			●		
1953（S28）	＊	大沢伴治	○				＊	＊	＊		
1953（S28）	S32	岡　悦郎	－	－	○	○					○
1953（S28）	S32	各務謙蔵	○	○	○	○			＊		
1953（S28）	＊	金沢圀男	○	○					＊		
1953（S28）	S32	篠原敏弘	－	－	○	○			●		
1953（S28）	S33	柴崎　新	○	○	○	○	○				○
1953（S28）	S32	清水　啓	－	－	○	○			●		
1953（S28）	S33	中村　保	○	○	○	○	○				○
1953（S28）	S32	南　亮進	○	○	○	○					○
1953（S28）	S32	山本健一郎	○	○	○	○			●		
1954（S29）	＊	阿部謹也	－	○					●		
1954（S29）	S33	新井慶司	○	○	○	○				旧姓：朝木	○
1954（S29）	S33	市畑　進	○	○	○	○					○
1954（S29）	＊	板谷　昇	○				＊	＊	＊		
1954（S29）	S33	上原利夫	○	○	○	○					○
1954（S29）	＊	大庭将六	○	○	○		＊	＊	＊		
1954（S29）	S33	岡垣治雄	○	○	○	◎					○
1954（S29）	S33	加地幸雄	○	○	○	○					○

			予1	予2	予3	本1	本2	本3	←専門部は予1～予3と同じ列		
入学年	卒業年	氏　　名	1	2	3	4	5	6	物故	備　考	針葉樹会員
1954（S29）	S33	小林　博	○	○	○	○					○
1954（S29）	S33	塩川清彦	－	－	○	○					○
1954（S29）	S33	鈴木博武	－	－	○	○			＊		
1954（S29）	＊	高島陽一	○				＊	＊	＊		
1954（S29）	＊	長田操彦	○				＊	＊	＊		
1954（S29）	＊	二階堂信一	○				＊	＊	＊		
1954（S29）	S33	西海隼雄	○	○	○	○					○
1954（S29）	S33	丸山則二	－	－	○	○					○
1954（S29）	＊	南　敬介	○				＊	＊	＊		
1954（S29）	S33	宮川守久	○	○	○	○					○
1954（S29）	＊	村上光義	○				＊	＊	＊		
1954（S29）	S33	茂木俊明	○	○	○	○					○
1955（S30）	S34	市川陽一	○	○	○	○					○
1955（S30）	S34	宇田川徳治	○	○	○	○			●		
1955（S30）	S34	大橋喜治	－	△	○	○					○
1955（S30）	S34	景山豪治	○	○	○	○					○
1955（S30）	S34	城戸　剛	○	○	○	○			●		
1955（S30）	S34	澤木一夫	○	○	○	◎					○
1955（S30）	＊	松木　実	○	○	○		＊	＊	＊		
1955（S30）	S34	山田邦行	○	○	○	○			●		
1955（S30）	＊	山田成人	○				＊	＊	＊		
1956（S31）	＊	石井輝雄	○				＊	＊	＊		
1956（S31）	＊	岩見美法	○				＊	＊	＊		
1956（S31）	S35	江面誠二	○	○	○	○			●		
1956（S31）	＊	大須賀広次	○				＊	＊	＊		
1956（S31）	S35	大橋一慶	－	－	○	○					○
1956（S31）	＊	川崎　喬	○				＊	＊	＊		
1956（S31）	S35	小峰　隆	○	○	○	○					2012. 4退会
1956（S31）	＊	管井弘之	○				＊	＊	＊		
1956（S31）	＊	鈴木健之	○				＊	＊	＊		
1956（S31）	＊	高山　浩	○				＊	＊	＊		
1956（S31）	S35	中西　厳	○	○	○	○					○
1956（S31）	＊	中野勝弘	○				＊	＊	＊		
1956（S31）	S35	丸子博之	○	○	○	○					○
1956（S31）	S35	峰高教通	○	○	○	○					○
1956（S31）	S35	安田惟行	○	○	○	○					○
1956（S31）	S35	山元淑弘	－	○	○	○			＊		
1956（S31）	S35	渡辺嘉佑	○	○	○	◎			●		

			予1	予2	予3	本1	本2	本3	←専門部は予1～予3と同じ列		
入学年	卒業年	氏　　名	1	2	3	4	5	6	物故	備　考	針葉樹会員
1957（S32）	S36	有賀　盈	－	○	○	○					○
1957（S32）	S36	石　弘光	○	○	○	○					○
1957（S32）	S36	大賀二郎	○	○	○	○			●		
1957（S32）	＊	川村完爾	－	△			＊	＊	＊		
1957（S32）	S36	小林進二	○	○	○	○			●		
1957（S32）	S36	小林正直	－	○	○	○					○
1957（S32）	＊	菅村幸夫	○				＊	＊	＊		
1957（S32）	S36	永井新也	○	○	○	○					○
1957（S32）	S36	中川滋夫	○	○	○	◎			●		
1957（S32）	S36	中島　寛	○	○	○	○			●		
1957（S32）	S36	仲田　修	○								○
1957（S32）	＊	馬場佳一	○	△			＊	＊	＊		
1957（S32）	S36	三股　宏	－	○	○	○					○
1957（S32）	S36	山本尚禎	○	○	○	○			●		
1958（S33）	S37	朝木大統	△	○	○	○			●		
1958（S33）	S37	遠藤晶土	－	○	○	○					○
1958（S33）	S38	倉知　敬	○	○	○	○	○				○
1958（S33）	S37	大建二郎	○	○	○	◎			●		
1958（S33）	S37	三井　博	△	○	○	○					○
1958（S33）	S37	宮本英治	○	○	○	○					○
1959（S34）	S38	臼井　弘	○	○	○	◎					○
1959（S34）	＊	黒川信幸	○				＊	＊	＊		
1959（S34）	S38	後閑勉六	－	○	○	○			●		
1959（S34）	S38	高橋信成	○	○	○	○					○
1959（S34）	S38	多田伸治	○	○	○	○					○
1960（S35）	＊	伊藤重道	△	△			＊	＊	＊	秋合宿前に入部　夏合宿後に退部	
1960（S35）	＊	門田衛士	－	△			＊	＊	＊	谷川、夏合宿に参加	
1960（S35）	＊	熊谷　弘	・				＊	＊	＊	夏合宿だけ参加	
1960（S35）	S39	竹中　彰	○	○	○	○					○
1960（S35）	S39	長沢道彦	○	○	○	○					○
1960（S35）	S39	中橋寿雄	○	○	○	○					○
1960（S35）	＃	名和泰三	○	○	○	休					○
1960（S35）	S39	蛭川隆夫	○	○	○	◎					○
1960（S35）	S40	本間　浩	○	○	○	○	○				○
1960（S35）	S39	村上泰介	△	○	○	○				富士山合宿前に入部	○
1960（S35）	＊	山本靖彦	・				＊	＊	＊	夏合宿だけ参加	
1960（S35）	＊	吉川　勲	・				＊	＊	＊	夏合宿だけ参加	
1961（S36）	S40	小野　肇	○	○	○	○					○

			予1	予2	予3	本1	本2	本3	←専門部は予1～予3と同じ列		
入学年	卒業年	氏　　名	1	2	3	4	5	6	物故	備　考	針葉樹会員
1961（S36）	S40	小島和人	○	○	○	◎					○
1961（S36）	S41	坂井溢弘	○	○	○	○	○				○
1961（S36）	S40	佐藤　力	○	○							○
1961（S36）	S41	佐藤之敏	○	○	○	○	○				○
1961（S36）	S41	半場三雄	○	○	○	○	○				○
1961（S36）	＊	藤沢恵一	○				＊	＊	＊		
1961（S36）	S40	三森茂充	○	○	○	○					○
1962（S37）	S41	池知昭洋	○	○	○	○					○
1962（S37）	S41	石田信隆	○	○	○	○			●		
1962（S37）	S41	佐藤久尚	○	○	○	○					○
1962（S37）	S41	高崎俊平	○	○	○	◎					○
1962（S37）	＊	寺尾公男	△				＊	＊	＊		
1962（S37）	＊	橋本英男	△				＊	＊	＊		
1962（S37）	S41	原　博貞	○	○	○	○					○
1962（S37）	S41	平川紀男	○	○	○	○			▲		
1963（S38）	S42	岡田健志	○	○	○	◎					○
1963（S38）	S42	齋藤　正	○	○	○	○					○
1963（S38）	S42	田沼行雄	○	○	○	○					○
1963（S38）	S42	吉川晋平	○	○	○	○					○
1963（S38）	S42	吉沢　正	△	○	△						○
1964（S39）	S43	加藤正巳	○	○	○	○			●		
1964（S39）	S43	金成　剛	○	○	○	○			●		
1964（S39）	S43	中村雅明	○	○	○	◎					○
1965（S40）	＊	賀川隆行	○	○	△		＊	＊	＊		
1965（S40）	＊	佐藤寿海雄	・				＊	＊	＊	1965秋退部	
1965（S40）	＊	千田　稔	△				＊	＊	＊	1965秋退部	
1965（S40）	S44	俵　　昭	○	○	○	◎					○
1965（S40）	S44	藤原朋信	－	○	○	○					○
1965（S40）	S45	宮武幸久	○	○	○	○	◎				○
1966（S41）	＊	今泉佳久	△	○	○	△	＊	＊	＊	1966秋入部	
1966（S41）	＊	大田輝久	○	○	○	△	＊	＊	＊		
1966（S41）	S46	戸川哲哉	○	○	○	○	○				○
1966（S41）	＊	藤浪育夫	○	○			＊	＊	＊		
1966（S41）	＊	山口愼爾	△				＊	＊	＊		
1967（S42）	S46	金子晴彦	△	○	○	◎					○
1967（S42）	S48	藤巻　悟	△	○	○	○	○	○	●		
1967（S42）	＃	中村愼一郎	△	▲					▲	1968.5.1没	
1967（S42）	S47	西牟田伸一	○	○	○	○	○				○

			予1	予2	予3	本1	本2	本3	←専門部は予1～予3と同じ列		
入学年	卒業年	氏　　名	1	2	3	4	5	6	物故	備　考	針葉樹会員
1967（S42）	＊	前田庸介	○				＊	＊	＊		
1967（S42）	S48	松尾信孝	△	○	○	○	○	○			○
1968（S43）	S48	井草長雄	－	○	○	◎	○				○
1968（S43）	S48	上田　伸	－	－	－	△	◎			1971秋入部	○
1968（S43）	＊	中原　研	△				＊	＊	＊		
1969（S44）	＊	勝賀瀬崇	△	○			＊	＊	＊		
1969（S44）	S49	西田研志	－	△	○	○	○		＊		
1969（S44）	＃	橋本　明	○	▲					▲	1970.9.2没	
1969（S44）	＊	羽部敏夫	△	○	△		＊	＊	＊		
1970（S45）	＊	神谷敏行	○				＊	＊	＊		
1971（S46）	＊	工藤英夫	○	○					＊		
1971（S46）	S50	高橋史郎	○	○					●		
1971（S46）	S51	藤本敏行	－	－	○	○	○				○
［1971（S46）］	＊	古橋　稔			○	○			＊	1973.4学士入学	
1971（S46）	S51	前神直樹	○	○	◎	◎	○				○
1972（S47）	＊	大枝　実	○	○			＊	＊	＊		
1972（S47）	S51	加藤博行	○	○	○	◎					○
1972（S47）	S52	兵藤元史	○	○	○	○	○				○
1972（S47）	＊	藤田一成	○	○	○		＊	＊	＊		
1972（S47）	＃	増井　誠	○	○	●				●	1974.10没	
1972（S47）	＊	元井慎一	○	○	○		＊	＊	＊		
1973（S48）	S52	浅田　充	○	○	○	○					○
1973（S48）	S53	佐藤活朗	○	○	○	○	○				○
1973（S48）	S53	松田重明	○	○	○	◎	○				○
1973（S48）	S53	若林貴之	○	○	○				＊		2012.6退会
1974（S49）	S53	近藤　泰	○	○	○	◎			▲	2009.3.21没	
1974（S49）	＊	坂牧利実	○	○			＊	＊	＊		
1974（S49）	＊	永田一彦	○	○	○		＊	＊	＊		
1975（S50）	＊	落合　誠	－	○			＊	＊	＊		
1975（S50）	S54	佐藤周一	○	○	○	○					○
1975（S50）	S54	神野　隆	○	○	○	◎					○
1976（S51）	＊	大慶順一郎	○				＊	＊	＊		
1976（S51）	S55	岡部寛史	－	○	○	○					○
1976（S51）	＊	酒井浩三	○				＊	＊	＊		
1976（S51）	S56	中西　茂	○	○	○	○	○				○
1976（S51）	S55	引地　真	○	○	○	◎					○
1976（S51）	S55	米田篤裕	○	○	○	○					○
1977（S52）	S56	小林　修	－	○	○	◎					○

			予1	予2	予3	本1	本2	本3	←専門部は予1～予3と同じ列		
入学年	卒業年	氏　　名	1	2	3	4	5	6	物故	備　考	針葉樹会員
1977（S52）	＊	多田由美	○	○			＊	＊	＊	旧姓：石川	
1977（S52）	＊	吉田雄治	○	○			＊	＊	＊		
1978（S53）	＊	黒田彰彦	○				＊	＊	＊		
1978（S53）	＃	土方　浩	○	○	○	▲			▲	1981.8没	
1978（S53）	＊	田中賢介	○	○	○		＊	＊	＊		
1978（S53）	＃	中村宣幸	○	○	○	▲			▲	1981.8没	
1978（S53）	＃	萬濃英士	○	○	○	▲			▲	1981.8没	
1978（S53）	S57	宮下克彦	－	○	○	○					○
1978（S53）	＊	八尾草一郎	○				＊	＊	＊		
1978（S53）	＊	谷津範之	○	○	○		＊	＊	＊		
1979（S54）	S58	岡部晃和	○	○	○	◎					○
1979（S54）	S58	竹若敬三	○	○	○	○					
1979（S54）	＊	吉田淳一	○	○			＊	＊	＊		
1980（S55）	S60	石川保典	○	○	○	◎	○				○
1980（S55）	＊	入佐信宏	○						＊		
1980（S55）	S59	稲毛尚之	○	○	○	○					○
1980（S55）	＊	滝浦　剛	○				＊	＊	＊		
1980（S55）	＊	竹内俊雄	○				＊	＊	＊		
1980（S55）	＊	辻日出夫	－	－	○		＊	＊	＊		
1980（S55）	＊	福田秀和	○				＊	＊	＊		
1980（S55）	S59	安島孝知	○	○	○	○					○
1980（S55）	S59	山本礼二郎	○	○	○	○					○
1981（S56）	S60	石丸義男	○	○	○	◎					○
1981（S56）	S60	五ケ山淳	○	○	○	○					○
1981（S56）	＊	寺戸直幸	○				＊	＊	＊		
1982（S57）	S61	白石章治	－	○	○	○					○
1982（S57）	＊	鈴木雅之	○	○			＊	＊	＊		
1982（S57）	＊	高野憲一郎	○				＊	＊	＊		
1982（S57）	＊	百瀬勝紀	○				＊	＊	＊		
1983（S58）	H2	鮎沢政文	－	○	○	◎	○	○	＊		
1983（S58）	S63	川名真理	○	○	○	○	○				○
1983（S58）	＊	谷口隼人	○	○	◎	△	＊	＊	＊	1986秋退部	
1984（S59）	S63	河野　正	○	○	○	○					○
1984（S59）	S63	斉藤　誠	○	○	○	◎					○
1984（S59）	H1	外池武司	○	○	○	○					○
1985（S60）	＊	青木克人	△				＊	＊	＊		
1985（S60）	＊	大野理恵	○	○			＊	＊	＊		
1985（S60）	H2	小野　一	○	○	○	◎	○		＊		

			予1	予2	予3	本1	本2	本3	←専門部は予1～予3と同じ列		
入学年	卒業年	氏　　名	1	2	3	4	5	6	物故	備　考	針葉樹会員
1985（S60）	H1	高橋弘行	－	－	○	○	＊	＊	＊		
1985（S60）	＊	樋渡浩一	△				＊	＊	＊		
1986（S61）	H2	井上裕之	○	○	○	◎					○
1986（S61）	＃	細野伸二	○	○	▲				▲	1988.8.12没	
1986（S61）	＊	山内　太	○	○	休	○	◎	○	＊		
1987（S62）	＊	内藤久裕	○	○	○		＊	＊	＊		
1988（S63）	＊	岩原一弘	○				＊	＊	＊		
1988（S63）	＊	坪井　充	○	○	○		＊	＊	＊		
［1988（S63）］	＊	楊　継春	－	－	－	・		・	＊		
1989（H1）	H5	天羽康之	○	○	◎	○			＊		
1989（H1）	H6	田形祐樹	－	○	○	○	○			1990.6入部	○
1989（H1）	H7	古田　茂	○	○							○
1989（H1）	＊	又賀建太郎	－	△			＊	＊	＊	1990.7入部	
1990（H2）	H6	寺島　修	－	○	○	◎					○
1991（H3）	＊	青野恭久	・				＊	＊	＊		
1991（H3）	＊	秋元正博	△				＊	＊	＊		
1991（H3）	＊	砂永健二	△				＊	＊	＊		
1991（H3）	H8	古瀬泰介	○	○	○	◎	○				○
1991（H3）	＊	和田壮史	○	○			＊	＊	＊		
1992（H4）	＊	笠巻健也	・				＊	＊	＊		
1992（H4）	H8	渕澤貴子	○	○	○	◎					○
1992（H4）	＊	三谷聖哉	△				＊	＊	＊		
1993（H5）	＊	安田　真	・				＊	＊	＊		
1993（H5）	＊	吉武みゆき	△	○	○		＊	＊	＊		
1994（H6）	＊	安部久輝	・				＊	＊	＊		
1994（H6）	H10	大谷公重	○	△		○				1995.10退部　1997.6復部	○
1994（H6）	＊	中居健吾	△				＊	＊	＊		
1994（H6）	＊	長尾堅二	△				＊	＊	＊		
1994（H6）	H11	西井　薫	○	○	○	◎	○				
1994（H6）	＊	福元洋平	△				＊	＊	＊		
1995（H7）	＊	藍　健樹	△				＊	＊	＊		
1995（H7）	＊	小倉昇一	・				＊	＊	＊		
1995（H7）	＊	平岡宏一	△				＊	＊	＊		
1995（H7）	H11	松田　智	－	－	○	○					2012.4退会
1995（H7）	H12	宗像　充	○	○	◎	◎	◎				○
1996（H8）	＊	岩浪　靖	△				＊	＊	＊	1996.11退部	
1996（H8）	＊	立木圭太	○	△			＊	＊	＊	1997.8退部	
1996（H8）	＊	田中真之	（△）			△	＊	＊	＊	（△）：ワンゲル	

			予1	予2	予3	本1	本2	本3	←専門部は予1～予3と同じ列		
入学年	卒業年	氏　　名	1	2	3	4	5	6	物故	備　考	針葉樹会員
1998（H10）	＊	小田　研	・				＊	＊	＊		
1998（H10）	＊	佐藤悠史	○				＊	＊	＊		
1998（H10）	＊	蔦谷高志	○				＊	＊	＊		
1998（H10）	＊	野口和寛	△				＊	＊	＊		
1998（H10）	＊	久田英一郎	○	△			＊	＊	＊		
1999（H11）	＊	Ａlimma　Zorig	－	・			＊	＊	＊		
1999（H11）	＊	竹折美香	－	－	△	△	＊	＊	＊	2001.11入部	
1999（H11）	H15	山田秀明	○	◎	◎	◎					○
2000（H12）	＊	遠藤貴宏	－	△			＊	＊	＊	2001.12退部	
2000（H12）	H17	鳥本真司	－	△	△	◎	◎			2001.12退部　2002.12復部	○
2002（H14）	＊	伊藤　匠	△				＊	＊	＊		
2004（H16）	＊	ﾝﾝｽﾝﾁﾝ･ﾁｪﾙﾝｼｪｳｽｷｰ	○	○	○	○			＊		
2004（H16）	＊	玉井理美	△				＊	＊	＊	2004.12入部	
2005（H17）	＊	大橋義拓	－	－	－	・	＊	＊	＊		
2005（H17）	＊	田平　愛	－	－	－	・	＊	＊	＊		
2005（H17）	H21	原口翔伍	－	－	－	◎					○
2006（H18）	H22	糟谷知紀	－	－	○	◎					○
2008（H20）	H24	伊藤研祐	－	○	○	○					
2008（H20）	H24	望月　優	－	○	○	◎					
2008（H20）	H24	米田卓也	－	○	○	○					
2009（H21）		山根範子	－	○	○	○				経済学部	
2010（H22）		小宮山尚与志	－	○	◎					商学部	
2010（H22）		町田広樹	－	○	○					法学部	
2010（H22）		峯　弘卓	－	－	○					社会学部	
2011（H23）		細川朋道	－	○						商学部	

【編集後記】

針葉樹第15号をお届けします。

15号は１９８５年～２０１２年６月までの山行記録を載せました。「15号の時代」は華々しい登攀記録・海外登山や部室の新設などがある半面、遭難や廃部問題などもあり、その後の部活動ゼロという時代に入っていきます。当時の部員や関係したＯＢの方々のご苦労は大変なものがあったと想像しますが、そういった経緯は15号ではほとんど触れることができませんでした。

一方、創部90周年記念事業という位置づけがあたえられましたが、中村保先輩には「チベットの神秘の河」の紀行文と素晴らしい数多くの写真を提供していただきました。

さらに、多くの会員から、90周年記念事業に対して多額のご寄付をいただき、15号発行のバックアップをしていただきました。大変有難うございました。

最近、一橋山岳部も部員の定着が見受けられ、彼らは果敢に新しい部史を築いて行こうとしています。15号が来るべき１００周年へのつなぎの役割が果たせることを心から願っています。（岡田　健志（昭和42年卒））

針葉樹第14号が発行されたのが１９８５年6月、それから実に27年以上が経過しました。２００２年に創部80周年を迎えた時も、第15号の発行機運は盛り上がりませんでした。創部90周年記念事業企画の一つとして第15号の発行を強く希望したのは、①会員の高齢化が進む中、この機会を逃すと永久に発行できないと危惧したこと、②第15号の発行を通じて当時現役だった若手会員（１９８５年以降卒業）との交流が促進（針葉樹会の活性化）されるとの期待からでした。

しかし、最大の障害は肝心の学生の活動報告が集まるか、余りにも時間が経過しているので書き起こしは難しいだろうと言うことでした。その障害が一挙に解消に向かったのは、部室蔵書の整理作業をしている時に、２分冊の部活動報告書のファイルを発見した事です。正に第15号が対象とする１９８５年度～１９９９年度（１９８９年度除く）の山行記録、山行表が揃っているのを目にした時の驚き、嬉しさは忘れられません。本誌に「チベットの神秘の河」を寄稿された中村保先輩が『最後の辺境』の「はじめに」の中で〝吉沢先輩から受けた薫陶「登山家は読むこと、登ること、書くことの三つが揃って一人前といえる」を忠実に守っている。〟と書かれていますが、部員数が少ない時期に各年度が山行記録をしっかり残してくれたことに敬意を表します。

現在の部員諸君にも是非見習って欲しいと思います。

当時の部員に本誌の編集に参画してもらうことが出来なかったのは極めて残念です。この為、従来の『針葉樹』で恒例となっていた「部誌」、「山小屋」が抜けたのが心残りです。本誌を交流促進剤として、第14号以前の年代と積極的に交流して欲しいと切に願います。

90年の活動を纏めるものとしての年表、一橋山岳部在籍者名簿の作成を担当しましたが、力不足が否めず、両表とも資料の域を出なかったことをお詫びすると共に、粗案を精査・校正していただいた多くの皆様、特に的確・懇切丁寧なご教示をいただいた倉知先輩に感謝申し上げます。

なお、両表の改訂は図書幹事の責務とし、最新版をホームページに掲載する所存ですので、引き続きご協力をお願いする次第です。

（中村　雅明（昭和43年卒））

〈編集委員〉
岡 田 健 志
中 村 雅 明

針 葉 樹 第15号

定価 5,000円

印刷日 2012年12月 3日
発行日 2012年12月12日
発行者 一橋山岳会 東京都国立市一橋大学内

祝　創部90周年

箔

株式会社　和　香

代表取締役　会長

遠　藤　晶　士　（昭和 37 年卒）

〒 116-0002　東京都荒川区荒川２丁目27番４号

Phone　０３－３８０３－１３４１

E-mail　IZE00022@nifty.ne.jp

Mobile　０９０－２４０３－４４３４

「全国酒類コンクール　芋焼酎部門　１位・２位・３位　独占」

創業 1903 年　高崎酒造株式会社



〒 891-3111　鹿児島県西之表市西町６９９３－１

TEL 0997-22-0707　FAX 0997-23-0036

HP　http://www.takasakishuzo.com

のぞみ法律事務所

弁護士　吉川晋平

（昭和42年卒・法）

事務所　〒231-0015

横浜市中区尾上町５丁目67番地１

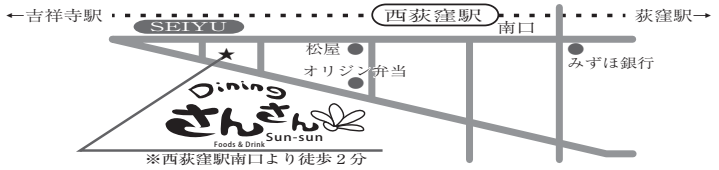
スルガ銀行ビル４階

TEL　045-662-3934

FAX　045-662-3918

Dining さんさん Sun-sun

中村雅明（昭和43年卒）の息子の店です。
西荻窪駅南口より徒歩2分。和をベースに旬を活かした幅広いお料理と豊富なドリンクを落ち着いた雰囲気の中でゆったりとお楽しみ下さい。



〒167-0053 杉並区西荻南 3-12-1 A-2 日伸西荻プラザ 1F
火曜日～土曜日 PM18:00～AM2:00（LO 1:00）
日曜日・祝 日 PM18:00～AM1:00（LO 0:00）
月曜日定休
TEL 03-6913-7720

ゆったりとバードウォッチングを楽しみたい方の宿
ビルサイドイン アダージオ
Adagio



鳥科は野鳥の宝庫



イカル	オオマシコ
カケス	ハギマシコ
アカゲラ	アトリ
コゲラ	シメ
ホオジロ	（アカ）ウソ
ホンドリス	マヒワ

冬にはテラスに10数種類の野鳥が訪れます
（シーズンにより変動があります。事前にお問い合わせください）
昨冬はハギマシコが大群で来ました

アダージオはこんなところ

～野鳥を見ながらゆっくりしたい方に最適～

- **全館禁煙です**
- **5部屋しかありません**
  どんなに入っても10人ちょっと。夫婦二人でやってます。
  広めのセミスイート3室。全室バスウォッシュレット付き。
- **夕食は和風の懐石風**
- **バーダーへの配慮**
  鳥のよく見える角のお部屋を優先的にご利用いただけます。
  人数の多いときはその部屋を撮影用に開放いたします。
  撮影の人数を絞って人にも鳥にも優しく(団 体はお断りしています)。
- **そして、デジスコユーザーには…**
  - **初心者の方には最適な撮影環境**（20Xでも十分。ゆっくり撮影）
  - **ベテランには癒しの隠れ家として**（30Xで鳥の表情まで）
  - **デジスコドットコム社最新機器展示**（手にとってお試し可能）
  - **たーぼ♪さんのアダージオ撮影レポート掲載**
    http://www.digisco.jp/adagio/adagio.html

ご宿泊のお申込、お問い合わせは…

大人のための小さな宿 アダージオ
平日：お1人様10,500円（1泊2食税込）

〒391-0301 長野県茅野市北山4026 蓼科東急リゾートタウン内
TEL:0266-60-2080
松尾信孝（昭和 48 年卒）
http://www.adagio-nagano.com/
e-mail:adagio@po25.lcv.ne.jp

伊勢法律事務所

平成６年卒の田形祐樹です。平成２２年１０月に、伊勢神宮のお膝元で、法律事務所を開業しました。伊勢神宮（外宮）は、事務所から歩いて５分です。

伊勢に是非、遊びに来て下さい。

〒516-0073
三重県伊勢市吹上1-8-30亀田ビル３階
伊勢法律事務所・弁護士　田形祐樹（平成6年卒）
電話0596-20-0555・FAX0596-20-0556

yuukitagata@gmail.com

ホームページあります。「伊勢　弁護士」で検索

あなただけの本制作のオススメ

自分史　同窓会史
研究論文　句集

Small copies
Printing
Design

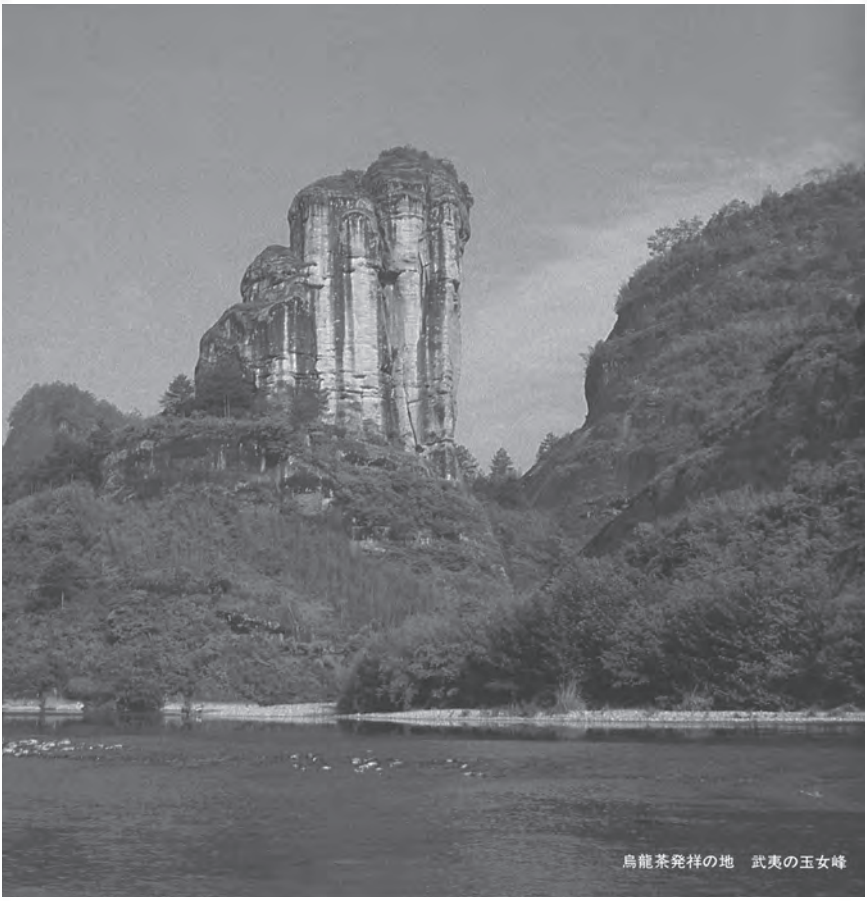
自身の足跡を本にしてみませんか？

ご予算に応じて1冊から印刷を承ります。

自分の“好き”を形にしてみませんか。まずはご相談ください。

LET'S START NEW PRINTING.
ヤマノ印刷株式会社
☎03-3253-8851
guest@yamano-prt.jp
お気軽にお問い合わせ下さい。
ヤマノ印刷株式会社　検索

中国に虹をかける



古代楼蘭王国はシルクロードの珠玉のオアシス、

いま私達は中国大陸にティーロードの虹をかけます。

楼蘭（ろうらん）

株式会社 楼　蘭　〒193-0942　東京都八王子市椚田町 1214-1　☎ 042-663-7460
代表取締役社長　甘利　大輔

一橋山岳部のバッジについて
一橋山岳部のバッジは昭和の初期にはすでに作られていました。その後、以下のように 2 度復刻されています。

第 1 回復刻について
1955 年 7 月 14 日「バッジできあがる」
『針葉樹第 12 号』部誌（270 頁）
（S.S のイニシャル）

第 2 回復刻について
1973 年 1 月末 「一橋山岳部バッジ製作」
（一橋山岳部創立 50 周年を記念して）
『針葉樹会報復刊第 36 号』会務報告（21 頁）
製作：アキバ徽章　2 月中旬会員 50 名に配布

